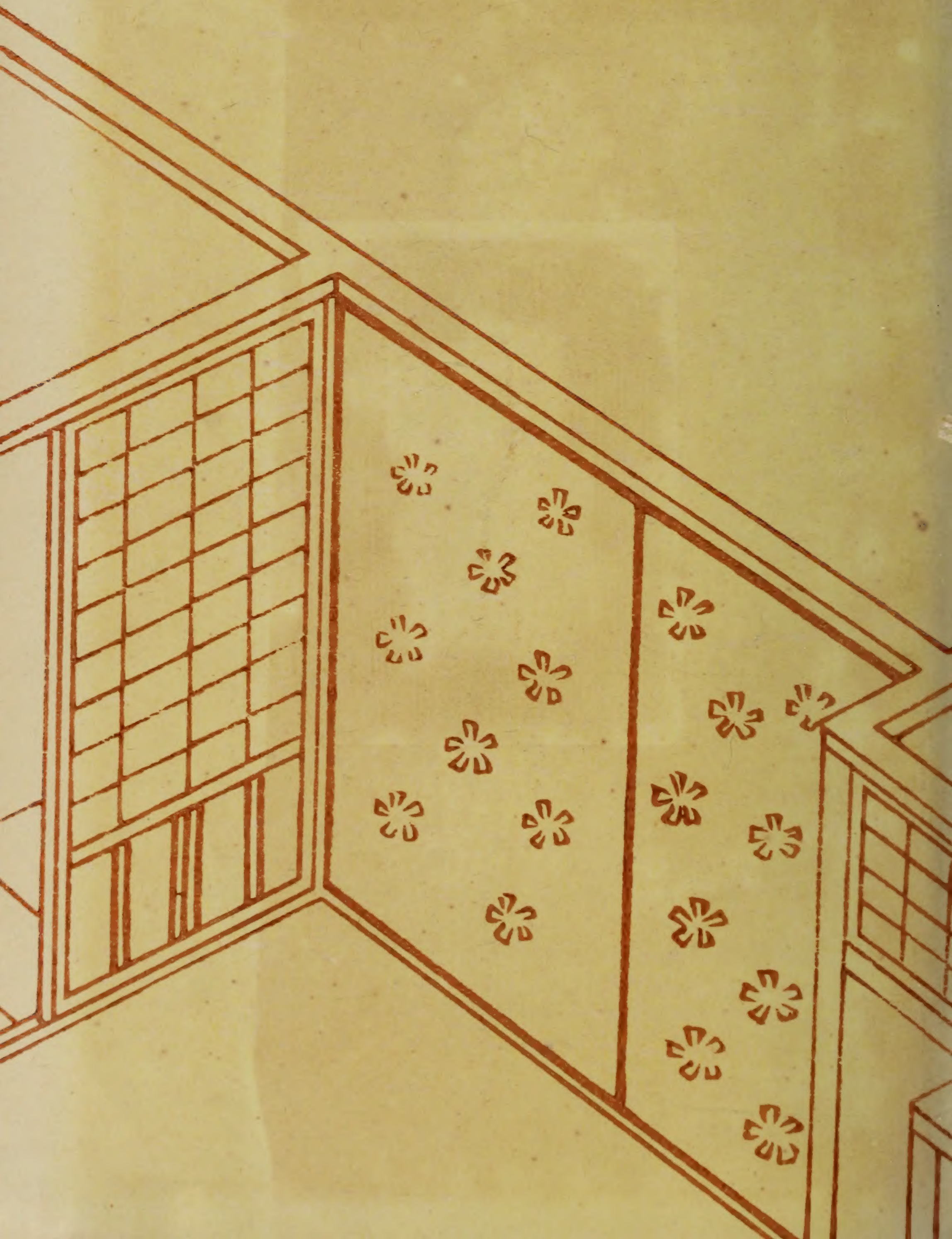




大南小言集

第貳卷

大南北全集　第二卷

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

東京　春陽堂刊行

お願ひ

毎巻刊行遅延が重なりまして何とも相濟みません。何分にも、活字本を原稿にするのと違ひまして、印刷所へ廻すまでに非常な手數がかゝります爲に、兎角故障が起りがちで、恐縮に堪へません。併し、皆様のお庇であと二册といふまでに漕ぎつけました。

茲で、特に皆様にお願ひがあるのです。それは、追ひ〳〵巻が進んで參りますうちに、最初は迚も見當らぬと諦めてゐた南北の脚本が、その後折々發見されて參りまして、既に六種ほどに及びました。假にも全集でございますから、これらは是非收容いたしたいのでございますが、豫定の十五册では、到底それは不可能な事なので、更に二巻を増して十七册と致し、これ等新發見の脚本の外、南北作の草双紙小說數種と、南北脚本全部の解題、及び名題上のカタリ等を出來得る限り收容する事と致しました。豫定以上に巻を殖すのは本意ではございませんが、見す〳〵發見された脚本を逸するのも殘念ですし、全集を完全に近づける爲でもございますから、是非御賛成下さいまして、僅か二册の事ですし、折角今まで御講讀を願つた事ですから、十七巻までお附合ひを願ひたいのでございます。

大南北全集十五巻に引き續き別表通り二巻を追加發刊し、當全集の會員の方々に限り特に御頒ち致す

事と相成りましたに就ては、御豫約當初の御申込金を第十七回目の會費に充當させて頂き、引つゞき毎月會費を御拂込み願ひ度う存じます。

尙ほ追加二巻分會費は従前通り一册金四圓五十錢（外に送料 市内金十二錢・地方金二十七錢 滿鮮・臺灣・樺太金五十五錢）づゝ御拂ひ込み願ひます。

萬一此の際一時御うち切りの方は御手數ながら至急其の旨御通知被下様御願ひ申上げます。

本全集の御申込を本會直接でなく他の取次書店へ御申込みの會員諸賢は引きつゞき其の書店へ御申し込み下さい。従前通り配本はその取次書店から致します。

左に、今まで刊行の脚本目録と、以後收容のものとを掲げて置きます。

巻	脚本
第一巻	四天王楓江戸粧（頼光四天王土蜘蛛退治）
	彩入御伽草（小幡小平次お妻八郎兵衛）
	靈驗曾我籬（亀山と權八と嫁切り）
第二巻	貞操花鳥羽戀塚（高尾の文覺と誓）
	伊勢平氏額英幣（清元の茶筌賣り）

挿繪目次

口絵解説

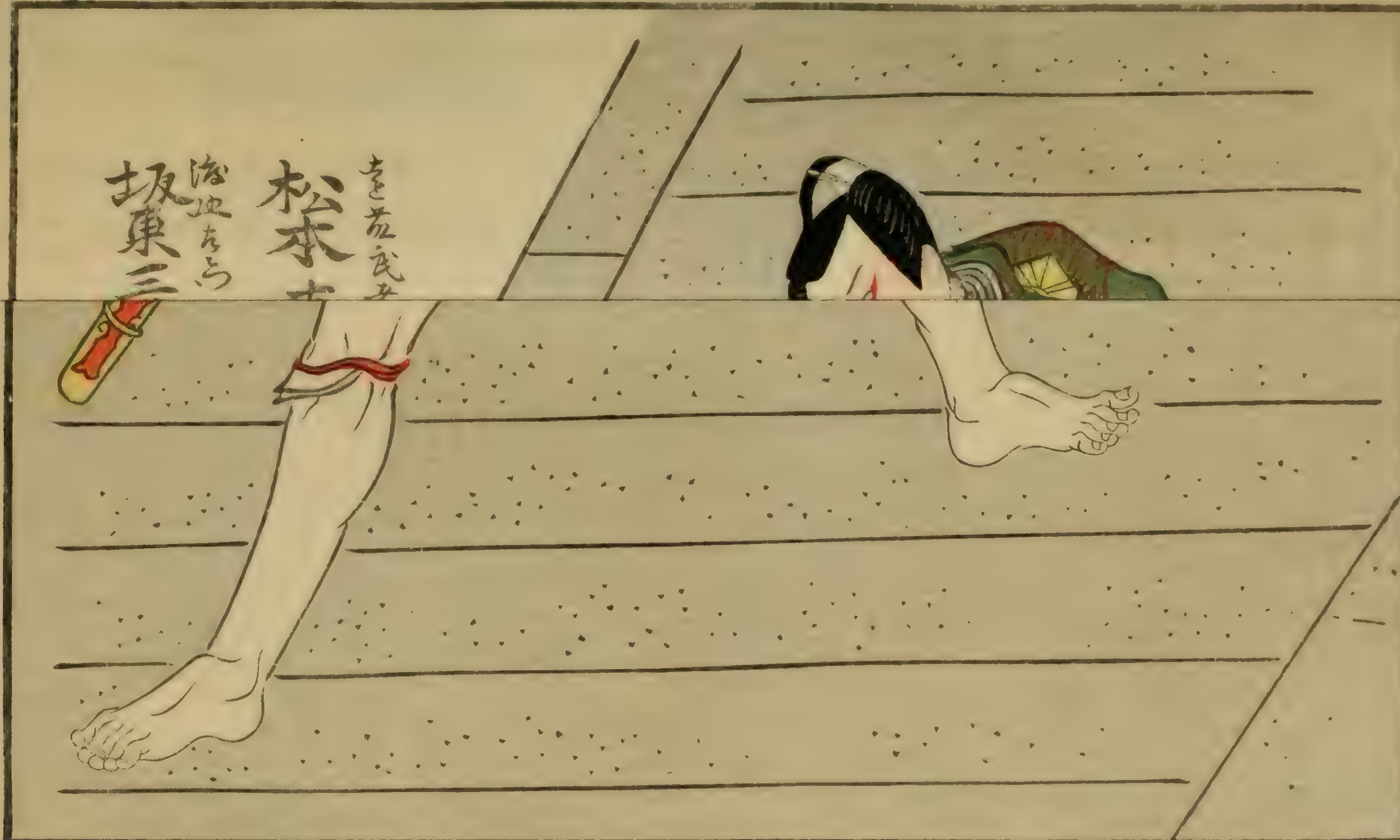
■本巻は、實に挿繪の材料が拂底で困つた。そこで卷頭へ、丁度この時代に人氣を脊負つて立つた五名優の素顔の挿繪を入れて見た。初世豐國の筆で、藤棚の素顔といつて有名なものである。初めから順に、三世坂東三津五郎、五世松本幸四郎、澤村源之助、二世尾上松助（後三世菊五郎）七世市川團十郎といふ排列である。この五人は、「貞操花鳥羽戀塚」と「高麗大和皇白浪」にはいづれも大活躍をしてゐる。

■卷頭へ入れた色刷り木版は「貞操花鳥羽戀塚」嵐山石段の場で、盛遠と亘が暗仕合ひ、この狂言中の眼目である。又、二二五頁の前へ入れた錦繪は、同じく神護院の場の盛遠で、共に初世豐國の筆である。

■「高麗大和皇白浪」へ入れた半四郎のおりつの繪は、脚本と多少姿が符合しないが、これは興行前に出版した爲と思ふ。この狂言は南北の腹案では、もつと長いものであつたらしいのだ。時間の都合で縮めたので、腹案の中には、おりつが斯うした姿も、出て來る筈だつたのであらう。

■「蝶全孖梅菊」へ入れた野手の三次は、五世菊五郎がこの狂言を演じた時の錦繪で、慶應二年の出版である。初演には引窓小僧長吉とあるのを、三次と變へた理由は、本文解説の中へ記して置いた

■番附も今度は、僅かに「蝶全孖梅菊」の初演の分を發見し得たのみであつた。


松本
坂東三


松本幸四郎
坂東三津五郎
豊国画
三

解説及年表

貞操花鳥羽戀塚（みさをのはなとりはねこひづか）

文化六年、市村座の顔見世狂言で、名題にもある通り、盛遠袈裟御前の件が、狂言の中心になつてゐるが、その前後に同じ時代の物語を幾つか結びつけ、通しになつてゐること、他の顔見世狂言と同じ事である。此うち、袈裟御前の件は初めてゞはなく、天明二年に初代仲藏と四代目幸四郎で演じ、寛政八年にも高麗藏と簑助でやつた。本篇は三度目で、二度目の高麗藏簑助が、各々幸四郎三津五郎と改名しての再演なのである。と云つても脚本は違つてゐるので、たゞその趣向を取つて改作したのである。また、讃岐の配所の件も、矢張り三度目の上演で、寛政十一年と文化三年に、二度とも初代松助が演じ、三度目に二代目松助が父通りの型でやつたので、この時、松助は榮三郎から襲名したのであるから、云はゞ改名披露の役であるが、これも魔道に入る型だけを辿つたので、脚本は同じく新作も同様なのである。

「暫く」は、澁谷金王丸昌俊で、多少の枝葉に相違はあるが、行き方なり、せりふなりは、大體今日の

それと大差ない。今日、舞臺に見られる「暫」は、この時代に略ゝ型が一定されたのである。四建目の淨瑠璃は俗に「船饅頭」といつて、非常に當りを取り、當時聲曲のみとしても流行したものである。

頼政館の場で、田之助の海女小磯が、一くさり踊るところがある。せりふにもちよつと匂はせてあるが、あれは淺草馬道の「美面より」といふ金鍔の廣告の所作なので、芝居で披露して以來、大變その菓子が賣れたさうである。芝居を宣傳に利用したところが當時としては新らしい試みだつた。その地に使つた長唄は「美面より」といつて、作曲は二世杵屋正次郎、地味な唄ではあるが現今まで傳存されてゐる。脚本には省かれてゐるから、爰にその歌詞を掲げて置かう。

〽姿の花の香に迷ふ〽姿の花の香に迷ふ、浮氣ぞこひの一盛り、美面よりは心の色や誠なれ、見やしやんせ、梅の笑顔に美しい、婀娜な櫻に皆さんが、つい移り氣の八重一重、咲いてゐるときや明日もと云うて、逢はぬ夜の間にどこへやら、誘ふ嵐に散るはの〽松の契りはいつとても、霜がかゝろと深雪が降ろと、操すゞしく立て通し、變らぬ色の深みどり〽とても戀路にな、遊ばゝ吉原、猪牙で押さしよか四つ手で飛ばか〽木幡の里ぢやなけれども風味馬道、召せやれ召せやれ家土産に、よい世の中も人は美面より。

初演の役割は、左の通りであつた。

源三位頼政。足輕、長谷平實ハ長谷部長兵衛信連（二ヤク助高屋高助）待宵の侍從。淡路島の海女、小磯。宗清の妻白妙（三ヤク二世澤村田之助）伊賀平内左衛門長盛。武藏左衛門有國。下部、野間平實ハ橘七郎定重（三ヤク澤村四郎五郎）松浦太郎高俊（嵐新平）難波六郎經遠（松本小次郎）築島兵藤（坂東善次）のたまく入道雷雲（松本大七）早見兵藤宗澄（中島磯十郎）下部、灘平（中村次郎三）犬割源吾（坂東鶴十郎）田原又太郎忠綱。仕丁、又五郎實ハ渡邊丁七唱（二ヤク花井才三郎）淡路守敎盛。三井寺の所化、願山（二ヤク市川宗三郎）瀧口靫負常久（市川門三郎）侍女、伏屋（山下萬作）千束の前實ハ玉倉の君（小佐川七藏）頼政妻、菖蒲の前。阿波民部娘、かなる（二ヤク市川團之助）澁谷金王丸昌俊。猪早太忠澄。煎菜賣り、團十郎喜三實ハ八丁礫の喜平次（三ヤク七世市川團十郎）讃岐の宗徳君。能勢藏人滿貞。植木賣り、尾上の松實ハ太夫之進朝長（三ヤク尾上松助）安藝守平淸盛。梓巫女、眞弓。左馬頭義朝の靈（三ヤク尾上松綠）白拍子、袈裟御前。梅津川の船君、大和屋小松。撞木町の傾城、常磐木實ハ爲朝娘逢島姫（三ヤク五世岩井半四郎）梅津川の船頭、手取の與次郎。渡邊左衛門亘。彌平兵衛宗淸（三ヤク三世坂東三津五郎）遠藤武者盛遠。實相坊頼豪阿闍梨。駕丁、太郎八實ハ長田太郎景宗（三ヤク五世松本幸四郎）

再演は、文化十四年、森田座で、袈裟御前の件と、二番目とを演じた。名題は「御贔屓歸洛爲朝」であつた。

盛遠（坂東又十郎）袈裟御前（藤川友江）長田太郎（花井才三郎）白妙（吾妻藤藏）亘（森田勘彌）常磐木、宗淸（二

ャク市川男女藏）

第三回目は、文政七年、河原崎座の顏見世狂言「男山惠源氏」で、袈裟の件だけである。以下、いづれもこの幕のみである。

盛遠（七世市川團十郎）亘（三世尾上菊五郎）袈裟（岩井粂三郎）かなる（尾上菊次郎）丁七唱（市川男女藏）玉倉の君（市川三之助）長谷平（三桝源之助）

第四回目は天保元年、河原崎座の顏見世狂言「一陽來復澁谷兵」であつた。

盛遠（七世市川團十郎）袈裟御前（五世瀨川菊之丞）亘（澤村源之助）かなる（市川富瀧）長谷平（市川壽美藏）玉倉の君（岩井七之助）丁七唱（山崎七五郎）

第五回目は、天保四年、市村座の顏見世狂言「戀入對弓取」であつた。

盛遠（七世市川海老藏）かなる（尾上榮三郎）玉倉の君（岩井粂三郎）丁七唱（山崎七五郎）長谷平（片岡市藏）袈裟御前（六世岩井半四郎）亘（三世尾上菊五郎）

第六回目は、弘化二年一月の河原崎座「魁源氏曾我手始」であつた。この時は、讃岐配所の場も出した。

盛遠（八世市川團十郎）長谷平（嵐吉三郎）玉倉の君（山科甚吉）亘（澤村宗十郎）袈裟御前。待宵（二ャク尾上榮三

郎）宗德君（三世尾上菊五郎）靱負（中村鶴十郎）かをる（市川新車）

第七回目の上演は、文久三年三月の中村座「源平盛櫻柳營染」であつた。

盛遠（河原崎權十郎）亘（坂東彦三郎）袈裟御前（三世澤村田之助）玉倉の君（河原崎國太郎）かをる（市川新車）丁七唱（市川米十郎）長谷平（中村鶴藏）

高麗大和皇白浪

文化五年九月、市村座に書きおろした狂言で、石川五右衛門の書替へである。秋狂言だけに、全體がひどく淋しい。主人公の五右衛門よりも、女房の瀧川を多く働らかせ、葛籠を脊負つた姿や公卿に化けた姿、即ち在來の五右衛門がゆく形を、女で見せようといふ趣向で立てたのである。併し、面白いのはワキ役の筑紫の權六が活躍する、小西是齋宅の場であらう。優形な二枚目が、突如盜賊の本性を現はす筋は、上方狂言の「けいせい濱眞砂」から得たものと思ふ。これも同じく石川五右衛門の狂言である。

根來三重の塔の場は、當時としては異例な大道具を使つたので、爰が一日中での呼び物になり、大入を取つたといふ事だ。

名題の高麗大和は、幸四郎半四郎の高麗屋大和屋を當込んだのである。即ちこの兩優が、この芝居の

中心である事が解るが、その中でも、夫より妻を餘計に働らかせてゐるところを見ても、女形でありながら半四郎の勢力の、如何に强かつたかゞ覗はれる。

番附を見ると、眞柴久次、宇治の方、岸田民部、等の役名が記され、田之助粂三郎團十郎等の、花形役者が多く活躍してゐない所を見ると、或ひはもつと手廣く、複雑な筋を展開させる作者の腹案であつたかも知れぬ。短日の頃の爲に、その筋が縮められてしまつたのであらう。

役割は左の通りであつた。

盗賊、筑紫の權六實ハ瀨川釆女（澤村源之助）是齋娘、綾女實ハ芙蓉皇女（二世澤村田之助）筒井惡五郎國景（松本小次郎）天狗武者官八（坂東鶴十郎）下部、沼平（坂東善次）丁稚、與惣吉（岩井粂三郎）堀口治太夫（澤村次之助）修行者、覺連（嵐新平）兵部妻、濱町（芳澤いろは）福島典膳實ハ三上の佐渡助。醫者、是輪道庵。小鳥賣り、三二五郎兵衛（三ヤク澤村四郎五郎）兵部娘、敷島（中村春之助）小西是齋。若黨、左仲太（二ヤク市川宗三郎）佐竹左五郎（花井才三郎）早野彌藤次（市川門三郎）田舍座頭、升市實ハ鈴木田隼人照光（七世市川團十郎）小鮒賣り、源五郎實ハ岩木當馬之丞（尾上榮三郎）岩木兵部（尾上松助）奥女中、瀧川實ハ五右衛門女房おりつ（五世岩井半四郎）南禪寺龍田國師役ニ浦辻良助實ハ盗賊石川五右衛門（五世松本幸四郎）

この狂言は再演されなかつた。

蝶仝孖梅菊

文政十一年一月、河原崎座に上演された世話狂言で「入山形曾我細見」の二番目、双蝶々の書替へである。南北としては晩年の作で、この卷へ收錄するには大分時代違ひであるが、原本騰寫の都合で、どうしても爰へ入る順序になつてしまつた。

座頭の菊五郎に、善と惡との双子を變らせようといふのが趣向の根本である。それには長吉長五郎といふ名が好都合なので、双蝶々を持つて來たのである。筋が大分「紋盡五人男」と共通してゐる。最初からあまり好評ではなかつたが、或る日、開演中、加賀町の美濃屋といふ質屋の主人が、舞臺で菊五郎松助と喧嘩を始め、大騒ぎになつた。芝居茶屋が仲裁に入つて、無事に濟みは濟んだが、それからグッと入りが落ちたので、菊五郎は座元へ云ひ譯に休んでしまつた。そこで狂言も搗きかへられて、今度は本家本元の、義太夫の「双蝶々曲輪日記」を出すと、非常な大入になつた。頗る皮肉である。

役割は左の通りであつた。

駕籠屋、與兵衛後ニ南方十次兵衛（二世關三十郎）角力取り、八幡山與五郎後ニ山崎屋與五郎（三桝源之助）千葉千次郎（片岡島丸）橋本次部右衛門（市川門三郎）藤屋二階廻しお菊（瀨川あやめ）若黨、丹平（片岡我十郎）南條

佐渡七（片岡當十郎）鮫州の仁三（尾上菊藏）千葉千太郎（尾上梅五郎）駕籠屋、甚兵衛（片岡仁左衛門）判人、指切り權九郎（山本京四郎）倉岡丈左衛門（大谷門藏）倉岡有右衛門（大谷紋治）三原傳藏（尾上松助）藝者、藤屋吾妻。南方娘お照（ニヤク尾上菊次郎）藤屋の輕子、お早、山崎屋娘、お關（ニヤク中村歌六）書鳶、引窓小僧長吉。髮結ひ、濡髮長五郎（ニヤク三世尾上菊五郎）

この狂言は、慶應二年四月、市村座に再演された。

與兵衛（坂東彦三郎）與五郎（市川九藏）吾妻。お照。お關（三ヤク河原崎國太郎）有右衛門（坂東薪左衛門）丈左衛門（坂東三八）丹平（市川桃太郎）千太郎、仁三（ニヤク市川新之助）千次郎（市村竹松）傳藏（河原崎權十郎）お菊、妙貞尼（ヤク岩井しげ松）六兵衛、お虎（ニヤク市川團八）權九郎（嵐冠五郎）次部右衛門（中村仲太郎）甚兵衛（坂東龜藏）お早（岩井紫若）野手の三次、長五郎（ニヤク市村家橘）

長吉といふ役名を、野手の三次に改めたのは、前興行の明石志賀之助で、家橘は鷲の長吉といふ役を勤めてゐたので、ツカないやうに變へたのである。又、與五郎役の九藏も、その時力士の役を演じてゐたので、この狂言では前を力士の八幡山でやらず、力持ちといふ筋に直してゐたのである。

渥美清太郎識


豊國画


豊國画


豊國画


豊國画


豊國画

貞操花鳥羽戀塚
（みさをのはなとばのこひづか）

貞操花鳥羽戀塚

第一番目　三建目　　嚴島廻廊の場

役名――安藝守淸盛。伊賀の平内左衞門。澁谷金王丸昌俊。淡路守敎盛。田原又太郎忠綱。忠平後ニ難波六郎經遠。築島兵藤。くだ平後ニ松浦太郎高俊。早見兵藤景澄。瀧口靱負常久。のたまく入道雷雲。賴長の息女、千束姬。侍女、伏屋。田原又太郎妹、紅梅。豐後七郎妹、撫子。菖蒲の前侍女、小笹。同、深雪。玉倉の君侍女、龍田。同、伏屋。菖蒲の前。犬割源吾。仕丁、彌藤次。同、軍藤次。大和七郎光貞。

本舞臺、三間の間、正面、一面の廻廊。上下の柱、紅白の梅の立ち樹。眞中に絹五色の段幕張つてあり、幕の內より軍藤次、彌藤次、着流し、大小、白張の上ばかりを引ッかけたる形にて、紅白の梅の枝を持つて立合つてゐる。眞中に龍田、やつし振り袖、順禮の形にて、この行司なしてゐる。白張の

仕丁四人、よろしく居並び、アリヤ〳〵の聲、白囃子にて幕明く。

ト兩人、烈しき立廻りあつて、紅梅を持つたる軍藤次、白梅の彌藤次に打ち落される。龍田、菅笠を勝ちたる方へあげて

龍田　出來ました〳〵。今の足取り、受け身の鹽梅、どうでも白梅が、勝ちぢや〳〵。

彌藤　誠に勝負は時の運。源平兩輪に准らへし花軍、先づ團扇が上がつて、重疊々々。

ト軍藤次、腹の立つこなしあつて

軍藤　なんだ、この順禮女め。いづれも方の今日の出仕を待つうち、思ひついた花くらべ。この軍藤次が紅梅を持つて、打負けたが、わりやア嬉しいか。

龍田　サア、左樣ではござりませねど。

軍藤　イヤ〳〵、この紅梅は平家方、源氏に譬へし白梅が、勝ちを喜ぶ順禮女、われには詮議がかゝつた。そこ一寸も動きやアがるな。

龍田　これは又、思ひもよらぬお疑ひ。國々いづくと定まらぬ、身は浮雲のこの順禮、通りかゝつて引きとめられ、お賴みなされた行司の役。それゆゑに、お勝ちなされたのを、褒めまいものでもござりませぬ。それを兎やかうお疑ひは、お武家方にも、お似合ひなされぬと申すものでござりま

する。

軍藤　黙れ、女め。最前からの詞の端々、何か一癖ある奴と見たゆゑ、ちよつと引きとめて、試しかゝつたこの場の行司。サア、眞直ぐに身許を名乘れ。

龍田　イエ〳〵、どのやうにお尋ねあつても、西國順禮いたすより、外に覺えはござりませぬ。

彌藤　申し合せた花軍、某が勝ちを誠と思ひ、褒めそやした顏色で、大概それと見て取つたワ。

仕一　誠に、大切なる神事の當日。

仕二　ウカ〳〵爰へ來るといひ

仕三　大膽不敵の女順禮。

仕四　疑ひかゝつたこの場の不肖。

軍藤　面倒な。引ッ立てさつしやい。

彌藤　心得てござる。サア、女め、

皆々　立てエヽ。

ト軍藤次、彌藤次は龍田を引ッ立てる。摺り鉦入り、出の唄になり、向うより紅葉、墨染めの振り袖衣裳にて、花籠を擔ぎ、出て來り、花道にて行きあひ、舞臺へ押し戻し、龍田を圍つて思ひ入れ。

皆々　どつこい。

軍藤　待て〱。今この女を引ッ立てる向うから、押して推參した奴を、見りやア女商人だな。なんでおいらを

皆々　支へるのだ。

紅葉　モシ、仰山なお方々。ほんに女子は女子同士。笑顔恥かし室咲きの、初々しい梅もどき、お目見得がてら今日爰へ、商ひ初めの口明けに、ちよつと差出の梅ヶ枝は、かよわき枝のお女中を、殿御二人で怖らしい、譯は何かは白梅なれど、顏紅梅の氣の毒さ、木咲きのまゝで此お詫び。どうぞ叶へて下さんせいなア。

彌藤　成る程、花づくしの挨拶、面白い。一番きいてやりたいが、マア、成らない。

軍藤　それ〱、なんでも留めだてすりやア、共に成佛。あんまりしやべつて、側杖をくらふなよ。

龍田　ほんにマア、いづくのお方か知らねども、この御恩、忘れは致しませぬ。嬉しうござんすわいなア。

ト紅葉、思ひ入れあつて

紅葉　ハテ、何にも云はぬが花。

ト兩人に向ひ

又、お前方も、あんまり色氣が無いぞえ。

兩人 そりやアなぜ。

紅葉 あの女中さんを、どこへ連れまして行かしやんす。そして、見れば、順禮さんぢやござんせぬかいとほしさうに、マア、云はゞめでたい今日の御神事。わたしも、この商ひまする花を賣りたうて、爰まで參りましたこそ幸ひ、マア、御料簡なされませいなア。

ト此うち薄ドロ〳〵、以前の白梅へ小蛇出てまとふ。皆々、これを見て

兩人 それ〳〵、蛇が出た〳〵。

龍紅 オヽ怖。

ト飛びのく。皆々思ひ入れ。向う揚げ幕にて

呼び 早見兵藤景澄參詣。

ト呼ぶ。薄ドロ〳〵、序の舞になり、向うより景澄、上下衣裳にて、三方に願書を載せ、これを持つて出て、花道にとまり、思ひ入れあつて

景澄 誠や、白片の落梅は潤水に浮び、黄梢の新柑は西城より出でたり。實に有り難き神事の庭、見出

しにあづかり父今年、名を改めて重年の、惠みかしこき嚴島、今日只今社參の折から、一枝の白梅、花びらを、小蛇來つてことゞく、ついばむ有樣、取りも直さず小蛇こそ、當社辨財天の使はしめ、源氏の旗色白梅を、落花となすは平氏、日々に榮ふる前表なるか。何にもせよ、奇異なるこの場の、有樣ぢやなア。

トどろ〳〵やむ。小蛇消える。

彌藤　景澄どの

軍藤　只今出仕

兩人　召されたかな。

景澄　成る程、左やう。御兩所にも御苦勞千萬。なんと、只今の小蛇、よい吉兆ではござらぬか。

彌藤　左樣でござる。當時、草木も靡く平家の勢ひ。我れ〳〵に至るまで、斯樣な

兩人　喜ばしい儀はござらぬ。

景澄　只今これへ來かゝる折から、二人の女を詮議めさるゝ御兩所、如何いたした儀でござる。

軍藤　さればでござる。順禮姿の賤しい女、いま我れ〳〵が試みの花軍に、源氏の勝ちを喜ぶ女。

彌藤　まつた、今日の神事に、紛れ込んだも不審の一つ、引ッ立てまするその所へ、これなる商人、支

へまするが、大方彼奴も一つ穴の、狐だも知れませぬ。

景澄　成る程、油斷大敵と申す事もござる。よく心を附けめされた。某が引取つて詮議仕らう。

ト龍田を捕へ

ヤイ、女め、何ゆゑあつて、この所へ入込んだ。眞直ぐに申せ。

龍田　どのやうに御意なされましても、何も覺えはござりませぬ。お免しなされて下さりませ。

景澄　イケしぶとい女め。この上は、刀の背打ち、打つて〳〵打ち据ゑて、白狀させる。斯うして

ト拔いて、背打ちに龍田を打つ。紅葉とめて

紅葉　マア〳〵、お待ちなされませ。

ト支へる。景澄、突きのける。この立廻りのうち、紅葉の懷より一通落ちる。景澄、手早く取上げて

景澄　ナニ〳〵「靭負常久へ」……ムウ、下の名宛も無い一通。

ト思ひ入れあつて

この靭負常久は、宗德君へ心を運ぶ者と聞く。さては、うぬも、只の奴ぢやアない。眞直ぐに吐かせ。

紅葉　イエ〳〵、その手紙は、頼まれましたゆゑ、持つて居りましてござりまする。何も怪しい事ぢや

ございませぬ。

景澄　どう云へば斯う云ふと、名宛の無いのが一つの曲事。疑ひかゝつたうぬら兩人、引立てゝ拷問する。

紅葉　サア、それは。

景澄　但し、中の文言、封押切つて讀み取らうか。

紅葉　サア、それは。

景澄　うぬも、何の爲に出た順禮だ。仔細を明かすか。

紅葉　サア、それは。

三人　サア〳〵〳〵

景澄　どうだ。

女兩　ホイ。

景澄　面倒な。二人ともに、この景澄が出て引立てる。

トこの時、向うにて

雷雲　待つた。

皆々　待てとは。

雷雲　のたまく入道雷雲がおッ留めた。一番待つてくんなさいよ。

　　トあばれになり、雷雲、羽織衣裳の形にて、天秤棒に大福帳の荷を附け、片々に虎鰒大分、大提げ籠に入れ、これを擔ぎ出て、直ぐに舞臺へ來り、兩人を圍うてキッとなる。

景澄　待て〳〵。こりやア、誰れかと思へば、今參りの入道だな。いま某が、この女を引ッ立てる向う面へ、なぜ邪魔方と

皆々　ツン出た、エヽ。

雷雲　エヘン……それ……と云ふも野暮らしい。實に周の代の壽に、思ひ染井が大空に、ひッかたけたる鐵砲は、この顔見世の延喜もの、當り外さぬ溫たかい、大福餠に鰒汁は、煤も大入りギッシリと、つまみ肴の鹽梅も、下地をだしに大七が、隣り町から鹿島立ち。鯰が髭をおどり出し、一搖り搖つて搖りかけた、歸り新參、初奉公、めでたく〆めて萬歳樂、よもや負けじの要石、あらん限りの御贔屓を、願ひやんすでごんすであんすと、ホヽ敬まつて曰す。

皆々　どつこい。

景澄　これサ、入道、なんぼ顔見世で、愛嬌が取りたいといつて、新參者の癖に、詮議のかゝつた二人

の奴等を庇ひ立て。この景澄が氣に食はねえ。なんで二人を庇ふのだ。

雷雲　これは景澄、野暮らしい。有やうはこの入道、今度召抱へられた清盛公へ、拔群の忠義が、一番見知らせたいと思つてゐたが、出面が無さに、留めて出たのは、フツとした出來心。諸事實事師のナ、ソレ、胸にござる。云はゞめでたい顔見世早々、何も目に角を立てる事もござらぬ。なんであらうと爰は一番、頭に免じて、入道へ預けて下さい。景澄どの、お頼み申す〳〵。

景澄　成る程、それ程に云ふ事なら、預け憎い二人の奴等だが

雷雲　預けておくりやるか。

景澄　必らず取逃がして、跡で後悔おしやるな。

雷雲　エヽ、有り難い〳〵。それでこそ、この入道が、留めて出た甲斐があるといふものだ。忝い。忝い。

紅葉　ほんに、よい所へ入道さんがござんして

龍田　思ひもよらぬこの身の幸ひ。

兩人　なんとお禮を申しませうやら。

雷雲　これサ、野暮な事を云つたものだ。さて、早見氏、何は兎もあれ、折角持つて來たこの鐵砲で、

ワッサリとやらかさうではござらぬか。

軍藤 イカサマ、我れ〱も、めでたい顔見世でござれば、御座へ連なりませうか。

彌藤 それがよい〱。拙者も御同道仕らう。

雷雲 サア、景澄どの、別當方へ參らうではござらぬか。

景澄 有やうは某も、ちつとその志しは、受ける心でござるて。

紅葉 左樣なら、私しどもは、これより歸りましても、よろしうござりまするか。

雷雲 これサ、そりやアならない。この入道が預かつたばかりで、白いとも黑いとも、方を付けねえでどうして歸されるものだ。

兩人 エヽ、そんなら矢ッ張り

雷雲 ハテ、何もかも、惡いやうにする事ぢやアない程に、おれに任せて沖の石。然らば早見どの

景澄 お行きやれ。

雷雲 ドリヤ、別當で、一つのたまくと出かけようか。いづれも、お來やれ。

軍藤 サア、ござりませう。

ト神樂になり、雷雲は龍田と紅葉を連れて入る。跡より景澄、軍藤次、彌藤次入ると、下座にて

呼び　神事の刻限。

ト呼ぶ。誂らへ賑やかな鳴り物になり、正面の段幕を切つて落す。爰に又太郎、着附け、小さ刀、長上下にて、淺黄頭巾の上へ懸け烏帽子にて、梅の枝へ結び文、その外、いろ〳〵の文を結びつけ、これをかたげゐる。下の方に千束姫、振り袖、衣裳の上へ袖無し羽織の形、懸け烏帽子にて、梅の枝へいろ〳〵の烏帽子を結びつけ、これを持つてゐる。この見得にて、よき所まで押し出す。鳴り物打ちあげる。

又太　さらでだに、あくがるゝ夜の月影に、人をぞ誘ふ梅の下風、實に有り難きお膝元、重なる年の一陽に、開き初めにし花の顏。

千束　見せばや樹々の惠みにて、向ひ町よりはる〴〵と、よき枝振りの慕はしく、嬉しいまゝのお目見得を、願ふに幸ひ神事の役。

又太　都の町にあらねども、春を壽ぐ懸想文。

千束　八十宇治川の流れ盡きせず、召され候へ、折を烏帽子の

又太　紐解けて

千束　結ぶ縁も

兩人　時の興。

ト地へ取り、誂らへの所作よろしくあつて納まると、太鼓入りの鳴り物になり、向うより光貞、着流し、丸括け帶、淺黄頭巾の形にて、銀獅子を持つて出る。續いてくだ平、衣裳、奴の形にて、金獅子を持つて、兩人、ツカ〳〵と出て來て、花道にとまる。

光貞　潔く、惡魔を拂ふ神事とて、とりもあへせず獅子頭、また改まる顏見世に、向ひ町より返り咲きこれ簑助がお目見得に

くだ　成田屋風を嵐といふらん、新平な古參の我れ〳〵も、今ぞ出面の獅子奮迅。

光貞　實に勇ましき

兩人　獅子の曲。

トまた所作になり、舞臺へ來て、これより四人の所作、いろ〳〵振り事あつて、手踊りチラシまであつて、めでたけれト納まる。向うにて

呼び　淡路の守敎盛參詣。

ト呼ぶ。直ぐに出の鳴り物になり、向うより敎盛、騎射の形にて、中啓を持つて出る。跡より忠平、奴の形にて、三方に錫の銚子を載せ、持つて出てくる。跡より四人の若黨、袢纏股引、三尺手拭にて

附添ひ出て來り、この人數、花道に住ふ。

敦盛　誠や、三秋の巖雪は花初めて白し、一夜の林霜は葉悉く紅ゐなりと、既に一陽來復の氣候備はり今を盛りの寒紅梅、眞先かけて某も、清盛公を慰めんと、鷹野のまゝの歸り足。なんと忠平、春知り顔の梅は、また格別なものではないか。

忠平　ハツ、君子夜深うして聲誡めずと、爰に座せし神徳の、威光が正にいちじるき、この宮島の御建立。忝くも清盛公の、御恩澤萬國に溢れ、下萬民に至るまで、その御仁徳を謝せんが爲、當宮島の神すゞしめ、最早今樣、只今終り、はや御參詣あつて、然るべう存じまする。

敦盛　イカサマ、諸士にも早參籠。皆も參れやい。

若黨　ハヽア。

トまた鳴り物になり、敦盛忠平、舞臺へ來て、上の方へ通る。又太郎、千束姫、光貞、くだ平、下の方に下がり、こなしあつて

又太　敦盛公には、只今御參詣にござりまするか。

千束　私し事は、今日計らず、神事の役に召されました有り難さ。

又太　即ち拙者は、田原の又太郎。

千束　宇治の左大臣頼長の娘千束。不束者の舞ひぶり、お恥かしう存じまする。

光貞　また私し事は、源三位頼政の家來、大和七郎光貞、御免を受けて歸り新參。お見知り置かれ下さりませう。

くだ　その座に連なる下郎めは、宗盛公の草履摑み、くだ平と申す二合半。心浮き立つ今樣に、浮かれ浮かれて思ひつき、獅子頭の神事の練り物。お叱り恐れも顧ず、勤めましてござりまする。

教盛　成る程、下郎に似合はぬ、さそくの今樣、獅子頭の神事とは出かした。それは兎もあれ、頼長の息女千束姫、まつた田原の又太郎、なか〳〵な心がけ。首尾よく今樣も事終り

又太　斯樣な喜ばしい儀は

又千　ござりませぬ。

忠平　イヤ、只今これまで參る道々、拜見いたしたが、なか〳〵面白い儀でござりました。併しながら獅子頭の二人は格別、頼長公の御息女千束姫、田原氏、御兩所の色めいた振り事、イヤ、殊更に面白うござりました。この下郎なぞは、何も存ぜぬ事でござるが、俳諧の附合ひにも、アヽ、何とやら。オヽ、それ〳〵、「舞ひの時、思ふ男の袖を曳き」と申す句がござるが、アヽ、羨やましいお役目でござるて。

教盛　成る程、聞きしにまさる頼長の息女、千束姫の容貌、ハテ、うるはしい。未だ主なき水馴れ棹。濡れていとはぬ捨て筏、身が引揚げて……サア、詠むる花も莟より、おのが手活けとなすならばなどか心の本意ならんに、ハテ、儘ならぬ浮世ぢやなア。

くだ　これは又、教盛公には、お心弱き御一言。頼長の息女千束姫ことは、源三位頼政、預かり罷りあれば、彼れへ早々使者を以て、申し遣はされなば、玉の輿に乗る千束姫。否ともお手に入る道理

忠平　左やう〳〵、清盛公に祇王祇女、宗盛公に熊野朝顔、この例しもござれば、お旦那教盛公にも、千束姫をお側近う、召し呼ばれまするも平氏の勢ひ、誰が點の打ち手もござりますまい。こりや早々頼政方へ、仰せ遣はさるゝが、よろしうござりませう。

ト此あたりより上の梅の木へ、鶯來て囀る。

教盛　成る程、それも手短かなれど、又……千束姫の心は。

千束　この身にあまる有り難いお詞、あじやらにもせよ、背きませうやうはござりませねど、私し事は心に一つの願ひがあつて

くだ　さては焦るゝ男がござるか。

千束　どうしてマア、穢らはしい、其やうな事。この身の願ひは

ト合ひ方になり、上の梅の枝の鶯を見て、こなしあつて

アレ、あの鶯と同じ事、一名は經讀み鳥、ほう法華經は口の内、たゞ寐覺めにも現にも、佛門に入りたき願ひ。姿形は粧へども、心の内は剃髪染衣、この事ばかりは

敦盛　罷りならぬか。

千束　月日星を囀る鶯は、これ三光。この身もあの鶯。

ト敦盛、始終腹の立つたるこなし、鶯を見て

敦盛　ヤア、何は兎もあれ、かゝる平家の威勢を示す清盛公、建立ありし神事の庭に、いまはしき不吉の鶯。誰れかある、射て落せ。

若黨　ハツ。

忠平　覘ひも違はず

若黨　只一矢に。

ト若黨四人、矢を番ふ。この時、向うにて

常久　瀧口靭負常久が、申しあげたき一條あり、まづ〳〵お待ち下さりませう。

ト太鼓謠になり、常久、上下衣裳にて、三方に生地の短冊箱を載せ、持つて出て來り、直ぐに舞臺へ

來て、平伏する。教盛、常久を見て

教盛　瀧口靭負常久。いま某、かゝる神事の庭に、不吉を告ぐる鶯を、射て落せと申しつくる折から、待てと止めし、その仔細は。

常久　憚りながら、教盛公のお詞とも存じませぬ。當嚴島明神の儀、本地は卽ち大日彌陀普賢彌勒、また中宮は十一面觀世音。古へ弘法大師、この宮島に詣で給ひ、法味を供じ、慈悲專らにして、堅く殺生を誡め給ふ靈地なれば、敢へて佛會に近き經讀み鳥なりとて、命取る事、君々たる御身には、善からざる思し召し。淸淨を旨とするこの所に於て、鳥類に限らず、血汐の穢れは恐れあれば、却つて御身の災ひとも相成つては、後での後悔。それゆゑに、お止め申してござる。

教盛　ヤア、口賢こき申し條。それしきの事を汝に習はんや。云ひ出したる事、跡へは引かぬ。ソレ、くだ平、射て落せ。

くだ　ハッ。教盛公のお目觸り。此くだ平が、まッこの通り……エイ。

ト小柄を手裏劍に打つ。鶯、パッタリと落ちる。

教盛　流石はくだ平。天晴れ手の內。

トくだ平、ツカ〳〵と來て、件の鶯を取上げ

くだ　御覧の通り、なんぼ殺生禁斷の靈場でも、當時平家の御威光で、まツこの如く掌に、四海を治むる清盛公の、今日の御神事、これが誠に、この場の血祭り。

ト拳の内にて揉み殺す。この時、くだ平が拳の内より、常久が前の三方の短册箱へ、血汐かゝると、ドロ〳〵になり、この短册箱の上へ陰火燃ゆる。皆々、キツと思ひ入れ。本調子の合ひ方になる。

敎盛　アラいぶかしや。今くだ平が掌に、命を落せし鶯の

くだ　血汐は其まゝ思はずも、この三方へかゝると等しく、五體の痺れ。

常久　陰火忽然とのぼるにつけて、鶯の聲しきりになすは

又太　正に非情の小鳥だに、親子の愛に引かさるゝ

千束　果敢なき別れに一念殘り、穢れ不淨となす祟りか。

忠平　但し名器の秘めあつて、血汐の穢れに動搖なすか。

又太　目前、不思議を見るは初めて。

敎盛　奇異なるこの場の

皆々　有樣ぢやなア。

ト千束姫、立つて、懷中より水晶の珠數を出し、この三方の上へ置くと、ドロ〳〵やむ。くだ平、ホ

ツと思ひ入れ。陰火、消える。忠平、ツカ〱と來て

忠平　この一品を。

ト手をかける。常久、その手を拂ひ

常久　慮外な下郎め。瀧口靫負が、持參なしたるこの一品、賤しき下郎の身を以て、指でも附けると、手は見せぬぞ。

忠平　面白い。慮外なら慮外になつて、今ドロ〱の機關の、根本を見出して。

常久　ヤア、いはれざる過言。その座は立たせぬ。切り下げるぞ。

教盛　靫負、扣へい。身が家來の忠平を、何科あつて、刀にかけんと申すのだ。

常久　たとへどなたの御家來なりと、慮外いたせば、遠慮は仕らぬ。切捨てに仕るが、武士の表。

教盛　成る程、尤も。只今、汝、某へ、小鳥の意見、神事の場所に於て、人の血を注いでも武士が立つか。

常久　サ、それは。

教盛　某に向つて、詞を返す不屆き者。その分に差置かれぬ奴なれど、何を申すも、めでたき神事の場所といひ、免し遣はす。それは格別、等閑ならぬ今の動搖。陰火の不思議。千束姫がその如く

珠數をかくれば、立ち所に元の如く

くだ　此くだ平が痺れもをさまる、この場の仕儀。なんでも怪しいは、靱負が持ちし捧げ物。

ト常久と顏見合せ

合點のゆかぬ事でござりまする。

教盛　イカサマ。この上は、何がなしに、靱負が持參の捧げ物、この場に於て、改めさせい。

常久　すりや、この場に於て、この中を

くだ　改められぬか。

常久　サア……ハヽヽヽヽ。こりや別してもなきお疑ひ、御覽の如く、何も仔細の候はぬ短冊箱中は某、奉幣の腰折れ二三首、切れ字、天爾波も恥かしき歌の樣。この儀ばかりは、幾重にも、御容赦願ひ奉りまする。

教盛　その身の卑下は、一通りの挨拶。今は疑ひかゝつた一品。

くだ　改むる事を否む、靱負が胸中、何とも以て合點が參らぬ。

教盛　何は兎もあれ、その品、これへ。

常久　この儀ばかりは、幾重にも

ト支へる。

くだ　エヽ、面倒な。

ト常久を突きのけ、三方を取って、蓋を開き、短冊を取出す。常久、寄らうとするを、くだ平、支へろ。又太郎、千束姫、こなし。教盛、思ひ入れあって

教盛「都には、今宵ばかりぞ住の江の、岸みちおかぬ、いかでつみみし」……察するところ、この歌は、都に住むは今宵ばかり、岸みちおかぬ、いかでつみみし、いかなる罪とても無きに、岸みちおかぬは、遠流左遷となる事。我が身をかへりみ、都に名殘をとゞめし一首。正に、この歌こそ、宗德君、讃岐の國へ配流なさんとせし時の歌。これを此まゝ隱し包み、奉納なす靭負常久。さては讃岐の君へ、心を通はす、兹な紛れ者めが。

常久　斯く顯はるゝ上は、包んで益なし。決して宗德君へ内通いたす、某にはなけれども、故あって手に入つたるその歌、我れ〳〵が手許にあらば、麁末と存じ、奉納なすは拙者が情。

忠平　讃岐の君が心を殘せしその一首、それゆゑにこそ烏類の、血汐の穢れに今の動搖。

千束　やごとなき御筆と、察したるまゝ、不淨を拂ふ珠數の德、實にいとほしき宗德君の、御心の内、思ひやられて……移れば變る、世の盛衰ぢやなア。

教盛　靭負が今の申し譯、詞巧みに云ひくるめても、この教盛、その手ぢやゆかぬ。サア、宗徳君へ心を通ぜぬものならば、この短冊が湯起請同然。瀧口靭負が、土足にかけて面晴れ致せ。
常久　ヤア。
教盛　土足にかけねば二心。但し、この歌、引裂き捨てうか。
常久　サア
教盛　サア
皆々　サア〳〵〳〵
教盛　返答は、ドヾ、どうだ。
常久　ホイ。
ト當惑する。又太郎、こなしあつて
又太　教盛公へ願ひ奉りまする。何卒、その短冊、拜見仰せつけられ下さらば、有り難う存じまする。
教盛　謀叛に組みする讃岐の君、あまり賞美いたす事でもないわサ。
ト出す。又太郎、取つて懷中する。教盛、皆々、こなしあつて
田原の又太郎、疑ひかゝつた、その短冊、なぜ懷中なした。

りし靱負ことも、とくと糺して御覽に入れん。

教盛　ハヽヽヽヽ、口は立派に云ひ並べても、合點がゆかぬ。大切なる、その短冊、靱負もろとも、預け遣はすその代り、賴長の息女千束姬、口說き落して、某へ取持て。

千束　すりや、自らを。

又太　ハテ、何事も、この場を、ナ、ソレ……この場にお入りの敎盛公、お心休むる某が御奉公。餘の儀と違ひ、戀事ばかりは、木折りに押して參らぬもの。

教盛　すりや、罷りならぬか。

又太　サ、その儀もキッと、後方までに

教盛　色よい返事を聞かせるか。

又太　只何事も、某が胸中に

常久　納むる胸も、碎くる思ひ。よしなき事より、この場の疑ひ。

千束　自らとても、橫しまの

教盛　なんと。

又太　サ、諸事承るに及ばず、又太郎忠綱が、心の計らひ。先づ、それまでは。

教盛　忠綱が附け人には、下部の忠平。萬事とつくと、ぬからぬやうに、心を附けい。

忠平　畏まつてござります。

又太　然らば、靭負どのにも、お疑ひの晴れるまで。

常久　御同道仕らう。

又太　教盛公を初め。いづれも方。

くだ　忠綱どの。

又太　後刻、お目通り仕るでござりませう。

ト唄になり、又太郎は常久と千束姫に目くばせし、三人に光貞附いて下座へ入る。直ぐに、てんつゝになり、向うより兵藤、胸當て、手甲脚絆、草鞋、三尺手拭を締め、菅笠を持ち、出て來り、直ぐに舞臺へ來る。跡より足輕二人、附き出て

足輕　下がれ〳〵、下がらぬか。

兵藤　モシ〳〵、わしやァ都から來た、飛脚の者だ。今日、この所で、淡路守教盛さまへ、お目にかゝ

る筈の者だ。出ると早々、下がれ〳〵と、あんまり安くしてくれるな。爰へ来る道筋も、四十八坂七曲り、たつた半日に叩きつけた、築島兵藤といふ、お飛脚さまだワ。

教盛　コリヤ〳〵、扣へい。都よりの飛脚とあれば、苦しうない、近う〳〵。

兵藤　ヘイ〳〵、左様なら、あなた様が。

くだ　折に幸ひ、教盛公の御前、取次ぎ致さう。

兵藤　イエ〳〵、こりや、直々、お手渡し致せと、厳しく申しつけられましたによつて、滅多な人にやアやられませぬ。

教盛　して、いづれより使ひの者ぢや。

兵藤　その名がズツケリ云はれる程なら、何も苦労はござりませぬ。

教盛　然らば、これへ持て。

兵藤　御免なされませ。

ト兵藤、状箱より一通を出し、教盛に渡す。教盛、取つて

教盛　ナニ〳〵、淡路守教盛公へ、左少辨祐長。

ト上書を讀む。この時、下座にて、バタ〳〵と音するゆゑ、教盛、こなしあつて

一通、慥がに落手いたした。只今、披見いたしたけれど、他聞の恐れ。アヽコレ、某が持つてゐるも、却つて油斷……くだ平、其方に後刻まで預け置く。委細の事は、奉幣終つて、後での密談。

ト渡す。くだ平、取つて

くだ　きつと預かり奉つてござりまする。

敎盛　これより別當方へ立越え、鬱を散ぜん。其方も、身と一緒に。

兵藤　お供いたすでござりませう。

敎盛　然らば、くだ平。

くだ　まづ、お入りあられませう。

ト管絃になり、敎盛、先に、忠平、兵藤、外皆々附きそひ、下座へ入る。くだ平、殘り、思ひ入れあつて

賴長が娘の千束姬、日頃から心をかけし此くだ平、今日の神事を幸ひに、近寄つて口說かうと、認め置いたこの玉章。

ト懷より文を出し

　　　アヽコレ、どうぞ手渡して、やりたいものだが。
　　　　ト下座、バタ〳〵と音する。これにて、文を懐中して、小隠れする。下座より千束姫、走り出て來り、
　　　　こなしあつて

千束　思ひもよらぬ、教盛公の最前の詞。それに隨ふ忠綱どの。善か惡かは知らねども、心ならざる事
　　　ぢやわいなう。この上は、少しも早う……さうぢや。
　　　　ト行きにかゝる。くだ平、窺ひ出て

くだ　千束姫さま、こりやア、いづれへお越しさなれますな。

千束　エヽ。共方は最前の
　　　　ト思ひ入れ。

くだ　いかにも、私しは宗盛公の御家來、くだ平と申す、下郎でござりまするが、お見出しにあづかり
　　　まして、今日、御神事をも相勤めますれば、千束さまとも、御同席に連なりまして、斯樣な有り
　　　難い事はござりませぬ。イヤナニ、千束さま、見ますれば、あなたには、何やら物思ひのやうで
　　　ござりまするが、アヽ、こりやア戀でござりますな。

千束　なんのいなア。最前も最前とて、アノ教盛さまが、無體の有り條。

くだ　御尤もでござりまする。私しも、先程は、なんのかのと、教盛公へ追従に、申した儀もござりましたが、どうして〳〵、あの悪口説きは、さぞかしお嫌でござりませうな。

千束　推量してたもひなう。

くだ　拙者、忠綱に成り代りまして、あなた様を口説き落さうと申したは、ありや眞赤な僞はり。どうマアあの大目玉の教盛が爲に、お前を閨の伽にされませうぞ。何もお案じなされぬがようござります。

千束　ヤヽ、そりや、ほんまの事かいなう。

くだ　ほんとも〳〵、なんの嘘を申しませう。もう、これからは、教盛どのゝ事は抛つておいて、モシ、千束さま、お前の肩を持つて、どこまでも、悪いやうには致しませぬ。お氣遣ひなされまするな。

千束　そりや、嬉しいわいなう。

くだ　その代りには、また私しが申す事を、お取上げがなければなりませぬぞえ。

千束　そりやモウ、教盛さまの事が、やめにさへなれば

くだ　どのやうな事なりと

千束　云ふまゝになるわいの。
くだ　エヽ、忝い〳〵。これほど早く解る事を。
　　ト嬉しき思ひ入れあつて
その御意の變らぬうち……有やうは、千束さま
千束　何ぢやや。
くだ　拙者が、あなたに。
千束　ヤア。
くだ　それでも、たつた今、どのやうな事でも、教盛どのさへやめになれば、云ふまゝになるわいなうと、御意なされたではござりませぬか。私しが今日、これへ參るも、有やうは、あなたのお側へ寄りたうて〳〵、かねて認め奧山の、鹿の卷き筆、コレ、ちよつと、密かに心の丈を。
　　ト手を取つて、袂より文を出して、千束姬に無理に渡さうとする。千束姬、迷惑なるこなしあつて、取るまいとするを、無理やりに懷へ押しこみ
お返事は、どうなりと、サア、たつた一口、承りたい〳〵。
　　ト有頂天になつて口說く。千束姬、フツと文の上書を見て、悔りしたるこなしあつて、また懷へ入れ、

思ひ入れあつて

千束　それ程まで心にかけて、云うて下さる事、なんの惡うは聞きませぬ、どうなりと……ぢやが、爰に二人が斯うしてゐるを、人目にかゝつては互ひの身の上。萬事は

トくだ平に寄りそひ、囁く。くだ平、ヅク〳〵して

くだ　エヽ、有り難い〳〵。そんなら、後に別當の、對顏の間で逢はうとかえ。エヽ、有り難い〳〵。これも矢ッ張り、嚴島辨天樣のお仲人。どうぞ爰を約束の、對顏の間にしてほしいものだなア。

ト此せりふのうち、千束姬、ソツと拔き足して、下座へ入る。くだ平、これを知らず

それまでの手附けに、ちよつと口を

ト見て、千束姬ゐぬゆゑ、恟りして

ヤア。おきやァがれ。一ぱいやつたな。併し、渡した文は納まつたが

ト懷を探し、いろ〳〵して、文を一本出して

ヤア、爰にあるのが手管の文。アヽ、そんなら、いま渡したあの文は、先刻預かつた大切な密書と、取違へてやつてしまつたか。オヽ〳〵〳〵、大事だ〳〵。

トいろ〳〵こなしあつて

こりや斯うしては、居られぬわえ。

ト一散に下座へ走り入ると、バツタリ音して、正面の廻廊へ白刃出る。本神樂になり、切り破つて、この内より源吾、頰かむり、浪人者の拵らへにて、袱紗に包みし院宣を口に咬へ、刀を提げ、出て、あたりを窺ひ、こなしあつて

源吾　折を窺ひ、心をかけしこの院宣。まんまと手に入る上からは、一刻も早く、伊豆の國へ立越えてソレ。

ト行かうとする。後へ兵藤出て、源吾を引留める。ちよつと立廻りあつて

兵藤　待て。何か樣子は知らないが、面白さうな儲け口、おれも半口乘りが來て、それなりけりにやアもうならない。その品渡して、かツ走れ。

源吾　ハヽヽヽヽ、吐かしたり、ほざいたり、折角ものした代物を、又ものされて詰まるものか。詞の甘い其うちに。道おツ開いて、通すまいか。

兵藤　ところを斯うして。

トかゝる。これより早き立廻りあつて、トヾ兵藤、院宣を持つて行かうとする。源吾、やるまいとする。兵藤、突き倒し、一散に走り入る。

源吾　いづくまでも。
ト早神樂になり、一散に跡を追ひかけ、向うへ入る。これにて、チヨン〳〵と、道具替る。
本舞臺、三間の間、破風附きの大廻廊になる。尤も雲間彩色。眞中、左右に開くやうに仕掛け、この道具、好みの通りに飾りつけ、兩棧敷へ片蓋の燈籠を引出す。一體、宮島正面の道具に納まる。
ト渡り拍子になり、向うより奴八人、いづれも鬘一對の銀奴、立波の着附け、對の捻切り、鳥毛の槍を振つて出て來り、直ぐに舞臺へ來て、並よく居並ぶと、渡り拍子打ちあげる。
奴一　今日御神事の練り物に、振りこみ入りこむ伊達奴。
奴二　姿も揃ふ立波に、打寄り囃す神樂月。
奴三　實に周の代の正月に、壽く君も嚴島。
奴四　安藝は名だたる清盛公、草木も靡く御威勢。
奴五　朝日輝やく赤旗の、納まり靡く御仁德。
奴六　みな降參の源氏方、色香もまさる紅梅の
奴七　移り香したふ我れ〳〵まで、召しにあづかる身の冥加。

奴八　盛り盛ふる御代萬歳、唱ふる聲も潔く

奴一　勢ひこんだる立浪霧平。

奴二　漣志賀平。

奴三　磯浪打平。

奴四　岸浪寄平。

奴五　女浪の好平。

奴六　男浪の辰平。

奴七　荒浪梶平。

奴八　岩浪甘平。

奴一　勇みに勇んで

八人　練りこむべいか。

トこの時、向うにて

呼び　院使のお入り。

八人　ナニ、院使のお入りとや。

ト向うにて

呼　お入り。

ト呼ぶ。賑やかなる出の鳴り物になり、向うより菖蒲の前、十二單衣、緋の袴にて、檜扇を持ち、出てくる。跡より仕丁、參內傘をさしかけ出る。續いて伏屋、裲襠衣裳にて、三方に袱紗に包みし道狀を載せ、これを持つて出る。小笹、裲襠衣裳にて、三方に紅梅の枝に短册を附け、これを持つて出る。紅梅、撫子、深雪、懸け烏帽子にて、弓矢を持つて出る。跡より仕丁四人、出て來り、花道に住ふ。下座より敎盛、以前の形にて出て來り、この人數を出迎ふ。

菖蒲「玉鉾の、道ゆく人もあくがれて、里の垣根に匂ふ梅ヶ香」、その下風に誘はれて、外珍らしき今日のお使ひ、向ひ町から召し出され、また新たなる御贔屓を、かざすや花の祝ひ月。

伏屋　その介添へにたつか弓、變らぬ御所の御惠み、只いつまでも限りなう。

小笹　重ぬる年の嬉しさに、來つれてつれし今日の今。

深雪　爰に宮居も嚴島、紅葉色どる供奉の役。

撫子　相も變らず九重に、かしづく身にし佐保姫の

紅梅　笑顏恥かし春の夜の、御遊はまだなこの風景。

伏屋　最早程なう神事の終り。
小笹　慥かにあれにお待ちうけ。
紅梅　ちつとも早う
皆々　お越しあられませう。
菖蒲　皆も、おぢや。
皆々　ハア、。

トまた鳴り物にて、皆々、舞臺へ來る。敎盛、こなしあつて

敎盛　これは〳〵、今日神事の折からと申し、計らざる院使の御入來。誰れ人かと存ぜしところ、菖蒲の前。
菖蒲　成る程、その仰せ御尤も。妾へ仰せつけられしは、假初めならぬ安藝守、淸盛公へ院の勅諚。
敎盛　勅諚とござれば、早速ながら、淸盛の名代として、淡路守敎盛、具さに承らん。委細、仰せ聞けられ下さりませう。
伏屋　敎盛公の仰せにはござりますれど、今日淸盛公、この嚴島に參籠の由、承つて、これへの御院使。早速にお出迎ひもあるべき筈を

菖蒲　何ゆゑあつて御名代。是非々々清盛公へ對顏ならでは、申し難き今日のお使ひ。
伏屋　ましてや、私し、介添へに立ち、持參いたせし御遺狀。尤も、日頃頑なの御氣性、氣隨我まゝたる事は聞えあれども
小笹　御名代を立てられまするは、院の御所をあなづりがましき、清盛公の御仕方。
深雪　菖蒲の前さまを女と思ひ、輕しめたるなされ方。
撫子　併し、常から女子好きと、誰れ知らぬ者もなき清盛公。
紅梅　いつその事にわたしらが、介添へしてこの所へ、お供しようぢやござりませぬか。
教盛　默れ、女め。名代に立ちしは、誰れと思ふ。淡路守教盛、我れに向つて奇ッ怪なる一言。まだこの上に、彼れこれと腮を鳴らせば
奴皆　女とて容赦はない。我れ〳〵が引立てるぞ。
菖蒲　たとへ菖蒲の前は輕くとも、院使でござるぞ。
奴皆　ヤア、。
菖蒲　それとも、たつて手向ひあるか。
奴皆　サア。

菖蒲　この旨、歸つて、禁庭へ奏聞せうか。

奴皆　サア

皆々　サア〳〵〳〵。

菖蒲　何とでござるぞ。

奴皆　エヽ、いま〳〵しい。

　　ト奥にて

清盛　仰々しい。鎭まれエヽ。

雷雲　清盛公の出御。

奴皆　ハア。

　　ト早下がり羽になり、二重疊に清盛、金冠白衣の形にて立ち身。これへ雷雲、參内傘をさしかけ、この前に誂らへの筒守りを臺に直し、この見得にて舞臺の眞中へ押し出す。下がり羽、打ちあげる。菖蒲の前、皆々、清盛の形を見て

菖蒲　ヤヽ、清盛公の

女皆　このお姿は。

清盛　旣に一陽の時來つて、今日只今、この宮島に於て、仁德を謝せんが爲、神前に於て祝詞を捧げ、金冠白衣を着いたせば、上なき位に昇りし清盛。我れに逆らふ奴ばらは、一々刑罪、目のあたり日頃の望み、たんぬる上は、みな萬歲を唱へろやい。

敎盛　君の御威勢誰れあつて、背く者なき御代萬歲、たゞ〳〵、おめでたう

皆々　存じ奉りまする。

雷雲　その清盛公のお側去らず、のたまく入道雷雲が、斯うさしかけた天ケ下、開くや花の顏見世に、當り眼の向う面。

清盛　時も媚めく院使として、罷り越したる菖蒲の前。賴政といふ、蟲の附いた院使なら、ろくな事ぢやァあるまい。ほのかに聞けば、直々に、この清盛へ申さんとの一條。女ながらもよく云つた。して、その院使の趣きは。

菖蒲　院使の趣き、餘の儀に非ず。この度仰せ出さるゝは、先達て、國の神寶、八聲の名玉、まつた、朝日丸の御劍、右二品とも、當社へ祕めある事、清盛ならで知る者なし。急ぎ參り、二品ともに持參なし、立歸れとの仰せ。早々、妾へお渡し下さりませうなれば、役儀の面目、お嬉しう存じまする。

清盛　某ならで知る者なしと、非に理を附けても、毛頭知らぬこの清盛。そんな小面倒な事は、知らぬと云ふより外は無いワ。

伏屋　イエ〳〵、憚りながら、いかほど左様に仰せあつても、それゆゑにこそ、御持参ありし御遺狀。

清盛　ドレ。

ト取つて開き見て、思ひ入れあつて

この遺狀があつたといつて、覺えもなき二品の寶。これが證據になるものか。エヽ、馬鹿々々しい。

ト裂いて捨てる。葛蒲の前、伏屋、驚ろき

兩人　ヤヽ、大切なる御遺狀を。オヽ〳〵。

トおろ〳〵する。小笹、こなしあつて

小笹　その御行跡ゆゑ、この一本に、附けられし御短冊。清盛公へ御意見に、賜はる御歌一首。御覽に入れん。

ト清盛が前へ出す。清盛、取つて

清盛　源氏に例へし白梅へ、結ひつけしこの一首。見るもなか〳〵忌はしい。片腹痛い。まツこの通り

ト枝を折る。三人、こなしあつて

菖蒲　エヽ、無くて叶はぬ、大切な御遺狀、引裂くのみならず。

小笹　御意見に賜はりし、梅花まで打折るとは

伏屋　極惡非道な清盛公。

菖蒲　なんと此まゝ、申し譯が立つものぞ。

伏屋　菖蒲の前さま、お覺悟遊ばせ。

女三　もう、是非に及ばぬ。

ト三人、懷劍にて清盛へ切つてかゝる。敎盛、立ちふさがつて支へ

敎盛　君に向つて、小癪な事を。

清盛　我れへ對して、劍戟をふるふ女め。引ツ縛つて嬲り殺し。

皆々　ハツ。

ト敎盛を始め、皆々立寄り、菖蒲の前はじめ、伏屋、小笹、深雪、撫子、紅梅へ繩かける。三人、こなしあつて

三人　エヽ、口惜しいなア。

ト下座バタ〳〵にて、くだ平、常久を引ッ立て出る。跡より忠平、又太郎と千束姫の襟髪を取つて出る。景澄、龍田と紅葉を引ッ立て、彌藤次、軍藤次附いて出て來り、清盛が前へ皆々を引据ゑ

忠平　ハッ、申しあげまする。いろ〳〵と吟味仕るところ、いよ〳〵宗徳君へ心を通ずる瀧口靭負。

くだ　まだその上に、又太郎忠綱、千束姫、神事の役人でありながら、いつか二人は、しつぽり色事。乳繰りあつたこの兩人。

景澄　順禮姿でぬつくりと、包むにあまる清盛公の、罰が的つて此奴等二人、繁仁君を尋ねる女。

くだ　皆々、斯くの通り申し合せ

忠平　只今、御前へ

五人　引据ゑましてござりまする。

教盛　いづれも方、心に油斷なく、出かされた。中にも、下郎に似合はぬ、くだ平が働らき。今日、清盛公の御前に於て、武士に取立てくれん。忠平も今日より、難波の六郎經遠と改め、くだ平は、六浦太郎高俊と改名いたせ。

くだ　すりや、我れ〳〵を今日より、武士に取立て下されんとな。

忠平　重々あつき御高恩。猶も、御前よろしう

兩人 願ひ奉りまする。
清盛 成る程、目の寄る所へ玉とやら、清盛が今日の祝賀に、我れに敵たふ蛆蟲めら、斯うも集まるものか。この上は、伊賀の平内左衛門を呼び出せ。
雷雲 畏まつてござります。
ト花道に向ひ
それに扣へし、伊賀の平内左衛門。君のお召し、急いでこれへ。
平內 畏まつてござります。
ト鳴り物になり、平内左衛門、花道へ出て、平伏する。
清盛 待ちかねし平内左衛門、目通りへ近う參れ。
平內 ハア。
清盛 かねて申しつけたる筒守り、この所へ引上げい。
平內 畏まつてござりまする。
清盛 この上は、六浦太郎高俊。
くだ ハア。

清盛　難波の六郎經遠。
忠平　ハア。
清盛　早見兵藤景澄。
景澄　ハア。
清盛　入道雷雲。
雷雲　ハア。
清盛　右四人とも、申しつける間、我が目通りにて、彼奴等殘らず首を討て。
くだ　委細
四人　畏まつてござりまする。
常久　すりや、我れ〳〵を
立役　この場に於て。
教盛　罪はその身の自業自得。
立役　そりや又、あんまり。
清盛　出で、再び返らぬ繰り言。

くだ　仰せを背きやァ
敵皆　重なる大罪。
又太　ハテ、是非もなきこの場の有樣。身に覺えなき惡名にて、この身ばかりか千束姫、又、菖蒲さま
まで思はずも
常久　罪せらるゝも皆因緣。
菖蒲　忠綱。
千束　菖蒲の前さま。
菖蒲　千束さま。
常久　ハテ、味氣なき世の
立役　成行きぢやなァ。
清盛　急いで用意……筒守りを引上げい。
平內　委細、畏まつてござりまする。

ト三保神樂になり、平內左衞門、花道にて股立ちを取る。直ぐに振つて來て、平內、くだ平、忠平、景澄、雷雲、岩臺へ上がる。此うち前通りへ菖蒲の前、千束姫、常久、又太郎、伏屋、小笹、深雪、

撫子、紅梅、住ふ。次に龍田、紅葉も扣へる。この模様、よろしくあつて

平内　いま清盛公の厳命によつて、我が引上げるは、この筒守り。

くだ　まツた六浦の太郎高俊が、一刀の下に命を斷つ菖蒲の前。

忠平　宇治の左大臣頼長の娘、千束姬。

景澄　田原の又太郎忠綱。

雷雲　菖蒲が介添へ、三人とも

くだ　その外、宗德君へ心を運ぶ輩まで

忠平　殘らず寂滅。

くだ　今が最期だ。

四人　觀念。

平内　イデ、筒守りを引上げべいか。ドリヤ

ト筒守りへ手をかける。この途端、向うにて

昌俊　暫らく。

皆々　イヤア。

平内　ソリヤ、暫らくと聲をかけたぞよ。
くだ　左やう〳〵、最早そんな時分だと思つた所爲か、胸騒ぎが仕る。
忠平　これにつけても、和泉屋の近いは、どんだ惡うござるて。
景澄　左やう〳〵。その上、あの裏に居ります成田屋と來ては
雷雲　この入道なぞは、別して大の禁物でござるて。
淸盛　何は兎もあれ、我れ今日、上なき位に座し、その威を階下の間に見て、心に逆らふ奴ばらは、一刀の下に命を斷ち、まつたこの筒守りを、引上げんとする所へ、暫らくと聲をかけたは
皆々　何奴だ、エヽ。
昌俊　暫らく。
皆々　暫らく、とは。
昌俊　暫らく〳〵、暫らくウ。
大薩摩　〽かゝる所へ、澁谷金王昌俊は。

ト、アリヤ〳〵の聲、人寄せになり、昌俊、柿の素袍、吉例の形にて出る。

〽寒紅梅の筋隈に、三升の紋は江戸の花、勢ひ込んだる荒若衆、すさまじかりける次第なり

皆々 どつこい。

平内 待て〳〵。暫らくと聲をかけて出た奴を見りやア、隠れもない三升の紋。まんざら知らないやうでもない。素袍の糊の荒事出立ち。そもまづ、うぬア

皆々 何奴だ、エヽ。

平内 イヤサ

皆々 何奴だ、エヽ。

ト爰にて七代續く自作のツラネあつて、ホヽ敬つて曰す。と納まる。

皆々 どつこい。

平内 さては、うぬア、澁谷の金王だな。命に掛替へもなくて、とんだ所へ出しやばつたな。見たか、これにおわたりなさるゝは、草木も靡く、安藝守淸盛公だぞ。うぬらがやうな、宿無し同然な、樽拾ひの出る所ぢやアない、キリ〳〵、そこを、消えてなくなれ。

くだ それ〳〵、なくなりやうが遅いと、三階へ行つて云ひつけるぞ。それよりは、早くその場を橘町がよからう。

昌俊 ハヽヽヽヽヽヽ、口に借金がいらねえものだと思つて、大束な事をほざいたな。多くの人の御難

儀なさるを、見かねて來た金王昌俊、斯う云ひかゝつたせうがにやァ、生えぬき同然、動く事は否だワ。

清盛　誰そある。目ざはりになるあの小僧め、相應な持遊びでもやつて引ッ立てさせい。

敎盛　左やう〳〵、君の仰せを待たずとも、早く餡ころでもくれて、騙して歸せ。この敎盛も、どうか肩身がすぼまるやうだ。

平内　畏まつてござりまする。サア、いづれも。いつもの通り、御苦勞ながら、引立てが參つたぞや。

皆々　イヤア。

平内　まづ差當つて六浦太郎、お取立てに與かつた恩賞に、貴殿からお行きやれ。

くだ　これサ、野暮な事を云つたものだ。有やうは、此やうな切ない事は、夢に成田屋としたい心持ちとても拙者が行かれぬ事は、いづれも樣が御存じだ。これは今日、名も改まつた、難波の六郎、貴公、お行きやれ〳〵。

忠平　拙者は今日、瘧の震ひ日ゆゑ、胴震ひが致して參られぬ。この儀ばかりは、御容赦に與かりたい時に、早見氏、其許、立身のしるしに、お出でなさい〳〵。

景澄　成る程、拙者參らう。

く忠　イヤア、きつい〱。

景澄　ドリヤ〱。

ト花道の角まで來て、跡へ歸る。

皆々　なぜ歸りめさる。

景澄　サア、ちよつとお鼻薬に、龜井戸へ蜆を取りにやつて

皆々　何をお云やる。

景澄　いつその事に、惣名代として、のたまく入道、一杯機嫌で、お出でなさい〱。

雷雲　成る程、いつも引立てに缺けた事のない、入道の役がら。新參者の手始めに、物の見事に、引立てゝお目にかける。

皆々　お手柄の様子、見たい〱。

雷雲　ドリヤ〱

ト花道へ來て、思ひ入れあつて、舞臺の方をソツと見て、懐から湯呑を出して、小さい聲にて

モシ、親方、一口あがりませぬか。

ト昌俊、見て

昌俊　なんだ、此奴は。染井の方から出る頑張り入道、大仰な羽織衣裳で、どこから引きみんたんしたのだ。うぬが持つて來た物が呑まれるものか。引ッ込みやァがれ。

雷雲　モシ、親方、私しは初役でござりますから、どうぞ引立てると思し召しまして

昌俊　花道の方へ

雷雲　アイ〳〵。

昌俊　二三寸

雷雲　アイ〳〵。

昌俊　寄つてやりたいが、否だ。早く引ッ込め。引ッ込みやうが遲いと、親仁橋へやつて、絲目をつけて、おッ放すぞ。

雷雲　そんならおれを、凧にしたな。

昌俊　知れた事だワ。

雷雲　エヽ、悪い延喜を

昌俊　どうしたと。

ト雷雲、刀を鞘ながら抜き、振り廻して

雷雲　すつかりと、拂つてくれろ〳〵。

ト云ひながら、舞臺へ來る。

奴一　サア、これからはみんな、惣がゝりに參らう。

皆々　何を云はつしやる。

奴二　イヤ〳〵、貴公、頭分の事なれば、一人でござるがよい。

奴一　イヤ〳〵、どうして一人で行かれるものだ。

奴三　ハヽア、そんなら怖いのだな。

奴一　なにサ、怖くはないが、氣味が惡い。

七人　おかつしやい。サア、然らばみんな、一緒に參らう。

奴一　サア〳〵。お來やれ〳〵。ドリヤ〳〵〳〵

ト奴、殘らず花道へ並ぶ。

サア、わッぱめ

八人　立てエヽ。

昌俊　なんだ、此奴等は、形も揃つて一對だな。何者の二合半だ。早くなくなれ。引ッこみやうが遲い

と、一網にぶッかけて、手拭屋の見世へ吊すぞ。

八人　ところを

ト手を振りあげる。

昌俊　なにを。

ト皆々、竹光を抜き放し

八人　さつさとござれや。節季候めでたい。豊年萬作。

くだ　おきやアがれ。

教盛　エヽ、面倒な。澁谷金王昌俊。

平内　キリ〱そこを

皆々　下がれエヽ。

昌俊　どうで引立てを待つてゐちやア、埒が明くまい。此方からお馬を乗り出して、清盛どのや、お爺達にも、近附きになるべい。片ツ端から覺悟しろ。

皆々　イヤア。

昌俊　旦那寺へ人をやれ。

皆々　イヤア。
昌俊　早桶の用意をしろ。
皆々　イヤア。
昌俊　さらば御輿を、つん出すべいか。
　　ト、トヒヨになり、アリヤ〳〵のかけ聲。昌俊、舞臺へ來り、中啓を咬へ、肌を脱ぎ、皆々と千鳥に入れかはり、立役を圍つて、キツと思ひ入れ。
皆々　どつこい。
又太　危い所へ、金王昌俊
女皆　よう來て下さんしたな。
昌俊　サア、この昌俊が參るからは、いづれも樣、何もお案じはござりませぬ。大船に乘つたと思つて落ちついてござりませ〳〵。サア、これからは、上座にござる清盛公、まつた荷擔人の敎盛どの、院の御所より使ひを立てられし、二品の神寶、この筒守りにある事を、よツく知り拔いたこの昌俊。まだその上に、かよわき姫君、まつた菖蒲の前さままで、なんで命を取らうといふのだ。瀧口靫負が讃岐方であらうとも、爰は一番、昌俊が預かつた。忠綱が不義の惡名も、何もかも、拭つ

て取つたやうにしにやァならない。奢る平家久しからず、所詮斯うなつちやァ、叶はぬ事と諦めて、速かに二品ともお渡しあれ。サア、返答は、ドゝどうだ。

清盛 ヤア、案外なる澁谷金王昌俊。凡下の身を以て、我れへ對し、二品の神寶、この筒守りに入れしなんどゝ、なんの痴言。最前我れへ、劍戟をふるひし菖蒲の前、それゆゑにこそ命の瀬戸。

菖蒲 それといふも、大切なる御遺狀を、引裂き捨てし惡逆ゆゑ。

昌俊 それも合點。何は兎もあれ、二品の寶さへ取戻せば事は濟む。サア、二品ともに、お渡しあれ。

清盛 どこがどこまでも、二品の寶とやらは

昌俊 知らぬと云ひ張るなら、この昌俊が、引摺り下ろして

ト かゝらうとする。ドロ／＼にて、たぢろぐ。

く忠 清盛公の

敵皆 御威勢を見たか。

昌俊 見た／＼。ハテ、おつりきな機關だな。よし／＼、今年は一番新らしく、もう清盛どのにやァ頓着はしない。それよりは、この筒守りを

ト 引寄せて、小口を引拔き、中より、袋に入りし寶劍と、袱紗に包みし名玉を出す。敵役、顏見合せ

て思ひ入れ。

皆々　オヽヽ。

昌俊　これ見たか。これほど爰にあるものを……イザ〳〵、二品の神寳、御守護あられませう。

菖蒲　今に始めぬ昌俊の働らき、よろしう奏聞遂げうわいの。

教盛　たとへ寳は戻つても、御遺狀はあるまいがな。

昌俊　そんな事に拔け目があつてつまるものか。引裂いた御遺狀は、眞ッ赤な似せ物だ。

清教　ヤヽヽヽ。

昌俊　誠の御遺狀は、某、爰に所持してゐるワ。

清盛　エヽ、騙られしか。殘念な。

千束　それについても、最前、六浦太郎が無體の戀慕。艶書と思ひ、渡せし文を、手に取り見れば、この密書。

ト出す。昌俊、取つて

昌俊　ドレ……こいつは好い物が手に入つたわえ。瀧口靱負どのゝ讃岐方、その外、疑ひかゝつた者も、たつて彼れこれのたまへば、淡路守教盛へ、左少辨祐長が送つた、この密書を讀みあけようか。

敦盛　サア、それは。

昌俊　サア

皆々　サア／＼

昌俊　どうだな。

敦盛　エヽ、いま／＼しい。

昌俊　ちつとさうもござるまい。細工は流々、仕上げを御覧じろ。アヽ、つがもねえ。

　ト爰にて手を打ち

二品の寶戻りし上、人々の命まで貰ひうけ、澁谷金王昌俊、姫君その外お供して、立歸るが、云ひ分は無いか。

皆々　云ひ分は

昌俊　どうしたと。

皆々　無い。

昌俊　然らば姫君、菖蒲の前さま。イザ／＼、お立ちあられませう。

〽既に樊噲項羽にも、劣らぬ風情市川の、ゆゝしかりける。

ト菖蒲の前先に、千束姫、伏屋、常久、又太郎、小笹、深雪、紅梅、撫子、龍田、紅葉、花道へかゝる。

平内　ソリヤ。

皆々　やらぬワ。

ト奴八人、かゝる、昌俊、大太刀を抜き、首を切る。皆々、ぶツかぶり、切り首、バラ〳〵と抛り出す。昌俊、刀を擔ぎ

昌俊　さらば。

ト下がり羽になり、皆々、向うへ入る。舞臺、引ツ張り、見得よく

幕

幕外、昌俊、悠々と向うへ入る。

ト東の下より源吾、兵藤、以前の形にて、立廻りながら、中の間の歩みより、花道の眞中ほどへ來ると、時の鐘、大拍子にて幕明く。

本舞臺、三間の間、向う黒幕。眞中に、社の横を見せたる道具。左右一面の杉林。諸所に誂らへの石燈籠。直ぐに源吾兵藤、手を負ひながら、舞臺まで來て

源吾　ヤア、此まゝにくたばるとて、大切なるこの院宣、やはかうぬに渡さうか。

兵藤　もう斯うなつちやァ根くらべ。どつちが先へくたばるか。生き殘つたが利運する。こま言云はずと、早くたばれ。

源吾　うぬから先へ。

兵藤　われから。

兩人　どつこい。

トよき見得になり、誂らへの鳴り物にて、兩人、花々しきタテ、存分あつて、源吾、院宣を咬へ、トド兩方、肩先へ切りこむ。兩方、バツタリと倒れる。この時、ゴンと捨て鐘の頭を打込む。これをキツカケに、ちやつぱ入りの夜神樂になり、社の横塀、バラ／＼と落ちると、内より、油坊主の形をしたる男、靑菅笠、黑衣の形にて、油つぎを持ち、窺ひ／＼出て來り、源吾の咬へし院宣を取つて思ひ入れ。行かうとする。油坊主の腰より苧環、附きてあり、これを知らずに行きかける。油坊主の出た所より、忍びの侍ひ、頭巾、大小、黑羽織、野袴の形にて、苧環を持つて出る。この途端に向うより姫、振り袖、白練りの白張にて、粕烏帽子、銅燈籠を提げ、出て來り、花道の角にて、兩人、行きあひ、この時、油坊主、腰に附いたる糸にて、後へ引ッ張られるこなし。三人一度にキッと見得。これより姫、

油坊主を舞臺へ押し戻し、院宣を枷に立廻り。此うち忍びの侍ひ、姫、額見合ひ、思ひ入れ。油坊主、ニッタリとこなし。忍びの侍ひ、油坊主の院宣へ手をかけるを、振りほどく。この時、侍ひ、油坊主の額を見ようとする。油坊主、額を外ける。立廻りのうちに油坊主、懐中より文を落す。姫、これを院宣と思ひ、拾ひ取つて懐中する。この時、思はず袱紗を落す。これを侍ひ、拾ひ取つて懐中する。油坊主は院宣を懐へ入れる。この途端、よろしくあつて、ひやうし直ぐにシヤギリ。

幕

第一番目　四建目

三井寺の場

梅津川の場

淨瑠璃　誰同噂仇者　常磐津連中

役名――能勢の藏人滿貞。待宵の侍從。梅津川の船君、小松。船頭、手取の與次郎。所化、願山。渡邊丁七唱。のたまく入道雷雲。鄙左仲。三井寺の頼豪阿闍梨。猪の早太忠澄。中間、栗平。同、熊平。源三位賴政。

本舞臺、三間の間、一面の筋塀、手輕き道具。下の方に、三井寺領内と記したる傍示杭。爰に願山

いが栗頭、剃立ての拵らへ、鼠布子、頬かむりにて、紙合羽をまとひ、熊野三社と書きし額を引ッ抱へ、雷雲、矢張り鯰坊主にて、これを支へてゐる。寺鐘にて幕明く。

トちよつと立廻りに、願山の手拭落ち、これにて顔見合せ

雷雲 願山坊か。

願山 のたまく入道。

雷雲 なんの事だ。

願山 おらアいつもの、立役めらと思ふやつサ。

ト音樂になり

雷雲 マア、合點のゆかない願山坊。その形は、なんの態だ。

願山 サア、聞いて下さい。いつぞやから、柴屋町のふんばりに引ッかゝつて、肉食妻帶、のんのこさいさい。頼豪阿闍梨のお談議を聞いても、止まぬが身の因果。たうとう師匠の勘當うけ、三井寺をはちぶされ、ちやんが一文無いところへ、武藏の左衛門有國どのが、妹聟の頼政が、家の重寶……コレ、この水破の矢の根を摺り替へて、當山熊野權現へ、淸盛公がお手づから、お書きなされた額の表へ、この矢の根を打込み置き、頼政を罪にとつて落す目論見。愚僧が案内知つたを

幸ひ、この三井寺へ入込んで、首尾よくやれば金とあるゆゑ、それ樂しみにこの通り

ト抱へし額と、懐より、袱紗に包みし矢の根を出して見せる。雷雲、取つて

雷雲　成る程、これこそ清盛公、當三井寺の熊野の社へ、勅額同然に遊ばされしこの額。すりや、これへ、頼政が、家の重寶、その水破の矢の根を打込んで、平家調伏と、頼政を罪にとつて落すべいと、有國が算段か。

願山　それよ。人の目つまにかゝらぬうち、手早く打込み、元の社へ、掛けさへすれば〆めたもの。どこぞの手から清盛公へ。

雷雲　そんなら、身共が頑張つてやらうほどに、早く打込み、元の社へ。

願山　合點だ〳〵。……エヽ、コレ、なんぞ鐵鎚代りに

トそこらを尋ね、手ごろの石を、鐵鎚代りに取つて、矢の根を額へ打込む。雷雲、額を押へて思ひ入れ。此うち、時の太鼓になり、花道より左仲、麻上下、大小にて先に立ち、跡より中間二人にて、白木の經机を擔ぎ、出て來り、左仲、中間へ指圖しながら行きあたる。兩人、悄りして

雷雲　ヤイ〳〵、べら坊め、何をしやアがる。

ト此うち願山、ちやつと額へ打込む。左仲、思ひ入れあつて

左仲　ヤア、此奴、慮外な奴め。源三位頼政より、當院主頼豪阿闍梨へ、お使ひのこの蔀左仲へ對し、殊に往還に寄りこぞり、道通りの妨げ致し、何事を致し居る。

雷雲　サア、身共らは。

頤山　アヽ、モシ〳〵、私しどもは、この三井寺の出家でござりまするが、清盛さま、この寺の熊野へ折々御參詣、それゆゑ今日は同宿ども、往還の草むしり。

左仲　それに又、此方の出家が帶刀は、何とも以て合點がゆかぬ。

雷雲　サア、これは……それ〳〵、愚僧は、當山に聞えある、一來法師が弟分、さんだら法師といふ法師武者。それゆゑ帶刀を致し居る。

左仲　左樣の事なら、頼政公、おしつけお出でなさるにつき、音物のお使ひ。幸ひの事なれば、其方、院主へ案内いたせ。

雷雲　おきやアがれ。此のたまく入道に

左仲　なんと申す。

ト思ひ入れ。

頤山　これサ〳〵、どんな事が妨げになつては惡いほどに、ナ、ソレ、同宿の役目だ。御案内しやれ。

ト雷雲へ呑みこます。

雷雲　成る程〳〵。そんなら、身共が案内してくれう。

左仲　然らば、キリ〳〵先へ立て。

雷雲　願山坊……エテになつたら、身共へも。

願山　オヽサ、合點。

雷雲　サア、斯うお來やれ。

トまた音樂になり、雷雲、先に、左仲と中間、下座へ入る。

願山　エヽ、もうちつとで濟むものを、とんだ所へアノざぶめ。ドレ、ちつとも早く打込んで

ト額の矢の根を打込んでゐると、太鼓謠になり、花道より丁七、深編笠、浪人の拵らへにて出てくる
願山、矢の根をとつくりと打込み、思ひ入れあつて、紙合羽へ額をくるみ、引ッ抱へる。此うち丁七、
舞臺へ來り、この體を見て、下の方に窺ふ。

これぢやアどいつも、目にかゝる事ぢやアない。よい間を見合せ、元の所へ……それ〳〵

ト下座の方へ行かうとする。丁七、向うへ廻り、扇を出して、合力の思ひ入れ。願山、こなしあつて
あちらへ來ろ。丁七、また向うへ廻り、思ひ入れ。

これサ〳〵、氣のきかない。其方より此方が、合力にあづかりたい。附きやんな〳〵。

ト又こちらへ來る。丁七、また先へ廻つて思ひ入れ。願山、ムッとして

エヽ、持ち合せが無いと云ふに。

ト丁七を引退け、行かうとする。

丁七 イヤ、持ち合せたるその品を、合力にあづかりたい。

願山 エヽヽ。どうしたと。

丁七 人目を包む一品は、樣子ありげな立振舞ひ。その中、身共に改めさせ、その上、勝手に持つて行け。

願山 ムウ。そんなら貴樣は、只の浪人ぢやアないな。

ト笠を取つて、思ひ入れ。

丁七 云ふにや及ぶ、某こそ、頼政の近臣、渡邊丁七唱といふ者。主人の仰せに姿をやつし、洛中洛外徘徊なすも、深き仔細があつての事。何は兎もあれ、その一品、身共に中を改めさせい。

願山 イヽヤ、唱でも瑪瑙でも、愚僧が抱へたこの品を、改めるには及ばぬ事。いらざるお世話を燒かれずと、此まゝ爰を通して下さい。

丁七　愚僧と吐かす詞とは、不釣合ひな頭の形、いよ〳〵以て怪しい奴。見遁がしならぬ。そこ動くな
願山　七面倒な咎め立て。邪魔をせずとも、そこを退きやれよ。
　ト行かうとするを引戻して
丁七　不敵な奴の。イデ、某が
　ト手をかける。振り切る。ちよつと立廻りあつて、両人「どつこい」と見得。
願山　そこにうしやアがれ。
　トついと一散に下座へ逃げて入る。
丁七　跡追ひかけて……それ。
　ト早めの双盤になり、丁七、追つて下座へ入る。この鳴り物にて、チヨンと正面の塀を中より打返す
本舞臺、三間の間、草土手に柵をつけ、舞臺先より花道へかけて流れの浪板、蘆のあしらひ。日覆より柳櫻を交ぜし吊り枝、見事に下げ、この草土手の上に常磐津連中居並び、道具納まる。
ト鳴り物打ちあげ、頭取出て、淨瑠璃名題役人觸れあつて、直ぐに前彈きになる。
〽船中の浪の上に、一生の觀會これ同じ、色で近江の淺妻と、名にし吾妻の猪の堀を、柳櫻

とこき交ぜて、都に移す梅津川、二枚續きの錦繪や。

ト大小、竹笛入りの鳴り物になり、舞臺へ待宵の侍從、船の上へ廣袖の形、金の立烏帽子にて、水干をかけ、片膝立て、鼓と中啓を持ち、滿貞、廣袖、羽織衣裳の形にて、頭へ紫の袱紗を卷き、水棹を持つて立ち身。小松、これも笘船の上に、黑の着附け、晒しの手拭をかむり、片膝立て、小さき土の火鉢を抱へ、與次郎、廣袖、やつしの形にて、手拭をかむり、水棹を持ち、立ち身。この見得よろしく、双方途端にセリ上げる。鳴り物打ちあげる。

〽仇し仇浪、寄せては返る浪枕、ほんに恥かし我が床の山、あゝ又の日は、誰れに契りを川島の 〽水の流れと勤めの末は、どこのいづくが泊りやら、しよんがいな、ようゆたさまよ、おろかよさまよ 〽夜明けごんすかえ 〽泊り尋ぬる友がらす、川風寒く吹きそらす、咬へ煙管の莨さへ 〽かをりゆかしき柴船に、あらぬ水棹もさすが又、いはで逢ふ瀬を待宵が、胸で調べて小鼓の、どうぞなりそな物優の、その優人に戀わたる 〽身すぎは辛き笘の花、小松々々と名をとり楫子 〽浮いた同士と夕汐の。

待宵　このねぬる、淺妻船の淺からぬ。

滿貞　契り結びし鼓の調べ、ゆるしの色音は、誰れぢや〳〵。

ト待宵へ向ひ、思ひ入れ。

與次　大和屋の小松だわな。

小松　乘つて行きねえな。

滿貞　ヤヽ、あれにも同じ二人連れ。

待宵　戀する人と見ゆるわいなア。

與次　ドレ、いつもの河岸へくツつけて

小松　折助さんを待たうかいなア。

滿貞　さらば川へ

與次　やらうかい。

〽棹の雫に濡れ事師、思ひよるべにさし寄する。

トこれにて太夫臺を下の方へ引いて取る。これと共に前の浪板を消す。

本舞臺、向う低き草土手、蘆の入りし網代塀、この內よりも柳　櫻を見事に見せし道具になる。

ト二艘の船は花道附け際の蘆間へ引きつける。與次郎、兩人を見て

與次　コレ〳〵、小松、ありやァ極彩色の船饅頭ぢやァないかえ。

小松　ほんに、あんなのがあつちやァ、此方の商賣に、きつい障りでござんす。

與次　それサ……カウ、爰へ河岸をつかせる事はならないほどに、脇へ漕ぐとも、野稼ぎに出るとも

滿貞　イヤ〳〵、此方は、そんな者ではござらぬ。公務の暇に遊漁の者。これなる女中は、暫しの便船。

小松　ムウ、そんならお前は

待宵　サア、わたしは……それ〳〵、白拍子にて候ふ。

與次　オヤ〳〵、顔見世早々、娘道成寺ぢやァあるまいし。

小松　さうして、お名はえ。

待宵　サア、その名はナ……祇王でなし、祇女でなし、オヽ、それ〳〵、佛と云ふわいなう。

與次　ナニ、佛さんとかえ。

滿貞　道理で、有り難い御面相ぢやと思うたが、そんなら聞き及ぶ、佛御前でござつたか。

待宵　アイ、さうぢやさうでござんす。

與次　そんなら、ちつと御相談もあるが、なんとマァ、陸へ上がつてはどうであらうね。

滿貞　イカサマ、船越しに御挨拶も如何なれば

待宵　そんなら、あそこへ
小松　それがよからうわいなア。
ト皆々、船より上がる。
與次　時に、佛さん、わしらはツイしか、芝居より外、見た事はごんせぬが
小松　サア、わつちも、白拍子とやらは、まだ知らん拍子ぢやによつてナ
與次　爰で舞つちやア見せなさらぬか。
滿貞　イカサマ、こりやよからう。某も、船手の代りに所望したい。
待宵　アノ、わたしに舞を
滿貞　それいの。
與小　お頼み／＼。
待宵　否と云はれぬ云ひがゝり。そんならどうなと、詞に附いて
〽既に拍子をとり／＼に。
トこれより大小。
〽君を初めて見る時は、千代を經ぬべし姫小松、引く手指す手も攝取不捨、かざすや袖の舞

ひ扇

トよろしく舞ひあつて

〽梅に鶯、ちよい〳〵な、來ては梢を春霞、いつか莟をいたづらな、東風が誘うてホヽホほころびける、浮名も花の香に匂ふ、粋な世界と白拍子、面白くこそ奏しけり。

與次　ヤンヤ〳〵、親は無いかえ。

小松　佛さんに、親が有るものかな。

與次　おきやァがれ。サア、これからは、さしづめお武家様、お前もなんぞ、やりなさい〳〵。

滿貞　これはいかな。某は、武道の外に聊かも、嗜み事は歌ばかり。

小松　して、その歌は、潮來節か、ひやかしかえ。

滿貞　イヤ、八重垣つくる、和歌の道。

〽それ大和歌は、人の心を種として、三十一文字に八雲立つ、神詠ありし初めより、力も入れず天地の、動かぬ野暮な堅藏も、堅い六義をかいやりて、つい腰折れに手爾於波を、取分け多き題のうち、松も紅葉も月雪花も、戀といふ字に及ばりよものか、いづれ戀路の上ぞなき　〽その戀すてふお姿に、汝も思ひをかけてのみ、祈る心は神さんが。

與次　アヽ、モシ〳〵、ちつと待ちなさい。見たところが、どうやらあなたに、ほの字の素振り。シタガ、いま時、そんな口說きぢやア、滅多に方は附きませぬ。
小松　それいな。ちつと捌けて、やらしやんせにや、埒の明くものぢやござんせぬぞえ。
待宵　さうして、どうしたらよからうぞいなア。
與次　どうといつて、わつちも色は、後にも先にも彼奴一人。ツイ引ツかゝつて、今ぢやアたうとう、自前稼ぎの船饅頭。併し、商賣人でも地者でも、氣味合ひに變りはあるまい。マア、わつちらが色事の、初手から仕方をやりませう。
小松　これいな。お前やわつちの色事が、お座へ出された話しかいな。
待宵　コレ、女中、さう云はずとも、その話し、聞いたらちつとは滿貞さまへ、云ひ寄る品にもなりそな事。
滿貞　すりや、某を、能勢の藏人滿貞と
待宵　知らいでなんと致しませう。
與次　エヽ、畜生め。コレ、小松、あの通りだから話したら、何それかそれ、種にもならう。
小松　成る程なア、其うちには、手ッ取り早に、御合點のゆく事もあらうか。

與次　さうだ〳〵。マア、かツくらはして見るがよい。

小松　そんなら、わつちが身の上は。

〽色ぢやなけれど焦れよる。船を揚屋の流れの身〽丁度時分も宵の口、向うへ甲子大黒天から巳待ちで毎晩、庚申まち〳〵修行の御法印。一杯機嫌の千鳥足、雁木へよるの前渡り〽エヽイおらがのは居るかえ〽オヽ、法印さん、お前また、どこぞで醉うて〽べヽ、べら坊め、酒は飲んだが、醉やアヽ、しねえ〽それでもどうやら機嫌が〽危ない怖いは昔の事ッサ、そのあやなしに乘りが來て〽拂ひ淸んめ立てごかし、さる程に、これは又、奴に馴染みし身の上の、哀れ果敢なき物語り、さても〳〵、その日は竈〆めの、初穗の百をころりつと、させもが露の命取り、引ッかけられて病つきの、祈禱もまゝの革羽織、とは知らずして雜物は、みんな質屋へ置き炬燵、火焰で內はひどい明王、のうまく段々借錢を、背負つて立たれぬ年まつり、さうは寅除け其うちにと、立つを引とめ〽コレ、待ちねえな、わつちが心に其やうな、曇り霞みはなきつれし、鴨が知つて今戶燒、土の火鉢もお前ぢやと、思うて抱いて明暮れに、眺めて見てもどこやらが、小ぢれつたいぢやないかいな、三國小女郎ぢやなけれども、京で島原、大阪の、新町とやらいふ所の、全盛の太夫、客さん方に恥を

捨て、無心を云うてお前にも、苦勞をかけず、年明いて、嚊ア左衛門と云はれたら、それから後は勝手づく、二度の勤めも今の身に、似たか夜鷹の大年增 〽爰ぢや流行らぬ、鹿兒ン島で流行るとさ、サア三十振り袖四十島田 〽草の枕も主ゆゑならばえ 〽北風吹けどもなんとせう、冷たい寒いはなのこつた 〽石のお地藏もおもてする 〽しつかい體はかな氷、雨にも露にも負きやせまい、サア三十振り袖四十島田、その氣でその氣で 〽その氣の金毘羅大權現、明日の緣日樂しみに、さばえと別れ行く道の、さばえと別れ行く道の。

與次　モシ、これからが、ごたつきでござりやす。

滿貞　ムウ、ごたつきとやらは。

與次　ごたつきとは、口舌の事サ。なんでも向うの氣を引いて……見るのは潮來でござりやせう。

待宵　その、潮來とはえ。

與次　その潮來とは、マア、こんなものサ……惚れた顏して、否ならよしやれ。

ト一口うたふ。

小松　オヤ、ついぞねえよ。

與次　どうしたと。

〽なんの此方は先刻から、待つて潮來の當て文句、ふざけなんす、コレ申し〽小石を下駄でころばかす、聲も慥かに聞いた風〽先も否なら此方も否よ、男日照りがしやせまい〽初手から實で愛想に、吸ひつけ莨の炭團さん、じやうのあるのが嬉しうて、小縁に霜も沖漕いだ、夫婦氣取りに抱きしめて、四つ手の網の茶碗酒、行燈船の碇屋を、下ろして深く云ひ交し、動かぬ仲でありながら、なに疑うて今更に、そんな事をとしがみつき、振り廻されてグニヤとなり〽さうとは知らで自惚れで、もし長棹にならぬうち、ごたつき無しにと思ふゆゑ、心にも無き切れ詞、腹が立つならコレ〱と、拜む勇みは女より、一割弱く見えにけり

與次　ヤレ〱、三役勤めたら、大汗になつたやつサ。

小松　モシ、この位にせにや、男は手に乘らぬわいな。

滿貞　成る程、賣色の色事は、また格別なものぢやてな。

與次　サア、今でやりなさい〱。

待宵　サア、物の本や淨瑠璃で、傾城の事は聞いたれど

與次　その花魁も、船饅頭も、そこへ行つちやァ同じ事サ。

小松　そんなら覺えた傾城て、やらしやんすがよいわいなァ。

與次　ソレ、清掻々々。

ト清掻になり、小松、待宵の帶を前へ廻す。

〽引かれ廓の初深雪、ふられて歸る客あれば、積もる思ひをしつぽりと、濡れて嬉しき間夫もあり、變る勤めの仲の町、茶屋で見初めし緣の端、人賴みしてやう〳〵と、上がつてもらふ恥かしさ、惚れ過ぎるほど氣が遲れ、もしえと云はうか、オヽ寒と、云ひたい事もありふれし、屏風の外の灯さへ、邪魔になる手の置き所、心も帶も解けしなき、初の御見の床のうち、もどかしらしいぢやないかいな〽エヽ、おきなさい、眞の事だの、惚れたのと、人をわざ〳〵呼び寄せて、こりやお弄りと見えやすね、ドレ、こんな所に居やうより、さらばお暇いたさうと、羽織着る手に縋りつき〽誠なりやこそ、兎やかうと、新造衆にも呑みこませ、首尾して逢はうと本當に、寐もせで夢が憎らしい、歸し申しはしいせんと〽寄るを振り切る廊下の障子、出合ひ頭に太鼓持ち、女藝ちやがおし止め〽モシ、どうで有馬の人形筆、古い口舌も取越して、初會にさりとは早歸り、おつとそこらはぶん流し、それ居續けの大騷ぎ。

ト與次郎、小松、振りになる。

〽爺と婆樣が色事かせい、若い女夫が看經しやる、涙こぼして穴かしこ 〽有り難山から寒鳶、とろゝに辷つてあいたしこ、面白狸の腹鼓、サアこれからはお二人で、ちん／＼鴨の仲踊り。

ト合ひ方になり、滿貞と待宵へ踊れといふ思ひ入れ、待宵、いやト此方へ來る。與次郎、袖を捕へる。滿貞、御免ト此方へ來る。小松、袖を捕へる。兩人、これにて對の肌脫ぎになり、摺り鉦入りの踊りになる。

〽鷄と鐘とはどちらが辛い、更けて待つ夜の鐘の音聞けば、飽かぬ別れの鷄の音が、增しと思へど、それとても、後朝は鷄も辛いと戀する身では、これも恨みであろぞいな、こりやほんに、さうでありそなものかいな 〽つらや戀路に鷄と鐘。

ト踊りの切れに待宵、滿貞へ寄りそふ。直ぐに懷中より、袱紗包みの船切手を出す。滿貞、ちやつと取つて

滿貞　さてこそ、色に事よせ、某が所持するところの、讚州渡海の船切手に、心をかくる白拍子。佛御前といひしは僞はり。讚岐におはす宗德君へ、身寄りの方でござらうがや。

待宵　成る程、察しの上は、何をか包まん。妾ことは、中納言兼長の娘、君樣のお情うけし、待宵の侍

従といふ者。共に配所のお宮仕へと、思へど叶はぬ渡海の禁制。御身が父の能勢刑部が守護たるゆゑ、何卒所持の船切手、欲しさのあまり、あられもない、色に事よせ近寄りし、憎い女子と叱らずと、どうぞ切手を、たもひなう。

滿貞　何がさて、女儀の御身にさほどまで、思し召してのお志し。殊に若宮様まで儲け給ひし待宵どの。初めより藏人も、誠にあらざる戀路とは存じの前。その律氣さに今爰で、父が預かる船切手。イザ、待宵どのへ参らせん。

ト切手を待宵へ渡す。

待宵　すりや、この切手を……エヽ、忝い。

與次　ハア、そんなら、お前方お二人は、待宵の侍従さま、能勢の藏人さまでござりましたか。

小松　さうとは知らいで先刻から、不躾な事ばかり。

滿貞　見るところ、其方達二人も、定めし源氏に身寄りの者。平家へ恥辱を與へんと、それゆゑかゝる船君へ、小松といふ名を附けしならん。

與次　アヽ、モシ／＼、こりやア斯うでござります。小松の内府重盛さまは、お情深いお大將。そこで小松々々と、名を取りましたのサ。

小松　それ〳〵、面妖、淨瑠璃へ出る者は、えて本名がござりまするが、わたしらばかりは、そんな者ぢやござりませぬ。

與次　私しは、手取の與次と申す船頭、小松は初心の船饅頭。本名も何もござりませぬ。いづれも樣左やう思し召して下さりませ。

小松　切手手に入る上からは、妾はこれより

待宵　讃州までは餘程の道。渡海の濱まで藏人が、お見送り致すでござらう。

滿貞　重ね〴〵のお志し。

待宵　然らば、イザ

滿貞　モシ〳〵、マア、お待ちなされませ。あそこへ來るは意地惡の、武藏の左衞門が折助ども。

與次　ほんに、いつもの中間ぼう。待宵さまを見つけ居つたら、其まゝには置きますまい。

小松　某とても宗德君へ、心を通はす者とあつては、後日の爲にも如何なり。

滿貞　さういふ事ならお二人とも、マア、苫船へ、暫しのうち。

與次　それがよいわいなア。

小松　ト待宵、滿貞を苫船へ隱す。

〽忍ばす間もなく二人連れ、爰へ紺看板替り、お供崩れの二合半、川邊傳ひを歩みくる。

ト向うより栗平、熊平、出てくる。

小松　折助さん方、早かつたなア。

與次　先刻から、こなさん達を

栗平　ヤア、とぼけるな／＼。讃岐の君にゆかりある、待宵の侍從と、もう一人。

熊平　うなづき合ふ能勢の藏人滿貞。お旦那へ引いて褒美にする。

兩人　二人をキリ／＼、出して渡せ。

小松　ホヽヽヽヽ、此方に覺えもない事を。

栗平　でも、たつた今まで、この所に。

與次　ハテ、知らぬと云つたら金輪際。

小松　外を尋ねて見るがよい。

熊平　よいワ。さう吐かすからは、差當る

栗平　あの苫船を改めて

ト兩人行かうとするを支へて

與次　イヽヤ、船は此方の揚屋同然。
小松　改めさせてよいものかいな。
栗平　ヤア、邪魔をひろがば、うぬらから
熊平　先へ繩打つ。
兩人　腕廻せ。

ト與次郎、小松へかゝる。

與小　ハテ、惡洒落な。よしなさい。

ト振り放す。

兩人　そこを、斯うして。

ト又かゝる、ちよつと立廻りあつて、「どつこい」と、これより所作ダテになる。

〽客と名が附きや按摩でも、折助さんでもあやなして、可愛々々と締めつけて、泣かせて歸すが奥の手の、しつこい奴なら疳癪に、障つてどつさり投げ情。

トよろしくあつて

〽流石の手剛き中間ども、腰もひよろ〳〵這々に、御免々々と逃げて行く。

ト兩人、下座へ逃げて入る。船の内より、待宵滿貞、出て來り

滿貞　出來た／＼。

待宵　又もや障りの無いうちに

與小　お二人ともに、ござりませ。

待滿　さうぢや。

〽互ひに花の顔見世に、一座も色で葺屋町、めでたかりける。

ト勢ひ三重になり、待宵先に滿貞、花道へかゝると、栗平熊平取つて返し、「それ」とかゝらうとするを、與次郎、小松支へる。待宵と滿貞は向うへ入る。舞臺は、よろしき見得にて、この道具ぶん廻す。

〽次第なり。

ト道具納まる。常磐津連中は、また草土手を刪れあげ、これを消す。

本舞臺、三間の間、二間の屋體、竹の節の欄干、跳込みの彫り物。左右、杉戸。眞中、一面に鼠の緞帳を掛け、屋體の上下、瓦燈口、この前に石の手水鉢。よき所に幕明きの經櫃を直し、爰に丁七、願山を引きつけたる見得。

願山　マアく、ちつと待つて下さい。息が切れて、アヽ、切ないく。
　　ト息の切れし思ひ入れ。
丁七　サア、苦しくば、その品を、きりくと、これへ出せ。
願山　サアく、どうともしようから、マア、水を一口、飲ませて下さい。
丁七　おのれを追つて、身共も咽喉が
　　トあたりを見て、手水鉢の側に願山を引摺り行き
サア、おのれから、マア喰へ。
願山　忝いく。
　　ト押へられたなりに手水鉢へかゝり、柄杓より水を一口飲み
オヽよい、心持ちぢや。
　　トまた柄杓に水を汲んで
サア、先生も一口……あがれ。
　　ト立ちさま、柄杓のまゝで丁七の顔へ水をぶツかける。丁七、思はずあわてる。この間に願山、逃げ出す。丁七、すかさず引ツ捕へる。

丁七　おのれを逃がしてよいものか。
願山　なめら三方。
丁七　サア、その品を、これへ出せ。
願山　ハテ、この品が、おいそれと見せられる位なら
　　ト叩きのける。
丁七　見せともながるが不審の第一。
願山　それだによつて
　　トまた逃げにかゝるを引戻し
兩人　どつこい。
　　トこれより誂らへの鳴り物になり、願山は經櫃の棒、丁七は白刃にて、兩人、面白きタテあつて、よき程に下座より雷雲、出て來り、額の包みを中より引ツたくり
雷雲　この品、身共が淸盛公へ。
　　ト双盤の早めにて、雷雲、額を抱へ、向うへ走り入る。
丁七　南無三、詮議の彼の一品。

ト行くを、願山、引きとめる。立廻りに丁七、願山をポンと當て、「ソレ」と跡を追うて向うへ入る。
願山、起きあがつて

願山　ヤヽ、彼奴をやつちやア

ト行かうとする。後へ若黨、一人出て

若黨　やる事はならぬ。

ト組みつく。願山、振りほどく。若黨、直ぐに白刃を抜いて切りかける。願山、すかさずその白刃を打ち落し、若黨を切り下げる。此うち始終、双盤の鳴り物。直ぐに願山、丁七の跡を追ひかけて向うへかゝると、揚げ幕にて「頼政参詣」と呼ぶ。これにて願山、うろたへ、取つて返し、塀の蔭へ小隠れする。

ト大薩摩浄瑠璃になり

〽眞如實相の胸の月も、瞋意の雲に覆はれて、光りを外に三井の寺、頼豪阿闍梨は戒壇の、恨みの焔消えやらぬ、護摩に黒みしその姿、恐ろしくも又いたはしき。

トこの浄瑠璃のうち、折々鈴の音。浄瑠璃の切れに、また向うにて「頼政参詣」と呼ぶ。三味線入りのノットになり、静かに緞帳巻きあがる。この内に頼豪阿闍梨、痩せ衰へたる誂らへの拵らへにて、

鈴を持ち、護摩壇に向ひ、眼を閉ぢて行法の見得。この途端に向うより頼政、鉢蔓、長上下、小さ刀にて、錦の袋に入りし綸旨を懐中して出てくる。後より忠澄、上下衣裳、掴み股立ちにて、頼政が刀を袱紗に持ち添へて出てくる。トこの鳴り物に冠せて、薄ドロ〳〵。日覆より七曜星現はれる。頼政、忠澄、よき所にて、これをキッと見上げて思ひ入れ。

頼政　凍雲の日足、短かしといへど、未だ日輪没せざるに、諸星現はれ、恒星の光り澱みたる、その例しは、献公、驪姫が讒を聞き、恭世子を廢せし折から

忠澄　まつた、武帝の戻太子を罪し、惠帝の愍懐なぞ、亡命のきざみ、この瑞あり。

頼政　その故事を今爰に、思ひ合せば、これ全く

忠澄　敦文親子のお身の上か。

頼政　但し、頼政、頼まれ申せし、玉倉の君の御身の上か。

忠澄　心ならざる星の凶瑞。

頼政　不思議な分野を

忠澄　見るものぢやなア。

ト思ひ入れ、星は日覆へ引いて取る。ドロ〳〵やむ。頼政、思ひ入れあつて

頼政　忠澄、來れ。

忠澄　ハツ。

ト矢張り右の鳴り物にて、兩人、本舞臺へ來り、頼政、忠澄へ顔にて思ひ入れ。忠澄、ツカ〳〵と來り

大內よりの御內意として、頼政、これへ、伺候いたしてござりまする。

ト此うち頼豪は、始終眼を閉ぢ、折々鈴を力なく振りゐて、この時、これを聞いて、眼を開き、思ひ入れ。

頼政　頼豪阿闍梨。如何おはする。

トずつと上手へ通り、高床几へかゝる。頼豪、頼政を見て

頼政　頼政……頼政、よくも寺門へ

トひよろ〳〵と立ちあがり、ベツタリと下に居て

來りしな。

ト思ひ入れ。

頼政　浮屠凡俗と變れども、同じ清和の貴僧と某。殊に師壇の因みあれば、折々音信申さんなれど、朝

勤に暇なく、存外の疎遠。見れば阿闍梨のいぶせき有様。すりや、この程より、聞くに違はず

頼豪　ヤア、云ふな頼政。我れ飲食を斷つて大願の仔細、汝が胸に覺えあらん。

頼政　待つた頼豪。おことが所存を頼政が、知りつらんとは、何を以て。

忠澄　殊に何やら御主人へ、恨みの體は合點が參らぬ。事の仔細をとつくりと、それにてお話し下されい。

頼豪　ヤア、まざ／＼しき頼政主從。もの云ふまじと思へども、一條これにて云ひ聞かさん……既に當今、御位には卽かせ給ひしが、皇子わたらせ給はず、何卒頼豪、親王の宮御誕生を祈り、功驗あらば、何事も願ひに任せんとある、その御內勅の使ひは頼政。アラ忝や、頼豪が、年頃深き本懷を、遂げんず折と肝膽を碎き、祈りし驗しに若宮の誕生、御感斜めならず、爰ぞと三井に戒壇の、願ひは數度に及べども、關白大臣の讒言によつて、今に於てお許しなし……その無念、骨髓に通り、晝は終日、夜は夜もすがら、お側の大臣等、恨めしと思ふ心より、亡命なさんと思へども、その期の來らざるや、甲斐なき命長らへしも、僞り表裏の兵庫頭、よくも見えに來りしよな

ト思ひ入れ。

頼政　ホヽウ、いかにも阿闍梨、その恨みは理りながら、戒壇の儀は頼政が、再三奏聞せざるにあらね

ど、關白が邪魔あつて、今に於てお許しなければ、力及ばず、頼豪本意なく思さん事。君にもこれを憐れみ給ひ、卽ち今日御內意の御書。

ト懐中より綸旨を出し

謹しんで拜受あられよ。

ト頼豪、見て

頼豪 すりや、頼豪へ。

頼政 いかにも……イザ

ト綸旨を渡す。頼豪、思ひ入れあつて、これを開き、とつくりと見て

頼豪 寺門を長く輝やかさんと、戒壇こそ望みなれ、叡山あれば戒壇の、望みは決して許されずとの御內意。名聞冥理の僧位僧官、この身に受けて何かせん……我が宿望の叶はぬも、關白大臣が皆爲す業。恨めしきは、お側の大臣等。

ト思ひ入れ。

頼政 いかに頼豪。さほどに戒壇の望みあらば、某が計らふ旨あり。承引あるや。

ト頼豪、頼政を見て

賴豪　戒壇の望み足りなば

忠澄　承引あるとな。

賴政　ソレ、猪の早太、用意の品を

忠澄　畏まつてござりまする。

ト音樂になり、忠澄、經櫃の中より、結構なる蒔繪の懸け盤に、膳部取揃へたるを持つて來る。賴政、これへト思ひ入れ。忠澄、それはト思ひ入れ。賴政、はてト取つて、賴豪が前に据ゑる。賴豪、ヂロリと見て思ひ入れ。

賴政　戒壇の願ひ空しく、飲飲斷たれし賴豪阿闍梨。賴政が伺ふより、望み遂げんと思されなば、サ、淸淨のこの一飯。

ト賴豪、また眼を閉ぢて思ひ入れ。忠澄、これを見て

忠澄　源三位賴政が、手づから据ゑしその珍膳、早速賞翫あるべき筈を、目にもかけざる失禮慮外、斷食ゆゑに箸を持つ、力が無くば猪の早太が、ドレ、養つてでも、餘りと申せば。

ト立ちあがる。賴政、「コリヤ」と制す。

頼政　ハテ、扣へて居らぬか。

　　トこれにて忠澄、不請々々に扣へる。

　サヽ、頼豪、聞濟みあらば、干死を止まり、お箸召されい〳〵。

頼豪　そりや又、何ゆゑ。

　　ト頼政、頼豪が側へ來り

頼政　御身知らずや、平治の亂れに義朝討たれ、清盛、四海に威を振ひ、源家は斯くいふ頼政一人。何卒源氏の世になさんと、思ふ折から、玉倉の君の御頼み、ハッと了承しながらも、君の御身に一つの障り。その憂ひを除かんは、貴僧にあらで覺えなし、この儀に應ずるその時は、寺門の榮え戒壇の、望みはいと易かるべし。

忠澄　それゆゑにこそ、この膳部、お箸召されて、その身を全う、長生あつて年來の、望みを叶へ召されぬか。

頼豪　いやとよ早太、我が門徒の體たらく、三世諸佛の妙慮に叶ひ、易くも効驗ありながら、山門に向ふ法敵ゆゑ、望み空しく消え失せて、長くこの土に面を晒さん事、死後の妄念この上なし。思へば思へば口惜しい。

ト苦しみながら思ひ入れ。

頼政　サ、その宿望を叶ふるには、御身、玉倉君の守りとならば、多年の本懐、先祖へ孝養、今ぞ沙門の頼豪阿闍梨。胤は源家の爲義が忰。

ト懐中より白旗を出し

六孫王經基より、連綿とせし白旗を、世にひるがへす御心は無いか。

忠澄　還俗なくとも御主人の、詞を用ひ、斷食の、行法破つて生き延はり、君へ心を寄せられよ。

頼政　姿は墨をまとふとも、心は剛の天王丸。サヽ、聞入れあるや

兩人　なんと〳〵。

ト詰め寄せて思ひ入れ。

頼豪　イヽヤ、たとへいかほど勸むるとも、一度起せし我が大願、なに徒らに穀を食まんや。たゞ恨めしきは關白大臣。この身は鬼畜と生を變へ、我れに仇なす延暦寺の、經文、喰ひ盡さで置かうか

頼政　すりや、いかほどに

忠澄　勸むるとも

頼豪　思ひ定めし我が一念、今にぞしろし召されんや。

トよろ〳〵と立ちあがる。此うち以前の願山、出かゝりゐて、この時

願山　その白旗を

ト取りにかゝるを、頼政、突き廻して、グッと引きつける。頼豪、向うを見て

頼豪　エヽ、恨めしいなア。

ト思はず前なる懸け盤を蹴返す。ドロ〳〵にて、頼政忠澄、思ひ入れ。頼豪、ニッコリ

大願成就。

トばつたりと下にゐて、ウンと悶絶する。兩人、思ひ入れ。願山、振り切つて逃げ出す。忠澄、引ッ捕へ、膝に引敷く。頼豪、心附き、伸びあがつて、向うを見る。頼政、シヤンと白旗を懐中する。この途端よろしく

頼政　ハテ、固ましい。

ト思ひ入れ。三人、引張りの見得にて、ひやうし

幕

第一番目後の四建目　讃州松山の場

役名――大淵東馬。加川兵部。八栗銅內。河野伴藏。瀧口靫負常久。待宵の侍從。讃岐の宗徳

君。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、板松の並木。舞臺先に岩組み、崖の心。諸所に稻村。幕の内より常久、合羽、股引・大小、旅の形にて、大乘經の一卷を咬へ、黑四天、一本差しにて、御教書を持つてゐる東馬を引きとめてゐる。下の方に兵部、柿の筒袍、漁師にて、櫂へ大きなる魚籃を附けたるを擔ぎ、立ちかゝつてゐる。時の鐘、浪の音、バタ〳〵にて幕明く。

ト三人、ちよつと立廻りあつて

東馬　こりやお侍ひ、なんとするのだ。

常久　なんとするとは知れた事、身は京家の武士、瀧口靱負。この讃岐に諸用あつて、罷り越したるこの松山、只今其方と問答のうち、取落したは平家の御教書。いかなる事の申し文か、爰で身共が

兵部　イヽヤ、それよりやァお侍ひ、お身が持つてゐるその卷き物は、慥かにこの讃岐へ流された、宗德君の大乘經。

常久　なんと。

兵部　おいらがやうな漁師まで、必らず情をかけるなと、云ひつけてある宗德の君。

東馬　殊にその大乗經は、直筆とあれば、猶以て心を寄する紛れ侍ひ。

常久　オヽ、推量の上は宗德君へ、心を運ぶこの靱負、先づその御教書を

　　　ト立ち廻りに引ッたくり、兩人をちよつと留めながら、立て文を開き

ナニ〳〵「讃州松山へ配流なせし宗德の君、人知れず失ひ奉るに於ては、恩賞功によるべきなり。」

兩人　それを。

　　　トかゝるを突きのけ

常久　さてこそ。惡逆重なる、平家よりの申し文……能勢藏人どのに賴まれ、待宵さまをこの國へ、御供いたす船場にて、彼の御方を見失ひ、行くへ尋ぬる身なれども、先づそれよりはこの御教書、うぬらにやア渡されぬ。こりや、あのれらも、惡人どものの手先ぢやな。

東馬　知れた事、宗盛公の仰せをうけ、宗德君へ心を運ぶ奴ばらを、討ちとる手筈の大淵東馬。

兵部　加川兵部。マア大切なるその御教書、大乘經ともろともに、我れ〳〵兩人へ

兩人　渡すまいか。

常久　ハヽヽヽヽ。忠義一途の瀧口靱負。天命知らずの大淵加川、討ち放す。覺悟せい。

兩人　面倒な。

ト かゝる。

三人　どつこい。

ト これより鳴り物をかり、面白きタテちよつとあつて、トド兵部、御教書を取つて行かうとするを、常久、支へる。立廻つて、以前の魚籃の中へ打込むを東馬、持つて行かうとする。三人、摑み合ひになり、この魚籃を岩組みの蔭へ打込む。

兵部　ヤア〳〵、この崖の下は、屛風ヶ浦の磯續き。

東馬　宗德君の木の丸殿。

常久　ナニこの下が、君の御在所とや。

ト 立ちかゝつて飛ばうとするを、兩人、引きとめる。三人、立廻りしい〳〵、浪の音、カケリにて下座へ入る。右の鳴り物にて、この道具を引いて取る。

本舞臺、三間の間、上の方、浪の張り物を遠く見せ、裾通り三四尺、砂地の山。諸所に磯馴れ松。上の柱際に九尺の藁家、丸柱、竹椽、これに紅葉の蔦かつら絡み、うしろ山の張り物。下の柱際に立ち

樹、枝葉茂り、この枝に、以前の魚籃かゝりゐる。舞臺先に砂地を半分見せたる浪板。上下に岩組み下の方に苫船一艘繫ぎ、浪の音、右の鳴り物にて道具納まる。

ト大薩摩浄瑠璃。

〽それ、昔は月花の歡樂にほこり、今は配所に白浪の、あはれ讃岐の宗德君。

トこれにて御簾上がる。内に宗德君、誂らへの形にて、獨鈷を持ち、岩組みの經机に向ひ、行ひすましゐる。屋體の内に、いろ〳〵鳥獸の皮を掛けてある。

〽玉の姿も荒磯の、柴の扉も寂寞と、谺に響く勤行は、彼の天竺の婆羅門が、祈りの法に異ならず。

ト谺の合ひ方、浪の音。

宗德　臥しては秦の亂を遁がれ、起きては劉を安んずと、高山に世を遁がれし、四皓の身には引かへてさんぬる保元の亂れより、運拙なくも島守と、馴れし雲井も隔つれば、事とふものは浪の音、月日の經つも白雪の、積もるを冬、消ゆるを夏、春の若葉、秋の紅葉、心慰さむ敷島も……島といふ字の恨めしく、三十一文字の天爾波さへ、忘れ果てたる心にも、只忘れぬは故もなく、かゝる波濤に移されし、その無念やる時なく、歸洛の沙汰は願はいで、たとへこの身は魔道に入り、三

熱の苦しみありとも、天狗道の首領となり、我れに辛き都の輩、思ひ知らせん爲にこそ、行ひすますこの年月。望み足りぬも今暫し……アヽ、さりながら、未來の佛果を祈るこそ、人界の道なるに、魔道に導き給へとは、例し少なきこの身の願ひ。思へば無念な、成行きぢやなア。

トほろりと思ひ入れある。

〽おゝけなき、雲井の月を待宵の、侍從は君の御跡を。

ト合ひ方にて、花道より待宵、誂らへの形にて、赤子を懐へ入れ、市女笠、銀の杖にて出てくる。

〽慕ふ心を白峰や、誰が松山と聞くからは、浪越さじとも誓ひにし、飽かぬ別れのアヽ忘れ貝、今は形見の子安貝、いんのこ／＼と、ゆすりかけしや袖の露〽戀に焦れて行く道なれど、夢が惜しさに起きかねた、枕々〽心に諫め慰めつ、嬉しき閨の闇ならで、屛風が浦に着きにけり。

ト此うち宗德君、一心に經を念じゐる。待宵、いろ／＼あつて、本舞臺へ來り

待宵　濱千鳥、跡は都へ通へども、身は松山に慕ひ焦るゝ宗德君。命のうちに今一度、逢ひたい見たい御顏ばせの拜したく、情ある藏人どのを賴み、この地へ渡る船切手を貰ひうけ、瀧口靱負を伴ない、獨りさまよふこの道もせ。尋ぬるお方は松山の、麓とばかり、どこを當途も渚の小舟、寄る

べ定めぬ身の上ぢやなア。

ト此うち宗德君、聞き耳立て

宗德　訪ふ人稀れなる柴の扉に、聲するは、沖の鷗か、磯打つ浪か、誰れぢや〳〵。

待宵　エ。

ト驚ろきしこなし、思ひ入れあつて、赤子を隱さうと、あたりを見て、杉の木にかゝりし魚籃を見附け、幸ひといふ思ひ入れ。赤子をいぶりつけ、錦の小さき壺折にくるみ、この中へ隱す。

宗德　ハテ、心得ぬ。

ト合ひ方。合點のゆかぬ思ひ入れ。本調子の合ひ方になり、宗德君、靜かに屋體を下り、枝折り戸の側へ來り、待宵をヂツと見る。待宵、笠にて顏を覆ふ。

ムウ、此あたりには見馴れぬ女。そちや何者ぢや。

待宵　ハイ、妾ははるか都の者、この所へ參りましたは、後世を弔ふ四國遍路。行き暮らしたる、お宿の御無心。

宗德　ムウ、大師舊地の遍路とあれば、望みに任せ、一夜の宿りも致させたけれど、月は洩り、雨も洩る、住み荒したる草の庵、夜の衾もさながらに、獨り棲みには遠慮もあれば、氣の毒ながら

待宵　御尤も……さりながら、最前よりのお態度、お姿といひ、かゝる伏家に、お住ひなさるゝお方とも見受けませぬ。こりや、深い樣子が

宗徳　ヤ。

待宵　サア、夜とともお話し申したら、この身の願ひ……イヤサ、後世の便りのしるべ。簀子の端にも旅疲れを、暫し憩はん妾がお願ひ。

宗徳　ハテ、心あり氣な詞なれど、彼の遍照が歌の樣。あやなく仇の名にや立つべき。

待宵　すりや、どのやうに願うても

宗徳　斯く申さば、情知らずとさみなさんが、この身に深き願ひあつて、荒神を祀り、行法のうちなれば、女子を泊めては神慮の恐れ。

待宵　事を分けてのお詞を、無理にとも申されず、というて最早黄昏。こりやマア、どうしたらよからうぞいの。

ト當惑の思ひ入れ。薄ドロ〳〵にて、舞臺先の岩間へ、鶺鴒二つ出て飛びかふ。兩人、これを見て思ひ入れ。胡弓入り、六段の合ひ方になる。

宗徳　ハテ、面白き鶺鴒の囀りよな。唐土にては、兄弟離別の譬へに引く。

待宵　我が日の本は、女夫妹脊の戀教へ鳥。

宗徳　また唐歌に、斷腸の思ひを述べしは、我れが孤獨を慰さむ便りなるか。

待宵　尋ぬるお方に逢坂の、この鶺鴒の教へを受け、めぐり逢ふとの辻占か。

宗徳　哀別離苦の無常を示す、鳥の教へか。

待宵　何にもせよ。

ト思ひ入れあつて

あの鳥のやうに、女夫仲よう暮らしたら、さぞ嬉しい事でござりませうなア。

宗徳　サア、儘にならぬが浮世の習ひ。

待宵　すりや、今宵のお宿も

宗徳　男女別あり。

待宵　あの鶺鴒の、もしや戀とのお疑ひか。

宗徳　イヽヤ、人目のこの鶺鴒。

ト枝折り戸の戸をシヤンと閉す。この音に鶺鴒、飛び去る。

待宵　これは。

宗德　サア、餘所の見る目と、この身の願ひ。便なう思へど、隔ての垣根。

待宵　ハイ……是非に及ばぬ。ならぬとあるを、無理にとも、云ふに云はれぬこの場の仕儀。御縁もあらば

ト空を見て

アヽ、また時雨が降るさうな。

ト雨車の音。合ひ方變つて、待宵、いろ〳〵思ひ入れあつて、立ちあがる。

宗德　女中、暫らく。

待宵　御用でござりまするか。

ト宗德君、上の方の紅葉の枝を打ち折り、この枝を待宵にさしつける。

宗德　サア、袖振り合ふも他生の佛緣。一夜の宿はならずとも、せめて一樹の雨舍り。これは。

待宵　一河の流れと、人の行く末。

宗德　知らぬながらも、世は情。

待宵　暫しは晴らす

宗徳　旅の憂さ。

待宵　すりや、お許しなされて下さりますか。

宗徳　ゆるりと疲れを、休めて行かれい。

　　ト合ひ方になり、待宵、魚籃に思ひ入れあつて、杖と笠を枝折戸の側に置き、内へ入る。宗徳君、上の方に住ふ。

待宵　ヤレ〳〵嬉しや。雨の晴れ間をお借り申せば、また其うちには……見ますれば、外にお召仕へも見えませぬが、すりや、いよ〳〵お獨り棲みでござりまするかな。

宗徳　いかにも。獨來獨去と觀ずれば、松吹く風に聲もあり、柴の扉を音づれて、叩く水鷄を友として世に交はらぬ賢者の教へを……併し、合點のゆかぬは其方。女子の身すがら、四國遍路と、佛道に思ひ立たれしは、深い様子があつての事か。聞きたい〳〵。

待宵　サア、妾が佛に仕へまするも、戀より染まる法の道。

　　ト恥かしき思ひ入れ。

宗徳　ハヽヽヽヽ、煩惱は元菩提といへど、思案の外は善智識。殊に都の者とあれば懐かしい。歸る雁金、來る燕、空行く雲の足までも、都の方へ行く時は、戀しく思ふこの年月。懺悔に罪も消ゆ

るといへば、發心の初め終り、この場で話すも讃佛乘。サヽ、聞きたい〳〵。

待宵　サヽ、お話し申すも恥かしながら、雲井の上へお宮仕へ、致せし折から、尊ときお方に思はれ參らせ、互ひに通ふは心ばかり、折を待つ夜の月の御遊、その歌合せの褄戸の蔭、暗き迷ひにお情の胤を宿せし身の冥加。又の逢瀬を、待つにつれない嫉みをうけ、短かき契りのしるしぞと、人して賜はる一首の下の句。

ト懷より袱紗に包みし香包みを取出し

これ御覧じて下さりませ。

ト宗德君、取つて見て

宗德　われても末に逢はんとぞ思ふ。

待宵　その上の句が菩提の道、一首に連續いたしたさ、佛に仕へて居りますわいなア。

宗德　この上の句は、聞き及ぶ……瀨をはやみ、岩にせかるゝ瀧川の

待宵　われても末に

宗德　逢はんとぞ思ふ。

待宵　一首に連續せしからは、疑ふ方なき彼の君樣。お懷かしうござりまする。

宗德　待て、女。我れ古へは、姑射山に曇らぬ月を詠め、蓬萊宮の內に、四海の浪をすませしも、今は怪しげなる成れの果。榮華の夢は忘れぬ中に、ゆかりを持ちし覺えはないぞ。

ト取縋らうとするを、宗德君、突き退け

待宵　そりやお情なうござります。たとへお姿變るとも、心は變らぬ女子の道。最前お目にかゝりしより、慥かにそれとは悟れども、お情うけしも三日月の、影より薄き契りといひ、互ひに姿、心まで、變り果てたる配所のお住ひ。もしも恥らふお心より、そんならさうとお名乘りも、なされまいと、話しのうちに、一首の歌、われても末に逢はんとの、形見は嘘か、僞はりか、そりやお情なうござります〳〵……ムウ、たつて知らぬと御意なされば、まだ〳〵證據をお目にかけませう。

ト立つて、魚籃を下ろし、內より赤子を抱いてくる。

宗德　その幼な子を證據とは。

待宵　君のお胤、繁仁さまでござりまする。

宗德　アノ、それが

待宵　サア、和子樣を父上に、御對面させましたいと、泣きくらしたる今日の今、お目にかゝるは、御

親子の緣深きしるし。サア、とつくりと、御覽じて下さりませ。

ト赤子を突きつける。宗德君、ホロリとして、思ひ直して突きのけ

宗德　我れ都に在りし時、情をかけし女子なければ、子を持つ覺え更になし。いらざる事に隙取らずと最早この場を立歸れ。

待宵　これ程までに申しまするに、お名乘りないとは、お胴慾でござります。私しばかりなら、お心强いも無理ならねど、この和子樣に、御愛情はござりませぬか。女子の身空に海山越え、親の名所の外ならで、聞きも及ばぬ西の空、荒くれ武士の警固を忍び、お目にかゝつて嬉しやと、思ふに甲斐も情ない、お心强う歸れとは、モシ、和子樣を、おいつくしみはござりませぬか。

宗德　いやとよ、我れも木石ならねば、親子の愛情、思はぬにてはなけれども、さすらへの初めより、心中に大願を起し、執着を斷ち切つて、神に祈誓をかけたれば、それと知つても、名乘らぬ〳〵とつとゝ連れて、立歸れ。

ト振り切つて、ツイと屋體の上へ上がる。

待宵　すりや、親子の名乘り遊ばしては、御願望の妨げゆゑ

宗德　不便あまりて名乘らぬ親子。

待宵　一世の別れと譬へしは
宗德　二度と歸らぬ死別れ。
待宵　それにもまさる。
宗德　現世の別れ。
待宵　どうぞ一言。
宗德　未練な事を。

ト、チヨンと御簾下りる。

待宵　ハアヽ。

トいろ〳〵思ひ入れあつて

我が子ながらも尊き御身、御大切に守り育て、まめしげなお姿をお目にかけなば、せめて配所の憂晴らし、お喜び遊ばさうと思ひの外、御願望の妨げと、むごいつれない宗德の君樣。賤しい腹に宿しても、あなたのお胤ぢやござりませぬか。あんまりぢや、お胴慾でござりますわいなア。

ト赤子を抱きあげ、泣き伏す。浪の音、時の鐘、バタ〳〵にて、向うより常久、以前の形、拔刀にて走り出て來り、跡を見返り〳〵

常久　惡者めらは、やう〳〵と切り拔けたが、心ならぬは君の身の上。御在所は、彼の庵室。

ト舞臺へ來り

ヤア〳〵、宗德の君さまには、庵室に座しますや。

トこれにて待宵、起きあがり

待宵　ヤア、其方は瀧口常久ならずや。

常久　さう仰しやるは、待宵さま。

待宵　其方を船場で見失ひ、そこよ爰よとさまよふうち、思はず君のこの庵へ。

常久　お越しあるとは露知らず、お跡を尋ねる其うちに、惡者どもに出ッ會し、思はぬ遲參、さりながら、あなたも御身に恙なう。

待宵　其方も無事で

常久　先づは大慶。早速ながら、この程の心盡し、お願ひの通り、御親子御夫婦の御對面、遊ばしたでござりませうな。

待宵　サア、その心盡しの甲斐もなう、御願望の妨げとて、尋ねて來たは我が子かと、只一言のお詞も荒々しうお怒りにて、御庵室へ御入りあれば、もうお目見得も叶ふまいと、嘆きを重ねし折から

常久　折を見合せ、今一應、願うてたも。

常久　お氣遣ひなされまするな。この地へ御供いたせしも、あなたに附きそふばかりでなく、外に申しあげたき儀、あつて參りしなれど、折惡しければ、お怒りも增す道理。何にも致せ、暫しのうちこの所を立去つて、樣子を窺ひ、拙者が參りし都の仔細、申しあぐるその尾に附き、とも〴〵お願ひあらせられませう。

待宵　そんならよきに、瀧口覩負。

常久　待宵さま。

待宵　おぢや。

常久　ハツ。

ト浪の音、合ひ方になり、待宵、赤子を抱き、常久附いて下座へ入る。下の方、バツタリと音して、本神樂になり、笘船の內より銅內、四天の形にて窺ひ出で、あたりを見廻し

銅內　太政入道清盛公の仰せをうけ、この讃州に配所の宗德君、人知れず失ひ奉れと、役目を蒙むる八栗銅內、あの苫に忍び、爰までは窺ひ寄つたが、なか〳〵一人の手ではゆくまい。手にあまらば共々に、力を添へよと、かねてこの國の野武士どもに云ひつけ置いたが、まさかの手筈。

ト礫を打つ。始終、本神樂にて、下座より伴藏、同じく四天にて、赤子を抱へ、出てくる。

伴藏　八栗銅內。
銅內　河野伴藏。して、その赤子は。
伴藏　これこそ宗德君の落胤繁仁。今日、待宵の侍從めが、連れてうせたを人知れず、浚つて來たは、何ぞの役に立てよう爲。
銅內　出來た。宗德君を自滅さすには、屈竟一。
伴藏　何かの事は、あの松蔭で。
銅內　合點だ。

ト行かうとする。後へ常久出て

常久　待て。後で樣子を逐一聞けば、淸盛の指圖を受け、宗德君を弑し奉らんとは、天罰知らぬ人畜め。まだその上に若君まで、いづ方へ連れて行く。覿面に渡して、覺悟せい。
伴藏　小癪な。配所の宗德君に心を運ぶ馬鹿侍ひ。この若君は、手出しをさせぬ血筋の品玉。
銅內　われも邪魔をするが最後、この子を目の前で捻り殺すぞ。
常久　ヤレ早まるな。滅多な事せまいぞ。

作藏　若君を助けたくば、そこ退いて、宗德君を討つ手引きをするか。
常久　サア、それは。
兩人　サア〳〵。どうだ。
常久　ホイ。若君を虜にされしばかり、惡人どもに、手出しもならぬか、エヽ、殘念な。
トロ惜しき思ひ入れ。この時、御簾の内より「エイ」と聲して、手裏劍。赤子に立つ。三人、愕りして
ヤヽ、この手裏劍は。
兩人　慥かに御簾の
ト行かうとするを常久とめる。立廻りに兩人、常久をちよつと當て、赤子を置いて下座へ走り入る。常久、直ぐに心附き、赤子を抱きあげ
常久　大切なる若君を、弑せしは何者。何にもせよ、待宵さま〳〵。
ト下座より待宵、走り出て、これを見て
待宵　ヤア〳〵、こりや若君を、何者が手にかけしぞ。こりやマアどうせう、どうせうぞいなう。
常久　ヤア、待宵さま、只今これへ都より、討手の曲者、こは御大事と支ふるうち、若君には思はぬ手

裏劍……待宵さま。

待宵　靱負……口惜しいわいの。

常久　オヽ、御尤もぢや。御尤もでござりますわいの。

待宵　こりやマアどうせう、なんとしたらよからうぞいなう。

ト泣き落す。竹笛の合ひ方になり、御簾上がる。内に宗徳君、立つてゐて

宗徳　嘆くな待宵。繁仁は、斯くいふ麿が、手にかけしぞ。

兩人　エヽ。

宗徳　さぞや恨みと思はんが、我れ配流の無念やむ時なく、天竺の婆羅門が例しに習ひ、魔界に入つて天下を亂し、平家の一門に恨みを晴らさんと、梵天帝釋へ誓ひをかけ、その犠牲に、可哀や和子を……アヽ、尊きも賤しきも、因果はめぐる車の輪、親子と名乘れば、我が手にかけねば、大願の道立たず。それゆゑつれなく當りしは、我が子の命助けたさ、わざとつれなくあしらひしが、惡人輩が虜となし、我れに憂き目を見せん結構。とても叶はぬ命と悟り、我が手にかけしは願望成就、幼なけれども父への孝道、エヽ、出かしたなア。

待宵　エヽ、すりや我が君には、魔道に入り、お恨みお晴らしあらんとな。

宗徳　云ふにや及ぶ。

　　トこの時、遠寄せになる。皆々、キッと思ひ入れ。

　ハテ、心得ぬあの貝鉦。去ぬる保元の亂に、都で聞きし寄せ太鼓を、この配所にて打ち立つるは

　　ト思ひ入れ。

常久　あれこそ當國の在長、八栗銅内、都よりの使ひとして、君に危害を加へんと、人數を集むる知らせならん。證據は淸盛の下し文。最前、慥かにこの中へ

　　ト以前の魚籃の中より御教書を取つて來り、宗徳君に差出す。宗徳君、キッと見て

宗徳　斯くまで辛きその上に、又も麿を失はんとは、みな淸盛が指圖よなア。

常久　それのみならず先達て、都近き靈場へ納めよと、仰せ越されし大乘經、讒者の支へに置く事叶はず、追ひ返されてござりまする。

　　ト經文を出す。

宗徳　重ね〴〵、我れに辛き都の奴ばら。この上は、待宵、その經文を都へ持參し、情ある賴政へ賴み我が存念を遂げさせよ。

待宵　ぢやと申して、君と我が子に引別れ、都の月花、見られませうか。

宗德　愚かや、我れは人界の、交りを斷ちし上は、磨に構はず、疾く〳〵行け。
待宵　イエ〳〵、妾は御先途を
宗德　然らば常久、其方、早く。
常久　すりや、この大乘經を。
宗德　使ひの役目、申しつけたぞ。
常久　ハツ。

ト行かうとする。後へ東馬、兵部、四天の形にて、銅內、伴藏、附き、出て來り

四人　動くな。
常久　わりやア何とする。
東馬　何とするとは知れた事。追ひ返された大乘經、又ぞろ都へ持參する、靫負をはじめ待宵まで、打つて取るワ。
四人　やらぬワ。
常久　小癪な。
宗德　我れは魔道に入りつるとも、せめては書寫の大乘經、都の地に止めんとの、存念を妨ぐるのみ

ならず、我れを失はんとの結構、重ね〴〵の恨みの炎、今こそ千日の滿願成就、思ひ知らさん、
思ひ知れ。

ト鐘の音。ノットになる。

大薩摩〽怒りの御顔朱をさす如く、祕文と口呪をくりかけ〳〵、祈り祈れば忽ちに、吹きくる早手の天狗風、大地を飛ばす砂と共に、魔界に入りしその形相、不思議にも又恐ろしき

ト此うち捕り手を、常久と待宵、支へてゐる。宗德君、經文を念じ、經机を捧げると、大ドロ〳〵、引拔きにて、天狗の姿になる。

待宵　ヤア、我が君樣の

常久　此お姿は。

宗德　今こそ願望成就の上は、たとへいかほど取卷くとも、通力自在の、しるしを見せん。

待宵　妾は和子の死出三途、共に冥土へ。おさらば。

ト苫船の錨を身にまとひ、海へ飛びこむ。

常久　ヤア、待宵さまも

宗德　嘆くな。やがて恨みは、晴らしてくれうワ。

常久　然らば拙者は、此まゝ都へ。

皆々　うぬをやつちやァ

ト かゝらうとするを、宗德君、術を以て、一度に中返りさせる。

常久　これは。

宗德　いそふれ、常久。

常久　おさらば。

ト 早三重にて常久、經文を持ち、一散に向うへ走り入る。

伴藏　ャア、何ほどの事やあらん。者ども、ソレ。

皆々　やらぬワ。

ト 皆々かゝる。これより大ドロ〴〵、大太鼓入りの鳴り物にて、連理引きのタテ、いろ〳〵あつて、ト ヾ銅内、伴藏、兵部を仕掛け物にて殺し、東馬を抱へて杉の木へ登る。これにて舞臺の道具屋體、木立、段々にせり下げ、杉の木の梢、屋體の屋根ばかりになる。前の浪板、打返しにて霞になる。宗德君は東馬を抱へしまゝ、筋かひの中乘りあつて、よき程にとまり

宗德　見よ〳〵、平家に、目にもの見せん……ムヽ、ハヽヽヽヽ。

トよろしき見得にて　　幕

第一番目　五建目　　頼政館の場

役名――頼豪阿闍梨。猪の忠太忠澄。淡路島の海女、小磯。頼政妻、菖蒲の前。忠澄妹、巻絹。下部、音平實ハ能勢藏人滿貞。頼長息女、千束姫實ハ玉倉の君。楯の七郎。芝野文藏。三井寺の所化、願山。武藏左衞門有國。奴、灘平。源三位頼政。

本舞臺、三間の間、黒塗り鍍金の金物、高欄附きの御簾御殿、欄間蹴込み、結構に仕立て、上下に紅梅、下の方、網代塀。二重舞臺に經机を飾り、上の柱に時計を掛けてあり、幕の内より高二重に、菖蒲の前、着流しの上に狩衣、立烏帽子にて、弓矢を掻いこみ、松明を振りあげ、立ち身。平舞臺に千束姫、着流しの上へ半素袍の上を引ッかけ、懸け烏帽子、九寸五分を逆手に持ち、頼政早太の見得。早き序の舞にて幕明く。

トこの幕明きにかむせて鵺の謠。

ウタヒ〽さても頼政、思はざる宣旨を蒙むり、二重の狩衣に、重籐の弓持ちて、頼みたる郎黨

には、遠江の國の住人、猪の早太、只一人ぞ召し具したり、

トこれよりコイアイになる。

菖蒲　物の數にはあらねども、この度君の御惱によつて、源の賴政、化鳥退治いたせよと、宣旨を蒙むり、今宵內裏を宿直の役。

千束　斯くいふ忠澄、お供に附き添ふ上からは

菖蒲　たとへいかなる

千束　變化なりとも

菖蒲　射落さいで

兩人　置かうか。

トきつと見上げる。

〽不思議や更けゆく月の影〳〵、光りを增すかと見えけるが、東三條の森の方より、黑雲一むら飛び來り、御殿の上にぞかゝりける。

トこの謠にて、上の梅の木へ振り出しにて、音平、誂らへの奴、虎の皮の半襟、萠黃の帶にて、猿の面を手に持ち、現はれ出で、舞臺の兩人を見て、面をかぶり、窺ふ。菖蒲の前、千束姫も、音平をキツ

と見上げて

菖蒲　さてこそ變化、ござんなれ。

千束　アレ、頭は猿、尾は蛇。

菖蒲　足手は虎の如くなるが

千束　啼く聲、鵺に、さも似たり。

〽尖り矢つがひて射通され、眞逆さまに落ちけるを、猪の早太つと寄つて、一刀二刀、九刀ぞ差しとめければ、譽めぬ人こそなかりけれ。

ト此うち菖蒲の前、一通を結びし矢を、音平に射かける。音平、この矢を掴み、早ぶさにて下りて來り、逃げようとする。立廻りに千束姫、抱きつかうとする。和らかな立廻り。ト、音平を倒し、寄り添ふ。謠、切れる。

菖蒲　オヽ、化鳥退治、出來た〳〵。

ト奥より卷絹、外に腰元三人。文藏、上下にて、めい〳〵燭臺を持ち、バラ〳〵と出て來り

卷絹　奥樣、今日の御祝儀

皆々　おめでたう存じます。

ト皆々辭儀する。

音平　アヽ、モシ〳〵、この奴めは、御當家へ今參りの今朝、あの腰元衆が申されまするには、奥樣の仰せつけ、奴の襟は古來から、虎斑に極まつたものぢやほどに、わが身その看板を着て、猿の面をかぶつて、御殿へ忍び、お上からの仰せ渡さるゝ事があると、無理無體に仰せつけられましたゆゑ、あの梅の木から推參いたして見れば、何ぢややら、矢を射かけるやら、取つて押へるやらこりやマア、どういふ事でござりまするな。

菖蒲　ほんに、譯を云はねば、不審は尤も。夫賴政どのは、さる頃內裏にて、鵺を射とめしより、次第に御立身、いはゞ當家の吉瑞とあつて

千束　毎年今日、鵺祭りの神事。ありし內裏を其まゝに、まツ斯う致すのが吉例とやら。

卷絹　去年までは殿樣、猪の早太どのは、面々持ち前の、お役をお勤めなされたが

文藏　今年は六波羅の御用繁く、それゆゑ奥樣、お姬樣が御名代。鵺の役もこの跡までは、お臺所の鍋右衞門が勤めたれど

腰一　國へ行かれて、それで、急の代りを、音平どの、其方に仰せつけられたのぢやわいの。

腰二　これもお家の吉例、鵺祭りの

女四　御祝儀ぢやわいなう。

音平　したり、それで樣子は知れましてござりまするが、合點の參りませぬは、猪の早太どのゝお役なら、鵺になつた奴めを、ひどい目におあはせなさるであらうと思ひの外、ありやマアどういふ

ト千束姫を見る。

千束　サア、それは。

ト恥かしきこなし。

菖蒲　ア丶コレ、その譯は、最前射かけたその矢文。

ト音平、矢を結んである文を取り、開き見て

音平　ヤア、こりやお姫樣が、奴めへの艶書。

菖蒲　サア、緣でがな、奉公におぢやつてより、殊なう千束さまのお氣に入り。何事によらず、御用を聞いてあげてたもひなう。

音平　お氣に入りましたのは、マア、有り難うござりまするが、お姫樣は、このお屋敷の、お方とも見えませぬな。

菖蒲　あなたは宇治左大臣賴長さまの御息女。故あつて當家へお預かり申せし、大切なる御方。それゆ

ゐ夫頼政どのも、何事によらず、お心任せにせよと、皆申しつかつてゐるわいなう。

音平　すりや、承り及びました、頼長卿の御息女。

ト思ひ入れ。

巻絹　サア、千束さまといふお名の通り、心の丈を散らし書で、大橋流と思し召しても、石川流のきつい堅蔵。

腰三　手跡も顔も美しいから、思ひついての今日の役目。

腰二　忌味はさる

文蔵　尾は口ぼそ。

腰一　手足はどらの如くにて

文蔵　啼く聲ぬれに、さも似たり。

巻絹　ほんに、あんな鵺なら、こちらも九刀

女四　刺されたいわいなア。

千束　又そんな事云やると、ききやせぬぞや。

トぴんとする。

巻絹　ほんに、お姫様は、音平どのゝ側へ、女子の寄るは、きついお嫌ひ。
女四　御免なされて下さりませ。
文藏　ハヽア、そんなら、姫君には、音平が側へ、女を寄せる事はお嫌ひか。道理こそ、あれが御奉公に來ると、好い女は皆お暇。ハテ、きついお燒でござりまするな。
菖蒲　コリヤ〳〵、又そんな事を……千束さま、必らずお心におかけ遊ばすなえ。
千束　ぢやというて、いろ〳〵な事を。

ト腹立てる。

菖蒲　それ見やつたか。アヽコレ、なんぞ御機嫌の直る、お慰みがありさうなものぢやがなア。

トばた〳〵にて、向うより七郎、上下衣裳にて、走り出て來り、直ぐに舞臺へ來て

七郎　奥様へ申しあげます。只今、御門前へ、珍らしき女商人、謳ひかなでまするが、姫君のお慰みにこれへ呼び入れませうか。
菖蒲　ナニ、珍らしい女商人が參りしとな。
文藏　アヽコレ、七郎どの、それも美しい女だと、姫君の又御機嫌が
七郎　ハテ、そりや存じて居るこの七郎。なんの事はない、天の岩戶の鈿女の命といふ代物でござる。

菖蒲　そりやよからう。早う、これへと云や〳〵。

七郎　ハツ。

　　ト花道へ向ひ

ヤア、それに扣へさせた女商人、奥様のお召し、急いでこれへ。

　　ト向うにて

小磯　ハア。

　　ト次第になり、花道より小磯、誂らへの面、厚板の壺折やうの物を着て、手の附いた葛桶を提げ、中啓を持ち、出て來り、直ぐに舞臺へ來る。次第、打上げる。

斯樣に候ふものは、都の町へ御披露願ふ女にて候ふ。商ふ物を召され候へ。

七郎　ヤア、大分雲上に云ひ出したが、マア、その賣り物は、どんな物だ。

小磯　サア、陸奥山に梅忠が咲く。

文藏　ハヽア、謎でやりかけるな。陸奥山は黄金、梅忠は鍔。ハヽア、金鍔。そんなら、口取りだな。

七郎　オツト、その「美面より」なら、さぞ馬道であらうから、買うてやらうほどに、なんなりと、覺えた振りが

皆々　所望だ〳〵。

小磯　姿こそ、深山の草木見るかげも、心の花の香に匂ふらん。

トこれより小磯、誂らへの所作よろしくあつて納まると、直ぐに七郎文藏「うぬ」とちよつとかゝる。立廻り。小磯の上着脱げ、面取れると、やつし腰蓑の海女の形になる。皆々、愕りして

菖蒲　ヤア、今の女子が

皆々　この姿は。

文藏　さてこそ胡散と思ひしゆゑ、引ツ剝いで見りやア、こりやアお福の面。

七郎　御本地美しい辨財天、江の島にも、こんな海女は無いが、うぬはマア、どこから來た女めだ。

小磯　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。私しは、遙か遠い淡路島の、賤しい海女。樣子あつてこの都へ、參りましたものでござりますわいなア。

菖蒲　そのマア海女が、何ゆゑ今のやうな、姿に成つてゐやつたぞいの。

小磯　サア、此お屋敷へ、お願ひ申せば、何事もお聞屆け下さる、お情深いを聞いて。

文藏　その願ひとは、なんだ。

小磯　サア、それはどうも

七郎　云はれぬとは、怪しい女め。有やうに吐かさぬと、うぬ、ひどい目にあはせるぞよ。

ト引立てる、立廻りに小磯、懐より、袱紗に包みし蛤貝の片々を落す。七郎、ちやつと取上げ

こりやアなんだ。妹といふ字を一字書いた、蛤貝の片々。

小磯　アヽ、それを。

ト取りにかゝるを、此方へ持ちかへ

七郎　待て。貝合せの貝かと思へば、それにはあらぬ、この片々、云はにやア、これを打ち砕くぞ。

小磯　アヽモシ、そりや私しが、命にも代へぬ大事の物。どうぞお返しなされて下さりませ。

七郎　さう大事にするほど猶怪しい。こりやアおれが

ト懐へ入れようとするを、最前より音平、この貝と小磯へ目を附けゐて、この時、中へ入り、この貝を取つて小磯にやる。七郎、ムツとして

エヽ、奴め。わりやア、なぜ邪魔をする。

音平　イヤ、邪魔は致さぬが、見ましたところが、まだ年端もゆかぬ、殊に邊鄙の生れといひ、さしてもない貝ぐらゐ。こりや物和らかに、樣子を聞いておやりなさるが、お慈悲でござりませう。

文藏　イヽヤ、さうでない。殿には出仕のお留守といひ、われは奴の役だ。この女めを追ひ返せ。

音平　ぢやと申して、それはあまり不便

文藏　ハテ、大分贔屓をする奴め。わりやァこの女郎めに、氣でもあるか。

音平　イヤ、全く

七郎　そんなら、キリ〳〵、六尺棒で、叩き返せ。

音平　ようござります。奴奉公の不肖、叩き返しませうが、さて愛嬌の無い。道理で常住、振られて歸る。

ト此方へ來て

サア、女中、いま聞く通りの仕儀。おれはひどくする氣は無いが、奴の役目、せう事がない。サア、立たつしやい。

小磯　さう仰しやれば、外にお願ひ申しやうもござりませぬが……心を盡して、參りました甲斐もなうどうでも歸らにやなりませぬかいなァ。

音平　野暮と生醉ひには、どこでも困るよ。

文藏　まだウヂ〳〵するか。早く叩き返さないか。

音平　ハイ、叩き返します〳〵。

小磯　そんなら、どうでも

音平　下がれ〳〵。

トてんつゝになり、音平、下の方より六尺棒を持つて來り、小磯を追ひ返す。小磯、上着と面を持ち花道へかゝると、向うにて

呼び　殿のお歸り。

ト呼ぶ。太鼓、謠になり、頼政、上下、大小にて出て來り、跡より灘平、奴にて、三方に錫の神酒徳利を載せて、持つて出て來り、花道にて摺れちがひ

頼政　コリヤ〳〵、待て。そちや下部音平。その女子は。

音平　ハツ、それはお旦那。この女は、何やら御當家へお願ひの筋あると申し、慥か生國は淡路島。哀れも御存じない、御家中方の仰せを受け、只今御門前へ。

頼政　イヤ、追ひ返すに及ばぬ。身が屋敷へ、願ひの旨とあらば、水の淡路に追ひやるも不便。殊に、生國が床しい。屋敷へ泊め置いて、仔細を聞いて遣すも武士の情。

灘平　イカサマ、其お情深いお屋敷に、御奉公が致したさ。はる〳〵罷つたこの奴。惡いところも御贔屓で、大目に御覽次郎三とは、ハテ、甘口な口合ひも、お免しなされて下りの灘平、よいお旦那

を取つたと思やれ。

小磯　そんなら、あなたがお殿様で、私しが願ひも

　　ト此うち小磯の持つてゐる壺折に目をつけ

頼政　折を見合せ、聞いて取らさうが、其方が持参の、この品は。

　　ト上着と面を取つて見る。

小磯　モシ、それは、わたしが親の形見。

頼政　ムウ、この二品を形見とあらば、身が預かつて、いよ〳〵後方。

音平　然らばそれまで、この女子は

頼政　茶の間へ召しつれ、扣へさせい。

音平　左様なれば、旦那様。

頼政　音平、用あらば呼ぶ。行け〳〵。

音平　ハツ。

　　ト管絃になり、頼政、二品を持ち、皆々附いて本舞臺へ來り、音平は小磯を連れ、辭儀をして下座へ入る。

菖蒲　我が夫には、お早うお下がり
皆々　遊ばしましたなア。
頼政　六波羅へ出仕の次手、今日の吉例、氏神へ供への神酒、持参いたさせ、只今歸邸。姫君には、御機嫌よろしう、大慶に存じまする。
千束　頼政どの、改め云ふには及ばねど、自らを預かり、殊ない世話。過分なわいなう。
頼政　なんの〳〵。御父頼長公には、莫大の御恩を蒙むりましたる拙者、いかやうなる御介抱仕りましても……イヤ、此やうに云うては、お氣が詰まる。コリヤ〳〵、女子ども、今日も、お心任せに、お宮仕へ申したか。
菖蒲　そりやモウ、お前の云ひつけゆゑ、十種香、詩歌、亂舞、千束さまのお氣任せ。
ト云ふを取合はず
頼政　コリヤ、女子ども、申しつけ置いた、鵺祭りの吉例は。
菖蒲　サア、その鵺の靈魂を、鎭めます大般若も、あの如く飾り、また吉例も、これまでお前がお勤めなされしを、家中の者に勤めさすも氣がゝり。幸ひ、姫君のお慰みがてら、わたしがお前の名代千束さまは早太の代り。鵺の役は下部の音平。それは〳〵、お氣に入つて

賴政　コレ〳〵、奥、そちや身が目通りを遠ざけ置いたが、誰れが許して罷り出た。

菖蒲　エヽ。

ト思ひ入れ。

賴政　慮外な奴。すさり居らう。

ト叱りつける。菖蒲の前、ハッと思ひ入れ。

灘平　イヤ、憚りながら、はるか下様の下郎なぞが、上々様の御夫婦合ひ、存じた儀ではござりませぬが、御奉公に上がつた節より、心附けて見受けますれば、第一あなたを御大切、奥向きのお取締りといひ、御所のお歸りが遲うても御案じ。あまりな事で、五條へお遊びの夜でも、お身に災難のないやうにと、神佛へ御願がけ。それほど御貞女な奥様を、何が又お氣に入らいで

賴政　イヤ、古臭いのが鼻につき、嫌になつたのぢや。

菖蒲　エヽ。

賴政　ハテ、下々で云ふ、女房と持佛は、新らしい事〳〵。

ト菖蒲の前、ムッとして、賴政へ摺りより

菖蒲　モシ、そんなら、わたしを、離縁なさるゝお心かいなア。

トちよつと泣き

そりやハヤ、古うなれば嫌がるは、殿御の習ひなれど、去らるゝ覺えはござりませぬ。殊に、女夫になる初めは、勿體なくも君様の

頼政　そりや云はいでも知れてある。化鳥を射とめし賞とあつて、獅子王の御劍に、添へて賜はる官女菖蒲。

菖蒲　その時、上にも、頼政が心引き見んと

千束　數多の官女を出されしに

灘平　鳴り響きたる旦那の御秀歌。

頼政　五月雨に、池の眞菰の水越えて

千束　いづれ菖蒲と

菖蒲　引きぞわづらふ。

頼政　サア、その下の句の、七文字が暇のしるし。

菖蒲　ムウ。引きぞわづらふ七文字が、暇のしるしとわえ。

頼政　謎の心を、思案せいサ。

菖蒲　でも、今といふては

灘平　サア、御判斷の出來るまでは

頼政　奧とは云はさぬ。腰元なみ。

千束　それではどうやら。

菖蒲　ハテ、殿樣の仰せつけ。菖蒲とは腰元に、丁度よい名でござりますわいなア。

トほろりと思ひ入れある。

頼政　オヽ、腰元々々。ソレ、姫君を、奧へ御供。

菖蒲　ハイ〳〵、畏まりました。

千束　そんなら、頼政どの、自らは、奧へ行きますぞや。

菖蒲　ほんに、我が身の事から、氣が附かなんだ。おひもじからう。御膳番、御膳の用意。

頼政　そちや構ふな。腰元でないか。

菖蒲　ほんに、御免なされて下さりませ。

灘平　然らば、お女中方は、姫君と御一緒に。下郎は休息いたしませう。

皆々　左樣なら、姫君樣。

千束　頼政どの。

菖蒲　ほんに、小姓の主水が、お茶碗を割つたお詫びを

　ト頼政の額を見る。

頼政　また腰元を忘れたか。

菖蒲　ハイ〳〵。ドレ、お姫様のお供を致しませうか。

　ト唄になり、菖蒲、思ひ入れ。一件殘らず奥へ入る。頼政一人殘り、思ひ入れあつて

頼政　源平兩家は朝廷の翼の臣、あへて劣り優りは無けれども、計らず淸盛、時を得て、官位昇進。無念ながらも、彼れが政事に從ふうち、此ほど宗盛、我れを招き、さいつ頃三井寺へ、淸盛奉納の額へ、矢の根を打ちこみ、破却せしは、平家を調伏。その矢の根は、身が家に傳はる水破とあつて、某へ疑念。この矢の根は、かねてアノ

　ト奥へ思ひ入れあつて

搗てゝ加へて預かりの、靈猫の香爐紛失……玉倉の君を世に立てんと、時節を窺ふ折といひ、心ならざる危難ぢやなア。

　ト思ひ入れ。バッタリ音して、本神樂になり、下の方の網代塀を切り破り、有國、やつし一本差し

頬かむり、白刃を振つて出てくる。頼政、これを見て、一つの燭臺へ、そこにある素袍をかむせ、殘りの燭臺は吹き消し、窺ふ。有國、あたりを見廻し、白刃を納め、ニツコリして、奥へ忍びこまうとするを、頼政とめる。始終、本神樂にて、兩人、ちよつと烈しき立廻りあつて、トゞ頼政、有國の裾を掻き、拔きかけるを留める。途端に燭臺の素袍取れて、互ひに顏見合せ、悔りし

有國　ヤア、頼政か。

頼政　そちや左衞門有國

有國　南無三。

ト逃げようとするを、また立廻りにて留め

頼政　待つた。賤しい姿に樣を變へ、忍びこんだは、人の寶を我が物に、綠の林か白浪か。いかなる企みぞ。白狀しやれサ。

有國　サア、平家執頭の有國も、浪人して斯くの姿。活計が無さに緣を求め、合力が受けたさに。

頼政　ヤア。

有國　いやサ、妹の菖蒲の前を、合力してもらひたい。

頼政　なんと。

ト合ひ方になり、有國、摺りより

有國　改め云ふには及ばねど、こなたの妻の菖蒲の前は、この有國が妹。幼ない時、醒ヶ井中將どのを假親して御所奉公。緣でがな大君より、こなたへ下され、仲よく暮らすこの年月。兄の身にとつては、嬉しかるまいか。ところに、この程噂に聞けば、妹に飽きが來て、離緣の、去るのと、目通りまで遠ざけあると、耳へ入つては、案じまい事か。たつた一人の妹、そんな辛い所へ置かうより、別れさするとも、据ゑるとも、妹が胸を聞きたさに、忍ひこんだるこなたの屋敷。なぜ氣に入らぬ事があるなら、身共を呼んで、斯う〳〵と、强意見をさせてなりと、添うてやつては下されぬ。こなたの腹立ち、何もかも合力してもらひたさ。姿を變へて入込んだ。歌を詠むばかりが、コレ、情とは云はぬわいの。

頼政　ムウ。すりや、奥の菖蒲が不便さに

有國　妹が胸を聞かうと思つて。

頼政　イヽヤ、その胸ではあるまい。

有國　ヤ。

頼政　宗盛の間者であらうが。

有國　なんと。

賴政　いま爭ふ其うちに、落ちたる一通。

　　　ト書狀を片手に開き

ナニ〳〵……其方に申し遣はす三箇條、賴政館へ忍び入り、所存を探り、是非の判明、申しつくべく候ふ。

有國　ムウ。

　　　ト思ひ入れあつて

その御内書を見られたからは、いかにも、宗盛公の御諚。ソレ、者ども。

侍ひ　ハッ。

　　　ト下座より黑四天の侍ひ四人、弓矢を番ひ、バラ〳〵と出て

動くな。

　　　ト賴政を取卷く。

賴政　こりや、何とおしやる。

　　　ト有國、侍ひより刀を取つて差し、床几に扣へる。

有國　先達て申し達せし如く、三井寺へ奉納の額を、破却なせしは貴殿の矢の根。これ平家を調伏と、入道どのゝ疑ひ。まつた、さいつ頃より玉倉の君行くへ知れず。若し御貴殿預かり置かれる、頼長の娘、千束姫こと、君を忍ばす手段かと、二つの疑ひ。第三ヶ條は重盛公、唐土育王山へ、砂金三千兩、贈られしその返報に、宋の孝宗帝より送られし、猫に五ツの德ありと、黄金を以て鑄られし、靈猫と名けし香爐、その時渡海の奉行たる、其許に預け置かれしを、受取り來れ、若し違背に及びなば、卽座に糺明と、まッこの如く、家來引連れ忍びの入來。

頼政　ハテ、仰々しき宗盛どのゝ指圖。當時、幕下たるこの頼政、三ヶ條も四ヶ條も、何しに違背いたさんや。用心過ぎるも、却つて武威の輕き道理。

有國　その詞聞く上は、家來ども、持參の品、これへ直し、其方どもは門外へ。

侍ひ　ハッ。

ト下座より半琴の箱を持つて來て、頼政の前へ直し、侍ひは向うへ走り入る。

頼政　この品は。

有國　頼政、異心無きなれば、流るゝ川の澱みなく、水に譬へし十三絃、琴を以て糺すも、和らぐ文字のその和琴。

賴政　心あり氣なこの一品。三ヶ條のうち、預かり置く千束姫を、お疑ひ。この儀は決して、賴政に於ては。

有國　無い事なれば、この有國がお仲人、宗盛公に差上げ召されい。

賴政　すりや、姫を宗盛公へ。

ト思ひ入れ。

有國　かねて千束姫に、教盛公の御執心。然るところ、教盛公御卒去後、噂を聞いて、見ぬ戀にあくがれ給ふ。宗盛公へ差上ぐれば、お疑ひも晴れ、其許にも緣者同然。

賴政　サア、それは。

有國　違背ござらば、姫といふは紛れ者か。

賴政　イヤ、全く姫に相違なければ、得心いたさせ、宗盛公へ差上げん。

有國　して、調伏の申し開きは。

賴政　それこそ、彼の額を破却せし、曲者を召捕つたれば、お目通りで詮議いたさん。ヤア〳〵、囚人を早くこれへ引け。

ト向うにて

忠澄　畏まつてござりまする。

ト管絃バタ〳〵にて、向うより忠澄、上下股立ちに出て來り、花道にとまる。

ハヽツ、仰せつけられました囚人、あれへ引かせましてござる……ヤア〳〵、その科人、これへ。

ト向うにて

侍ひ　ハアヽ。

ト時の太鼓になり、願山、前の形にて縛られ、侍ひ二人、繩を取り、出てくるを、忠澄、受取り、舞臺へ連れてくる。侍ひ、取つて返す。

忠澄　ハヽツ、引据ゑましてござりまする。

ト願山、有國を見て

願山　こなたは。

有國　コリヤ〳〵、身は平家の侍ひ。われ達を知らうか。必らず繩目に血迷つて、滅多な事を吐かすな

ト呑みこます。願山、思ひ入れあつて

願山　成る程、わしが懇ろなお侍ひに、ハテよく似たと思つたが、他人の猿似であつた。

頼政　ムウ、早太、其奴に問ひ條かけい。

忠澄　ハッ……サア、づく入め、おのれ、三井寺の額を、矢の根を以て破却なしたは、なみ〳〵の企みでない。眞直に白狀ひろげ。

願山　愚僧は願山と申して、三井寺で小口もきいた坊主。柴屋町へ通ふほどに、けるほどに、お布施や賽錢はまだるく、半鐘を盗んで、物日を仕舞つたもくが割れ、寺をお拂ひ箱。頭を半分元服して、商ひしても損ばかり。仕馴れた御祈禱山伏と、思ひついても、不動や愛染の力では、錢儲けは無し、なんぞドッカリ儲かる事はあるまいかと、頼まれましたが、云はぬ〳〵。

忠澄　ヤア、吐かさぬと、これだワ〳〵。

ト刀にてこぢる。

願山　アイタヽヽヽヽヽヽ、もう云はにやァならぬ……モシ、頼政さま、アヽ、お前は情ない。自體この願ひは、こなさんが

ト云ひさして、身をかはし

得てこんな時、手裏劍が來るものだ。

頼政　ハヽヽヽヽヽ、ハテ、有る格な囚人め、そんな古手は、取措け〳〵。

有國　イヽヤ、現在彼れが白狀といひ、寶の矢の根が慥かな證據。

賴政　その矢の根は、盜まれました。

有國　ヤ。

賴政　人も知つたる身が矢の根で、調伏なさば、我れと科を訴人も同然。こりや、某を科に落さんとは
いかほど企むとも、雪の柳の身は障らぬ。

忠澄　この坊主め、再び拷問いたしませうか。

賴政　イヤ〳〵、思ふ仔細あれば、矢張り緩めい。

有國　して、靈猫の香爐は。

賴政　その御返答は

ト當惑のこなし。

有國　香爐は紛失いたさうがな。

賴政　サ、それは。

忠澄　ヤヽ、すりや、お預かりの香爐が

有國　ムヽ、ハヽヽヽヽヽヽ、こればかりは落ちつかれまい。紛失させれば、その身の大罪自滅さ

つしやい。ドレ、介錯を

ト抜いて切りかける。ちよつと立廻りに頼政、半琴の箱にて受けとめる。中より卒塔婆二枚出る。

頼政　ヤ、こりや和琴と思ひの外

忠澄　二枚の卒塔婆を入れられしは

有國　姫、頼政が身の納まり。

頼政　すりや、身の明り、立たざる時は

忠澄　主人に自害せよとの事か。

頼政　姫も違背に及ぶなら。

有國　かねての疑ひ、未來へ緣組み。

願山　退引きならぬ、平家のかさ押し。

有國　返答次第で、家來が遠巻き。

頼政　源平、鉾を爭ふか。

有國　生死二つは

頼政　今宵の九ツ。

有國　それまで容赦も、緣者のよしみ。
願山　おれが體の落着も
忠澄　いづれ一度に一家中
有國　妹聟なり
賴政　小舅なり
忠澄　內幕ならぬ
有國　卒塔婆の返答。
賴政　奧で暫らく
有國　待つてゐるぞよ。

ト唄になり、皆々、思ひ入れあつて、有國は額を持ち、忠澄は願山を引立て、下座へ入る。侍ひは有國が衣裳の廣蓋を持ち、附いて入る。

賴政　思ひがけない、左衞門が內意。返答によつては、身の上なりと、一つならず二つまで。この卒塔婆を見るにつけ、思ひ出すは弟賴行、せめてこの世にあるなれば、問ひ談合も致さうもの。アア、是非もない、生者必滅。今日は命日、せめてはこれへ法號記し、心で回向も、弟が菩提。

それ〳〵。

ト誂らへの合ひ方になり、硯を取つて來り、この卒塔婆へ戒名を書いてゐる。此うち下座より小磯、ウロ〳〵出て來り

小磯　先刻に爰のお殿樣が、願ひを何なりと、聞いてやらうと仰しやつたが

ト賴政を見て、ウヂ〳〵しながら

そこにお出でなされますは、お殿樣でござりますか。

賴政　オヽ、そちや最前の女子か。

小磯　ハイ、お慈悲深い、お詞に甘へまして

賴政　オヽ、そちやよう來やつた。聞いて遣はさう〳〵。時に、其方は淡路の者とな。

小磯　大汐や、淡路の瀨戸と唱へます、繪島ヶ崎の小磯と申す、海女でござりますわいなア。

賴政　して、その海女が、身に願ひとは。

小磯　サア、お話し申すも、お恥かしうござりますが、私しは、小さい時に兩親に別れ、その菩提に戒名を、この都の黑谷さまとやらへ納めたく、日頃願うて居りましたが、跡の月二十八日、いつもの通り、沖の働らきに出ましたところ、俄に難風、船を搖りあげ、搖り落し、走るほどに〳〵難波

の浦へ、やう〳〵に、辿りつきましてござりまする。

頼政　ハテ、それは危ない事の。

小磯　それゆゑ此やうに、濱にゐたまゝの形でござりますれば、難波まで來たこそ幸ひと、西も東も知らぬ身で、黒谷さまへ參らうと、この都へ來て聞きますれば、爰なお屋敷へお願ひ申せば、何なりと、お聞き屆けがあるほどに、斯う〳〵して行けと、敎へてくれた人がござりますゆゑ、産神の祭を見るやうな形をして

頼政　參つたといふ、最前のこの二品。親の形見といふが、どうして遠き都まで

ト以前の面と壺折を出す。

小磯　サ、兩親の形見ゆゑ、濱へ行くにも肌身を離さず。それゆゑ爰へも

頼政　さて、孝行な者ぢやな。して、兩親の名をば、存じて居るか。

小磯　サ、小さい時ゆゑ

頼政　知らぬか……ムウ、して又、身共に

小磯　お願ひと申すは、これでござりますわいなア。

ト以前の袱紗に包みし貝を出す。頼政、取つて見て

頼政　こりやコレ、蛤の片々。

小磯　サア、その片割れを持つた者が、わたしと云ひ號けぢやと、別れた親の遺言を、お寺様のお話し。親兄弟も親身もない孤子。どうぞ尋ねてめぐり逢ひ、便りにしたうござります。お願ひと申すはこの事でござりますわいなア。

頼政　これが妹脊の證據とは、誠に空な尋ねもの。都の政事に係はつて、これぞ叶はぬ事はなけれどもこの事ばかりは頼政が、力にも及ばぬわいやい。

小磯　すりや、お殿様のお力でも

頼政　縁と時節を、待つて見やれサ。

小磯　ハアヽ。

ト泣く。

頼政　どちらぞ親が一人あらば、年端もゆかぬ女子の其方に、さほど辛苦もさせまいに、歸らぬものは死出三途。

ト以前書いた卒塔婆の戒名を見て、身につまされるこなし。小磯、涙を拭ひ、フイとこの卒塔婆を見て

小磯　大當院冬春日榮居士。

賴政　ヤ、この法號を、そちや讀むか。

小磯　讀まいでなりませうか。父様の戒名ぢやもの。

賴政　ヤ、これを父親の戒名とは。

小磯　黑谷さまへ納めようと、コレ〳〵

ト懷の守より疊位牌を出して見せる。

賴政　誠に、冬春日榮居士。

小磯　どうして同じ戒名でござんす。

賴政　其方が幼な名、綾子とは云はざるや。

小磯　ほんに、さうでござんす。

賴政　形見の品、幼な名といひ

小磯　どうやら緣のありさうな。

賴政　身が弟、賴行の娘。

小磯　してマア、あなたは

頼政　其方が實の伯父ぢやわやい。

小磯　そんなら、伯父樣でござりましたか。

頼政　肉身の姪であつたが。

小磯　海山隔てゝ

頼政　仕官の身は

小磯　逢ふは初めて。

頼政　懐かしう思うたわやい。

ト合ひ方。兩人、手を取り交し泣く。頼政、思ひ入れあつて

父の無い身で、アヽ、よう成人したなア。コリヤ、其方が親は身が弟、左馬頭頼行というて、禁中の北面、法皇のお覺えも、御見物樣のお取立てにもあづかり、なに暗からぬ身なりしが、鹿ケ谷會合の内なりと、讒者の爲に淡路の島守り。其方は島にて出生の子。この都にも、其方が兄はあれど、これとても仕官の身、別館を勤め居れば、容易に逢ふ事叶はぬ。只この上は、氣隨氣儘を働らいて、必らず人樣に憎まるゝな。この二品の形見は、こりや其方が親の頼行が好きの道、間の狂言に着馴れの品々。この乙の面のやうに、人は美面より只心の、取置きが肝心ぢやぞよ。

小磯　親も及ばぬその御意見、有り難うござります。
頼政　只この上は、伯父は親なり。
小磯　子と思うて下さりまするか。
頼政　親と思うて孝行盡すか。
小磯　せいでなりませうかいなア。
頼政　アヽ、それ程までに。アヽ、持つべきものは、姪子ぢやなア。

ト小磯を引寄せ、顔をヂッと見て

ムウ、年恰好、器量といひ、姫というても憎からぬ其方が面ざし。武藏を始め宗盛まで、面體知らぬを幸ひに、こりや姫に拵らへて
小磯　エ。
頼政　サア、其方も今日より、この頼政が娘も同然、もう在所へも歸さぬ。此やうな見苦しい形も取措いて、姫のやうに、立派な形に着替へさすワ。
小磯　そんならアノ、お姫様のやうに結構な……そりやモウ、嬉しうござんすが、踵の赤ぎれへ引ッかかつて、轉ばぬやうに着にやなりませぬなア。

ト、いろ〳〵嬉しきこなし。

頼政　オヽ、嬉しからう〳〵。まだ喜ばす事がある。

小磯　まだ喜ばす事とはえ。

頼政　サ、その蛤の片々にも、逢はせてやらうワ。

小磯　エ、そんならアノ、云ひ號けの……そりやマアどこに。早う逢はせて下さりませいなア。

頼政　サ、最前は知らぬと云うたが、よく〳〵思へば、其方の云ひ號けの男は、アノ、六波羅といふ所の結構な御殿に。

小磯　そりやマア、ほんまでござんすかいなア〳〵。

ト喜ぶこなし。

頼政　サア、宗盛どのといふが其方の男　逢ひたくば、誰れが問はうと、其方が名を、千束姫と云はにやならぬぞ。

小磯　そんならアノ、小磯といふを云はずに、千束姫とさへ云へば

頼政　オヽ、逢はれる〳〵。

小磯　どうぞ、ちつとも早う、逢はせて下さりませい……伯父様といひ、云ひ號けの殿御にまで。今日

はいかなる吉日で、嬉しい事の重なるぞ。これも觀音樣、大師樣のお庇。エヽ、有り難うござりまする。

ト方々拜み、喜ぶ。

賴政　宇治左大臣とは、內緣ある某。千束姬を執心ゆゑ、輿入れさせよとは、まさかの時の人質と、寶の詮議と、二道かけし宗盛の企み事。成就なすまでの手段に、遣はす似せ物も、どうで生きては歸らぬ命、なんにも知らぬ

小磯　エ。

賴政　サア、白齒のまゝで、輿入れの用意さする。嬉しいか。

小磯　これが嬉しうなうて、なんと致しませうぞいなア。

ト無性に嬉しがる。賴政、ホロリと思ひ入れあつて

賴政　ハテ、知らぬが佛ぢやよなア。

トこなし。此うち後へ千束姬、出てゐて

千束　そんなら、自らが代りに……思へば不便な。

賴政　コレ。

トばた〳〵するゆゑ、頼政、燭臺を吹き消し、二枚の卒塔婆を持ち、兩人を連れ、二重へ上がり、千束姫に囁く。此うちに下座より菖蒲の前、手燭を袖に隱して出て來り、聞いてゐる。

千束　それもみんな、自らを思うて。

頼政　サア、あなたを思うて、奥を去つたも、誰れ憚らず二世三世。

千束　その深切は嬉しいけれど

頼政　ハテ、離緣の女に、なに遠慮。

菖蒲　すりや我が夫には、姫君と。

ト手燭を差出す。頼政、小磯を後に圍ひ、千束姫に寄りそふ。唄になり、チヨンと御簾下りる。菖蒲の前、思ひ入れあつて

ムウ、今の今までは、この身に何ぞ仕落ちがあつて、離緣さしやんしたと思うてゐたが、あの樣子では、疾から……こりやモウ、斯うしては居られぬわいの〳〵。エヽ、憎さも憎い千束さま、幸ひ夫より、預かつてゐるこの矢の根。まさかの時は……さうぢや。

トつか〳〵と二重へ上がらうとする。この時、御簾上がる。内に忠澄、立派に扣へ、上の方に願山、褥に坐り、酒を飲んでゐる。杯臺、長柄、鉢肴を取散らしある。菖蒲の前、恟りしてためらふ。

忠澄　こりや奥方、何をなさるゝ。
菖蒲　サア、慥かに姫と我が夫が……ハテ、合點のゆかぬ。
忠澄　闇夜の婦女に燈火を貸さず。預かりの姫君に、御主人の不義があつて濟みませうか。
菖蒲　ムウ、それでわしも、落ちつきましたわいの。
　　ト思ひ入れ。
忠澄　サア、坊主、よい加減に白狀せぬか。
頤山　ハテ、白狀は先刻の通り、火水の責めを取措いて、錦の褥に酒肴。辛からば、只一筋に辛からで情の交るこの責め苦。蟇蛙の脂を取られるやうで、いつそ爰らへ消えたいわな。
忠澄　イヤ、さうばかりでは濟まぬ。斯程の事を企みしは、御主人に恨みあつて
　　ト菖蒲の前へ思ひ入れあつて
サア、御主人へ恨みあつて、携へ持ちしその矢の根。
　　ト菖蒲の前、ギックリこなし。
頤山　アヽ、勿體ない。そんな氣は、夢三方ござりませぬ。酒肴の御馳走より、命を助かつて、どうぞ早う歸りたう。

ト逃げようとする。

忠澄　身動きすると、命が無いぞ。

願山　ハイヽ。

トうづくまる。

忠澄　奥方、先達て頼政公より、お預けありし、水破の矢の根は。

菖蒲　サア、大切にコレ、持つて居るわいなう。

ト出して見て、恟り。

ヤヽヽ。こりやこれ似せ物。

忠澄　サア、その紛失の矢の根を以て、この坊主が三井寺の、額を破却して、御主人の越度。

菖蒲　エヽ。

忠澄　平家の疑ひ、云ひ譯立たねば身の上なりと、宗盛公より、使者に立たれし有國どの。

菖蒲　すりや、今日のお使者は、兄上左衞門どの。わしが預かりしこの矢の根、肌身離さず

トいろ〳〵思案して

ムウ、いつぞや、桝花女より傳はりし水破の矢の根、どうぞして見たいほどに、夫に隱して見せ

てくれいと、同胞仲で是非なう一夜さ、手離したは、アノ兄上が

忠澄　なんと。

菖蒲　サア、明けて云はれぬ矢の根の紛失。申し譯には

　　ト死なうとするを

忠澄　イヽヤ、死ぬるに及ばぬ。

菖蒲　ヤ。

忠澄　一つの功を、お立てなされい。

菖蒲　功を立ていとは。

忠澄　大切な矢の根。疎かになして紛失、前非を悔ひしその身の云ひ譯、功の立つべき工風せいと、御主人の云ひつけ。

菖蒲　でも、差當つては、どうも

　　ト思案。願山、透を窺ひ、逃げんとするを

忠澄　サア、有やうに吐かさぬと、ぶち放すぞ。

　　トきつと云ふ。

願山 アヽ、申しますく。何をするも命が惜しさ。三井寺の額を打ち砕きし、その頼み手といふは

忠澄 何者だ。

願山 狐でござります。

忠澄 なんと。

願山 サア、あの日は堺へ參りまして、通りかゝつた信田の森、夜の殿が穴とも知らず、尾籠な事を致した麁相、それから氣がウツトリとなつて、その跡はとんと覺えませぬ。これより外に、白狀はござりませぬ。

忠澄 相も變らぬ其しぶとさ。この上は、獄屋へ下して火水の拷問。

願山 アヽモシ、今度こそ本當の事を白狀。大それた事を頼まれた、その頼み手といふは

ト隱し持つたる懷劍にて突いてかゝるを、程よく留め

忠澄 騙し討とは、しやらくさい。

ト叩き落す。

願山 ところを。

ト又かゝるを、取つて引伏せ、下げ緒にて縛りあげ、梅の木へ綀しつける。

エヽ、いま／＼しい。

忠澄　奥方、この縄附きは、あなた様へお預け申す。

菖蒲　すりや、その者を。

忠澄　サア、平家の疑ひ、御主人の御身の上、責めさいなんで白状させなば、一つの功になりさうなもの。

菖蒲　成る程、及ばずながら、問ひ條かけて

忠澄　兄と夫へ、二道かけし女の操。御合點が參りましたか。

ト唄になり、忠澄、思ひ入れあつて下座へ入る。あと合ひ方。菖蒲の前、こなしあつて、願山が側へ寄つて

菖蒲　サア／＼、いま聞く通り、わしが云ひ譯の種ぢやほどに、早う云うてくりやいの。

願山　エヽ、知らぬわいの。正直正道な清僧を、科人の、イヤ拷問のと、此やうに縛りあげた、あの猪の早太の鬼よ、蛇よ。人に恨みが有るものか、無いものか、追ッつけ思ひ知らせるぞよ。

トこの時、菖蒲の前、思ひ入れにて、長柄銚子を取り來て

菖蒲　どうでモウ、直ぐには云ふまい。酒でも飲んで、ゆる／＼と詮議せうか。

頤山　エヽ、誰れぞこの繩を解いてくれぬか。誰れぞ

ト見廻し、梅の木を見て

ヤイ、梅よ、われ、繩を解いてくれぬか。コレ、紅梅よ、紅梅さん。

ト形を見て

斯うした所は、なんであらう。梅に鶯といふはあれど、梅に坊主では句が附かないから、矢ッ張りこれは、鶯の心になつて、ホウホケキヤウ〱。

ト鶯のやうな身振り、いろ〱あつて

エヽ、これでも解けぬか。アヽ、どうぞ解いて欲しい。

ト此うち菖蒲の前、酒を飲み

菖蒲　酒も一人は面白うないものぢや。誰れぞ相の仕手はないか。

頤山　相をしようか。

菖蒲　相をしてたもるか。こりや忝いわいの。

ト銚子杯を頤山が前へ持つて行く。

頤山　先刻は結構づくめで飲めなんだが、斯うして飲めば又格別。シタガ、戴きたいにも手は叶はず

菖蒲　サア〳〵、一つ飲みや〳〵。

ト菖蒲の前へ、酒をついで

願山　オット、あるぞ〳〵。

菖蒲　サア〳〵、飲みやいの。

願山　縛られながら打解けて

菖蒲　献いつ押へつ

願山　奥様。

菖蒲　坊主。

願山　こりや、話せるわいの。

ト願山、寝轉んで、口を杯へ附けて飲み

こりやアいゝ鹽梅だ。時に、御返杯仕らうか。

ト口にて杯を献す。

菖蒲　なんと、わしが問ふ事を、云ふて聞かしやいの。

願山　云つて聞かさう。三井寺の額に、矢の根を打つて、平家を調伏したは頼政だ。

菖蒲　エ。

願山　おのれが罪を、おれにかぶせて、遁がれんといふ彼奴が企み。

菖蒲　そんなら矢ッ張り、我が夫の惡心であつたか。

願山　あの早太めが、姫に不義は無いと云つても、閨の睦言は、とつくりと頑張つた。

菖蒲　ヤ。

願山　離縁されても、腹は立たぬか。

菖蒲　サア、それは、

願山　口惜しくば、二人ともに、殺らしてしまはつしやい。

菖蒲　サア

兩人　サア〳〵〳〵

願山　よもや生けては置かれまいがや。

菖蒲　さうぢや。悋氣嫉妬を愼しむは、姫御前の一旦。もうこの上は、戀の敵。

願山　さうだ〳〵。

菖蒲　千束姫を刺し殺し、その上で我が夫も、安穏で置かうか。

願山　オヽ、さうだ〳〵。彼奴さへ殺せば、この家は、兄有國どのゝ物。どうぞおれに逢つて、渡してくれと、この懷に一通が

ト菖蒲の前、願山が懷より一通を出して讀み

菖蒲　成る程、こりや兄上の御手跡。

願山　なんと違ひはあるまいが。

菖蒲　仕負ふすれば、この身も喜び。

願山　兄貴も立身。

菖蒲　それにしても、靈猫の香爐が

願山　それも知れてある。

菖蒲　知れてあるとはや。

願山　サア、此方の手下に盜ませて、それも有國どのが持つて居らるゝ。

菖蒲　そんなら、いよ〳〵兄有國どのが……エヽ、忝い。

ト天を拜して思ひ入れ、ツイと奥へ入る。願山、悔りして

願山　ヤア〳〵〳〵、拍子にかゝつて、とんだ事を云つてのけた。心も引かず手紙を渡し、香爐の事ま

で口走つた上は、どんな目にあはうも知れぬ。
ト逃げようとして繩に引ツ張られ
エヽ、この繩が解けぬか、切れぬか……日頃信ずる閻魔さま、地藏さま、狛犬さま、この繩解かせて、たび給へ〳〵。
ト早目の合ひ方にて、いろ〳〵狂ひ廻り
最早日本に、この坊主が、祈る神も佛も無いか。ハアヽ。
ト大泣き。
オヽ、それよ、信仰記の雪姫は、足で繪を描く。近くは兩國の釜拔け小僧。我れはそれには劣るとも、この繩一つ、切らいで置かうか。
ト合ひ方、早目になり、いろ〳〵踠き、トヾ落ちてある懷劍に目を附け
オツト、有るぞ〳〵。この懷劍で
ト寢腹這ひ、懷劍にて繩を摺り切り
してやつたぞ。
ト逃げようとする所へ、忠澄出て

忠澄　づく入め、どこへうせる●

顆山　それ云つてゐる隙がない。

ト行かうとするを留める。立廻りに、そこにある經櫃にて隔て、逃げあるく。トゞ經櫃の蓋取れて、顆山、この中へ轉げこむ。忠澄、ちやつと蓋をして掛け金をかける。下座より

腰元　早太さま〳〵、殿樣が召します。お早うお出でなされませ。

忠澄　折惡い殿のお召し。ドレ、行つて來ようか。

ト始終管絃にて、忠澄、下座へ入る。引違へて灘平、出て來り

灘平　かねて武藏の左衛門有國どのに賴まれ、賴政がこの館の今參りとなつて、平家より預かりの、靈猫のこの香爐。

ト懷より袱紗に包みし香爐を出し

疾にひん盗んで渡し置いたを、有國どのが、最前ちよつと小手招ぎ、持つて居ては危ないと、預けられたが、どこぞへ

トあたりを見廻し

オヽ、幸ひ、あの時計の内へ。

ト中の車を出し、跡へ香爐を隱し

よし〳〵。

ト此うち七郎、文藏、出て來り

兩人　灘平。

灘平　エヽヽヽヽ。こりやア御兩所、恟りしました。

七郎　なんの恟り。みな内幕。

文藏　コレ。

ト囁く。灘平、呑みこんで、懷より呼子を出して吹く。管絃になり。御簾上がる。内に有國、羽織衣裳に着替へ、立つてゐる。

灘平　武藏の左衞門

七文　有國どの。

有國　合圖の呼子は、用事あつてか。

七郎　御主人の扶持を食つても、心を通はす有國さま。

文藏　賴政に泡を吹かせうと、三井寺の額へ矢の根の仕事。

有國　併し、その密事を申しつけし願山め、計らずこの館へ召捕られしゆゑ、折を見合せ、妹めに吹込み、頼政を仕舞うて取る、計り事を云ひつけ置いたが、事成つたか、心許ない。

灘平　それはお氣遣ひござりませぬ。三井寺に居るうちも、師匠の頼豪をしやくつて、大内を恨ませる程の惡者。

有國　それにしても心得ぬは、千束姫が身の素性。なんぞ怪しい者ではないか。

七郎　その儀は未だ、心附きません。

有國　それも宗盛の上意ごかし。それでゆかねば、この毒藥。

ト包みを出して渡す。

灘平　それには幸ひ、鵺祭りの神事のこの酒へ、仕込んで頼政へ。

有國　出來た。早う。

ト灘平、酒の中へ毒を仕込む所へ、管絃にて、腰元二人出て來り、神酒の三方を持つて行かうとする

灘平　コレ〳〵、この神酒をば、どこへ持つて行く。

腰一　御神事のこの神酒、間を見て頂戴いたすほどに、お居間へ飾り置けとの御意。

灘平　ハテ、うまい手番ひな。

ト腰元二は、時計を取つて行かうとする。灘平、悔りして

この時計をどうする。

腰二　お使者の御返事にいる程に、お居間へ掛け直せと、殿樣の御意。

灘平　ホイ、まづい手番ひになつた。

腰一　サア、ござんせ。

ト兩人、ツイと下座へ入る。灘平、呆れてゐる。

有國　まだ灘平に云ひつけるは、三井寺の賴豪こそ、賴政、師壇のよしみとして、今日ひそかに、この館へ呼びよせるとの噂。其方は賴豪が使ひと僞はり

灘平　すりや、似せ迎ひで賴豪めを

有國　必ずぬかるな。

灘平　ドレ、似せ迎ひと出かけようか。

ト管絃になり、灘平、一散に向うへ入る。此うち下座より、腰元三出て來り

腰三　そんなら賴豪さまを……この通り館樣へ。

ト行かうとするを、七郎取つて、二重へ抛りあげる。有國、足下にかける。

有國　こりや私しを、なんとなされまする。

有國　口は禍ひの門、不便ながらも

腰三　そんならどうでも。その惡心を知り給はず、奥樣が朝夕のお案じ。どうぞ心をひるがへして

　ト起きあがらうとするを、拔討ちにポンと切る。

有國　蛙は口ゆゑ……ム丶、ハ丶丶丶丶。

　ト唄になり、御簾、チヨンと下りる。向うバタ〳〵するゆゑ、七郎と文藏は下座へ入る。バタ〳〵にて、向うより灘平、經櫃を脊負ひ、走り出て來り、經櫃を下ろし

灘平　ヤレ〳〵、三井寺へ行くまでもなく、彼方から賴豪めを、目立たぬやうにと、この經櫃へ入れて來る道で出ツ會し、踏み倒して、かッ渫つて來たが……ドレ、有國どのへ。

　ト脊負はうとして

　ヤア〳〵、こりや同じやうな經櫃が二つあるが、どつちだつたしらん。

　ト困つてゐる所へ、忠澄出て、經櫃へかゝつて

忠澄　ヤア、こりや同じやうな經櫃。どッちだつたしらん。

灘平　ヤア、早太さま、お前は何を入れた經櫃を、尋ねさつしやります。

忠澄　おれよりは、わりやア何を入れたを尋ねる。

灘平　サア、それが云はれるものか。慥かにこれだんべい。

　　ト願山の入つてゐる經櫃を脊負ひ、行かうとする。

忠澄　イヽヤ、それもやる事はならない。

　　ト引とめるを、振り切つて灘平、下座へ入る。

あの經櫃は兎も角も、この内こそ願山め、香爐の詮議仕出して、この身の明りを

　　ト經櫃を脊負ひ

夜中までに。それよ。

　　ト管絃にて、これなりに道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、桝組みの揚げ障子、左右の柱、紅葉。下の方、枝折り門、誂らへの通り。こゝに灘平、以前の經櫃へ、脇差を突ッこまうとしてゐるを、音平、その手を留めてゐる見得にて、道具とまる。

灘平　こりやア音平、何をする。

音平　何をするとは、おぬしが事、この經櫃へその白刃、なんで突き立てようとするのだ。

灘平　サア、そりやァ。

音平　何か怪しいこの經櫃、ちよつとおれが改めて

トかゝらうとするを

灘平　イヽヤ、見せる事はならない。

音平　ところを、おれが

灘平　斯うして見せまいワ。

ト切りかけるを

音平　小癪な。

トこれより三味線の合ひ方にて、ちよつと立廻りあつて、トヾ音平、灘平を切り殺すと、時の鐘。障子の內にて

卷絹　お姬樣、ようお似合ひ遊ばしましたわいな。

小磯　其やうに云はしやんすと、いつそ恥かしいわいなア。

ト唄になり、障子上がる。上の方に大姿見を直し、小磯、以前の鬘に飾りを差し、結構なる衣裳に着替

へ、鏡に向ひ、立ち身。巻絹と腰元二人、介抱して附きそひゐる。後に以前の神酒、時計、直しある。
此うちに音平、死骸を片附け、枝折り戸の側に片寄つてゐる。

巻絹　今宵は六波羅へお輿入れ。

腰一　さぞお嬉しうござりませうなア。

小磯　イヤモウ、濱の三日正月や、鰯網に鯛の入つたよりも、嬉しいわいなア。

腰二　ホヽヽヽ、味いな事を御意遊ばす。お姫様、左様なれば、私しどもは、お次へ参りまするほどに、御用があるなら

腰皆　お呼びなされて下さりませ。

小磯　なんの、在所に居れば、飯も炊いたり、酒屋へも走つたり、この身の用は身一つでしまふほどに案じて下さんすな。

巻絹　アレ又。お姫様といふものは、どうせい斯うせいと、お手廻りばかり遣うて、御自分でなさるものではござりませぬわいな。

小磯　それでも、獨りで動きつけて動かぬと、蟲の毒ぢやわいなア。

巻絹　さつても下作なお姫様。此方は御用もおひま様。ドレ、奥へ

腰皆　參りませうか。ホヽヽヽヽ。

ト合ひ方になり、三人、さげすみ笑ひして奥へ入る。

小磯　尋ねるお人に逢ふのは嬉しいけれど、何ぢややら、お姫といふものは、氣の詰まるものではある。氣が詰まるといへば、嫁入りして行く先も、定めて在所のやうに、ツイ果てる事ではあるまい。ちよつと聞いて置きやよかつた。コレ〳〵、女中さん方〳〵……エヽモウ、皆行つてしまつたか……エヽコレ、誰れぞ來てくれぬかいなう。

音平　ヘイ〳〵、何ぞ御用でござりますか。

ト側へ來て、小磯を見て

ヤア、おぬしは先刻の海女ぢやアないか。

小磯　アイ、音平さんとやら。

音平　てもマア、立派な形になつて

小磯　サア、これには段々、譯のある事。爰の殿樣は、わたしが眞實の伯父さん、不思議な事から名乘り合うて

音平　ハテ、それはとんだ……イヤ、おめでたい儀でござります。

小磯　お前にも、たんと禮を云はにやならぬわいなア。

音平　アヽモシ、殿様の姪子なら、私しが爲にも御主人同然。さう叮嚀に仰しやつては、却つて迷惑でございます。

小磯　イヽエイナア、其やうに迷惑がらずと、教へてもらひたい事があるわいなア。

音平　アノ、下郎めに。

小磯　サア、わたしや六波羅へ、嫁入りするわいなア。

音平　エヽ。

小磯　結構な所ぢやさうなが、庄屋どのゝ嫁入り酒も、德利でなし、ちろりであれば、杯の三組みも小原に中蓋を取交ぜたものかいなア。

音平　ハヽヽヽ、どう致して。婚禮も、眞行草の三段の式、いろ〳〵ござれども、上々の方には、まだまだ、むづかしい作法のある事。

小磯　エ、その眞行草とは、法華經のやうなものかいなア。

音平　なにを……式三獻、御厨子黑棚、床飾りにも、むづかしいは貝あふひ。

小磯　どうぞマア、先へ行つても、まごつかぬやうに、教へて下さんせいなア。

音平　折角のお頼み、教へませうとも〳〵。先づ、此はんざうと角盥を、貝桶になぞらへて

　　ト小磯の側へ一つ、自分の前へ一つ置いて

アヽコレ、貝が二つ三つあればよいが。

小磯　コレ〳〵、蛤貝でもよくば、爰に一つ持つてゐるわないア。

　　ト以前の蛤貝を出す。

音平　あなたが有れば、私しも一つ持つて居りまする。

　　ト同じく懐より出す。

小磯　そりや幸ひな事。そして、どうするのぢやえ。

音平　先づ、左より置き初むるぢや。

小磯　斯うかいなア。

　　トそこへ置く。

音平　後に、右へ斯う置くぢや。

　　ト並んで置く。

小磯　ほんに、むづかしい。

ト並べてある貝を、互ひにフツと見て

音平　ヤア、この蛤に書いたる文字の

妹脊と思はず

小磯　連續せしは。

兩人　ヤア。

ト顔見合せる。これより、媚めいたる合ひ方になり、互ひに思ひ入れあつて、この蛤を兩方より、しつくりと合せ見て、驚ろき

小磯　コレ〳〵、お前とわたしが、片々づゝ持つてゐた蛤が、合うたわいなア〳〵。

音平　こりやアおれが幼ない時、末は女夫と親々が云ひ號けも、不慮の事にて他國の別れ。後の證據と蓋身を分けて、取替へ置いたと、持つてゐるこの蛤。

小磯　わたしも丁度その通り。持つてゐたこの片々が、思はずしつくり合ふからは

音平　すりや、親々が云ひ號けの

小磯　夫といふは、お前でござんしたかいなア。

音平　妻といふのは、其方であつたか。

小磯　さうとは知らず
音平　今までも
小磯　云ひ號けばかりで、お顔も知らず、名も知らず
音平　便りは證據の蛤ばかり。
小磯　いつ逢ふ事と恨んでゐたが
音平　緣あればこそ、今日の今
小磯　妹脊と揃ふ
音平　二人が身の上。
小磯　思へば
音平　思へば
小磯　嬉しい緣で
音平　あつたなア。
　　ト小磯、音平に抱きつく。いろ〳〵、思ひ入れあつて
小磯　これほど爰に蛤の、片々を持つた云ひ號けの、殿御の居るに伯父さんが、六波羅とやらの

音平　宗盛公へ送らうといふ、頼政さまの御心底。

兩人　ハテ、心得ぬ。

　　ト思ひ入れ。障子の内にて

頼政　「まぼろしは、玉の臺に尋ね來て、昔の戀の契りをぞきく」。

音平　あの聲は。

小磯　コレ。

　　ト囁く。音平、思ひ入れあつて、枝折り戸の外へ出て、窺ふ。此うち、唄になり、障子上がる。内に頼政、以前の卒塔婆と、片手に三方の蕗の臺を持つて立つてゐる。

　　ヤア、伯父さんかいなア。

　　　 トうぢ〳〵する。

頼政　姪、そちやそこに、何してゐやつた。

　　ト下りて來る。

小磯　サア……月を詠めて居りましたわいなア。

頼政　今宵は宵闇、まだ月も出ぬに、詠めてゐたとは、戀路の闇に迷ふが不便さ。輿入れさするが嬉し

いか。

小磯　アレ又、あんな事を云はしやんすわいなア。

頼政　イヤサ、其方が尋ぬる云ひ號けの男、その蛤の片々に

小磯　疾に逢うてしまうたわいなア。

頼政　ヤア。

ト思ひ入れ。

小磯　お前のお世話にもならず、不思議に逢うて、女夫の名乘り。それに、六波羅とやらに、その男が居るのなんのと、嘘云はしやんす、伯父さんの心の內。

頼政　すりや、いよ〳〵云ひ號けの男に。

小磯　アイ、逢うたからは、もう六波羅とやらへは

頼政　行くまいと云うても、やらにやならぬ。

トきつと云ふ。

小磯　エヽ。

頼政　サア、其方が生先き祝うて、その身を富貴のこの島臺。伯父親の申す事、背かぬと云うたでない

か。

小磯　サア、先刻には云うたれど、戀しい男を振り捨てゝ、外へ行けとは、そりやあんまりな伯父さん この身の富貴と云はしやんすけれど、わたしが爲には不吉の島臺。嫌でござんす。嫌ぢや〳〵。嫌でござんすわいなァ。

賴政　ヤア、この中へ、鉦鼓と撞木を入れてありしは。

ト蕗の臺を袖にて打ち返す。中より松蟲の鉦と撞木出る。小磯、見て

賴政　その二品は其方が身の上。死にゝ嫁入りしてくれい。

小磯　エヽ。

賴政　サ、身が大切の千束姬、執心なりと無理所望は、云はずと知れた平家へ人質。すは合戰に及ぶ時は、首切つて軍門に晒す心。それと知つて姬君を、なんと平家へ渡されう。というて渡さねば、忽ち亂を引起し、この身の滅亡はいとはねど、守り立つたる大事の御方の、御身の御難儀。しばしの猶豫さす爲に、其方を姬に取拵らへ、渡さう、といふこの伯父は、鬼とも蛇とも思はんが、切端詰まつた事ならで、たつた一人の姪子の其方、今日逢うて今日死にゝやる、伯父が心は、どのやうにあらうと思ふぞいやい。

ト小磯を引寄せ、泣き

退引きならぬ事と諦め、死にゝ行てくれ。コレ、面に笑顔は作つてゐても、心の内は鉦撞木、彌陀の唱名、唱へてゐたわやい。

小磯　サア、事を分けてのお詞を、無理とはさら／＼思はねど、アノ尋ねてゐた蛤の

頼政　片々の男は、何者ぢや。

音平　小鬢ながら、拙者めでござります。

ト合ひ方になり、枝折り戸の内へ入り、蹲まる。

頼政　そちや下部音平。

音平　旦那様、何卒お暇下されませう。

頼政　暇をくれとは。

音平　仔細ござりまして、請け狀は拙者が方から、卽ち返上。

ト懐中より一卷を出し、渡す。頼政、見て

頼政　こりや宗德君の大乘經。

音平　サア、その大事の經文は、請け人瀧口靫負より、差上げくれと預かりし、その宿書き、都の地に

は止め難きも、何卒あなたの思し召しで、いかなる方の寺請け狀でも、お納めなされて下さりませ。

賴政　心あり氣なこの經文、イヤ證文は、望みに任せ遣はさんが、これを屆けうばかりゆゑ、暇の願ひか。

音平　イヽヤ、敵討でござります。

賴政　なんと。

音平　姓名聞かば御存じあらんが、親どもは能勢の刑部と申し、讚岐の國の守護職、禁中の船役人。然るところ、拙者、宗德君の侍女待宵どのに賴まれ、讚州の船切手を遣はしたるを、謀叛人の荷擔人なりと、武藏の左衞門、平家へ讒を構へしばかり、親人は切腹、我れは流罪。この身にいとひはなけれども、父の切腹、その無念やむ時なく、一太刀なりとも恨みんと、播磨の配所を夜陰に拔け出で、折を窺ふ下部の奉公。然るに今日、彼の有國、使者となつて來りしこそ幸ひ。さればこそ暇の願ひ。

賴政　すりや、聞き及ぶ刑部が悴、藏人であつたか。

音平　天運計れぬこの身の願ひ。初めて逢うた云ひ號けの、女房小磯も離緣いたす。

小磯　エヽ。

音平　平家へ人質、お渡しなされい。

頼政　イヽヤ、最早姫の役には立たぬ。藏人が女房なりや、舅の敵、助太刀いたせ。

音平　して、宗盛への云ひ譯は。

頼政　いづくへなりとも姫を落し、頼政、腹切る分の事サ。

小磯　エヽ、女子の淺ましい心から、云ひ號けの男に逢うて、この身を庇ひしばつかりに、大事の／＼親とも拜む伯父さんの、命の瀨戸を、なんと餘所に見られませうぞ。どうで行けば死ぬる覺悟。平家へ渡して下さりませ。

ト縋るを、取つて突きのけ

頼政　ヤア、死支度の邪魔をするな。

小磯　ぢやというて

トまた寄らうとするを、頼政、隔てながら、側にある二枚の卒塔婆へ物を書く。

音平　ヘイ、首尾よくこの身の暇を願ひ、本望遂げうと思ふに臨んで、小磯と緣を組んだばかり、文武全き頼政さまの、御身の覺悟。かゝるお方を殺しては、たとへ本望遂げたとて、親人がなに喜び。

敵討思ひ切つた。サア、何事も御家來の、拙者が皆業なりと、首討つて申し譯の、種になされて下さりませう。

ト覺悟の思ひ入れ。

賴政　イヽヤ、云ひ譯は、餘人は賴まぬ。

音平　ぢやと申して。

ト又寄るを、左右へ引分け、音平を上の方、小磯を下の方へ突きやり、兩方へ二枚の卒塔婆を逆さに立てる。

兩人　これは。

賴政　兩人が命を庇ひ、立てた傍示が、目にかゝらぬか。

ト音平、塔婆を見て

音平　これより播磨の國。

ト小磯も同じく見て

小磯　これより淡路の國。

兩人　これが何と致しましたな。

賴政　藏人は播磨の流人、小磯は元より淡路の島守り、賴行が娘なれば、互ひに罪人。上の掟を背かせぬ、播磨淡路のその傍示は、この賴政へ疑ひの、云ひ譯立たぬ覺悟の卒塔婆。

音平　すりや、どうあつても

賴政　掟を破り、一足でも踏み出すと、立歸り者の罪を重ね、未來の親まで墮落さすか。

兩人　サア、それは。

賴政　我れは覺悟の扇腹、その亡骸は平等院、これぞ扇のしばしがうちも、心靜かに、用意しようか。

ト獨吟になり、賴政、扇を拔いて前に置き、用意する。小磯、音平、これを見て、寄らうとしても寄られぬ思ひ入れ。隨分短かく一くさり納まる。障子上がる。內に菖蒲の前、以前の一通を擴げ、見てゐる。下には、これを知らず

音平　いかに覺悟の儀なればとて、賴政さまの切腹を、どうマア餘所に見て居られませうぞ。ソレ

ト奧へ行かうとするを

賴政　コリヤ、どこへ行く。

音平　所詮、左衞門を生け置くゆゑ。彼れを討つて私しが、相果てなば、事の納まり。

トまた行かうとするを

頼政　うろたへ者。宗盛の使ひ、身が屋敷で討たば、身が越度。そりや云ひ譯にはならぬわやい。

小磯　それぢやによつて、矢ッ張りわたしを人質に、平家へ渡して下さりませ。

頼政　イヽヤ、それも叶はぬ……其方達が思案は、これぢや。

　　ト そこにある撞木を取上げ、刀を半分拔きかけ、兩方チョンと合して下に置く。

音平　ムウ。撞木と

小磯　刀を

兩人　思案とは。

頼政　刀は人を討つて、現世の用に立てども、未來の用には立たず。撞木は鉦を打つて、未來を願へど現世の用には立たず。この現世未來の用に立つところを、トツクリと合點して、死なねばならぬ者がある。この世、あの世の界に迷はず、とつくりと思案をせいサ。

音平　現世

小磯　未來の

兩人　用に立つ。

　　ト取らうとするを

頼政　コリヤ〳〵、界が違うた。一足でも踏み出すと、掟が破れるぞ。

小磯　藏人さん

音平　小磯

兩人　こりやマア、どうしたらよからうぞ。

ト思案する。また獨吟になり、小短かく切れる。菖蒲の前、ツカ〳〵と下りて來り

菖蒲　現世未來の、思案は斯う。

ト以前の矢の根にて自害する。

音平　ヤア、菖蒲の前さま

小磯　何ゆゑの、この自害。

菖蒲　何ゆゑとは、兄と夫へ身一つを、現世未來へこの云ひ譯。とてもこの身は人質の、代りにはならずとも、お役に立つべきこの一通。

ト顋山より取つた一通を出す。頼政、取つて

頼政　ナニ〳〵……某立身の仇となる頼政、矢の根の調伏、姫の事も、みな宗盛へ悪ざまに取拵らへ自滅させ、其方を離縁なす夫は、恨みを達し遣はし候ふ間、猶兄の意に任さるべく候ふ……すり

菖蒲　やゝ、何事も有國が。まだその上に、大切な香爐も兄の業。最前いとまのしるしとて、引きぞわづらふ七文字は、兄への引きを憎むといふ、謎の心を解きあふせ、摺り替へられた似せの矢の根、自害するのが、兄への見せしめ。

賴政　出かした。後は聞くには及ばぬ。未來は再緣。苦痛さすほど來世の障り。

ト引寄せて止めを刺す。奥にて九ツの時計鳴る。

晉平　ありや、モウ夜中。

ト奥にて

有國　約束の刻限。內意の返答、承らう。

ト管絃になり、二重舞臺へ有國、出て來る。皆々思ひ入れ。

賴政　これは有國、さぞ待ち久しうあつたでござらう。併し、お待ちなされた甲斐あつて、姫君の輿入れも調ひ、まつた。調伏の申し譯になるべき一品。イザ、受取りめされい。

ト菖蒲の前が死骸の袖に一通を包んで渡す。有國、不思議さうに開き見て

有國　ヤア、こりや妹へやつた密書。すりや、菖蒲の前は夫へ義理立て、くたばつてしまつたか。

頼政　貴殿の妹ほどあつて、人質の姫君の代りにならんと、斯くの有様。貞女といはうか、賢女といはうか。その袖は、即ち輿入れの姫君。また一通は調伏の申し譯に、なりさうな品々。

有國　サ、それは。

頼政　なんと二ケ條、相濟みませうが。

有國　ムウ、なんとせう。不所存な妹め、二ケ條の申し譯は、取繕ひもしようが、靈猫の香爐は。

頼政　その儀は後より詮議いたして。

有國　イヽヤ成らぬ。ずんど成らぬ。

頼政　然らば兩人、親の敵、舅の仇。

音平　いふにや及ぶ。

小磯　左衛門

兩人　覺悟。

トそこへ出て、身構へする。

有國　ヤア、うぬらは何者。

音平　其方が讒言にて、切腹なした能勢刑部が伜、藏人滿貞。

小磯　頼行が娘、今は藏人が妻。舅の敵

音平　父の仇。

有國　ヤア、うぬら兩人は、お咎めうけた流罪人。立歸り者を引込んで、宗盛の使ひを討たせては、頼政、お身が身の上であらうぞ。

頼政　イヤ、その使ひに指も差させまい爲、淡路播磨のその傍示。掟を破らぬ彼れらは島守り。其方が眼には、かゝらぬか。

有國　オヽ、平家を重んず頼政。過分だ。

ト額に立つてあつた矢の根を、手裏劍に打つ。頼政、扇を以てシヤンと受けとめ

頼政　こりや身が寶、水破の矢の根、返進慥かに受取つた。香爐の日延べも、異議なくしやれサ。

有國　サ、そりやア。

音平　違背に及ばゞ

小磯　掟を破つて

兩人　敵と討たうか。

有國　サ、そりやア。

賴政　得心して、罷り歸るか。
有國　サア
皆々　サア〳〵〳〵、なんと。
有國　ムウ。三ヶ條、有國、よしなに執成ししようワ。
賴政　然らば、左衞門どの
有國　賴政どの
賴政　お使ひ、御苦勞。
有國　エヽ、いま〳〵しい。
ト唄になり、有國、袖と一通を持ち、花道中程まで行き、思ひ入れあつて取つて返し、下の方へ忍ぶ
賴政、あたりを見廻し
賴政　出かした兩人。其方達が敵を枷に、有國めを追ひ返したばつかり、姫君は御安泰。その功によつて、…大事を明かし聞かす。まこと千束姫は女儀ならず、忝くも玉倉の君。
兩人　エヽ。
賴政　賴政すゝめて源氏の旗揚げ。もう館には隱まはれぬ。これより高雄神護寺にて、御出家と僞はり

委細は渡邊亘に賴まん。かゝる折ふしあらざれば、拜し難き君の尊顏。イザ

ト合ひ方になり、正面の襖を明ける。内より千束姫、以前の形の肌を脱ぎ、髮を切つたるを、卷絹附いて出る。

千束　委細は次にて殘らず聞いた。賴政が養育によつて、姫と姿をやつし、最前の戲れも、心を引いて味方にせん爲、悋氣といふも皆手段。

卷絹　腰元となつて附きそひしも、忠澄が妹卷絹。御兩所の忠義ゆゑ、虎口を遁がれて、君樣の喜び

ト皆々平伏する。バタ／＼にて、下座より忠澄、以前の經櫃を抱へ、出て來り

忠澄　ハツ、我が君へ申しあげます。雲猫の香爐は、元來拙者が預かり、紛失せしは我が越度、時刻までに詮議なさんと、有國めに一味の頤山、召連れ參つた。いま一度拷問して、白狀いたさせるでござりませう。

ト經櫃の蓋を明け、引出す。内より賴豪、よろ／＼と出る。皆々、恟りして

ヤア、こりや頤山と思ひの外

賴政　三井寺の賴豪阿闍梨。

音平　その經櫃に御座ありしは

頼政　この頼政が使ひを以て、密かに招く途中に於て

忠澄　悪者どもが企みし經櫃、願山と取違へ、これへ伴ひ申せしならん。阿闍梨さま。

ト合ひ方。

頼豪　我れ、世を恨む初めより、飲食を斷ち、寂莫として行ひ濟まし、他事にかゝる念慮なければ、如何なる譯か知らねども、臥龍へ三度着慮を問ふ例しに習ひ、頼政どの、この頼豪を招かれしか。

頼政　これにましますは、忝くも玉倉の君。頼政、不肖の身ながらも、源氏の類葉として、平家の惡逆見るに忍びず、君を守り立て、義兵を擧げんと思へども、いかなる事にやこの君に、劒難の相ありと、博士の訴へ、法徳いみじき阿闍梨の法にて、遁がるゝ祈念はござるまいか。

ト頼豪、うなづく。

然らば、ござるか……忝い〳〵。何卒、その御修法を。

ト頼豪、頭を振る。

成る程、世を恨む貴僧の念慮。

忠澄　御不得心にはござらうが、事成就の上にては、あなたの望み、三井寺への戒壇も、君へお願ひ申したら、叶はぬ事もござりますまい。

音平　阿闍梨さまにも源氏の正統、爲義公のお胤ではござりませぬか。
小磯　何やら譯は存じませぬが、人を救ふは出家の役。まして尊い玉倉の君さま。
賴政　この難を免がるゝ、御修法さへ下さらば、阿闍梨の望みは、身に替へて申し叶へん。この儀を偏へに。
音平　賴豪さま。
皆々　阿闍梨さま。
ト皆々、取卷いて思ひ入れ。賴豪、思ひ入れあつて
賴豪　被甲護身の印を結び、寂然として心を動かし、物云ふまじきと思へども、大義成就のその上は、望み叶ふと、あるが嬉しき。
トにつこりと笑ひ
除身の法を呪し申さん。
皆々　エヽ、忝い。
ト誂らへの合ひ方になり、皆々思ひ入れ。賴政、千束姫を賴豪の前へ連れて來る。賴豪、袖の内より經文を出し、口の内にて秘文を唱へ、印を結ぶと、少しドロ〳〵、千束姫も氣味合ひあるべし。

頼豪　見られよ。天賦の曇りも晴れ、危難の相は立去りしぞ。
頼政　エヽ、忝い。この上は、一刻も早く、君には高雄の神護寺へ。
忠澄　供奉の用意は御門前へ、目立たぬやうに女乗り物。
頼政　矢張り姫の體にもてなし、送り屆ける介添へは
音平　幸ひ、女房小磯が役目。
小磯　そんなら、わたしが御供して
音平　必らずぬかるな。
小磯　心得ました。
頼政　早う〳〵。
小磯　イザ、御立ちあられませう。

ト三重になり、千束姫先に、小磯附いて、一散に向うへ入る。

忠澄　この日頃お案じありし、君樣が危難の相も、頼豪さまの御秘法にて
音平　お遁がれなされて頼政さま、さぞ御滿足にござりませう。
頼政　これも偏へに、阿闍梨の德。

頼豪　我れ死したりとも、大義成就なさんには、我が一山に戒壇の叶ふと思へば、死後までも喜ばしい。

忠澄　頼豪さまのお望みも叶ひ、主人の義兵も事成就の幸ひ始め、殊に師壇のよしみと申し、頼政公へお杯を、進ぜられて下さりませい。

頼豪　いかにも、吉瑞を祝ふとあれば、眼前に飲酒戒を破りて、法身を穢さん。

頼政　アイヤ、阿闍梨の志しは過分なれど、みすみす戒を破らせては。

頼豪　イヤ、頼政へ、今生の暇乞ひ。忠澄、早う。

忠澄　畏まつてござります。ソレ、妹、九献の用意。

ト竹笛。

巻絹　幸ひ神事の神酒の冷酒。

ト竹笛の合ひ方になり、巻絹、二重に飾りある以前の神酒土器を載せし三方を取つて来り

忠澄　頼豪さまより召上がられ、御主人へお土器を、進ぜられて下さりませ。

頼豪　いかにも、献し申さう。

ト頼豪、土器を取上げる。忠澄、神酒をつぐ。頼豪、グッと飲み干す。

頼政　阿闍梨には、百日あまり飲食を断ち、御酒参つては、何とも以て。

頼豪　イヤ、同じ源氏の頼政どのへ、今日の參會。喜ばしい。イザ、土器を

ト献さうとして頼豪、俄に五體惱亂して苦しむ。皆々驚ろく。

音平　ヤヽ、頼豪さまには、こりや如何遊ばしましたぞ。

頼豪　今月今日まで、一百日がその間、一滴の水も飮まざるに、今この酒を飮むと忽ち、惱亂なすは

トよろ〳〵しながら、神酒の德利を取つて打ち割り、キッと見て

さてこそ神酒は、毒であつたか。

皆々　ヤヽ、なんと。

頼政　淸めに淸めし氏神の神酒に、鴆毒を仕込みしは、これも惡人の仕業か。ハテ、しなしたり。

ト忠澄、一腰を拔き、腹へ突き立てる。

音平　ヤア、何ゆゑに、早太の切腹。

忠澄　ヤア、何ゆゑとは、神酒に毒のあるを知らず、阿闍梨さまへ勸めたは、妹が越度。拙者が不念。又その上に大切な、香爐を失ふ申し譯。拙者が自殺は自業自得。

ト苦しむを頼豪、グッと引きつけ

頼豪　師壇の契り深かりし、頼政と思ひの外、我れを騙り、玉倉の君の危難の救はせながら、毒害なせ

しは、野心なるか。
忠澄　全く主君も拙者めも、存ぜぬ一儀、幾重にも
　　　　ト振り放すと、巻絹を引きつけ
賴豪　いはれざる女めが、犯したる罪こそ奇ッ怪なれ。
　　　　ト巻絹の咽喉へ喰ひつきて殺す。
賴政　ヤヽ、その怒りはさる事ながら、賴政、身にとつて覺えなし。早太とてもその通り。云ひ譯のあの切腹、必らず疑念、殘しめさるな。
音平　賴豪さま、阿闍梨さま。
賴豪　いま賴豪は死ぬるとも、魂魄ばかりはこの土に殘り、鼠となつて延暦寺の、經文を破却なし、天臺の一宗を亡ぼさん。
忠澄　すりや、どうあつても、お疑ひは
　　　　ト引きまはす。
賴豪　思へばく、口惜しい。
　　　　ト苦しみながら經文を喰ひ裂き、血を吐いて倒れる。打返しにて死骸消え、煙硝火と共に切り穴より

夥しく鼠現はれ、舞臺中を駈けめぐる。皆々、ギヨツと思ひ入れ。此うち上の方より有國、忍び出る。下の經櫃より願山、蓋を明け、見てゐる。忠澄も苦しみながら、キツと見る。鼠は舞臺中へ駈けあがる。正面の時計へかゝる。鼠、バタ〳〵と下に落ちる。頼政、音平、これをキツと見て

頼政　ハテ、心得ぬ。阿闍梨の一念、忽ち數萬の鼠と生を替へ

音平　御殿の隅々、走るうちにも、アレ〳〵〳〵

頼政　時計を渡る鼠ばかりは、上がりもやらで

音平　落つる有樣。

忠澄　さては、先達て我れ紛失させし、靈猫の香爐

頼政　時計の内に隱しあつて、一念の鼠たりとも、猫の威に勝つ事あたはず、在所をそれと現はすか。

音平　何にもせよ

頼政　怪しき鼠の

三人　振舞ひぢやなア。

ト忠澄、臓腑を掴んで時計へ打ちつける。大ドロ〳〵にて時計開き、中より香爐落ちる。音平、ツカツカと行つて香爐を取り

音平　さてこそ靈猫の

頼政　誠に香爐。

忠澄　ナニ、香爐が、手に入りしか。

頼政　其方が血汐と鼠の不思議に、再び戻るこの香爐。犬死にはならぬぞよ。

忠澄　エヽ、忝い。

有國　それを。

トかゝろを突きのけ

音平　ヤ、そちや有國。

有國　藏人。

願山　うぬを。

ト飛び出してかゝろを、頼政、願山の首をポンと切る。忠澄、落ちいる。

有國　これは。

頼政　まツこのやうに。

トちよんと木の頭。

敵を討ちやれサ。

ト血刀を振りながら、忠澄を見て、ホロリと思ひ入れ。音平、有國へキッと詰め寄せる。三人、よろしく、途端の見得にて、ひやうし　　滿　來

第一番目　六建目　　高雄山神護寺の場

役名——玉倉の君。足輕、長谷平實ハ長谷部長兵衛信連。阿波民部娘、かをる。腰元、龍田。同紅葉。難波六郎經遠。早見兵藤景純。衛士、又五郎實ハ渡邊丁七唱。千人禿、重若。渡邊左衛門亘。白拍子、袈裟御前。遠藤武者盛遠。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。上の方の欄間に半鐘を吊しあり、正面は塗り骨障子。高雄山神護寺の景色、爰に上の方の二疊に、玉倉の君、壺折の形にて、經机に倚り、側に結構なる笛を誂らへの枠に掛け。龍田、紅葉、三建目の役にて、白張の上を引ッかけ、粕烏帽子にて、紅葉の枝を大分に花筒へ入れてゐる。經遠、上下、大小にて、立ちかゝりゐる。これを又五郎、本仕立ての白張烏帽子、衛士の形にて支へゐる。景純、上下、大小にて、詰寄せゐる。この見得、鈴の入つたる管絃にて幕明く。

ト又五郎、經遠、立廻りあつて、景純を突きのけ、キッとなつて

景純　こりやァ野郎め、動くな。

經遠　賤しき衛士の身を以て、武官の身共へ、なんで手向ひひろぐのだ。

景純　經遠どのゝ指圖ゆゑ、君の御前を許されし、身共に向つて尾籠の振舞ひ。慮外ひろぐと、ぶち放すぞ。

又五　これはしたり、あなた方へ、何ゆゑ衛士の私しが、お手向ひは致さねど、勿體なくも君のお居間へ、恐れ多いと存ずるから、それゆゑ支へし私しの、無禮の段は經遠さま、御免なされて下さりませ。

景純　なにを。

ト思ひ入れ。

龍田　この程、玉倉の君さまには、頼政公の御館に、お忍びありしかど、平家の疑ひかゝりしゆゑ、この神護寺へお入りあつて、御寺を假の御座所。お側仕へのわたしらは、重盛公の仰せを受け

紅葉　お側離れず朝夕に、君を守護なす高雄山、楓色づくこの御山。

龍田　思ひがけなき經遠さま、一門方よりお指圖にて、御入來ありしか、一通り、樣子聞かねば君樣のお居間へは叶ひませぬぞ。

經遠　ヤア、差出た女ばら。先達て玉倉の君には、御行くへ知れざりしと、世上に流布なし、頼政が計らひにて、女姿に似せ參らせ、館へ隱まひ置いたる條、正しく頼政が謀叛の證據。然るにこの程この神護寺へお入りあつて、髮を下ろさせ給ふとは、平家を僞はる頼政が胸中、いかなる企てあらんかと、淸盛公の仰せを受け、難波の經遠、目代の役。お側の女め、左やう心得、三拜しろ。

玉倉　こは心得ぬ其方が一言。麿、思はざる疑ひより、頼政が館に忍びしが、佛門に入る心願にて、この神護寺へ立越えしを、又ぞろ平家の沙汰あつて、麿に異心ありとの疑念。さほどに我れを疑ふは、天の冥理に叶はぬ道理。この上は、如何やうともなせよかし。さら〳〵恨みとは思ふまじ。

ト目を閉ぢて思ひ入れ。

又五　こは御心弱き只今の仰せ。君に御異心なきは、天の上覽明らかなり。下樣ながら拙者めが、附添ひ罷りあるうちは、讒者の詞は背きまする。お氣の結ぼれあらんかと、御寺へ女儀を留め置いて御氣鬱晴らすその爲に

龍田　傅き參らす役目のわたしら、殊に名におふ高雄山、色づく山の楓葉を

紅葉　今日の御遊となし參らせ

兩人　九獻の用意。

かを　畏まりました。

ト管絃になり、かをる、振り袖衣裳にて、三方に土器、長柄の銚子を持ち、出て來り、下へ下がつて

君へお進め參らする、九献は卽ち此かをる、持參いたしてござりまする。

玉倉　其方は、この程より、當山に來り、麿に仕ふる、かをるとやら。父は慥かに、平家に仕ふる

かを　阿波の民部が娘のかをる。御寺へお入りの君樣へ、お側仕へも、親どもの申しつけ。

又五　殊にあなたは誰れあらう、御所一番の風流男、亙さまと云ひ號けと聞きましたが、さて〳〵、あやかり者でござりますぞえ。

龍田　シタガ、あの亙さまは、白拍子の袈裟御前どのと、深う云ひ交してござんすとの事。常から惡性な亙さま。

紅葉　さぞマアお前は、お氣が揉める事でござんせう。

龍田　かけかまひなきわたしらまで、どうやら嫉妬に

兩人　なりさうなわいな。

かを　これはしたり、譯もない事云はしやんして、君樣もお聞きの手前、お恥かしう存じまする。

經遠　さては、民部の娘かをるは、左衞門亙と云ひ號けとな。有やうはこの經遠、そもじに疾から

ト立ちあがる。又五郎、引きのけ

又五　これはしたり、君の御前、女中の側へ、みだら千萬。其方へ退いてござりませ。

ト突きやる。經遠、思ひ入れあつて

經遠　よく小差出る青二才め、退いてゐるとは慮外な奴だ。景純、其奴を、合點か。

景純　心得ました。二才野郎め。

 トかゝるを又五郎、見事に投げのける。景純、起きあがつてかゝるを、引敷く。經遠、ツカ〳〵と寄るを、キッと留める。この時、向うより長谷平、菖蒲革、羽織袴、足輕の形にて、走り出て來り、花道にて

長谷　申し上げまする。

經遠　何事だ。

長谷　只今、重盛公よりお指圖とござつて、白拍子袈裟御前、御院内へ通りましてござりまするが、これへ通しませうか。如何計らひませうな。

ト皆々聞いて

經遠　ナニ、聞き及びたる袈裟御前、この院內へ參りしとな。

龍田　それぞお前の戀の仇。
かを　アヽモシ、左樣な事を、仰しやつても下さりますな。悋氣いたさぬ、わたしが潔白。
又五　重盛公より、お心附かれし白拍子、御所に名うての袈裟御前。
かを　折に幸ひ、我が君樣のお慰み。これへと云や。
長谷　畏まりました。
　　　ト行かうとする。
經遠　イヤ〱、待て〱。平家の疑ひかゝりし君へ、白拍子とは思ひもよらぬ。叶はぬ事だ。追ひ歸せ。
長谷　ヘイ、畏まりました。
　　　ト行かうとする。
又五　イヤ〱、さうは成りますまい。重盛公よりお指圖あれば、苦しうない、同道さつしやい。
長谷　心得ました。
　　　ト行かうとする。
經遠　イヽヤ、小松どのゝ仰せでも、淸盛公より參つた某。叶はぬ事だ。追ひ歸せ。

長谷　ヘイ。
又五　イヽヤ、構はず連れさつしやい。
長谷　ヘイ〳〵。

ト行かうとする。

經遠　ヤイ〳〵、白痴者め。追ひ歸せ〳〵。

トきつと云ふ。長谷平、立つたり居たり、思ひ入れあつて

長谷　モシ〳〵、お侍ひ樣、かをるさまは同道いたせと仰しやるに、あなたばかりは成らぬと仰せ。呼んでよいやら惡いやら、私しは今參りの歸り新參、目をかけては下さらいで、いかにわしらがやうな身分だといつて、立つたり居たり幾度か。さう安くさつしやるな。わしもお江戸の生抜きだ水道の水の流れから、生ひ茂つたる菖蒲革、凹んでゐるのぢやござらない。あなたが成らぬと仰しやれば、私しが通します。ヘイ、私しが通して見せませう。いづれも樣、なんと左樣ぢやござりませぬか。

ト揚げ幕の方に向ひ

お扣へなされし、袈裟御前さまとやら、お氣遣ひなく、少しも早う、サヽ、お通りなされませ。

ト思ひ入れ。誂らへの唄になり、揚げ幕より袈裟御前。跡より重若、千人禿の形、糸毛の鬘、袖無し羽織にて、紅梅の枝を持ち、附添ひ出て來り、兩人、花道に扣へる。

玉倉　すりや、あの者が、舞ひの一手に名を得たる、袈裟御前といふ白拍子よな。

かを　お聞きの通りの君の仰せ。袈裟御前どの、サヽ、これへ。

袈裟　ハツ、數ならぬ女子のわたし、冥加にある君のお詞。今日これへ上がりしも、重盛公のお指圖ゆゑ、不拙未熟の白拍子、憚りながら上々方、お見知り置かれ下さりませ。

又五　流石は聞えし袈裟御前。サヽ、急ぎ御前へ。

經遠　イヽヤ、成らねえ。淸盛公には、かねて袈裟には御執心、殊に亘と味な風聞。重盛公の指圖でも當寺に置く事叶はぬワ。

重若　いらざる側から經遠さま、小松さまの仰せにて、送り參りし私しは、隣り町から市村へ、來つれて連れし切り禿、千人禿のその一人、阿波の民部が悴にて、かをるどのはわしが姉上、なんでお側に叶ひませぬ。

經遠　すりや、千人の禿のうち、われは、かをるの弟か。

重若　いらざる助言をお云やれば、重盛さまへ申し上げうか。

經遠　サ、そりやア。
重若　なんとでござるな。
經遠　エヽ、そんならいゝわサ。
長谷　左様ござらば、袈裟御前さま、サヽ、これへ。
袈裟　然らば御前へ。皆様、御免下さりませ。
　ト矢張り唄の切れにて、兩人、本舞臺へ來り、下の方に住ふ。
かを　承り及びたる、お前が袈裟御前さん。道理こそ、一際目立つ好い御器量。お聞きもあらん、自らは、重能が娘のかをる。
袈裟　エヽ、そんならあなたが、亘さまの云ひ號け遊ばした
かを　アイ、初めましてのお目もじは、お嬉しう存じまする。
玉倉　して、袈裟御前は、親は平家にゆかりの武士か。
又五　アイヤ、承りますれば、父御は源氏にゆかりの侍ひ。母の離別に幼なき砌り
袈裟　乳呑みのわたしを母様の、手しほにかけての御養育。成人なして上々の、御前に召さるゝ白拍子。
玉倉　親の家名は知れざるや。

袈裟　ハツ、母も以前は都にて、衣川とて扇の一手、父に別れて音信不通。お顔は知らねど兄ありと、
母のお話し。形見と思ふ袱紗の歌。

玉倉　その歌、其方は覺えあるか。

袈裟　いかにも、兄さんの方には歌の下の句。妹のわたしは上の句。「涙川、袖に流るゝ水の泡。

ト　これにて長谷平、思ひ入れ。

又五　ハテ、心得ぬ歌の上の句。それぞ正しく掃部之助頼仲、生害なすべきその砌り、兄弟二人へ引分
けし、その下の句は何とやら。

玉倉　よるこそまされ、消えかへりつゝ。」

ト　爰にて長谷平、懐の袱紗を出し、ちよつと見て思ひ入れ。これを又五郎、思はず見附け、さてはト
思ひ入れ。

袈裟　よう君さまには、その歌を。

玉倉　それぞ頼仲の一子たる、長谷部長兵衛信連とやらん武士、我が愛臣たる頼政へ、物語りたる親子
の成行き。

袈裟　すりや、私しが兄さんは、長谷部長兵衛信連さま。

長谷　袈裟御前には、その袱紗、今に御所持でござるかな。
袈裟　アイ、肌身離さぬその袱紗、仔細あつて亙さまへ。
かを　アノ、その袱紗を、なんであなたへ。

ト悋氣の思ひ入れ。

經遠　その信連といふ奴は、白川法皇より院宣をこひうけ、伊豆の國の兵衛の佐へ送らんと、賴政なんどゝ同心して、平家へ弓引く天命にて、院宣を途中に失ひ、申し譯なく身退く、武士に似氣なき大腰拔けサ。
又五　賴仲どのは君の忠臣、その娘たる袈裟御前、移り變りし世の成行き。
玉倉　もし其方が實の兄、信連にめぐり逢はゞ、麿が力と賴まんず、證據の一品。

ト枠にかけたる小枝の名笛を差出し給ふを、長谷平、窺ひゐる。

袈裟　アノ、この笛を我が君より
玉倉　これこそ小枝蟬折とて、麿が祕藏の名笛なれど、めぐり逢ひなば、渡しくれよ。
袈裟　エヽ、有り難う存じまする。
又五　冥加にあまる君の仰せ。信連、斯くと聞くなれば、さぞや滿足。

ト長谷平へ思ひ入れ。

經遠　ナニ小差出た下郎が口出し。小枝の笛なら經遠が

トかゝるを重若、ずんと立ち、經遠を突き廻し、立ちよる景純を見事に突きのけ

重若　袈裟御前へ指でもさすと、重盛さまへ、この由を。

經遠　アヽコレ、云ひつけ口は、決して御免だ。

景純　コレ、沙汰無し〳〵。

重若　エヽ、弱蟲め。

ト思ひ入れ。

玉倉　麿はこれより庭前の、紅葉の詠めも又一興、亘が來るを相待たん。

又五　あなた方にも、お側を離れず、ナ、モシ……御合點でござりまするか。

ト經遠を目顏にて知らせる。

龍紅　心得ました。一先づ別間へ

皆々　入らせられませう。

ト管絃になり、玉倉の君先に、龍田紅葉、重若、經遠、景純、又五郎附いて奧へ入る。かゝる、袈裟

御前、長谷平、殘る。

かを　サヽ、袈裟御前どの、必らず心置きなう、これへお出でなさんせいな。

袈裟　ハイ、それはマア、お嬉しいあなたのお詞。承りますれば、互さまと云ひ號け遊ばした、かをるさまゝお目にかゝるも、どうやらわたしは。

かを　云ひ號けとはいふものゝ、まだ杯も濟まぬわたし。お前は深い戀仲の、なんの御遠慮。今から同胞同然に。

袈裟　ハイ、有り難うござりまする。

トもぢ〳〵してゐる。

長谷　アヽ、流石は武家のお娘御、悋氣嫉みもなされずに、同胞同然とは、よう仰しやりました。イヤモウ、女中でさへそのお心。下郎めなぞも、袈裟御前さまなら、願うてなりと同胞に。ハヽヽヽ及びもない事云ひ出して、厚かましい奴でござりまする。

ト思ひ入れ。袈裟、こなしあつて

袈裟　これはしたり、なんの及ばぬ事があらうぞいな。今もこなたの聞く通り、兄さん一人ありながら互ひに音信不通にて

かを ほんに、お前がさう云はんすりや、どうやら同胞というても、似寄りの年配。

長谷 これはしたり、あなたの左樣御意なさるゝで、下郎が甘へた事ながら、拙者も一人の妹が、幼ない時に母もろとも、離別いたして知らぬ同士。

袈裟 いま君樣の仰しやつた、わたしが筋目は源家の侍ひ、賴仲なりとの事なれど、今のこの身は白拍子。

長谷 兄は帶刀いたせども、輕い身分の

ト思はず云はうとする。

袈裟 エ。

ト顏見合せ、思ひ入れあつて

長谷 ドリヤ、お庭の掃除にかゝりませうか。

ト唄になり、こなしあつて奧へ入る。矢張りこの唄をかり、向うより盛遠、羽織衣裳、大小にて、長煙管を持ち、庭下駄にて出てくる。跡より亘、これも羽織衣裳、大小、庭下駄にて、紅葉の枝に火繩を附け、長煙管を持つて出て來り、花道にて

盛遠 誠に、高雄山の楓の紅葉、錦と見紛ふ庭前の詠め。亘どの、なんと好い景色ではござらぬか。

亘　左様でござる。龍田川邊や小倉山、こき交ぜたりし庭の紅葉、又一しほでござるわえ。

盛遠　左様でござるて。

ト話しのうちに本舞臺を見て

亘　イヤナニ、亘どの、御覽なされい。あれに婦人の罷り在るは、アヽ、聞えた、重盛公より玉倉の君へ、白拍子を進ぜらるゝと承つたが、さては、その舞ひ子でござらうわえ。成る程、これより見ますところ、一人の女子は、身と云ひ號けの、重能の娘、かをるでござる今一人の振り袖は

トよく〳〵見て

オヽ、あれは袈裟御前でござるわえ。

盛遠　ナニ、袈裟御前が

ト見て

一人の女は、其許の云ひ號け。今一人は、其許の云ひ交したる袈裟御前。

亘　アヽコレ、盛遠どの、その儀は決して。

盛遠　承知いたした。併し、其許にあやかりたう存ずるわえ。

亘 御挨拶、痛み入りまする。

兩人 ハヽヽヽヽ。

亘 サヽ、御同道仕りませう。

ト唄の切れにて、兩人、本舞臺へ來り

亘め、只今歸り申した。

かを ほんに、左衛門さま、我が君樣が先程より、お待ちかねでござりまするわいな。

亘 イヤ、身も左樣とは存じたが、紅葉の庭にて、盛遠どのにお目にかゝり、御同道仕つた。サヽこれへ〳〵。

盛遠 然らば、許しめされい。

ト袈裟御前、モヂ〳〵して居るを見附け

イヤ、其方は袈裟御前ではないか。

袈裟 ハイ、左樣でござりまする。重盛公のお指圖にて、思ひがけなう、此お寺へ

盛遠 上がりやつたのか。

袈裟 アイ。

盛遠　それは幸ひ。聞きやる通り、玉倉の君さま、頼政どのゝ館に、御座ましくたるところ、平家の疑念、やむ事なく、又ぞろや、この神護寺へ入らせられ、出家堅固の御望み。宮仕へ奉るは、亘盛遠の只兩人、時替りの役目。お氣の結ぼれあらんかと、重盛公より差越されたる袈裟御前、紅葉の庭の景色と申し、斯樣に色が增しては、誠に寺やら、御所方やら、イヤ又、一しほの詠めでござるて。

亘　成る程、其許のお詞の通り、只今までは、靈場たる高雄山、御經讀誦の聲ならでと、思ひの外の婦人の打込み。俄にコレ、入込みの錢湯へ入つた氣持ちが仕るて。

袈裟　そんなら此お寺に、女中方は、夜もお泊りなさんしてかえ。

かを　さいなア。我が君御入りありしより、お側仕への侍女なうてはと、わたしらまでも明暮れに、お側仕へに召されたのぢやわいな。

袈裟　そりや嬉しうござんすわいな。定めて亘さまは此お寺に、御逗留でござんせう。どうぞわたしも此お寺に、長う居りたうござんすわいな。

かを　ほんにマア お前は、此お寺に長う居たいとは、八百屋お七の云ふやうな事ぢやわいな。ホヽヽ。

盛遠　イヤナニ、亘どの、今朝未明、時忠卿の御館へ召され、ちと密々に、申し談ずる儀もござれど、

マア〳〵、それは後方……ナニ、袈裟御前、其方にも盛遠か、密かに申す

ト思ひ入れあり

イヤ、それも重ねて。

袈裟　やゝともすれば日頃から、譯ある事を知りながら、あじやら仕掛けと思はせて、文に云はする

亘　ヤ。

ト三人思ひ入れ。

かを　亘さま、先程より我が君のお尋ね。ちよつと御前へ。

亘　成る程、左やう仕らう。袈裟御前は、盛遠どのを饗應の

袈裟　イエ〳〵、わたしも君様の御前へ、かをるさま、お連れなされて下さんせえ。

かを　そんなら、わたしが案内して、袈裟御前どの。

亘　盛遠どのには、後程ゆるりと。

盛遠　亘どの、御前よしなに。

亘　心得ました。

かを　サ、わたしに附いて

ト袈裟の手を取る。

盛遠　でも、袈裟ばかりは

ト袈裟の袖を扣へる。袈裟、振り切り

ト唄になり、かゝる、袈裟の手を引き、亘附き、こなしあつて奥へ入る。あと合ひ方。盛遠殘り、跡を見送り

袈裟　斯う參りまするかえ。

盛遠　心をかけし袈裟御前、いつぞや彼れに拾はせし、思ひの丈を記せし附け文、返さぬところがまだしも樂しみ。その夜に手に入るこの院宣。

ト懷中より三建目の院宣を出す。この時、後へ經遠、出かゝりゐて

經遠　盛遠どの、こなたの戀は、そりや叶はぬ。

盛遠　難波の經遠。身が思ふ戀、叶はぬとは。

經遠　ハテ、袈裟御前こそ、あの亘めにかッ惚れてうせるゆゑ、なか〳〵貴殿の心には隨はぬ。云はゞ亘は戀の仇、近寄つて人知れず。

盛遠　コレ。

ト思ひ入れあり

さは思へども、仕損じなば

經遠　そりやァ氣遣ひおしやるな。君を弑して經遠が、手柄の程と思へども、亘が附添ひあるうちはと思ひ附いたる今宵のうち。その亘を討取る合圖。折を窺ひ庭前に、吊し置いたる半鐘を

ト小石を摑み、半鐘へ打ちつける。この音に、パッタリして、本神樂になり、紅葉の洞より雲夜叉、忍びの形にて、手槍を引ッ提げ、窺ひ出で

雲夜　合圖の物音。經遠さま。

經遠　雲夜叉。左衞門亘と見るなれば

雲夜　紅葉の內よりたつた一突き。

盛遠　すりや、院內へ、忍びを入れ置き

經遠　君に心を通はす輩、片ッ端から片附ける。その荷擔人は遠藤武者、貴殿も今から一つかま。戀の敵の亘も片附け、差づめ袈裟は盛遠どの。

盛遠　然らば手番ひ、油斷なく

經遠　雲夜叉、ぬかるな。

雲夜　心得ました。

經遠　忍べ。

ト管絃になり、雲夜叉・洞へ入る。下の柴垣より、又五郎、窺ひゐる。

盛遠　もし仕損ぜしその時は

ト經遠に囁く。思ひ入れあつて

經遠　盛遠どの、妙計々々。

盛遠　コレ。

ト思ひ入れあり。

ござれ。

ト矢張り管絃にて、窺ひ〳〵奥へ入る。又五郎出て、思ひ入れあつて

又五　いま經遠が吐かしたは、今宵のうちに君様を、弑し申さん彼れらが企て。夜半に紛れて、君の御供。

ト思ひ入れ。

袈裟　亘さま、これ見て下さんせいなア。

ト奥に聲するゆゑ、又五郎、ウロ〳〵して居る。管絃にて、亘、長い文を讀みながら、袈裟附いて出てくる。又五郎、この中へ交り

又五　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。

亘　こなたは衞士の

又五　ハイ、又五郎めでござります。亘さま、見ましたところが、袈裟さまと只お二人。殊に御所持の

亘　ヤ、これは

ト文を隱す。

又五　エヽ、お羨やましい。

ト袈裟を見て

ゆるりとこれで

袈裟　エ。

又五　おしけりなされませ。

ト唄になり、又五郎、奥へ入る。兩人、跡を見送り

袈裟　何ぢややら、今のお人は、ソワ〳〵と……亘さま、お前、讀ましやんしたかえ。

亘　コレ〳〵、斯ういふ文を持つてゐながら、身共に隱しやるは。こりや聞えた。この春、木挽町で逢つたまゝ、久しく手放して置いたうち、こりやアノ盛遠と、出來やつたの〳〵。

袈裟　エヽ、また疑はしやんすかいな。お前に久しく逢はぬうち、なんで惡性な事しやんせう。春から今まで、男といふては斷ち物にして

亘　朝も晩も、抱かれてゐたか。

袈裟　エヽ、なんの譯もない。男に肌を觸れぬのは、アレ、あなた方が、よい證人ぢやわいな。

亘　ハテ、口悧巧な事ばかり。モシ、いづれも樣、あのやうに申しまするが、違ひございませぬかなハヽヽヽヽ。なんぼさう云やつても、男の文を先へ返さず、持つてゐやる心では、疑ふまいものでもないて。

袈裟　サ、そりや仲立ちか、但し又、盛遠さんの手から、下さんした文なれば、なんの持つてゐやんせう。いつぞや宮島の暗まぎれ、院宣とやらいふゆゑに、拾ひ取らんと思ひしに、取違へたるこの附け文。開いて見れば、この袈裟へ、盛遠どのゝ手跡の文。

亘　ムウ、そんならその夜、暗まぎれ、曲者あつて大切の、院宣奪うて行くへ知れず。その場で拾うたこの袱紗。こりやコレ慥かに、わが身の所持。

袈裟　記せし歌の下の句は、「よるこそまされ消えかへりつゝ」。この下の句でござんせう。

亙　成る程、違はぬ袱紗の歌。そんならこれは、其方の親御の

ト袱紗を出す。袈裟、見て

袈裟　アイ、形見の品でござんすわいな。

トこの時、長谷平、銚子と杯を持ち、窺ひ出て來る。

亙　して、わが身の兩親は。

袈裟　アイ、先刻に我が君の仰せあつたる、わたしが父さん、掃部之助頼仲とて、また兄さんは、長谷部信連。

亙　すりや、君樣へ心を寄する、長谷部長兵衛信連の、妹であつたか。さるにても、この文を、あの盛遠が、其方へわざと拾はせしは、どうも合點がゆかぬわいの。殊に、わが身も今日が日まで、大事に持つてゐるといひ、こりやどうでも盛遠に、心無いとは思はれぬわいの。

袈裟　エヽ、何をマア阿房らしい、その文を、大事に持つてゐるものぢやぞいな。其やうに疑はしやんすこの文、お前の見る前、コレ

ト前なる火鉢へ投げこむ。パツと煙り立つ。この時、長谷平、持つたる銚子を火鉢の上へ置き

長谷　千秋萬歳の、千箱の玉を奉る。
袈裟　お前は先刻の
亘　足輕長谷平。
長谷　ヘイ、袈裟御前さま、亘さま、下郎が聞くとも御存じなく、うまい話しの只中へ、千箱の玉か痴話箱の、當るも起縁、お炬燵で、ちよつぴりおしけりなされませ。
亘　すりや、最前からの、二人の素振りを
長谷　ハテ、薄鈍ながら私しも、まんざらな菖蒲革でもござりませぬ。何か口舌に枠火鉢、起請か文かお二人の、胸の煙りをくらべこし、新酒にあらぬ新入りが、憚りながらお仲人。お二人様、召上がつて下さりませ。
袈裟　最前といひ、今といひ、心ありげな、こなさんの、詞の端も何とやら。折角世話して下さんす、その杯は、わたしから
ト取上げる。
長谷　拙者がお酌いたしませう。お一つ干して、左衞門さまへ。
ト酌する。袈裟、飲んで


松本幸四郎
豊国画
藤

袈裟　アノ、この杯を亘さまへ。
亘　頂戴いたせば、これが固めの
長谷　夫婦同胞三つ鼎、三國一の
袈裟　エ。
ト不思議さうに飲んで、亘へ杯をさす。同じく酌して、長谷平、袈裟を見て思ひ入れ。
長谷　聟に取りすまいた。しやん〳〵のしやん。
盛遠　袈裟御前、袈裟御前。
ト聲する。
袈裟　ありや、盛遠さん。
亘　ソリヤ、思惑が
袈裟　エヽ、何ぢやぞいな。
ト ぴんとする。この時、障子を明け、盛遠、出て來り、二人を見て
盛遠　亘どの、お樂しみと見えまするな。
亘　これは盛遠どの、ひよんな所へ

袈裟　ようお出でなされました。
長谷　盛遠さまには、最早、御番代りでござりまするか。
盛遠　イヤ〳〵、未だ時代りの刻限は參らぬが、何やら色氣のある、面白さうなお話しと見受けまして
亘　それゆゑに、其許には
盛遠　お邪魔も顧ませいで、ツイうか〳〵と、この席へ。
　ト袈裟を見て、思ひ入れあり
　色ある話しを承らうと、思はずこれへ……お話し相手に、罷り成りませうか。
　ト合ひ方になり、思ひ入れあつて、よき所に住ふ。
亘　これは〳〵、ようこそ〳〵。サヽ、盛遠どの、打寛ろいで、マア〳〵、お平に〳〵。
盛遠　イヤ〳〵、これが勝手でござります。
袈裟　左樣ならば、盛遠さまには、亘さまと、只今これで申した事を
盛遠　あれより殘らず承知いたした。イヤハヤ、おめでたい儀でござる。亘どのは格別、袈裟御前には
　身共が方より遣はしたる、ナ……返事さへ、今以て。
袈裟　その返事と仰しやるは、エヽ、そんならいつぞや暗まぎれ

盛遠　其方へ送りし樣まゐる。

長谷　候べく候の附け文は、いよ〳〵あなたの

盛遠　ヤ。

長谷　サ、あなた樣には、まだ御存じはあるまいが、常は舞ひ子の袈裟御前、今日よりしては

亘　亘が妻に。

盛遠　すりや、其許には

袈裟　二世と語らふ大事の夫。盛遠さま、さう思うて下さんせ。

盛遠　そりや何人のお世話で。

長谷　ヘイ、お仲人は、卽ち下郎め。

盛遠　アノ、其方が

長谷　上々樣の婚禮に、似ても似つかぬ轉びあひ。

亘　武家の作法を打捨てゝ、俗に申せば引越し女房。

袈裟　おはもじながら、今宵の固め。

亘　身共も勝手は存ぜぬが、きめ引とやらした上で、親類又は世間の披露目。

盛遠　女房と披露おしやるか。
亘　成る程、左樣。
盛遠　ハテサテ、それはおめでたい。得て戀には後先の、辨まへなきが思案の外。夫婦氣儘に暮らさうなら、浦の東屋、葎の宿、賤の手業でその日暮らし。ア丶、又それも喜見城。
亘　イカサマ、武張つた暮らしより、百姓か町人が、ましであらうか。
袈裟　そんならお前は、侍ひやめても、わたしを持つて下さんすかえ。
亘　オ丶〳〵、其方ゆゑなら、この大小も、コレ〳〵〳〵

ト大小を片寄せ

斯う丸腰の町人サ。
袈裟　それが眞實なら、嬉しうござんす。わたしも町家の事は、ちつとは見聞きしやんしたが、町方の内でも、裏家住居のおかみさんは、いかう樂なものぢやござんせぬかいなア。
長谷　イヤモウ、樂とも〳〵。お武家方と違つて町人には、居候ふといふ者がござつて、その日過ぎの手合ひでも、それ相應に部屋子もあるから、女房にならうなら、貧乏人が樂でようござります。
亘　イカサマ、大名高家では、居候ふとやらが無いゆゑ、不自由でござらうて。して、盛遠どのには

その町家の暮らし方を、御存じでござるかな。

盛遠　成る程、少々は承り及び居るて。

亘　それは幸ひ、ちとこれで、お話しなされぬか。

盛遠　イヤモウ、うろ覺えでござるが、お望みとあらば、お聞かせ申さうか。

亘　承らう〳〵。

ト思ひ入れ。

長谷　流石は盛遠さま。天晴れのお心掛け。よい事を御存じでござりまする。ハヽヽヽヽ。

盛遠　イヤモ、別して變りました儀はござらぬが、町家では、亭主が商賣に出ました跡は、得て女房は長家歩きか、又は炬燵へ首ッ切り入りまして、晝寢ばかり致すさうにござるて。

袈裟　さうぢやといな。勇みとやらのかみさんはナ

ト鼻紙を切つて、丈長のやうに引裂き、髪上げをして

斯う丈長で鉢巻きをしてナ

ト寢轉びし思ひ入れにて

斯ういふ風俗でナ、鼻唄うたうて暮らすわいな。

亘　イヤ、これは怪しからぬ身持ちぢやの。

ト思ひ入れ。盛遠、手拭掛けの手拭を取り、肩へ掛けて

盛遠　それ〳〵、女房がさうして居る所へ、亭主が斯ういふ身で、歸つて來やうがの。

ト思ひ入れして

嚊アや、寒いに、てめえ、うたゝ寢か、風邪を引かうぞよ。辻番でも抱へてゐやな。

亘　エヽ、寒い時には町家では、辻番を抱へまするか。アノ辻々の固めの番屋を、抱へまするかな。

これは珍事々々。

長谷　モシ〳〵、辻番を抱へるとは、行火の事でござります。

亘　アヽ、火鉢の事かな。

盛遠　サア、今のやうに亭主が歸ると

袈裟　おかみさんは、矢ッ張りこの形で……オヤ、いゝ所へ歸りなさつた、お前、そこに埃を掃き寄せて置いたよ、捨てゝくんな、そして、歸りに水を一杯汲んでくんな、ほんに今日は寒かつたの。

盛遠　オット、呑みこんだ。コレ、米は仕掛けてあるか。

袈裟　まだサ、どうして米を仕掛ける間があるものかね。

盛遠 そんなら次手に仕掛けて置かう。いゝ加減に出しや。
袈裟 なにサ、米も云つてやらにやアならねえよ。
盛遠 二朱が米が、もう段切りか。
袈裟 オヤ、百買ひだもの、その筈だわな。いま持つて來いと云つてくんねえ。
盛遠 又お使ひか。あやまるの……コレ、お齒黑が、こぼさずにあるぞよ。
袈裟 捨てゝおくれ。
盛遠 おかたじけない、いゝ小僧を置いたの。コレ、てめえマア、一日何をしてゐる。
袈裟 何をするものか、仕事サ。
盛遠 イヤ、仕事も凄まじい。
袈裟 なぜえ。
盛遠 知つてゐるわえ。戸を横にして長屋歩きか。それで何が出來るものか。
袈裟 べゝゝゝ。
ト思ひ入れ。亘、呆れて
亘 ハテサテ、町家といふものは、女子も一通りではござらぬわえ。

長谷　イエ〳〵、この位な所は、まだ口元でござります。
盛遠　コレエヽ、引摺り女房も見たが、われがやうな遊び好きは、あんまりあるまいよ。
袈裟　オヤ、わつちが遊んで歩くと、誰れが云つたえ。
盛遠　誰れでもサ。
袈裟　その云つた人を出しねえ。お前こそ長屋歩きをして、かみさん達を冷かすのが癖サ。
盛遠　また熱くなつて、亭主の讒訴か。引もく題目も久しいものだ。ふざけると、イケ口をつん裂くぞよ。
袈裟　口があるからきくに、お構ひでない事よ。
盛遠　うぬ、そのイケ口を。
　　ト立ちかゝる。亘、長谷平、ウロ〳〵して居たりしが、両方よりこれを留めて
長谷　オツト待つたり。爰から彼の、向う三軒両隣りの、亭主なぞが取さへに参るて。
亘　それは、どういふ風でござるな。
長谷　マア〳〵、大概にやつて御覧じませ。
亘　こぢつけて見ようか。

ト思ひ入れして

これサ〳〵、御亭主、何か委細の譯は知らねえが、鎭まいねえな〳〵。長屋の手合ひも、聞えねえ顔もならねえわな。アレ、大家さんも、お危なうござりやす〳〵。

長谷　これはしたり、温なしくもない、どうしたものだ。何か譯は知らねえが、夫婦喧嘩も世間へ對して外聞が惡い。かみさんも、宿六も、大概な事は、この家主に下さい。大家が貰ひました。

盛遠　モシ〳〵、大家さん、隣りの旦那、お構ひなされまするな。打つちやつて置きなさりやせ。どうふん張りめ。

袈裟　エヽ、また大風な事をきいて、呆れるワ。

亘　これサ、かみさん、默らつしやいな。男には負けうちだわな。

袈裟　負けてゐると、方圖が無えわな。

盛遠　聞きなさい、あの口だわな。

袈裟　アイ、わつちやアあの口サ。

亘　これサ、逆らふが惡い。一體、道行は解つてゐる話しだ。宿六も靜かにしなさいな。

長谷　一體、夫婦喧嘩といふやつが、互ひに不肖の無いからの話しだ。投打ちをしたところが、てんで

んの身で身を食ふやうなものだ。始末やひは、家主が呑みこんだ。わしが貰ひましたく。
盛遠　モシ、大家さんの前でございますが、年中三界、あの口ゆゑ、お長屋を騒がせ申しやす。
袈裟　騒がせるのも、ぶち擲きをしなさるからの事。
盛遠　狂人ぢやァあるまいし、默つてゐる者を、誰れがぶち擲きするものだ。
袈裟　それ見な。默つてゐる者を、お前は擲つよ。そんならお前は狂人か。
盛遠　ナニ狂人だ。うぬ、その腮骨を
　　ト立ちかゝる。
亘長　これサ、氣の短かい。
　　ト支へる事。この時、盛遠の懐より三建目の院宣、錦の袋より出かゝりしを落す。亘、思はず取つて
亘　こりやコレ正しく法皇より
長谷　下し賜はる院宣ならずや。
袈裟　さては、いつぞや
盛遠　ヤ。
　　ト思ひ入れあつて、前なる銚子を取つて、上の方の軒に吊せし半鐘へ打ちつける。この音を合ひ圖と

心得・洞の中より槍を突き出す。皆々愕りする。長谷平、この槍を捕へ、引き出す。雲夜叉、ツカツカと出て立廻り、此うち盛遠、亘が持つたる院宣を奪ひ取り、立廻りあつて懐へ納める。長谷平、雲夜叉を引敷く。

長谷　さてこそ曲者。

盛遠　エイ。

ト手裏劍を打つ。雲夜叉に當り、苦しむ。

袈裟　ほんに怪しい。

長谷　あなたのお手討ち。

亘　盛遠どの、

ト立ちかゝる。

盛遠　上使。

三人　なんと。

盛遠　時忠卿より内意の上使、亘を始め有りあふ兩人、立騷がずと、下にお居やれ。

三人　ハヽア。

ト四人見合つて、雲夜叉、見事にかへる。三人、平伏する。爰にて管絃の頭を打込む。盛遠、キツとなつて床几にかゝる。

盛遠　別儀にあらず、玉倉の君、この神護寺に御座あるところ、附添ひ申すは左衛門亘、定めて委細は知りつらん、頼政密かに君に謁し、謀叛の聞え。御痛はしくは候へども、君の御首討ち奉り、清盛へ送りなば、平家方にも疑ひ晴れ、萬民の憂ひもなく、行く末めでたき天下の榮え。今宵、亥中の月魄を合圖に、君を討ち奉り、御首を渡されよ。役目は卽ち左衛門亘、この儀了承いたしてよからう。

亘　すりや、我が君の御首を、亘に討ち奉れよと、時忠卿より盛遠どの、貴殿の御上使とな。

盛遠　いかにも。

袈裟　左樣なれば御內意にて、討ち奉る今宵の仕儀、其お役目は亘さま。首級を御持參なさるゝは、盛遠さまの御役目。

盛遠　違背に及ばゝ盛遠が、手を下ろしても討ち奉る。されどもこれまで附添ふ亘、君に近寄り人知れず、御首を賜はれよと、事荒立てぬ內意の上使。得心あつて、討ち奉るか。

亘　サ、その儀は。

盛遠　但し盛遠、手を下ろさうか。
亘　サ、それは。
兩人　サア〳〵〳〵
亘　いかにも君の御首を、討ち奉るでござりませう。
袈裟　エヽ、すりや御得心あつて
長谷　亘さまには。
亘　討ち奉るも國家の安堵。勿體なくも臣下たる、亘が介錯申すでござらう。
盛遠　こりや、さうなうては叶ふまい。まだその外に袈裟御前、其方にも用事がある。
袈裟　合點のゆかぬ盛遠さま、今宵の上使は聞えしが、妾には又、何の御用ござりまして。
盛遠　袈裟御前には清盛どの、心をかけしと聞きしゆゑ、時忠卿の計らひにて、連れ來れとの仰せあれば、身共が同道仕る。この場に叶はぬ。其方は別間へ。
ト袈裟の手を取る。
袈裟　すりや、この袈裟を清盛公の、お寢間の伽にと、時忠さまのお取持ち。この身にとつては冥加至極、有り難い事なれど、最前も申す通り、今日今宵、亘さまと二世かけて

盛遠　夫婦になつたゆゑ。
袈裟　おはもじながら
亘　袈裟は亘が宿の妻、たとはゞ舞ひ子白拍子、召さるゝとても、主ある女を。
盛遠　たとへ夫婦にならうとも
亘　理非辨まへぬが、平家の我まゝ。
袈裟　でも、現在、主あるわたしを
亘　イヽヤ、其方は行かずばなるまい。
袈裟　清盛さまへ、アノわたしを
長谷　差上げんとは、亘さま、あなたの胸中、何とやら。
亘　云はねど袈裟も、其方も、覺えぞあらん、落ちたる院宣。
盛遠　ヤ。
亘　サ、行きやるが其方の身の出世。合點がいたら、盛遠どのと、ナ、同道いたして
ト懷中の院宣へ思ひ入れ。
袈裟　そんなら、今宵の役目も濟み、歸宅の折は、あなたと同道。

長谷　誠に、女は氏無くして、玉の輿より有り難い、清盛さまの思ひ者。
袈裟　盛遠さまと同道して、西八條のお館へ、ナ、モシ……必らず氣遣ひなされまするな。
ト思ひ入れ。
盛遠　得心あつて身共も滿足。君の御首受取るは、內意のお使ひ、身が役目。服改めて、實檢いたさう
亘　拙者も用意いたさんが、して又、時刻は。
盛遠　亥中の月魄。
長谷　上がるを合圖に
盛遠　見事討つかよ。
亘　おんでもない事。
袈裟　役目終らば
盛遠　其方を同道。
ト袈裟を引附ける。立廻り。袈裟、盛遠が懷中より、院宣を引出して
袈裟　こりや最前の
ト亘、長谷平、立ちかゝる。盛遠、ちやつと懷中して

盛遠　時刻違へな、左衛門亙。

亙　盛遠どの。

ト立ちかゝる。

長谷　アモシ……御兩所樣。

ト思ひ入れ。

盛遠　相待ち申さう。

ト唄になり、思ひ入れあつて、盛遠に袈裟附いて、奥へ入る。亙、長谷平殘る。合ひ方、暮れ六ッの鐘。

亙　すりや、盛遠は我が君へ對し、御痛はしき內意の上使。

長谷　その討つ役は亙さま、近頃以て

亙　ヤ。

長谷　御心中、察し入りまする。

ト兩人、思ひ入れ。合ひ方にて、奥よりかなる出て來る。この時、諸所に燭臺を立てる。

かを　亙さま、これにお出でなされましたかえ。

亘　其方はかをる、今日思はずも爰へ來た、袈裟御前が事につき、身をつれない者とも思やらうが、これには段々

かを　アヽイヤ、亘さま、これまであなたと、一度の枕は交さねど、幼なき頃よりの云ひ號け、袈裟御前とは又格別。近頃さしつけな事なれど、どうぞわたしと女夫の杯、なされて下さりませいなア。

亘　これはしたり、藪から棒な其方の頼み。尤も身共、云ひ號けとはいふものゝ、亘は玉倉君へ仕へる武士、心解けざる平家の武士、あの重能の

かを　その父上と縁切るとも、今宵あなたと添はひでは、女子の操が

亘　立たぬと云やるか。

かを　アイ。

亘　そりや又、なぜ。

かを　君の御身の大事ゆゑ。

亘　ヤヽ、なんと。

ト合ひ方。

かを　勿體なくも我が君を、お討ちなさるゝお心かえ。
亘　サ、討つべき所存はあらねども、內意の上使はあの盛遠、退引きならず
かを　お討ちなさるゝお心あらば、雪を墨とは思へども、似つかぬまでも
ト亘へ差寄る。亘、思ひ入れあつて
亘　すりや、一旦の云ひ號け、つれなき我れにさほどまで、武道立てさす心なるか。
かを　お役に立てば
亘　命惜しまず
かを　アノ我が君の
ト云はうとして、下に扣へゐる長谷平と顏見合せる。
亘　他聞の手前。
ト長谷平へ目を附ける。長谷平、こなしあつて
長谷　アヽ、役にも立たぬ所に、うから〳〵と、私しと致した事が、ドリヤ、部屋へ參つて、休息仕りませうか。
ト捨てありし槍を見附け

ほんに、今あの內から、突き出したこの手槍。すんでの事に、危ない事。ドリヤ、古鐵買ひにでも、拂つてしまはうか。

ト手槍を引ッ提げ

亘さま、これにお出でなされませ。

ト奧の方へ行かうとする。

亘　下部、待て。

長谷　ヘイ、御用でござりまするか。

亘　いかにも。

長谷　左樣なれば

ト立戻り、槍を下に置き

何御用でござりまする。

亘　其方への用は。

ト側にありし槍を取つて、突いてかゝる。長谷平、身をかはし、よろしく立廻つて、拔打ちに槍の鹽首を切り落し、白刃をシヤンと納め、思ひ入れあつて

長谷　亘さま、こりや何となされまする。

亘　天晴れ早速の立振舞ひ。いま突きかけし槍先は、云はゞこの場の判じ物。

長谷　エヽ、輝めく槍が、この下郎への判じ物。ハテサテ、怖い判じ物でござりまする。

亘　其方に手覺えなき時は、持参の槍で我が身を貫く、危ない事。サ、それが即ち判じ物。

長谷　下郎もさこそと存じたゆゑ、拙者が持参のその槍で、人は突かいで持ち主の、却つて命が危ないゆゑ、拙者が刀で槍先を、切つて捨てたは自業自得。身も願ひある二合半。例へば親子兄弟でもこの身の仇となる時は

亘　そちや、スッパリと切つて捨てるか。

長谷　仰せまでも候はず、君命なれば是非なくも、義朝どのは、父爲義を討つたる例し。我が身の野間で、突かれぬ用心。

亘　刃は人を害すといへど

長谷　天下の亂を鎭むるも

亘　刃にまさる物あらんや。

長谷　君の御身の大事は今宵。他言いたさぬ下郎が金打。

ト思ひ入れある。

亘　それにて安堵。

かを　誓言見たる上からは、わたしが願ひを

亘　叶へてくれん。

かを　エヽ、嬉しうござんす。

ト思ひ入れ。

亘　健氣の振舞ひ。

かを　せめて未來は

亘　一つ蓮に。

かを　それが樂しみ……お役に立てゝ。

ト亘、こなしあつて、刀を拔かうとする。長谷平、手早く側の紅葉に吊せし風鈴を取つて、かをる目當てに打つ。誤たず、かをるの眼尻へ當り、疵つく。亘、驚ろく。

ヤ、わたしが面へ。

長谷　疵ものなれば君樣の

亘　お役に立たぬ妨げは
長谷　御身替りが相違いたした。
亘　なんと。
かをして又、君のお命に
長谷　替るは下郎がよき幸ひ。
トきつと云ふ。亘、こなしあつて
亘　アノ、君様の御首、似ても似つかぬ下部の其方が、代りたいとは。
長谷　卽ちこれにて。
ト袱紗を差出す。亘、取上げ見て
亘　「涙川、袖に流るゝ水の泡。
トよく〳〵見て、懐より最前袈裟より受取りし袱紗を出し、引合せ見て
よるこそまされ、消えかへりつゝ」。歌も連續、手跡も同じ、上下分けし、袱紗の歌は。
長谷　その上の句は下郎めが、父の形見の袱紗の詠み歌。
亘　これぞ最前、袈裟御前、母の形見の袱紗ぞと、渡し置いたる下の句へ

長谷　この上の句の手跡も一つ。さてこそあなたの面體を、お役に立てぬ下郎が寸志。

かを　役に立ていで、まだ外に

亘　君の替りに仕立てるは

長谷　それこそ御所持のその袱紗。

亘　こりや袈裟御前が渡したる

長谷　一對揃ふ袱紗の手跡。

かを　記せし歌は涙川、袖に流るゝ水の泡。

亘　よるこそまされ、消えかへりつゝ。

ト袱紗を長谷平へ渡す。二つの袱紗を持ち、思ひ入れあつて

長谷　同胞二人、思はずも、よるこそまされ、消えかへりつゝ……同胞よれど消えてゆく、今宵のお役に

亘　立てる所存か。

長谷　それゆゑに、あなたの面へ

かを　附けたる疵も

長谷　兄が不覺の申し譯。

亘　切るべきものは

長谷　卽ち御所持の

亘　袱紗の下の句。

長谷　その持ち主を

かを　エ。

　　ト驚ろく。

長谷　モシ

　　ト思ひ入れにて、件の二つの袱紗を懷中する。亘も愁ひの思ひ入れ。この時、五ツの時計聞える。三人、思ひ入れあり

亘　君の御身の

長谷　消えゆく知死期。

かを　死おくれしか。

　　ト立ちあがるを

長谷 コレ。

ト留める思ひ入れ。唄になり、捨て鐘入りにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、九尺の障子屋體、すべて神護寺庭先の道具。石の手水鉢、石燈籠、植込み。屋體の内に短檠などともしあり、盛遠、上下衣裳に着替へ、袈裟の帶先を捕へゐる見得。合ひ方、時の鐘にて道具とまる。

ト袈裟、振り切るを盛遠、立廻りにて、無體に引附けんとする。

袈裟 待たしやんせ、盛遠さん、先刻にお前の云はしやんすには、君の御首實檢の役、殊更わたしを清盛さまへ、お連れなさんす役目もお前。さほど公用しげき身で、わたしを捕へてあじやら事。そんなら、お前が云はしやんした

盛遠 清盛公へ伴なふと、亘が前で云うたは僞はり、誠は身共が袈裟御前、其方に眞實惚れたゆゑ、これまで數度の文玉章、情の詞もあらばこそ。それといふのも戀の仇、亘といへる主あれば、所詮願ひは叶はねど、思ひ込んだる上からは、今宵にまさる首尾あらんや。否でも應でも自由にする。袈裟御前、色よい返事を、聞かしてくれい。

袈裟　すりや、どうあつても盛遠さま、色よい返事をせぬうちは

盛遠　いつかな放さぬ、動かさぬ。コレ、袈裟御前、身も侍ひの一分捨て、これ程までに事を分け、云ひ聞かすのに得心ないか。いかに主ある身ぢやとても、そりや胴慾といふものぢや。コレ、一度の枕を交してくれい。

ト袈裟、思ひ入れあつて

袈裟　エヽ、お情ない盛遠さま。モシ、武士は二君に仕へぬ掟、女は二人の夫を持たずといふ事は、お前も御存じあらうがな。

ト思ひ入れあり

たとへ此まゝ殺されても、仇に枕は交されませぬ。

トきつと云ふ。盛遠も思ひ入れあつて

盛遠　さほどにまでも某に、靡かぬ心の袈裟御前。こりやモウいつそ

ト無念の思ひ入れ。

袈裟　切らしやんすか。お前も面が立ちますまい。サ、殺して下さりませ。武士が立たずばスッパリとお前は切る氣でござんせう。

盛遠　イヽヤ、切らぬ。

袈裟　エ。

盛遠　其方が申すが皆尤も。何しに切らう、憎うはない。貞女のわが身に恨みはない。たゞ憎くきは左衞門亘、恨みは眼前、寸々に

袈裟　すりや、寸々に切らしやんすか。

盛遠　切るは院宣。

ト懷中より院宣を取出し、破らんとする。袈裟、縋つて

袈裟　ナニ院宣とは、さては先刻の

盛遠　身が懷中に所持せし院宣、兵衞佐賴朝へ、密かに賜はるその砌り、使ひは卽ち長谷部信連、失ひたりし越度にて、その身も埋れ木、あまつさへ、當寺に座する君の御難儀、いま眼前に引裂き捨てなば、君方はじめ信連まで、旗揚げ叶はぬ、その時は、亘も共に側杖の、吠え面見るのがまだしも腹癒せ。イデ、寸々に。

ト破らんとする。袈裟、縋つて

袈裟　早まらしやんすな、盛遠さま、それ失うては、夫ばかりか兄さんの

盛遠　サ、それゆゑ眼前
袈裟　アヽコレ、待つて。
盛遠　留めるは色よい返事を致すか。
袈裟　サア、それは。
盛遠　但し、この座で寸々に
袈裟　アヽコレ、それを。
盛遠　返事いたすか。
袈裟　サ、それは。
盛遠　引破らうか。
袈裟　サア、それは。
兩人　サア〳〵
盛遠　返答ぶたぬか、袈裟御前。
　　　トこれにて袈裟、泣き落し、こなしあつて
袈裟　いかにも返事いたしませう。

盛遠　そりや眞實か袈裟御前。色よい返事いたすとあらば、この院宣は、即ち其方へ。

ト差出す。袈裟、見て

袈裟　すりや、此まゝに、アノわたしに。

盛遠　其方へ渡せば、いづれへなりと、盛遠所持して益なき品。さはさりながら今よりは、身が女房ぢや、合點か。

袈裟　アノ、馴染を重ねし亘の緣を

盛遠　切らせて身共が、女房に持つ。

ト袈裟御前、思ひ入れあつて

袈裟　成る程、お前の望みの通り、今宵のうちに

盛遠　亘が首討て。

袈裟　エ……そりや何ゆゑに。

盛遠　助け置いては盛遠が、寐覺めの惡いあの亘、命取らねば安堵して、この院宣は渡されぬ。

袈裟　わたしに僞はりなけれども、女子の身で、どうして殿御を

盛遠　討つべき心あるなれば、手引きを致せ。

袈裟　エ。

　　　ト思ひ入れ。

盛遠　其方は亘が臥床へ手引き。首は盛遠申し請け、それで夫婦の三々九度。

袈裟　手詰めの詞、その院宣、わたしに賜はるものなれば、道ならぬとは思へども、いかにも手引き

　　　ト思ひ入れあつて

　致しませう。

盛遠　それにて滿足、さりながら、君の御首賜はる亘、よもや、今宵は油斷なく

袈裟　思案の胸を休ませる、手段はわたしが假御所の、寢間へ忍んで進むる酒、熟醉あつて打臥しなば

盛遠　それぞ屈竟、暗まぎれ、常の臥床は御寺の坂口、東の別間が慥かに寢殿。亘を討つて歸りがけ、

　君の御首賜はらば、重ね〴〵の身の出世。

袈裟　して又お前の忍び入る、その刻限は。

盛遠　二十日亥中の月魄の、上がるを待つて庭傳ひ。

袈裟　幸ひ君より賜はりし、小枝の笛の音、聞える方。

　　　ト笛を出す。

盛遠　座敷の灯し火、吹き消しなば

袈裟　南枕の洗ひ髪、それをしるしに忍び入り

盛遠　亘の首が、今宵の島臺。

袈裟　夫婦の固めは

盛遠　願ひの院宣。

　　　　ト渡してやる。

袈裟　エヽ、嬉しうござんす。

盛遠　必らず合圖を

袈裟　違へぬやうに。

盛遠　それも合點。

袈裟　盛遠さま。

盛遠　コリヤ。

　　　ト思ひ入れ。捨て鐘、唄。盛遠、思ひ入れあつて、ツカ〳〵と下座へ入る。袈裟、跡を見送り、院宣を、よく〳〵見て

袈裟　これが欲しさに道ならぬ

　ト涙にむせぶ思ひ入れ。長谷平、よき時分より、萩垣の蔭に窺ひゐて、この時、ツカ〱と寄つて、持つたる二つの袱紗を袈裟にさしつけ

長谷　父頼行の形見の袱紗、歌の連續。

袈裟　上の句御所持の、お前の素性、疑ひもなき

長谷　其方は離別の母人の

袈裟　手鹽にかけての御養育。

長谷　幼なき砌りに別れしゆゑ

袈裟　お顔も知らぬ同胞の

長谷　眞實親身の妹であつたか。

袈裟　お前は兄上、信連さま。

長谷　院宣失ひ、手がゝりも

袈裟　詮議の爲と聞いたゆゑ、心に思はぬ貞女を破つて。モシ

　ト院宣を見せる。

長谷　こりやコレ、尋ぬる

袈裟　手に入れん爲、女子の操を

ト縋つて思ひ入れ。

長谷　捨てさすも皆、この兄が

袈裟　不忠のお詫びに、命一つを。

長谷　それ程までに。

袈裟　モシ

長谷　コリヤ。

ト此もやうよろしく、ひやうし幕の内、管絃にてツナギ、引返し。

幕

本舞臺、三間の間、正面、誂らへの石段。上の方に、塗り骨障子を閉てたる高殿。下の方、黒木の柵矢來。舞臺一面に紅葉の大樹。空に半月現はれあり、爰に又五郎、重若、龍田、玉倉の君の警護をなし、群がる鼠に目を附けゐる。三味線入りの本神樂、ドロ〳〵にて幕明く。

ト鼠、大分、玉倉の君へ群がる。又五郎、思ひ入れあつて

又五　ハテ、心得ぬ怪鼠の有樣、密かに當寺を忍び出で、君の御供なさんずと、窺ふほとりに、アレアレアレ

玉倉　群がり集まる妖鼠は正しく、落命なしたる賴豪が

又五　一念凝つたる魂魄の、佛經喰ひ裂く荒れ鼠、君を目がけて立ちよるは、ハテ恐ろしき、念力ぢやなア。

ト どろ〳〵にて、矢張り群がる。

怨敵退散々々々々。

ト拔いて切り拂ふ。鼠、立ち去る。思ひ入れあつて

龍田　イザ、この隙に、片時も早く。

重若　御隱れ家は宇治の果。

玉倉　供せよ、唱。

又五　ハツ。

ト行かうとする。景純、股立ち取り、凜々しき形にて、先に立ち、侍ひ二人、四天の形、手槍を掻い

こみ、出かゝりゐて

景純　ソリヤ。
侍ひ　動くな。
又五　わりや早見兵藤だな。
景純　衞士の又五郎、見附けたワ。
侍一　頼政方より玉倉の、君に附け置く丁七唱。我れ〱とても忍びの間者。
侍二　當寺の四方を取圍めば、最早遁がれぬ籠の鳥。君を渡して
三人　覺悟なせ。
又五　道の狼藉氣遣はし。君には一先づ別館へ。
龍田　イザ、君樣には
玉倉　さうぢや。
　　ト石段へかゝる。
景純　手柄は身共。
　　トかゝる景純と、又五郎・立廻りあつて、景純を當てる。侍ひ二人、玉倉の君の跡を追ひかけようと

する。重若、この兩人を引廻し、キツとなつて

重丸　大切なる我が君に、指でもさしたら重若が、太刀の刃金の湯となるまで、切つて〳〵切りまくるが、そこおツ開いて、通すまいか。

兩人　小癪な、うぬから。

トかゝる。

重若　なにを。

兩人　どつこい。

ト重若、兩人を相手に立廻りあつて、又五郎、侍ひの一を引廻し、ポンと切る。重若、侍ひの二をポンと切る。又五郎、見て

又五　天晴れ手の內。重若には、この由密かに小松さまへ。

重若　心得ました。唱さま。

又五　お行きやれ。

重若　合點だ。

ト一散に向うへ入る。この時、景純、心附き、行かうとする。又五郎、引留める。龍田、介抱して、

玉倉の君は石段を上がり、屋體の内へ入る。景純、又五郎を振り切り、追ひかけ入る。又五郎も追ひかけようとする時、下の方矢來の内にて、バツタリと音する。又五郎、思ひ入れあつて

又五　君の御身も氣遣はし。ソレ

ト管絃にて、石段を上がり、屋體へ入る。矢張り管絃にて、物音して、柵矢來、バラ〳〵と倒れる。この時、四ツの鐘聞え、盛遠、股立ちにて、矢來の蔭より、窺ひ〳〵出てくる。白刃をシヤンと納める。この時、空の半月へ覆かゝる。盛遠、キツと思ひ入れあつて

盛遠　時刻も合圖の亥中の月魄。戀の仇なる、亘が臥床は。

ト上の高殿をキツと見る。障子の内に灯あつて、笛の音する。

さてこそ笛の音。

ト思ひ入れ。障子の内の灯、消える。盛遠、頷づき、目釘をしめし、窺ひ〳〵石段を上がり、高殿へ忍びこむ。矢張り時の鐘、管絃、向うバタ〳〵にて、亘、上下衣裳にて、走り出て來り、花道にて思ひ入れあり

亘　いま打つたるは慥かに後夜、痛はしくも我が君の、御首賜はる亘が役目。盛遠來らぬその先に、君を窃かに御供なし、この場を立退き、人知れず

ト高殿をキッと見て

ヤヽ、燈の消えしは、いぶかしい。

トためらひ見る。障子の内にて「エイ」と掛け聲して、障子へ血烟り立つ。亘、思ひ入れあつて

ヤヽ、太刀音せしは氣遣はしい。殊に覺えぬ胸騷ぎ。事こそあらん。

トつか／＼と本舞臺へ行き、高殿の方にバッタリ音するゆゑ、亘、下手にて窺ふ。時の鐘、忍び三重にて、石段の上へ盛遠、拔刀、髻切りし女の切り首を提げ、窺ひながら出て來り、石段中程まで下りて來り、キッとなつて

盛遠　筑波山、葉山茂山しげけれど、思ひ入るにはさはらざりけり。爰は所も高雄山、紅葉を分けて入る月の、木の間隱れを幸ひに、宵の合圖に違ひなく、南枕の洗ひ髮、不便ながらも一討ちに。これで戀慕の雲も晴れ

トきつかけにて雲晴れて、半月現はれる。爰にて盛遠、切り首を空へ向け、月にかざして見る。亘、ツカ／＼と行つて、石段に片足踏みかけ、股立ち取つてキッと見上げる。途端、一度の思ひ入れ。鳴り物變る。

正しく亘と思ひしに、こりやコレ面體

ト思ひ入れ。

亘　さいふは慥かに盛遠ならずや。殊に怪しき首級の様子。さては身共を出し抜いて、君の御首討つたるよな。

盛遠　さては亘は存命なりしか。されども我れに討たれしは

ト切り首を、よく〳〵見て

こりやコレ可哀や袈裟御前。

亘　ナニ、袈裟御前を討ちしとや。そりや何ゆゑに、女が一命

盛遠　殺す心はあらざれど、身が所持なせし院宣に、心をかくる袈裟御前、我れに便つて與へよと、云ふを幸ひ盛遠が、日頃の思ひはこの時と、亘を殺す手引きさせ、直ぐにその座で院宣渡し、戀には迷ふ煩惱の、戀慕の闇の暗まぎれ、亘と思ひし掻き首も、心をかけし女であつたか。ホヽ、ホイ。

ト首を抱へて思ひ入れ。

亘　さては盛遠、橫しまの、戀慕に我れを亡きものと、道に背きし人非人。されども合點ゆかざるは故なき女が院宣に、心をかくる覺えもない。それぞ正しく

ト思ひ入れあり

何は兎もあれ差當る、袈裟が敵の遠藤武者、其方が一命申し受け、容易く君の御供なさん。サヽ立ちあがつて勝負なせ。

盛遠　僞はり表裏の袈裟御前、我れを騙かり奪ひし院宣、正しく汝が所持なさん。返し與へよ、左衞門亘。さなきに於ては其方も、共に冥土の道連れさす。まづ差當る玉倉の

ト行かうとするを、亘とめて

亘　イヽヤ、汝にやみ〳〵と、君の太刀取り、思ひもよらず。殊さら院宣、存ぜぬ知らぬ。妻が女敵武士の意地。討ち討たるゝは時の運。

盛遠　見事亘は、盛遠討つかよ。

亘　おんでもない事。

盛遠　然らば、この場で。

亘　イザ

盛遠　イザ

ト立別れてキッとなる。これより大小入りの合ひ方にて、兩人、花々しきタテあり、兩方、刀を投げすて、互ひに髻へ手をかける。この時、一度に摑んだる髻ぶし取れて、左右に別れ、互ひに驚ろき

盛亘　ヤヽ、髻切りしは、ハテナア。

ト思ひ入れ。よき時分より長谷平、上下大小に着替へ、手燭を袖にて隠し、石段より窺ひ出て來り

長谷　ヤレ早まられな、盛遠、亘。

ト手燭を差出す。兩人、見て

盛遠　そちや最前の下部ならずや。

亘　衣服大小改めしは、さては、おことも

兩人　我が君の。

長谷　長谷部長兵衛信連が、一先づ御所を退きしも、白川の法皇より、平家の一門追討の、兵衛佐へ賜はる院宣、密かに持參の御使ひ、身が手の者にて送りしところ、嚴島明神にて、六波羅武者に奪ひ取られ、申し譯なく身を蟄し、時節を窺ふ其うちに、君には當寺へ御入りゆゑ、平家の我まゝ氣遣はしく、下部となつて附きそふ某。最前聞けば袈裟御前、所持の袱紗に一首の歌。我れも覺えの上の句は、疑ひもなき兩親の、離別の砌り證據の品。妹もさこそと知つたるにや、この院宣を身に渡し、盛遠に討たるゝ覺悟。

ト院宣と袱紗を出す。

亘　亘もさこそと察せしが、玉倉の君の御大事、今宵に限る手詰めゆゑ、我が胸中も打明かし、夫婦の義理にて袈裟御前、御身替りに頼まんと、さてこそ拂ひし我が髻。

盛遠　亘へ操の袈裟御前、それと知りつゝ横戀慕、無體の戀を仕掛けしは、我が懐中の院宣に、心をかくるは只者ならず。正しく君へ御味方、ゆかりの女と知つたるゆゑ、亘を殺す手引きせよ、さあらば院宣渡さんと、詞詰めにて手渡しなせども、夫の亘が身に替り、死ぬる覺悟と見てとつて、不便ながらも首討つて、君の御首と僞はる心底。身は北面の武士なれど、父判官は平家の祿人。その高恩を受けながら、院宣渡さば道立たずと、心の内に義に義を立て、渡せし女を討つたれば天理に叶ふ心の潔白。たゞ不便なは袈裟御前。跡弔らはんとこの如く、髻切つたる盛遠が

亘　所存は變らぬ互ひの胸中。君の御身に替へんずと、思ふ心を推量なし、嘆きを見せじと先立ちしは、天晴れ貞女の鑑といはん。

盛遠　亘は格別、盛遠は、手にかけたりし極惡人。御身替りの事濟まば、妹の敵と眼前に、我れを討たれよ、長谷部信連。

長谷　イヤ、その詞、理に違へり。君のお役に立たずとも、源家の武士のこの兄へ、院宣渡せし妹こそ平家方には切り刻むとも飽きたらんや。袈裟が千筋の黑髪も、輪廻も共に切り髮の、菩提に入る

も煩悩の、戀に事よせ厚き忠心、天晴れ劣らぬ武士とやいはん。

盛遠　互ひにそれと明かさねど

亘　心は一つ

兩人　一佛蓮臺。

ト兩人、肌を脱ぐ。亘は袈裟を掛けゐる。盛遠は六字の名號を縫つてある。此あたりより玉倉の君、簑笠にて、かむろ、又五郎、重若、龍田、紅葉、附いて石段より窺ひゐる。

長谷　ホウ、賴もしき二人の心底。袈裟といふ名も佛緣に、導き給ふ

亘　發心

盛遠　法體。

亘　渡りに船の渡阿彌陀佛。

盛遠　盛りは衰ろふ盛阿彌陀佛。

長谷　せめて妹が佛果の爲、身は法體の盛遠どの、心をかけし院宣の、文を覺る文字を直ぐに、文覺法師と改名なし、袈裟が菩提は末の世に、殘すも鳥羽の戀塚と、兩僧、必らず賴み入る。

亘　仰せまでも候はず、跡弔ふ役は重源法師。

盛遠　あの世の苦患助くるは、今道心の文覺法師。

亘　亘に忠義を立てさせんと、健氣に捨てたる一命も

盛遠　我れに討たれて夫に代り

亘　死しての後は君に替り

盛遠　大道心を起させし

亘　これぞ誠の善智識。

盛遠　亘どの

亘　盛遠どの

長谷　思へば不便な

ト三人、顔見合せ、長谷平は切り首へ思ひ入れ。盛遠、ちやつと首を抱へて

三人　成行きぢやなア。

玉倉　さては信連、其方が、妹といふは袈裟御前、一年法皇より賜はつたる、院宣を取り得んと、亘に替り、その上に、我が身替りにならんず健氣さ。

かを　死ぬべき妾は面體に、受けたる疵にてお役にも、立たでこの身は生き殘り、添ふべき殿御は世捨

て人。

長谷　云ひ號けとはいひながら、今に一度の情さへ、受けぬも妹がなすところ。それを存じて其許の、面へ疵をおほせしも、死を止めたき拙者が寸志。

かを　その誠あるお心に、愛でゝ命は捨てずとも、せめてこの身は尼法師。

ト亘の刀へ手をかける。

亘　コリヤ、その志しあるなれば、我れに代つて君樣へ、父重能も味方あるやう、其方へ贈る亘が形見。

ト大小を取つて渡す。かをる、受取り

かを　この兩腰が、わたしの夫。

重若　姉上樣への云ひ號け、亘さまの名代は、弟の重若、わしや君樣へ御味方。

ト大小を取つて差す。

かを　オヽ、出かしやつたその詞。今より改め、其方は君方。

又五　忠義に命を捨てられし、袈裟御前のその首級、君の御首と僞はるとも、惡に凝つたる淸盛が、よも誠とは思ふまじ。さある時には、盛遠どの

盛遠　氣遣ひめさるな丁七唱。似せ物と云はさぬ證據は、卽ち君のこの名笛、袈裟が死體に殘りしは、これぞ幸ひ、首級に添へ、平家へ送らば、疑ひあるまじ。

ト笛を出し、首に添へて思ひ入れ。

長谷　我れは密かに君に供奉なし、忍ばせ申すは宇治の里、平等院に御案內、賴政味方に加はらば、諸國の源氏を語らひ集め

亘　平家の討手と聞く時は、宇治の橋板引き離し、寄せくる奴ばら水底へ、地獄落しの皆殺し。この重源は陸奥へ、修行といひ立て、秀鄕を、御味方に語らひ申さん。

長谷　文覺法師は伊豆の國、蛭ヶ小島へ立越えられ、賴朝に見參なし、この院宣を手渡しなし、東國に埋もれある、源氏のともがら相語らひ、伊豆相摸にて旗揚げの、軍勢語らふ卽ち綸旨。

ト盛遠に渡す。

盛遠　氣遣ひめさるな、文覺が、直さま伊豆へ走せ參じ、兵衛佐に斯くと語らん。さりながら、一先づ袈裟がこの首級、君の御首と時忠へ持參せん。先づそれまでは、矢張り上使の遠藤武者。

亘　先立つ妻が死首は、勿體なくも玉倉の、君に替りし身の果報。

玉倉　出家堅固の重源へ、麿が手の內遣はさん。これぞ祕藏の蟬折を、源氏類葉、招かん割符。

ト最前の笛を取つて渡す。亘、取つて

亘　ハツ、然らばこれより

盛遠　南無阿彌陀佛。

かを　宇治へお入りの我が君を

龍田　御見送りは

紅葉　わたしら二人。

玉倉　信連、よきに。

又五　君には一先づ。

長谷　夜半に紛れて、忍びの道筋。

盛亘　信連どの。

ト思ひ入れ。經遠、景純を從へ、窺ひゐて

經遠　すりや、似せ首を

トかゝるを長谷平、立廻つて經遠を一太刀切る。玉倉の君、竹笠にて顔を隱す。景純、亘へかゝるを見事に投げる。又五郎、乘りかゝつて、長谷平もろとも、兩方へ止めを刺す。亘、これを見て、キツ

と氣を替へ、ツカ〳〵と東の歩みへかゝり、振り返り

亘　南無阿彌陀佛。

ト眼を閉ぢ、回向の思ひ入れ。盛遠、首を抱へ、ツカ〳〵と花道へ行き、振り返り、三方見合つて

皆々　さらば。

盛遠　これより二番目始まり、左樣に御覽下さりませう。

トかけりになり、盛遠、亘は向うへ入る、舞臺の人數、よろしき見得にて　　幕

知らせにつき、打込み。

第二番目　大切

宗清隱れ家の場

役名——煎茶賣り、喜三郎實ハ八丁礫の喜平次。植木賣り、尾上の松實ハ太夫之進朝長。若い者、勘八。同、甚六。藝者、お高。同、お累。駕籠舁き、權。同、八。下部、野間平實ハ橘七郎定重。梓巫女、眞弓。左馬頭義朝の亡靈。妾、白妙實ハ鎌田兵衞娘白妙。男禿、みどり實ハ今若丸。廻し男、惣八。下女、お霜。彌平兵衞宗淸。撞木町の傾城、常磐木實ハ爲朝娘逢島姫。駕丁、太郎八實ハ長田太郎景宗。

本舞臺、三間の間、正面、黒塗りの板塀、忍び返し附き、内に通したる二階。すべて伏見撞木町の廓の後を見たる景色。二階の内にて、拳を打つ聲聞え、清搔にて幕明く。

ト舞臺に權、八、駕籠舁きにて、四つ手駕籠を下ろし、呼びかけてゐる。二階にはお高、お累、藝者にて、若い者、客二人、拳を打ちゐる。

たゞ　さへなすむゆむめよ。

若者　うま〳〵。

權　ハイ、駕籠々々、お歸り參りませう。

八　旦那、お安く參りませう〳〵。

ト捨ぜりふ。下座と向うより歸り客、按摩なぞ行きちがひ、左右へ入る。

なんと權や、今夜は剛氣に寒いぢやァねえか。

權　どうぞ一杯やりたいものだ。

ト二階にて

たか　見なさんせ。どうでも雪になりさうぢやわいな。

るい　成る程、こりや、後には雪でござんせうわいな。

若者　寒いに、障子を閉てやせうか。

たか　さうしやんせう。

ト障子を閉てる。

權　イカサマ、こいつは雪になるわえ。

八　その所爲か、少し疝氣が兆した。

ト捨ぜりふ。流行り唄になり、二階には拳を打つ聲する。向うより野間平、紺の布子、草履取りの形にて、一本差し。三ツ大の紋附いたる小箱の提灯をともし、出てくる。跡より、勘八、女郎屋の若い者にて、スタ〳〵と出て來り、舞臺へ來て

勘八　コレ〳〵、野間平どのか。どこへ行つたのだ。

野間　オヽ、勘八か。おらァ旦那の供で、上烏羽まで行つたが、おぬしは大分忙がしさうだの。

勘八　イヤモウ、いつもながら、忙がしいのよ。シタガ、この間は旦那は、廓へ、すつきりとお出でがないの。

野間　そりやァその筈の事よ。其方の内の花魁、常磐木さんは、見世を引いて居るではないか。

勘八　成る程、常磐木さんが引いてござつちやァ、旦那もその筈の事であらう。それといふも、花魁と、

其方の旦那は、世間中で誰れ知らぬ者もない仲だから、親方が見世を引かせたも、まんざら無理でもあるまいかい。

權　ハイ駕籠々々。旦那、お歸りを召しませぬか。

野間　オヽ、幸ひな所に駕籠の衆。あんまり夜風が寒いから、後の茶見世へ旦那を殘し、駕籠を雇ひに來た。サア〳〵、早く行つて下さい。

八　ハイ〳〵、心得ました。

權　モシ、大和屋といふ茶屋かえ。

野間　それぢや〳〵。

八　合點でござりやす。サア、棒組み、來やれ。

ト清搔にて兩人、駕籠をかたげ、足早に向うへ入る。

野間　さて、これでよしと。そろ〳〵先へ歸りませうか……勘公、おぬしも歸るのか。

勘八　アイ、今夜、內は大客でござりやすが、會所から呼びに來て、コレ〳〵

ト懷の大叺の煙草入れより繪姿を二枚出し

コレ、見さつしやい。一枚は、爲朝が娘の逢島姬、この一枚は、義朝が子の、今若といふ小童。

野間　二人とものお尋ね。廓は多くの女の入込み、嚴しく詮議しろと、この通りのお觸れだ。アヽ、そんなら遠島流罪の爲朝が娘。常磐が腹の子忰、今若といふも、そんなら矢ッ張り都の内に。

ト思ひ入れ。

勘八　コレ、こなたも、心當りがあらば、賴みますよ。

野間　イヤモウ、金にさへなる事なら、頑張つて見ようわえ。

勘八　そんなら、旦那へよろしく賴みますよ。

ト淸搔にて、スタ〳〵と下座へ入る。直ぐに向うより喜三郎、やつし下駄がけ、頰かむり、誂らへのいゝぶらなともし、息せきと出て來り、野間平を見て

喜三　誰れだ。野間平ぢやァねえか。

野間　喜三さんか。また素見しか。

喜三　ハテ、云ふは無駄だわな。夜でもちつと、うぬが氣儘に飛び歩かにやァ、疳癪の蟲が勞痎を煩らふも知れねえ。朝から晩まで、肩に荷瘤の棒手振り。俳諧とやらの句に、「吉原を横に箕輪の冬菜賣り」

野間　おきやァがれ。江戸ぢやァあるまいし。素見して來さッし。

喜三　明日逢はうよ。

ト二階の流行り唄になり、野間平、提灯を持つて下座へ入る。喜三郎、殘つてなんだか氣がゝりな事が出來て來たわえ。今若丸が都の内に、忍んでゐるといふ噂、繪姿までが廻るげな。駕丁の太郎八に口入れさせた、男禿の綠の事。花魁の常磐木さへも、慥かにそれと

ト思ひ入れあり

この頃は見世を引いてござるげな。アヽコレ、どうぞ逢ひたいものだが。

ト二階を見て

知つた女郎衆か藝者手合ひが、居さうなものだが。

トあたりを見廻し、石を取つて二階へ打ちつける。バツタリと音する。二階の三味線やむ。客の聲にて

客　誰れだ〳〵。石を投げたぞ〳〵。

トわや〳〵云ふ。二階の障子を明け、みどり、禿の拵らへにて顏を出し

みど　アレ、田圃から、投打ちをしやんすヨウ。

ト下の方を見る。喜三郎、思ひ入れあつて

喜三　コレ〳〵、さう云ふは、禿のみどりぢやァないか。

みど　誰れさんでおすえ。

喜三　おれだよ〳〵。

ト提灯を上げて顔を見せる。

みど　喜三さんでありんすかえ。馬鹿らしいによ。

喜三　これサ、靜かに云へ。常磐木さんは、まだ引いてか。

みど　さうでおすヨウ。

喜三　そんなら、わつちがちつとお目にかゝりたいと云つてノ、コレ、そつと爰へ、花魁を呼んでくりや。コレ、必らず人に知れねえやうに云へよ。

みど　合點でおす。待つて居なんしョウ。

喜三　呑みこんだ〳〵。

トみどり、障子を閉てる。矢張り淸掻。

アヽコレ、どうぞ花魁に逢つて、禿みどりが素性も、詳しく話したいものだが。

ト窺つてゐる。清搔になり、勘八、甚六、出て來り

勘八　誰れだ〳〵。座敷へ石を投げやァがつたのは。女郎衆でも揚げにうしやァがつたか。

ト喜三郎、これにて提灯のあかりを消し、行かうとするを、窺ひ寄つて捕へ

甚六　待ちやァがれ。投打ちをしたのは、うぬか。

喜三　べら坊め、知らねえワ。

ト突きとばす。

勘八　ヤヽ、さう云ふは喜三が聲だな。うぬには貸しがあるぞ。よくうしやァがつた。

ト武者振りつく。立廻り。喜三郎、勘八の懷より出かゝりし莨入れを取つて、横ッ面をしたゝか打つ。

オヽ痛い。ぶちやァがつたな〳〵。これエヽ、その莨入れには、大事の繪姿があるわえ。失くなしやァがるな。寄越しやァがれ〳〵。

甚六　この野郎め、なぜ勘八をぶちやァがつた。うぬ、おれが

ト武者振りつく。矢張り清搔。雪、チラ〳〵降つてくる。喜三郎、二人を相手に摑み合ひ、姫の繪姿落ちて舞臺に殘る。今若の繪姿は、莨入れに挾みしまゝ、喜三郎、勘八を打つとて、振り上げし拍子

に、三人、掴み合ひ、蓑入れ飛んで、塀の內の松の枝へ打ちあげ、仕掛けにて梢へ殘る。勘八、喜三郎、これを知らず、掴み合ひながら下座へ入る。甚六も追ひかけて入る。雪は頻りに降つてゐる。矢張り淸搔。向うより權、八、垂れを下ろせし四つ手駕籠を舁き、スタ〳〵と出て來り、花道にて

權　これサ、八や、どうだ。鹽梅はいゝか。

八　なんだか、雪の所爲か、疝氣が兆して來た。アイタヽヽ。

權　そいつは困つたものだ。棒組みを工面しようから、どうぞあそこまでやつてくりやれ。ソレ、やるぞ。

八　アイタヽヽヽ。

ト淸搔にて、舞臺へ舁き來て、よき所へ下ろし

八　アヽコレ、剛氣に發つて來た。相棒を入れてくれろ。アイタヽヽ。

權　こいつは困つたものだ。モシ、旦那え、お聞きなさる通り、棒組みが疝氣が起りまして擔げませんから、相棒を賴んで參りますまで、御不承ながら、これにお出でなされて下さりませ。

ト駕籠に近寄り、內へ挨拶あつて

ハイ〳〵〳〵、直に連れて參ります。

ト行かうとする。

八　アヽコレ、權やく、おれも連れて行つてはくれまいか。アイタヽヽヽ。

權　エヽ、おへねえ草臥れものだ。サア、しつかりと歩きやれ。

ト肩へ引ツかけ

こいつは大雪になりさうだ。旦那、直ぐに連れて參ります。アヽコレ、笠は無し……ほんに、駕籠に提灯も附けなんだ。

ト唄になり、雪頻りに降る。權、八を肩にかけ、向うへ入る。彈き流しの唄、五つの鐘聞える。仕掛にて正面の塀、屋根とも、雪のつもりし體に變る。この時、二階の障子をソツと明け、常磐木、扱帶、襠裲、傾城の形にて、文を持ち、外の方を窺ひ見る事あつて

常磐　禿のみどりが云やるには、宗清さんの所へ行きなさんす喜三さんが、田圃に待つて居なんすとの事。この頃逢はぬ主さんへ、この文を屆けたう思ふから、アヽコレ、どうぞよい便りを

ト文を持ち、思ひ入れ。矢張り時の鐘、誂らへの合ひ方。駕籠の垂れを上げ、宗清、黑縮緬の頭巾、黑羽織、大小、黑仕立ての形にて、二階の方を窺ひ見て

宗清　そこに居やるは、常磐木ぢやないか。

常磐　ヤ、お前も、そこへ來て居なさんすかえ。

宗清　駕籠の者が病氣ゆゑ、よんどころなう田圃中に。

常磐　モシ、幸ひお前に屆ける文。これを見て下さんせ。

ト二階より文を投げる。宗清、駕籠より出て、足を爪立て、文を取つて

宗清　これはしたり、餘程雪がつもつたさうな。

ト文の封を切り

南無三、駕籠に灯は無し。アヽコレ、讀んで見たいものぢやが。

トいろ〳〵思ひ入れ。時の鐘、雪、頻りに降る。常磐木、下へ思ひ入れ。向うより松、頰かむり、木綿やつし股引、草鞋、緣日の植木屋にて、植木の荷へ、葉蘭水仙の類、片手桶の小さきに本水を入れあるを、竹の四つ手へ結へ、よき所へかんてらを吊し、出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。この時、舞臺は、雪のつもりし景色になる。

松　南無三、水仙へ掛けて來た絲立てを落した。アヽ、道にあるであらう。エヽコレ、降つて來たワ來たワ。ドレ、尋ねて來よう。

ト矢張り時の鐘にて、荷を駕籠の脇へ置いて、花道餘程先へ行く。宗清、駕籠の中より松の荷のかん

てらを見て、文を讀む事。揚げ幕より太郎八、淺黄頭巾、袖無し羽織、股引、三尺手拭、駕籠舁きの形にて、息杖を腰に差し、大笠をかぶり、拾うたる絲立てを下げて出てくる。花道にて行き合ひ

太郎 コレ、こいつを尋ねるのか。

ト見せる。

松 オヽ、貴樣が拾つたか。

太郎 こなたの荷から落ちたのを、後から見たゆゑ、持つて來たよ。

松 そいつはおかたじけ。

太郎 わしも、駕籠の者が急病だと、雇ひに來たが、彼奴はマア、何をしてうせるやら。

ト云ひながら舞臺へ來る。宗清、文を見てゐる。太郎八、見附け

アヽ、この駕籠だ〳〵。

松 ドレ、引ツかけて行かうか。

ト絲立てを水仙へ掛けるとて、灯にて、落ちある繪姿を見附け、ソツと拾ふ。この時、二階の常磐木、松にかゝり莨入れを見附け、ソツと取つて、中の繪姿を擴げ、いろ〳〵思ひ入れ。宗清、心附かずに文を見てゐる。

太郎　モシ、旦那え、相棒は只今參りますぞえ。エ、モシ、旦那え。

ト云つても挨拶なく讀みゐるゆゑ、太郎八、思はず側より文を讀む思ひ入れ。常磐木、松も、めい〳〵繪姿を擴げ、思ひ入れ。

宗清　アヽコレ、この文の文言では

太郎　神々かけて女夫の約束、願ひあげまゐらせ候。

常磐　今若丸が人相書。

松　逢島姫が人相書。

ト讀む。

常磐　エ。

ト四人、一度に思ひ入れ。太郎八、松の繪姿へかゝる。松、手早く荷の本水を、かんてらへザツとかける。灯消える。常磐木、障子ピッシャリ。宗清、駕籠の垂れを下ろす。途端、一度に木の頭。太郎八、こなしあつて

太郎　エヽ、畜生め。

ト二階を見て思ひ入れ。この仕組みよろしく、ひやうし

滿久

幕の內、捨て鐘にて、ツナギ。引返し。

本舞臺、三間の間、正面、圍ひ建て座敷、床の間、違ひ棚、活け花、掛け物よろしく飾りつけ、下手は緣側附きの障子屋體。萩垣、枝折り戶、寒竹の藪。一面に雪つもりし景色。すべて伏見の里、宗淸別莊の體。流行り唄にて幕明く。

ト前幕の藝者二人、三味線箱を取散らし、兩人、三味線を彈きゐる。惣八、廻し男の形にて、銚子杯を扣へ、醉つたる體にて、當振りを踊りゐる。門口に野間平、着流し、下駄がけ、赤合羽を引ッかけ頰かむりにて、雪搔きを持ち、庭の雪を搔いてゐる。門口に四つ手駕籠を下ろし、駕籠舁き二人、扣へゐる。喜三郎、傘をさし、下駄がけ、鰒を三ばい、繩に附け、二升入りの樽を提げ、立ちかゝつてゐる見得。雪頻りに降る。

喜三　折公、冷たいに、とんだ仕事だの。

野間　喜三さんか。いゝ物を持つて來たの。

喜三　旦那がお指圖で、先へ持つて行つて、拵らへて置けと仰しやつたが、まだお歸りではあるまいか

野間　アヽ、此お駕籠は、旦那ではないか。

喜三 ナニ、こりやアちつと趣向のある事だ。コレ、駕籠の衆や、後に迎ひに來さつしやいよ。

ト幕明きより斑犬一疋、出かゝりゐて、喜三郎の鰒へ飛びつく。

野間 ア、、ソレ、畜生め。

喜三 このイケ畜生め。

トくらはす。犬はキヤン〳〵と竹垣へ逃げて入る。駕籠の者、向うへ入る。

野間 あの雌犬には、油斷がならぬ。

ト兩人、內へ入る。惣八、矢張り踊りゐる。

喜三 誰れだ。惣八か。いゝ加減に踊らねえか。とんだ氣紛れだ。

惣八 喜三さん、聞きなさい。今日は雪見の趣向だといつて、お高さんやお累さんをお呼びなされたによつて、なんでも面白狸とは、ちつと古風な洒落だね。

たか モシ、喜三さん、わたし等は、先刻にから來てゐやんすが、旦那はお留守ぢやといな。

るい 旦那のお好みの新文句も、節附けが出來たによつて、白妙さんに、今まで稽古してあげたわいな

喜三 そいつは早かつたの。コレ、聞きねえ。この寒いのに、旦那は下駄がけで雪見よ。

野間 おいらなら、炬燵へ首ツきり入つて、濁酒でも飮んでゐやうに、エヽ、榮耀には餅の皮だ。

喜三　イヤ、餅の皮より鰒の皮、瀧水二升を三升が……なんと話せやうがの。

惣八　イヤ、話せるとも〳〵。醉つた紛れに、もう一踊りやりやせう。お前方、彈いておくれ。今度は甚句にしやせう。

藝者　合點ぢやわいな。

ト甚句の三味線になり、惣八、無性に踊る。この鳴り物にて、向うより勘八、傘、下駄がけ。太郎八ばつてう笠、下駄がけにて、息杖を腰に差し、出て來り、花道にて

太郎　コレ〳〵、そんならいよ〳〵、花魁の常磐木さんは、斷落ちに違ひないか。

勘八　ハテ、いま云ふ通り、常磐木さんの斷落ち。花魁ばかりか、貴樣の世話で寄越した、男禿の、みどりまでが見えねえが、こいつはてッきり、宗清さんの別莊へと思ふから

太郎　成る程、そいつも知れねえ。そんなら、わしも尋ねてやりませう。サア、行かつしやりませ。

ト兩人、門口へ來り

勘八　ハイ、お賴み申しませう。

ト云へど、惣八、無性に踊りゐる。

喜三　アレ、誰れか來たぞよ。

野間　オット合點だ。コレ、靜かにさつしやいな。

ト突きとばす。惣八、倒れかゝる。三味線箱の蓋を缺く。

惣八　アヽコレ、どうする。三味線箱の蓋を缺いたわな。

勘八　アイ、勘八でござります。

太郎　御免なされませ。

ト兩人、内へ入る。

野間　オヽ、勘公、其方のは太郎八どの。

太郎　左やうサ、剛氣な雪でござりますね。

勘八　オヽ、わりやア喜三だな。爰に居たか〳〵。

ト立ちかゝる。

喜三　なんだ、この男は。おれが爰に居たが、どうした。

勘八　どうしたとは、わりやアよく昨夜、おれが横ッ面をくらはしやアがつたな。

喜三　べら坊め、何をおれが知るものか。そりやアさうと、わりやア何しに來た。

勘八　とぼけるなえ。われが知らぬ事はあるまい。常磐木さんの駈落ちを、尋ねに來たのだよ。

野間　アヽ、そんなら爰のお内へ、駈けこんでござつたと思うて、そこで尋ねに來たのか。
太郎　イエ、別してさうでもござりませぬが、わしが世話をした……コレヽ、喜三ぼう、おぬしが賴んだ禿のみどりも、居ねえげなよ。
喜三　エヽ、そんなら男禿の、みどりも一緒に……ハテ、そりやアとんだ話しになつたの。
たか　ほんに、そりや案じられた事ぢやわいな。
太郎　して、旦那は、お留守かえ。
るい　アイ、雪見にお出でなされたが、まだお歸りでござんせぬ。
惣八　わしは、そろ〳〵お迎ひながら、行つて見ようか。アヽコレ、剛氣に醉つたぞ。
野間　ほんに、そこらまで行つて下さい。
惣八　よしサ、呑みこんだ……イヤ、滅相に醉つた。ドレ、緣の缺けた箱を取替へて來ようか。
ト三味線箱を抱へ、よろ〳〵して出かゝる。
たか　コレ、また危ないぞえ。
惣八　ナニ、打ッちやつて置きなさい。
ト門口へ出て

イヤア、剛氣に降るワ。コレ、先生、合羽をちつと貸さねえか。

野間　そこにある、着て行かつしやい。

惣八　ほんに、笠も無えわえ。

太郎　そこに、おれがのがある筈だ。冠つて行かつしやい。

惣八　そいつは有り難いわえ。

ト矢張り流行り唄になり、向うへかゝる。向うよりお霜、前垂れがけ、下女の形にて、手拭をかむり、下駄がけにて、岡持ちに豆腐を入れ、提げて出る。松、やつしの形にて、番傘をさし、下駄がけにて相合傘にて出て來り、惣八、ヨロ〳〵して二人を見て

イヨ〳〵、相合傘の二人連れ。イヨ、滅相にうまい。

しも　アヽコレ、お前、また醉はしやんしたか。わたしやおかべを買ひに行てな、道で松さんに逢うて傘の無心を云うたのぢやわいな。

松　お霜どんが、雪の降るのに、傘もさゝないで濡れて歩くから、ちよつと入れてやつたが、どうした。

惣八　ハテ、この男は。貴樣は當世流行る男よ。これは世の中豐年松助、惚れろ〳〵とうまい。

松　おきやアがれ。
ト突きとばす。惣八、ヨロ〳〵して、赤合羽脱げて、持つたる大笠も落し、捨ぜりふにて向うへ入る
赤合羽と大笠は花道の中程に捨てゝある。矢張り流行り唄にて、兩人、門口へ來る。

しも　アイ、松さん、おかたじけよ。

松　お易い御用だ。
ト内へ入る。

しも　サア〳〵、おかべを買うて來たぞえ。

野間　コレ、お霜どん、鰒が先へ來てゐるわな。
ト見せる。

喜三　オヽ、松ぼう、來さッし。

たか　オヤ、松さん、お出でかえ。

松　オヽ、お前方は早かつた。して、旦那はまだか。

喜三　まだお歸りはねえが、こなたが來たら、そろ〳〵趣向にかゝらうかえ……モシ、白妙さんえ、白妙さんえ。

ト呼び立てる。合ひ方になり、奥より白妙、妾の拵らへにて、掛け花活けに白梅と玉椿を活けたるを持ち、出て來り

白妙　皆さん、ようお出でなさんした。アノ、旦那は、まだお歸りでないかえ。

太郎　モシ、白妙さんえ、今日は何か、雪見の御趣向がござりますすげな。ほんに、好い所へ參りました

白妙　アイ、こなさんは駕籠屋の太郎八どの、此方のお人は、撞木町の若い衆ぢやないかえ。

勘八　ハイ、左樣でござります。この間はお目にかゝりませぬ。モシ、白妙さま、お聞きなされませ私しどもの花魁が、駈落ちを致しまして、今朝からそれにかゝつて居りまするて。

白妙　エヽ、そんならアノ、常磐木さんとやらが、廓を拔けて

太郎　アイ、男禿を連れての駈落ち。そこで私しも、迷惑いたして居りまする。コレ、喜三ぼう、あの禿の頼まれ手は、おぬしだ。なんと、尋ねてはくれまいか。

喜三　尋ねないでどうするものだ。併し、おれは今日の雪見の趣向で、落を取つた後で尋ねに行かう。

勘八　ハテ、この男は、落ちついたものだ。どうでも此奴は、合點がゆかないわえ。コレ、おぬしには下がりの勘定もあり、よく昨夜、横ッ面を打つたな。その分ぢやァ、濟まないぞ〳〵。

ト立ちかゝる。

野間　ハテ、云ひ分があるなら、あの男の内へ行つて云やれな。解らねえものだぞ。
勘八　いゝワ。そんなら、あの野郎が内へ連れて行く。サア、歩びやァがれ。

ト喜三郎に立ちかゝる。

喜三　べら坊め、今日の趣向を、めでたく落を取らねえうちは、歸らないわエヽ。
白妙　して、お前、今日の趣向は、なんでござんすえ。
松　成る程、趣向々々と云ふが、一體どういふ趣向だ。
喜三　わしが趣向は、女藝者サ。
松　アヽ、あの子達は、おぬしの雇ひか。
喜三　なにサ、わしが連れて來た女藝者は、あの門口の、駕籠の内に待つてゐるね。
野間　ほんに、あの駕籠か。
喜三　わしが雇つて來た藝者衆は、ちよつとひねつた大年増。ドレ、お目にかけようか。

ト門口へ行き、駕籠の垂れをあげる。中より眞弓、市子の拵らへ、丸笠をかむり、風呂敷包みを抱へ草履下駄にて出て

眞弓　喜三さんや、駕籠の中でも笠をかむつてゐた所爲か、アヽコレ、首の骨が痛いよ。

喜三　なぜ又、笠を脱がねえな。

眞弓　ハテ、笠をかむつてゐるが、市子の看板。アヽ、寒くつて立ちきれやせぬ。御免なされませ。

ト内へ入る。

野間　こりやアどうだ。年增な藝者と思つたら、アヽ、市子を連れて來たの。

眞弓　これナ、市子だといつて、藝者でないものかえ。口を寄せるも藝の内。花代が百一本、お直しならば二筋に、うちまきが二盆。オヤ〳〵、こんな藝者が唐にもあらうか。

野間　イヤ、氣障に洒落るワ。

眞弓　どなたも御免なされやせ。

ト笠を仰のけて置く。野間平、見て

野間　イヤア、この笠を置く鹽梅。仰向けに置いたのは、アヽ、轉ぶといふ氣だな。

眞弓　オヤ〳〵、どうせう、モシ、人をうつむけにした

ト笠を俯向ける。

松　アヽ、そんならおぬしが連れて來た、藝者といふは

喜三　唄でなし、淨瑠璃でなし、琴でなし、胡弓でなし、弓はあつても梓巫女、藝者の中へ口寄せは、

なんと捻つた趣向であらうが。

白妙　アノ、このおばさんは、口寄せさんかえ。

眞弓　アイ、お前は御新造樣かえ。わたしは伏見の巫女町に居りまする、眞弓と申す梓でござりやすが
春秋の彼岸より外、あんまり出た事はござりやせぬが、爰に居なさる喜三さんのお賴みで、この
大雪に、お駕籠まで遣はされたから、よく〳〵の事だと存じて参りやした。生靈死靈、先祖の祟
り、何なりとお好みなされやし。ホヽヽヽ、モシ、お女中さんえ、お茶を一つお振舞ひ。ほ
んに結構なお住居でござりやすね。

ト一人しやべる。お霜、茶を汲んで行き

しも　アイ、お茶あげませう。

眞弓　アイ〳〵、お手で下さりませな。

白妙　コレ、喜三さん、お前、滅相な。こんな藝者さんが、どこにあるものかいな。

喜三　その無いものだから連れて來たのサ。コレ、お前方も、惚れた男があらう。生き口を寄せねえ。
お霜どん、こなた、水を向けさツし。

しも　エヽ、滅相な。わたしや水向けとやら、どうして知らうぞいな。

太郎　成程、こいつはおつりきな藝者を連れて來たの。その鰒を引ッ張つて寄せようか。
喜三　コレ、それよりはノ、いゝ物がある。こいつはどうだ。
ト太郎八に囁く。
太郎　そいつは奇妙だ。寄せて見るがよい。
喜三　合點だ〳〵。
ト門口へ出る。野間平、附いて來て
野間　コレ〳〵、何を寄せる〳〵。
喜三　寄せて見るのは、爰らをまごついてゐる、斑めを寄せるのよ。
野間　こいつはよからうワ。貴樣、摑まへて居さッし。おれが水を向ける。
喜三　合點だ。來い〳〵〳〵。
ト呼ぶ。竹垣の蔭より斑犬、ノタリ〳〵と出る。喜三郎、鰒を見せる。犬、しなだれ來るを、引ッ捕へて門を閉し、犬を捕へる。
野間　ドレ、樒は無いから、この椿で水を向けるぞ。寄つたり〳〵、寄つたり三助。
ト口の内にて云ひながら、水を向ける。

眞弓　天清淨々々々、地清淨々々々、内外清淨々々々々、六根清淨々々々々、天の神、地の神、家の内には庭の神、井の神、神の數は八百萬、過去の佛、未來の佛。

トうつとりとなる。

皆々　ソリヤ、寄つて來るぞ〳〵。

トわや〳〵云ふ。眞弓、思ひ入れあつて

眞弓　寄り來るワ〳〵、釋迦の小巫女が寄り來るワ。いつより胸の燃ゆる火も、消えぬ思ひと伯母御前の、雪は我れらの伯母ぞかし、轉げ喜ぶ畜類も、歩けば棒の悲しやな、紙屑拾ひ白浪を、吠ゆれば愚の凡夫心、遠吠えすると打たるゝは、物云はぬ身の恨めしや。たゞ魚屋が恨めしや。

ト此うち犬は、首をうな垂れ、ほろ〳〵となる。

喜三　エヽ、イケ畜生め。

ト蹴倒す。犬はキヤンと云つて藪垣へ逃げて入る。眞弓、ウツトリとなる。喜三郎、内へ入る。

今度は、摺粉木か火吹竹を寄せよう。

松　なにサ、それよりは、爰に居る勘八を捕まへて、生き口を寄せるがよい。

皆々　そいつはよからう。

勘八　アヽ、埒もねえ。生き口を寄せられる科はしねえワ。御免だ〳〵。

　　ト外へ逃げる。

喜三　逃がすな〳〵。

野間　捕まへてゐろ〳〵。

　　ト太郎八、喜三郎、松、追ひかけて出で、勘八を捕へ、門口にて押へて居る。勘八、捨ぜりふ。

　　俗名勘八、寄つたり〳〵。

　　ト水を向ける。眞弓、思ひ入れあつて

眞弓　天清淨々々々、地清淨々々々、何かの事を敎へてたべ。梓の神の寄せ口に、引かれ誘はれ、冥加は無けれど、寄り來たわいの。身はこの娑婆にありながら、いとし可愛と思ふのは、只二坪の石を見ても子寶、左を見ても子寶、間の枕がねたみ草、枠の絲を繰り亂し、おどる心も無けれどもこれも世渡り、子寶が可愛さ。後世を大事に金欲しや、生き口に寄つたわいの〳〵。

　　ト云ふ梓のうち、勘八、ポツ〳〵と眠る。

太郎　アヽ、この男は、子が二人あると見えたわえ。コレ、氣を附けろエヽ。

　　ト突きとばす。勘八、目を覺まし

勘八　なんだか、おらァ俄に眠つた。怪しからぬ目にあはせるな。
野間　その筈の事よ。いま生き口に寄せたワ。
勘八　ナニ生き口どころか。おらァ内は店賃も七人口だ。
三人　おきやァがれ。
　　ト内へ入る。
太郎　コレ、今この男が生き口の鹽梅では、なんと、駈落ちした常磐木さんを寄せて見ようか。
皆々　こいつは奇妙だ。
喜三　今度は貴様、水を向けさッし。
太郎　合點だ〳〵。
白妙　ア丶コレ、こちの内で、あの常磐木さんとやらの生き口を。滅相な、悪い事しなさんすな。
太郎　なにサ。お前、怖い事はござりやせぬよ。
野間　市子の直しなら、ドレ、お定まりの百一升。
　　ト盆に米と紙に包みし錢百を添へて出す。
しも　サア〳〵、水を汲みかへてあげやせう。

ト茶碗に水を入れ、眞弓が前へ持つてゆく。

太郎　ドレ、今度は、おれが水を向けようか。

ト椿の葉にて水向けをする。薄ドロ〳〵になり、前の風呂敷包みの上へ、煙硝火立つ。眞弓、思ひ入れあつて

眞弓　寄り來るワ〳〵、釋迦の小巫女が、寄り來るワ。

ト寢鳥、薄ドロ〳〵。

アラ恨めしと仇人の、向けたる水に寄り來るも、たゞ懷かしき弓取りよ〳〵。多く並みゐるその中に、扇の蔭の立烏帽子、其方の水は受くるとも

ト松を振りかへつて、キツと見て、愁ひの思ひ入れあつて

受けざる水を向けたるは、梓の弓の弦音に。

ト太郎八、野間平をキツと見る。

白妙　オヽ怖。アレ、見なさんせ、あの巫女さんの顏の樣子、植木屋さんを見る度に、目に涙を催ふすは、どうやらこりや、常磐木さんの生き口ぢやござんせぬぞえ。

松　さう仰しやれば面ざしの、どうやらわしが懷かしき

ト思ひ入れあり
身寄りの人に見ゆるも不思議。
ト薄ドロ〳〵にて、眞弓、思ひ入れ。

眞弓　間の枕も子寶も、娑婆と冥土へ引別れ、梓の弓の一所に、いかに居られぬ恨みは誰ぞ。丸いおごけに角の盞、心に合はぬ主從の、義を辨まへぬ人外よ。

ト太郎八、面を變へてキツと思ひ入れ。始終、太郎八、心得ぬ思ひ入れ。この時、ずんと立つて水向けの茶碗を取つて、打ちつけて割る。松、目を附ける。皆々思ひ入れ。ドロ〳〵にて、また煙硝火立つて、眞弓、茫然となる。

松　太郎八どの、折角向けた茶碗の水、なぜ打ち割つて捨てたのだ。

太郎　サ、こりやア。

喜三　イカサマナア、わしが趣向の口寄せ藝者。なぜ、こなさんは邪魔をする。

太郎　邪魔はしねえが太郎八が、呼び出す的の生き口は、寄らねえのみか、あの世から、役にも立たぬ死靈の述懷、聞くもどうやら滅入つたゆゑ

白妙　それでこなさん、其やうな

太郎　水を引いたは先祖より、無駄な佛の出ぬ用心。
白妙　思ひがけなう向けた水、その水上は源の
野間　もしその人が寄つたなら
白妙　唐の鏡も弓取りも
喜三　扇の蔭の立烏帽子。
太郎　聲なつかしと寄り來るか。
松　たゞ恨めしと寄り來るか。
野間　啞事ならぬ
藝者　あの巫女さん。
太郎　梓の弓に
白妙　引かれ寄り來る
勘八　正しくこれなる

ト風呂敷包みへかゝる。松取つて突きのける立廻り。これにて眞弓、心附き、顔を上げて

眞弓　オヤ、水が引けたら、亡者は忽ち

松　線香立つ間も忙しなき
太郎　修羅の迎ひに是非なくも
眞弓　又お直しの水向けは
白妙　主のお歸りあつた上
眞弓　お待ち申して居りやせう。
太郎　でも、この包みは、
　ト風呂敷へかゝる。
眞弓　これはしたり、こりや市子の御身代。
太郎　そんなら且那のお歸りまで
松　節附け出來た新文句
喜三　奥で稽古を
藝者　白妙さま。
白妙　皆さん
眞弓　ドリヤ、御酒でもおねだり申しやせうか。

ト唄になり、お高お累お霜、勘八、眞弓は包みを抱へ、太郎八、松、この包みに目を附け、思ひ入れあつて奥へ入る。白妙、野間平、殘り

野間　モシ、白妙さん、御覽じませ。時ならぬ市子を連れて來て、怪しからぬ男でござります……時にいま藝者衆が申しました、新文句の端唄とは、あなた、もう御存じでござりますかえ。

白妙　さいな。わしもその唄を覺えようと思うてナ、あの子達に今奥で、稽古したけれど、其やうに早う覺えらるゝものかいな。

トこの時、お霜出て來り

しも　モシ／＼、白妙さま、奥で新唄の稽古が始まりまする。ちやつとお出でなされませいな。

ト云ひながら入る。

野間　アレ、お聞きなされませ。奥で稽古が始まるさうにござりまする。

白妙　わしや幸ひと、コレ、この三味線、奥の稽古を、爰で合せて見ようかいの。

野間　それはようござりませう。私しは爰で、承りませうか。

白妙　コレ、野間平、其方はアノ、いつも來る雀が、さぞこの雪では、餌が乏しうてなるまいほどに、わが身は、あの藪へ、餌を蒔いてやつてたも。

野間　畏まりました。

ト市子に出した丸盆の米を、目籠に入れ、門口の松の枝に下げ

斯うして置いたら、雀どもが拾ふでござりませう。私しはお許しを受けまして、色より可愛い抱き火鉢と致しませうか。

ト白妙は唄の本を出して

白妙　ドリヤ、もう一遍、浚つて見ようか。

と謡ら（へ）の獨吟になり

〽白雪の、つもりて後のもの思ひ。

ト白妙、有りあふ三味線を取つて、奥の文句に合せ、稽古の思ひ入れ。時の鐘、雪頻りに降る。この時、向うより常磐木、扱帯の形、襠裲にて、素足、意氣地なき體にて、出て來る。跡よりみどり、禿の形、小短かく搦げ、これも裸足にて、蒔繪、黒塗りのはんぞう、渡し鐵漿、その外、おはぐろ道具と、蒔繪の蓋をせし姿見を、扱帯にて結へ、雪の中を引いて出て來り、花道よき所に來て、唄、一くさり切れる。

みどり　モシ、花魁、お前、足が冷たうはありんせんかえ。

常磐　この子とした事が、廊下を歩いてさへ冷たいもの。雪の中を此やうに、上草履を履かいで、ォヽつめた〳〵……コレ、わが身は、何を引いて來やつたのぢや。

みど　アイ、こりや姿見と鐵漿附け道具を、持つて來やんしたわいな。

常磐　ほんに、そりや、よう心が附きやつたわいの。わしも廓を拔けてナ、落ちつく先は宗清さんの、隱れ家を尋ねようと、わが身を連れて駈落ち女房。どうぞ主に逢ひたう思ふが、この大雪では、さぞや其方も

トあちこちするうち、大笠と合羽を見附け

アヽコレ、爰に好い物があるわいの。こりや、殿達の着なさんす、桐油とやらいふものぢやないかや。

みど　爰に好い笠がありんす。花魁、これを着なさんせいな。

常磐　ほんに、こりや、雪を防ぐはよい幸ひ。

ト赤合羽を着て、大笠をかざし、みどりの手を引いて

これでよいわいの。向うに見ゆるあの庵へ行て、宗清さんの隱れ家を尋ねて見よう。みどり、來や。

みど　アイ〳〵。
常磐　アヽ、譯もない。短かに返事しやいなう。
みど　アイ〳〵〳〵。
常磐　エヽ、又かいなう。
　　　ト又唄になる。
〽解けぬ心にあこがれて、つらや聞えぬ鐘の音も、氷ると知らでその人の。
　　　ト此うち兩人、門口へ來る。唄切れる。
アヽ、どうやら風雅なこの庵。主のお宅は、爰であらうわいな。
　　　ト內を見て
モシ、ちと頼みんせうわいな。
野間　なんだ、頼まう。お使ひださうな。ドウレ
　　　ト門口へ出て
頼まうとは、どこのお使ひだ。
常磐　アイ、主のお內は、爰かえ。

野間　なんだ、主の内は爰か。主とは、どこの主だ。山の主か。池の主か。家の主なら、大家の事だが、そんなものは知らねえワ。

常磐　イヽエィナア、宗清さんの事ぢやわいな。

野間　アヽ、主とは旦那の事か。初めて聞いた。男かと思へば、女のやうでもあり、てまへはマア、なんだ。

常磐　わしや撞木町の廓から。

野間　ナニ廓から。アヽ、そんなら、こなさんが

ト思ひ入れ。白妙も聞き耳立てる。

見れば小附けの二人づれ、慥かに禿のみどりとやら。幸ひ奥の廓の者へ。

常磐　主の内なら、ちよつと逢はせて。

野間　サア、マア、此方へ。

ト常磐木を内へ入れようとする。白妙、ツカ〳〵と寄つて、枝折り戸をシヤンと締めて

白妙　イヽエ、そりやならぬわいな。この雪に、徒歩や裸足の二人連れ。こちの内へ便つてござんしても、この白妙がならぬわいな。

常磐　エヽ、そんなら、白妙さまといはしやんすは、宗清さまのお姿の

白妙　アイ、白妙が、どうも内へは通されませぬわいな。

野間　ハテ、この大雪に、見す〳〵外へも。

白妙　でも、宗清さんは留守の事。殊に、奥には

常磐　エ。

野間　男禿を連れての駈落ら、慥かその名は常磐木さん、廓へ渡せば

　　ト思ひ入れあり、枝折り戸を明けんとする。白妙、押へて

白妙　イエ〳〵、内へは白妙が

野間　ならぬとお前が仰しやるは

白妙　悋氣ぢやほどに、白妙が

野間　エヽ、白妙さまが

白妙　悋氣ぢやわいの。

常磐　雪に凍へる常磐木を、悋氣嫉みの心から、宗清さんに

白妙　逢はされぬのも、奥にはお前を

常磐　エヽアノ、尋ねの人が
みど　花魁・寒うありんすわいなア。
常磐　オヽ、その筈ぢや。せめてわが身は、この下へなと
　　トみどりを合羽の下へ入れる。
　コレ、わたしは格別、禿のこの子は
白妙　ハテ、宗清どのは他行といひ、留守にはどうも
常磐　そんなら、お待ち申しませう。
白妙　アノ、この雪に、垣の外面に。
常磐　身に降りかゝる雪よりも、辛い苦界の勤めの身。軒の氷柱は親方の、小刀針に比ぶれば、なに怖
　からう、いつまでも、雪に埋もる庭の松。主の帰りを
　　ト内へ思ひ入れあり
　待ちませうわいな。
　　ト思ひ入れ。また誂らへの唄になる。
〽なまじ逢はずばなんのその、えゝ儘ならぬ流れの身〽誰が踏み分けし色の道、傘の雫に

濡れそめて、はや東雲の鷄ならで、軒に塒の村雀、痴話や口舌と夕まぐれ。

トこの唄のうち、野間平、門口へ出かゝるを、白妙、引留め、以前の三味線取つて、奥の端唄に合せる。常磐木、みどりを合羽の内へ入れ、大笠にて雪を防ぐ。この時、雀大分出て、軒に吊せし餌をついばむ。この時、向うより宗清、紙子仕立ての羽織衣裳、大小、剃立て鬘、蛇の目の傘、下駄にて出て來り、唄の文句にて、少し醉うたるこなし。唄納まる。宗清、思ひ入れあつて

宗清　我が物と、思へば輕し傘の雪。アヽ、降るワ〳〵、歸る我が家の竹垣に、餌を食み拾ふ小雀の

ト思ひ入れあり

それ〳〵、塒の烏めが、目にかゝつては危ないもの。

ト常磐木、こなしあつて

常磐　ほんにお前を、コレ、わたしや

ト嬉しき思ひ入れ。

宗清　其方は太夫。この大雪に

トつか〳〵と來ようとせしが、醉うたる思ひ入れ。常磐木、心遣ひあつて

常磐　アヽモシ、雪に爪づき、ソレ、危なうござんす。

宗清　オット合點ぢや。〽云ひたい胸も打明けて、云はでぞしばし、我が心。

皆々　やんや〳〵。

ト褒める詞に常磐木、驚ろき

常磐　オヽ怖。

ト宗清へ縋る。

宗清　いま道で聞いたに違ひなう、そんなら、そもじは

常磐　廓を抜けて、お前を便つて

宗清　アヽ、禿のみどりも連れて、駈落ちしやつたか。ハテ、重荷に小附けと、この寒いのに、マアマア、此方へ入りや〳〵。

常磐　サア、今も白妙さんの云はしやんすには、お前がお歸りなさんせぬ其うちは

宗清　通す事はならぬと云うたか。よい〳〵、主の身共が歸るからは……とはいふものゝ、待て暫し我が心。あの妾の白妙は、大抵悋氣深い事ではないて。

常磐　どうぞ仕様はないかえ。

宗清　サ、その仕様は
ト思ひ入れ。
あるぞ〳〵。コレ〳〵、斯ういふ趣向ぢや。
ト常磐木に囁く。
常磐　其やうな事、云うてもよいかえ。
宗清　ハテ、大事ない〳〵。寒からうが、もうちつとのうち、さうして居やれ〳〵。
ト内へ入り
白妙、いま戻つたぞよ。
白妙　ハイ、只今お歸りなされましたかえ。
野間　旦那樣、さぞお寒うござりませうに。
宗清　イヤ〳〵、一杯機嫌で歩いた所爲か、さのみ寒いとも思はぬが、オヽ、それ〳〵、送りの奴どのは、さぞ寒かつたであらう。コレ〳〵、折助どの、サア〳〵、寒いに、ズツト此方へ、入らつしやれ入らつしやれ。
常磐　アイ〳〵。

ト赤合羽の下へ、みどりを隠し、大笠をかむり、門口を筋違へになつて入る。

宗清　アヽ、御苦労々々々。ズツと此方へ、通らつしやれ〳〵。

ト常磐木、笠にて顔を隠し、横に歩いて、みどりを合羽の下に入れ、ゐち〳〵と上の方へ通り、みどり、鏡と、はんぞうを引摺り、炬燵の方へ来る。宗清、みどりへ炬燵の蒲団をかぶせる。白妙、野間平、不思議さうに

野間　これはどうだ。お内の中へ雪が降るのか。笠も取らずに、鳥おどしか、與次兵衛か。とんだ折助だ。

白妙　アヽ、聞えたわいの。こりや、いま門口に、旦那さんのお帰りを待つてゐなさんした、慥かアノ常磐木さんとやらぢやないかえ。

宗清　イヤ〳〵〳〵、其やうな者ではない。こりやコレ、なんぢや〳〵。只今まで参り居つた、櫻井どのより送りを附けられた、その送りの折助どのぢやて。

野間　モシ、旦那さま〳〵、送りの折助なら、ズツと下へお下げなされませ。サヽ、送りの折助、ズツと、下がれ〳〵。

宗清　コリヤ〳〵、其やうに申すな。この折助は、送りばかりではない。

野間　して、何でござります。

宗清　この折助は、何ぢやて。この折助は……オヽ〳〵、命の親ぢやて。

野間　ナニ、折助が命の親だえ。なぜ親でござります。

宗清　親とも〳〵。只今道で、この大雪に凍えて、身共、既に相果つるところを、あの折助どのが、好い藥を下されて、命を助けられた。誠に、命の親の折助どの、エヽ、忝うござる〳〵。身共が爲には、折助大明神さま〳〵。

ト無性に手を突き、敬ふ。

野間　なんぼ折助大明神さまでも、人の内へ笠をかぶつて

宗清　アヽ、コレ〳〵、こりやかむつて居ねばならぬ。それ〳〵、そこら中へ、雪が洩るワ〳〵。はんぞうでも、盥でも、持つて來い。コレ〳〵〳〵、アヽ、洩るワ。

ト足を爪立てゝ思ひ入れ。白妙、野間平、ウロ〳〵して

野間　どこへ洩ります〳〵。

宗清　それ〳〵、そこら中が、洩るワ〳〵。エヽ、氣のきかぬ。

野間　ヘイ〳〵、どこでござりまする〳〵。

ト盥を持つて、ウロ〳〵して歩く。

宗清　そこら中が洩るゆゑ、あの折助どのが、笠を取らぬは尤もぢや。コレ、白妙、そこらに、はんぞうでも無いか。探して來やいの。

みど　はんぞうは、爰にござんすわいな。

ト持つて來たはんぞうを取つて、何心なく出る。白妙、悔りして

白妙　オヽ怖。あの子は、なんぢやえ。

ト宗清、手早くみどりへ蒲團を掛けて

宗清　サ、今出た小ぢよくは。

白妙　どこの子ぢやえ。

野間　よもや折助どのゝ子でもござりますまいが、どこからマア

宗清　アヽ、讀めた〳〵。それ〳〵〳〵、あれ〳〵〳〵、あのやうに、笠も脱げぬほど洩る内ぢやによつて、大方、今の小兒も、こりや洩つたと見えるわえ。

野間　エヽ、洩りましたか。

ト天井を見て

白妙　ハテ、子供の洩りさうな所も見えませぬが。

白妙　エヽ、阿房らしい。わが身までが同じやうに。今のはナ、ありや、あそこに居なさんす、常磐木さんと一緒に附いて來た、禿ぢやわいの。

宗清　コリヤ、白妙、常磐木とは、そりや、どこに居るぞ。

白妙　エヽ、お前さんも、よい加減に、わたしを阿房になされませいな。

宗清　イヤ〳〵、身共、其方を阿房にした覺えはないぞ。

白妙　でも、傾城が駈落ちして參りましたわいな。

宗清　コリヤヤイ、色男ではあるまいし、田夫野人の身が所へ、なんで女郎が駈けこんでくるもので。

白妙　それでも、アレ、來て居りまするわいな。

宗清　ありや折助ぢやと申すに。

白妙　エヽ、それが阿房にしなさんすわいな。

野間　これはしたり、白妙さま、お靜かになされませ。

宗清　コリヤ〳〵、野間平、捨てゝ置け〳〵。

野間　ハテ、ようござりまする〳〵。

ト二人を留めんとして、捨ぜりふにて、あちこちする。常磐木、最前より氣の毒なる思ひ入れにて、矢張り笠をかむりしまゝ、この中へ交り、ウロ〳〵する。宗清、捨ぜりふにて、此方へ連れて來て坐らせる。野間平、白妙を留める。

白妙　エヽ、ほんに、あんまりぢやわいの。

野間　ハテ、泣く子に地頭だ。マア、お出でなされませよ。

ト合ひ方になり、野間平、白妙を留めながら、兩人、奥へ入る。宗清、捨ぜりふにて

宗清　エヽ、おのれ、身共に口答へをしをつて。コリヤヤイ、どこに女郎が來て居る。おのれ、折助を捕へても悋氣しをるな。

常磐　アヽコレ、もうよい加減にしなさんせいな。

ト宗清を留める。宗清、思ひ入れあつて

宗清　常磐木、さぞ其方は寒かつたであらう。

常磐　イヽエイナ、わたしやモウ、先刻にも、あの門口に、お前の歸りを待つその間、定めし白妙さんも、憎い奴とも思うて居やしやんせうと思や、主の手前が、どうも氣の毒でもあり

宗清　アヽ、埒もない事ばかり。コレ〳〵、身内が

ト常磐木の肌を探り見て

いかう冷えてあるわいの。サア〱、この炬燵へ、あたりや〱。

ト八丈縞の蒲團を明ける。みどり出て

みど　花魁、もう出てもよいかえ。

常磐　ほんに、其方も、さぞ寒かつたでござんせう。マア〱、あたつて居や〱。

宗清　可哀さうに、さぞ冷たかつたらうに。矢張り、炬燵に居や〱。

ト介抱する。この時、勘八、奥より出かゝり、窺ひ居る。

常磐　ほんに、昨夜、櫺子から、お前へあげたわたしが文、心の丈を

宗清　サア、其方の文の文言で、廓を斷落ちしやる事、又は何かの心意氣も

常磐　それで大概、知れやうがえ。

宗清　武士と見込んで其方の頼み、承知した。この上は、心強う思うて居や……オヽ、鏡を持つて來やつたが、鏡臺が無うては不自由。コレ、爰に白妙が鏡臺、これへ掛けて、髮など撫でつけて居やれ。

ト側にある鏡臺へ、姿見の鏡を掛ける。勘八、よき程に、ツカ〱と出て

勘八　花魁、見附けましたよ。

常磐　ヤ、こなさんは。

勘八　アイ、勘八でござります。モシ、旦那、お前様も、おつりきな仕事をなされまするな。

宗清　待て〳〵。身が仕事とやら、何やら、わりや味な事を云ふが、廓を抜けた常磐木が

勘八　爰の内に居りましたからは、お前様もお係り合ひ。それが嫌なら、マア太夫を。

ト常磐木へかゝる。この時、みどり、ツカ〳〵と出て

みど　アヽコレ、太夫さんを

ト縋るを見附け

勘八　さては雇ひ禿のみどりも、爰にうせたな〳〵。大方、花魁の駈落ちも、われが手引きか。サア、吐かしやアがれ。

トみどりを引附ける。

常磐　アヽコレ、なんでその子が知らうぞいの。

勘八　イエ〳〵、大方此奴が

常磐　なんでマア、可哀さうに。

ト留める。勘八、引附ける。この立廻りに常磐木、前幕に松の梢へかゝりし今若が繪姿を落す。勘八、手早く取つて

勘八　ヤ、こりやコレ昨日、廓の會所で、お尋ね者と渡した繪姿。

常磐　昨夜、二階の櫺子から、松の梢にかゝつたを、思はずわしが

ト立ちよるを勘八、突きのけ、みどりを捕へる。この時、宗清、勘八が持つたる繪姿を、ずんと取る。勘八「それを」とかゝるを、キツと捻ぢあげ、持つたる繪姿と、みどりを見比べる。常磐木も思はず繪姿と、みどりを見比べる。この時、奥より、松、出かゝり、前幕に拾ひし逢島姫の繪姿を擴げ、常磐木に引合せて思ひ入れ。この時、合ひ方變る。

宗清　源家の大將左馬頭、義朝の嫡子、今若丸人相書。

常磐　雇ひ禿の此みどり、女子にあらぬ尋常な、生れつきぢやと思ふから、似た面ざしは

宗清　生れ素性は、もしや源家の

ト兩人、思ひ入れ。

勘八　それだによつて、この餓鬼が、首に掛けたる

ト振りほどいて、みどりが首に掛けたる守り袋を取つて

守の內に、もしや證據が。

ト明けんとする。後より宗淸、この守を取らんとして、思はず前の泉水へ打込む。

常磐　ヤヽ、あの子の守が、あの池へ。

宗淸　取落したる不調法。

ト守は泉水の中を流れる。松、思ひ入れあつて

松　昨夜、田圃で、拾つたは、こりや豐國が錦繪か。モシ、花魁。お前の顏に。

常磐　エ、わたしの顏に。

勘八　イヤサア。よく似た

ト取りに行く。松、手早く火鉢へ打込む。煙硝火立つ。

松　南無三、火鉢へ。

宗淸　ハテ、見かけによらぬ、機轉のきいた植木屋が

常磐　この常磐木に似寄つた注文。

松　ウツカリひよんと灰にして

宗淸　この場をくるめる木作りの

松　松といふ名を今年から

常磐　貰つたお前は

松　尾上の松サ。

常磐　松の位は傾城の、その常磐木は庭の松。

勘八　木振りを直す

ト常磐木へかゝるを、松、ちよつと立廻り。常磐木、思はず宗清へ抱きつく。

松　エ、差合ひなしに

宗清　松とやら。

ト勘八、又かゝらうとする。松、岡持ちの豆腐を取つて、勘八が頭を打つ。豆腐、微塵に砕ける。

松　とんだ初雪。

常磐　今から濡るゝ。

松　エ。

宗清　許しやれ。

ト唄、暮れ六つの鐘。常磐木、宗清へ抱きつく。勘八、豆腐で顔白くなるを、松は岡持にて頭を押へ

る。見得よく道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、向う建仁寺垣。二重舞臺。飛び石、植込み。下の方に井筒。すべて奥庭の景色。一面に雪つもりし體。爰に太郎八、眞弓を殺し、止めを刺してゐる見得。時の鐘、誂らへの合ひ方にて道具とまる。

ト飛び石の上に、以前の風呂敷包み載せてある。

太郎　最前、並みゐるその中で、覺えし法とはいふものゝ、梓に寄りくる亡き魂も、もしや素性を知つたるか。生けて置かれぬこの市子。不便ながらも

ト時の鐘。存分に扶り、あたりを見廻し、下の井筒の内へ眞弓の死骸を打込み、上より、あたりの石を投げこんで、思ひ入れあつて、飛び石の上の包みを見附け

捨て置いたるこの包みに、あの口寄せが持つてうせたる小風呂敷。

ト包みを明ける。中に白骨ある。

こりやア人間の髑髏だが、アヽ、そんなら下世話にいふ、市子が所持するげほうどのとは、この事か。梓の巫女が商賣の品玉は、ハテ、不氣味なものだ。

ト見てゐる。矢張り合ひ方、時の鐘、雪頻りに降る。下座より松、ツカ〳〵と出て來り

松　そこに居るのは、誰れだ〳〵。ア、、駕籠の太郎八どのか。こなさん、寒いに、何を見て居る。

太郎　おらア、これを見て居るワ。

松　これ、とは何だ。

ト髑髏を見て、膽を潰し

エ、、なんだ、そりやア、雪細工のしやり頭ぢやァねえか。ハテ、凄いほど好く拵らへたの。

太郎　これサ、雪細工ぢやァねえ、正眞の物よ。

松　エ、、ナニ、ほんの物だ。コレ。貴樣は、どうして持つて來た。

太郎　この頭は、先刻の市子が、忘れて行つた包みの中に。

松　エ、、この男は、とんだ物を持つて來た。おらア、そんな物は、嫌ひだ〳〵。

太郎　コレ、爰へ來て、見やれ。

松　ア、、おらァ嫌だ〳〵。氣味が惡い〳〵。御免だ〳〵。

ト逃げる。太郎八、引ッ張り、髑髏の方へ差しつけ

太郎　鳶や烏の食ひ殘り。人間も、斯うなつちやァ、ア、、みぢめなものだ。

ト松を捕へ、見せようとする。松、怖がる思ひ入れ。薄ドロ〱になり、あたりに聲あつて

義朝　珍らしや、悴朝長。

ト太郎八、思ひ入れあつて

太郎　朝長とは、義朝の長男。それをこれにて呼びたるは。

松　木魂か、又は雪おろし、どうやら小氣味の

ト慄ふ。

義朝　主を害せし人外めが。

ト太郎八、思ひ入れ。

松　アレ、又、不氣味な。

太郎　又も聞ゆる音聲は、正しくこれなる髑髏の方。狐狸の類か、雪女か。

ト髑髏へ立ちよる。大ドロ〱、煙硝火立つて、松、怖々見て、慄へゐる。太郎八、タヂ〱として

「ウン」と放心する。ドロ〱、寢鳥、心火燃えて、忽ち髑髏、義朝の生首と變る。松、これを見て、

キッと氣を變へて

松　ヤ、義朝公のその面ざし。さては髑髏は、亡き父の

ト思ひ入れ。

義朝　無念に凝つたる義朝が、頭は卽ち梟木に、かゝりしのみか情なや、枯れ野の露と消えてゆく、魂魄、頭にとゞまりて、我が類葉に見えん爲、梓の巫女が手に渡り、詞交すと知らざるや。悴、朝長。

松　我が實名をのたまふ上・生けるが如き義朝公、矢竹心の梓弓、その弦音に引かれくる、魂魄殘る髑髏の不思議。いかなればこそ源家は衰へ

義朝　平氏は盛ゆるその恨み。兵衛佐と心を一致し、我が存念を晴らしくれよ。

松　仰せまでも候はず、民家に交はり朝長が、臆病未練の振舞ひも、この身に大望抱へしゆゑ。本意を達するそれまでは、父の苦患も今暫し。

ト太郎八が襟髪取つて引立てんとする。爰にて心附き、立廻り、切り首を見附け

太郎　ヤヽ、頭は御主人義朝公。

松　さては、おことは。

トかゝるを突き廻し、差したる息杖を拔く。劍の徳にて、大ドロ〳〵になり、煙硝火立つて、切り首以前の如く髑髏となる。兩人、キツとなつて

太郎　髑髏の不思議も、劍の威徳に。

松　すりや、仕込みしは……ヤヽ、血汐のしたゝり。

ト立ちかゝるを、立廻つて太郎八、當てる。松、タヂ／＼となる。この時、野間平、みどりを引ッ抱へ、ツカ／＼と出て

野間　あなたは御主人。

太郎　橘七郎。

野間　餓鬼は源家の今若丸。して、この者は。

太郎　コリヤ。

ト囁く。

野間　心得ました。爰構はずと。

太郎　合點だ。

トごん。一散に奥へ走り入る。野間平、みどりを引附け

野間　動きやアがるな。

みど　怖いわいなう。

ト逃げるを捕へて、踏みつけ、髑髏を取つて

野間　すりや、この髑髏が

トロに咬へ、刀を拔いて、松を引起し、搔き首にせんとする。松、心附いて、この手を拂ひ

松　下部野間平……あの太郎八めに

ト尋ねながら、みどりを見附け

ヤ、禿のみどりを

ト立ちよるを野間平、拔討ちに切つて行く。かい潜つて、キツとなり

松　待て、野間平、禿みどりを手籠めといひ、騙し討とは合點がゆかぬ。サア、有やうに樣子を吐かせ。

野間　樣子は其方に覺えがあらう。禿といふは今若丸。われも源家の落人にて、太夫之進朝長と、見嚙つたる野間平が、わいらを殺して出世の蔓。なんと違ひはあるまいがな。

松　いかにも下郎がよき推量。我れこそ源家の類葉たる、太夫之進朝長なるワ。

野間　さてこそな。

松　おのれも正しく、父義朝を害したる

野間　いかにも、長田景宗が家の子、橘七郎定景とは、おれが事だワ。
松　長田に組みする人非人。先づ差當る
　　ト髑髏を見て
　ヤヽ、髑髏は慥かに。
野間　こりや義朝が頭であらうが。
松　すりや、其方が
野間　手に入る髑髏は、慥かに義朝。
松　それ知られては。
　　ト立ちかゝつて髑髏を奪ひ取る。野間平、手早く白刃を、みどりに差しつけ
野間　刃向ひ立てすりや、この餓鬼を、眼前爰で芋刺したぞ。
松　ヤレ早まるな。
野間　繩をかけるか。
松　サ、それは。
野間　餓鬼めを突かうか。

松　サ、それは。

兩人　サア〳〵。

野間　どうだ。

ト最前より喜三郎、傘をさし、出かゝりゐて、この時、後より

喜三　よいやサ。

ト野間平を突き倒し、みどりを引ッ浚ふ。野間平、起きあがり、かゝるを、松、引附け

松　ヤ、禿のみどりを。

喜三　廓へ口入れのこの判人。おどけた奴だ。退きやァがれ。

野間　べら坊づらめ。その餓鬼は

喜三　エヽ、放しやァがれ。

ト野間平を突きのけ、みどりを引ッ抱へ、ツイと下座へ入る。松、思ひ入れあつて

松　今若丸を

ト行かうとする。野間平、立ちふさがつて

野間　ドツコイ、うぬは動かさぬ。餓鬼を取られたその代り、朝長、われに繩かけろ。念佛申して腕廻

せ。

松　小癪な匹夫め。そこ退くまいか。

野間　いつその事に。

ト切りつける。立廻り。雪、烈しく降る。よきキツカケに奥の流行り唄、鳴り物入りの合ひ方なかり

兩人、傘を使ひ、よろしくタテあつて、トゞよき見得にて、どつこいととまる。時の鐘にて、道具ぶ

ん廻す。

本舞臺、元の道具に戻る。正面、よき所に、綺麗なる六枚屏風を立て、宗清の羽織かけてあり、時の

鐘、唄にて道具とまる。

ト奥よりお霜、短檠を灯し、持つて出て來る。跡より、お高、お累、附いて出て來る。合ひ方。

たか　コレ、お霜どの、そんならいよ〳〵、あの常磐木さんがるい　此お内へ、ござんしたのかえ。

しも　サ、それゆゑ白妙さまが、いかう浪が荒うなつたわいの。

兩人　そりやその筈の事いなう。

しも　待ちなさんせ。浪が荒いといへば、あの泉水の小浪につれて、何やら流るゝやうな。
ト短檠にて池の方を見て
アヽ、守り袋のやうな物ぢやわいな。
兩人　勿體ない。上げなさんせ。
しも　ドレ〳〵、わたしが
ト捨ぜりふにて、いろ〳〵ある。
オヽ、幸ひ、この雪掻きで、引寄せて見ようわいな。
ト庭の雪掻きにて、流れの守を引寄せ、よく〳〵見て
コレ、見なさんせ。お守りぢやわいな。
ト中より義朝の戒名を記せし紙位牌を出し
何のお守りやら。オヽ〳〵、濡れてあるわいな。
兩人　そりやお前、戒名ぢやないかえ。
しも　何でも勿體ない。どうぞ干して置きたいものぢやがな。
たか　コレ、爰に火鉢があるわいな。

ト火鉢に座敷藥罐あるを、よき所へ出す。

しも　濡れた紙ぢや。ちぎれぬやうに、斯うして干さうわいな。

ト戒名を雪掻きの裏へ張り、守り袋を庭木の枝に掛け

見なさんせ。斯うして置かうわいな。

トこの時、屏風の内にて手を打つ。

しも　ハイ〳〵。

ト思ひ入れして屏風の内へ入り、程なく出る。

兩人　なんぞ御用かえ。

しも　ほんに、風呂が出來たかと仰しやるが、もう沸いたでござんせう。

たか　お風呂が出來たら、湯に入つて歸らうわいな。

るい　さうしやんせう。

しも　ドリヤ、風呂の下を見て來ようか。

ト唄になり、雪掻きを逆さまに下の障子へ立てかけ、捨ぜりふにて、三人、奥へ入る。この唄をかかり

屏風を明ける。掛けたる羽織の裏へ、矢屏風を附けたるところ、正面へかゝりし體に屏風廻る。内に宗

清、常磐木、八丈の蒲團の上に、以前の鏡に向ひ、常磐木は宗清の髪を撫でつけてゐる。

宗清　ア、、冷たからうに。わしが髪より、其方の髪を撫でつけいで、鬢も髷も、臺無しになつたぞや

常磐　サア、手次手に、わたしが髪も、撫でつけて置かうわいな。

宗清　それ〳〵。コレ、常磐木、今にもこの宗清が、其方を身請けさへすりや、女房に持つが、その時又、否應は云はさぬぞや。

常磐　アイ、そりや今も云うた通り、辛い勤めの其うちに、わたしが所へ通うて下さんしたお前なれどついに一度の枕も交さぬ、お前のお心に、サ、その頼もしい心に惚れて。

宗清　ムウ、すりや、これまで廓へ通うても、一度の枕も交さぬわしゆゑ、その打解けぬ心に惚れて

常磐　女房に持つて下さんすりや、その時打解け、この身の願ひ。

宗清　奥底なしに、語る心か。

常磐　アイ、帶紐解いて一度でも、心解けねば、わたしが願ひは。

宗清　口外しやらぬ其方の素性も、女房にならねば、この身の大事が明かされぬ、女郎の胸の内、聞いては身共も外へは引かぬ。サ、そこが侍ひ、刀の手前、夫よ妻よと、添うて見る氣か。

常磐　アイ、大事の我が夫……コレ

ト持つたる櫛を見せて

宗清　僞はりでないぢやまで。

伊豆の妻櫛、神かけて

常磐　オヽくど。

宗清　すりや、宗清に常磐木は、伊豆の妻櫛、神かけて

常磐　僞はりならぬ、誓紙を爰で。

ト鏡臺の剃刀を取つて

起請なりとも、血汐の文言。

ト指を切らうとする。宗清、立廻つて、常磐木が左の手をキツと捕へ、

宗清　イヤ、心中にも及ぶまい。伊豆の妻櫛神かけし、わが身の眞實心底を

常磐　エ。

宗清　サ、誓ひに及ばぬ、誓紙もいらぬ。左の腕を切らんず樣子、廓氣質か傾城の、張りも強いが强弓の、もしや血筋の者なるか。左手の長い、其方の生れ

ト左の腕を改めんとする。常磐木、この手を拂ひ、思ひ入れあつて

常磐　わたしが左のこの腕、仇な男へ入れ黒子、もしやあらうと宗清さんの、疑はしやんすも御尤も。女郎でこそあれ、そんな浮氣な

宗清　サ、その仇惚れの無い其方、張りの強いが生れつき。その心にも叶はうと、屏風に掛けし羽織の裏。

常磐　廓通ひの物好きに、縫うた羽織の恨めしき、枕の許に掛けたる矢屏風。

宗清　わしと其方が敷いたりし、五布蒲團の八丈が、島の主と床の海。

常磐　アノ、八丈の

ト敷いたる蒲團へ思ひ入れ。

宗清　常磐木ばかりは八丈の、島の蒲團で

常磐　エ。

宗清　よもや肌身は穢されまい。

常磐　アノ、八丈の島守りと

宗清　弓勢射術の、コレこの矢屏風。

ト羽織を取つて、常磐木へ着せる思ひ入れ。

常磐　殿御でもない常磐木が、裄丈揃はぬ

宗清　イヽヤ、似合うた。

常磐　アノ、わたしに、羽織が

宗清　羽織は格別、强弓の、その片裄の、長い其方に。

常磐　エ、なんと。

宗清　ハテサテ、其方は片裄ぢやわいの。

　ト兩人、顏見合せ、思ひ入れ。よき時分、奥より白妙、出かゝり、屛風の蔭に窺ひゐたりしが、この時、ツカ〳〵と出て

白妙　宗清さま、そりやお前、胴慾でござんすわいな。

　ト腹立てる思ひ入れ。

常磐　ヤア、お前は白妙さん。お目にかゝるも

　トもぢ〳〵する。

宗清　ハテサ、常磐木、別してわが身が白妙に、心遣ひしやる事は無いわえ。

常磐　それぢやというて、主の手前。

宗清　イヤ、大事ない。男と生れて、幾人なりと、女狂ひをしたればとて。

白妙　ソレ、其やうなお前の悪性。身に願ひあるわたしゆゑ、お前を便つて大事まで頼み、力に思ふお前が今さら

宗清　心變りがしまいものか。屋敷育ちの世間見ず、廓育ちの常磐木と、どう一口に。

ト常磐木を引寄せて戯れる。常磐木、氣の毒なる思ひ入れ。白妙、こなしあつて

白妙　現在わたしを側に置き、これ見よがしなその仕方。もう〱、わたしや思ひ切つてお前へ面當て。いつそ、わたしや

ト鏡臺の上の剃刀を見附け、手早く取つて

ト自害せんとする。後へ太郎八、出かゝりゐて、ツカ〱と出て、これを留め

太郎　アヽコレ、白妙さま、危なうござります。マア〱、お放しなされませ〱。

白妙　イエ〱、放して下さんせ〱。

ト爭ふ。太郎八、白妙の剃刀を引ッたくり

太郎　エヽ、お前様も、刃物三昧とは、とんだ事をなされまする。

ト常磐木を見て

ヤ、お前は常磐木さんぢやアねえか。

常磐　太郎八どの、わたしが爰に居る事を、必らず誰れにも

太郎　ハテ、云はねえで濟みませうか。今朝からお前がござらぬとて、廓の内は亂痴氣騷ぎ。禿のみどりも斷落ちの、お祟りが來て、わしが難儀。モシ、旦那樣、その花魁は、どうでも廓へ

宗清　オヽ、歸す事は、罷り成らぬワ。

太郎　ヘイ、人の抱への傾城を、お武家方の宗清さまが、歸さぬと仰しやつては。

トうぢ〳〵する。白妙、思ひ入れあつて

白妙　アレ、あのやうに、無法な事云はしやんすわいな。

宗清　云はいでワ。身が云ふ事が無法と思はゞ、おのれ、出てうせろ。

白妙　アイ、行かいでかいな。

常磐　これはしたり、白妙さんを出し申しては、わたしがどうも立ちやんせぬ。こりやモウいつそ、わたしが爰を出さへすりや

ト立つて行かうとする。宗清、キツと留めて

宗清　これサ、常磐木、今も其方が屏風の內で、賴んだ事は、平家へ無二の宗清が、不得心といふもの

の。所詮亡ぶる時節は眼前。

常磐　エ。

宗清　この身の綻び出ぬうちに、白妙、其方には暇くれう。

白妙　アノ、この白妙を、宗清さまが

常磐　暇やらんすも、わたしから

太郎　起つた女の悋氣ゆゑ、これまで馴染んだお妾を

宗清　暇遣はす、しるしは卽ち。

ト刀を差出す。白妙、ツカ〳〵と寄つて、これに手を掛け

白妙　暇のしるしと、あなたの一腰。

宗清　暇やる女に魂ひを、附けてやるのも宗清が、所存あつての、しるしの一腰。

白妙　すりやアノ、わたしを

宗清　勝手な所へ

太郎　貰ひませう。

宗清　ヤ、なんと。

太郎　白妙さまにかゝりもなく、勝手な所へ宗清さま、おやりなさるゝお心なら、肩に荷瘤の太郎八が
　内の嚊ァに貰ひませう。

白妙　アノ、こなさんが、わたしを所望。

常磐　廓の法を破つたる、わしを連れいで、白妙さんを

宗清　貰ふ心の駕籠の者。其方の氣前が面白い。白妙さへ得心なりや、身共はやつても大事ないわえ。

白妙　宗清さんさへ得心なら、わたしも駕丁の女房に

宗清　なる氣があらば、身共が親分。

太郎　して、駈落ちの、常磐木さんは。

常磐　宗清さんの女房に。

太郎　そんならわしが、お前の親分。

宗清　互ひに聟なり

太郎　舅なり

常磐　女房々々も相對に

白妙　替へ〲にする

常磐　今宵の祝言。
白妙　幸ひ奥に、立つたる風呂へ
宗清　身の内清むる
太郎　イヽヤ、生れて太郎八は
宗清　風呂が嫌ひか。
太郎　不精なやつサ。
宗清　そんなら常磐木。
常磐　イヽエ、わたしも、どうやら風邪氣で
宗清　望みにないか。
常磐　この寒氣では、風呂はどうも。
ト思ひ入れ。
宗清　常磐木といひ、太郎八まで、風呂の嫌ひはさもあらん。野間の内海に初湯の催ふし。
ト太郎へ思ひ入れ。
太郎　場所は變れど近江路や、八郎冠者も風呂屋にて、召捕られしは、不覺の大將。

常磐　思へば〳〵、その時の、父の御無念

ト鏡臺に掛けし鏡の柄を取つて、口惜しき思ひ入れにて、涙にむせぶ。宗清これに目を附ける。常磐木「チエ、」と無念の思ひ入れ。鏡へ我が顔のうつるに、フツと心附き、キツと氣を變へ

せめて祝儀に髮なりと。

太郎　わしも女房を持つ今宵、鬢のほつれを

白妙　女房のわたしが

宗清　イヤ、髮よりは、慥かに髭切。

太郎　エ。

ト腰の息杖へ思ひ入れ。

宗清　サ、髭剃る役は宗清が

太郎　すりやアノ、旦那が

宗清　剃つて遣はす。

太郎　それは御慮外。

白妙　幸ひ盥も

トありあふ盥へ藥罐の湯をあけ、太郎八が前へ持つて行く。宗清、以前の剃刀を持ち、立ちかゝる。常磐木は鏡に向ひ、鬢のほつれを直す。太郎八、髭を揉む。これより草笛入りの合ひ方になり、宗清手合せして剃りにかゝる。

太郎　近頃御慮外。

ト手持ちなき思ひ入れにて

アヽ、なんぞ毛受けが

ト白妙、雪掻きを見附け

白妙　丁度幸ひ。

ト雪掻きを差出す。太郎八、この柄を捕へて思ひ入れ。

太郎　ハイ。

ト合ひ方。雪掻きを持つたるまゝ、盥へ手を入れんとして、雪掻きの裏に貼りし義朝の戒名、盥にうつるを見て

榮昌院殿利當益入大居士。平治二年正月二日。

宗清　ヤ。

常磐　その法名は、源家の大將。

白妙　義朝公の

太郎　ヤ、なんと。

トこれより薄ドロ〳〵になり、太郎八、戒名を見て、段々と慄ふ。合ひ方變り、トヒヨになり、空に千鳥、大分群がる。常磐木、これに目を附け

常磐　濱千鳥、あとは都へ通へども、身は松山に音をのみぞ啼く。思ひ出すも痛はしき、身は松山に朽ち給ふ、宗德君の御爲に、父は波濤に八丈の。

トきつと思ひ入れある。

宗清　これサ、太郎八、其方のやうに慄うては、剃刀が刃のしどを失ふ。コレ、其方が俄の慄へは、長田慄へか。

太郎　エヽヽ。

宗清　イヤサ、長田慄へであらうがな。

太郎　いま私しが慄へるは、よく積つても御覽じませ。この冷るのに素布子一枚、着晒しゆゑ、此やうに。

宗清　慄への起りは、うつりし法名。

白妙　義朝公の

ト思ひ入れ。常磐木、前なる鏡へ、空の千鳥を寫し、キツと見る。

常磐　寫る鏡は松山の、戀しき時は

ト鏡の取つて思ひ入れ。後より勘八、窺ひ寄つて

勘八　常磐木こそは。

トかゝるを、持つたる鏡にて打つ。勘八の首、あたりへ飛ぶ。常磐木、鏡を抱へ、ギヨツと思ひ入れ。太郎八、雪搔きを引ツたくるを、宗清、手早く取つて、しやんと立てる。裏に戒名貼りある。宗清、これを太郎八へ差しつける。ドロ／＼打ちあげ、千鳥、飛び去る。

宗清　女に稀れなる手練の常磐木、この宗清に便りしは、正しく源家の息女ならん。サヽ、包まず實名明かされよ。

常磐　名乘るも父のお力に、賴んでとの色仕掛け、胸中探らんその爲に、この家へ來りし妾こそ、爲朝の娘、逢島と申す者。何卒源氏へ御味方、お賴み申す、宗清さま。

宗清　さこそあらんと察せし其方。して又、駕丁の太郎八は。

太郎　義朝どのゝ戒名を、讀むと其まゝ、思はぬ慄へも、天命のなすところなるか。エヽ、淺ましい。
白妙　我れも名乘れば尾張の國、野間の內海の領主たる、日本無双の主殺し、長田の太郎景宗なるワ。
太郎　さてこそ我が父、鎌田兵衛正清が敵。サ、立ちあがつて、勝負しや。
宗清　すりや、白妙は、正清が娘であつたか。女なれども、生け置いては
　ト拔いて切りつける。立廻り。宗清、この中へ入り、白刃をとゞめ、思ひ入れあつて
常磐　源氏重代、髭切丸。
喜三　アノ、それが
　ト寄るを振りほどき、キツとなる。この時、喜三郎、肌脫ぎにて、みどりを抱き、ツカ〳〵と出て、
　太郎八をキツと留めて
常磐　姬君樣か。
喜三　八丁礫の喜平治ならずや。
太郎　この若君こそ、今若さま。
　すりや、その餓鬼が義朝の
　ト駈け寄るを、宗清、キツと隔て

宗清　どつこい。

　　ト納(をさ)まる。

太郎　まづ今日(こんにち)はこれぎり。

めでたく打出し

高麗大和皇白浪

こまやまとくもゐのしらなみ

高麗大和皇白浪

聚樂第の場
七條河原の場
淀川堤の場

第一番目　三建目

役名――鈴木田隼人。岩木兵部。同一子、當馬之丞。早野彌藤次。五右衛門一子、五郎市。奥女中、あやめ。同、皐月。同、霧島。此村鳴戸之助。岩木若黨、林平。石川五右衛門。

木舞臺、三間の間、正面、二重舞臺、向う金襖附き。幕の内より上の方に鳴門之助、着附け、袴の形。あやめ、皐月、霧島、着流し、奥女中の形にて、めい〱黒塗り蒔繪の文箱を持つてゐる。序の舞にて幕明く。

あや　玉鉾の、道のしるべの庚申、今宵御殿の庚申待にて、お夜詰めのお慰み。

皐月　艶書合せの御遊にて、御殿は元より、諸侯方の姫君、奥方。
霧島　貴賤に限らず、みな差上ぐる艶書の文章。
あや　恐れ多い事ながら、私し事は、主人道芝が艶書の使ひ。
鳴戸　これは〳〵、女中方にも、御苦勞千萬に存ずる。我が君久次公の思し召し附きにて、庚申待で、艶書合せの御遊。各々の心々に認めし文章、さぞ面白い事でござらう。この鳴戸之助、取次ぎ仕るも、冥加に叶ふと思ふは、内見がこの身の仕合せ。
あや　憚りながら、皆それ〴〵に、心をお籠めなされし艶書合せ。まだ久次公へ差上げぬうち、あなたが御内見なさる事は
鳴戸　罷りならぬか。
あや　先づお使ひに立ちました
皐月　私しどもが
三人　越度となりますゆゑ。
鳴戸　成る程、それ程相成らぬ事なれば、無理にとも申すまい。シタガ、常々御心荒々しき久次公、もしやお心に違ふ手爾波もあらば、後で後悔と存ずるゆゑ。

三人　左様ならば。

ト皆々、思ひ入れあつて

トめい〳〵、文箱を出す。鳴戸之助、取つて、一々中より書き物を出し、讀む事あつて

鳴戸　成る程、面白い。此やうにも文章が書かれるか。オヽ、感心〳〵。それよりは、この文箱、中にも高臺寺好みにて菊桐の蒔繪。

あや　其お文箱は、利久存生のうち、久次公より拜領と、承りましてござりまする。

鳴戸　成る程、こりや他家に用ひぬ貴財。この上は拙者、直さま久次公へ、この文章を差上げ、御添削出來の上、この文箱へ入れ置く間、お女中方、箱はこれへ差置かるゝがよからう。

三人　畏まりました。

鳴戸　コレ〳〵、斯様に心覺えを致して。

ト二重舞臺にて文箱を並べ

御添削の上、この文箱へ入れ置く間、後刻受取り、歸られたがよい。

あや　左様なれば

三人　鳴戸之助さま。

鳴戸　後刻。

ト唄になり、鳴戸之助、めい〳〵の書き物を持つて、下座へ入る。

あや　なんと、今のをお聞きなされましたか。あの文箱のまゝ、持つて行つてもよい事を、讀めもせぬに讀みこなした顔で、笑止な事でござんしたわいなァ。

皐月　左樣でござります。何が書いてあつても、あのむくつけな鳴戸之助、どうして解るものでござりませう。あれがほんの、論語讀みの論語知らずでござりますわいな。

霧島　それでも、何か、いつそ感心ぢやのなんのと、褒めてゐましたぞえ。

皐月　それが、利いた風とやらでござりませうわいな。

あや　ほんに、斯うして居りませうより、宇治の方さまもお入りとあれば、お目見得いたさうではござりませぬか。

皐月　サア、私しも左樣は存じましたが、又あの意地惡が、これに居りませずば、なんのかのと申しませうぞえ。

あや　ハテ、まだ御添削までは、間もござりませうわいな。

霧島　成る程、左樣なれば、お供いたしませうか。

皐月　どうぞ、わたしも御一緒に。

あや　サア、お出でなされませ。

ト合ひ方になり、あやめ先に、皐月、霧島附いて、下座へ入る。バタ〳〵になり、奥より鳴戸之助、一卷の箱を持つて、窺ひ〳〵出て來り

鳴戸　この程より、寶藏に祕めあるところの、この一卷は、先達て盜賊の張本、石川五右衞門が隱れ家にて、見出したる三韓地理八道の一卷、首尾よく奪ひ取つた上は、朝鮮に滯陣ある、小西どのへ渡せば、この身の出世。うまい〳〵……併し、今にも紛失となれば、詮議は必定。幸ひとこの艷書を、捲きあけて置いたが、どこへ飛ッちりがかゝらうも知れぬ。又この一卷は、この文箱へちつとのうち忍ばせて置き、折を見合せ、一味の者に持たせて、早飛脚にて小西どのへ。

トあやめの持つて來た文箱へ一卷を入れ、また一卷の箱へ、右の書き物を入れし

斷う入れかへて置けば、詮議になつても氣遣ひはない。この上は、この一卷の箱を、元の寶藏へ

トこなしあつて、奥へ入る。下座より、あやめ、出て來て

あや　最前あの文箱を、これへ殘しては置いたれど、大切な文箱といひ、もしや紛失しては、申し譯も立たずと思へば

ト文箱を取上げ

ほんに、心知れざる鳴戸之助。まづ文箱にちちうは無い。此まゝ持つて……それ〳〵。

ト文箱を持つて行かうとする。この時、奥より鳴戸之助、出て來り、愕りして

鳴戸　これサ、女中、その文箱を、どうするのだ。

あや　ホヽ、この文箱は、私しの持つて參りました物ゆゑ、持つて居りますのでござりまする。

鳴戸　これサ〳〵、まだ御添削の濟まぬうちと申し、その文箱が、どうして渡されるものだ。

あや　御添削の事は明日と、御内意を承りましたゆゑ、持つて歸りますのでござりまする。そこお放しなされませ。

鳴戸　これサ、とんだ事を云つたものだ。どうもこの文箱は渡されない。

あや　ハテ、わたしが持つて參りましたを、持つて歸るのでござります。エヽ、阿房らしい。

ト鳴戸之助を突きのけ、あやめ、文箱を持つて行かうとする。鳴戸之助、あやめをやるまいとする。立廻り。此うち皐月、出て來り、また鳴戸之助を留める事よろしくあつて、トヾ、あやめ、文箱を持つて向うへ入る。鳴戸之助、追ひかけ行かうとする。皐月、取りつくを、當てゝ、鳴戸之助、向うへ入る。これにて、チョン〳〵と道具廻る。

本舞臺、三間の間、うしろ一面の竹矢來を結び廻し、舞臺見附け、よき所に、大釜を直し、これに紺看板の中間二人、凄まじく火を焚いてゐる。幕の内より上の方に彌藤次、麻上下、大小の形にて、床几にかゝり居る。この側に五郎市、やつしの形にて、繩にかゝり、泣いてゐる。これを侍ひ、繩を持つて引据ゑゐる。下の方に捕り手大勢、十手を持ち、その外、中間、拔き身の槍を持つて、嚴重に扣へゐる。時の太鼓にて道具とまる。

中間　先刻より御覽の如く、最早油も沸え立ちましてござります。

彌藤　成る程、最早刻限。今さら申したとて、詮なき事ながら、コリヤ、五郎市、よく承れ。先達て聚樂の御所に忍び入り、大切なる千鳥の香爐を奪ひ、立退きし曲者こそ、五畿内は申すに及ばず西國四國中仙道に、徘徊したる強盜のあぶれ者、石川五右衛門に相違なし。その證據こそ千鳥の香爐、紛失のその夜、聚樂の御所へ、蜀紅の錦にて仕立てし、唐裝束の片袖、その場に落ちありしより、正に三韓の末葉たる、强盜石川五右衛門の所持に疑ひなし。さるによつて、いよ〳〵香爐の盜賊こそ、五右衛門と相極まり、既に河内の國、石川村の隱れ家へ、召捕りに遣はしたるところ、はや五右衛門夫婦は、風をくらひ、逃げ失せしその跡に、いかなる事にや一子五郎市、其

方を殘し置きつるが、其方とても、かねて親五右衞門、申しつけ置いたる事にや、徒黨の連判と覺しき一卷、既に火中なさんと致せしところ、早速捕り手の者、その一卷と、其方を召捕り、この程より獄屋の住居。まつた、その一卷こそ、三韓地理八道、金羅道の間道より、大明へ案内の一書なり。彼れこれ以て、いよ〳〵五右衞門の仕業と一決なし、右の一卷は、聚樂の御所へ差上げたり。この上は、科なき其方なれども、盜賊の一子たるゆゑ、例し少なき釜煮の刑罰に仰せつけらるゝ。いかなる強盜の五右衞門たりとも、我が子の嚴しき刑罰の、樣子を聞かば、もしや恩愛に引かれ、便り來る事もやあらんと、それゆゑにこそ斯くの成敗。申し置く事あらば、聞き屆けくれん。不便ながらも、用意いたせ。

五市　有り難うござりまする。あの父樣が恐ろしい、盜みをさつしやるやら知らねど、常々から大事にかけてござつた卷き物、知らぬ人に渡しても惡からうと思うて、燒いてしまはうとしましたより外に何にも知りませぬ。今爰で、釜煎りとやらになつて死にまするは、せう事もなけれど、ならう事なら、どうぞ父樣母樣に、ま一度逢うて死にたうござりまする。

ト泣き落す。彌藤次、こなしあつて

彌藤　オヽ、尤も……なれども、叶はぬ事ぢや。時刻移れば、用意いたせ。

皆々　ハヽア。

ト時の太鼓になり、中間三人ほど、繩襷をかけ、大釜の前へ段を直し、釜の蓋を取つてのけ

中間　然らば直さま刑罰に。

彌藤　決していたはる事は相成らぬぞ。

中間　ハツ……五郎市

皆々　立ちませい。

ト五郎市を引立てにかゝる。向うバタ〳〵になり、林平、旅の形、胸當て、手甲、脚絆、草鞋の形にて

林平　御成敗、待つた〳〵。暫らく〳〵。

ト云ひながら走り出て來て

それに御座なさるゝは、早野彌藤次さまでござりまするか。

ト彌藤次、見て

彌藤　其方は、岩木兵部どのゝ家來。何ゆゑあつて刑罰を止めしぞ。

林平　ハツ、某主人岩木兵部、この程より尾張の國、熱田明神、武將家より御再建につき、その普請奉

行の役儀、首尾よく相濟み、今日只今歸りがけ、大津札の辻にて承るところ、盗賊の張本、石川五右衛門が一子、今日七條河原に於て、釜煎りの刑に行はるゝ事、主人兵部承ると等しく、大きに驚ろき、何か所存あるゆゑ、武將の御成敗ながら、一刻も早く走りつき、お止め申せとござるゆゑ、斯くの仕合せ、まづ〳〵お止まり下さりませう。

ト大息ついて此せりふを云ふ。彌藤次、心得ぬこなしあつて

彌藤　聚樂の御所にても老分たる、岩木兵部どのゝ止めゆゑ、樣子相分るまで、延引は致せど、武將家より行はるゝ成敗を、如何いたして止め召さるゝか。兵部どのゝ心底こそ心得ぬ。

林平　その御不審は御尤も。最早只今主人兵部、これまで罷り越しますれば、何れとも相分りませう。先づそれまで延引の儀、何卒幾重にも

ト彌藤次、こなしあつて

彌藤　成る程、然らば少々の猶豫……コリヤ〳〵、者ども、五郎市が刑罰、暫らく相待て。

皆々　ハツ。

ト扣へる。此うち又、時の太鼓になり、先徒士二人、旅の形。後より旅形の陸尺四人、旅乘り物を擔ぎ、「エイサツサ〳〵」と懸け聲にて出て來る。後より旅形の供廻り、出て來る。直ぐに舞臺下の方へ

乘り物を下ろす。林平、中ぬき草履を直し、乘り物の戸を明ける。內より兵部、老けたる拵らへ、ぶッ裂き羽織、野袴、大小にて、紫の絹にて腹を卷き、刀を持つて出る。彌藤次、兵部を見て

彌藤　これは〳〵、岩木兵部どの、まづ〳〵これへ。

兵部　これは早野彌藤次どの、今日のお役目、さぞ御心配でござらう。

ト云ひながら上へ通る。彌藤次、思ひ入れあつて

彌藤　先づ〳〵、何は差措き、早速申さうには、只今承れば、尾張熱田へ御普請のお係りの由、首尾よくお役儀も相濟み、御安心にござりませう。

兵部　これは〳〵。それは私し事。只今先走りに、家來へ申し遣はしてござるが、途中にて刑罰の儀を承り、驚きましたるゆゑ、旅勞れと申し、老體の拙者、早駕籠にて罷り越したるは、貴殿のお役儀に對して、申し分はござらねど、少々その意を得ませぬ儀がござるゆゑ、刑罰お止め申してござる。

彌藤　成る程、拙者も餘人の詞にござらば、取り用ひも仕らねど、一人の妹を遣はし置きます貴殿の事、申さば姻同士の義理もござれば、お詞ゆゑに刑罰延期は、仕つてござれど、何を申すも武將家より出たる刑罰、お止めなされし御所存はな。

兵部　一通りお話し申さう。石川五右衛門が悴、五郎市こと、親五右衛門を誘き寄せる手段とござつてこの所に於て、釜煎りの刑罰、御尤ものやうなれど、よく〳〵委細を承るに、大切なる千鳥の香爐を、奪ひし五右衛門、その悴を虜となしての刑罰は、理の當然とは申しながら、强惡不敵の五右衛門、ナニ悴の一人や二人、刑罰にあへばとて、おめ〳〵と誘き寄せられうや。何を申すも千鳥の香爐、五右衛門が手にあれば、もしや一子の刑罰と聞かば、恩愛に溺れ、大切なる香爐、破却なすは目のあたり。憚りながら、この御成敗は、再應武将家へお願ひあつて、その一子を助命いたさせ、仁心を加へ、兎角香爐を取戻す計らひが、よろしからんと存ずるゆゑ、推して某、お止め申してござる。

彌藤　成る程、岩木氏のお詞、御尤もには存ずれども、私しならぬ上意の刑罰。助命いたさせたきなど申し出さば、天下の掟を背く道理。

兵部　サ、そこが役儀の第一。只一筋の成敗ではござるまい。まして大切なる寶紛失の、折柄ではござらぬか。兎角、仁を以て事を計らば、情に刃向ふ刃はなく、萬一寶の戻るまいものでもござらぬて。

彌藤　でも、一旦仰せ出されし刑罰は

兵部　止められぬと御意あるか。

彌藤　只今まで、その例とてもござらねば。

兵部　そりや氣が小さい。この度の成敗は、例もなき熱湯の釜煎り。こりや五右衛門なれば、かゝる罪科もあるべきが、取るに足らざる小兒を召捕り、手柄さうに釜煎りの刑罰。如何いたしたお裁きでござる。これしきの儀を押し返して、願はるゝ御策略はござらぬか。

彌藤　イヤ、左樣御意なされても、面々の役儀にも依りますれば、岩木どのゝ御批判は受け申さぬ。

兵部　こりや面白い。拙者がお止め申すからは、直さま武將家へ言上いたす所存でござる。兎角、上を學ぶ下でござれば、仁心無ければ相叶はぬ。悴當馬之丞へ、貴殿の妹呉竹を、嫁に致した拙者が心も、可愛がるゝこそ、其許の心も、嬉しいと存ずる。心に二つはござらぬ。世俗に申す、子を持つて知る親心。この五郎市とやらにも、母親がありさうなもの。又、親があれば目前に、釜煎り責めに殺さるゝ、憂き目も苦勞も、いか程の事でござらう……ハヽ、こりや要らぬ繰り言ながら、下々で申さば斯樣なもの。もしや拙者、この五郎市が助命を願ひ出して、お咎めござらば其許のお腹は借り申さぬ。

ト此うち彌藤次、こなしあつて

彌藤　成る程、岩木どのゝ御仁心、驚き入つてござる。貴所の御胸中、相知れませぬゆゑ、只今の如く、面を赤め申してはござるが、拙者とても幼なき者を、殺したうも存じ申さぬ。この上は、貴所の思し召しを以て

兵部　千鳥の香爐は申すに及はず、五右衛門が落着まで、申し達して、この五郎市は、岩木兵部が預かるでござらう。

彌藤　誠に、風前の燈火に近き一命、助かりしも兵部どのゝお情。五郎市、必らず仇に存ずるな。

五市　エヽ、有り難う存じまする。

兵部　然らば直さま、武将家へ申し達し

彌藤　御沙汰次第で、兵部どの

兵部　彌藤次どの

兩人　申し談ずるでござらう。

ト時の太鼓になり、兩人よろしく、この道具廻る。

本舞臺、三間の間、高二重、一面の土手。うしろ藪疊。平舞臺は殘らず川にて、舞臺前浪板。土手の

眞中、下り口の鴈木、すべて八幡堤淀川の體。この鴈木に當馬之丞、やつし形にて、鉢卷なし、魚たごを傍に置き、川の鮒を掬ひゐる見得にて道具とまる。

ト時の鐘、合ひ方になり、當馬之丞、鮒を掬ひながら

當馬　ハテ、浮世といふものは、變つたものだ。岩木兵部の忰當馬之丞と、聚樂の御所に仕官の身であつたれど、御寶藏宿直の夜に、大切なる千鳥の香爐、奪はれしその越度によつて、親人よりは御勘當。此やうに姿を變へ、夜のうちより小鮒を取つて商ふも、一つには千鳥の香爐詮議の爲。ハテ、町人の世渡りといふものは、埒の明かぬ事なア。

ト思ひ入れ。禪のツトメになり、土手の上、バタ〳〵にて、あやめ、文箱を持つて走り出て來る。後より鳴戸之助、追ひかけ出て、引ッ捕へる。此うち當馬之丞、身をひそめて樣子を窺ひゐる。

あや　こりや、この文箱に心をかけて、なんとするのぢや。

鳴戸　なんとするとは、此方にちつと入用なその文箱。うぬらに取られてつまるものか。

あや　イヤ〳〵、どうあつてもこの文箱、滅多に渡してよいものか。

鳴戸　面倒な。渡せ。

ト爭ふ。立廻りあつて、鳴り物になり、兩人、見事にタテあろ。此うち、當馬之丞、窺ひ寄つて、文

箱を取らうとする。三人、立廻り。始終暗がりのこなし。此うち鳴戸之助、あやめを引敷く。時の鐘誂らへの合ひ方になり、藪疊の内より白刃を出して、鳴戸之助を一太刀切る。鳴戸之助、苦しみ、倒れる。藪疊より五右衛門、好みの形にて、白刃を持つて出る。此うちに上の方より、笘を掛けし三十石の船、出てくる。土手には四人、立廻りあつて、トヾ、五右衛門は、あやめを切り殺す。當馬之丞、文箱を取らうとする。五右衛門、これへ手をかけ、立廻りにて文箱を落す。文箱、船へ入る。この物音に笘を明け、隼人、田舎座頭の形にて出て、この文箱を手に取りあげ

隼人　ヤ、こりやコレ文箱。

トこの聲にて土手の兩人、ホッと思ひ入れ。立廻りあつて、當馬之丞はベツタリと下にゐる。五右衛門は白刃をヒラリと出す。木の頭、この途端よろしく、ひやうし

幕

あとシヤギリ。

第一番目　四建目

大津追分の場

岩木兵部屋敷の場

裏手樋の口の場

役名――奥女中、瀧川。同、紅葉。同若黨、勘六。岩木兵部。同女房、濱町。同娘、敷島。乳人、秋篠。筒井惡五郎國景。天狗武者官八。奴、沼平。堀越治太夫。福島典膳實ハ三上の佐渡助。修行者、覺連。佐竹左五郎。南禪寺龍山國師實ハ盗賊石川五右衞門。

四建目の口のところが、四五丁、原本に缺けてゐるので、止むなく筋書を記して置く。舞臺は大津の追分け道で、兵部の娘敷島姫が、乳人の秋篠、佐竹左五郎、堀越治太夫、その外供廻り大勢を連れて三井寺へ參詣し、駕籠を爰へ置いて寺院へゆく。かれて敷島に懸想してゐる筒井惡五郎國景が、堀越治太夫をくろめこみ、敷島を奪ひ取る手段をめぐらす。それは、石川五右衞門の手下に、修行者覺連と牒し合させ、敷島が奉納した鉦の緒で、覺連が縊り殺された體で、空駕籠の中へ倒れてゐる。敷島等が三井寺から戻つて來て、愡り立騷ぐ。そこで五右衞門は龍山國師と身をやつし、天狗武者の官八を若黨小源次に仕立て、爰へ通りかゝり、驚ろいた體で、左五郎に氣附け藥を與へるのである。

左五　これは忝う存じまする。

ト覺連が口に含ませ、介抱する。五右衞門、よく〳〵見て

五右　ヤヽ、その出家は

　　　　トこなしあつて

　小源次。あの出家は、愚僧が院内

　　　　ト官八、見て

官八　成る程、納所役を勤めました、覺連でござりますぞ〳〵。

供男　左樣でござりますノ〳〵。

　　　　ト供廻り、立騷ぐ。

五右　コリヤ〳〵、しかと樣子も承らず、聲高に立騷ぐまい。扣へて居れ〳〵。

供男　ヘイ〳〵。

　　　　ト扣へる。

五右　イヤナニ、お若いの。愚僧ことは、京都南禪寺の役僧でござるが、この出家は、即ち手前寺の納所でござるて。

左五　エヽ、この出家がな。

五右　如何の儀をもちまして、手前院内の僧を、あなた方には、斯樣に御介抱下さるな。

治太　イカサマ、こりや御尤ものお尋ねでござりまする。手前ことは岩木兵部が家來。即ちあれなるは主人の娘、敷島どの。今日、三井寺へ參詣の供待ち、この所に乘り物を差置きましたるところ、お立ちの砌り、この駕籠の内に、首に白布をまとひまして、この出家が、相果て罷りありました。
五右　すりや、この乘り物の内に、この出家が……して、其許の御主人は、岩木兵部どのゝお娘御とな。
治太　左樣でござるて。
五右　小源次、覺連が死骸、とくと改めて見やれ。
官八　心得ました。
　　　ト死骸を改め見て、鉦の書附けを見て
御覽なされませ。縊りましたる白布に、願主岩木氏、敷島と記してござりまする。
敷島　自らが手づから認め
秋篠　お納めありし、彼の鉦の緒。
治太　ハテサテ、憎い奴でござるて。
五右　アヽ、これで解りました。近習役の御兩所、こりや、氣の毒ながら、お屋敷のお名も出ませう。

殊に、それなる敷島どのとやらも、様子によつては、お役へも届けまして、御同道仕らねば相成りませぬぞ。

左五　イヤ／＼、その儀は何分不承知にござる。今日、この所への御參詣は、極内にて、忍びの御供。路次にて斯樣の珍事ござつて、大殿樣のお耳に入り、敷島さまを代官所へ、御同道ござりましては、御主人に對し、我れ／＼どもの

五右　越度とも罷り成りませう。なれども、氣の毒ながら、檢視沙汰と罷り成れは、人殺しは、あれなる敷島。磔刑とやらへかゝります。

左五　ヤヽ、何と仰せらるゝ。手前主人の娘御が、なんで人殺しの

五右　申し譯のござらぬは、アレ、あの白布の鉦の緒。

左五　どう致したとな。

五右　小源次、あの鉦の緒に、なんと書きつけてある。

官八　ヘイ。

ト擴げ見せ

御覽なされませ、この白布に、願主岩木氏、敷島とござりまする。

五右　サ、あの通りでござる。院内の所化を殺せし手がゝりは、あの鉦の緒。愚僧とても出家の事。人を助けるが役でござるゆゑ、いづれとも申し開きも、致して遣はしませうほどに、何分娘御を、愚僧にお渡しなされいサ。

左五　成る程、こりや御尤もなるお詞でござれども、我れ〳〵がお供いたしながら、女儀を獨り、其許樣へ、お渡し申すも如何。こりや、身共をお連れなされまして

五右　アヽ、イヤ〳〵、仰せも御尤もなれど、この白布に、願主は敷島と記しござれば、餘人を召連れましたとて、役に立たぬ儀でござる。氣遣はれずとも、それなる女儀を

左五　左樣ではござりませうが、こりや何分、拙者を御同道なされて

卜爭ふ。官八、聞きかれて

官八　これはしたり、此お人は、聞分けの惡いお侍ひだ。此方の旦那も御出家でござるワ。ナニ僞はりを申さるゝもので。それに、べん〳〵と聞分け無いは、アヽ、聞えた、こりやア彼の出家を、おてまへが殺しめされたな。

左五　ヤヽ、なんと。

官八　あれほどの證據があつても、これなりに捨て置かつしやる御所存か。イヤハヤ、厚かましい侍ひ

だ。いかに人を助けるが出家とは申すものゝ、譯の解らぬ事は拙者、嫌ひでござる。サア、寺役
へござれ。

ト左五郎が胸づくしを取る。

左五　こりや何しやる。不作法千萬な。爰放さぬか。

ト取つて突き放す。官八、轉んで

官八　こりやアこの侍ひは、身を投げたぞよ。出家を殺したその上に、身共を投げては、もう料簡が相
成らぬ。この二本棒めが。

ト床几にある莨盆を取つて左五郎を打つ。

左五　こりやおのれ、身共に

ト立ちかゝる。

五右　コリヤ〱、小源次、不調法千萬。鎭まらぬか〱。

官八　イエ〱、料簡ならぬ〱。

五右　コレ、鎭まれと申すに。

皆々　鎭まらつしやい〱。

治太　左五郎どのも、お扣へなされい。

秋篠　鎮まつてござりませ〳〵。

官八　おのれ・侍ひめ。

ト拔討ちに左五郎へ切つてかゝる。皆々入亂れになり、双方をなだめる。五右衞門、心遣ひしながら床几に腰をかけてゐる。この時、入相の鐘、出の唄になり、向うより紅葉、帽子・屋敷者の拵らへ。瀧川、同じく椎茸髱の奥女中、高からげ。後より勘六、やつし木綿の形、一本差し、革文箱と青傘を二本持ち、供をして出て來り、直ぐに舞臺へ來る。皆々入亂れの中へ交つて、官八、貫紘を振りあげる。兩方の供、引ッたくる。この時、來かゝりし勘六の持つた日傘を取つて、持つてかゝる。勘六、取りつくを官八、したゝかに打つ。これにて勘六の眉間へ疵つく。勘六、直ぐに官八を引ッ捕へ

勘六　紅葉さま、瀧川さま・お待ちなされまし。行き通りの者へ無法千萬。御覽なされませ、私しが面へ疵を附けました。相手はしつかり、捕へて置きました〳〵。

紅葉　ほんに、勘六どのゝ眉間から、血が流れまする。瀧川さん、お前、血留めは無いかえ。

瀧川　血留めはあらうわいな。サア〳〵、勘六どの、これを附けて見さんせ〳〵。

ト箱せこより血留めを出し、勘六の疵へ附けんとする。

勘六　アヽ、モシ〳〵、必らずお構ひなされまするな。譯も無い私しへ、疵を附けましたを、生なか藥を附けるのは、いらぬ事でござりまする。相手は捕まへて置きました。

官八　コリヤヤイ、相手も糸瓜もいるものか。おのれらは人殺しではないか。うぬ、今に酷い目に會ひ居らうに。

勘六　なんだ、人殺しだ。イヤ、この侍ひは狂人か。とんだ事を云ひ出したな。

紅葉　コレ〳〵、勘六どの、見さんせ。向うもお屋敷のお歴々樣、殊にお寺樣も交つてお出で遊ばすが、こりや何か、譯があらうわいな。

瀧川　こりや憚りながら、樣子を一通り承るがようござりませう。して、こなさんが、捕へてゐさんすお方は。

五右　アイヤ、その者は、愚僧が供でござるて。見ますれば、間違ひまして、あの人の面へ、疵を附けましたは、いかに致しても氣の毒に存ずるが、決して逃げ走る儀もござるまい。卽ち愚僧は、南禪寺の役僧でござる。苦しうござらぬ。拙僧にお預けなされいサ。

勘六　ヘイ、あなたは南禪寺のお役僧樣。預からうと仰しやるからは、ようござります、この相手は、あなたへお預け申しませう。

瀧紅　コレ、後で難儀のかゝらぬやうに、さしやんせや〳〵。

勘六　あゝ仰しやれば、ようござります。ヘイ、御出家様、然らば此お人は、あなたへお預け申しました。

五右　慥かに預かりました。

卜官八を放し

勘六　して、あなた方にも、お關りあひでござりまするか。

左五　左様でござる。拙者ども主人は、岩木兵部。卽ち家來、佐竹左五郎と申す者。斯様の騒動、起りましたる最初は、あれなる主人の娘御、三井寺へ參詣の間、この所に乘り物を殘し、お立ちなさるゝ只今に相成り、その乘り物の内に、出家一人、手前主人が庚申塚へ納めましたる、鉦の緒を以て、咽喉を縊り、横死の様子。その折から、南禪寺の役僧の通りかゝられ、卽ち死人は南禪寺の納所。縊りましたる鉦の緒に、敷島とござるゆゑ、それゆゑ申し募りに罷り成り、間違ひまして其許の怪我。近頃氣の毒千萬に存ずる。

勘六　御様子詳しく承りました。モシ、お二人様、只今の譯合ひでござりまする。

紅葉　成る程。さう聞けば、瀧川さん、氣の毒なものぢやござんせぬか。

瀧川　左様でござりまするが、私しどもゝお非番の今日、この人ぢやと申して、面々の使ひまする召仕ひと申すではなし、面へ疵の附きました人を、お屋敷へ連れ歸りまして、お尋ねの節、なんとマア、申し譯を致したらよからうやら。

勘六　モシ〳〵、あなた方は、どうお濟ましなさるゝか存じませぬが、私しへ疵を附けましたは、お寺様のお供でござりまする。こりや矢張り、お寺へかゝるがようござりまする。

五右　そりやモウ、如何やうとも致すがよい。此方は出家の事ゆゑ、さのみお上沙汰を願ひも仕らぬが、何を申すも、氣の毒なは死人でござるて。

紅葉　その死人は、どれにござりまするえ。

五右　卽ち、これでござる。

ト死骸を見せる。

瀧川　エヽ、坊さんでござりまするな。

五右　愚僧が寺の納所でござる。

勘六　エヽ、縊り殺しましたのかえ。モシ、マア、御覽じませ。太い奴もあるものでござりまする。この布に……ほんに、岩木氏、敷島と……エヽ、あのお姫様の事でござりまするね。

宮八 サ、それゆゑに、あのお女中樣に、疑ひがかゝりましてからの騷動。なんと、斯うした慥かな證據があるからは、あの娘御を、役所へ連れて行かねばなりませぬよ。

紅葉 成る程、書いてあるわいな。瀧川さん、ちよつと來て御覽。

瀧川 どうやら氣味が惡うござりまするわいな。

勘六 何をお前、怖い事はござりませぬ。爰へ寄つて、御覽じませ〳〵。

瀧川 勘六どの、しつかりと、捕へてゐて下さんせ。

勘六 ハテ、臆病なっ

ト鉦の緒を擴げて見せる。瀧川、怖々立ちよる拍子に、懷より封印ある金の包みをソツと出し、死骸の側へ置く。

治太 モシ〳〵、最早日も暮れますに。こりや如何仕りませうなっハテ、難儀な儀でござる。

左五 此方は、鬪りあひの儀でござれば、難儀はいとひ申さねど、行き違ひのあの人の疵、これが第一氣の毒に存ずるて。

五右 イヤ〳〵、疵を附けましたはこの身の家來、卽ち愚僧が預かり置いてござれば、あの人の儀は、手前方より、如何やうとも詫びませうほどに、貴殿方も聞分けられて、あの娘御を、寺役までお

渡しされサ。

官八　モシ〳〵、何に致せ、道端に死骸を置きまするも往來の難儀。こりや片寄せませうかな。

五右　愚僧承知の上は大事ない。片寄せて置きやれ。

官八　畏まりました。御家來中、これへござれ。

供男　心得ました。

ト皆々立ちかゝり、死骸を片寄せんとする。死骸より包み金落ちる。皆々見て

それ〳〵、何か落ちました〳〵。

官八　ほんに、何か落ちました。

ト包み金を取上げ

アヽ、これは金子でござります。

五右　ナニ、金子が落ちた。そりや、その非人の金子か。

官八　イエ〳〵、これは、あなた樣のお金でござります。ナ、モシ、最前、ソレ、御普請金のうち、職人中へお拂ひとござつて、先程御封印なされ、私しへお預けなされました金子でござりますを、私しが懷中から取落しました。これはハヤ、不調法千萬な。

ト いろ〳〵呑みこませる。

五右　エヽ、先刻其方へ渡し置いたる、金子百兩。

官八　イエ〳〵、百兩ではござりませぬ。

五右　成る程、百兩ではないと存じた。慥か、その金子の高は

官八　モシ〳〵、その金の高は

ト 懷より出して高を見る事あり

慥か五十兩ぐらゐな量でござりました。

五右　左やう〳〵、あの量は五十兩位な量でござつた。其方、きつと懷中いたして居れ。取落すとは、麁相千萬な。

ト 兩人、顏見合せて思ひ入れ。

瀧川　イヤナニ、御出家樣。なんと仰せられまする。只今それへ落ちました金子は、あなた樣の金子でござりまするか。

官八　いかにも左樣でござりまする。

瀧川　これはハヤ、近頃無理なお願ひでござりまするが、只今あなたの懷中なされましたる、金子の包

早速お目にかけいサ。

五右　これはしたり、どう致したものだ。此方の金子を、あれなる女中が、拜見を願はるゝなら、早速

官八　エヽ、どうかこの金子の儀は、見せ申すは

瀧川　ちと拜見仕りたうござりまするゆゑ。

官八　そりや又、なぜでござるな。

　　　トうぢ〳〵する。

瀧川　左樣でござりまする。

官八　エヽ、この金子の包みかな。

　みを、ちよつとお見せ下さりませ。

官八　へイ〳〵、畏まりました。イヤナニ、これはお屋敷樣、拜見と仰せらるゝゆゑ、早速お目にかけ

　まするが、只今落しましたは、この金子でござりまする。

　　　ト出す。瀧川、取つて

瀧川　エヽ、この包みでござりまするな。

　　　トよく〳〵見て

憚りながら、この封印の御印形は、あなた樣の御判でござりまするかな。

トこれにて五右衞門、どうか氣味惡き思ひ入れにて

五右　イヤ、印形は愚僧のではござらぬ。その印形は

瀧川　御印形は。

五右　なんでござる。あの者の印形でござる。

官八　エ。

五右　イヤサ、コリヤ、其方が印形であらうな。

官八　へイ〳〵、成る程、私しの印形でござりまするが、その印形が、どうしましたな。

瀧川　イヤ、別してもの事でもござりませぬが、私しは御所方に、御奉公いたす者でござりまするが、何をお隱し申しませう、主人の奥へ、盜人が入りました。

官八　エ。

瀧川　サ、その節、お納戸金が餘程紛失。内々御詮議なされまするが、手懸りは金子の印形、即ち、この包みの印形は、紛失の金子の內。證據と申すは包みの印形。こなさんの御判とあれば、こりやその手蔓から、用金を奪ひし盜賊の、詮議いたさにやなりませぬ。

トきつと云ふ。五右衛門、官八と顔見合せ、思ひ入れあつて

五右　すりや、その金の印形は、おてまへ屋敷で、紛失いたした、金子の判ぢやとお云やるのか。

瀧川　左樣でござりまする。申さば南禪寺のお役僧、あなたに決して間違ひは、ござりますまいなれど只今のお詞に、これなる御家來の衆の印形と、仰せられましたが、主人の金子へ家來の印形、据ゑやう譯もござりませねど、そりやモウ、御所方と違ひ、寺方にては、左樣な儀もござりまするやら。そりやそれにも致しませうが、いづれ御家來は私し屋敷へ、同道仕りまして、この印形調べを致さにやなりませぬ。左やう思し召して下さりませ。

官八　アヽ、コレ〳〵、ナニわしが判では、ござらぬ〳〵。こりやア、アノ

五右　コリヤ〳〵、その判は其方の判であらう。……サ、其方の印形ぢやぞ〳〵。

ト思ひ入れあつて

コレ、女中、イヤサ、其許は、いづれの屋敷方かは存ぜぬが、女だてらに印形の調べ。手前家來を同道いたさるゝ儀は、罷りなりませぬぞ。

瀧川　左やう御意なされますれば、金子の儀は、外へ廻しまして、あの者の面へ、疵を附けましたる私しどもの申し譯。いづれ屋敷へ、同道いたさにやなりませぬ。

五右　すりや、金子は外にして、送りの者の、面體の疵ゆゑ
瀧川　ハイ、同道いたしたうござりまする。
五右　サ、さう云はれては、否とも愚僧は申されず。コリヤ、其方、あの女中と同道いたして、お屋敷へ參るがよからう。
官八　これはしたり〳〵、何やら一物ありさうなその屋敷へ、どうマア拙者が……イヤ〳〵、それは決して參りませぬ。
瀧川　そりやこなさんの勝手といふもの。行く事ならぬとあれば是非がない。又この金の印形の詮議。お寺も名におふ南禪寺さまとあれば、手前屋敷より迎ひの人を差越しまして、寺役をなさるゝあなた樣、此方屋敷へ、お招ぎ申すまでの事。その節は御苦勞ながら、お關り合ひゆゑ
五右　イヤ、參るまい。ハテ、その金が、手前金子と申してこそ、疑ひもかゝりませうが、その金は。コリヤヤイ、小源次、わりやァ間違ひであらうな。其方が所持の金子ではあるまい。只今のモヤモヤに、こりや外からこれへ、ナ、それ、あの金は、其方に預けた金子ではあるまいぞよ。
卜目顏で知らす。
官八　成る程〳〵、左樣でござります。お預かりの金は、慥か出入りの職人へ、ほんに、それ〳〵、渡

して参りました〳〵。

瀧川　すりや、只今になりまして、御所持なされた金子でなうて、この金は、どれから出ましたな。

官八　サ、大方その金は……オヽ、それ〳〵、相果てたこの出家の、懐から出た。身共は存ぜぬ。この死人の懐から落ちました。

瀧川　左様ならば、死人の懐より、出ました金とな。左様ござりましては、矢張りあなた方は、お關り合ひでござりまする。

五右　そりや又、なぜでござる。

瀧川　ハテ、相果てましたるも、矢張りお寺の納所役。死人に口無〳〵。相手どりまするは、御苦勞ながら、あなた様。

五右　イヤ、この僧は、南禪寺を駈落ち致し、手前寺の者ではござらぬ。

瀧川　お寺内の出家でないとあれば、あなた方に、お關り合ひはござりますまい。左様ぢやござりませぬか。

左五　成る程左やう。院内に居らぬ出家、相果て居らうが、其方に關り合ひはござらぬ筈。

五右　イヤ、駈落ちは致したが、寺中に人別、印形の据つた出家でござれば。

瀧川　矢張り寺中の御出家なれば、この死骸、申し請けたうござりまする。

五右　出家の死骸、在家に置いて、何におしやる。

瀧川　ハテ、死人なれども、金子を奪ひし盗賊の手がゝり。詮議いたすそれまでは、葬むる事も相成りますまい、と申してからが、死人を長うも

勘六　詮議の相濟むまでは、この死人は、鹽漬に致してなりと、落着までは、葬むる事は叶ひませぬ。

トこれを聞いて、死骸、そろ〳〵動き出す。

紅葉　成る程、弔ふ事はさておいて、鹽漬の樽詰めに致しても、こりや詮議を致すがようござりませう

ト又死骸動く。

瀧川　左樣なれば、その死人は、詮議の濟みまするまで、私しどもへお預け下さりませ。

五右　サ、それは。

瀧川　相成りませぬかな。

五右　アイヤ、承知いたしした。隨分と預けませう。

瀧川　しつかりと、お預かり申しました。

勘六　左樣なれば、その死骸は、當所の非人に申しつけ、鹽漬に致して、お屋敷へ持たせて參りませう

ドレ、この死骸を

ト立ちかゝる。ピク〳〵したる覺連、起きあがつて

覺連　アヽ、コレ〳〵、鹽漬にされて、堪るものか〳〵。

皆々　イヤア、死人が活きたワ〳〵。

左五　さては、こりや、根强う仕込みし騙りだな。

覺連　アヽ、モシ〳〵、お侍ひ樣〳〵、私しは騙りではござりませぬが、ちつとのうち、死んだ眞似をしてゐろと、賴まれましたゆゑ、錢が欲しさに、死んだ風を致したが、ナニちよつとのうちで濟む事か、腹はへる、手水には行きたくなる、苦しくつてならぬものを、イヤ駈落ち者だの、盜人だの、揚句の果に、鹽漬にしようとは、瓜や茄子ではあるまいし。エヽ、この人は、情ない人だわえ。

ト五右衞門に向ひ、思ひ入れ。皆々見て

左五　さてこそ彼奴等が騙りだな。

瀧川　御用先のこの封金、持ち合せたを幸ひに、金の事から仕掛けた詮議。危ない事。この金は、早う納めて置きませうわいなア。

ト懐へ入れる。五右衞門、無念の思ひ入れ。

左五　サ、御出家。そろ〳〵拵らへ事の化けの皮、もうよい加減に、顯はしてしまへサ。

五右　サ、そりやア。

皆々　サア〳〵、どうだ。

ト詰めよる。五右衞門、思ひ入れあつて

五右　そりやア。

ト聲かけ、ズイと下座へ入る。禪のツトメになり、後に窺ふ五人の手下、割り木を持つて打つてかゝる。供廻りうろたへ、箱提灯を持つて、向うへ逃げて入る。一同、紅葉を捕へ

百　敷島か。

秋條　ナニ、敷島さまを。

ト支へる。一同は紅葉を敷島と思ひ、引ッ立てゝ向うへ入る。秋條は敷島と思ひ、追ひかけて入る。

勘六　お二人ながら、お危なうござりまする〳〵。

トこれも下座へ入る。五人の惡者、東の方へ逃げんとするを、治太夫、追ひかけて、東の口へ入る。五人は東より歩みを廻り、花道へかゝり、再び舞臺へ來る。瀧川は敷島を介抱して下座へ入る。官八

逃げんとするを、左五郎、引ッ捕へる。この中へ覺連、ウロ／＼して交り、兩方より突き廻され、アル／＼して倒れる。官八、左五郎を當て、下座へ逃げて入る。この時、五人の者、左五郎へ打つてかかる。左五郎、拔いて切りちらし、立廻りあつて、五人、手を負ひて逃げる。覺連、心附き、掴みかかる。左五郎、一刀切る。覺連、倒れる。その間に左五郎、向うへかゝり

左五　敷島さまの御身の上、心元ない。さうぢや。

ト矢張り禪のツトメにて、向うへ一散に入る。下座より敷島、駈けて出る。後より官八、追ひかけ出る。

敷島　左五郎やアい／＼。

官八　見附けたぞ。

ト敷島を引ッ捕へ、向うへ行かうとする。瀧川、出て、官八を引留め

瀧川　あなたは慥かに

敷島　敷島ぢやわいの。

官八　先刻の女め。

ト割り木にて打つてかゝる。瀧川、立ちあがり、懷劍を拔いて、突きかける。官八、うろたへ、下座へ

逃げて入る。瀧川、敷島を介抱して

瀧川　お氣遣ひなされますな。どうぞあなたを

ト乗り物へ探り當り

幸ひ爰にお乗り物。マア〳〵、この内へお忍びなされて

ト乗り物へ敷島を押し入れ、戸を閉し、思ひ入れあつて

ア、コレ、お供廻りはござらぬかいの。コレ、敷島さまのお駕籠の衆は、居やらぬかいなう。

トあちこちするうち、覺連、呻き出す。瀧川、駈けより、覺連が手を取つて引起し

コレ〳〵、あの乗り物を、早うお屋敷へ、舁いでござんせ。コレ〳〵

ト覺連を見て、膽を潰す。覺連、又ベツタリとして呻る。この時、勘六、駈けて出て來り、瀧川を見て、

勘六　瀧川さまでござりますか。

瀧川　勘六どの、この駕籠に、先刻の娘御。今出川の屋敷とあれば、送り届けて。

勘六　心得ました。

トうろたへ、駕籠の棒を上げようとして、一人ゆゑ

モシ〳〵、私ばかりではいけませぬ。棒組みが居りませぬ〳〵。

瀧川　ハテ、其方ばかりでは行かぬかいの。

勘六　どうして一人で行けませう。モシ〳〵、瀧川さま、ちよつと後棒を、お賴み申します〳〵。

瀧川　どうして、わしが

勘六　ハテマア、やらつしやりませ。

ト無理やりに後棒を擔がせ、勘六は先を擔ぎ上げる。瀧川、意氣地なく、重たさうに、二足三足行きかけて、ベッタリと膝を突く。木の頭。瀧川、駕籠へ手をかけ、立ちあがらうとする。キザミにて、よろしく、ひやうし

幕

時の鐘にてツナギ、引返す。

幕の外へ、花道より、奴四人、提灯を持ち、六尺棒を突き、鉦と太鼓を打ち、四人連れにて出る。この中に沼平、奴の形にて、六尺棒を持つて、スタ〳〵と出て來り、本舞臺へ來て

奴一　コレ〳〵、皆の衆、マア、敷島さまは、どちらへござつたであらうの。

皆々　どうぞ早く、お目にかゝりたいものだの。

沼平　これサ〳〵、こなた衆は、何も其やうに案じる事ぢやァない。年頃なお娘御、こいつはてつきり色事の果が附かぬから、駈落ちと見えるわいの。

奴二　成る程、それも知れませぬが、主命なれば、捨ても置かれず、夜の明けぬうち、もう一遍尋ねませう。

奴三　さうしませう。これから嵯峨のあたり、桂川の方を尋ねませう。

沼平　これサ、この人は、お半ぢやァあるまいし、ナニ桂川まで行くものか。大方、駈落ちの敷島さまは

皆々　どこであらう。

沼平　築地であらう。

皆々　何を云はつしやる……敷島さまイなう〳〵。

ト捨ぜりふにて幕の内へ入る。捨て鐘打ちあげる。時の太鼓になる。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。襖。よき所に誂らへの公卿の裝束を衣桁に掛け、冠を三方に飾り、その前に、三方に神酒、燈明を供へ、すべて岩木兵部屋敷の體。爰に濱町、襠補、衣裳の形にて立ち

身。國景、麻上下、大小にて立ちかゝりゐる。治太夫、秋篠、前幕の越度にて訴訟の見得にて幕明く。

濱町　コリヤ〳〵、秋篠、すりや其方が、いま申せしに違はず、敷島を見失ひ、何者にか奪ひ取られしとな。

秋篠　申しあぐるも、面目なき事ながら、只今申すに僞はりなく、夜前の騒動、敷島さまを

治太　悪黨どもに奪ひ取られしは、拙者が越度。申し譯なき仕合せでござりまする。

國景　して、警固いたせし左五郎は、如何いたした。

治太　サ、これが合點が参りませぬ。暗さは暗し、向うは無法の悪者ども、白刃を抜いて向ふゆゑ、爰ぞ一生懸命と、日頃の手練に十倍して、寄せ來る奴ばら、切り立て〳〵、縦横無盡に働らけども

濱町　娘敷島、奪ひ取られしと申すのか。コリヤ、治太夫、其方も存じの通り、常から父御を大切に、孝行盡すあの敷島、親の許さぬ、よもや戀路が

治太　イヤ〳〵、無いとも申されぬ。敷島さまは、慥かに近習役の左五郎が、お手を引いたと存じたが今以てお歸りなきは、もしや二人は、あれなりに。

國景　イカサマ、左五郎が敷島を連れて、逃げたかも知れぬぞ。

秋篠　イエ〳〵、なんの左様な事がござりませう。治太夫さまこそ、悪者どもに取卷かれ、こけつまろびつ逃げさんしたを
治太　コリヤ〳〵、滅多な事を申すな。身共、左様な覺えは無いぞ。
秋篠　でも、大勢に取卷かれ
治太　サア、その時の身共が働らきを、お目にかけたいな〳〵。
濱町　默れ、治太夫、さほどの働らきありながら、なぜ敷島を見失うた。暗うて黒白が判らねばこそよけれ、定めて卑怯を働らいたであらうな。
治太　イエ〳〵、どう仰しやつても、拙者、大きに働らきました。
濱町　コリヤヤイ、それ程働らきながら、娘を伴ひ歸らねば、矢張り其方の越度ならずや。
治太　サ、その儀は。
濱町　玆な卑怯者めが。
　　トきつと思ひ入れ。治太夫、國景、顏見合せ、こなし。向うバタ〳〵にて、左五郎、大童にて出て來るを、秋篠、見附けて
秋篠　左五郎さま、戻らしやんしたか。して、敷島さまは、お供なされたかいな。

左五　ヤヽヽ、今以て敷島さま、御歸宅なされぬとや。濱町さま、お聞きもあらん、昨夜の體裁。惡黨どもに取卷かれ、切り散らす其うちに、敷島さまは秋篠どの、お供せしと思ひしに、今までもお歸りなきは心得ぬ。主人の供先、かゝる大事、皆拙者めが越度。申し譯には、腹搔き切つて

濱町　ソレ、秋篠、止めい。

秋篠　ハツ。コレ、待つた。

左五　イヽヤ、主人へ申し譯。

トまた腹を切らうとする。濱町、こなしあつて

濱町　コリヤヤイ、左五郎のうろたへ者。この濱町が止めさせるに、止まらぬか。

左五　ハツ。

ト思ひ入れ。

濱町　主の娘を路次にて奪はれ、云ひ譯なきの切腹か。コリヤ、其方が腹搔き切つて相果つれば、行くへ知れざる敷島が戻るか。死ぬる命を全うなし、在所を尋ねる心は無いか。茲な、うろたへ者めが。

トきつとなる。この時、向うより沼平、一散に走り出て來て

沼平　奥様、これにおわたりなされまするか。昨夜より手分けして、大津のほとりより、醍醐山科、村村を尋ねしに、お行くへ知れぬ敷島さまを、お駕籠に召させ、御所のはした女中と相見え、只今これへ御同道。サヽ、御安堵なされませ。

濱町　ヤヽ、敷島を同道の者ありとや。皆も聞いたか。

左五　エヽ、忝い。お在所知れしか、秋篠どの。

秋篠　さぞお喜びでござりませう。私しも安堵仕りましたわいな。

治太　モシ〳〵、悪五郎さま、敷島さまは、お歸りぢやと申しまするワ。

國景　成る程、歸る筈がないと思ふが、そんなら昨日坊主めが、首尾よくやつたが、また跡で、てつきり彼方へ

左五　ヤ、なんと。

國景　アイヤ、敷島の行くへが知れて、拙者も大慶。兵部どのも、さぞお喜びでござらうと、存じての儀でござる。

左五　アノ、其許までが……………ハテ、お氣の毒な儀でござりまする。

ト思ひ入れ。

濱町　兵部どの、お聞きなされましたか。
兵部　委細、これにて承つた。
ト合ひ方になり、兵部、袴の形にて出て來る。
國景　これは兵部どの、敷島どのゝ行くへ、知れぬと承りしに、早速に在所知れたで、身共も滿足。
其許にも、さぞお喜びでござらう。
兵部　惡五郎どの、御推量下されい。一人の娘、行くへ知れぬと承り、心苦しき折に幸ひ、これにて
少しは安堵の思ひ。して、敷島を同道の
沼平　女中は卽ち御門内へ。下郎が迎ひに。
ト向うを見て
アレ〳〵、最早お乘り物が
ト時の太鼓になり、向うより、前幕の乘り物を、勘六と紅葉、擔いで出て來る。後より瀧川、駕籠に
引添ひ、出て來り、乘り物は舞臺下の方へ下ろす。瀧川は、花道に扣へる。
紅葉　ヤレ〳〵、しんどやの〳〵。大汗になりましたわいな。
勘六　モシ〳〵、どうぞお水を一つ下さりませ。

ト沼平、手桶の水を汲んで出す。

兵部　すりや、その乗り物が

瀧川　卽ち此方の御息女、敷島さま。御別條なう、お送り申しましてござります。

秋篠　お女中樣。

兵部　その女中が、秋篠が話しに聞きし、昨日娘が難儀の場所に

濱町　ほんに、よう深切ないつくしみ。御所方と聞きしが、そんなら、あの女中であつたかいの。サ、これへ〳〵。

瀧川　ハイ〳〵、左樣に御叮嚀に御意遊ばしましては、お請けの致しやうもござりませぬ。さりながら昨夜より御難儀遊ばしました、御息女樣は、イザ

ト乘り物の戶を明け、敷島の手を取り、兵部の側へ連れて行く。

敷島　ヤ、父上樣。

濱町　敷島、戾つたかいなう。

兵部　承れば、昨夜、大津の追分にて、思ひがけなき狼藉者に出合ひしとの訴へ。行く〳〵知れぬと思ひしに、無事に屋敷へ歸る事、兵部が安堵、この上があらうか。

敷島　それと申すも、あの女中の、いろ〳〵との心遣ひ。ようお禮を仰しやつて下さりませいな。
左五　誠に、申しやうもなき、命の親と申さうか。拙者も手を突き、御禮申すでござる。
秋篠　殊に、皆々樣まで、身に引受けてのお世話の段。サア〳〵、そこは端近。
　ト勘六、紅葉が手を取り、よき所へ敬ひ
秋左　エヽ、有り難う存じまする。
勘六　これは〳〵、其やうになされましては、却つて迷惑に存じまする。
紅葉　サヽ、お手をお上げ下さりませ〳〵。
濱町　これはしたり、命の親も同然なお女中。マア〳〵、あれへお通し申した上。
兵部　左やう〳〵、先走りの者共が訴へにて、驚ろくまいか、屋敷の騒動。一家中評議の上、所々へ手分けして、人を走らせ、諸神諸佛へ加持祈禱。その佛神の應護にや、其許の情を以て、恙なう送り下さる段、岩木兵部、生涯この恩は忘れ申さぬ。エヽ、忝い。サヽ、先づこれへ〳〵。
　ト皆々敬ふ。瀧川、迷惑なるこなし
　娘を始め、其方ども、この恩義を忘るゝな。
左治　誠に、この度の御恩の程、忝う存じまする。

ト皆々辭儀する。

瀧川　これはしたり、何をマア、其やうに、御意なされましては、却つて迷惑いたしまするわいな。何を申すも、御息女敷島さま、御難儀の場所へ、折よく參り合せて、私しどもの連れましたる、供の者へも、疵が附きましたばつかりに、私しども丶係り合ひになりまして、女子だてらに、兎や斯う申しました。其うちに、お屋敷のお名も知れましたゆゑ、打捨て置かれず、これまでお供いたしましてござります。マア〱、あなたを始め、附き〱のお方樣に至るまで、お怪我もござりませず、此やうなお嬉しい事はござりませぬ。

兵部　イヤモウ、それと申すも、比類なき其許達の頓智。先程、詳しう承つたが、して、いづれの御所に勤めらる丶や。

瀧川　これはマア、有り難いお尋ね。主人の家名も、申しあげたうは存じますれど、その儀ばかりは、御免なされて下さりませ。併しながら、御所を勤めますると申すもの丶、陪臣の私し、名は瀧川と申しまして、親どもは、江州守山の鄕士、お非番のお暇戴き、通りかゝりし道すがら、樣子は知らねど禪僧と相見え、御息女へ無體の有條。外に荷擔の輩もあり、あの素振りでは、どうやら人に賴まれし樣子。もしや常々、御息女樣を、戀ひ慕ふ者があつて、その戀の叶はぬを根葉に持

つて、無法慮外も又ある習ひ。隨分、お心をお附け遊ばし、この後とても憚りながら、飼ひ犬にも御油斷なさらぬがよろしうござりまする。

トこれにて國景、治太夫、顏見合せ、思ひ入れあつて

國景　イヤハヤ、油斷のならぬ儀でござる。併しながら、敷島どのには、かね〴〵身共、心ござれば、どうやら耳にかゝりまする、と申したところが、左樣あつては何とやら、下世話に申す、臑に疵持つとやら。兵部どの、いづれ申し出したる御息女の儀は、申し請けたう存じまするて。

兵部　その儀も、忰當馬之丞、香爐の詮議も仕り、拙者が勘當、免りましたる上の事。いはゞ忰は、久次公よりのお咎め。その妹の、この敷島。祝言なぞとは思ひもよらぬ。

國景　すりや、當馬之丞どのへ、勘當が免りないうちは、この御返事はならぬとな。

兵部　なか〳〵左樣。

國景　然らば御子息當馬之丞、越度となつたる香爐の在所、相知れ御歸參あつた上では、否でも應でも申し請けまする。兵部どの、先程より、何かとお心遣ひ、最早拙者は罷り歸らう。

兵部　最早御歸宅なさるゝか。

濱町　惡五郎さま、娘が難儀を、お心におかけ遊ばし、忝う存じまする。

國景　なんの〳〵、御息女を申し請くれば、身共が女房、心にかけいで、なんと致さう。左五郎、さうではないか。

ト左五郎に目を附ける。

左五　こりや、さうありさうな儀でござりまする。

兵部　然らば、惡五郎どの。

國景　兵部御夫婦、瀧川どのとやら、いかい御苦勞……ドリヤ、歸宅仕らうか。

ト治太夫と沼平へ目顏にて思ひ入れあつて、唄になり、國景、向うへ入る。

左五　合點のゆかぬ惡五郎どのゝ今の素振り。もしやこれなり敷島さまを、路次に於ての騷動もハテ、意趣も遺恨も、みな戀路より起る習ひ。この上ともに敷島さま、隨分お心をお附けなされ

瀧川　ハテ、意趣も遺恨も、みな戀路より起る習ひ。この上ともに敷島さま、隨分お心をお附けなされまして、ナ、モシ、御合點が參りましたか。

敷島　思ひがけない御恩の程、お禮もなか〳〵詞には。

瀧川　なんのマア、わけもない事御意なされまする。此やうに、めでたうお見送り申しあげました上からは、私しは、モウお暇申したう存じまする。

兵部　イヤ〳〵、瀧川どのとやら、御多用でもござらうが、申さば娘が命の親。せめて今宵一夜なりと

も、お泊め申し、娘は勿論、某夫婦も、右の一禮。
濱町　不思議な縁にて、かゝる世話、定めし御多用ではござりませうなれど、妾が願ひ、瀧川どの、今宵は夜とともに話しませうわいの。
瀧川　左樣に厚う仰せ下さりまするを、無下に致すも却つて無禮。左樣なれば、お勸めに任せまして、今宵はお館に、殘りまするでござりませう。併しながら、路次の騷動、親どもが、承りましたなれば、さぞや案じるでござりませう。
勘六　そりやお氣遣ひなされまするな。御前樣があの通りの御意。こりやァ矢張りお二人とも、お殘りなさるがよろしうござりまする。お館へは私しが、一走り歸りまして、右の樣子を、申しあぐるでござりませう。
瀧川　成る程、其方は先へ歸り、お知らせ申してたも。
勘六　ハイ〳〵、畏まりました。
紅葉　そんならわたしが、跡に殘つて、瀧川どのと一緒に、御馳走になるのかいな。
秋篠　それがようござりまする。瀧川どのは大事のお客。
濱町　必らず、お館に御案じなきやう

勘六　私しが、申しあぐるでござりませう。

濱町　其方は、瀧川どのへの、お杯の用意しや。

三人　畏まりました。

瀧川　左様なら、どなた様にも、御免なされませ。

ト時の鐘、唄になり、勘六、向うへ入る。左五郎、治太夫、紅葉、秋篠、沼平、思ひ入れあつて奥へ入る。兵部、濱町、敷島、瀧川、殘る。

濱町　イヤナニ、兵部どの、この家に預かるあの五郎市、幼なけれども盜賊の悴、親五右衛門が在所知れざる其うちは、當馬之丞が越度となりし、千鳥の香爐の詮議もならず。

兵部　悴が勘當も、みな五右衛門が爲せる業、岩木の家の大事には替へられぬ。申し譯なきその時は、預かり置いたる悴五郎市、もう助けては置かれまい。

瀧川　すりや、お噂に違ひなく、その五郎市とやら申す、盜賊の悴、當お屋敷に、お預かりでござりまするか。

兵部　いかにも左様……遠慮に及ばぬ、瀧川どのとやら。サヽ、これへ〳〵。

瀧川　ハイ〳〵、必らずお心遣ひは、御無用に遊ばしませ。それはさうと、憚りながら、ちとあなた様

へ、お尋ね申したい事がござりまする。と申して、外の事でもござりませぬ。見ますれば、お武家方に、冠、裝束、うや〳〵しうお飾り遊ばしましたは、何か樣子のありさうな事。兵部さま、あのお裝束は、何ゆゑ斯樣に、御尊敬なされまするぞ。

兵部　オヽ、成る程、尤ものお尋ね。この兵部が先祖は、もと公卿の家柄、吳葉中將俊豊といはれし大內人。時移り、代替り、內裏を守護の武門となり、この兵部まで四代に相成り、暫らく某浪人なし、弓矢、物の具、朝夕の、煙りの代になしたれども、先祖の冠裝束は、一命にかへても離さじと、持ち傳へしが身の幸ひ。

濱町　お召出しのその砌り、先祖の由緒お尋ねゆゑ、右の裝束差上げしに、御賞美あつて、再び岩木の家再興。今月今日が忌日ゆゑ、先祖夫婦の裝束を、さてこそ床に飾り置きましてござんす。

瀧川　サア、定めし左樣な事もあらうと、數ならぬ私しも、推量いたしました。すりや、あなたの御先祖は、吳葉中將さま。筋目正しき岩木のお家。して、御子息當馬之丞さまには、何ゆゑ御勘當なされましたぞ。

兵部　定めし聞きも及ばれん。聚樂の御所にて、千鳥の香爐、紛失のその砌り、宿直は忰當馬之丞、殊さら香爐紛失のその席に、蜀紅の錦の唐の裝束、その片袖の落ちありしを、證據となして盜賊詮

議に、忰は直さま館を立退き、兵部は卽ち久次公へ、申し譯に忰を勘當。

瀧川　すりや、御子息當馬之丞さまとやらは、親御樣の御勘當にて、このお館にお出でもなう

濱町　香爐詮議に國遠なし、殘るは娘敷島一人、それに昨夜の難儀と聞き、心も心ならざるに、伴ひ來られし瀧川どの。

兵部　娘敷島、この上ともに瀧川どのを、姉とも賴み、今の恩義を忘るゝな。

瀧川　そのお詞では私しも、却つて迷惑いたしまする。

ト この時、向うにて

呼び　お使者。

ト呼ぶ。皆々思ひ入れあつて

兵部　はや暮れ方に及んで、いづれよりのお使者なるか。コリヤ、娘、其方は、お裝束を取片附け、納めてよからう。

敷島　畏まりました。

ト 裝束を廣蓋へ載せ、片付ける。

瀧川　お使者のお入りとござりますれば、私しは、暫らくこの場を。

濱町　成る程、そんなら案内いたしませう。

瀧川　左樣なれば、兵部さま。

兵部　瀧川どの。

瀧川　後刻お目にかゝりませう。

ト唄になり、濱町先に、瀧川が手を取る。瀧川、會釋あつて、敷島は裝束を持ち、奥へ入る。兵部殘る。

呼び　お使者。

ト呼ぶ。太鼓謠ひになり、向うより典膳、剃立て、上下、大小にて、出て來る。奥より左五郎、上下大小にて、手燭を持ち出る。典膳は、花道よき所にとまり

典膳　世尊寺中納言兼則よりの使者。お取次ぎ賴み存ずる。

左五　これは〳〵、兼則卿よりのお使者。夜陰と申し、御苦勞千萬。先づ〳〵、これへお通りあられませう。

典膳　許しめされい。

ト鳴り物の切れ。典膳、上座へ通る。兵部、思ひ入れあつて

兵部　世尊寺中納言どのよりのお使者、御苦勞千萬に存じまする。拙者は卽ち當家の主、岩木兵部。火急の御入來、麁服の段、御容赦なし下さりませう。

典膳　さては其許が、岩木兵部どのとな。拙者ことは、世尊寺中納言兼則よりの使者、福島典膳と申す者。主人兼則、申し越せしは、別儀でござらぬ、先達て聚樂の御所にて、千鳥の香爐紛失、その砌り、落しあつたる蜀紅の錦の片袖、當家の御子息當馬之丞どの、預かりにて御持參あつて、盜賊詮議に立越えられしとも、まつた館に御所持とも承る。さるによつて、主人兼則、內々拜見いたしたく、其方參つて暫しが間、その蜀紅の錦の片袖を、借りうけ來れと指圖を受け、わざ〳〵參つた使者のあらまし、段々斯くの通りでござる。

兵部　すりや、蜀紅の錦の片袖、兼則卿、內々御覽なされたいとのお使者とな。

典膳　いかにも左樣。

兵部　御內意とござれば、いかにも錦の片袖、御內見に入れませう。

左五　アイヤ、御主人樣、その片袖は當馬之丞さま、御所持あつて、このお館には。

兵部　イヤ〳〵、氣遣ひ致すな。斯樣な事もあらんかと、錦は卽ち屋敷の內に。ヤア〳〵、濱田、錦の片袖、持參いたせ。

濱町　畏まりました。

ト合ひ方になり、濱町、三方に袱紗を掛けし錦の片袖を持ち、裲襠姿にて出て來り、典膳の前へ差置き、下へ下がり、思ひ入れあつて

蜀紅の錦の片袖、イザ、御内見下さりませう。

典膳　これが錦の片袖、唐装束、香爐紛失のその場所に、落ちてあつたる片袖とな。

兵部　いかにも。

典膳　ドレ。

トいろ／＼改め、思ひ入れあつて

成る程、世にも稀れなる錦の片袖。イヤ、また格別、然らば、この品持參仕つても、苦しうはござるまいかな。

兵部　兼則卿より御内見とござらば、苦しうござらぬ、御持參なされい。

左五　アヽイヤ、千鳥の香爐詮議の手がゝり。當屋敷に預かり置く、五右衛門が悴五郎市、彼れが罪科も、主人よりの日延べを以て

濱町　奥座敷に牢をしつらひ、出入りの鍵は左五郎が預かり。かゝる罪人、お預かりの上なれば、片袖

の御内見も

兵部　苦しうない。お使者には、御持參あつて

典膳　内見の上、直さまお返し申すでござらう。然らば、岩木兵部どの

兵部　お使者御苦勞。

左五　お見送り仕りませう。

典膳　ドリヤ、立ちませうか。

ト合ひ方、三方のまゝ持つて、花道へかゝる。この時、瀧川、出かゝりゐて

瀧川　イヤ、お使者には、暫らくお待ちなされませ。

典膳　使者に待てとは、身共が事か。

瀧川　いかにも左様でござりまする。

ト典膳、立歸り、思ひ入れあつて

典膳　女中、身共に待てとは、用事ばしあるか。

瀧川　左様でござりまする。承れば、蜀紅の錦の證據の片袖、お受取りのお役目。御家名を承れば、福島典膳さまと仰せあるが、して、いづれよりのお使者でござりまするぞ。

典膳　ハテ、くどうも根問ひする女中。身共は卽ち、世尊寺中納言兼則よりの使者でござる。

瀧川　すりや、兼則卿よりのお使者とな。

典膳　なか〳〵左やう。

瀧川　中納言さまよりのお使者とあれば、御內見のその品、私しへお渡しなされ、とく〳〵お歸りなされませ。

ト典膳、思ひ入れあつて

典膳　待て、女。合點のゆかぬ今の一言。兼則卿よりの使者なれば、なぜこの品をお身に渡して、立歸らねばならぬのぢや。

瀧川　胡亂者ゆゑ。

典膳　そりや、何者が。

瀧川　お使者にお立ちなされた典膳さまが。

典膳　ヤア、默れ、女め、この典膳を胡亂者とは、なんで胡亂だ。その譯云へ、吐かせ。返答によつては女とて容赦はせぬ。兵部どの、して、この女は、おてまへの身寄りか、但しは召仕へか。

兵部　アイヤ、その女中は、御所方より

濱町　仔細ござつて參つた女中。

典膳　して、御所方とは、いづれよりの

瀧川　御主人樣は誰れあらう、世尊寺中納言兼則さま、その奥勤めの、瀧川と申す者。

典膳　ヤ。

ト悄りこなし。

兵部　すりや。瀧川どのには、兼則卿の

濱町　奥勤めの女中とな。

瀧川　主君の館に見馴れませぬ、お使者のお面。殊に福島典膳とは、承らぬあなたの御家名。察するところ紛れ者。その品奪はんその爲に、入込みしか、但し又餘人に賴まれ參りしか。惡い所へこの瀧川、參り合せてあつたゆゑ、僞はり騙りのお使者の素性、もうよい加減に、取措かんせいなア。

典膳　すりや、女めは世尊寺の

瀧川　奥を勤めるこの瀧川が、見知らいでよいものかいなア。

左五　紛れ者なら、繩打つ曲者。

典膳　アヽコレ、全く以て。
左五　但しは、頼まれ参つたか。
典膳　サ、それは。
左五　白状いたすか。
典膳　サ、それは。
瀧川　サア
典膳　サア
皆々　サア〳〵〳〵
瀧川　なんとでござんす。
典膳　エヽ、いま〳〵しい、破れかぶれだ。この片袖を
ト錦を抱へ、三方を捨て、逃げんとする。左五郎、寄つてかゝるを、突き廻し、瀧川へかゝつて、ちよつと立廻りあつて、叶はじと思ひ、錦を瀧川へ打ちつけ、上の方にある手水鉢へ上がり、萩垣を越えて逃げる。皆々、思ひ入れあつて
左五　今の曲者、取逃がせしか。

兵部　門々堅め、詮議いたせ。

左五　ハツ。

　　ト一散に奥へ入る。瀧川、錦を取つて

瀧川　今の曲者が、捨て置いたるこの片袖。イザ

　　ト兵部の前へ持つて行く。兵部、取つて

兵部　オヽ、それこそ誠の品ならず、眞赤な似せ物。

瀧川　ヤヽ、すりや、この品は、似せ物でござりまするか。

兵部　斯樣な事もあらんかと、拵らへ置いたる錦の袖に、心をかくるは、必定香爐の盜賊の餘類。

濱町　誠錦の片袖は、當馬之丞が所持なし、香爐の行くへ、詮議の手蔓。

瀧川　さてはこれこそ似せ物とな。さすがは岩木兵部さま、お心附かれしお計らひ。誠の錦は、御勘當なされし

兵部　悴が所持して

瀧川　アノ、蜀紅の

兵部　コレ。

ト思ひ入れ。時の鐘、唄になり、三人よき見得にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、誂らへの庭先。屋體よき所に、五郎市を押籠めし牢屋の格子を見せ、座敷には燭臺を灯し、爰に敷島、誂らへの葛籠の紐を解き、右の冠と裝束を、葛籠の中へ納めてゐる見得にて、道具とまる。

ト矢張り時の鐘、合ひ方にて、敷島、裝束を葛籠に納め

敷島　父上の仰せの通り、お裝束は殘らず、この葛籠の内へ、早う納めて、あの瀧川どのへ。

ト蓋をしようとする時、風の音烈しく、燭臺の灯、消える。

アヽコレ、灯火が消えたわいの。灯を持ちや／＼。

ト手を打つ。矢張り捨て鐘、蟲の音。忍び三重。この聲をしるべに、下の萩垣を押しわけ、國景、窺ふ。奧より沼平、治太夫、窺ひ／＼出て來て

沼平　治太夫さま／＼、五郎市めが牢の鍵は、モシ、この通り盗みました。

ト暗がりにて、探り／＼渡す。

治太　出かした沼平。鍵は身共が預かつた。それにつけても、惡五郎さまは、お忍びなされたかしらぬ。

ト國景、この聲を聞いて

國景　コレ〳〵、治太夫、沼平。惡五郎は爰に居るワ。

兩人　ヤア、お忍びなされましたか。

國景　して、引ッ淺ふ敷島姫は。

ト敷島、これを聞いて

敷島　エヽ、アノ、わたしは。

國景　今のは正しく

治太　敷島どの。

沼平　逃がしはせぬぞ。

ト探り〳〵追ひ廻し、三人寄つて、敷島を捕へ、

國景　コレ、縛るがよい〳〵。繩は無いか。

治太　心得ました。沼平、繩を持て〳〵。

沼平　繩も卽ち用意仕りました。

ト繩を出して縛らうとする。敷島、逃げんとするを、三人、探り寄つて捕へるはずみに、葛籠に行き

あたり
コレ〳〵、爰に葛籠がござります。この中へぶちこみませうか。
國景　何にしろ、縛れ〳〵。
ト暗がりにてあせる。この時、濱町、紅葉、探り〳〵奥より出る。敷島、逃げんとして、濱町に行きあたり、濱町、その手を取つて、そろ〳〵と奥の方へ行く。紅葉、何心なく出かゝるを治太夫、捕へ
治太　ドッコイ、逃がさぬ。
國景　捕まへたか。聲立てさすな。
沼平　心得ました。
ト沼平、手拭を取つて紅葉に猿轡をはませる。此うち濱町、敷島の手を引いて奥へ入る。
國景　コレ〳〵、敷島は身共が受取つた。裏門口の塀を越え、片時も早く立退く手段。
沼平　奴が案内いたしませう。
治太　少しも早く。
國景　合點た。
ト矢張り忍び三重、捨て鐘、蟲の聲。國景、紅葉を引ッ抱へ、沼平附いて駈け出し、萩垣を破つて逃

げる。治太夫、捨ぜりふにて跡に殘る。この時、左五郎、手燭を隱し、窺ふ。瀧川、この後へ、窺ひ出てくる。

治太　南無三、心急くまゝ、五郎市めが牢の鍵。コレ〳〵、惡五郎さま〳〵………ア、、イヤ〳〵、何もあなた方に渡さずとも、失つてしまふか、五郎市を逃がしさへすれば、左五郎めが難儀。マア、この鍵を

ト思ひ入れ。此うち瀧川、後に心遣ひ。左五郎、思ひ入れあつて

左五　ナニ、身が預かりし鍵とや。

ト治太夫を捕へる。この灯にて、膽を潰し

治太　ヤア、左五郎だな。そんなら樣子を

左五　何もかも皆聞いた。大切な囚人を、預かりの牢の鍵、失はうとは野太い治太夫。その鍵、渡せ。

治太　それ聞かれては、この身の大事。左五郎、くたばれ。

ト拔いて切りつける。左五郎、立廻つて、この手を捕へ

左五　その鍵、渡せ。

治太　イヽヤ、ならねえ。おのれ、くたばれ。

ト切つてかゝる。立廻りあつて、鍵をよき所へ捨てる。左五郎、取らんと駈けよる。治太夫、切つて行くゆゑ、是非なく拔き合せ、立廻り烈しく、合ひ方になり、立廻りのうち、瀧川、窺ひよつて右の鍵を取上げ、牢の口へ探り寄る。この間に二人は相討ちになる。瀧川、心急く思ひ入れにて、錠に鍵を合せる。兩人、深手を負ひ、よろ〳〵して

左五　おのれ治太夫。

治太　左五郎、覺悟。

ト立廻りのうち、瀧川、以前の鍵を持つて、探り寄り、錠を明ける。錠の音、きびく聞える。

兩人　ヤ、、あの音は。

ト瀧川、これにて驚ろき、たぢろぐはずみに、思はず明けたる葛籠に行きあたり、探り見て、キツと思ひ入れ。左五郎、立廻つて治太夫を捕へ

左五　動くな。

ト思ひ入れ。時の鐘にて、よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、練り塀。見越しの松。よき所に用水桶。塀の内に障子を閉てたる二階を

見せ、上の方に水門、下の方に井筒。すべて岩木兵部屋敷、裏門口のあたり。爰に國景と沼平、紅葉を引附けゐる見得。時の鐘だらに、蛙の聲夥しく、道具とまる。

沼平　モシ〳〵、惡五郎さま、敷島さまは、首尾よくお手に入りまして、おめでたうござりまする。

國景　これといふのも、治太夫と其方が働らき。出かいた〳〵。その代りに、褒美はしつかり遣はすぞ。

沼平　エヽ、有り難うござります。もう爰は屋敷內と違ひ、外濠の水門口。なんと、爰らで日頃の思ひを、お晴らしなされませぬか。

國景　身共も左樣は存ずるが、何を申すも其方が、見張つてゐるうちは。

沼平　ハテサテ、奴めも、通り者でござりまする。あなたの思ひをお晴らしなさる其うちは、下郎は此方で、後向きの地藏々々。

ト下の方にあちら向く。

國景　流石は沼平、通り者め〳〵。コレ〳〵、敷島、奴めは、あの通りの大通だ。なんと、この門先で日頃の思ひをかのへ申、庚申待とは、どうだ〳〵。ほんに、それにしても、繩を解いてやらう。

ト紅葉が繩を解き

國景　ヤレ〳〵、手が痛んだであらうな。サア〳〵、爰で思ひを晴らさせ給へ。

ト紅葉に抱きつく。

紅葉　エヽ、好かねえなう。

ト國景を突きとばす。沼平、聞きつけ

沼平　ヤア、どうやら敷島さまでは

ト立ちよるを

紅葉　折助め、覺えてゐろよ。

ト横ッ面をくらはし、東の口へ駈けて入る。兩人、跡を見送り

國景　コレ〳〵、沼平、彼奴は、なんであらう。

沼平　なんだか一圓、合點が参りませぬ。

國景　べら坊め、とんだ替へ玉を授けたな。この上は治太夫めに逢つて、いま一詮議せねばならぬ。

沼平　左樣でござります。この奴めも附いて参り、今夜中に敷島どのを盜み出し、今度は幸ひ、治太夫さまと奴めが、拵らへ置いたるお庭の井筒へ飛びこめば、御門外のこの井戸へ、通路の拔け道。

國景　併し、覺えし見越しの松。いま出た爰から忍ぶが近道。沼平、ぬかるな。

沼平　心得ました。

ト時の鐘、蛙の聲になり、國景と沼平、用水桶へ上がり、見越しの松へ取りつき、内へ忍ぶ。この時向うより五右衞門、前幕の坊主形、頭巾、衣にて、ウソ〳〵出て來り

五右　昨日大津の追分で、仕事をしかけた娘が、屋敷はこれなる岩木兵部。妨げひろいだ女めが、逐つてうせた上からは、あの女めも、この屋敷に。ア、コレ、今夜は忍び込んで、昨日の娘を引ッ淩ふ工面。ハテ、どこから忍んで入らうな。

ト窺ひゐる。水門口の方、バツタリと音して、蛙の聲一度に啼きやむ。五右衞門、目を附け

今の物音。蛙の啼く音一時にやみしは。ハテナ

ト又バツタリと物音する。五右衞門、窺ふ、合ひ方になり、正面の水門を上げ、内より、件の葛籠を、水に浮して瀧川、扱帶を附け、これを扣へて出る。後より沼平、窺ひ〳〵附いて出る。五右衞門、さてはト思ひ入れ、瀧川、やう〳〵と舞臺よき所へ葛籠を置き、ホツと息をする。五右衞門、窺ひ見て

五右　ヤ、わりやア昨日の

瀧川　エ。

ト驚ろき、行かうとする。五右衞門、葛籠に手をかけ、紐を枷に立廻りあり、紐解ける。瀧川、蓋へ手をかけ、兩人よろしく立廻りのうち、葛籠の中より五郎市出かゝり

五市　ヤ、父様。
五右　五郎市か。
瀧川　モシ。
ト思ひ入れ。五右衞門、五郎市の顏を見て、思ひ入れあつて
五右　石川や、濱の眞砂は盡きるとも
瀧川　世に盜人の
ト兩人、思ひ入れあつて、蓋をシヤンとして
兩人　種は盡きまじ。
沼平　曲者。
ト五右衞門に取りつく。着たる衣と頭巾脫げる。立廻りに五右衞門、下は誂らへの形になる。沼平、葛籠へかゝる。五右衞門、沼平を投げる。この時、下の井筒の內より、以前の典膳、大小上下、股立ちにて、龕燈を持ち、窺ひ出る。沼平、典膳へかゝるを、見事に當てる。五右衞門、葛籠へ腰をかける。沼平、下手の方へ倒れると、途端一度に捨て鐘の頭を打ちこむ。典膳、大小を取つて、五右衞門へ差出す。これを取つて、こなしあつて

五右　三上の佐渡助。

典膳　お頭、お内儀、手筈を違へず

瀧川　氣遣ひさんすな。上首尾々々々々。

典膳　めでたうごんした。

五右　して、失ひし蜀紅の錦の片袖、正しくこの家に。

典膳　頭の指圖に入込む佐渡助。最前見せしは似せ物にて、悴當馬がその片袖、持參いたして、香爐の詮議に。

五右　されども、もしや、岩木の館に。

ト此うち沼平、心附き、起きあがつて

沼平　さては香爐を奪ひし盜賊。

典膳　それ聞かれたら

ト引附ける。立廻りにて沼平、振りほどき、一散に向うへ走り入る。典膳、思ひ入れあつて

後日の妨げ。

五右　行け。

典膳　合點だ。

ト捨て鐘の送りにて、向うへ追ひ駈け入る。五右衞門、東の方を見て、典膳が殘せし龕燈を取つて、東の方へ灯を見せる。捨て鐘入り、誂らへの鳴り物にて、勘六、官八、外十人、いづれも忍び頭巾、黑の股引、手甲、黑四天の形、一本差し、草鞋。めい〳〵龕燈を照らし、東の口より中の歩みを通り花道へかゝり、本舞臺へ來る。瀧川、此うち五右衞門へ重ね草鞋を穿かす。十二人、上下に立ち別れて、思ひ入れあつて

皆々　お頭。

五右　コレ。

勘六　虜となつたる五郎市どのを

官八　取戻してか、但しはまだか。

勘六　樣子次第で

皆々　わしらが共々。

五右　氣遣ひ致すな。女房が働らきで、これなる葛籠へ。

瀧川　わたしが身腹は痛めねど、お前の爲には先妻の、義理ある忰の五郎市どの、今からわたしが大事

の獨り子。

五右　其方はこれより南都へ赴むき、實名包む我が隱れ家。

皆々　送りは、わしらが。

五右　コリヤ、音高し。裏門より

ト屋敷の内を龕燈にてキッと見る。この時、二階の内にて、兵部「エイ」と懸け聲して、割り笄に書き物を卷き、龕燈目當てに打ちつける。五右衛門、打ち落し、嘲笑つて

ナニちよこ才な。古手な手裏劍。

ト見て

されども添へし、この書き物。

ト取つて見る。皆々、龕燈をさし向ける。

ヤヽヽヽ、この笄は覺えある、女房、其方が捨て子の砌り、添へてあつたる形見ぞと、我れに渡せし笄と、一對揃ふ割り笄。ドレ

ト差したる笄を合せる。

瀧川　そんならもしや親の形見と、五郎兵衛どのが日頃の話し。

五右　一對揃ひし笄の、模樣は卽ち千疋猿。

瀧川　この書き物の

　　　ト開き、五右衞門へ向ける。皆々、龕燈を照らす。五右衞門、見て

五右　「今宵娘を同道せし、女が振舞ひ、彼れは正しく我が家に預かる、五郎市を奪はん爲、恩義を見せて屋敷の案內知らんと、入込みし盜賊の餘類ならん、先年我れら浪人の砌り、庚申の夜に誕生の女子一人、母は產後に病死なし、四つの歲まで養育なせしが、仕官の妨げ是非なくも、割り笄を形見に添へ、堅田の浦へ捨て子となす、今さら思へば今宵の女、それと推量いたせしゆゑ、知らぬ顏にてこの家を見遁がし、申し譯には身が皺腹、後の證據と割り笄、心を附けて披見なし、憎くき女の、末々見屆けくれるべきものなり、月日、岩木兵部」…………宛名を憚るこの文言。すりや、我れ〳〵が計略を

　　　ト書き物を瀧川に渡す。

瀧川　覺り知つたるこの文體。憎くき女を末々まで、賴むとお書きなされしは

勘六　さてはこの家の

皆々　主たる

五右　岩木兵部は其方が
瀧川　實の父さん。
五右　舅であつたか。
瀧川　絶えて久しき娘とも
五右　知つたもわざと白浪に
瀧川　連れそふのみか現在の
五右　親を僞はるその上に
瀧川　お命捨てさす不孝の罪。
五右　堪えよ女房。
瀧川　こちの人。
五右　知らぬ事とて
皆々　變つた緣で。
五右　コリヤ。
瀧川　これが形見の、この御手跡。

五右　コリヤ、鬼の女房に

トきつとなる。瀧川、思ひ入れあつて

瀧川　鬼神の譬へ。
五右　それ忘るゝな。
瀧川　アイ………毒喰はゞ皿。
五右　夫に附くが
瀧川　女房の習ひ。

ト兩人顏見合せ

五右　滿足。

トにつたりと思ひ入れ。夜明けの鐘鳴る。諸所にて鷄の聲する。松の枝より國景、窺ふ。

皆々　最早鷄明。
五右　今宵は此まゝ。
瀧川　皆さん達も
皆々　そんなら、お頭。

トこの時、二階の障子を明け、濱町、出かゝり

濱町　ヤヽ、兵部どのには、何ゆゑ切腹。

瀧川　すりや、書置に違ひない

ト駈けよる。五右衛門、隔て

五右　コレ、そちや五右衛門が女房でないか。

トきつと思ひ入れ。

國景　さてこそ五右衛門。

トこの聲に五右衛門、礫を打つ。國景、苦しみ、松より舞臺へ落ちて氣絶する。この音に二階は障子をシヤンと閉す。瀧川、ツカ〳〵と葛籠の方へ立ちかゝり、思ひ入れあつて、皆々一緒に、後向きにて龕燈を照らし、二階を見上げる。國景、心附き、五右衛門へかゝるを、五右衛門、拔討ちに切り倒す。瀧川、二階の方を見て思ひ入れ。五右衛門、拔き身をヒラリと出す。瀧川、手拭にてこれを押へる。木の頭。血刀を拭ふ。キザミにて、よろしくひやうし

幕

第一番目　五建目　小西是齋宅の場

役名――小西是齋。同娘、綾女實ハ大明の芙蓉皇女。番頭、新作。手代、與助。庄屋、頓兵衛。下女、お露。同、おりん。醫者、是輪道庵。下男、杢助。丁稚、與惣吉。百姓、作左衛門。同、戸平。盗賊、筑紫の權六。

本舞臺、三間の間、一面の二重舞臺。上の方に障子屋體。見附け、唐紙の襖。下の方、大臣柱の外、二間の屋體。これに是齋の看板・藥店の飾りつけ。眞中に銅壺、罐子を直し、新作、手代にて、仕出しへ藥を振舞つてゐる。與助、藥を振舞つてゐる。東西二重舞臺の間、中庭、植込み。ズツと奥に土藏を見せ、すべて是齋の内。二重舞臺に是齋、澁紙の上に小判小粒を並べ、金盥にて金を洗ひゐる。お露、腰元の形。おりん、下女の形。歌がるたを取つてゐる。下の方に頓兵衛、庄屋の形。百姓二人、願ひの體。琴唄にて幕明く。

新作　本家和中散、是齋でござい。

仕出　爰の和中散は、近江の梅の木村よりは好うござる。

ト云ひ〳〵藥を服む。

頓百　どうぞお願ひ申しまする。

是齋　これはアタやかましい。叶はぬ事ぢや。
つゆ　天津風、雲の通ひ路吹きとぢよ。
りん　乙女の姿しばしとゞめん。
　　　トそこらを尋ね、お露、下の句を取る。
仕出　オヽ好かん。また取られたわいな。
　　　大包みを五服下されまし。
與助　百七十二文でござりまする。
　　　ト藥をやる。仕出し、取つて、向うへ入る。
新作　道修町の近藤からのこの書附け。トウヤクが八斤、クワツコウが十二斤。
　　　ト書附けを見て、破り
　　　みな刻んで置いたか。
與助　昨夜、藥研にかけて置きました。
つゆ　おほけなく、浮世の民におほふかな。
りん　坊さんの歌といふと、わしが取るほどにの。

是齋　ヤイ、女ども、役にも立たぬ慰みをする手間で、絲を紡ぐか、苧を績むか、仕事しをらぬか。どいつも、こいつも、始末をして、金銀を貯めい。コレ、見をれ、この如き洗ひ淸め、藏の內へ取入れ取入れ、天下茶屋の是齋は、萬福長者と云はるゝやうに稼げやい。

新作　みな聞きましたか。旦那は、この海道での大身代。

與助　金が金を儲けるとは、こちの事。

新作　その身より、まだ結構な、このお家の子寶といふはこちの綾女さま。御器量なら氣立てなら、どこに一つ云ひ分なしのお生れつき。シタガ、啞ころとは、あつたらお孃樣を、啞で置くとは惜しいものなア。

つや　人もおし、人も恨めし味氣なく。

りん　それはさうと、京のお客人は、どこへお越しなされたしらぬ。

新作　居候ふどのは、神參りするというて、今朝早う出られたが、もう戾られさうなものぢや。

りん　早う戾りはなされいで。待たるゝとも待つ身になるなとは、よう云うた事ぢやなア。

頓兵　是でも非でも、聞いてもらはにやおかん。

百姓　さうとも／＼。

新作　モシ、旦那、この衆達は、何をやかましく云はれまする。

ト新作、與助、此方へ來る。

頓兵　イヤ、この住吉海道近在、三ケ村の庄屋。この領分が、近年の洪水で、川筋の破損。

百一　村の年貢、先納の御免下さるやうにと、御地頭の土屋郷左衛門さまへ願ひますれば、元〆め是齋さまの、奥印が無ければ、取上げはならぬとの事。

百二　そこで、この通り、願書を認め、是齋さまへ、印形頼みに來ました。

三人　どうぞお願ひ申しまする。

ト願書を出す。

是齋　これは、やかましい事ぢや。この是齋は、藥屋なれど、久吉さまのお腰をお掛けなされてから、天下茶屋といふお名を貰ひ、殊に世尊寺中納言さまへ御用を足せば、他行の節は帶刀御免、常の藥屋と思うたら當てが違ふぞ。その願書お取上げあると、此方の利得にならぬ。奥印する事は、マア、よしませうかい。

新作　旦那があのやうに云はつしやれば、今日はマア歸らつしやい。手代が寄つて願うて、奥印の出るやうにしませうほどに、明日にも來て見たがよい。

頓兵　コレ、一日遲いと、一日だけ咽喉が干上がりますわいの。

百一　妻子眷屬が飢ゑて死にまする。

百二　一人の心で、大勢を殺す氣か。

三人　どうでござるわいの。

是齋　まだ〳〵云ふか。土ほぜりどもが、飢えやうが、のたれ死しやうが、情を知つては金が貯らぬ。この願書も反古同然。役にも立たぬ事を。

ト引裂く。

三人　ヤア。

是齋　たつて吐かさば此方から、地頭へ訴へて、繩を打つて、牢へぶちこまうか。

ト三人、悔りして、花道へ逃げゆき

頓兵　コレ〳〵、なんと詰まらぬものではないか。

百一　この上は、村々が寄り合うて

百二　一騎千騎の切端する。

三人　必らず後で、後悔さつしやるな。

是齋　どうなりと勝手にひろげ。

頓兵　オヽ、勝手にする。

トつか〳〵と跡へ戻る。

百姓　コレ、一番云ふ氣か。

頓兵　イヤ、草履を忘れた。

ト合ひ方になり、草履を取つて、三人、向うへ入る。

是齋　ハヽヽヽヽ、役にも立たぬ事を……時に、貸し金の方の勘定は、大抵片附いたか。

新作　左樣でござります。

是齋　與助、其方は、利限の催促。寄越さぬ奴があるなら、鍋釜でも疊でも、まくつて戻れ。

與助　ハイ〳〵、行て參りませう。

是齋　女子どもは、仕事にかゝれ。

りん　アヽ、西を見ても、東を見ても、嫁入りせぬのはわし一人。ドレ、飯なと炊かうか。

新作　さらば爰らを片附けて

與助　利限の催促。

是齋　洗うた小判を、ドリヤ、土藏へ納めようか。

ト唄になり、是齋、金箱を持ち、お露おりん附いて奥へ入る。與助は向うへ入る。新作、そこらを片附けてゐる。始終合ひ方。綾女、振り袖衣裳にて出て來り、歸りを待つ心。

新作　お孃樣、モシ〳〵、お孃樣。

ト脊中を叩く。綾女、新作を見て、奥へ行かうとする。

コレ〳〵、それはつれない。マアお坐り。ハテマア、下に居なさいな。

ト無理に下に居させる。綾女、奥を指さして、琴を彈く眞似する。新作も、同じやうに仕方して

エヽ、奥へ行つて、琴を稽古すると仰しやるのかえ。

ト綾女うなづく。

そりやモウ、琴を彈くとも、跛を引くとも、勝手になされたがよいが、そりやお前、あんまり胴慾ぢやぞえ。そも內方へ奉公に來た、その日から、濡衣ぢやないが、可愛らしいと思うたが、緣と因果の初めにて、お主樣ともお孃樣とも、辨まへ知らぬ、コレ〳〵、この通り、拙ない筆に書き認めた濡れ文を、せめてお前の肌へなりとも

ト手紙を懷へ入れるを綾女、取つて抛る。新作、取つて

コレ、そりやあんまり情ないぞえ。お前が讀まずば、わしが讀む。先づ、この封を押切つて、和らかな文句を聞いたら……ちよつとしめしら／＼、わしが思ひは深草の

　　ト綾女の向うへ廻り

いつそ身も世も堪らず候ふ。

　　ト綾女、文を取つて、寸々に裂く。

オヤ／＼、お前、大事の文を破つたの。ようござります。お前がさうなりや、此方も破れかぶれ押へつけても、云ふ事をきかすぞよ。

　　ト嫌がる綾女を追ひ廻すと、奥よりお露出て

つゆ　お孃樣、旦那樣がお呼びでござりまする。

新作　エヽ、氣のきかぬ。これが旦那どころかえ。

　　ト追ひ廻す。お露、新作を押へ

つゆ　ちやつとお出でなされませいなア。

　　ト綾女、新作を打つ眞似して、奥へ入る。お露、新作を突き放し、奥へ行かうとする。新作、とめて

新作　ドツコイ、お孃樣はつれなくも、情深いはお露の君。今の代りに

つゆ　エヽ、トツトモウ、誰れ彼れなしに、アタ嫌らしい。嫌ぢやわいなア。

新作　其方は嫌でも、おれは戀ぢや。

ト抱きつく。

つゆ　あれえ。

ト逃げ廻る所へ、おりん出て、引分ける。

りん　番頭さん〳〵、旦那が今、內藏で呼んでぢやわいなア。

新作　內藏どころか。

トお露の方へ行きにかゝる。おりん、留める。

つゆ　エヽ、アタ嫌らしい。髪も頭も、臺なしになつたわいなア。

トお露、ピンシヤンして奧へ入る。

新作　エヽ、いま〳〵しい。肝心の所で旦那が呼ばつしやるゆゑ。ほんに、爰の內にも、旦那が無くば
よからうなア。

ト呟き〳〵、奧へ入る。おりん殘つて

りん　なんの事ぢや、色事の稽古所のやうぢやわいなア。これにつけても、後の月から、逗留してござ

る京のお客、あのお孃様がきつい惚れやう。啞ごろの悲しさには、直々にも口說かれず、どうぞ取持つてくれと、此りんを賴ましやんす。成る程、取持つてと、受合つたわしが心は、お孃樣をだしに使うて、わしが口說いて見たい心。此やうに辛苦をするも、みな男ゆゑ。戀すれば人は心のなからまじとは、よう云うた文句ぢやなア。

ト誂らへの琴唄になり、おりん、鏡臺を持つて來て、髮など撫でつけてゐる。

〽白雪の、初音は樹々にありやせん、色のなまりは見る目の癖か。

ト此うちおりん、いろ〱思ひ入れあつて、そこらに落ちてある濡れ文、註文書、最前の願書など拾ひ集め、いろ〱こなしあつて

さうぢや。これを斯うして、斯うやつて、跡は斯うして斯うなれば、わしが思ひはズル〱べツタリ。遠い思案をしようより、これが近道。燈臺は元暗しぢやなア。

〽されば其の事今さらに、花の科ぞと知るは初瀨よ、又も吉野の古里さむく。

ト此うちおりん、こなしあつて、あたりを片附け、奥へ入る。向うより權六、五十日鬘、浪人者の拵らへにて、杜若を持ち、出て來る。後より與惣吉、丁稚の形にて、附きそひ出てくる。

權六　與惣吉どの、今日はこなたの案內で、よい慰みをしましたわいの。

與惣　天氣はよふござりまするし、私しも、よい慰みでござりました。

權六　是齋どのも、さぞ待ちかねてござらう。サア、ござれ〳〵。

〽衣かたしく又打ちきせて、起きてゐなんせ明日の夜もあるに。

トこの唄にて本舞臺へ來る。奧より是齋、新作出てくる。

是齋　藏の締りはよいかな。

新作　ぬかりがあつて、よいものでござりませうか。

ト權六、內へ來り

權六　只今歸りました。

是齋　これは〳〵お客人、今日はどれへ行かつしやりました。サヽ、これへ〳〵。

權六　御存じの通り、夜に入れば鳥眼の惱み。それゆゑに晝なども、欝氣いたすゆゑ、今日は未明から出かけまして、住吉の近邊、爰かしこと見廻り、住吉の社へも參詣いたし、何卒眼病平癒あるやうにと、祈誓をかけまして、境內の池に咲きありし、この杜若、四季咲きと見えまするを、一本所望いたし、御亭主へ土產。お床の間へ、お活けなされて下さりませう。

是齋　イヤモウ、手前は杜若より、正眞の山吹が好物でござる。ハヽヽヽヽ。與惣吉よ、床の間へ活

けて置けよ。

與惣 畏まりました。

ト花活けを取つて來て活けてゐる。

是齋 時に、新作や、お客人も御時分であらう。御膳をあげぬかいの。

新作 ひだるくば、臺所へ行つて食ふがようござりまする。お客ぢややら、居候ぢややら、目まぐるしくてなるものぢやない。眼の養生が出來たら、キリ／＼京へ行つてもらひませう。きなかにもならぬ事に、お客さま／＼と、とんだ福の神を引込んで、嬉しがる者はお孃様ばかり。道理こそこの番頭が云ふ事をきかぬ筈。

ト是齋を見て

イヤモ、番頭は、迷惑でござる。

權六 ハヽヽヽヽ、番頭どのは、いかう御機嫌が惡い。イヤ又、云はつしやるに相違はない。元來京都の堂上方を勤めし身、仔細あつて浪人いたしたれど、親どもより內福でござるから、再び仕官の望みもなく、元より妻子を持たねば、この身一つ。國々の名所古跡を一見の爲、先づこの津の國へ參つてござる。ところに、フト眼病を煩らひまして、お見世を御無心申したが、縁の端か

手前に養生を致すやうにと、御深切に仰せらるゝ、其お詞に甘へまして、彼れこれと早二月あまり、初めは内障のやうにござつたが、お醫者を世話して下されてより、服藥した所爲か、この頃では鳥眼になりまして、夜は皆目見えねど、日のうちを助かりましたが、まだしも仕合せ。これと申すも、御亭主の恩義、忘れは置きませぬ、忝う存じまする。

是齋　イヤ／＼、禮には及びませぬ、初めからの約束で、旅宿の飯代、一日を一兩づゝと極めて、一ケ月に三十兩、それも先取り、二月分は受取りましたが、もう來月に間もござらぬ。今日は算用して下さるまいか。

權六　成る程、拙者も左樣に存じた。ナニ、與惣吉どの、床の間に、身共の革文庫がござる。これへ持つて來て下され。

與惣　ハイ／＼。

ト花を活けてしまひ、革文庫を取つて來て

これでござりまするか。

權六　御苦勞々々。イヤモウ、朝晩は香の物、晝は干物に搔立て汁の風味合ひ。一兩づゝでは、廉いものでござる。

ト云ひ〳〵、鼻紙袋より鍵を出し、文庫を明け、金を出し、數へ

是齋　サア、三十兩、來月分の飯代、お受取り下されい。これは御きんとうぢや。この調子では、一年に三百六十兩。兎角氣を長う、ゆるりと逗留なされたがようござる。

權六　それは忝う存ずる。イヤ、お番頭。

新作　なんでござる。

ト腹の立つ思ひ入れ。

權六　イヤ、外の事でもござらぬが、慥か昨日の事でござつた。莨を切らしましたゆゑ、貴殿のを御無心申したれど、不承々々に、わづか二三服ほど下されたが、それも只貰ひましては心が濟まぬ。莨の代金五兩、お受取り下されい。

新作　ナニ、アノ、たつた二三服やつた莨の代が、小判で五兩。

權六　あまり少しなれども志し。

新作　ハヽヽヽヽ、これは〳〵、折角のお志し、左樣なれば申し請けませう。

ト氣を替へ

ハヽヽヽヽ、今のやうに、口穢なく申しましたは、ありやア、なんでござりまする。男どもを叱りまする、番頭の口癖でござります。ハヽヽヽ、必らず氣にさへて下さりますな。時に、御時分でござりませう。コレ〳〵、御膳をあげろ〳〵。

權六　イヤ〳〵、まだ空腹にもござらぬ。

新作　左樣なら御酒を。

權六　これはしたり、眼の養生に、酒は第一の禁物。構はつしやると、結句迷惑に存じまする。

與惣　お勞れでござりませう。お風呂でも焚かしませうかな。

權六　それは何よりの御馳走でござりまする。

是齋　成る程、風呂とは、よう氣が附いたっ早う焚かしたがよい。

與惣　ハイ〳〵、おりんどのに左樣申しませう。

權六　風呂は飯代の外ぢや。水の代、薪の代、三兩ばかりでよからうの。

ト また金をやる。

是齋　エヽ、又お金。これは妙ぢや。ハヽヽヽヽ。左樣なら、頂戴いたしませう。

ト 金を紙入れへ入れる。

權六　イヤ、是齋どの、この頃は世間が騷々しく、彼の盜賊なども徘徊いたすさうな。御大家の儀でござれば、隨分御用心なされたがよい。
是齋　それをぬかつてよいものでござらうか。內藏に二重底をしつらひ、鴨居、垂木、或ひは天井などに隱し置けば、氣の附く者は一人もござらぬ。
新作　殊に又、中庭の松ケ枝に、鉦を吊つて、もし盜人でも入ると、彼の鉦を打ちまする。それを合圖に、出入りの者が駈けつける、旦那の要害。ぬかる事ぢやござりませぬ。
是齋　イヤ、新作、飯代から風呂代、受取にしてあげませいやい。
新作　ハイ〳〵、私しが五兩の受取も、一緒に認めませう。
ト硯箱を取つて來る。
權六　これはしたり、それには及びませぬわいの。
是齋　イヤ〳〵、几帳面にして置かぬと、後日に物が云はれませぬ。
新作　左やう〳〵。
ト云ひ〳〵、一札を書く。この時、奧より綾女、出て來て、權六を見て、いろ〳〵とこなしある。新作認めしまひ

旦那の名代、番頭が自筆の書き判。サヽ、取つて置いて下さりませ。

權六　たつてとござらば、兎も角も仕らう。

　　ト此時、お露、茶を持つて出る。綾女、これを取つて、こなしあつて、お露を奥へやり、權六の側へ行き、茶を出す。

これは〳〵、娘御のお手づから。忝うござる。

　　ト茶碗を取る。綾女、こなし。

新作　お孃樣、折角書いた物を、お破りなされたな。

是齋　破つたとは、そりや何を。

新作　イヤ、そりやアノ、酸漿を根吹きにせうと思つたを、ツイ破りましたと申す事サ。

是齋　何を吐かす。先づこの金を、神棚へ上げて、風呂が沸いたら、新湯にはおれが入る。娘、其方は爰にゐて、お客人の草臥れ休め、肩でも揉んであげませい。

　　ト綾女、嬉しがる。

これも只はならぬ。肩揉み賃が金子二兩。

權六　後刻算用を仕らう。

是齋　新作〳〵。コリヤ、新作。
ト此うち新作、綾女にこなし。
ト恟りして
新作　ハイ〳〵。
是齋　コリヤ、臺所へ行つて、風呂を手傳へ。
新作　アヽ、なんとせう。思ふ事、まゝならぬこそ浮世なり。
是齋　これにつけても、金ぞ欲しけれ。
權六　是齋どのには、きついお好き。
是齋　ハヽヽヽ。イヤ、後に逢ひませう。
ト唄になり、是齋、思ひ入れ。新作、綾女の側へ行かうとする。綾女、ピンとする。新作、ムツとしたるこなし。兩人、奧へ入る。あと合ひ方。
權六　イヤ〳〵、よく思へば、年若な娘御。斯樣にして居つては人目が惡い。サヽ、奧へ行かつしやれ身共が相手は、この莨盆。あれへ行つて、鬱氣を晴らしませう。
ト脇へ行つて坐る。綾女も側へ行つて坐つてゐる。權六、これを知らず

あの娘も、はや十六七でもあらうか。嫁入り頃を啞ころとは、ハテサテ、不便千萬な。

ト綾女、繼穗ないゆゑ、後に廻り、肩揉む。

誰れぢや〳〵……オヽ、綾女どの、まだ行かつしやらぬか。

ト後より綾女、手を伸ばし、權六の膝へ書く。

父さまが肩を揉めと云はしやんしたゆゑ。

ト讀み

イヤ〳〵、結句氣が張つて、つかへます。もうようござる。御苦勞々々。

トまた此方へ來る。綾女、また附いて來る。

この間から、下女のりんに賴んで置いた事、なぜ返事して下さんせぬ。

ト書くのを又讀み

成る程、承りましたが、おりんどのゝ云はるゝを聞けば、こなたが身共へ戀を仕掛けて、取持つやうにもあり、又あの人が仕掛けるやうにもあり、とんと解りませぬ。

ト此うち在鄉めきたる誂らへの合ひ方になる。

ホヽ、仕事が始まつた。町家に居る者に田畑を作らせる。百姓の業もさせるとは、イカサマ、斯

う稼がねば、金銀も殖えまい。

ト莨をのむ。綾女、いろ〳〵こなしある。この唄のうち、向うより道庵、好みの醫者の拵らへにて出て來り

道庵 ものもう。

ト此うち綾女、いろ〳〵權六へ書いて見せる事あり、權六、手で、イヤ〳〵とする。それでもトいふこなしにて、いろ〳〵あり

ものもう。

トきつと云つても、返事せぬゆゑ

ものもう。

ト大聲にて云ふ。兩人、悒りする。奧より、おりん出て

りん どうれ。

ト返事して出る。

道庵 是輪道庵。お見舞ひ。

ト權六、見て

權六　オヽ、道庵老。サヽ、これへ〳〵。

道庵　御病人には、大分端近うござる。

ト上へ通る。綾女、莨盆を持ち行く。

これは〳〵、當家の深窓に生ひたつ御息女。容顏美麗。アヽ、たをやか〳〵。

りん　お茶あげませう。

ト持つて行く。

道庵　これは見事。美人かな〳〵。

ト茶碗を取る。

りん　道庵さま、こちや嫌いなア。

ト嫌らしく云つて、あちらへ行く。

權六　今日は近邊を歩行いたして、只今歸りましてござるが、のぼせまするゆゑか、少し痛むやうに覺えまする。

道庵　さうあらう。併しながら、少しでも歩行の成るは、これ拙者が藥の驗目。なんと名醫でござらうがの。

権六　イヤモウ、結構なお醫者にかゝり合せましたは、私しが仕合せでござります。

道庵　仕合せ〳〵。拙者元來、長崎の眼醫者でござつたが、さる如月上旬、當所へ引ッ越してござるに、早速數多の病家。鷄明より黄昏に至るまで、頗る多忙。檢脈配劑に暇がござらぬ。ドレ〳〵眼病を伺ひませう。

権六　夜に入ると、一向に見えませぬ。

ト道庵、天眼鏡を出し、眼の中を見る事あつて

道庵　至つてむづかしき牛來の內障であつたか、今では鳥眼になつた。コレ、もと心の臟と腎の臟との勞れより起る事。信心が肝腎でござる。ドレ、調合仕らうか。女子衆、昨日の藥を持たつしやい。

りん　ハイ〳〵。

ト藥を持ちゆく。懷より箱を出し、調合する。綾女、早う去なせと、権六へ、いろ〳〵仕方する。

道庵　先づさんざしを用ひませう。又、爪づき轉んでも怪我のないやう、ほうきを一味加へまする。

権六　ハテ、ほうきを加へまするど、轉んでも怪我は致さぬかな。

道庵　ハテ、ほうき轉んでも地につかずでござる。

權六　これは御尤も。

道庵　又、さんれうを目方五兩ばかり用ひますと、夜分よく寢られまする。

權六　とは、どういふ儀で。

道庵　ハテ、爰にさんれう、かしこに五兩、これは夢かや現かや。

權六　ハヽヽヽヽ。

道庵　さて、洗ひ藥もなさるがよい。先づ黄連、山査子、明礬、これは洗ひ藥でござる。黄連は卽ち法華經の黑燒でござるて。

りん　エヽ、黄連が、法華經の黑燒でござりまするかえ。

道庵　ハテ、南無妙わうれんげ經と申すではないか。

りん　成る程、左樣でござりまするな。

道庵　黄蘗は禪寺の細末、黄金は閻魔の鐘撞き。

りん　エヽ、閻魔が鐘を撞きまする藥種がござりますかえ。

道庵　ハテ、わうごん。

りん　成る程。

道庵　いゝゝ山ひゝと申すは、山猿の劫を經たを狒々と申す。卽ち、猿も藥種へ入りまする。藥種と申して、茅場町とは違ひまする。明礬と申すは、本草にては講釋の打出し。

りん　モシ〳〵、講釋の打出しが、藥になりまするかえ。

道庵　これは不通な女郎かな。講釋の打出しは、ソレ、面白い所になると、この後はめうばん。ハヽヽ

りん　何を仰しやりまする。

道庵　イヤ、女中、いつもの通り、二杯入れて一杯に煎じつめさつしやい。

ト調合して藥包みを渡す。

りん　ハイ〳〵、左樣なら、爰で煎じてあげませう。

ト七輪と藥罐を取つて來て煎じる。

權六　これは、いつもながら、お世話になりまする。

りん　オヽ、あなたゆゑなら、どんな辛苦もいとはぬわいなア。

ト此うち綾女、道庵を歸したいこなし。思はず道庵を叩く。道庵、悯りして

道庵　オヽ、御息女、それにござつたか。

ト綾女、權六へ仕方する。道庵、キヨロ〳〵して

聞えたものはこの少女。愛着執心、戀慕れゝつの志しを結んだと見える。イヤ、客人、戀愛の道は、眼病には第一の差合ひ。恐るべし〳〵。

權六　左やう存じて、一向に愼しんで居ります。

道庵　それがよい〳〵。

　　ト綾女、仕方してゐる。おりん、見て

りん　何ぢややら、人の見てゐる側で、アタ好かん。エヽ〳〵。

　　ト腹を立てゝ、七輪をバタ〳〵あふぐ。

道庵　これは、靜かにさつしやい。埃が立ちますわいの。

　　トこの時、綾女、歌がるたを取つて來て、道庵が側へ置き、袖を引く。

なんぢや。なんでござる。

　　ト綾女、書いて見せる。

御病人のお氣晴らし、いゝかるたを取つて、お慰め申したうござんす……か。

　　ト額を見る。綾女、うなづく。

權六　歌がるたは、女中の持遊び。眼の養生にはならずとも、また志しの捨て難い。

道庵　愚老はさしづめ、上の句を讀まうかい。

りん　わたしにも取らしておくれ。

ト此うち綾女、嬉しさうにかるたを並べて、上の句を道庵へ渡す。

道庵　よいぞ〳〵。さらば、これから讀みかけるぞ。

ト大小、誂らへの合ひ方になり、おりんは藥を煎じながら、四人立向ふ。道庵は上の句を讀む。

「心あてに折らばや折らん初霜の

ト下の句を取る。

おき窓はせる白菊の花」。男の味ひは、まだ白菊の時に……なんぢや。「これやこの、行くも歸るも

別れては

權六　知るも知らぬも逢坂の關」。

ト下の句を取る。

道庵　貴公も眼病。

權六　蟬丸の歌は、相應でござる。

道庵　「忍ぶれど色に出にけり我が戀は

りん　物や思ふと人の問ふまで」。
　　ト下の句を取る。
道庵「筑波根の峰より落つるみなの川。
　　ト綾女取つて、書いて見せる。
この下の句がわたしの心……ムウ、さては、この客人に、戀ぞつもりて淵となりぬるぢやなア。
　　ト綾女、袖を扣へる。おりん、腹を立てる。
娘と思ふは油斷大敵。伊勢の大輔と來てゐる。客人、貴公はお娘をパッテリと
　　ト下の句を取つて
われても末に逢はんとぞ思ふぢやな。
權六　イヤ〳〵、拙者が心は、ずんど清い清少納言。
道庵「夜をこめて鷄の空音をはかるとも
權六　世に逢坂の關はゆるさじ」。ナ、御親父のお叱り、世間の思惑もござれば、嫁入りの極まるまでは
　　ト下の句を取つて
コレ

衣かたしきひとりかもねん」。獨り寢をめさるがよい。

ト綾女、頭を振つて泣く。

りん　アイ、獨り寢とは、よからうわいな。そこで、わたしはナ、器量はお孃樣に劣つたれ、それはそれはよい所が、中納言時平。

道庵　「立別れ因幡の山の峰に生ふる

りん　松としきかば今歸りこん」。

ト下の句を取つて

サ、松訥子きかば、ナ、どうやら源之助に、よう似た男。

トおりん、かるたを懐へ入れる。綾女、下の句を取つて道庵に見せる。

道庵　身のいたづらになりぬべきかな」。

ト讀む。綾女、書いて見せる。

たとへいたづらになつたとて、あなたゆゑなら、いとはぬわいなア……ハテサテ、困つた奴。さては貴公

ト下の句を取つて

さしも知らじな燃ゆる思ひを」ぢやなア。

權六　左樣なつてはコレ、この如く

　　　ト下の句を取つて

名こそ流れて猶聞えけれ」。世間へ聞えては惡うござるて。

りん　こちや又、やもめぢやによつて、あなたさへ得心なら

　　　ト下の句を取り

末の松山浪越さぜとは」。

道庵　ヤア〳〵、さては汝も

　　　ト權六を見て

紀の貫之ぢやなア。

　　　ト上の句を取つて

「人はいざ心も知らず故鄕は

權六　花ぞ昔の香に匂ひけり。」

道庵　何さまハヤ、香に匂ひけりぢや。

ト おりんを見て、鼻をつまむ。

りん オヽ好かん。

ト腹を立てる。綾女、書いて見せる。

道庵 わたしや外へ嫁入りするのは否。

ト綾女、下の句を取つて見せる。

かひなく立たん名こそ惜しけれ」。ムウ、尤も。イヤ、客人、あまり切ない戀なれば、ちよつと坂の上の是則になつても、後徳大寺もござるまい。

權六 イヤ〳〵、いつまでも拙者は

ト下の句を取つて

戀に朽ちなん名こそ惜しけれ」。

ト綾女、書いて見せる。

道庵 それ程にお云やるなら、是非に及ばぬ。

ト綾女、また下の句を見せる。

今日を限りの命ともがな。」

ト道庵の合口を拔きにかゝる。

權六　これは危ない。待たつしやれ〳〵。

權六　必らず短氣を出さつしやるな。拙者とても岩木ならねば、お志しは無下にも致さぬ。

トおりん、眞中へ入つて

りん　それで濟むかえ〳〵。濟むかいなア。

ト權六を振り廻す。

道庵　これは歌がるたが臺なしになるわい。

ト片附ける。綾女、書いて見せる。

聞入れなければ、死ぬる〳〵、死ぬるわいなア〳〵。

權六　それでは拙者が

りん　わたしへの返事は。

權六　サア、その儀は。

ト綾女、また書く。

道庵　望みを叶へて下さんすか。

權六　サア、それは。

りん　嫌はしやんすか。

權六　サア

ト綾女、書く。

道庵　矢ッ張り死にませうか。

權六　サア。

三人　サア〳〵。

りん　お返事は

道り　どうぢやぞいなア。

ト此うち始終、綾女が書くを、道庵、見い〳〵云うて、トゞ女の身振りにて、おりんと一時に權六へもたれかゝる。二人を突きのけ

權六　不承知と申すが拙者の返事。ドリヤ、奥へ參らうか。

ト立ちあがる。綾女、道庵を突きのけ、裾を持つて留める。おりんは奥の方へ立ちふさがり、綾女書くを道庵、此方から讀む。

道庵　どうあつてもお否かえ。
權六　サア、否ではないが。
トおりんを見て、
今はどうも。
トおりん、縋りつき
りん　胴慾ぢや〳〵、胴慾ぢやわいなア。
ト綾女また書く。
道庵　エヽ、つツともう、辛氣な。
ト綾女泣く。
權六　さりとては、放さつしやれ。
りん　放さぬ〳〵。
ト綾女も取りつく。
權六　これはしつこい。
ト突きのける拍子に、おりん、藥鍋を打ちかへす。

ドリヤ、参らうか。

ト兩人、また取りつくを、摺りぬけて權六、奧へ入る。兩人、取違へて道庵を兩方より引ッ張る。綾女、顔を見て、なんの事ぢやといふ思ひ入れにて、道庵の頭を叩く。おりん、道庵を突きとばし、藥鍋を打ちつけ、綾女も一緒に奧へ入る。

道庵　ヤレ〱、怪しからぬ側杖。狂人狂へば不狂人といふ如く、眼醫者を揉みくちやにしをつた。ドレ。愚老も眼の療治を……ほんに、この藥鍋も、病ひ切り〱。

ト唄になり、道庵、藥鍋を打ちつけ、奧へ入る。引違へて新作出て

新作　いろ〱にして見ても、あのお娘の啞ごろは手に入らぬか。なんでも口說き落して、本意を達して見たいもの。

ト思ひ入れ。此うち、おりん、窺ひ出て

りん　不義者、動くな。

新作　エヽ。

ト悑りして

なにを、飯炊きの癖に、人を悑りさせた。不義者とは、なんぢや。

りん　お孃樣に惚れてゐて、人の戀まで邪魔をする不義者め。

新作　どこでおれが、お孃樣と不義をした。

りん　最前のこの文。

ト拾ひし文を出す。新作、引ッたくらうとする。やるまいと爭ふ所へ、道庵出て、兩人を止めて

道庵　これはどうぢや／＼。番頭どのといひ、おまんま炊きの女中どの、この喧嘩、これはどうぢや／＼是輪道庵、挨拶を仕る。

トなだめるを構はず

兩人　エヽ、なにを。

ト叩きあふ拍子に、道庵の目鼻の間をくらはす。道庵、グル／＼舞ひして、「ウン」と目を廻す。兩人、惝りして

りん　ヤア／＼、目を廻したわいな／＼。

ト水を飲ませる。

是齋　ヤイ／＼、やかましい。何を喧嘩するのぢや。

ト云ひ／＼出て來る。

新作　これは旦那様。
りん　お聞きなされませ。番頭の新作どのは、不義者でござりまする。
新作　ヤイ〳〵、なんでおれが不義者ぢや。
りん　お聞きなされませ、新作どのが、お孃樣に不義を仕掛けた、この濡れ文。
是齋　こりや聞捨てにはならぬ。

　　ト道庵「ムウ」と反る。

兩人　アレ、唸つたワ。道庵さまいなう。

　　ト呼び生ける。

是齋　その文、これへ。
りん　破れてあれど、濡れ文に相違ござりませぬ。

　　ト持つて行く。是齋、取つて

是齋　こりや、ひどう破つたな。

　　ト一枚づゝ並べ

恐れながらお願ひ申しあげ候ふ………イカサマ、主の娘に附け文、恐れながらとは、これも尤も

………わしが思ひは深草の、少将ぢやない、たんと〳〵………唐藥八斤、かつこう十二斤………
三ケ年の上納御免に與かりたく候ふ………それにお前は胴慾な、一度が嫌なら半分でも…………
小西是齋さま、道修町近江屋藤兵衛………なんの事ぢや。とんと譯が解らぬ。

ト此うち障子屋體より權六、出て、聞いてゐる。

新作　あれが證據か。
りん　なんの事ぢや。とんと解らぬ。
新作　大べら坊め。

ト叱りつける。道庵「ウン」と反る。

りん　こりや、をかしい顔で、蟹のやうに泡を吹かれます。
是齋　聞えた。そりや癲癇病みと見える。よい時分に正氣が附くであらう。捨てゝ置け〳〵。

ト向うより與助、走り出て來て

與助　サア〳〵、大事だ〳〵。阿部野村の百姓どもが、大勢集まつて、この小西の內を、ぶち毀すといつて、押しよせて來ますわいなう〳〵。
皆々　ヤア〳〵〳〵。

ト恟りする。向う揚げ幕にて

百姓　アリヤ〱〱〱。

ト鯨波の聲、ドンチヤン。

新作　モシ、旦那、大事でござります〱。

是齋　何も騒ぐ事は無いわいやい。

ト云ひながら、心ならぬ思ひ入れ。道庵「ウン」と反る。

ん　搗てゝ加へて、邪魔な癲癇病みぢや。

ト道庵の帯を解き、裸にして

爰へなと入つて居やしやんせ。

ト表の用水桶へ投げこむ。ドンチヤン、鯨波の聲にて、向うより頓兵衛、蓆の腹巻、小手臑あて、百姓大勢、簑笠にて、めい〱鋤鍬、鳶口、竹槍を持つて出て來て

頓兵　サア〱、おれに續いて、みんなござれ〱。

百姓　合點だ〱。

頓兵　ヤア〱、小西是齋の慾張りめ。藥の是齋を振舞ふはよけれども、強慾非道の振舞ひに、下をせ

たけて、年貢金や川普請、一つも云ふ事きかぬゆゑ、是齋の藥もきくまいかえゝなう、皆の衆。

百一　そこで阿部野の百姓が、皆一つになつて、子別れの憂き目見ても是非がない。

二一　恨みを晴らしに來たのだワ。

皆々　サア、尋常に覺悟しろ。アリヤ〳〵。

ト鯨波の聲して本舞臺へ來る。

新作　さてはうぬら、徒黨したのぢやな。

皆々　其奴から、突き殺せ〳〵。

新作　イヤア。

ト恟りする。

々　片ッ端から、ぶッ挫け〳〵。

ト駈けこまうとする。皆々うろたへる。權六、ツカ〳〵と出て

權六　待つた。いづれも、待たつしやれ〳〵。

頓兵　此奴も同類。

皆々　疊め〳〵。

ト突きかけるを、權六「待つた〳〵」と留める。皆々入れちがひ、こみ入るを、權六、百姓の竹槍を取つてキッと構へる。

皆々　イヤア。

ト恐れて後へ寄る。

權六　裁人の詞を立てず、理不盡な事めさるゝゆゑ、是非に及ばずこの手向ひ。此方より事は好まぬ。この家に旅宿して、世話になる浪人者。騒動を見かね、挨拶仕る、とあつて非義非道に極まらば、全く荷擔は仕らぬ。事の仔細を聞き糺し、その上で理非分、明らかに立てゝ進ぜう。それとも聞入れなくば、刀の手前、扣へては居らぬ。幾人あつても竹槍の切尖、生けては歸さぬ。サア、各々の返答、如何でござる。

百一　返答も辨當もいらぬわえ。

皆々　突き殺せ〳〵。

ト突きかゝる。頓兵衞とめて

頓兵　待て〳〵。

皆々　イヽヤ、待たぬ〳〵。

頓兵　待て〳〵〳〵。待てといつたら待たぬか。阿部野村の庄屋、頓兵衛が留めた〳〵。マア〳〵
マア待て〳〵。

皆々　待てといつて、どうするのだ。

頓兵　今あの人が云はれる詞を、つく〴〵考へて見れば、此方の云ひ條を立てゝやらうと云はつしやるワ。ハテ、喧嘩と腫れ物は所嫌はず、挨拶は時の氏神。おれに任せて、マア〳〵、鎮まれ〳〵。

トなだめる。權六、竹槍を捨てる。頓兵衛、側へ來て

申し、お侍ひ様。

ト慄へ〳〵

どうやら怖いやうで、恐ろしいやうでござるが、云ふ事は云はにやなりませぬ。百姓どもが云ひ條、立てゝ下さりますか。

權六　こなたは庄屋どのでござるか。流石は一村の長ほどあつて、神妙に存ずる。是齋どの、存じがけない騒動、さぞ御心配でござらう。

是齋　高の知れた蛆蟲とは思へども、多勢に無勢、よろしく頼みます。

權六　承知いたした。八ケ村の扱ひ、又は不義者とやらも、糺してお目にかけませう……さて、是齋

どの、八ヶ村の知行高は。

是齋　三萬二千石でござる。

權六　三萬二千石と……手代衆、算盤扣へさつしやい。

與助　心得ました。

ト算盤を置く。

權六　右の石高六十目、金にて三萬二千兩。

頓兵　お待ち。此方の譯は、どうして下さる。元、この騒動の始まりは。

權六　ハテ、ようござる。あらましは承り及んだ。して、阿部野の後より、大和橋へ落ちる、その川上は、いか程ござる。

頓兵　大和の二丈ヶ嶽より流れて、川の尺は、凡そ十九町あまり。

權六　して、川巾は。

頓兵　それはどうぢや。作左どの、戸平どの。

百一　ハテ、廣い所で一丁半。

百二　狹い所で、三十間あまりもござりませう。

權六　破損の場所は、川上か川下か。
頓兵　はるか下の方でござりまする。
權六　ナニ、川下とや。ムウ。
　　　ト思案する。
百一　これサ、思案どころか、挨拶が遲いと
皆々　いつそ毀しかけるぞ。
權六　サヽ、ようござる。これまで在り來つた隣り在、利分の所に違ひなくば、云ひ分はござるまいがな。
皆々　サア、それが出來ぬによつて
權六　サヽ、そこが工風。川筋破損の繕ひも成就の上、無事に耕作が出來さへすれば、年貢も事なく納まるであらう。
頓兵　仰しやれば、そんなものかえ。
權六　川筋の普請人夫の費え、一日を一人前、銀二匁づゝと積つて、凡そ八百貫目あまり。なんと、これでは、無難に納まらうと存ずる。

トおりん、茶を持ち出して

りん　モシ、息つぎにお茶一つ。

權六　これは〳〵。

ト茶碗を取つて飲む。

是齋　して、その金の出所は。

權六　拙者が爰で湧き出しまする。

ト胸を叩く。

是齋　ハテ、大束に、呑氣なものぢやな。

權六　斯うばかり申しては、各々に合點が參るまい。ソレ、そこにある衣類をこれへ。

りん　アイ〳〵。

ト道庵の着物を持つて出る。權六、舞臺へひろげ

權六　先づ、この衣類を、川の形に致して……いづれも、近うござれ。

皆々　ドレ〳〵、見よう〳〵。

トこぞる。

權六　これは川筋、左右の袖は砂地荒れ地。これへ、彼の八ケ村の盥、手桶、すべて平目なる物を

ト茶碗を取つて

これを器にたとへ、その中へ砂を八分目ばかり明け、水に浮めて、これを流しまする。

皆々　ハテナウ。

權六　山川の一得には、矢を射る如く、下へ／＼と流るゝところを、破損の堤へ集まる人夫が、鳶口、又は手頃の竹に釘を打ち、彼の器に引ッかけ／＼、堤を段々に築きあげまする。

皆々　イカサマナア。

權六　器が多くなりまする時は、竹を筏に組んで、これに積んで元へ戻す。また川上より砂を積んで、何度も取替へて流す時は、人夫も使はず、苦勞を助け、土砂は殘らず捌けて、堤も成就いたすではござらぬか。

皆々　こりや尤もの事。

權六　さうして、水入り地面は、流れこむ塵埃が、即ち養ひになつて、過分の豊作、微塵不納の憂ひもなく、民百姓はいよ／＼榮え、當家の身代も益々潤ふの道理。工風と申すは斯くの通り。各々、とくと呑みこましやつたか。

ト頓兵衞、手を打つて

頓兵　なんと皆、聞かしやつたか。

百一　聞いたとも〳〵。辯舌といひ、工風といひ、その通りにさへすれば、忽ち普請も出來るといふもの。

權六　百姓ども、云ひ分ないか。

頓兵　なんの云ひ分がござりませう。さうすれば八ケ村は

皆々　十分々々。

頓兵　これで村々のめでたい納まり。

百一　畢竟それも、あのお侍ひのお庇と申すもの。コレ、この着物を、川の形に例へて見せしやつたゆゑ、解りました。これから八ケ村の者へも、合點のゆくやうに、この着物を借りて行きませう。

皆々　さうさつしやい〳〵。

百一　時に、お骨折られた庄屋どの、御恩送りに、皆がお宿へ送りませう。

頓兵　幸ひ、おれがこの席の具足。シタガ、風の神と取違へて下さるな。

百皆　それでもお宿へ、おゝくれ送れ。

ト鉦太鼓にて、頓兵衛先に立ち、踊りながら、皆々向うへ入る。おりん與助は奥へ入る。權六、是齋殘り

是齋　ハテ、いろ〳〵な事で騷がす。ドレ、奥へ行つて暫らく寢ようか。

ト行かうとする。

權六　イヤ、是齋どの、暫らく。

ト合ひ方になる。

是齋　御用がござるか。

權六　ちよつとお待ちなされい。御家内の騷動、事無難に納まり、さぞかし御安心でござらう。長者、富に飽かずとは、世上の譬へ。およそ貴殿の御身代は。

是齋　されば、當時の有り金、十萬兩ばかりにも及ぶか。富裕の身になつたも、日頃信心する神の御利生。

權六　奥の小庭に勸請の、祠は八百萬神の、外に洩れて、明朝と、額を打ちしは、何か怪しい。

是齋　なんと。

權六　ハテ、位あれば德ありぢやよなア。

ト暮れ六ツの鐘鳴る。

是齋　もう暮れ六ツか。ドリヤ、藏々へ、燈明を上げさゝうか。

ト唄になり、是齋、こなしあつて、奥へ入る。

權六　暮れゝば鳥眼。是齋どの／＼。

トそこらを探り

奥へ行かれたか。何をいうてもこの難病。毒の驗くのは早けれど、藥の驗目は、ハテ、遲いものぢやなア。

ト與惣吉、行燈をともし、持ち出て

與惣　お客樣。これにござりますか。

權六　さう云ふは、與惣吉どのか。

與惣　左樣でござりまする。お孃樣が御寢所にたつた一人、話しの相手が無さに、あなたを呼び申してくれいとの、私しへの御意でござりまする。

權六　綾女どのゝ、寢所へ、わしを。

與惣　サア、お出でなされまし。

権六　ナニサマ、話しの伽には眼病みが相應。然らば、これへ。
與惣　お手を取りませう。
権六　これは御苦勞。
與惣　サア、お召し物を召しませう。
　　　ト介抱して、権六に駒下駄を穿かせ
お危なうござりまする。
　　　ト兩人、少し行きかゝり
権六　關寺小町にあらねども
與惣　頼む物には竹の杖。
権六　その杖よりは、與惣吉どの。
與惣　ソレ、小石が
権六　オツト承知。
　　　ト越えるこなし。
與惣　サア〳〵、お出でなされまし。

ト唄になり、下座へ入る。「こなた百まで」の合ひ方になり、用水桶より道庵、首を出し、平氣にて桶の緣へもたれ

道庵　ぬるい湯ぢや。もそつと焚かせろやい。三助は居ぬか。糠袋を持つて來いやい。

ト云ひながら、氣の附くこなし。

ヤア〳〵、風呂かと思へば、こりや用水桶ぢや。ヤレ〳〵、怪しからぬ。

ト桶より、襦袢、ぱつちの形にて出て

なんの爲に、こんな所へ入つてゐたか。待てしばし。ムウ……オヽ、思ひ出した。番頭と飯炊き女が、喧嘩をして、その扱ひに入つたところを、血氣に逸る振り拳、目鼻の間をぶたれたと思つたが、それから後は夢現。

トまた思案して

さては其はずみに、持病の癲癇が起つたと見えるわえ。アヽ、浮世ぢやなア。醫者が病を起すとは、米屋が飯炊いて、呉服屋が小袖を着たがり、女郎屋の亭主が内の女郎を占むる類。悔むな、泣くな。廣い世界にある習ひ。まづ今日は出直して參らう。併し、此やうな形では行かれまい。コレ、愚老が着物や腰の物は、どこにござるぞ。コレ、女中衆〳〵〳〵。若い衆はござらぬか〳〵。

ト捨ぜりふにて着物を尋ねる。捨て鐘にて、向うより杢助、紺看板にて、スタ／＼と出て來り

杢助　旦那は何をなされてござるやら。ハテサテ、遊び好きにも困つたものだ。

ト云ひ／＼、道庵を見附けて

旦那でござりまするか。

道庵　杢助か。何しに來た。

杢助　モシ／＼、何しにどころか、お聞きなされませ。富田屋のおかみ様が、たつた今、產の氣が附いて、ウヽ／＼と大騒ぎでござりまする。サア／＼、お出でなされませ／＼。

ト無性に急いて引ッ張る。

道庵　ナニ、富田屋のかみ様が、子を產みかけてござる。

杢助　左様でござります。サア、お出でなされまし／＼。

道庵　サア／＼／＼、それはとんだ事だ。して、その產は難產か。

杢助　難產々々。難產拾得。

道庵　何をたはけた。サア／＼、それは怪しからぬ事だ。大事の病家ぢや。直ぐに參らう。急け／＼。

杢助　サア、お出でなされまし／＼。

ト提灯を持ちそへ、先へ立ち、道庵、行かうとして、手前を見て

道庵　アヽ、待て〳〵。

李助　へイ〳〵。

道庵　いかに急な病家ぢやとて、此やうな形で、道庵お見舞ひと行かれるものか。

李助　成る程、お召し物は、どうなされました。

道庵　どうしたやら。一向厄體ぢや。ハレ、厄體もないとは、醫者には禁物ぢや。

李助　ハテ、早くお出でなされませ。

道庵　それでも、この形では行かれぬワ。小袖脇差を尋ねて居ては、間に合ふまいし。

李助　成る程、其お形では行かれますまい。ハテ、とんだ所で湯屋泥坊におあひなされました。

道庵　コレ〳〵、李助々々。

李助　へイ〳〵。

道庵　コリヤ、見る通り、醫者が裸で、病家へ見舞はれもしまい。少しのうちぢやが、われが着物を、愚老に貸せ。

李助　それは何よりお易い事でござります。旦那のお爲なら、サア〳〵、召しませ〳〵。

ト看板を脱いで丸裸になり、道庵へ着せる。

道庵　アヽ、われは忠義なものぢや。病家へさへ參れば、どうでも話しが出來やう。

杢助　左樣でござりまする。どうか附き馬に會つたやうでござります。

ト捨ぜりふ云ひながら看板を着て

道庵　コレ〳〵、濡れた襦袢は、おぬし、持つて來やれ。

杢助　畏まりました。サア〳〵、急病だ。早く參りませう。

道庵　急げ〳〵。

ト杢助、裸にて、提灯を持つて先へ立つ。

杢助　へイ〳〵。

待て〳〵。

道庵　これでも行かれぬわい。家來は裸、醫者は看板、折助の形でも參れまい。これは、てまへが着ろ

てまへが着ろ。

杢助　へイ〳〵。

トまた道庵脱いで、杢助に着せ、先へ立ち、兩人、思ひ入れあつて

道庵　ア丶、待て〳〵。どうも裸でも行かれぬわえ。

李助　左樣なら、また脫ぎませうか。

ト看板を脫ぎ、差出す。道庵、思ひ入れあつて

道庵　われが脫いだといつて、おれも着られず、おれが脫いだといつて、われも着られず。

李助　家來が脫いでも、旦那が着られず、旦那が脫いでも、家來は着られず、いつまで云つても、同じ事でござります。

道庵　今では一枚の縕袍が、有つて無きが如し。急病人より、この看板が、ハテ、大病人ぢやわえ。

ト手を組み、思案する。

李助　成る程、一枚の縕袍で、いかい御苦勞なされまする。

ト思案する。

道庵　あるぞ〳〵。思案が出た〳〵。

李助　出ましたか〳〵。

道庵　あるぞ〳〵。急いで參るには、屈竟の思案が出た。その提灯を消せ。

李助　畏まりました。

ト提灯を消す。

道庵　コレ、どうで顔を出しては行かれまい。この看板へ、斯う提灯を持ち添へてナ

ト提灯を疊み、看板へ持ちそへ、これをかぶる。

杢助　モシ〳〵、私しは、お先へ參りませうか。

道庵　ハテ、杢助、待てといふに。

杢助　隙がとれるならお先へ參る。

道庵　これはしたり、杢助、待てといふのに。コレ、杢助待つたり〳〵。

杢助　杢助待つたぞ〳〵。

トこれより摺り鉦入りの太神樂の囃子になり、道庵、提灯を獅子の頭にして、看板をかぶり、杢助この後へ入り、兩人、獅子舞ひになり、鳴り物早めにて、兩人、獅子を舞ひながら、向うへ入る。これにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、金襖。上の方に板塀、見越しの松の樹。この枝に鉦を吊し、下の方、同じく板塀。引下げて植込み。雪見燈籠、手水鉢、枝折り門。すべて奥座敷寢所の體。爰に綾女、寢

衣の形、扱帶をしめ、蒲團の上に虎の皮を敷き、上に脇息にもたれ、歌書を讀んでゐる。側に異風の燭臺、誂らへの緞帳に眞紅の紐を附けて、よき所へ吊り、お露、片脇に香をついでゐる見得。道具とまる。

ト胡弓入りの合ひ方。諸所に鈴の音する。お露、香爐をよき所へ直し

つゆ 申し、今宵は風も烈しうござりますゆゑ、緞帳を吊りましてござります。御寢になる時に、この紐をお引き遊ばせ。

ト綾女、うなづく。

お床を取りませうかえ。

ト綾女、書いて見せる。

左様なら、よい時分に、お知らせ遊ばせ。

ト又書く。

わたしは、お次へ。

ト又書く。

成る程、誰れも參りませぬやうに、申しつけませう。

ト お露、入る。始終合ひ方。下の切り戸口より與惣吉、權六を連れて出る。

與惣　申し、お危なうございまする。

ト綾女見て、片脇へ寄り、爰へ連れて來いと仕方する。

サア、お蒲團の上へございませ。

ト手を取つて坐らせる。

權六　綾女どの、それにござるか。お寢間へ來るは、近頃失禮にはござれど、お招ぎゆゑ、よんどころなく。

ト綾女、與惣吉に書いて見せる。

與惣　大事ない、此方へお寄りなされとの儀でござります。

權六　左樣なら、暫時お話しを

ト側へ寄る。綾女、本を與惣吉にやり、權六に讀んで聞かせろと仕方する。

與惣　「つれ〴〵草」を讀めとでござります。

權六　吉田の法師が、よく綴りましてござるよな。

ト與惣吉、本をひろげ

與惣「淺茅ヶ宿に昔忍ぶこそ、色好みとはいはめ、色好まざる男子は、玉の杯に底無きが如し」

權六 ナニサマ、ハヤ、夫婦愛情の道あればこそ、子を儲けて子孫も續く。その水上は色の一字。

ト綾女書く。與惣吉讀む。

與惣 サア〳〵、それぢやによつて、わたしが願ひを。

權六 とは存ずれども、許さぬ戀は不義いたづら。

ト綾女、紙に書いて與惣吉に渡す。

與惣「鷄 鳴 同 枕、爲 君 何 惜 命。」……自筆に遊ばされてござります。

ト權六、取つて

權六 即席の文といひ、手蹟もさぞや

トこなし。懷中する。綾女、喜び、寄り添はうとして、與惣吉を見て、こなし。

與惣 イヤ、私しは、旦那の御用、道修町まで行て參りませう。

ト小提灯をともす。

權六 この頃は、物騷がしうもある。明日の事にさつしやれたがよい。

與惣 イエ〳〵、急な御用さうな。ツイ一走り行て參りませう。

ト提灯を持つて向うへ入る。あと合ひ方。この時、上の見越しの松へ、新作出て窺ふ。下の植込みの中より、おりん窺ふ。綾女、こなしあつて、權六の手を取つて膝へ引きつける。權六、こなしあつて

權六　いま書かしやれた詩の心。枕を同じうして、君が爲になんぞ命を惜しまんや。いよ〳〵その心に違ひはないか、とサア、問うてからが片便り、書かせて見ようにも、手前は鳥眼。吉野の花も、暗夜に見ては興がない。啞の病も、鳥眼の不自由も、本腹した上で、成るか成らぬか、返事を致さう。

ト引きのけ、行かうとする。綾女、留めて

綾女　たいみんちんしん、にやうろきみけいたからんかんきうけんさい。ばいらうとらヤア〳〵。

ト權六、ギヨツとして

權六　今の五音は、正しく異國の……啞にして物云はぬは……これも一物……和音通へる證據には、この土地の詞を聞きわけ、問答の自然と出來るは、ハテ心得ぬ。して又、和言で物が云へるか。

綾女　サア、日本の文にも馴れ、和音も通じる自らなれど、五音の調子が唐土人。本國に知人あつて、うつろ舟に乘せられ、八重の汐路へ押流され、この日の本へさまよひ來りし、憂き身の末。フツとこの家へ、お出でなされたその日より、見染めた戀路に、この身の素性も一大事も、忘れ果て

てのこの願ひ。ちぎりんたい〳〵。

ト膝にもたれる。新作おりん、こなし。權六、ちよつと思ひ入れあつて

權六　二世かけて夫婦にならう。

綾女　エヽ。

權六　エヽとは否か。マア、ちよつと手附けに

ト懷へ手を入れる。綾女、恥かしき思ひ入れ。

唐の女も、矢ッ張りこそばかる。これぢや〳〵。これを何と云ふぞ。

綾女　ちゝ。

權六　爰は。

綾女　むね。

權六　爰は。

綾女　ちうくわん。

權六　爰は。

綾女　はい。

ト思ひ入れあつて

もう寝ようわいなア。

権六　寝てしつぽりと。

綾女　つもる睦言。

権六　夢でも見ようか。

トこなし。綾女、紐を引く。緞帳落ちろ。新作おりん、いろ〳〵思ひ入れあつて、新作は松の木より落ちる。

新作　アイタヽヽヽ。でも、ひどい目にあつた。イヤ、そこに居るは、おりんぢやないか。

りん　さういふ聲は、番頭さんか。

新作　われも聞いたか。

りん　聞いた段か。腹が立つやら口惜しいやら。ほんに、どうしたらよからうなア。

新作　物は相談ぢや。われに乗りかへようか。

りん　わしも、もう自棄ぢや。

新作　忍ぶ戀路は

りん　闇こそよけれ。
新作　おりん。
りん　番頭さん。
新作　斯うおぢや。
ト唄になり、兩人、下の方へ入る。時の鐘、誂らへの凄き合ひ方になり、向うより唐丸、九郎、入道乞食の形。後より盜賊十人、思ひ〳〵の形にて得物を持ち、出て來て、呼子を吹くと、簾上がる。權六、搔卷の形にて立ちあがり、思ひ入れあつて
權六　みんな、揃つたか。
唐丸　今夜の首尾にと、指圖をうけて、道庵が知らせ。皆うち揃うて、なんの事なく裏口から
皆々　忍びました。
ト權六、平舞臺へ下りる。皆々、本舞臺へ來て、左右へ別れ、思ひ入れ。此うち綾女、手燭を持ち、この體を見て驚ろき、手燭を隱して窺ふ。
權六　二三百兩、是齋めに摑ませて、後の月から捻ぢこんだも、大きな仕事を目論まうため。
入道　合圖違へず、宵から仕掛けた今夜の働らき。

唐丸　頭、金の在所を

皆々　頑張つて置かつしやつたか。

權六　五ヶ所の藏のうち、裏通りは皆雜物。內藏が此方の仕事。鷲摑み入道は、合圖の鉦を切つて落せ。

入道　心得ました。

權六　桂の唐丸、荒武者九郎は、逃げ出す奴輩を討つて捨てろ。

兩人　合點だ。

權六　サア、そろ〱と

皆々　仕掛けようか。

ト皆々、大刀を拔く。

綾女　そんなら

ト恟りする。入道、手燭を叩き落す。九郎、綾女を引きつけて

九郎　聲を立てると、芋刺しだぞ。

權六　イヤ、その女は。

ト綾女を取つて引き廻す。

入道　エヽ、お頭の食ひ物かえ。

權六　皆行け〳〵。

ト皆々、東西へ別れて入る。簾下りる。入道、殘り、合圖の鉦を切つて落す。この時、奥にて

大勢　イヤア、盗人が入つた〳〵。泥坊々々〳〵。

トやかましく騷ぎ立てる。これにて家内の仕出し、「泥坊々々〳〵」と云ひ〳〵、逃げて出て、あちこちして入る。これにて入道も奥へ入る。新作、おりん、逃げて出て

新作　盗人は、どこぢや〳〵。

りん　こちや怖いわいなア。

新作　それどころか、近所を集める、鉦だ〳〵。

ト見て

イヤア、こりや鉦も撥もないわえ。こりや堪らぬ〳〵。

ト行かうとするを、おりん、取りつき

りん　コレ、待たしやんせ。

ト捕へる。この見得、ゴン〳〵にて、道具廻る。

本舞臺、高塀、見越しに藏の横手を三棟ほど見せ、よき所に祠、切り戸、よろしく、是齋、手槍を構へ、唐丸と九郎、詰め寄せてゐる。これにて道具とまる。

是齋　年こそよつたれ小西是齋、金藏へ臑踏んごむと、胴腹へ風穴だぞ。

兩人　面倒な。老ぼれ、覺悟。

ト三人ちよつと立廻り、鳴り物にて追ひこむ。時の鐘になり、切り戸口より、盜賊皆々、千兩箱を手に持ち出て、本舞臺へ積みあげる。また是齋、兩人を追ひ出て、立廻りあつて、是齋の槍を叩き落し

兩人　今が最期だ。

ト拔き身を振りあげる。この時、切り戸口より權六、誂らへの形。綾女を引立て出て

權六　ヤレ待て、是齋めには問ふ事あり。命を取らずに引据ゑい。

兩人　心得ました。

是齋　ムウ。

ト腕くを、皆々押へて、繩かける。

盜人めらが手籠めの繩目。エヽ、口惜しい。

ト思ひ入れ。權六、金箱へ腰を掛け

權六　家内の奴等は、皆引ッ縛つて猿轡。
入道　合圖の鉦は切つて置いたれば、駈けつける奴等は無い。
唐丸　お頭は、筑紫の權六といつて、器量すぐれてござるゆゑ、我れ〳〵が仲間の棟梁。
九郎　それとも知らず、手盛りをくつた、あの是齋の
皆々　大べら坊め。
　　　ト此うち綾女、心遣ひする。
是齋　さては、うぬらは盜賊よな。エヽ、口惜しい。コリヤ、娘、うろたへるな。女童に聊爾はあるまい。愛構はずと、落ちよ〳〵。
權六　明朝と額を打つた、あの祠、ぶち毀して吟味しろ。
入道　合點だ。
是齋　勿體ない。それを
　　　ト立ちあがるを、皆々引据ゑる。入道、社の錠を捻ぢ切り、蒔繪の箱を出し
入道　こんな箱がごんした。
權六　ドレ。

ト蓋を明ける。唐裝束、天冠を取出す。是齋、悶へ。

皆々　これ見ろ。祠の神體は、この裝束。

權六　ハテナア。

是齋　娘は唐女、啞にして置く是齋が心底。うぬも異國の、紛れ者であらうな。

綾女　身が俗性を、盜人めらに明かさうか。併し、うぬらも人間、情を知らば、娘ばかりは助けてくれい。云ふ事は無ければ、サヽ、首を打て。

是齋　コレ、吳才官、堪忍してたも。あなたに一夜の添ひ寐して、自らは、もう唐土へ去ぬ事は嫌。盜賊でも、なんでも構やせぬ。あなたと女夫になりたいわいなう。

ト是齋、悩りして

ナニ、盜賊と枕を交したとや。

ト繩附きながら綾女に詰めより

大明大王の姫君、芙蓉皇女のこなた樣が、日本人と深き契り。我れは臣下の吳才官。御父王には先年、久吉が計略にかゝり給ひ、敢へない御最期。今日までも娘と呼んで、人目を忍び、强慾非道の金を貯めしも、大義を計る軍用金。臣が忠義を無足になしたる、不所存とや云はん、御父王

へ不孝とや云はん。エヽ、こなたはなう。

トきつと思ひ入れ。權六、せゝら笑ひゐる。

綾女　サア、さう云やるも尤もぢやが、唐も倭も、惚れた因果は、どうも仕樣は無いわいなう。

是齋　イヤサ、それでは濟まぬ。思ひ切らしやれ。

綾女　サア、それは。

是齋　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

綾女　堪忍してたもいなう。

ト權六の方へ行く。

是齋　イヽヤ、それでは

ト寄らうとする。

權六　エヽ、面倒な。

ト拔打ちに是齋をポンと切る。綾女、慄ふ。

家來を殺され、腹が立つか。

綾女　不便なれども、殿御ゆゑなら

權六　添ふか。

綾女　アイ。

ト側へ寄りそふ。

權六　エヽ、可愛い奴の。

ト引寄せる。

皆々　頭、うまいなア。

ト皆々、思ひ入れ。權六、綾女を引きつけ、思ひ入れあつて、入道と顏見合せる。チヨンと木の頭。權六、頭へ手をあげる。皆々、よろしく思ひ入れ。キザミにて、ひやうし

幕

第一番目　大詰　根來山三重の塔の場

役名＝筑紫の權六實ハ瀨川采女。早野彌藤次。荒武者九郎。狩人、長兵衞。同、紀次兵衞。下女、おりん。是齋娘、綾女實ハ芙蓉皇女。石川五右衞門。

本舞臺、三間の間、向う黒幕、一面の薄原。眞中に鹿小屋。これより鳴子繩を引ッ張り、爰に長兵衞、紀次兵衞、狩人、山裁附けの形にて、鐵砲を擔ぎゐる。山颪し、てんつゝにて幕明く。

長兵　コレ〳〵、紀次兵衞どの、この冬枯れに向ふと、毎年々々、鹿が荒れるので、マア、こちの商賣が出來るといふもの。

紀次　それ〳〵、此やうに根來山からかゝつて、荒川の百姓衆から、番人の鹿小屋。

長兵　この鹿番の小屋に、荒川から附けて置くは、どこから迷つて來たか女の狂人。

紀次　それに、小鳴子を引かせて、鹿追ひ番とは、錢いらずに好い思ひつきでござる。

長兵　シタガ、腐つても鯛ではない、窶れても女の事。

兩人　ほんに、可哀さうな事でござるなア。

ト鹿小屋の方を見ると、誂らへ文彌節のやうなる合ひ方にて、鹿小屋の菰垂れを上げて、おりん、以前の下女、少し窶れた拵らへ、杖を持ち出る。兩人、見て

ほんに、哀れを止めしこなた。

りん　あそこや爰に座します、此おきちが身の上。是齋の内よりお別れ申した、いとし殿御の、京のお客に離れ宿、けにや昔の下女にてあらば、鹿とも小屋とも知るまじきに

紀次 今は憂き目に荒川の、百姓衆に頼まれて、鹿追ふ小屋に只一人。

長兵 賤が手業の苦しみの、目さへ涙に肉薄く、泣いて焦れしこの狂人。鹿でも人でも構はずに、滅多無性に鳴子曳く。

りん 新作なつかし、ほうやれほ、お客戀しや、ほうやれほ、ほうやれ穂浪の薄原、駈け行く鹿の恨めしや。

ト泣いて思ひ入れ。

紀次 アレ、長兵衛どの、いつもの狂人が、晝でも構はず鹿を追ふ。コリヤ〱、女、面白く鹿を追へ。

長兵 戀しい男に逢はせてやらう。

りん あら心なの人々や、我れは思ひのあるゆゑに、戀しきとばかり歎くぞや。いつぞは逢うてと、書いて置いたるこの文。

ト懐より文を出し

京のお客へこの文あけて、どうぞ枕が交したい。それより外の樂しみは、この酒樽。

ト一升樽を取出し

一口飲んで面白う、鹿を追ふ、鳴子曳く。かも鹿、猪、山鯨。ころ煎りか吸ひ物か。牡丹紅葉、

いろ〳〵。

ト鼓の合ひ方にて、おりん、節を附けて語りながら、出鱈目に踊る。

長兵　コリヤ〳〵、その戀しき人は、此方の

兩人　ほうやれほ。それ〳〵、其方の、ほうやれほ。

ト兩人、手を叩き、おりんを弄る。おりん、追ひかけ廻る。てんつゝになり、向うより彌藤次、やつし、柴を背負ひ、出て來る。これを知らずに、おりん、彌藤次を捕へ

りん　ヤア、なつかしかつた〳〵。モシ、京のお客人樣。

ト彌藤次、悄りして

彌藤　これはしたり、わしはそんな者ぢやござらぬ。新米の山樵でござる。

りん　なんぢや、新作のやつし男ぢや。そんなら矢ッ張り、假の契りを

ト彌藤次に寄りそふゆゑ

彌藤　エヽ、知らぬわいの。

トおりんを突きとばす。

りん　エヽ、胴慾な人ぢやなう。ハアヽ。

ト泣き落し、伏してゐる。長兵衞、紀次兵衞。彌藤次を見て

長兵　ムウ、この荒川に見馴れぬ山樵。

兩人　どこから來たのだ。

彌藤　この程、他所より、紀州路への山稼ぎ。

紀次　イヽヤ、怪しい、見馴れぬ男。

長兵　山働らきの、仲間の見せしめ。

兩人　この鐵砲で

ト取卷くを、彌藤次、背負ひし柴を打ちつける。立廻り。山颪しにて、彌藤次、兩人を追ひこみ、行かうとする。鹿小屋より

九郎　山働らきどの、待たつしやれ。

彌藤　ヤ、なんと。

ト谺の合ひ方にて、小屋の内より九郎、出る。彌藤次、見て

この山樵に、待てといふは。

九郎　置いて行きやれ。

彌藤　置いて行けとは。
九郎　知れた事、洒手を。
彌藤　さては盜賊、山賊よな。
九郎　いかに山樵木樵でも、少しはあらう働らき代。又それ ばかりぢやァない、慥かに姿をやつせし男。
彌藤　この山樵、姿をやつせばなんとする。
九郎　都方より盜賊の、詮議なんどゝいふ者なら、邪魔になるゆゑ此方から、スッパリ殺らして

ト拔打ちに切りつける。彌藤次、斧を持つて立廻り、ちよつと鳴り物になり、よろしくあつて、彌藤次、懷より文を落す。九郎、拾ひ見て

瀨川采女へ、宇治の方より。

ト彌藤次、驚ろき

彌藤　それを。

ト引ッたくろ、立廻り。この時、おりん、起きあがり、眞中にて兩人を捕へ

りん　文とあるか。モシ、わしが京のお方へあけたいと、焦れて書いた色文。ドレ

ト文を取らうとする。兩人、やるまいと立廻り。おりん、ちよつと文を見ようとして

エヽ、腹の立つ。文も見られぬ、この逆上やう。

兩人　何を此奴が。

トおりんを突きのける。おりん、懷より以前の文を出して

りん　よし〳〵。戀しいお方へあげる文は、矢ッ張り爰にあつた。

九郎　この文、此方へ。

彌藤　そこ放すまいか。

九郎　エヽ、面倒な。

ト彌藤次の文を又引ッたくらうとする中に、おりん入る。この立廻りにて兩人、爭ひ、文と心得て、おりんの文を引ッたくる。おりん、悔りして

りん　その文を。

ト取らうとして、三人の立廻りにて、二通の文を爭ふ。風の音、トヒョにて、日覆より雁一羽、舞うて來て、彌藤次の文を浚つて空へ上がる。これにて三人、悔りして、また立廻り。おりん、尋ねる思ひ入れ。彌藤次、九郎を當て、持つたる文を見て

彌藤　ナニ〳〵……とても見初めし戀路にて、氣もとりのぼせし心根を……エヽ、こりや、どう狂人め

が嫌らしい文。すりや、大切なる宇治の御方の御書を、折しも雁の……ムウ。

ト空の雁をキツと見て

いつぞや聚樂の御所にて、紛失の御用金十萬兩を、岸田民部が惡事によつて、叛逆の軍用金を奪ひしと、讒言を以て、久次公を罪に落し、高野山に御身退き給ひしも、みな岸田が爲す業。その用金の盜賊を、瀨川釆女が引受けて、お家を追放、暫らく浪々の其うちに、十萬兩の御用金を償ひしゆゑ、宇治の方より御赦免の赦し文。斯く山樵と姿を變へしも、盜賊の五右衞門を詮議、又は釆女が行くへを尋ね、密かに入込むこの紀の路。この程、根來の寶塔に、深夜に聞ゆる琴の音塔の細工の彫り物たる、迦陵頻迦の奏する樂と、專ら噂あるゆゑに、合點ゆかずと忍びし今日、思ひがけなき邪魔あつて、取落したる大切の赦し文、何にもせよ、あの雁金の、跡を慕うて

トきつと思ひ入れ。この時、雁は空へ飛び去る。此うち九郎、心附き

九郎　その文、此方へ。

ト彌藤次へかゝる。立廻り。おりんも交るを突きのけ、九郎、文を持つて、右の酒樽を腰に附けて

この酒持つて、それ。

ト向うへ走り入る。彌藤次、思ひ入れあつて

彌藤　身共は今の雁の跡、いづくまでも。

ト山颪しにて、彌藤次、下座へ入る。おりん、起きあがり

りん　エヽ、胴慾な二人の男。人に恨みがあるものか、ないものか。憎くい二人。可愛いは京の客人。どうぞいとしい男さんに

ト下座にて

〽逢ひたさ見たさは飛び立つばかり、籠の鳥かや恨めしや。

さりとは、騙さんしたの。

〽ちよと〳〵逢ひたい事ぢやになァ。

トこの唄にて、おりん、浮かれ〳〵て、カケリになり、向うへ入る。チヨン〳〵にて、鹿小屋を引いて取る。音樂に琴唄をかぶせ、正面の黒幕を切つて落す。

本舞臺、眞中に二間の二重、舞臺前へ出して飾りつけ、兩柱、高欄とも惣朱塗りの組み物。彩色のおしらひ。前は隨分低き高欄造りの瓦屋根。眞中に九輪あつて、二重の寶塔。上の寶塔の道具、見附け金張り附き、佛畫の彩色よろしく、前通りに高欄、下は二重目の屋根、その下は霞で見切り、一面

見事に紅葉の梢ばかり見ゆる心。すべて紀州根來の寶塔の上の一重目に綾女、跳ら八の形にて、琴を調べてゐる。權六、五十日、廣袖の形にて、琴の唄の本を見て、煙草をのみながら、寢ころんでゐる。音樂、琴唄にて道具とまる。

ト日覆より月出る。權六、思ひ入れあつて

權六　綾女が今の唱歌は、何とやらぢやな。

綾女　朧月夜の內侍の髮、光る源氏の大將。

權六　ムウ、花の宴の夜、源氏の君、醉ひ心地に弘徽殿の、細殿に立ちより給ひ

綾女　內侍の君只一人、朧月夜に似たるものぞなきと口ずさみて

權六　此方へ來られし小袖を捕へ給ひて、源氏、深き夜の衾を知るも入る月の

綾女　朧氣ならぬ契りこそ思ふ。

權六　斯く詠みて抱き下ろして、戶を押立てられし心を云へり。

綾女　丁度いつぞや、わたしがお前に

權六　戀せし夜半を、思ひ出して

綾女　オヽ、嬉し。

ト權六に寄りそふ。

權六　それより筑紫の權六といふ事も

綾女　わたしが身の上も、互ひに知れて浪花を立退き

權六　人も心を附けぬ山家、根來の寶塔、この一重目を住居となして、夫婦の世帶。

綾女　人目を憚り、夜も更けて、塔の扉を開いての月の宴。

權六　酒も肴も調うて、器は名におふ根來椀。

ト側にある根來椀を出す。

綾女　酒の器も根來の湯つぎ。

ト同じく根來の湯つぎを出す。

權六　オヽ、一つ注ぎやれ。

ト始終琴入りの合ひ方にて、綾女、酒をつぐ思ひ入れ。

綾女　ほんに思へば今の身の

權六　不義の富貴は浮べる雲、霞と共に天井住ひ。これが筑紫の權六の一國一城。

綾女　筑紫といへば、この琴の、雲井響かし、星を亂し

權六　目に見えぬ鬼神さへも、耳を驚ろかし、哀れを催ふすその例し。コレ、綾女、其方は哀れを催ふして、故郷の大明が戀しいか。

綾女　なんのマア、あなたに心が引かされて

權六　ヤ。

綾女　風吹けば、沖津白浪龍田山、夜半にや君が獨り行くらん今の身の上。

權六　その白浪と、いへば浮名も龍田山。

綾女　唐土にては優しくも

權六　綠の林と賊の一名。すりや、この白浪と末かけて。

綾女　疑ひ深い。この琴の

ト琴を出して

〽長生殿の内には春秋をとめり。

權六　不老門の前には

ト空を見て

今宵最中の月の照り。ハテ、快き眺めぢやなア。

ト山颪し、鎖の音、シャリ〳〵として、切り穴より九郎、鎖に取りつき、酒樽を腰につけ、上がり來る。

九郎　申し、お頭。

權六　荒武者九郎、火急の知らせか。

九郎　されば候ふ、寶塔の上一重へ、通路の不自由。かねてお好みの御酒一樽。

權六　ヤア〳〵。

九郎　荒川村の野山の鹿番、狂女が持つてゐたこの酒を、奪ひ取つて參つてござる。

ト腰に附けたる一升樽を差出す。權六、受取り

權六　喰ひ醉ふには不自由な寶塔。もう酒も切れ目であつた。

九郎　まだ〳〵、それにつき、お頭へ、申さねばならぬ一大事。

權六　ナニ、一大事とは。

九郎　最前、荒川の鹿小屋にて、怪しい山樵に出會ひしが、何か詮議の忍びの者と見たゆゑに、ぶつちめんとなしたるに、その山樵が懐より、落したるはこの一通、心急きゆゑ讀みませねど、お頭の働らきの手蔓にならうと、その山樵と爭つて、奪ひ取つた怪しい書面。

權六　月あかりで讀んで見ろ。

ト右の一通を出し、見せ、九郎、讀む。

九郎　ナニ〳〵……とても見初めし戀路にて、心も亂れし心根を思ひやつて、何卒一夜の枕を御交し下さらば、嬉しうて〳〵、こんな嬉しが唐にもあらうか。

ト心得ぬ思ひ入れ。權六、驚ろき

權六　ナニ、これが密書か。

九郎　さては最前、狂女が持ちし文と取違へたか。いま〳〵しい。

トこの時トヒヨになり、以前の雁、文を咬へしまゝ日覆より下りる。三人、これを見て

綾女　アレ〳〵、月に遊べる雁金の

權六　文の言傳、蘇武が例し。

九郎　あの文こそ、取違へし文。

ト權六、思ひ入れあつて、手裏劍を打つ。これにて雁、權六の前へ落ちる。これを取つて

權六　過ぎし頃なる聚樂にて、思はず不義の

ト云はうとして

この御手蹟は、慥かに宇治どの。

九郎　しかも名宛は、瀬川采女。

權六　ヤ。

九郎　さては、頭は。

ト云ふを權六、手早く拔討ちに九郎を切る。誂らへの合ひ方。綾女、驚ろく。

權六　佛へ恐れ。綾女、血汐の穢れを拂へ。

綾女　アイ。

ト下の方へ來て、香を焚く。九郎、起きあがり

九郎　その一通を

トかゝる。又切りつけ

權六　荒武者九郎は云はゞ匹夫。口さがなきが破れの原。

ト止めを刺す。誂らへの鳴り物になり、チョンと一面に紫の幕落ちる。誂らへの三味線入り、禪のツトメやうなる鳴り物になり、知らせにつき、右の寶塔を、隨分靜かに引きあげろ。この庇の下に花の吊り枝、これに紅葉の梢、下は霞と淺黃幕附いてセリあげやうに段々と上がる。よき程に淺黃幕を切

つて落すと、二重舞臺は矢張り寶塔の下の所、二重目の體。正面に鼠木綿の帳を掛け、その前に机、花活け、佛器を直しあり、見附けは矢張り金張り附き。この塔の椽側に五右衛門、百日さらげ、鼠の廣袖、世話の六部にて、側に笈を置き、錫杖を杖に突き、眠りゐる。東西、紅葉の吊り枝。右の禪のツトメにて、道具とまる。五右衛門、目を見開き、思ひ入れあつて

五右　六十六國へ納經の、大乘妙典、この根來寺に行き暮れて、いま寶塔の下に、暫らくまどろむうちに、フツと目覺ます香のかをり。

　　ト香をきくこなしあつて

この香こそ、正に大明帝の御祕藏ありし、深契観の名香。この寶塔に薫るとは

　　ト上より滴る血汐を見て

心得ざるは生血の滴り。さては、この寶塔に住ひなす者。

　　ト思ひ入れあつて

聞き及んだる根來の寶塔。慥かに賊の棲家ならん。ハテ、心憎き事ぢやなァ。

　　トこの時、正面の戸帳の内にて

權六　この深更に物云ふは、廻國の修行者よな。

五右　ヤヽ、なんと。

權六　それへ參つて、一服のまうか。

ト時の鐘にて、戸帳の內より權六、出て來る。

五右　ハテ、合點のゆかぬ。この寶塔に安置の佛は、五智の如來。その佛前より出でたる男子は。

權六　心願の旨あつて、通夜の者。

五右　すりや、こなたが

權六　あまり凝つたる般若心經、廻國のこなたと見たゆゑ、誦しかけて、一服のまうと

五右　それで爰へ、通夜のこなたが

權六　六十六國の奇妙珍說。

五右　そんなら、一服のみながら

權六　互ひに話しを、しませうか。

トこれより三味線入り、谺の合ひ方にて、兩人、思ひ入れあつて

五右　マア、わしも六部の事なれば、日本國を歩きましたが、眞柴の天下一統に治まり、誠に草木も靡く時節。ハテ、久吉どのは、有り難い天下樣だ。

ト權六、こなしあつて

權六　イヽヤ、そりや六部どのゝ料簡違ひ。わしも諸國に、山稼ぎに歩きましたが、下々下郎より成り上がりの久吉、天下を治めたとはいふものゝ、誠に草木も靡かぬ時節だ。

五右　そりやァなぜに。

權六　ハテ、靡かねばこそ、盗賊のはびこり。

五右　ヤ。

權六　イヤサ、國に盗賊、家に鼠、いま石川五右衞門といふ、誠に大盗賊の帳本人。

ト五右衞門へ思ひ入れあつて

その盗賊のはびこるといふが、眞柴の天下の不德といふもの。

五右　イヤ、久吉どのゝ御威勢には、なか〳〵齒の立つ盗賊はない。

權六　その五右衞門は、武將家ばかりか大内へも、躍りこんだる大盗人。五右衞門どのが、久吉よりも頼もしいかと、わしやァ思つて居ますて。

五右　アノ、こなさんが、その五右衞門を

權六　いかにも。

五右　眞柴へ對して及ばぬ事だ。
權六　イヽヤ、盜賊でも本望達する。
　　　ト立ちあがる。
五右　ナニ五右衞門がはびこるとも、眞柴の威勢で召捕るワ。
權六　そりや、どうして。
五右　ちよつと、斯うして。
　　　ト權六へかゝる。立廻り。權六、振り拂ひ
權六　小癪な眞柴の詮議立て。
　　　ト兩人、ちよつと立廻りあつて
五右　その五右衞門より、筑紫の權六。
權六　ヤ。
　　　ト思ひ入れ。
五右　心盡しの今宵の通夜。塔はいづれも五智如來。せめて六部が、拜をとげて
　　　ト正面の戸帳の側へ行かうとする。權六、捕へて

權六　ハテサテ、五智如來より、愚智なこなたの拜み立て。

五右　それでも、六部の治むる妙典。

　　ト又行かうとする。立廻りにて五右衞門、權六、戸帳へ手をかけ、引きちぎる。内に綾女、唐子髷唐女の拵らへにて立つてゐる。五右衞門、悄りして

五右　これは。

　　ト三味線入りの靜かなる唐樂になる。

權六　この根來寺の寶塔に、安置は五智の如來なれど、無體に拜をなさんとは狼藉。熊野權現の天童子が、目前しるしを、よつく見よ。

五右　イヤ、心得ぬ權現の天童子、安藝守清盛は、嚴島明神を戀ひて利生を受くる。建長寺の何某は、吉祥天の夢想ある。いま四國の天童子へ

　　トつか〳〵と行つて、綾女の手を取る。

權六　こりや狼藉な。何とする。

五右　ハテ、心得ぬこの手の筋。自然と顯はす乾爲天、乾坤震巽離艮兌乾の、四神の備はり。殊に五本の指に、五行を巻きたる乾爲天。正に王位のこの手相。慥かに倭國の女に非ず。ハヽア、恐れあ

り。

權六　ヤ、なんと。

綾女　合點のゆかぬ。自らを、さほど敬ひかしづくは。

五右　隱しめさるな、こなたこそ、明朝の姫君、芙蓉皇女でござらうがや。

綾女　サア、それは。

五右　深契觀の香の薫り。

綾女　すりや、自らがくゆらせし、あの香の薫りにて

權六　それと知つたるこなたこそ

五右　いかにも、明朝の臣下の末なる、吳才官が落し胤。この倭朝にて出生なしたる、石川五右衞門。

權六　さてこそ、それと察せしめゐ、わざと眞柴をさみせしが

五右　この五右衞門は、眞柴を褒めて世を忍ぶ。最前これへ血汐の滴り。この寶塔の階上に、人の住ふと察したは、筑紫の權六、ありと聞きしゆゐ。

權六　すりや、某を

五右　なんと違ひはあるまいが。

權六　アノ、こなたが五右衞門。

五右　其方が權六。

權六　いかにも。筑紫の權六といふ、ずんど初心の小泥坊サ。

トこなしあつて、ヂツとなつてゐる。

綾女　雲に衣裳を思ひ、花に頭を思ふ。三千里彼方なる、唐土にて生れし身が、うつろ舟にて吹き流され、この日の本の、若狹の國に漂ひ着き、不思議にも吳才官に巡り逢ひ、娘よ父よと世を忍び、養育の其うちに、思ひもよらぬ戀の道。これなる筑紫の權六さまと、契りを籠めて、この所に、忍び隱れて睦まじう、暮らす二人が仲なれば、必らず叱つてたもんなや。

五右　先づは芙蓉皇女の尊顏を拜して、身の喜び。眞柴久吉公、冬より肥前の國に滯陣あつて、三韓と數度の戰ひ。河湯關、酒泉縣の要害は、殘らず切り取れども、未だ大明へ入る事叶はず。小西加藤も長の滯陣。然るに先年、明朝に於て、私しの爭亂、その折から、大明王は御落命。こなた樣には流浪によつて、この日の本に漂着と聞き及ぶ。いま久吉が目ざすは大明。一刻も早く軍勢を集め、密かに大明國へ歸らせ給ひ、恨みある眞柴の奴ばら、討ち滅ぼさん大望には、明朝の御胤たる、こなた樣の御手形なければ、軍勢催促相叶はず。元より御手の相は、類稀れなる皇女の筋。

御行くへを尋ぬるうち、思はずも巡り逢つたる我が本懐。イザ〳〵姫君、歸唐の御用意、あられませう。

綾女　すりや、どうあつても。

五右　いかにも。

權六　誠に、皇女は故鄕へ、歸るめでたき門出で。

綾女　して、權六さまには。

權六　倭國の生れゆゑ、渡唐は叶はぬ。

綾女　エヽ。

ト驚ろき、思ひ入れあつて

唐土の、山の彼方に立つ雲は、爰に焚く火の煙りなるらん。

ト愁ひのこなし。

五右　其お嘆きは。

綾女　權六さまに、お別れ申すが悲しいわいなう。

五右　御尤もなる事なれど、偕老同穴の御語らひをなせし御仲、權六どの諸共に、急ぎ御歸唐あられま

せう。

綾女　すりや、權六さまと共々に。

權六　イヤ、この權六は、日本の神祇を以て、誓ひなしたる二世の緣。道ならねども誓詞を破り、皇女と緣を斷ち切る某。

五右　ヤ、・なんと。

綾女　エヽ、お胴慾でござります。

ト綾女、口惜しき思ひ入れにて

さては最前の便りの文にて、また惡性のお心が。この日の本の女子に心引かされて、それでお前は行かれませぬか。

ト合ひ方になり

權六　何を女の、知らぬ事だワ。

綾女　イエ〳〵、それはつれないわいな。最前の文より、お心の變りしか。誓ひを破つて行かれぬとはそりや、あんまりぢや〳〵。エヽ、聞えませぬ。

權六　是非にとあれば、この上は、唐土へ行かれぬ緣の切れ目。

ト一腰を拔いて

我が手にかけても相叶はぬ。

綾女　すりや、どうあつても唐土へは。

權六　いかにも。

綾女　エヽ、恨めしい。

ト綾女、拔き身をグッと摑む。兩人、愕りして

權六　ヤア〳〵、白刃を摑んで

トわざと刀を引く。綾女の手、血だらけになる。

五右　すりや、姫君には早まつて、白刃を摑んで……オヽヽ。

權六　これでは皇女の掌

五右　五行四神の手相も切れ果て、手形の役には相立たぬか。チエヽ、口惜しい。

ト無念のこなし。綾女、苦しみ、我が手を見て驚ろき

綾女　オヽ、自らが兩手は、マア、此やうに……こりやマアどうせう、どうせうぞいなう。

ト權六、綾女をヂツと見て思ひ入れ。

五右　かねて軍勢催促に、用ゆるところの姫君の御手形、斯く掌の切れし上は、最早望みも破れし五右衛門。これといふのも筑紫の權六、われに焦れし姫君の、不運であつたか。おのれ、權六。

ト仕込みを抜かうとする。權六、留めて

權六　コリヤ、待て五右衛門。皇女の戀は戀の愛着、兩手の筋の切れたるも、いはゞ皇女の自業自得。たとへ手相の破れなきとて、この權六を、殺す心であらうがや。

五右　何が、なんと。

權六　其方が父たる呉才官が、敵といふはこの權六、それを包みて、無念を堪えしも、皇女を故なく伴ひて、歸唐なしての道すがら、某を討つて捨つると睨んだゆゑ、唐土へ行くを聞入れず、種々と心を筑紫の權六、石川どのゝ心任せにや、罷りならぬ。ムヽ、ハヽヽヽヽ。

五右　すりや、我が父たる呉才官が、敵といふ事包みしに、それと疾より知つたるか。

權六　おんでもない事。

五右　ムウ。

ト思ひ入れ。權六、こなしあつて

權六　さはいへ、深手の皇女の疵、とても存命思ひもよらず。

綾女　エヽ。

權六　長らへ居られぬ身は冥土へ、即ち一蓮托生の、二世の契りは違へぬ某。

ト綾女、これを聞いて

綾女　すりや、あの世では女夫になつて

權六　いかにも。

綾女　嬉しうござんす。モシ

ト權六に取りつく。はずみに權六、懐より最前の文を落す。綾女、見て

文の宛名は、瀬川采女とあるからは、そんならお前は、自らとは、アノ、敵同士であつたかいなア。

五右　さては汝は。

ト五右衛門、思ひ入れ。權六、綾女の首をポンと切る。五右衛門、キツとなつて

これまで無念を堪えしも、姫君を伴はん爲め。それに何ぞや、姫君を討ちしといひ、親呉才官が敵の權六。覺期。

ト錫杖を拔いて切りつける。權六、立廻つて

權六　敵と呼ばれて刃向ひ立ては、かねての覺悟。とはいへ武士の義理の道、マヽ、とつくりと聞いて置かれい。

ト五右衛門へヒラリと刀を見せる。五右衛門、思ひ入れ。

ト直ぐにその刀を差しつける。五右衛門「ムウ」と思ひ入れ。また禪のツトメになり、キツとこなしあつて

いかにも五右衛門、某、筑紫の權六と名乘り、盜賊とはなつたるも、手段の一つ。誠は眞柴大領久吉公の近臣、瀬川采女といひし者。

五右　さてこそなア。

權六　さる頃久吉公、三韓の御征伐にて御發向。朝鮮國には、小西加藤の輩、みな先陣の武功と聞く。我れ龍造寺の手にあつて、都にとゞまり、武士の道には不本意と、しばし途方に呉竹の、伏見の御所にて日毎の忠勤、先達て聚樂の御所へ盜賊入りて、千鳥の香爐紛失。その夜同じく御寶藏の御用金十萬兩と、三韓地理の一卷紛失。それゆゑ讒者の計らひにて、地理の一卷御用金は、久次公の業なりと、かねて御謀叛の思し召し、あるが如きの讒言。それと知つたるこの采女。一卷といひ、用金の盜賊と、名乘つて出て惡名を流さんと、重なる科の三つ瀬川、好色者の采女が幸ひ

身に引受けてお家を追放。某、つく〴〵思ふには、我が君大領の武威強きによつて、いま近江に武智柴田の殘黨、山林幽谷に身をひそめ、折を窺ひ旗揚げの企て。就中、明朝の臣下吳才官、この地に渡つて逆意と聞く。詮議なして功を立てんと、山賊野武士に徒黨を結び、筑紫の權六と替へ名して、或る時は海に漂ひ、又或る時は町家に交り、龍と伸び、蚯蚓と縮み、數多金銀を奪ひしは、道ならねども、十萬兩の用金を償はんため。この程、津の國、住吉の豪家たる、小西是齋へ身を寄せて、計略をめぐらすうち、娘が戀慕は渡りに船。願ひを叶へ、財寶の、在所をとくと知つたるゆゑ、合圖を定めて奪ひし折から、主が詞に大明の、姬君と聞いて悔り。まつた皇女は某が、愛着にほだされ慕ふを、見るに忍びず伴うて、この根來寺へ引籠りしが、善惡によつて顯はるゝの道理。然るに最前思はずも、皇女を尋ね來りし五右衞門、皇女を伴ひ、歸唐なし、反逆の企てあれば、某も討つて捨つると知つたるゆゑ、先づ斯く計らふこの場の仕儀。其方が企みし本望は、豕の嘴か佛法僧、住ふは高野の久次公、御身替りとはかねての覺悟。明朝は今日本の敵、その血筋たる芙蓉めと、暫らく枕交せし采女は、生きながらの畜生道と覺悟して、久次公に成り代り、最期に及ばゞ、都三條の瑞泉寺に、畜生塚と末までも、殘し置きたき武士の誡め。また最前手に入りし、この文こそ、宇治どのゝ御手蹟。久次公に成り代り、盜賊の惡名を引請けし

忠義を感じて赦し文。十萬兩の償ひ金の、取次ぎなせしは古朋輩、早野彌藤次どの。さすれば文と、その取次ぎを、手下の者の手に入つたりと、我れへの訴へ。いま本心を明かす上は、二世と誓ひし皇女の命討つたるも、武士の忠義、義心の樣子の一通り。世にも名高き石川五右衞門、盗賊ながらも義理の云ひ譯。なんと、その身に堪えたか。

五右　サア、それは。

トぢり〳〵と附け廻り、キツとなる。

權六　サア

兩人　サア〳〵

五右　ムウ。

トロ惜しき思ひ入れ。

權六　とはいへ忠義といひながら、暫らくも賊と樣を替へ、眞柴の家へ歸參がならうか。その云ひ譯はまツこの通り。

ト刀を腹へ突ッ込む。竹笛入りの合ひ方になり、下の方より彌藤次出かゝり

彌藤　天晴れ忠義の瀨川釆女。

權六　すりや、推量の通り、彌藤次どのには。

彌藤　この度、宇治どのゝお使ひにて、姿を替へて入込みしに、最前、道にて狼藉あつて、雁の翼に吹き散る文。

權六　さては雁の便りにて、我が手に入つたる宇治どのゝ赦し文。それゆゑにこそ、釆女が最期。

彌藤　とくと見屆け、この由注進。

權六　すりや、久次公の

彌藤　かねての忠義に今日只今、御身替りのお役に立てば、これを冥土の土產として、未來成佛。

權六　エヽ、忝い。

トぢつと思ひ入れ。五右衞門、無念のこなし。

五右　エヽ、思へば〳〵、姫君といひ、父の仇、嬲り殺しも飽きたらぬ。瀨川釆女、うぬを。

トきつとなる。

彌藤　おのれ五右衞門。

ト行かうとするを、權六とめて

權六　皇女が緣に、何卒この場を。

彌藤　こなたに免じて。

五右　せめて仁義は。

ト彌藤次、又キッとなるを

權六　コレ。

五右　早くくたばれ。

ト仕込みを振りあげる。チョンと木の頭、權六、首さし伸べる。彌藤次、思ひ入れ。この途端、よろしく、ひやうし

トとつくり幕引きつけると、「エイ」と首を討ち立てる。これにて打込み。

幕

第二番目　　浦辻隱れ家の場

役名――木曾川彌九郎實ハ鈴木田隼人照光。小鮒の源五郎實ハ岩木當馬之丞。間者、蓮八。瀧川の父、三ツ五郎兵衞。一子、五郎市。五右衞門女房おりつ實ハ瀧川。浪人、浦辻良助實ハ盜賊石川五右衞門。

本舞臺、三間の間、正面、二重舞臺、塗り骨障子。向う茶壁、納戸口。下手に寒竹の藪。誂らへの門口。すべて南都大佛前、浦辻隠れ家の體。てんつゝに白囃子をあしらひ、この鳴り物にて幕明く。ト門弟二人、やつしの形にて、五郎市を相手に竹刀打ちをしてゐる。門口に伊勢參り。人足の運八、立ちかゝり、ワヤ〳〵云つてゐる。

伊勢　爰の内の子だ〳〵。返して下さい〳〵。

運八　ハテサテ、靜かに云へ。おれが取返してやるワ。

ト喚く。内にては五郎市、兩人をしたゝかに打つ。兩人、やう〳〵起きあがつて

兩人　アイタヽヽヽ。

門一　成る程、先生の仕込みほどあつて、この市松どのは、餘ッぽど手利きだわえ。

門二　それ〳〵、なんぼこの頃、弟子入りをしたおいらでも、小さい子にぶたれるとは、いゝ業晒しだ。

五市　サア、小父樣、もう一度立合うて見さつしやれぬか。

兩人　アヽ、もう〳〵、御免だ〳〵。

伊勢　コレ〳〵、どうさつしやる〳〵。伊勢參りの物を取つてもよいか。返さつしやいな〳〵。

兩人　なんだ、この拔け參りめ。われが物を誰れが取つた。

伊勢　ハテ、あの子が、おれが買つた墨筆を取つたから、取返しに來たのだ。返さつしやい〳〵。
五市　イヤ〳〵、わしや取つた覺えはない。知らぬ〳〵。
門一　それ見やァがれ、この子は知らぬぞ。云ひかけひろぐ拔け參りめ。
門二　ぶちのめすがよい。この餓鬼め。

ト兩人して伊勢參りを捕へ、くらはす。運八、これを留めて

運八　これサ〳〵、お前方も、餓鬼を捕へて、大概にしなさいな。今この拔け參りが、猿澤の淵で、道案内を賴むから、わしが話しをしてゐるうちに、土產に買つた油煙の墨、皆くれに見えないワ。側に遊んでゐたは、この子ばかり。そこで取返しに來たのだ。出してやらつしやい〳〵。
門一　アヽ、なんと云ふ。この子が、伊勢參りの土產物を取つたといふのか。
運八　ハテ、取つたから、取返しに來たのだがな。
五市　イヤ〳〵、おりや取つた覺えはない。云ひかけすると、きかぬ〳〵。
運八　イヤハヤ、小ほけな形をして、よく白を切る小僧だ。取つた事は、キツと見て來たわえ。出さないと、懷を詮議して

ト五郎市を捕へる。門弟兩人、捨ぜりふにて留める。この時、五郎市が內懷より、墨筆落ちる。

伊勢　それ〳〵、それが、おれがのだ〳〵。

運八　これ見ろ。これほど取つて置いて。おッかねえ小僧だ。見せしめに頭を

トぶちにかゝる。よき時分に五右衛門、浪人の形にて、莨盆を提げ、出かゝりゐて、この時、ツカツカと出て、運八を捕へ

五右　コリヤ、其方は、身が悴を、なんと致す。

運八　アヽ、そんならこなたが、爰の内の

五右　浦辻良助と申す者。只今承れば、身が悴が、何やら其方達の品を

運八　サア、まんざらな事は云ひませぬ。この伊勢参りの土産物を、あの小さいのが

五右　悪てんがうか悪戯に、やゝともすれば、何の益なき品々を、断わりなしに持ち参るも、親の血筋を

ト五郎市を見て、思ひ入れあつて

こりや、なんであらう。身が只今、墨や筆を調へてやつたが、それを、おぬし達が見たゆゑに

運八　エ。

五右　召仕とてもない浪人の、我が子に云ひつけ、奈良の町へ、墨筆を調へに遣はしたが、大方それの

間違ひであらうぞ。
運八 モシ〳〵、間違ひだといつて、可哀さうに、あの伊勢參りの土產物を
五右 ハテ、そりや此方で存ぜぬ事ぢやが、失うて難儀とあらば、よいワ、あの拔け參りへ、合力を致してやらう。コリヤ、爰へ來い。
伊勢 ハイ〳〵。
五右 コリヤ、身が大神宮への供へと存じ、又は其方が草鞋錢に遣はす程に、失うた品を、これにて買つて、早う行け〳〵。
ト莨盆の抽出しより金子一兩出して、伊勢參りに渡す。
伊勢 これは有り難うござります。百か二百の土產物を取られて、此お金を下さるとは、エヽ、有り難うござりまする。
運八 アヽ、伊勢參りが土產物を、失うたを氣の毒と、小判で一兩。さて〳〵、大氣な御浪人だ。どうでもこりやァ、噂の通り
五右 なんと致した。
運八 イヤハヤ、大氣な旦那樣だ。モシ、お小さいの、惡口を申しましたは、私しが不調法でござりま

す。あなたのお子様とは存じませいで、只今のやうに、これはハヤ、御免なされまし。

門一　先生のお內へ、云ひかけに來たばかりに

門二　伊勢參りは、仕合せをしたな。

五右　コリヤ〳〵、其方は、この近所の者か。

運八　イエ〳〵、私しは京都の者でござりまするが、この度、世尊寺中納言さまが、この奈良の春日へござると聞きまして、人足も要りませうと、そこでわざ〳〵、參つたのでござりまする。

五右　すりや、世尊寺中納言には、いよ〳〵當所の、春日の社へ。

運八　明日は未明に、ござるとの事サ。

五右　それぞ幸ひ

運八　エ。

五右　オヽ、これを緣に、話しに來やれ。

運八　ハイ〳〵、これは好い御挨拶でござりまする。お首尾のよいうち、私しは歸りませう……コレ拔け參り、ちつと用がある。今の金を見せろ。

伊勢　合點だ〳〵。貴樣にも酒手を進ぜうよ。

ト云ひ放しにして、一散に向うへ入る。

運八　コレサ〳〵、抜け参り、案内はいらないか。コレエヽ〳〵、……この抜け参りめ、おれに無駄骨を折らせたな。

トてんつゝになり、向うへ足早にかゝる。揚げ幕より五郎兵衛、菅笠、一本差し、中抜き草履にて、息せきと出て來り、花道にて行きあひ

五郎　モシ〳〵、運八さまぢやござりませぬか。

運八　オヽ、おぬしは三二五郎兵衛か。

五郎　よい所で、お目にかゝりました。

運八　おぬしは疾に、この奈良へと聞いたゆゑ、先へ参つたこの運八。コレ、岸田さまより頼みの御狀

ト懐より狀を出して渡す。五郎兵衛、取つて

五郎　して、浦辻が住家と申すは

運八　向うの彼の家。

五郎　實否を糺すは今宵のうち。モシ

ト囁く。運八、呑みこみ

運八　合點だ。何かは後に。

五郎　待つてゐますぞ。

運八　ドレ、今の拔け參りを

トてんつゝになり、運八、向うへ入る。五郎兵衞、門口へ來り

五郎　ハイ、御免なされませ。浦辻良助さまは、あなたでござりまするかな。

五右　いかにも、これでござる。どれからぢや、サヽ、入らつしやりませ。

五郎　左樣なら、御免なされませ。

ト内へ入る。五右衞門、見て

五右　身共が良助でござるが、尋ねてござつた御老人。

五郎　これはしたり、良助さま、私しは、あの瀧川が親の

五右　オヽ、五郎兵衞どのとやらかな。

五郎　左樣でござりまする。

五右　ハテサテ、思ひがけなう……アヽイヤ、よう尋ねてござつたの。

ト思ひ入れあり

コレ、門弟の衆、この仁には、ちと身共、密々に内談もござれば、いづれもには奥へござつて、
稽古を致さるゝがよいて。
兩人 左やう致しませう。
門一 然らば先生、奥で稽古を致しませう。
五右 ゆるりと致さるゝがよい。
兩人 お客、これに。
ト合ひ方になり、兩人、奥へ入る。
五右 コリヤ、悴、あなたへお茶をあげぬか。
五市 アイ〳〵。
ト五郎市、茶を汲んでくる。
五郎 アイヤ、お構ひなされますな。
五市 アイ、小父様、お茶あがりませ。
五郎 これは〳〵、ハテサテ、溫なしい坊樣ぢや。此お子は良助さま、あなたの
五右 相果てました先妻の、腹に出來ました悴でござる。

五郎　エヽ、此お子が……コレ〳〵、お名は何と云ひまするな。

五市　アイ、五郎市

ト云はうとする。

五右　アヽコレ……その悴は、市松と申しまする。

五郎　エヽ、此お子の名は市松……ハテサテ、よいお子でござりまする。

ト懷より五右衞門親子の繪姿をソッと出して、見比べる思ひ入れあつて

モシ、良助さま、いつぞや都島原で、娘瀧川を、連れてお退きなさるゝも、こりやハヤ、世間にまゝある事とはいふものゝ、廓は格別、この親仁へは內證で

五右　サ、これまでお知らせ申さぬは、身共が誤まり。この儀は拙者が、幾重にもお詫び申さねばなりませぬ。貴公に逢ふも、面目もない仕合せでござるて。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより瀧川、女房の拵らへにて、五合入りの樽を持ち、片手にて座頭の杖を引いて出てくる。隼人、田舍座頭、菅笠、草鞋、旅形、投げ頭巾にて、一腰を三味線と見せ小風呂敷に包み、これを脊負ひ、瀧川に杖を引かれ、出て來り、花道にて

隼人　モシ〳〵、おかみ樣え。あなた樣のお宅は、もう僅かでござりまするかな。

瀧川　ハテ、向うが此方の內ぢやわいなア。

隼人　エヽ、向うの內でござりまするかえ。アヽ、そんならモウ、僅だやら、餘計だやら、目の無い私し。併し、どうやらツイ向うの所爲か、お前樣のお內の匂ひが致しまするて。

瀧川　ほんに、お前は氣輕な、よい座頭さんぢや。此方の旦那どのが、いかう肩がつかへたと云はしやんすゆゑ、按摩さんを尋ねに出た所へ、ようマアござんしたなう。

隼人　ハイ〳〵、私しは旅がけの座頭でござりますが、宿賃の工面に、隨分療治も致しまするて。その代り、後で、按摩宿を敎へて下さりませ。

瀧川　合點ぢやわいなア。サア、來なんせ。

ト兩人、門口へ來り

モシ、旦那どのえ、座頭さんを連れて來たぞえ。

隼人　ハイ〳〵、御免なされませ。

ト內へ入り、草鞋を脫ぐ。

五右　コリヤ〳〵、女房、療治どころではない。都から、其方が親の五郞兵衞どのが

瀧川　エ、アノ、養ひ親の……父さん、お目にかゝるも、申し譯ないこの身の誤まり。堪忍して下さん

せえ。

ト面目なき思ひ入れ。

五郎　コリヤ、娘、瀧川、わりや息災で居をつたかい。コレ

ト瀧川の側へ寄つて

いつぞや廓を駈落ちした、その日より、この親仁へも、島原より疑ひかゝつた。とはいふものゝ知らぬが定ゆゑ、云ひ抜けてしまうたれど、コレ、娘、良助さまは客人の事、わしとは互ひに知らぬ同士、便りなうても恨みはせぬが、三つ四つから育てあげ、四年が間育んで、末はおのれにかゝらうと、樂しんでゐる親を捨て、逃げ走りも……サヽ、まゝある事とはいふものゝ、せめて落ちついてゐる所なと、狀の便りにしたというて

瀧川　サ、それも存じて居りまするが、常から物書く事は出來憎いお前、文をあげても、外を頼まにやならぬ父さん、それでは却つて、わたしら二人が隱れ家を、お前がそれと仰しやらいでも、他人の口から

五郎　成る程。尤も、目はあつても明き盲目。

隼人　これは不作法。側に座頭を置きながら、明き盲目とは、サテ、慇懃な御挨拶。

五郎　ほんに、座頭どのが居さしつたに、明き盲目ゆゑ、見附けなんだ。
隼人　ハテ、盲目に劣つた旦那だわえ。ハヽヽヽヽ。
五右　アヽ、座頭どのが來てか。
瀧川　お前が、肩が張つたと云はしやんしたゆゑ、旅がけの座頭さんを、同道して來たけれど、久しぶりの、父さんのお出でゆゑ。
五郎　これはしたり、おれへの遠慮はいらぬもの。肩が張つてござるなら、コレ、良助さま、わしに構はず、療治をしてもらはつしやりませ。
五右　ぢやと申して、あまり不躾。
瀧川　ハテ、父さんは心安いほどに、ちやつと揉んでもらひなさんせ。
五右　然らば舅どの、御免を受けて
五郎　サアサア、療治なされませせサ。
瀧川　サ、座頭さん、爰へござんせ。
隼人　ハイハイ、ドリヤ、お療治を致しませうか。

ト探り寄つて、五右衞門が肩を見て

これは旦那、いかう張つて居りますぞえ……モシ、旦那樣、私しは大阪に居りますろうち、國から狀が參りましたが、只今あなたの仰しやるやうなもので、私しは明き盲目と違ひ、正眞の明かず盲目。どうで人樣を、お賴み申さねばならぬ盲目。モシ、この狀を、御覽じて下さりませ。

ト懷より狀を出し、五右衞門へ賴む。

五右　ドレ、讀んで進ぜうか。

ト封を切り、讀む事。隼人、肩を揉む。

五郎　わが身も知つてゐやる、わしが煩らひ。あそこや爰に不義理な金、アヽ、どうしたら濟まされうと、思案に落ちぬ最中へ、斯う〳〵した借り金に、請けにさへ立つてくれゝば、その禮金はこれ程と、拵らへ事とも知らばこそ、惡者どもの仕事にかゝり、印形据ゑたその後に、根が僞はりの仕事ゆゑ、金受取ると其まゝに、行くへの知れぬ惡者ども。殘つた者はおれ一人。金も取らぬその上に、大枚な金の請け印。これが誠に身の災難。アヽ、どうしたらよからうと、とつおひつの思案のうち、われが事に氣がついて、どうぞ話して見ようかと、在所を尋ねて今日が日まで、金の祟りの來ぬといふは、どうも合點の

瀧川　サ、それもわたしが聞いたゆゑ、お前には沙汰なしに、主に願うて、その金拵らへ、お前の判を

抜いたのも

五右　アヽコレ

ト思ひ入れ。

五郎　すりや、その金は

ト思ひ入れ。

エヽ、忝うござる。もう〳〵〳〵、一生、五郎兵衞、恩に着まする。

瀧川　サ、それ程までに頼もしい良助どの、今までお前に逢はしやんせねど、蔭ながら舅と思うて居やしやんす、主の氣性。義理にも女房にならないではと、廓を抜けて、わたしが駈落ち。この奈良の町へ來て、近所の衆へ劍術柔術の稽古やら、好きな茶の湯の指南。何をいうても都と違ひ、やう〳〵親子三人の

ト挨拶のうち、五郎市、そろ〳〵と五郎兵衞が側へ寄り、置いたる紙入れを取りたき思ひ入れ。五右衞門、狀を讀みしまひ

五右　コレ、座頭どの、この文言は一通り、國許に別條ないといふ知らせ。さして用事も書いてないて

隼人　それは有り難うござりまする。

五右　この狀の文言では、こなたの生れは

隼人　ハイ、私しは、關東者でござりまするが、鍼や按摩の修行がてらに、京大阪に足を留め、これからそろ〳〵、高野山へ參りませうと、目も無い癖に、杖を力に山坂道を、この大和路へ、突入りましたて。

五右　ハテサテ、それは氣の毒な事ぢやの。して、もう國へ歸りがけか。

隼人　イエ〳〵、道連れさへござりますれば、長崎はおろか、或ひは天竺、唐、韃靼、朝鮮國へも

五右　アノ、お坊が

隼人　ハイ、盲目の癖に、とんだ座頭サ。

ト袂より一卷を出し、ソツと五右衞門が懷へ入れる。五右衞門、この手を捕へる。五郎市、この時、五郎兵衞が紙入れを取らうとする。この手を捕へる事。兩方途端、一度に思ひ入れあつて

五郎　これサ、この子は何をする。

瀧川　こりや、市松が、また他人さんのお道具を、やゝともすると

五右　ヤ。

ト思ひ入れ。瀧川、もぎ取る。


おまつ
岩井半四郎

子供心の市松は、お客の道具と辨まへず、悪い病のその中に、それと鑁りし按摩取り。何か身共が懐中へ

トそつと一卷を見る事あつて

こりやコレ地理の

瀧川　エ。

隼人　ちりけには、お灸がござりますかえ。

五右　三里を除けて

隼人　お腰のまはりを

五右　お客へ不躾。勝手へ參つて

隼人　下のお療治。

五郎　ハテサテ怖い。すんでの事に。

ト紙入れを懐へ入れる。

瀧川　悪いたづらも時による。

ト煙管を振りあげる。

五郎　これサ、子供を仰山な。

五右　お客は、これに。

五郎　良助さま。

隼人　旦那、斯う参りますかえ。

ト唄になり、五右衛門は隼人の手を引き、五郎市附いて暖簾口へ入る。あと合ひ方。

瀧川　成る程、生さぬ仲なるあの市松。産れ附いたるあの病。アヽ、末々成人した上で

五郎　ハテ、そりや案じるより産むが易いと、おぬしが捨て子のその砌り、守り袋の書附けを、近所の衆に讀んでもらへば、庚申の夜に誕生の女子とばかり、添へてあつたは、千疋猿の割り笄、誠の親の證據にと、渡して置いたが、あの小柄は

瀧川　夫に預けて、大事に持つて居りまする。庚申の夜に誕生は、世上の人の嫌ふ産れ。

五郎　サ、その日に産れたわれでさへ、七つの年まで育てたが、惡根性の無い産れ。放し鳥の五郎兵衛が、娘ぢやゆゑに小雀と、女に稀れな異名を取り、養ひ親の目を掠め、都を逃げて良助と

瀧川　忍び暮らしに添うてゐるも、今もお前に、あらはにこそは云はねども、島原に勤めのうち、お前の無心も度重なり、親方さんへ内證で、年季を書きいれ、借金して、貢いであげるその金の催促

通うてござんす良助さまを、此方からお頼み申して、廓を駈落ち。

五郎 そんなら、せびつた無心の金も、皆あの良助さまが續けた金で、この親を救うてくれたのか。アア、さうとは知らず今日までも、その譯知らぬゆゑ、この五郎兵衞、大恩になつた良助さま、連れて退くと云はれたら、よもや否とも云はれまい。シタガ、老人の後生の種になるかしらぬが、ちつと大金になる事がある。コレ、娘、われにちつと、この繪を見せて。

ト五右衞門親子の繪姿を出し

瀧川、あの良助さまは、河内の國の人ぢやないか。

瀧川 どうござんすやら。

五郎 ハテ、知らぬか。わが身、知つて居さうなものぢやが。コレ、あの良助どのと、先妻の子の市松とやらとが、この繪姿に、よう似たぢやないか。

瀧川「河内の國の盗賊、石川五右衞門、倅五郎市、人相書。」

ト讀む。

五郎 なんと、この繪に、よう似た良助親子。おれが爲には、大恩受けた人なれば、この繪姿によう似てある程に、麁末にならぬ。役に立たぬ話しぢやが、この繪姿の五右衞門夫婦が、岩木兵部の屋

男まさりな生れつき。これも大方、女房の親が、その五右衛門が女房は、敷へ忍び、虜にしたる五郎市を、奪ひ取つたといふ噂。その五右衛門の恩になつたと、いふやうな事もあらうと思うて見れば、身につまされて、ナ、娘、必らず亭主良助どのゝ、恩を寢た間も忘るゝな。

ト裏問ひかけて思ひ入れ。瀧川、こなしあつて

瀧川　義理あるお前の教訓なれど、親に情をかけようとも、よし大恩になればとて、お尋ね者の女房に、一日片時も、どうマアなつて居られませうぞいなア。

五郎　すりや、アノ、われは、萬々一、あの良助に實名あらば

瀧川　無理暇とつて、外へ縁附き、榮耀榮華が

五郎　アヽ、それでこそ五郎兵衛の

ト云はうとして

エヽ、情無しに産れたなア。

瀧川　父さん、お前、お燗をつけてあげうかえ。

五郎　そりやよからう。燗の出來るうち、爰でゆつくり寢ころばうかえ。

ト横になる。

瀧川　お前、奥へ來なさんせいなア。

五郎　イヤ〳〵、良助どのゝ前では、寢そべるも氣の毒。矢ッ張り爰が

瀧川　そんなら父さん。

五郎　娘。

瀧川　ドレ、燗つけて來やんせうか。

ト唄になり、酒を提げて奥へ入る。直ぐに暮れ六ツの鐘。向うより運八、ウソ〳〵と出て來り

運八　最前逢つた五郎兵衛め、途中といひ、何かの仔細

ト内を窺ふ。此うち合ひ方。

コレ〳〵、五郎兵衛々々々々。

ト門口にて招く。五郎兵衛、呑みこみ、ツッと出て

五郎　運八さまか。最前は途中と申し、何かの遠慮。して、岸田さまより、仰せ越されし御用はナ。

運八　卽ち御用は、渡したあの御狀、あれに詳しく記してあるワ。

五郎　すりや、此お手紙に。

ト紙入れより狀を出し、思ひ入れあつて

然らば、これに御用が書いてござりまするか。

ト この時、奥より門弟兩人、出て來り

門一　我れ〳〵とても岸田どのより

門二　五右衛門詮議の

兩人　間者の兩人。

運八　卽ち委細はその御狀。

五郎　サ、御狀とは仰しやれど、何を申すも私しは、皆目の無筆でござりまする。

門一　ハテサテ、それは不自由な產れ。

運八　然らば身共が、讀んで聞かさう。

五郎　お賴み申しまする。

ト 運八、狀の封を切り

運八　アヽ、おれにも讀めればいゝが。

ト 狀を開き

なんだ……紙面を以て申し越し候ふ、先達て其方より訴へし通り、浪人浦辻良助こと、五右衛門

に極まらば、騙しよつて親子とも召捕り候ふやう、舅の汝、娘の縁にて、彼れが宅に足を止め、首尾よく搦め出すに於ては、厚く恩賞これあるべく候ふ。月日、三一五郎兵衛へ、岸田景成。

ト讀む事あつて、五郎兵衛呑みこむ。此うち、暖簾口より隼人、出かゝり、立ち聞きゐる。

五郎　すりや、この状に、御褒美の事が書いてござりまするか。

運八　しつかりと書いてある。もし其方が手にあまらば、身共が持參の飛び道具、われにしつかり渡して置くぞ。

ト種ヶ島を渡す。

五郎　五郎兵衛、しつかりと預かりました。

ト懐中する。この時、隼人

隼人　モシ、旦那様え／＼。

ト最前の手紙を持つて前へ出る。これにて皆々、思ひ入れあつて、運八は下の方へ隠れ、門弟両人は下座へ入る。五郎兵衛、右の状を持つてゐる。隼人、探り寄つて

モシ／＼、旦那々々、ちつとお頼み申しまする事がござりまするわえ。

ト云ひ／＼出る。此うち始終捨て鐘。

五郎　こりやア座頭どの、頼みたいとは、なんの事だ。

隼人　イヤ、外の事でもござりませぬが、この狀を見て下さりませ。

五郎　ドレ〳〵

ト狀を受取り、持つたる密書を一つに持ち添へ

この狀が、どうしたといふのだ。

隼人　サア、お聞きなされませ。先刻、爰の旦那に、讀んでもらはうと見せましたら、口の内で讀ましつて、さしたる用もない、案じる事はないと云はしつたが、委細を聞かねば、矢張り案じられます。どうぞお前、その狀を、讀んで下さりませ。

五郎　アヽ、この狀を、おれに讀んでくれろといふのか。

隼人　左樣でござります。

五郎　この座頭とした事が、おれは先刻、こなたの療治の場に居合せた、ソレ、明き盲目の五郎兵衛だワ。

隼人　アヽ、ほんに、その明き盲目樣のお聲でござりましたわえ。明き盲目樣を見違へまするとは、本盲目と申すものは、ハテ、不自由なものでござります。ハヽヽヽ。左樣なら、只今の狀を下さ

りまし。

五郎　サヽ、持つて行け。

ト渡さうとして、二通一緒に持つたるゆゑ、思ひ入れあつて

コレ〳〵、座頭々々、おれが方にも狀が一本あるが、ツイうつかりと持つたゆゑ、コレ〳〵、どちらが貴樣の狀か、判らぬワ。ちよつと見分けてくれまいか。

ト差出す。

隼人　これはしたり、本盲目の私しが、どうしてそれが見えませう。それが見える位なら、讀んではもらひませぬ。

五郎　ハテ、それは困つたものだ。二人寄つて、ろくな眼が一つもない。見比べて見ようにも、暗くはなる。老人の目といふものは、アヽ、自烈たいものだ。

ト氣を揉む。

隼人　モシ〳〵、そんなら良助さまに、ちよつと見てもらはつしやりませ。

五郎　エヽ、埒もない。この狀ばかりは、どうして良助に見せられるものだ。これを見せては、ちつと此方に

隼人　アヽ、モシ〳〵、斯うなされませ。なんでも兩方とも、投げて見るがようございます。

五郎　イカサマ、爰らが誠に神事だて。サア〳〵、こなたも念じさつしやい。おれも一心に、神様を念じて、ソレ、投げるぞ。

隼人　南無天照大神宮さま。

五郎　ソレ、投げるワ。

ト五郎兵衛、二本の狀を念じ投げる。密書の方、隼人へ行く。隼人の狀、五郎兵衛の方へ落ちる。この後へ五郎市出て、面白さうに見てゐる。

アヽ、そんならこれが、おれが大切な狀だわえ。」

隼人　して、わたしが狀は、どこにございます。

五郎　それ〳〵、そこにあるワ〳〵。

隼人　どこにございます〳〵。

ト尋ね廻る。この時、奥にて

瀧川　父さん、お燗がついたぞえ。早う來なさんせ〳〵。

五郎　オイ〳〵、今行くぞ〳〵。

隼人　モシ〳〵、私しの狀はどこに。

五郎　ハテサテ、酒の方が肝心だ。

ト五郎兵衞、隼人の狀を持つて奥へ入る。

隼人　これサ、わしが狀は、どこにござります。

ト尋ね廻る。五郎市、この密書を取つて

五市　それ〳〵、そこにござる〳〵。

ト中拔き草履を取つて投げる。隼人、捨ぜりふにて、草履を探り取つて

隼人　アヽ、こりや草履だものを。惡い坊さまだ。敎へて下さりまし〳〵。

ト此うち五郎市、件の片足の草履の裏へ挾み、また投げる。隼人、探り寄つて、草履を取つて

これはしたり、また草履を摑ませた。惡いたづらな坊さんぢや。

ト五郎市、隼人を突きこかし、手を打つて笑ひながら奥へ入る。隼人、捨ぜりふにて、狀を探してゐる。暖簾口より五右衞門、行燈を提げて出て、隼人を見て

五右　この座頭どのは、何を這ひ廻るのだ。

隼人　アヽ、旦那様だね。モシ、爰の坊様も、ハテサテ、いたづら者でござりまする。先刻あなたに、

お目にかけた私しが手紙を、どちらへか持つてござりましたが、そこらには見えませぬかえ。

五右　イヤノ〳〵、爰らには草履ばかり。又あの悴めが悪いたづら。

ト散つてある草履を、何心なく取つて、下の方へ抛り

アヽコレ、座敷内を、埃だらけにしをつた。

隼人　アヽコレ、先刻の狀を、どこへ持つてござつたやら……アヽモシ、旦那樣え、私しはもう、お暇申しまするが、何も御用はござりませぬかな。

五右　オヽ、大儀であつた。

隼人　ドリヤ、按摩宿を尋ねませうか。

ト門口の方へ探りゆく。

五右　お坊、待ちやれ。

隼人　私しが事でござりまするか。

五右　お坊は、どうか見たやうだ。

隼人　エヽ、旦那樣、そりやア大方、人違ひでござりませう。これはしたり、肝心の物を忘れました。

モシ、そこらに、私しが包みはござりませぬか。

五右　包みとは、淀川堤か。

隼人　エ……中は麁末な三味線の、皮は破れても四つ乳頃。

五右　主は誰れとも白川夜船。

隼人　爭ふはずみに、その箱は

五右　慥かに船へ。

隼人　さては、その時……イヤ、旦那様、お氣に入つたらお出入りに。

五右　最前其方が療治の節、揉み和らげし地理けもと。此方の腹にしつかりと。使うてくれうが、目を明けサ。

隼人　すりや、疾よりも

五右　さほどの事を辨まへずに、人の司がなるべきか。

ト此の時、下手より、門弟二、ツカ〳〵と出て

門二　さては曲者。

ト隼人へかゝる。立廻り、門弟を捕へ、締め殺す。はずみに兩眼見開く。時の鐘。

五右　いつぞや河内の石川にて、忰もろとも奪はれし、地理の一巻、最前身共が懐中へ、それと申さず

隼人　納めしは、さては汝も某が、仲間の者へ、心を寄する
　しが素性も
隼人　世上を窺ふその時は、或ひは座頭、按摩とり、それも兩眼明らかと、見極めらるゝ上からは、わ
　　　卜包みの中より大小を出し
　脊負うた稽古三味線の、その正體は、わしが魂ひ。
五右　すりや、其方は。
隼人　木曾川彌九郎と申す者。いつぞや淀の下り船、不思議に手に入る地理の一卷、御身に手渡し申さ
　んと、在所求めて今日只今、お目にかゝるは身の本懐。今より腹心同然に、お心置きなう、願ひ
　まする。
五右　さこそあらんと察せし某、父吳才官をはじめ、主君の皇女も情なや、人手にかゝつて御落命。
隼人　さては津の國、天下茶屋にて、藥屋是齋と變名なし、橫死なしたる老人は、御身の父たる、吳才
　官にてありつるか。敵は正しく筑紫の權六。
五右　その山賊も眞柴の家來、皇女のお心かけ給ふ、瀨川采女といひし者。紛失なしたる用金を、集め
　る爲の山賊夜盗、その身の犧牲に、切腹なしたり。

隼人　すりや、山賊と思ひの外、采女とやらんが、忠義の爲の盜賊となる。我れも近江路、山城の、その兩國に徘徊なし、よき主取りもあらんかと、時節を窺ふ木曾川彌九郎。手に入る異國の地理の繪圖面、貴殿に渡す上からは

五右　今日よりしては手下の彌九郎。

隼人　今からお頭、五右衞門どの。

五右　コリヤ……働らく心か。

隼人　仕事があらば。

五右　然らば語る、今宵の大事。

隼人　して、その仕事は。

ト五郎兵衞、門弟の一、立ち聞く。

五右　春日の社へ勅使の入來、公卿は世尊寺中納言、その刻限は今宵の子の刻。我が家に有りあふ岩木の先祖、俊豐が裝束と冠、これを着して紛れ入り、勅使の世尊寺討つて捨て、春日の神寶を奪はん企み。寅の刻より一陽兆し、陽は顯はれ、陰は隱るゝ。子丑の間は、成就の刻限。

ト五郎兵衞、立ち聞きして入る。

隼人　さては公卿の姿にいでたち
五右　あの東大寺の、後夜を合圖に、社を窺ふ。
門二　さてこそ五右衞門、この旨注進。
ト向うへ駈け行く。
隼人　南無三、大事を聞いたる曲者。
五右　跡追ひかけて
隼人　ソレ。
トごん〳〵にて、一腰を差し、跡を追つて向うへ入る。五右衞門も奥へ入る。唄になり、向うより當馬之丞、旅の形、一本差し、小風呂敷の包みと、藤行李を割掛けにして、スタ〳〵と出て來り、花道にて
當馬　アヽ、秋の日は短かうなつた。もう暮れたか。いま後の辻で聞いた、良助といふ劍術の指南の女房こそ、島原の女郎あがりといふ噂。正しく浦辻といふ浪人、爰へ係つて尋ねたら
ト門口へ來り
爰の內で、灯を借りて行かうか……モシ、御無心がござります。ちとお願ひ申しませう。

ト奥にて

瀧川　アイ〳〵。なんでござんすえ。

ト云ひ〳〵出て來り

なんでござんすえ。

當馬　モシ、旅の者でござります。どうぞ、提灯の灯を、お貸しなされて下さりませ。

瀧川　それはお易い事でござりまする。サヽ、これへ遣はされませ。

當馬　ハイ〳〵、左樣なら、お頼み申します。

ト提灯を差出す。

次手に承りませうは、この大佛前に、浦辻良助さまといふ、浪人衆がござりまするかな。

瀧川　その浦辻良助は、此方の内でござんすが

ト提灯を出し、顏見合せ

ヤ、慥かお前は、島原へ商ひにござんした、鮒賣りの源五郎さんぢやござんせぬかえ。

當馬　ヤ、お前は瀧川さんだね。ハテ、お久しぶりで、お目にかゝりました。マア〳〵、お前さん、御盛んで、おめでたうござります。見たところが、以前の太夫職には引かへて、今は眞面目な女房

瀧川　風。アヽ、そんなら噂に違はず、良助どのといふ、御浪人と世帯して
以前は廓の瀧川も、今のその名は、りつと呼び
當馬　エヽ、おりつさんと云ひやすか。
瀧川　アイ。してマア、お前は旅がけに、どれへ行きなさんすえ。
當馬　アイ、わたしは、お前のござる所を尋ねにサ。
瀧川　そりや何の用でえ。
當馬　ハテ、用といふのは廓の騷動。その場よりこなさんは駈落ち、關破り同然のお前ゆゑ、京大阪は勿論、西國筋まで、遊女屋仲間で尋ねるこなさん。何を隱しませう、わしもその詮議を頼まれて、わざ〳〵尋ねて大和路へ、踏みこんだが勿怪の調法。今日爰で逢ふからは、サア、連れて行きます。ござりませ。
ト瀧川が手を取つて引立てる。
瀧川　アヽコレ、滅相な。何をしなさんす。今までの瀧川とは違ふわいな。わたしや良助といふ夫のある身、それを捕へて、どこへ連れて行かうといふのぢやえ。

當馬　ハテ、知れた事、島原へ連れて行くのサ。コレ、お前、良助さんといふ夫があると云はつしやるが、二人ともに駈落ち者、その御亭主から綾が抜けませぬワ。お前はマア、顔に似合はぬ大膽な……コレ、お前、マア、廓にござるうち、達引のある女郎衆ゆゑ、あのゝものゝですびいても、イヤ、わしの方が年かさぢやによつて、定めし弄つて見る氣であらうのなんのと、成るやうに、成らぬやうに散らしたを、よもやお前、忘れはさつしやるまいが。

ト手を放さずにしなだれる。

瀧川　そりやお前、その時は、勤めのうちのいたづらに、仇な事も云うては見たが、ハテ、お前にも女房のある身、殊にわたしや、お前より年かさゆゑ、姉というてもよい恰好。どうで末々は、老女房と飽きられて、お前の弄み物になつた上、突き出されるは知れた事。それゆゑ返事せなんだわいな。

ト手を振り切る。此うち五郎市出て來り、何心なく當馬之丞が柳行李の蓋を明け、中より袱紗に包みし、蜀紅の錦の、唐裝束の片袖出るを、不思議さうに見てゐる。

當馬　エヽ、お前も先潜りを云ふ女中だ。コレ、そりやその時云うた事だよ。姉というても弟というても、よい年配に見えるから、いつそ同胞分にならうかと、諦めて見ても、どういふ事か、こなさ

んに

瀧川　どうしたえ。

當馬　屬魂惚れてゐるやつサ。

トしなだれ寄る。

瀧川　アヽコレ、惡い事しなさんすな。主が見ると惡いわいなア。

當馬　ハテ、大事ないわな。その主の良助どのからして、人の抱への女郎を盗んだ、泥坊だわな。

瀧川　エヽ。

當馬　サ、亭主からして日陰者だよ。

トこの度々に瀧川こなし。當馬之丞、捨ぜりふにて、あちこちする。トヾ五郎市、錦の袖を引出し、見てゐるを、フト五郎市を見て

瀧川　コレ〳〵、あの子が見てゐるわいな。

當馬　ありやアお前の子か。

瀧川　アイ、先妻の子ぢやわいな。

當馬　子供だわな。打ッちやつて置きねえ。

瀧川　主に告げるわいなア。

ト逃げ歩く。五郎市、この中へ割つて入り

五市　餘所の小父様、母様をどうするのぢや。

當馬　どうもせぬが、おれは母様を迎ひに來た者だよ。コレ〱、其方へ退いてゐな〱。

瀧川　イヤ〱、其方、退くまいぞ。母が側に引附いてゐや。

ト五郎市が持つたる錦を見るより、手に取つて、思ひ入れあつて

コレ、市松、わが身、此やうな品を、どこから持つて來やつた。見れば、結構な錦にて、どうやら廓の俄に使ふやうな。ほんに、こりや、唐人の裝束ぢやないか。又しても〱、惡てんがうに。コレ、こりや、どこから持つて來やつた。

五市　こりや、この小父様の行李の内に。

當馬　わしの行李から、何が

ト錦の袖を見附け

アレ、いつの間にやら。

ト手早く取つて行李へ打込み、しやんと蓋をする。瀧川、思ひ入れあつて

瀧川 常から夫の噂ある、蜀紅の錦の片袖と、聞いたばかりに……もしや今のが

ト寄るを當馬之丞、キツとなつて

當馬 こりやア廓の俄の裝束、それを常々噂ある、蜀紅の錦といふからは、さては浦辻良助こそ

瀧川 わたしが連合ひ。

當馬 ヤ。

瀧川 して又、今の片袖は

當馬 守にせうと、干見世から

瀧川 アノ、こなさんが

當馬 買うて置いたる蜀紅の

瀧川 すりや、あの裂れが

當馬 わたしが物サ。

瀧川 あの品お前の所持といひ、もしや岩木の

當馬 ヤ。

ト思ひ入れ。瀧川、さては當馬といふこなしあつて

瀧川　サ、岩木ならねばこなさんの、いま云はしやんした

當馬　今のあじやらが

瀧川　ありや眞實に云うたのかえ。

當馬　眞實なれば、こなさんは

瀧川　話して見ようと思ふから

　　　トしなだれる思ひ入れ。

當馬　そいつは有り難いの。シタガ、以前は島原で、情を商ふ全盛の、まんざら野暮でも

　　　ト瀧川へもたれる。

五市　アヽコレ、こちの大事の母さん、どこの人ぢや、退いて居さんせ。

　　　ト當馬之丞を引ッ張る。

瀧川　これいなう。なんのわが身が、小さい形をして、母さん〳〵と、わしやその母さんと云はれるがきつい嫌ひぢやわいの。わが身の母さんは、疾に死んでしまはんしたわいの。

　　　ト五郎市を突き飛ばす。この時、障子を明けかけ、五右衛門窺ふ。

當馬　これサ、瀧川さん、子供だわな。可哀さうに。

瀧川　なんのマア、大抵ませた子ぢやござんせぬ。若いお方と、憂を晴らして見ようと思ふ、心もあれば、我が子でもない者に、母さん／＼と、子持ちらしうて、色氣がござんせぬわいな。

　　トしなだれる。

當馬　アヽ、俄に空の雲行きが、變りかゝつて來たのも、慥かにこの行李の中、俄の裝束。

　　ト蓋を取る。五右衞門、さてはト思ひ入れ。五郎市、駈けより

五市　アレ、金入りのあの裂れが

　　ト立ちよる。當馬之丞、行李の蓋をする。瀧川、思ひ入れあつて

瀧川　これはしたり、又しても／＼、人さんの物さへ見ると、斷わりなしに手を掛けて。コレ、母は此お方に話しもあり、奧へ行きやらぬか。

五市　アイ／＼。

瀧川　返事ばかりしやつて、云ふ事きかぬか。

　　ト煙管を持つて、二つ三つ叩く。當馬之丞、これを留めて

當馬　これはしたり、小さい者を、可哀さうに。

瀧川　構はんすな、源五郎さん、今夜は此方に泊りなさんせ。

當馬　泊れば、どうするな。
瀧川　ハテ、又よい相談も出來やうわいな。
　　　ト當馬之丞の額を突く。
當馬　アレ、あの子が見てゐるによ。
瀧川　エヽ、よいわいな。
當馬　エヽ、いつそのくされに
　　　ト瀧川へ抱きつかうとする。五右衞門、出かゝり、この時、三人、顏見合せ
瀧川　ヤ、こちの人、そこに居なさんしたかえ。
五右　最前から、これに居つたて。コリヤ、市松、そちや爰に居つたら、また母がどのやうな、折檻を致すまいものでもない。サ、奥へ行きやく。
五市　アイく。
　　　ト合ひ方になり、五郎市、奥へ入る。
五右　コレ、おりつ、あの若い人は、ありや、どれからござつた。
瀧川　サア、あのお方は

　　トつかへる。

五右　ありや、どれから參つた。

當馬　ハイ、私しは、何か爰の內へ、用事があつて、ナウ

　　ト瀧川と顏見合せ、思ひ入れ。

五右　何やら用事あつてとは。

當馬　盗みに來ました。

五右　ヤ。

瀧川　アヽコレ

　　ト思ひ入れ。

當馬　ハテサテ、お內儀さん、今さら悔りする事はござりませぬ。胴を据ゑてござりませ……良助さまとやら、爰にござるお內儀を、盗みに來ました。

五右　アノ、身が女房を

瀧川　アイ、成る程、主はわたしを、盗みにござんした。以前、勤めの時分から、浮氣で逢うた源五郎さん、いま逢うたのを幸ひに、わたしも主に、盗まれて行く心ぢやわいな。

五右　すりや、源五郎とやらが盗みに來たれば、女房も身共を捨てゝ、盗まれて行く心ぢやな。
瀧川　アイ、急にその氣になつたわいな。
五右　道理こそ、この間の繼子憎み。義理ある悴と、その節は、その身を捨てゝ、恐ろしい

ト思ひ入れあり

その深切に事變り
瀧川　今では急に、あの子が煩さうござんすわいな。子のある夫はフッツリと、此方から暇を貰ひ、子の無い、若い主さんの、世話にならうと今日の今、思ひ附いたは、ア、、遲う氣の附いた事いなア。源五郎さん、怖い事はないぞえ。お前もしつかり帶締めて、わたしを女房に持ちなさんせ。
當馬　成る程、女の方から性根を据ゑてのその一言。わしも男ぢや、良助さま、お内儀樣は、わしがお貰ひ申しました。
五右　いかにも遣はさう。以前は廓の傾城あがり、左樣な譯もありさうな事。いかにも女房は、貴樣に進ぜるその代り、源五郎とやら、置いて行きやれ。
當馬　置いて行けとは、この首の事かな。
五右　イヽヤ、間男の首、所望でない。蜀紅錦の片袖を

當馬　エ。

五右　身共に渡して、女房を、連れて行きやれといふ事サ。

　　トきつとなり、云ふ。この時、五郎兵衞、ツカ〳〵と出て、瀧川を引附けて

五郎　コリヤヤイ、娘。

瀧川　父さん、こりやお前、どうしなさんすぞいなア。

五郎　どうするとは、エヽ、おのれはなう。

五右　こりや舅どの。

當馬　すりや、雀賣りの五郎兵衞どのは、お內儀の父親。

五郎　おぬしは小鮒の源五郎、此おりつめはおれの娘、繼子のあるのも合點で、親にも沙汰せず、良助どのと、逃げ走つたる身を以て、今さら繼子とむごたらしう。殊には親が餘所ながら、大恩受けた良助どの。

　　ト思ひ入れあり

サ、愛想盡かして鮒賣りめと、夫婦にならうとは道知らずめ。人非人め。義理知らずめ。

　　ト睨め廻す。

瀧川 父さん、その腹立ちは、尤もでござんすが、どうした事やら、わたしやこの子が煩さうなり、子に飽いたなら夫にも、否でも別れにやならぬ義理、源五郎さんを此方から

五郎 頼んでなりと、去られたいかえ、退きたいかえ。コレエ、、うぬが口から今日はじめて、良助さまの大恩受けたと、聞いた時は恥かしく、有やうは、爰へ今日來たは、われが事から附けこんで、しつかり金にする心。その横しまの根性も、恩といふ字に搦められ、一生御恩は忘れぬわい。

ト繪姿をソツと出し

おのれは大方、この繪姿に似寄りの亭主と思ふから、家出する氣になつたであらうが。

瀧川 サ、似寄りの夫を持つてゐて、寢覺めも惡し、末々を案じて見る程

五郎 サ、それで女の操が立たうと思ふか。この繪に似るほど、行く末を見屆けいでは、今日の天道樣へ立たぬわやい。素性も知れぬ捨て子のおのれ。いかな邪慳な奴の子で、その横しまは吐かすぞやい。おれが意見に附けばよし、さもないうちは根性を、叩き直して

ト引廻し、あたりの草履を見附け、片々を取上げ

親が意見の土草履。

ト振りあげる。五右衞門、當馬之丞、思ひ入れ。

五右　アヽコレ、舅のいかいお心遣ひ。さりながら、とても心の違うた女。
當馬　親の意見も、今さらどうして。
五郎　エヽ、青二才め。默り居れ。そゝのかしたおのれも同類。今日向、親が娘に成り代つて、良助さまの側は離れぬ。御用は足す。殊に彼の子も、みんごと親仁が育てゝ見せう。
當馬　その心なら、こなたの娘を
五郎　われにはやらぬ。
當馬　ヤ。
五郎　おのれにやるには、この女、ぶち殺した上、いかにもやらう。
當馬　すりや、こなさんの手にかけて
瀧川　殺さにやお前、この家を
五郎　オヽ、緣切る氣なら、この親が、履き古したる草履の折檻。
ト振りあげ、草履にて瀧川を散々に打つ。この時、件の草履の裏より、以前の密書、パラ〳〵と落ちる。瀧川が襟のあたりにかゝる。瀧川、密書に目を附け、キツとなつて、また思ひ直し、手早く密書を懐中する。

五右　女房が願ひの暇のしるし。思ふ男と一對に、揃ふ夫婦の固めの笄。片しくにならぬやう、其方が道具ぢや。持つて行け。

ト大小の小柄を二本取つて、瀧川が前へ置く。

瀧川　夫婦の仲も今日の今、割り笄の、割れくに

當馬　引別れたる合せ物、離れくの笄も、心に覺えの

ト立ちよる。瀧川、笄を當馬之丞にさしつけ

瀧川　わたしが持參のこの笄、お前に渡すが變ぜぬしるし。

ト當馬之丞へ渡す。

當馬　模樣は正しく千疋猿。さては常々兵部さま、お噂ありし腹がはり、もしやは姉の

ト瀧川と顏見合せ、思ひ入れ

五郎　イヽヤ、娘を盜まうと、いらぬ猿智慧、猿猴の、手長なわれにはやられない。あの子はわしが養育する。

五右　性根腐つた彼のおりつ、どうで別れる心なら

瀧川　わたしへ附けた諸道具を、散らさぬやうに見集めて

當馬　荷物があらば何荷でも、わしが擔げて行きまする。それまで門のあの木部屋。とはいへ、正しく

ト寄るを、五郎兵衞隔てゝ

五郎　なにマアわれは

ト當馬之丞、立ちよるはずみに、五郎兵衞、懷より種ケ島を落す。瀧川、ちよつと見て

瀧川　ハテ、父さんは

五郎　ヤ。

ト手早く懷中する。當馬之丞、行李を抱へ、門口へ出る。五右衞門、屋體へ入る。めい〳〵振りかへり、四人、顏見合せ、一度に障子と門を閉す。唄になり、當馬之丞、木部屋へ入る。五郎兵衞、瀧川殘り

五郎　ヤイ、娘、わりや、どうあつても、良助どのと手を切つて、あの源五郎と連れそふ心か。

瀧川　ハテ、そりや、主に愛想は盡かさねど、この繪姿によう似た親子。もしもの事を思ふゆゑ。

ト繪姿を見せる。

五郎　すりや、良助は一人兩名、お尋ね者の石川と、いよ〳〵われは、緣切るも。

瀧川　お前の榮えを思ふから。

五郎　親が榮えを思ふとは。
瀧川　良助どのを五右衛門と、訴人したなら、お前の出世の
五郎　何がどうした。
瀧川　わたしが連れそふ良助どのを、五右衛門なりと訴人して、岸田民部へ取入るなら、お前の榮華に
ならうがえ。
五郎　その譯どうして、アノ、われが
瀧川　知つたはこれなる密書の文言。
ト密書を見せる。
五郎　ナニ、密書とは。
瀧川　お前は無筆の情なや、大事を書いたるこの一通。
五郎　岸田さまから內意の御狀は。
ト以前の隼人の手紙を出す。瀧川、見て
瀧川　そりや譯もなき座頭が書狀。
五郎　そんなら、われの持つたるが。

瀧川　わたしを意見の草履の笞、思はず知らず落ち散りし、草履の裏に挾みし一通。
五郎　さては最前、草履の裏へ
瀧川　あの五郎市が隱せしも、親の血筋の情なや。
五郎　素性賤しき白浪の、知らぬ事とてその密書。
瀧川　拾ひ取つたは娘のわたし。主をかばひし父さんは、表は實意に、內心は、訴人する氣でござんせう。
五郎　それ知られたら、何もかも云うて聞かさう。あの五右衛門は、今宵春日へ神寶を、奪はん爲の公卿のいでたち。世尊寺どのと僞はる企て。
瀧川　すりや、中納言の名をかりて、社へ忍ぶ刻限は。
五郎　あの東大寺の夜半を合圖に。われも小鮒に添ひたくば、親を手引きし、五右衛門を
瀧川　かねぐ〵手練の夫ゆゑ、なかく〵お前の
五郎　それこそ用意の種ケ島。

ト種ケ島を見せる。

瀧川　すりやアノ、お前は

五郎　子の刻來らば
瀧川　窺ひよつて
五郎　たつた一打ち。
瀧川　その時こそは
五郎　手引きは其方。
瀧川　父の最期も
五郎　五右衛門ゆゑか。
瀧川　思へば恨みの
五郎　さては岩木に
瀧川　アヽモシ。
五市　母様。

ト走り出て取りつく。瀧川、引寄せ、以前の繪姿を取つて思ひ入れ。

五郎　わりや、その繼子が
瀧川　たとへ死なうが

ト突き放す。

五郎　性根は見えた。

瀧川　モシ

ト思ひ入れ。唄になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺、上の方に一間の大和葺きの圍ひ、これに伊豫簾かけてあり、下手、椽側附きの座敷、爰にも伊豫簾をかけ、竹の窓、植込み、柏の立ち樹あり、矢張り彈き流しの唄、時の鐘にて道具とまる。

ト知らせあつて簾を上げる。內に五右衞門、茶の湯の見得、よろしく、丸棚の上へ位牌を載せ、思ひ入れあつて

五右　思ひ廻せば痛はしき、世に亡き姫へ五右衞門が、心ばかりの茶の湯の手前。

ト矢張り唄にて、思ひ入れあり、釜の蓋を取り。湯氣の立つを見て、キッとなる。これより誂らへの合ひ方。

ハテ、心得ぬ。たぎりし釜の鳴り音に、事變つたるこの有樣。湯氣は盛んに立つべきに、次第次第に沈む樣子。もしや多年の我が陰謀、露顯なすべき時來りしか。ハテ、いまはしき、湯氣の振

舞ひ。

トきつとなる。この時、捨て鐘きびしく、バタ／＼にて、向うより隼人、弟子の二を引立て、立廻りながら出て來り、本舞臺へ來て

隼人　お頭／＼、五右衞門どの。

五右　コリヤ。

弟二　捕つた。

トかゝるを見事に引敷き

五右　木曾川彌九郎、大事あつてか。

隼人　いかにも御身の

五右　ヤ、なんと。

弟二　うぬを。

トかゝるを、キツと留める。これより誂らへ早打ちやうなる合ひ方、時の鐘。

隼人　今日この家へ紛れ入る、舅は正しく五右衞門を、召捕る爲の廻し者。岸田民部が内意を受け、搦め捕らんと向ふ曲者。卽ち證據は門弟と、入込む彼奴こそ間者の一人。五郎市どのを奪はん企て

門二　南無三。

ト逃げんとする。立廻りにてキッと押へ

隼人　此奴が口から詳しく白狀。隱れ家の洩れたる上からは、南都の住居も、危ふし／＼。

五右　ナニ些細なる彼奴等が企て。最前汝に語り置く、今宵の仕事を仕負ふせし、その上にては立退かん。首尾せぬうちは、動かぬ去らぬ。して、都より入り來る公卿は。

隼人　勅使世尊寺中納言、最早入來の沙汰あつて、社は警固の辻固め。

五右　夜半に紛れて忍び入り、寶を奪はん、さりながら、もし仕損ぜば、歸りを待ちうけ、討取る手配り。

隼人　この彌九郎は間道を、先へ廻つて何かの手番ひ。

五右　我れに荷擔の山賊野武士。

隼人　お頭よりの招きと云はゞ

五右　都へ通路の口々へ、かねて手分けし置いたれども

隼人　まだ新參のこの彌九郎、面を知らぬ上からは

五右　それぞ割符の、この合ひ文。

ト袱紗に包みし印札を渡す。

隼人　怪しき文字の印札にて

五右　集まり來る割符の印札、くらがり峠、龍田越え、爰に屯ろの手下の山賊、およそ百人あまりの人數。

隼人　今日新入りの彌九郎が、仕事の手始め、暫時のうちに。

五右　我れは春日の社へ忍び、寶を奪ふ公卿のいでたち。

門二　それ聞いたれば、この由を

ト立ちあがる。隼人、拔討ちに門弟二の首を討つ。

隼人　蟻の穴より堤の崩れ。

五右　いそふれ、彌九郎。

隼人　心得ました。

ト刀を納め、四ツの鐘になり、隼人、向うへ入る。

五右　いま聞えるは正しく亥の刻。用意いたすも最早一時。

ト爰にて三味線入り、かすめし天王立ちになり、五右衛門、思ひ入れあつて

ほのかに聞ゆる物音は、さては世尊寺中納言。

ト思ひ入れ。矢張りこの鳴り物にて、正面の障子を引抜くと、内に瀧川、女房の形の上へ、以前の裝束を着て、冠を置き、藤葛籠を脊負ひ、花道の方へ行く。五右衞門、フッと見附け

五右　女房、待て。

ト瀧川、思ひ入れあつて、矢張り向うへ行きかけろ。

五右　去り狀濟まぬ女房おりつ、其方が道具といひながら、岩木先祖の吳葉の中將、その裝束を、女子の身にて……仔細ぞあらん、マア〳〵、待て。

瀧川　エヽ。

トつか〳〵と舞臺へ來り

去つた女房を呼び返すは、こりや、こなさん、矢張り心が殘つてか。

五右　イヽヤ、離緣はなしても、三下り半の

瀧川　暇の狀は取らねども、親同胞も無いわたし。その去り狀は此方から、卽ち爰に。

ト五右衞門親子の繪姿を見せろ。

五右　その繪姿と似たからは、訴人した上、切腹の、實の親御の敵も同然、一對揃ふ笄の、姉弟ともに

瀧川　エ。

五右　身共を恨まんその爲に、不義と僞はり、家出するのか。

瀧川　云ふにや及ぶ。素性賤しき瀧川と、思ふに相違の岩木の血筋。先祖は呉葉の中將どの、この裝束を其まゝに、女子ながらも身にまとへば、取りも直さず俊豐公。女房の緣は私し事、殊には離緣とあるからは、今より岩木の實の親、先祖は名におふ大內人、裝束を敬ふ筈。筋なきこの家に、片時も在つて益なき事。

五右　小癪な其方がその一言。離緣なしても此方より、三下り半の暇の狀、渡さぬうちは女房おりつ、夫に向つて、過言の詞。

ト　これにて瀧川、葛籠を下ろし、ツカ〱と五右衞門の側へ寄つて

瀧川　コレ、こちの人、良助どの……そりや、こなさん

ト　女房の思ひ入れにて、また氣を替へ、キツとなつて

イヽヤ、そりや何ほどに申さうと、暇の狀は夫婦仲、この裝束を身にまとへば、いま云ふ通り、俊豐公。

五右　イヽヤ、去り狀、此方より、渡さぬうちは身が女房。

瀧川　すりや、こなさんは、いつまでも、わたしを女房と思うてかいな。良助どの、忘れは置かぬ、嬉しうござんす。

ト葛籠の中へ思ひ入れあつて、キッと氣を替へ

イヽヤ、女房なりとは慮外の一言。たとへこれまで連れそひし、緣はあつても裝束の、官位の恐れあるべき筈。無位無官たる良助どの、去り狀取るに及ばぬ事。これまで馴染む一旦の、緣は卽ち此方から、三下り半を

ト以前の繪姿を五右衞門の方へ投げやる。この繪姿、掛けたる釜の中へ落ちかゝる。五石衞門、キッと見て

五右　五右衞門親子のこの繪姿、たぎりし釜のこの中へ、落ちかゝりしは、何とやら。

ト門口へ當馬之丞、出かゝり、窺ひゐて

當馬　その身の果ては果敢なくも、罪科逃がれぬ七條河原、苛責の責めも今目前

瀧川　現はす前表。

五右　ハテ、いまはしき

トめい／＼思ひ入れ。よき時分より運八、出かゝり、窺ひゐる。この時、風の音にて、桐の花、散り

かゝる。五右衛門キッと見て

當馬　吉野山、峰の嵐は烈しくて
木の葉を殘す。

ト門より瀧川、當馬之丞に思ひ入れあつて

瀧川　後の世までも

當馬　ヤヽ、公卿の形は。

瀧川　コレ。

運八　五右衛門か。

瀧川　さてこそ。

ト運八、留め、下り、五右衛門へかゝる。立廻り。當馬之丞は、五右衛門へ立ちかゝる。瀧川、支へる事。この時、人數集めの太鼓聞える。

瀧川　聞ゆる太鼓は

五右　世尊寺社參の警固の供觸れ。時來りしか。

ト立ちあがる。

當馬　勅使を窺ふ不敵の五右衞門。

　ト立ちかゝる。瀧川、當馬之丞を留める。立廻りにて葛籠を開くと、中より五郎市、腰衣、青坊主の形にて思はず出る。

五右　ヤ、、五郎市がこの姿。さては女房が

運八　その餓鬼を

　トかゝるを五右衞門、見事に當てる。

五市　母樣。

　ト立ちかゝるを、瀧川、キッと隔て

瀧川　コレ、わしは其方の母ではない。わが身の母は、この世には、なき玉垂れの奥までも、忍び入らんと企ての、五右衞門どのゝ姿を其まゝ。

五右　さては今宵の我が大望、妨げん爲、冠裝束。

當馬　それぞ御先祖、呉羽の中將、岩木の家には系圖も同然。

瀧川　公卿の姿は、夫五右衞門。

五當　ヤ、、なんと。

瀧川　今ぞ合圖の

ト瀧川、五郎市をキッと見詰め

あと弔うてたべ。

ト思ひ入れ。この時、筒音して、煙硝火立ち、瀧川、苦しむ。

五右　ヤヽ、筒音高く、女房を

當馬　姉上、心を

ト立ちよる。五郎市、兩手に二通の文を持ち

五市　父樣、叔父樣。母樣が

ト兩方へ差出す。兩人、取上げ、キッと見て

兩人　書置きの事。

五右　すりや、覺悟にて

當馬　打たるゝ約束。

兩人　ムウ。

ト兩方一緒に書置を開き、見る事あつて

五右　忰五郎市、出家させ、高野の奥へ小忰を。
當馬　後の世までも、あと懇ろに
五右　弔はする爲の
ト五郎市を引寄せ、瀧川の死骸を見て
女房にめでゝ石川が、手向け代りの門火の香爐、血筋の弟、岩木氏へ。
ト千鳥の香爐を差出す。
當馬　姉が菩提の跡弔ふは、出家なりせし五郎市へ、袈裟ともなして。
ト錦の片袖を出す。兩人、取替へて、キッと思ひ入れあり
五右　錦の片袖。
當馬　千鳥の香爐。
五右　互ひにこれで
當馬　武士道も
ト兩人、懷中して
五右　この書置に女房が、心を盡せし

當馬　貞女の鑑。

五右　その神寶を奪はんと

當馬　いでたつ姿を

五右　察せし舅。

當馬　夫に代つて

ト兩人、書置を見て思ひ入れ。

兩人　女に稀れなる。

ト思ひ入れ。この時、五郎兵衞、種ヶ島を持ち、窺ひ出て

五郎　仕損じたるも娘ゆゑ。五右衞門、おのれ。

運八　香爐を渡せ。

ト五郎兵衞は五右衞門、運八は當馬之丞へかゝる。立廻つて五右衞門、五郎兵衞を引附ける。五郎兵衞、筒先を當馬之丞へ向ける。當馬之丞、運八を捕へて差つける。五郎兵衞、火蓋を切る。運八にあたり、立ち身にて苦しむ。この筒音に瀧川「ウム」と息を吹き返し、目を見開き、苦し氣なる思ひ入れにて

瀧川　五郎市、必らず
　　ト尋れる事。兩人、見て
兩人　南無阿彌陀佛。
五郎　おのれ、五右衞門。
　　トむしやぶりつくを、五右衞門、拔討ちに五郎兵衞を切り伏せ、止めを刺す。瀧川、バツタリ落入る。この途端、向うにて遠寄せの頭を打つ。五右衞門、キツと思ひ入れあつて、五郎市を横抱きに抱へ、圍ひへ上がつて、キツと向うを見る。
當馬　四方を圍むは都より
五右　討手の奴等と覺えたり。ハヽヽ、小癪な事を。
　　ト思ひ入れ。向うにて
隼人　盜賊五右衞門、そこ動くな。
五右　なんと。
　　トどんどん、カケリになり、隼人、黑捕り手の形にて、大小、凜々しく、黑四天に十手を持ちし捕り手六人を連れて出る。五右衞門、見て

汝は木曾川彌九郎ならずや。

隼人　いかにも最前其方へ、手下となつて渡せし繪圖面、似せ物なりと知つたるゆゑ、有つて益なき地理の一卷、まつた割符の印札にて、味方の賊徒を召捕る計らひ。賊なりと云ひしは僞はり、鈴木田隼人照光と申す者。張本人の石川五右衞門、尋常に腕廻せ。

當馬　待たれよ照光、聚樂の御所にて紛失せし、千鳥の香爐は、岩木當馬之丞、今日只今、手に入りました。

隼人　それぞ御身の勘氣の詫び。この照光は、召捕る五右衞門。

ト立ちかゝる。

五右　小癪な一言。この五右衞門は主君の皇女、父にて候ふ吳才官へ、供養なすには汝の細首、手向けのしるし。

ト切つてかゝる。隼人、立廻り。この時、捕り手六人、十手を振りあげ、取卷き

捕手　五右衞門、捕つた。

五右　小癪な奴等の。

ト立廻りあつて、よき見得。

先つ今日(こんにち)はこれぎり。

めでたく打出し

蝶仝孖梅菊（てふ〱ふたごのきやうだい）

蝶々孖梅菊

役名——橋本次部右衛門。同若黨、甚兵衛。所化、西念。

發端　千葉城下松原の場

本舞臺、一面の平舞臺、眞中に松の立ち樹、上下は藪垣。諸所に稲村。うしろ黒幕。日覆より松の吊り枝。すべて下總の國、千葉家城下の體。爰に旅人三人、割掛けの荷を擔ぎ、菅笠を持ち、立ちかゝり居る。眞中、松の下に、大きなる畚に、同じやうな赤子を二人、守を附けて入れ置き、捨て子の體。時の鐘、馬士唄の合ひ方にて幕明く。

旅一　コレ〳〵、二人の衆、見さつしやい。爰に捨て子があります。

旅二　イカサマ、畚の中へ入れてあるは、捨て子に違ひない。

旅三　見れば、二人とも同じやうだが、双子ではあるまいか。

旅一　成る程、目鼻立ちから口元まで、寸分違はぬ上からは、こりや双子に違ひない。

旅二　可愛い子を捨てるのは、よく／＼な事でもあらうが、可哀さうな事ではないか。

旅三　夜に入ると、この邊へ、山犬が出るといふが、喰はれねばよいが。

旅一　わし等も同じ子があれば、他人のやうには思はれぬ。

旅二　さて／＼、不便な事ではある。

旅三　併し、係りあひにならぬうち、行きませう。

ト此うち下手、稲村の蔭より甚兵衛、肩入れの着附け、一本差し、若黨の拵らへにて、窺ひ／＼出て來り

甚兵　モシ／＼、皆様、この子は捨て子でござりますな。

旅一　左やうさ、畚へ入れてあるは、大方捨て子でありませう。

旅二　その上、どうか双子の様子。どういふ事で捨てたのか。

旅三　何にしろ、不便な事ではござらぬか。

甚兵　不便な事と思つたなら、何も後生ぢや、その子をば、拾うて行て下さりませぬか。

旅一　されば、拾うてやりたいものだが、わし等は旅を抱へた者。

旅二　一人ならず二人まで、どうしてこれが拾へるものか。

旅三　お前、拾うてやればよいに。

甚兵　サア、わしが拾へる位なら、お前方に頼みはせぬ。

旅一　頼まれやうが、頼まれまいが。

旅二　誰れが厄介を拾ふものか。

旅三　サア〱、早く行きませう。

ト行きかけるを、留めて

甚兵　そんなら、どうでも拾はれませぬか。

旅一　ハテ、旅がけで二人まで

旅二　誰れが捨て子を拾ふものか。

旅三　無駄な事を云はつしやるな。

旅一　とんだ捨て子で隙取つた。

三人　サア〱、行きませう〱。

ト右の鳴り物にて、三人、上手へ入る。甚兵衛、跡を見送り、本意なき思ひ入れ。時の鐘、誂らへの合ひ方になり

甚兵　成る程、あの衆の云ふ通り、一人ばかりか二人まで、拾ひ手も無い筈だ……これといふのも御主人の、お目を掠めて朋輩の、腰元お竹と不義をなし、遂に御主人の御勘氣受け、爰やかしこにさまよふうち、身重になつて女房が、産み落したは男の双子。世間の人に面目ないと、血があがつて直ぐに死に、七日の法事もそこ〳〵に、あたり近所で貰ひ乳も、一人ならず二人前、三度の食も乏しくなり、譬へにも云ふ脊に腹は、替へられぬゆゑ是非なくも、爰へ捨ては捨てたれど、盡きぬ親子の恩愛に、心引かれて拾ひ手の、あるまで側が離れられぬ。

ト思ひ入れ。この時、赤子、頻りに泣く。甚兵衛、駈けより、介抱して

オヽ、泣くな〳〵。乳が飲みたくなつたのであらうが、拾ひ手のあるまで辛抱しろ。さて〳〵、不便な事ぢや。

ト向うを見て

向うへ誰れか來る樣子、見附けられては身の大事。

トうなづき、稻村の蔭へ入る。向うより西念、麻衣、出家の形。念佛講中といふ弓張り提灯を持ち、首へ掛けし木魚を叩き、出て來り

西念　南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト云ひながら舞臺へ來り、赤子泣くゆゑ、悧りなし、提灯にて透かし見て

ア、、捨て子があるな。見れば、二人だが、これは珍らしい捨て子だ。双子ではないかしらぬ。ハテサテ、可哀さうな事だ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト念佛を唱へ、行かうとする。甚兵衞、窺ひ出て

甚兵 ア、、モシ〱、御出家さま。

西念 オ、、呼ばつしやるは、なんでござる。

甚兵 外でもござりませぬが、爰に捨て子がござります。人を助けるは出家の役、拾うておやりなされませぬか。

ト西念、思ひ入れあつて

西念 いかにも、拾うてやりたいが、愚僧が寺は大の貧乏。所化も無ければ下男も無く、獨り身でさへ食ひかねれば、拾うたところが、子でもあれば、矢ツ張り捨てねばならぬ程ぢや。

甚兵 そりやさうでもござりませうが、どうぞ拾うて下さりませ。

西念 どうして〱、此方が人に拾はれたいのぢや。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト木魚を叩き、上手へ入る。甚兵衞、跡見送り

甚兵　一旦爰へ捨ては捨てたが、拾ひ手無うては捨てゝも置かれず。アヽ、どうか仕様はあるまいか。

ト あちこちして、又差寄っていぶりつける。この時、向うに人音するゆゑ、こなしあつて

又も人影。隱れて樣子を

ト また稻村の蔭へ入る。矢張り時の鐘、合ひ方にて、向うより次部右衞門、三十位の侍ひ、羽織袴、大小。中間、提灯を持ち、若黨、袴股立ち、大小にて、附添ひ、出て來り

次部　コリヤ、作平、もう何時であらうな。

若黨　只今打つたのが、九つでござります。

次部　夜は短かうなつたな。

若黨　左樣でござりまする。

ト 右の鳴り物にて、本舞臺へ來り、赤子泣くゆゑ、窺ひ見て

次部　コリヤ〳〵、赤子の泣くは、いづくぢや。

若黨　卽ちこれでござりまするが、どうか捨て子と見えまする。

次部　ナニサマ、左やう見えるわえ。

ト 畚へ立寄る。中間、提灯を差出す。よく〳〵見て、畚の中より守を出し

何者の子であらうか。

ト臍の緒を開き見て

永仁四年庚申年九月十口の誕生、双子の男子……さては捨て子は双子なるか。何にもせよ、某も世繼ぎの男子欲しさのまゝ、當國千葉の妙見へ、申し子なして夜毎の參詣、その路次に於て某が目にかゝつたる双子の捨て子。正しく神のお授けならん。こりや拾はずばなるまいわい。

ト此うち甚兵衞、そろ〳〵窺ひ出て、次部右衞門を見て、古主ゆゑ悧りなし、行かうとする。次部右衞門、見て

捨て子のあたりに窺ふ男。コリヤ〳〵、待て〳〵。

甚兵　へイ〳〵、私しでござりまするか。

ト立戻る。中間、提灯を差出す。

次部　ヤ、其方は腰元竹と不義なせし、若黨の甚兵衞なるか。

甚兵　へイ、不屆きゆゑに御勘氣受けた、甚兵衞めにござりまする。

次部　その後は便りも聞かざりしが、變る事も無かりしか。

甚兵　お主の御罰で路頭に迷ひ、今に浪人いたし居ります。

次部　すりや、主取りも致さずか。
甚兵　ヘイ、いつぞはお詫びを願はんと、主取りは致しませぬ。
次部　相手の竹はその時に、懐妊なせしが無事なるか。
甚兵　十月の日數も經ちまして、身二つになりましたが、産後の惱みに果敢なくも、死去いたしまして
　ござりまする。
次部　すりや、竹は死去せしとか。ハテサテ、それは不便であつた。
甚兵　して、旦那樣には、夜中の御歩行、いづれへお出でゞござりまする。
次部　其方もかねて知る通り、家を繼ぐべき男子なきゆゑ、申し子なして妙見へ、夜毎々々に參詣なす
　折に幸ひこれなる捨て子、計らず我が目にかゝりしは、拾へとあるお授けゆゑ、身共、これにて
　拾はうと存ずる。
甚兵　エ……すりや、その双子の、二人の捨て子を
次部　養育なして末々は、この橋本次部右衞門、身共が世繼ぎになさうと思ふ。
甚兵　エヽ、有り難うござります。橋本さまのお世繼とは、いかなる果報なるか。捨て子の親が承らば、
　この上も無き

ト思はず云ひかけ、心附いて

重々厚き御高恩、有り難うござりまする。

ト次部右衞門、此うち思ひ入れあつて

次部　コリヤ、甚兵衞、この道端に捨てたる双子、それを拾へば其方が、親にもまさるその喜び……こりや其方が身寄りの者か。

甚兵　アイヤ、全く以て、左樣な覺えは

次部　覺えなきかは存ぜぬが、愛子を捨てる程なれば、定めてその日の活計に迫り、法度を破り、捨てたと見える……何にも致せ、その捨て子、作平、直ぐに屋敷へ。

若黨　畏まりましてござります。

ト斧のまゝ取上げる。次部右衞門、守の書き物を懷中する。此うち甚兵衞、嬉しき思ひ入れにて

甚兵　御勘當の私しが、よき折からにお目通り。これと申すも信心なす、妙見樣の卽ち御利益。又は双子の捨て子が導き……何卒この身の、お詫びをば。

次部　掟を背きし其方ゆゑ、勘當赦すは時節があらう。

甚兵　すりや、時節の到らぬそれまでは

次部　詞交すも今宵限り。この後、目通り叶はぬぞ。

トきつと云ふ。

甚兵　ハツ、どうでこの身は埋れ木ゆゑ、お願ひ申すは、その捨て子。

次部　氣遣ひ致すな、我が世繼ぎ。

甚兵　定めし親が

次部　ヤ。

甚兵　喜びますで

ト甚兵衞、手を合す。中間、提灯を出す。次部右衞門、隔てる。双方見合つて、木の頭。

ござりませう。

ト喜ぶ思ひ入れ。赤子泣くを、若黨、いぶりつける。次部右衞門も思ひ入れ。この模様よろしく、三重模様の合ひ方、時の鐘にて、ひやうし幕引附けると口上出て

幕

口上　只今仕りましたるは、二番目狂言の發端、即ち年號は永仁四年より、二番目序幕に至るまで、年數二十七ヶ年相經ちましたる狂言、その爲のお斷わり、左樣に御覽下さりませう。

ト知らせにつき、二番目序幕の鳴り物になり、直ぐに引返す。

序幕

洲崎辨天の場
深川藤屋の場
早野屋裏手の場

役名――藤屋の輕子、お早。藤屋の吾妻。輕子、お菊。女郎、八重人。同、お松。同、お源。同、おべん。同、おせん。千葉千太郎。千葉千次郎。駕籠舁き、與兵衛。角力取り、八幡山與五郎。倉岡丈左衛門。倉岡有右衛門。指切り權九郎。吾妻の母、お虎。若黨、丹平。同、伴助。南條佐渡七。橋本次郎右衛門。髮結ひ、濡髮長五郎。晝鳶、引窓小僧長吉。

本舞臺、三間の間、高足の石段。上の方、柾の生垣、枝折り門、これに卽席御料理武藏屋といふ暖簾を掛け、下の方、葭簀張りの出茶屋、汐見といふ掛け行燈。よき所に松の立ち樹。日覆より同じく吊り枝。うしろ辨天本社の書割り。すべて洲崎辨天の體。爰に茶屋の亭主、茶を運びゐる。仕出し三人床几にかけ、茶を飲んでゐる。上手の床几に權九郎、胡麻鹽鬘、木綿やつし尻端折り、草履にて、大

きなる雁と錢財布を、振りがけにして、腰をかけゐる。下手にお虎、糊賣り婆、木綿やつしにて立ちかゝりゐる。よき所に頰かむり、酒菰をかむりし非人、寢てゐる。この見得、大拍子にて幕明く。

亭主　ハイ〳〵、もう一つおあがりなされませ。

ト茶を出す。

仕一　イヤ、もうようござる。さて今日は好い天氣でござるの。

仕二　辰に晴れて巳に降ると、いつも巳待ちには降りますが

仕三　思ひの外の天氣になつた。

亭主　なんでも、お天氣でなければいけませぬ。お天氣でさへあれば、お參りがござりまする。

仕一　ほんに、これから砂村のお稻荷樣へ、參らうではないか。

仕二　それより、早く石場へ行つて、一切り遊ぶ方がよい。

仕三　疝氣持ちの癖に、お參り申せばよい。

仕二　イヤ〳〵、草臥れ足に餘計な仕事だ。

仕一　それぢやアこれから歸るとせうか。

仕二　それがいゝ〳〵……茶代はこれへ置きますよ。

亭主 それは有り難うござります……マア、御ゆるりなされませ。

三人 大きにお世話になりました。

ト大拍子にて、仕出し三人、下手へ入る。

亭主 やう〳〵自分の體になつた。

權九 いつもながら、お忙がしいね。

亭主 お天氣でさへあれば、お參りは絶えませぬ……時に、權九郎さん、素敵な雁だね。

權九 今し方まで生きてゐたのを、〆めさせて持つて來たが、何を云ふにも時候が惡いのに、鴨と違つて向きが惡いから、藤棚へ持つて行くつもりサ。

亭主 ほんに、お前も休みなしに、よく稼ぎなさるね。

權九 休みなしに稼がなくては、好きな酒が飮まれぬ。

ト此うちお虎、煙草をのみゐて

とら 誰れかと思へば權九郎さん、お前に逢ひたかつた。

權九 オヽ、吾妻が親のお虎どのか。なんぞ用でもあつてか。

とら 外でもないが、お前に賴んで、藤屋へ賣つた娘の吾妻、親がこんな態をしてゐるに、過さうとも

しないで、この頃は、角力取りの八幡山與五郎に惚れて、始終身あがりだといふ事だ。ほんに、あの女は、餓鬼の折から、どの位世話をかけたか知れねえ。わしも、藝者にでもしやうと思ふから、岡崎を教へてやりやア、三日半もかゝるわな。それを、あの位にしたのだから、大抵丹精な事ぢやアねえ。その恩を忘れてしまつて、親に構はず、色狂ひだ。なんぼ身腹を痛めねえといつて、あんまりな奴だと思ふと、腹が立つて〳〵、わつちやア口惜しくつてならねえわな。

權九　腹の立つのは尤もだ。その話しも聞いてゐるが、與五郎といふ角力取りは、おれも遁がれぬ縁のある奴。親仁といふは千葉の家中、橋本次部右衞門が家來で、後に八幡町で米屋を始めた、山崎仁右衞門といふ者。與五郎の妹のお關といふのが、生れて間もなく仁右衞門が死んで、そこへ娘のお早を連れて、死んだ跡へ入夫に入り、以前の縁で橋本へ、娘のお早を下女奉公。ところで、おれがその以前、倉岡の小者ゆゑ、兎角に反りが合はないところから、たうとう、しまひは別れ別れ。そこで娘を取戻して、藤屋へ輕子にやつて置くが、おれが古主の丈左衞門さまが、娘をくれと、たつての頼み。幸ひ遣らうと思つてゐるが、娘が得心しねえゆゑ、取れる金も取れない始末。兎角自由にならぬものだ。

とら　それぢやア相手の與五郎は、一旦お前の子になつたのか。

權九　緣は切つたが三日でも、親になつた權九郎。おれが話しをしてやらう。
とら　惡い事には拔け目の無い、指切りの權九郎さん。どうぞ話しをして下さい。
權九　こんな事は早商賣、おれに任して置きなせえ。
とら　まだ、いろ／＼と話しがあるが、ちよつと武藏屋まで來てくれぬか。
權九　武藏屋へ行つてどうするのだ。
とら　ちよつと一杯飲まうぢやないか。
權九　無駄な事だ。よしにしなせえ。
とら　無駄ぢやァねえ。前祝ひだ。
權九　それぢやァ行つて、一杯やらうか。
とら　サア、お出で。

ト矢張り右の鳴り物にて、權九郎は雁を床几の上へ置き、連れ立つて枝折り戸の内へ入る。

亭主　あの二人は、見た所から慾の深さうな人達だ。一杯やると云つて行つたが、おれもこの間に、水を一杯汲んで來よう。

ト手桶を持つて上手へ入る。三味線入り大拍子になり、向うより千太郎、千次郎、羽織袴、大小、若

殿の拵らへ、丈左衞門、佐渡七、袴大小。丹平、伴助、袴股立ち、若黨の形。中間二人、弓を擔ぎ出て來り

千太　今日は一天晴れ渡り、四方に僅かな雲も無く、綠色濃き若葉時。

千次　殊には海上穩かに、疊を敷きし如くにて、水や空なる沖景色。

丈左　樹々の若葉に時鳥、降る程に聞く山の手では、この海原が珍らしく

佐渡　一目に望む房總の、鋸山や鹿野山、氣も晴れ〳〵と致しまする。

丹平　これを眺めて武藏屋で、一杯やつたら猶樂しみ。

伴助　それよりは茶見世へ參り、遠目鏡で見たいものだ。

千太　すりや、海上を眺望いたす、遠目鏡があると申すか。

伴助　濱邊の茶見世にござりまする。

千次　それぞ一興。少しも早く。

佐渡　左樣なれば、お二方樣。

千太　皆も來やれ。

皆々　ハツ。

ト又た鳴り物になり、皆々本舞臺へ來り

千太　コリヤ、丈左衞門、三間堂は見事に出來たな。

丈左　御意にござりまする。見事に出來いたしましたが、その堂よりも、あなたの御弓、見事な事でござりまする。

佐渡　イヤモウ、千次郎さまの御射術は、お年にまさつたお腕前、なか〳〵以て拙者なぞは、及ばぬ事でござりまする。

丈左　アヽ、イヤ〳〵、佐渡七どの、只今身共が申せしは、御舍兄、千太郎さまの御射術の事でござる。

佐渡　ハヽア、左樣でござつたか。拙者は又、御舍弟の、千次郎さまかと存じ申した。

丹平　恐れ多い事でござりまするが、お年よりは拔群の事でござりまする。

伴助　そりやア、どなた樣の事だ。

丹平　ハテ知れた事、御舍弟の千次郎さま。

伴助　そりやアこなたの料簡違ひ。ナニ千太郎さまに及ぶものだ。

丹平　ナニ及ばぬ事があるものだ。

ト爭ふ。

丈左　コリヤ〳〵、お二方の前をも憚らず、其方達がいらぬ爭ひ。
佐渡　失禮千萬、扣へて居らうぞ。
丹平　でも、ひが事を申しますから。
千次　コリヤ、扣へぬか。
丹平　ハツ。

ト扣へる。

千次　兄上と某を、一つに申すは大きな目違ひ、百發百中違ひなき、射術に秀でし千太郎どの、流石は多年の御修行だけ、なか〳〵以て及ばぬ事ぢや。
千太　そりや云はずとも知れた事ぢや。妾腹ながら我れは總領、先へ生れし年の功、一つに思ふは盲目同然。
丈左　左やう〳〵、彼の過ちの功名にて、一度か二度の當りをば、上手のやうに申すのは、射術の奥儀を存ぜぬゆゑ。
伴助　そこが譬への盲目千人、見えぬものでござりまする。
丹平　盲目か目明きか知らないが、眼前多く當りの矢數。

千太　なんと申す。

佐渡　コリヤ〳〵、下として上へ對し、詞返すは失禮至極。口出し致さず、扣へて居らう。

ト思ひ入れにて云ふ。

丹平　ハア。

ト扣へる。

千次　何は兎もあれ、兄上には、靜けき海原御覽なされ

丈左　この程より弓術に、お凝りなされし御鬱散。

佐渡　彼の遠目鏡でも御覽遊ばし

千太　イカサマ、鬱散いたすであらう。

トこの時、揚げ幕にて

音　うしやアがれ〳〵。

ト大拍子になり、向うより次部右衛門、深編笠、大小、浪人者の拵らへ。音、非人にて、次部右衛門を引立てゝ出てくる。庄八、紺絆纏、腹掛け股引、鉋と鋸を手拭で結へ、肩へ掛け、大工の拵らへにて、これを留めながら出て來り

次部　コリヤ〳〵、其方は身共を何と致す。

音　何とするとは、知れた事だ。貰ひの邪魔をするから、おいらの小屋へ連れて行くのだ。

庄八　コレ〳〵、もう好い加減にしないか。竹光でも大小を差して居りやア、お侍ひ様だ。手籠めにしては濟まないぞ。

音　濟むも濟まぬもあるものか。素人衆の知つた事ではねえ。

庄八　知つた事でもあるまいが、おれも見かねて留めるのだ。

音　留めだてせずと退いて居なさい。

ト矢張り右の鳴り物にて、三人、舞臺へ來る。庄八、留めるを、突き廻す。これにて次部右衞門、下に居る。

伴助　ヤイ〳〵、非人乞食の身を以て

丹平　上つ方の前も憚らず、見苦しい。

兩人　すさり居らう。

音　そんなに叱りなさるな。お前方もお侍ひだが、この長々の浪人が、往來の人に錢を貰つて、こちとらが商賣の邪魔をするから、小屋へ連れて行つて仕置をするのだ。

庄八　それだといつて、この人も先刻にから、手を下げてあやまつてゐる。もういゝ加減にしないのか

音　あやまらうが、どうせうが、いゝ加減にするものか。仲間入りの金を取るか、足洗ひの金を取るか。取らないうちは料簡しない。

丈左　佐渡七どの、御覧なされ、大小差せば武士の端。一錢二錢の手の内を貰つて、この世を送るとは風上にも置かれぬ奴だ。

伴助　非人め、其奴を引立てい。

音　へイノヽ、畏まりました……サア、おれと一緒に、うしやアがれ。

ト次部右衛門を引立てる。庄八、これを留めるはずみに、笠取れて、次部右衛門、發端より二十七年經ちし老けたろ拵らへ。皆々見て

丈左　ヤ、こなたは橋本

皆々　次部右衛門どの。

次部　思ひがけなきこの場の仕儀。面目次第もございませぬ。

ト合ひ方になり、次部右衛門、手を突く。

千太　珍らしや橋本次部右衛門、武将家より御懇望の、家の重寶、狂言袴の茶入れを、盗み取られた

る其方達親子が越度。それゆゑ未だに、家督の願ひもならず

千次　草を分けて詮議なせど、絶えて行くへの知れざるは、いづくの果へ持ち行きしか。定めて其方も詮議なさんが、手がゝりとてもあらざるか。

次部　心當りもござりますゆゑ、とくと詮議仕り、再び取り得て持參なし、お詫びを致すでござりませう。

千次　手がかりありとは重疊々々。茶入れを差上げねば、家督願ひは成らざるぞ。

千太　これ皆、橋本親子が越度。云はうやうない不忠者めが。

丈左　千太郎さまの仰せの通り、こなたの子息長五郎どのが、御番の夜に寶の紛失。それゆゑ親子ともお暇。

佐渡　まつた、その夜の添へ役は、丈左衞門どのゝ御舍弟有右衞門どのゆゑ、これも追放。

千太　盜賊入りしを、知らざる程の呆痴者ゆゑ、路頭に迷ひ、乞食非人同樣に、成り下がりしも主の罰

丈左　その身ばかりか御主人の、お名まで穢す次部右衞門。

伴助　お氣の毒とはいふものゝ、元はといへば粗忽ゆゑ。

次部　大事の御寶失ひし科によつて、その場に切腹なさんと致せしを、傳藏どのゝ止めによつて、惜し

からぬ命長らへ、再び御寶詮議なし、お詫びなさんと存ぜしゆゑ、恥を忍びてこの有様。

佐渡　よくぞお忍びなされしぞ。これまでのいかい御苦勞、御心中お察し申す。

次部　有り難き其お詞、この末ともに、御前よしなに。

佐渡　承知いたしてござる。

千太　次部右衛門には二人まで、立派な悴がありながら、尾羽打枯らした素浪人。

丈左　それと申すも根が捨て子、しかも双子の兄弟にて、兄となしたる長吉は、引窓小僧と肩書きの盗人、また弟の長五郎は、町髪結ひになつたる由。

伴助　双子も世間にまゝあるが、瓜を二つに割つたる如く

丹平　寸分違はぬ御兄弟。

丈左　何に致せ親子三人、かゝる姿に落ちぶれしとは

三人　さて／＼笑止な事でござる。

次部　役に立たざる悴ゆゑ、兩人ともに勘當なし、この次部右衛門一人にて、身を粉に碎き、寶の詮議……それも何卒御舍弟たる、千次郎どのを

佐渡　アヽコレ、……只何事も云はず語らず、失せし寶の詮議が肝要。

千太　ヤア、役にも立たざる次部右衛門、目通り叶はぬ。とく〳〵立て。

次部　ハツ。

千太　エヽ、立てと申すに。

　　トきつと云ふ。

音　サア、立てといふ御意が出たから、キリ〳〵小屋へ、うせをらう。

　ト立ちかゝつて次部右衛門を引立てる。此うち千次郎、思ひ入れあつて、袱紗包みの金を出し、音に打ちつける。

アイタヽヽヽヽヽ。

　ト額を押へる。次部右衛門、包み金を取上げ

次部　これは。

　　ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

千次　不忠者の次部右衛門　主人へ恥辱を與へしゆゑ、打ちつけたるその礫。

次部　ヤ。

千次　それにて、この場の納まりを。

次部　ハヽツ、重ねぐの厚きお惠み。

ト金を戴く。

千太　返すぐも憎くき奴。いつその事に

ト刀へ手を掛ける。

丈左　アイヤ、千太郎さま、お待ち遊ばせ。何事も拙者が胸に。

千太　とはいへ此まゝ

トまた息込むを、丈左衞門押へて

丈左　ハテ、お待ち遊ばせと申すに

ト折が惡いと呑みこませる。

佐渡　イヤ、先刻より餘程の隙入り、お二方には辨財天へ。

千太　イカサマ、參詣いたさう。

千次　左樣なれば兄上樣。

千太　案內いたせ。

ト唄になり、千太郎先に、千次郎、丈左衞門、佐渡七、丹平、伴助、中間附いて上手へ入る。次部右

音　サア〳〵、お侍ひ。いま貰つたその金を、仲間入りに此方へ寄越せ。

　　衞門、跡を伏し拜む。

次部　若殿のお惠み、遣はし難き金子ながら、思し召しゆゑ遣はすぞ。

　　ト一兩出して遣る。音、見て

音　なんだ、たつた一兩か。貰つた金は十四五兩。せめて五兩も寄越すなら、料簡をしてやらう。

　　ト立ちかゝるを、庄八、中へ入り

庄八　エヽ、此どう乞食め、先刻から見て居れば、くらひそばへた事を吐かすな。門口へ立てば一文か二文だ。面桶の形はしてゐるが、一兩といふ金は見た事はあるまい。三拜して貰つて行け。

音　また横から口を出すが、こなたの知つた事ではねえワ。

庄八　知つた事でも、知らねえ事でも、見て居られぬから口を出すのだ。

音　此奴は、とんだ世話燒きだ。

庄八　世話燒きとは誰れの事だ。

　　ト手拭に結へし鑿を取つて構へる。

音　こいつは危ない。

ト矢張り大拍子にて、音、上手へ逃げて入る。庄八、跡を追つて入る。床几の上へ手拭にて結へし鋸や鉋なぞ殘りゐる。次部右衛門、跡を見送り

次部　取るに足らざる乞食ゆゑ、堪忍なせば附けあがり、既に斯うよと思ひしが、あの若者の助けにて計らず難儀を遁がれたも、世に人鬼の無い譬へ……他人でさへもあの如く、情あるが人の常、いかに拾ひし子なりとて、兄長吉が親不孝。同じ胤でも弟の、長五郎は孝心なれど、いづれに居るやら住所も知れず。あるに甲斐なき二人の悴……何にもせよ、紛失の茶入れの手がゝり知れたれば、首尾よく我が手へ入るやう、辨財天へお願ひ申さん。ドリヤ、參詣いたして來ようか。

ト唄になり、思ひ入れあつて上手へ入る。向うより彦助、質屋の手代、木綿やつしにて、風呂敷包みを脊負ひ、出て來る。跡より有右衛門、そぼろなる浪人者、大小にて出て來り、花道にて

有右　コレ〳〵、早野屋彦助、さう愛嬌無しに云はぬものだ。

彦助　云はなくつてサ。疾に月が切れて居ますよ。

有右　それは云はずとも知つて居るが、是非々々おれが請けるから、さう云はずとも待つてくれ。

彦助　どうして〳〵、賣り口があるから待たれませぬ。

ト振り拂つて舞臺へ來る。有右衛門、追ひかけて彦助を捕へ

有右　これサ、さう野暮を云はずとも、マア、おれが云ふ事を聞いてくれ。あの茶入れが無い日には、家督願ひもあげる事が出來ぬ。御舎兄の千太郎さまへ持つて行けば、金と引替へ。ちつとのうち貸してくりやれ。直ぐに金にして返してやらう。

彦助　ナニ、茶入れを只貸してくれ……とんだ事を云はつしやる。商ひむきといふ代物を、居所も知れぬお前様に、なんでこれが貸されるものだ。

有右　居所はどこであらうとも、金さへ遣つたらいゝではないか。

彦助　そりやァ金さへ下されば、隨分いゝのサ。

有右　よければ、それを貸してくりやれ。

彦助　サア、右から左へ引替へなら。

有右　そこをどうか、貴様の才覺で

彦助　イヤ、只では眞平。

有右　ハテ、さう云はずと

ト引きとめるを

彦助　エヽ、しつこい人だ。

ト振り拂ひ、早き大拍子にて、上手へツイと入る。

有右　エヽ、わからねえ野郎だ。

トこの時、寢てゐる非人、起きあがり

非人　オイ、有右衛門さん〳〵。

ト有右衛門、あたりへ思ひ入れあつて

有右　おれを呼ぶのは、誰れだ。

非人　誰れでもねえ、おれだ。

ト森田屋の頭巾を取る。長吉、逆熊の鬘、襤褸形、菰を着て前へ出る。有右衛門、見て

有右　オヽ、双子の兄の長吉か。

長吉　コレ、靜かに云はねえか。

ト流行り唄の合ひ方。

有右　コレ、長吉、聞いてくれ。おれと馴れ合つて、盗み出したあの茶入れ、早野屋へ百兩の質に入れて置いたところ、月が切れて賣るといふから、兄貴の方へさう云つたら、斯ういふ手紙が兄貴から、印形附きで昨日來た。

ト懐から手紙を出し、長吉に見せろ。長吉、開き見て

長吉　ナニ〱……一筆啓上致し候ふ、然らば先達て、其方長吉と談合にて、盗み取り候ふ茶入れ、質入れ致し候ふ由、外々へ賣り拂はれては、若殿千太郎さまの手筈よろしからず候ふゆゑ、似せ物の茶入れを拵らへさせ候ふ間、この品と摺りかへ、右の茶入れ、早々御遣はし下さるべく、この者は慥かなる者ゆゑ、首尾よく手に入れ候はゞ、御渡し下されたく、卽ち證據たる印形の手紙差遣はし申し候ふ、以上、倉岡有右衛門どのへ、同苗丈左衛門、判……この手紙の文言ぢやァ、千太郎さまの家督につき、あの茶入れが入用ゆゑ、拵らへさせた似せ物に、摺りかへろといふのだな。

有右　摺りかへてくれと寄越したが、コレ、見さつせえ、よく出來たぢやァねえか。

ト懐より袱紗包みの茶入れを出して見せろ。長吉、手に取り見て

長吉　成る程、こりやァ正物だ。これぢやァ彦助も喰ふだらう。

有右　喰はせようと彦助を、いろ〱と口說いたが、どうしても肝心の、正物を出さぬから、摺りかへがならぬ。

長吉　そりやァこなたの手際ぢやァ、所詮いかねえ。無駄な事だ。摺りかへるよりやァ手短かに

ト有右衛門に囁く。

有右　ハ、ア、そんなら今夜、矢尻を切つて

長吉　ア、コレ、靜かに云ひなせえな……先刻、爰で聞いてゐりやア、おれが養父の次部右衛門が、心當りがあると云つたが、もしや早野屋にある事を、嗅ぎつけたかも知れぬぞえ。

有右　それは何より險呑だ。一體おぬしは、なんで又、親にした次部右衛門や、弟の長五郎を、向うへ廻すのだ。

長吉　外でもねえが、總領のおれを出しても、弟の長五郎を、家督にしたから向う面よ。

有右　イヤ、向う面といへば、おぬしと長五郎、なんぼ双子といひながら、それ程にも似るものか。

長吉　その代り、心が似ねえ。

有右　違ひねえ、さつぱり似ねえ……何にしろ、これから直ぐに、晩の支度にとりかゝらう。

長吉　輕業をするやうだ。……お前、道具は有るか。

有右　ナニ、道具が要るか。

長吉　道具が無くつて切れるものかな……幸ひ、爰に好い物があつた。

ト庄八が忘れて行きし道具を見て、鋸を出し

これを持つて行きなせえ。

有右　こいつは妙だ。

　　ト鋸を懐へ入れようとして、つかへる思ひ入れ。

　あんまり妙な事もねえ。

長吉　エヽ、不器用な。柄を抜きなせえ。

　　ト柄を抜き、手拭で巻いて懐へ入れてやる。

有右　成る程、これで納まつた。

長吉　それぢやァお前は、先へ行きねえ。

有右　後からキッと來て下さい。

長吉　手始めに、うまくやんな。

有右　合點だ。

　　ト大拍子にて、有右衞門、足早に向うへ入る。跡に似せ物の茶入れ、忘れてあるを、長吉、取上げ

長吉　エヽ、あの男も粗忽かしい。似せ物の茶入れを忘れて行つた。後から持つて行つてやらう。何に
　しろ、よく出來てゐるが、どうか仕様はねえかしらぬ。

　　トこの時、バタ〳〵と人音するゆゑ、菰をかぶり、寢る。矢張り大拍子にて、上手より以前の次部右

衞門、彦助、出て來り

次部　これは彦助どの、好い所でお目にかゝつた。

彦助　左樣でござりまする。先づ、これへお掛けなされませ。

ト兩人、床几へ腰を掛け

次部　さて、この程承りし、茶入れは持參なされしか。

彦助　これへ持參いたしましたが、いよ〳〵お買ひになりますか。

次部　いかにも、身共、求めたいが、拜見はなるまいか。

彦助　それはお易い事でござりまする。

ト風呂敷包みより茶入れを出し

サア〳〵、御覽なされませ。

次部　これは忝うござる。

ト茶入れを出し、改め見て

疑ひもなき狂言袴の茶入れ。して、價は何程でござるな。

彦助　値段は、質に取りました、元金の百兩で、利息無しで差上げませう。今も御同家中の有右衞門さ

まが、是非々々請けると仰しやつてゞござりまする。あなたの方は、男を立てる、與五郎さまのお頼みゆゑ、今夜中はお待ち申しまする。

次部　それは千萬忝うござる。然らば與五郎にも逢うて、いづれ明朝までに參るであらう。

彦助　お出をお待ち申しまする。

ト此うち後へ長吉、ソツと出て、箱を取り、手早く似せ物の茶入れと摺りかへ、元の所へ置く。彦助これを知らず、風呂敷に包み、懷中する。

次部　して、其許には。

彦助　最早歸宅いたしまする。

次部　然らば、それまで同道いたさう。

ト思ひ入れあつて

ア丶、何をいふにも大枚百兩。

彦助　エ。

次部　イヤ、大分曇つて參つたな。

ト唄になり、次部右衞門に彦助附いて向うへ入る。これを長吉、起きあがり、見送り、こなしあつて

長吉　大べら坊め。

ト懐へ茶入れを入れ、思ひ入れ。流行り唄、大拍子にて上手へ入る。この唄にて、向うより吾妻、藝者の拵らへ。與五郎、角力、好みの拵らへ。吾妻、胸づくしを取り、出てくろ。後よりお早、前垂れ輕子の拵らへ、船頭の次郎、附きそひ、少し下がりて與兵衞、袷絆纏、脚絆草鞋、竹の先へ油紙につゝみし狀を結ひつけ、頰かむりにて、吾妻に見惚れながら出て來り、花道にて

吾妻　コレ、與五郎さん、この二三日ござんせぬが、お前、どこへ行かしやんした。

與五　ハテ、どこへ行くものか。八幡樣の興行で、二三日、山へ行つて居たのぢや。

吾妻　イエ〳〵、それは嘘ぢや〳〵。本當の事を云ひなさんせいなア。

はや　これいなア、吾妻さん、往來の人が笑ふによつて、その胸づくしを放しなさんせいな。

與五　イヤモ、力づくでは六十貫目も、左差しにする與五郎、誰れにも負けた事は無いが、押しの強いには叶はぬわい。

吾妻　アイ、わたしや押しが強いによつて、連れて行くのぢやわいな。

次郎　これサ〳〵、吾妻さん、其いちやつきは、向うへ行つて、ゆつくりとなさいまし。

はや　サア〳〵、早う行かしやんせいな。

ト矢張り右の鳴り物にて、舞臺へ來り、床几へかける。此うち與兵衞は、始終吾妻へ思ひ入れあつて下手へ來り、矢張り見てゐる。

與五　コレ、吾妻、實は此方へ來ないのは、御主人樣の事について

吾妻　イエ〳〵、その云ひ譯も聞き飽きたわいな。いつでも御主人樣をだしに使うて、どこへ行かしやんすか、知れたものぢやござんせぬ。

はや　イエ、吾妻さん、そりや嘘ぢやござんせぬ。與五郎さんとわたしとは、以前は義理ある同胞仲にて、わたしが爲にも御主人樣。

吾妻　お前までが一つになつて、いゝ加減な事を云はしやんせいな。

はや　なんで、いゝ加減な事を云はうぞいな。

次郎　こりやァ只ぢやァ濟みますまい。先づ武藏屋で仲直りに、ちよつと一口といふ所でござります。

吾妻　それよりは、いつそ、わたしの內へ。

與五　どうして藤屋へ行かれるものだ。疾から迫かれてゐる與五郎、小さな體なら、隱れても上がらうが

次郎　そこは又、拔け目のない、お早どんの取廻しで

はや　それが出來ればようござんすが、何を云ふにもこれまでが、屋敷奉公して來たわたし。
與五　こんな事の取廻しは、お早どのにはむづかしい。
吾妻　そんならマア、武藏屋へ、ちよつと來て下さんせ。いろ〳〵話しがござんすわいな。
與五　おぬしの話しも久しいものだ。用があるかと行つて見ると、何にも話しの無いやつサ。
吾妻　イエ〳〵、今日はござんすわいな。
與五　それぢやァ仲直りに、武藏屋とすべいか。
はや　それがようござんすわいな。
次郎　サア〳〵、値が成つたらば、少しも早く。
與五　ハテ、忙しない。
皆々　サア、ござんせいな。

ト流行り唄になり、皆々、枝折り門の內へ入る。此うち與兵衞、始終見惚れ居て

與五　ア丶、美しいものだな。いつぞや大師參りの時、駕籠に乘せた藤屋の吾妻。顏は元より爪はづれ、ア丶いゝ女と思つたが、それから目先に忘られず、どうぞま一度逢ひたいと、思つた念が屆いてか、今日思はずも出合つた吾妻、見れば目の毒、觸れば煩惱。ア丶、どうか仕樣は無いものか。

ト腕を組んでヂッと思ひ入れ。三味線入り大拍子になり、上手より以前の千太郎、千次郎、丈左衞門

佐渡七、丹平、伴助、中間附いて出て來り

佐渡 先づ、これへお掛けなされて、今一覽遊ばしませ。

千太 いつまで見ても、見飽かぬ景色ぢや。

丈左 して、お二方樣には、これより御歸館でござりまするか。

千太 八幡宮へ參詣したいが、餘程あるかな。

丹平 これからは、半道餘もござりませう。

千次 最早七ツに近ければ、八幡宮へ參詣いたさば、歸りが遲うなりませう。

千太 然らば、これより歸館いたさう。

伴助 それがよろしうござりませう。

ト與兵衞、思ひ入れあつて

與兵 憚りながら、あなた樣には、千葉さまではござりませぬか。

丹平 いかにも、御兩所樣は

伴助 千葉の若殿樣だワ。

與兵　左様なら、お供の中に、倉岡丈左衛門さまと仰しやるお方はござりませぬか。

丈左　オヽ、倉岡丈左衛門は身共ぢやが、なんぞ用でもあつての事か。

與兵　ハイ、私しは、品川の同心場から參りましたが、金子を添へた御狀が、下總から參りました。

ト油紙包みの狀に、五十兩の包みを出す。丈左衛門、受取り

丈左　オヽ、慥かに受取つた。

與兵　どうか、お受取を下さりまし。

丈左　承知いたした。

ト矢立を出し、鼻紙へ受取を書き

して、其方が名前は。

與兵　ハイ、鮫洲の駕籠屋、與兵衛と申しまする。

トこれにて佐渡七、思ひ入れあつて

佐渡　異な事を申すやうぢやが、鮫洲の駕籠屋にて、與兵衛どのとあらば、もしや南方十次兵衛どのゝ忘れがたみではござらぬか。

與兵　エ……イエ〳〵、左様な者ではござりませぬ。

佐渡　イヤ〳〵、慥かな證據は、御親父の十次兵衞どのに生寫し。御病氣の折、大殿様より、家督なすべき者無きかと、お尋ねありしその時に、忘れがたみの忰あれど、もと腰元に宿せし胤にて、鮫洲邊に與兵衞と申し、かすかな暮しを致し居ると、風の便りに聞きしのみと、云うて別れし果敢ない最期。

丹平　その御遺言に符合なせば、御子息でござらうがな。

與兵　斯くお目にとまる上からは、何をかお隱し申しませう、面目もなき姿ながら、いかにも十次兵衞が忘れがたみ、與兵衞めにござります。

丈左　その十次兵衞どの、死去の以前、こなたの妹のお照どの、非人どもになぐさまれ、家出をなして行くへ知れず。

伴助　それゆゑ數代續きたる、南方氏の家名斷絕。

千次　南方が忰とあるからは、今より屋敷へ歸參なし、父の家名を相續せよ。

千太　アイヤ、千次郞、待ちめされ。たとへ十次兵衞が忰にもせよ、駕籠舁き風情を取上げて、家來となしては家の瑕瑾。

千次　ではござりまするが、十次兵衞の忰、行くへ相知れなば、家名相續いたさせよと、かねて仰せの

あつたる事ゆゑ。

千太　なんであらうと、得知れぬ者を、家來には罷りならぬ。

千次　すりや、父上の仰せでも

千太　ヤ。

千次　あなたはお背きなされまするか。

千太　ムウ。

ト詰まる。

千次　それなる與兵衛を取立つるは、私しならぬ父上の仰せ。兄上はじめ丈左衛門、よもや異存はあるまいな。

トきつと云ふ。

丈左　ハツ。

千太　然らば其方が勝手にしやれ。

千次　サヽ、父の仰せぢや、歸參いたせ。

與兵　ハヽツ、有り難きその仰せ、草葉の蔭で十次兵衛、さぞかし喜び居りませう。何を申すも私しは

千太　幼少より町家で育ち、武家の作法も存じませねば、矢張り此まゝ仕馴れたる、駕籠舁きにて世を送り、氣樂に過ぎたうござりまする。

千次　流石は町家で育ちし與兵衞、こりや、さうありさうな事ぢや。

與兵　辭退いたすもさる事ながら、家名を立つるは父への孝養、とくと退き考へ見よ。

丈左　有り難うござりまするが、槍を突くより息杖を、突くが勝手でござりまする。

與兵　イカサマ、それが上分別。

丈左　何は兎もあれ、お受取を

ト丈左衞門、受取へ判を捺し

與兵　實印据ゑし身共が受取。

丈左　慥かに頂戴いたしました。

ト懷中する。千次郎、思ひ入れあつて

千次　コリヤ、、與兵衞とやら。願ひとあらば、いつなりとも

佐渡　身共が宅まで

與兵　ハツ。

ト會釋する。千太郎、立ちあがり

千太　イザ、歸館いたさうか。

丈左　拙者は暫時お後より。

千次　左樣ござらば、兄上樣。

千太　供いたせ。

皆々　ハツ。

ト行列三重になり、千太郎、千次郎、佐渡七、丹平、伴助、中間附いて向うへ入る。丈左衞門は枝折り門へ入る。與兵衞、殘り

與兵　ヤレ〱、とんだ人に逢つて、窮屈な思ひをした。親仁どのゝ死んだのは、人の話しに聞いてゐたが、妹の家出は聞くが初めて。それといふのも、多くの非人に……イヤ、可哀さうな事をした。

ト思ひ入れあつて

それはさうと、先達て大師河原で見染めた吾妻。先刻、不思議にめぐり逢つたは、辨財天の御利益か。大方、今に歸るであらうが、もう一度見て歸りたいものだ。イヤ〱、見たとてお庭の櫻

それより早く内へ歸らう。
　ト行きかけ、思ひ入れあつて、
イヤ〳〵、ちよつと見て行かうか……イヤ、歸らうか。ハテ、迷ふ事だなア。
　ト床几へドンと腰をかけ、思案の思ひ入れ。流行り唄にて、枝折り門より吾妻、少し酒に醉つたる思ひ入れにて出て來り、床几へかけ
吾妻　アヽ、醉うた〳〵。次郎どんの無理強ひで、切なくつてならぬ……モシ、水を一つ下さんせ。
　トこれを見て與兵衞、嬉しき思ひ入れ。茶屋の茶碗へ水を汲んで、ソツと差出す。吾妻、取つてグツと飲み
アヽ、よい心持ちだ。もう一つ下さんせ。
　トこれにて與兵衞、また汲んで持つて行く。吾妻、飲んで
いつも新川のお客さんが、醉醒めや下戶の知らざる水の味と、口癖に云ひなさんすが、ほんに、こんな旨いものは無い……モシ、お前、お氣の毒だが、肩をちつと揉んで下さんせぬか。
與兵　ハイ〳〵、揉んでもよろしうござりまするか。
吾妻　早う揉んで下さんせいな。

トなまめいた合ひ方へ大拍子を打込み

與兵　ハイ〱〱。

トうれしき思ひ入れにて、遠くから手を伸ばし、慄へながら揉む。

吾妻　もつと此方へ寄つて揉んで下さんせ。

與兵　ハイ〱〱。

ト側へ寄り、吾妻の肩を揉む。

吾妻　お前、大きに御苦勞でござんす。

ト振りかへり、顔見合せ

オヤ、いつもの喜助さんだと思つたら、知らぬお方でござんしたか。こりや堪忍して下さんせいなア。

與兵　イエ〱、どう致しまして、よく揉ませて下さりました。揉みたうて〱なりませなんだ。

吾妻　わたしもマア麁相な。不躾な事をしましたが

ト顔を、よく〱見て

知らぬお方と思うたが、お前は、どこぞで見たお方。

ト これにて與兵衞、思ひ入れあつて

與兵　お覺えがござりますか。いつぞやお客と御一緒に、大師河原へお出での時、お乘せ申した私しは駕籠舁きでござりまする。その折、駕籠へお忘れなされた、お前樣のこの手拭。

ト 懷よりあづまと染めし手拭を出し、見せる。

吾妻　ほんに、あの折忘れたが、よう今まで、その手拭を
與兵　サア、大事にかけて朝夕に、お前と思うて持つて居ます。
吾妻　そりやマア、嘘にも嬉しうござんす。わたしのやうな不束者を、さう思うて下さんすなら、これから此方へござんしたら、わたしの所へ寄らしやんせいな。
與兵　それは有り難うござりまする。時に、もう少し揉みませうか。
吾妻　揉んでおもらひ申したいが、憚りでござんすものを。
與兵　なんの憚りな事がござりませう。サア〳〵、揉んであげませう。
吾妻　そんなら揉んで下さんせいな。

ト 吾妻、與兵衞へもたれかゝる。與兵衞、ゾッとせし思ひ入れにて、ブル〳〵慄へながら

與兵　こりやマア、夢ではないかしらぬ。夢ならどうぞ覺ましともない。

ト吾妻、もたれしまゝ居眠る。

モシ／＼、お前、風邪をひきますぞえ／＼。

ト云へど答へなきゆゑ、與兵衞、ソッと體を拔く。これにて吾妻、床几の上へ横に寢る。與兵衞、思ひ入れあつて

モシ／＼。

ト搖り起しても默つてゐるゆゑ、與兵衞、顏をヂッと見詰め、水を戴いて飲み、いろ／＼思ひ入れあつて、トヾ吾妻に抱きつくを、突き倒し

吾妻 氣障な男と思ふゆゑ、馬鹿げた仕打を見るのが樂しみ、酒に紛らせあやなすを、釣られてゐるとは氣が附かず、抱きつくとは嫌らしい。なんぼしがないわたしでも、いまお江戸で評判の、角力取りでは二と下がらぬ、八幡山さんと云ひ交し、パッと浮名の立つた仲。なんで自由になるものか。お前も餘ッぽど鈍な人ぢやなア。

ト吾妻、思ひ入れ。與兵衞、吾妻を捕へ

與兵 たとへ何と云はれても、もう斯うなつては堪えられぬ。

吾妻 エヽ、しつこい、放しなさんせ。

ト突き放すを追ひ廻す。この時、門の内より以前の與五郎、次郎、出て來り、この中へ入り、與兵衞をくらはす。

與兵　ヤ、おれをぶつたは

與五　誰れでもない、吾妻が色の八幡山ぢや。

與兵　そんなら、こなたが

ト與兵衞、與五郎の顏をヂツと見る。

與五　手出しをすると、叩き擲るぞよ。

與兵　イヤア。

ト悄りする。

次郎　關取に擲られたら、一擲りで直ぐに往生。

與五　足許の明るいうち、キリ〳〵爰を歸り居れ。

吾妻　人の事よりわたしらも、もう歸らうではござんせぬか。

次郎　これから直ぐに、藤屋の二階へ。

與五　併し、此まゝ藤屋へは

吾妻　わたしがどうともする程に

與五　久し振りにて

吾妻　今夜はしつぽり。

與兵　エヽ、羨やましい。

　　ト側へ寄るを

吾妻　羨やましくとも

與五　及ばぬ事ぢや。

　　ト與兵衞を突く。これにて撞と下に居る。

大べら坊め。

ト佃になり、與五郎、吾妻に次郎附いて向うへ入る。與兵衞、起きあがり、羨やましさうに跡を見送り

與兵　及ばぬ事といふものゝ、金さへ出せば買はれる吾妻。今は駕籠屋の與兵衞ながら、生れは立派な武士の胤、損料借りでも身形を拵らへ、せめて一晩、吾妻をば

　　トきつと思ひ入れあつて

こりや斯うしては居られぬわえ。

ト唄になり、與兵衛、思ひ入れあつて向うへ入る。流行り唄になり、門の内より、丈左衛門、權九郎出て來り

丈左　コレ、權九郎、お早が事は、キッといゝな。

權九　そりや、レコ次第でござります。

丈左　先刻も下總の實家から、金子を持たして寄越せしゆゑ、望みほど遣はさうから、娘に得心させてくりやれ。

權九　たとへ何と云はうとも、親の威光で得心させます。

ト門の内より、お早、出て來り

はや　モシ、父さん、吾妻さんを知らしやんせぬか。

權九　べら坊め、疾に歸つたワ。

はや　ほんにマア、吾妻さんも八幡山さんも、わたし一人跡へ殘して、惡い事しなさんす。ドレ、跡追ひかけて

ト行きにかゝるを

權九　コレ、娘、待ちやれ。
はや　なんぞ用でござんすかえ。
權九　用があるから呼んだのだ。
はや　わたしや心が急くほどに、早う云うて下さんせいなア。
權九　用といふは外でもない。せう事なしにさせるものゝ、茶屋奉公をするよりも、旦那樣へ身を任せろ。てめえばかりか、おれまでも、左團扇で浮み上がるワ。
丈左　おぬしさへウンと云へば、親子ともに引取つて、生涯樂に暮らさせるワ。どうだ、まんざら嫌でもあるまいが。
はや　イエ、嫌でござんす。
丈左　なんと。
はや　父さんは、倉岡さまに勤めてゐるゆゑ、お主でござんせうが、わたしが爲には何でもない。お主といふは橋本さま、その旦那樣と確執の、丈左衛門さまに隨ふのは、わたしや嫌でござんすわいな。
權九　否と云はうが、應と云はうが、金にしにやならねえおぬし。縛つて置いても丈左衛門さまへ、隨

はせるからさう思へ。

丈左　親権九郎が望みほど、金を遣つたら、いざこざ無いぞ。

はや　お金は山ほど積ましやんしても、嫌な男と一晩でも、一緒に寝られやうかいな。

丈左　うぬ、さう吐かしやァ。

ト丈左衛門、腹を立て、抜きかけるを、権九郎、留めて

権九　娘が兎やかう申さうとも、五十両の金を下すつたら、御自由にさせますて。

丈左　ムウ、しかとよいな。

権九　よろしうござりますから、どうぞお金を下さりませ。

丈左　承知いたした。

ト懐より以前の五十両を出して遣る。

権九　これは有り難うござります。

ト以前の雁の足へ結へし財布へ入れる。この時、風の音して、雁、息吹き返し、財布を足へ結ひつけしまゝ空へ舞ひあがる。

ヤア、こりやァ、大事の金を

丈左　財布のまゝに、アレ〳〵〳〵。

權九　雁やアい〳〵。

ト風の音にて、雁は向うへ引いて取る。權九郎、追つて行く。この後を丈左衞門、同じく追ひかけ、向うへ入る。お早、殘り、思ひ入れあつて

はや　ほんにマア、好い所へ、あの雁金が生きたばかり、思はぬ難儀を遁がれたわいな……それはさうと、與五郎さんは、わたしが爲には義理ある兄さん、若いうちとはいひながら、吾妻さんに現を抜かし、あれではお内の爲になるまい。困つたものでござんすなア。

ト思ひ入れ。流行り唄、大拍子になり、向うより長五郎、羽織着流し、尻端折り。勘次、船頭にて附つき、出て來り

勘次　モシ、長五郎さん、斯うしてちやんと極まつた所は、いゝひつじとは見えねえな。

長五　いゝひつじと見えて詰まるものか。今日は此方で遊ばうと、ずつとめかして、一日船だ。

勘次　今日初めて乘つたらう。

長五　違えねえ。駕籠を逆に乘る玉だ。

ト云ひながら、舞臺へ來り、お早を見附け

勘次　モシ、玉といやァ、素敵な玉だ。

長五　どんな玉だ。

ト　お早と顔見合せ

はや　ヤ、あなたは。

長五　お早か。

はや　旦那様、どうなされました。

勘次　イヤア、こりやァ隱し藝があるの。

長五　なんと、どうだ、きつからう。

勘次　こいつァ恂りだ。

はや　ほんに、お屋敷を出ましてから、承りますれば、お家の騷動。

長五　アヽコレ、野暮な話しは云はぬ事……それはさうと、おぬしやァ今では、どこに居る。

はや　ハイ、私しは、藤屋と申す、商賣屋に居ります。

勘次　それぢやァ藤屋の輕子衆か。

長五　道理で以前に引かへて、大そう粹になつたと思つた。

はや　あんまり粋にもなりませぬわいな。
勘次　藤屋の內では板頭は、吾妻さんが評判だ。
長五　その吾妻は買へまいか。
はや　買へぬ事もござんせぬが。
勘次　吾妻さんなら滅法だ。これから直ぐに行くとしませう。
長五　剛氣に藤屋を勸めるが、小釣りが餘計出ると見えるな。
勘次　なにサ、さういふ譯ぢやァねえ。
長五　二朱で三百釣りを出すと、五百五十が酒肴、六百出しやァ氣まゝといふ、唄より五十廉くつく。
勘次　その代り水ッぽくて、肴がプンとして、おまけに出る玉が化け者だ。
長五　誰れが、そんな所へ行くものだ。
はや　イエ〳〵、わたし共の方は、そんな事はござりませぬわいな。
長五　これでも云はゞ元主人、おれに嘘は吐くまいな。
はや　なんで嘘を吐きませうぞいな。
勘次　嘘ぢやァねえ、吾妻さんを見なすつたら悔りだ。

長五　ほんに、いゝか。
はや　マア、行つて御覧じませいな。
勘次　それぢやァ長さん。
長五　やツつけようか。
はや　サア、ござんせいな。

ト浪の音、佃になり、三人、向うへ入る。これにて道具ぶん廻す。

本舞臺、一面の平舞臺、正面、節の入りし杉戸、横は塗り骨、升組みの障子。よき所に覗きの穴を明け、花道いつもの所へ階子の上がり口を取りつけ、すべて藤屋二階の體。流行り唄にて道具とまる。

ト階子の口よりお菊、輕子の拵らへにて、煙草盆と、盆へ茶碗を載せ、持つて出て來り、跡より以前の與兵衞、羽織着流しにて出て來り、舞臺へ來て

與兵　コレ〳〵、女中、恥かしながら、當所へ初めての者なれば、萬事よろしく頼みますぞ。
きく　畏まりました……子供衆は、新造衆に致しませうか。
與兵　イヤ〳〵、子供はいらぬが、女郎を出してもらひたいのだ。

きく　イエ、子供といふは、女郎衆の事でございますが、新造衆にしませうか、年増衆にしませうか。

與兵　どうか藤屋で評判の、吾妻どのを買はせて下さい。

きく　吾妻さんでございますと、廻しがございますが、よろしうございますか。

與兵　ナニ、廻しとは。

きく　外にお客がございますから、お斷わり申します。

與兵　外に客があつてもよい、どうか吾妻を買はせて下され。

きく　ハイ〳〵、お望みなら、お出し申しませう……與五郎さんは來て居なさるし、よしなさればよい事を。

與兵　なんぢやと。

きく　イエ、此方の事でございます。

ト此うち與兵衞、金を一分、紙へ包み

與兵　コレ、女中、骨は盗まぬ、取持つて下され。

ト出す。

きく　これは有り難うございます……それぢやア、これに居て下さいまし。

與兵　ハテ、どこでもよい。

ト與兵衞を上手屋體に入れ、お菊は下手へ入る。階子の口より以前の長五郎を先に、勘次、お早附いて出て來り

はや　マア、爰に致しませう。

ト よき所へ住ふ。下手より小ぢよく、盆へ茶碗を載せ、持ち出て來り、兩人へ茶を出す。

長五　カウ、てめえ、どこだ、越後か。

小ぢ　イヽエ、わたしやア能登。

勘次　なんだ、能登だ。滅法界もねえ田舍だな。

小ぢ　お前も田舍者の癖に。

勘次　この餓鬼ア

ト立ちかゝる。

小ぢ　馬鹿やアい。

ト逃げて下手へ入る。引違へてお菊、硯蓋と銚子を持つて出て來り

きく　これはどなたも、ようお出でなされました。

勘次 お菊さん、忙がしいの。
きく オヤ、見違へたよ。
勘次 今夜は、お客だものを。
きく 飛脚ぢやないかえ。
はや お菊どん、ちよつと。
ト お早、お菊に囁く。お菊、うなづく。
長五 どうも初會は、此うちが否だ。
はや 一つお始めなされませな。
長五 水ッぽい酒か。
ト 杯を取る。お早、つぎながら
はや そんな物はあげませぬ。
ト 長五郎、飲んで
長五 こいつは滅法だ……サア、勘公。
勘次 滅法とは、善いのか惡いのか。

長五　マア、飲んで見さッし。

　ト勘次、飲んで

勘次　成る程、こいつァ滅法だ。

長五　時に、お早どん、と云はなくつちやァ鹽梅が悪いが、えてはまだか。

はや　アイ、直ぐでござりますよ……お菊どん、お早くと申しておくれ。

きく　アイ〳〵。

　ト下手へ入る。始終騒ぎにて、三人、捨ぜりふで酒を飲む事よろしく、よき程に下手より吾妻、出て来り、障子の覗きより座敷を見て

吾妻　お早どん、爰かえ。

はや　吾妻さん、入りなさんせ。

　トこれにて長五郎、眞面目になる。吾妻、入り、上手へ住ふ。長五郎、ちよつと見て、いゝ女だと、勘次に思ひ入れ。

勘次　カウ、藝者を呼ばうか。

長五　エヽ、氣の利かねえ。有ッたけ呼ばッしな。

勘次　ナニ、有ツたけ

　　ト立ちかゝる。

長五　ア、コレ

　　ト指を二本出して見せろ。

勘次　ソレ、見た事か。

　　ト勘次、下手へ入る。お早、杯臺を持ち

はや　お杯を。

　　ト長五郎の方へちよつと出し、吾妻の前へ見せ

アイ、モシ

　　ト吾妻、思ひ入れあつて

吾妻　お早どん、この杯を受けてもいゝかえ。

はや　なぜ。さしでもござんすか。

長五　何もおらア爰の内で、さしを突かれる覺えはないに。

吾妻　イヽエ、ござんす。

長五　なんと。

ト この以前より下手へ、八重人、お松、お源、おべん、おせん、いづれも裲襠を羽折りし女郎形にて覗きより窺ひ居て

皆々　わたしらがさしでござりますよ。

ト 皆々ドヤ〳〵と座敷へ入る。長五郎お早、悔りなし

長五　こいつは大變。

ト 長五郎、逃げようとするを、八重人、支へて

八重　モシ、長五郎さん、お前、わたしを忘れてか。音羽に居た八重人でござんす。忘れもせぬ、去年の暮れ、春の仕舞ひをして下さんした。ほんにその時しみ〴〵と、わたしや嬉しうござんしたがそれなり札はてんでなし、たうとう溜る借金に、春から爰へ來て居れど、どこぞで逢つたらこの恨みを、云はう〳〵と、待つてゐたのぢやわいなア。

ト 八重人を掻きのけ、お松、長五郎の胸づくしを取り

まつ　わたしや常磐町に居たお松でござんす。いつぞや初會に大一座、まだ出ぬ先から藍微塵、あの客人に出たいものと、思つた念が屆いてか、わたしが丁度お前の相方、ほんに惚れたの脹れたのと、

氣休めばかり云はしやんして、後でも來るか、それッきり。

ト又お源出て

けん　モシ、わたしや根岸のお源でござんす。王子歸りが緣となり、二三度續けてござんしたが、わたしに過ぎた客人ゆゑ、歸りに一口飲みなさんせと、客人から貰つたお金を、三兩あけたらそれつきり、鼬の道を切つたやう。

べん　わたしやお旅のおべんでござんす。友達衆の附合ひゆゑ、尤もだと思へど、兎やかうと云ひなさんすを誠と思ひ、年季を入れて達引いたら、音信不通で便りなし。

せん　モシ、わたしにもちつと云はせて下さんせ……モシ、長五郎さん、お前はなア〳〵。わたしを忘れておしまひか。小塚のおせんでござんすぞえ。大師歸りでござんした時、あれ程よくしてあげたのに、湯本細工の獨樂同樣、よく捻りッ放しにしなさんして、親讓りの額を、凹ませておくれだね。

八重　わたしら五人がさしなれば

まつ　顏を立てゝ下さんせにや

けん　吾妻さんの客にはせぬ。

べん　お前も色では苦勞人。
せん　潰れた額を
五人　立てゝ下さんせいなア。
　　ト皆々、長五郎を取卷く。
はや　モシ、長五郎さん、どうなされたのでござります。
長五　我が身ながら、呆れかへつて物が云へねえ。
吾妻　ぬし達の顔を立て、さうした上でわたしをば、呼ぶなら呼んで下さんせ。
長五　それだといつて、この五人に
八重　どうして顔をお立てだか、わたしや是非ともお前をば、お客にせねばならぬわいな。
まつ　お前より、わたしが主を
けん　みんなが客にする氣なら
べん　わたしらとて同じ事
せん　嫌だといへば腕づくでも
五人　客にせにやならぬわいな。

長五　こいつは堪らぬ。

ト長五郎、逃げにかゝるを、皆々引ッ捕へ

八重　いつその事に、みんなが寄つて

五人　後日の見せしめ。

ト皆々、長五郎に立ちかゝるを、お早、この中へ入り、留めて

はや　マア〳〵、待つて下さんせ。お前達の云ふのが尤も。どうとも顔の立つやうに、わたしが附けるその間、子供衆は只の一人も、呼ばせもせず、寢させもせぬ、まだその上に歸しもせぬ。譯を附けるそれまでは、二階へ留めて置く程に、明日の朝まで此お方を、わたしに預けて下さんせいなア。

八重　イエ〳〵、性惡な客人ゆゑ

五人　預ける事はならぬわいな。

はや　そりやさうでもござんせうが、斯ういふ事を捌くのが、わたしの役でござんすほどに、不肖でもござんせうが、どうぞ預けて下さんせ。

吾妻　お早どんがあのやうに、請合ふといふからは、預けてやつて下さんせいな。

八重　吾妻さんがその氣なら、わたしらも共々に
まつ　明日まで預けるその代り
吾妻　わたしを始め、皆さんの
はや　きつとお顔の立つやうに。
五人　そんなら、お早どん。
吾妻　預けたぞえ。

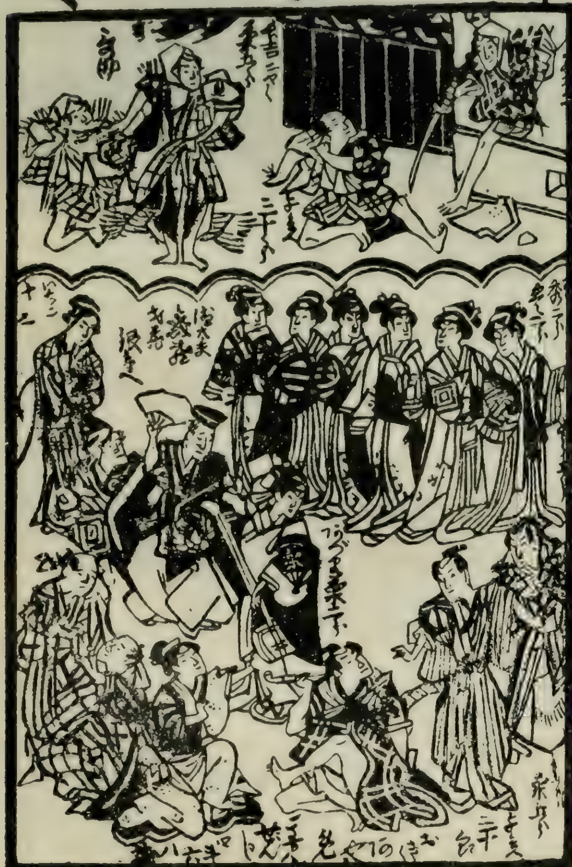
ト佃になり、吾妻先に皆々、下手へ入る。長五郎お早、殘り

はや　ほんにマア、若旦那樣、お前樣には、呆れますわいな。
長五　實の事、おれも呆れた。何にしろこの始末は、お早、どうしたらよからう。
はや　どうというて仕樣もないが、いつそ今夜は、みんな廻しに。
長五　とんだ事を云つたものだ。それ程の事でもねえに……併し、今から歸るのも
はや　イエ、此まゝお歸し申されないから、今夜は辛抱なされまし。
長五　一人寢るのも、詰まらぬ事だ。

トこの時、廻し男、床を二組持つて來る。

二番目序まく





廻し　ハイ、お床を。

はや　そこへ取んな。

　　ト廻し男、向うへ床を取る。

　八どん、そこは誰れだえ。

廻し　吾妻さんの廻し床サ。

長五　ナニ、吾妻が廻し床だ。そいつァ氣障だな。

　　ト云ひながら床の上へ上がる。廻し男、下手へ入る。

はや　それぢやァ若旦那、行つて來ますよ。

長五　いよ／＼おれ一人か。

はや　ゆるりとお休みなされませ。

長五　どう寢られるものか。

　　ト騒ぎ唄にて、お早、屏風を廻し、下手へ入る。引違へて下手より與五郎、出て來り、下手の床へ入る。小ぢよく、茶を持つて來る。跡より吾妻、寢まきの形にて出て來り、小ぢよく、下手へ行くを

吾妻　カウ、あの子や。

ト呼ぶ、小ぢよくに囁く。小ぢよく、下手へ入る。

お前、何をしてゐるのだ。

與五　いま上がつた客が、氣になるによつて

吾妻　それについて、話しがあるよ。

與五　あるなら早く云つたがよいに。

吾妻　マア、寢てから話さうわな。

ト煙管へ吸ひつけて出す。

與五　なんだか今夜は寒いな。

吾妻　また雨氣づいたからサ。

與五　降られるのは眞平ぢや。

ト流行り唄になり、吾妻、屏風を立て廻す。上手の屏風より長五郎、出て、これを聞いて思ひ入れ。下手よりお早、出て來るゆゑ、ちやつと床へ入る。お早、床へ來て

はや　まだお休みなされませぬか。

長五　どう一人で寢られるものか。それについて、おぬしにちつと用がある。聞いてくれるか。

はや　以前を云へばお主樣、身に叶うた事なれば
長五　なんでも否とは云はねえか。
はや　その御用と仰しやるのは
長五　その用といふのは……これよ。
トお早を引寄せる。
はや　アレ、惡い事を
長五　あんまり惡くもねえ事よ。
ト唄になり、屏風を引廻す。舞臺廻る。

本舞臺、三間の間、上手へ寄せて二間の土藏、切り破りの仕掛け。上の方、町木戸、この後、町家の片遠見。下の方、一面に忍び返し附きの黑塀。うしろ黑幕、見越しの松。日覆より同じく吊り枝。土藏の前に用水桶。すべて早野屋裏手の體。時の鐘にて道具とまる。
ト下手より以前の有右衞門、頰かむり、尻端折り、懷へ鋸を入れ、出てくる。上手より夜蕎麥賣り、荷を擔ぎ、出て來る。

有右　コレ〳〵、蕎麥屋、少し古風なやうだが、もう今夜は何時だ。
そば　ハイ、今し方、九ツを打ちました。
有右　夜は大さう短かいな。
そば　今が峠でござりまする。
有右　蕎麥屋、一杯くりやれ。
そば　ハイ〳〵。
　　　ト蕎麥を拵らへて出す。有右衞門、食つて
有右　こりやア滅法いゝ蕎麥だ。
そば　夜鷹蕎麥でも、惡くては賣れませぬ。
有右　ソレ、手を出しやれ。
　　　ト錢をやる。
そば　有り難うござります……蕎麥イ〳〵。
　　　ト呼びながら下手へ入る。跡見送り
有右　先づ蕎麥屋の行燈で、とつくりと見屆けたが、この土藏が文庫藏だな。何にしろ、お師匠樣の長

吉は、どうしたか。ツイにやつた事がないから、おれ一人ではむづかしい。

ト懐より鋸を出し

この鋸で切れりやアいゝが。

ト切る眞似する。鋸、抜ける。

なんぞ爰に、かいたいものだ。

ト懐より以前の手紙を出し

これを巻いて、差して置かう。

ト手紙を引裂き、グル〳〵と巻き、柄へ差し

これでよし〳〵。

ト下手より縫ひぐるみの犬出て、吠える。

コレ、吠えるな〳〵。こいつはどうか喰ひつきさうだ。

ト後へ下がる拍子に、用水桶にぶつかり、上の石、バッタリと落ちる。この音に驚ろいて飛びのき

エヽ、恟りした。

ト胸を撫でる。時の鐘のダラにて、この道具廻る。

本舞臺、元の部屋の道具になる。以前の與五郎、吾妻、居るた、若い者三人、詰め寄せてゐる。これたお菊、留めてゐる。よき所に丸行燈。流行り唄にて道具とまる。

きく　これサ、喜助どん、靜かに云つても解る事だわね。

若一　大きな聲は、おれの持ち前だ。

與五　こなさん方は、何をそんなに、筋を出して云ひなさるのだ。

若一　云はないでどうしますものか。勘定の方の附くまでは、二階を迫いて置いたのに

若二　筋道もつけなさらず、野面で二階へ上がられては

若三　默つちやァ居られませぬ。

與五　迫かれてゐるこの二階へ、道を附けずに上がつたのは、これはわしが惡かつたが、昨日や今日の馴染みではなし

吾妻　隨分主にやァお前方も、世話になつた事もあらうのに

與五　大目に見ても、よいではないか。

若一　そりやァお前の手前勝手。お客に祝儀を貰ふのは、こりやァわつちらの役得だ。

若二　大目に見ろと云ひなさるなら、大目に見まいものでもないが

若三　お部屋で承知しませぬから、二階を下りて下さりませ。
與五　下りろと云ふなら下りもせうが、おれも顔を賣る商賣。藤屋の二階を下ろされたと云はれては、顔が立たぬ。
吾妻　お前ばかりか、わたしとて、八幡山さんとはこの土地で、浮名の立つた二人が仲。わたしも顔が立たぬわいな。
きく　お二人さんの恥にもなれば、今日の所は喜助どん、お前、呑みこんでおくれな。
若一　どうして〳〵、假初めにも五十間だ。どう呑みこんで置かれるものか。
若二　顔が立たずば立つやうに
若三　勘定をして遊びなさい。
與五　勘定をして遊ぶ位なら、てまへ達にこめられやしねえ。
若一　何もこめやしませぬが、方の附くまで斷わつた、二階へ默つて上がりなさりやァ、盜人も同然だ
與五　ナニ、盜人ぢやと。
ト立ちかゝろ。吾妻お菊、留めて
きく　アヽ、モシ、關取、腹も立たうが、折が悪い。立ち騷いで下さんすな。

吾妻　お前の顔が潰れたら、わたしが意趣を返すほどに、どうぞ堪えて下さんせ。
與五　それだといつて、盗人と吐かすから。
吾妻　サア、勘定せぬが誤まり。どうぞ默つて居て下さんせいな。
若一　盗人だと云はれるのが
三人　口惜しければ、勘定しなさい。
與五　ムウ。
若一　その勘定は出來まいが……出來ずば二階を
三人　下りなさい。
きく　なんの遺恨でお前方は、そんなに邪慳に云ひなさんす。關取より吾妻さんが、意地になつたら内の損、そこへ心が附かぬかいな。
若一　心の附かない事もないが、この關取が悪足ゆゑ、好い客衆が放れたから、こんな事で恥かゝせ、二人が仲を引裂くのだ。
吾妻　そりやお前、悪い料簡。否な客でも意氣張りでは、呼び通すのが土地の風。まして互ひに惚れた仲。どうこれぎりになるものかいな。

若一　ならざア此方も意氣張りだ。

若二　五十兩の金を出すか。

若三　金が出來ずば二階を下りるか。

與五　サア。

若一　金を出すか。

與五　サア

四人　サア〳〵。

吾妻　そんなら、どうでも

若一　金が出來ずば

三人　引摺り下ろすぞ。

ト三人、立ちかゝる。この以前より、上手の障子を明け、與兵衞、窺ひゐて、いろ〳〵思ひ入れあつて、この時、前へ出て

與兵　その勘定は、これでさつしやれ。

ト五十兩包みの金を出す。

與五　ヤ、お前は先刻に

與兵　ア、コレ。

ト押へる。誂らへの合ひ方になり

何にも云はず、この金で

ト顔にて教へ、思ひ入れ。

與五　この場の難儀を濟ませよとは。

吾妻　仇を恩なるお前の心。

與兵　浮世を知らぬわしながら、爰らが江戸の男氣かと、持ち合せた五十兩、こなたへわしが貸しませう。

與五　お志しは忝いが、見ず知らずのこなさんに

吾妻　此お金を借りましては。

與兵　濟まぬといふも尤もながら、何を隱さう吾妻どのに、惚れて爰へ上がつたが、一方ならぬ二人が仲、傍で思ふは無駄な事ゆゑ、心で心に意見をして、フッツリ思ひ切つたる與兵衞、金でせかして自由にせうと、思つた金も不用ゆゑ、男は當つて碎けろと、二人が難儀を見兼ねて貸す金、心

置かずと遣はつしやれ。
與五　そんなら二人が、難儀を見兼ねて
吾妻　この金貸して下さんすか。
きく　見掛けによらぬお客さん。
與兵　土地の勝手は知らざれど、まんざら野暮でもなからうかい。
與五　エヽ、有り難うござりまする。
若一　サア、金が出來たら、ちつとも早く
與五　ソレ、おれが借りの五十兩。
ト出す。若い者一、取つて改める。
與兵　金を取つたら、こなさん達も
若一　これでお部屋へ顔が立ちます。
與五　潰れた顔の返報は
トくらはさうとするを、與兵衞とめて
與兵　その腹立ちも、わしに免じて

吾妻　そんなら此まゝ
きく　長居は恐れ。
若一　ぶたれぬうちに
與兵　早うござれ。
三人　有り難うござりまする。

ト三人、コソ〱と下手へ入る。あと與五郎、手を突いて

與五　力づくにも腕づくにも、ゆかぬこの場を救はれし
吾妻　與兵衛さんの志し。
兩人　なんとお禮を申さうやら。
與兵　アヽ、モシ〱、その禮には及ばぬわいの。
與五　イヤ〱、及ばぬどころか、こなたへは、詞で禮は盡されねば、この八幡山が禮代りに、進ぜたい物がある。
與兵　禮代りにこなたから、この與兵衛へ下さる物とは
與五　この吾妻を進ぜたい。

與兵　何と云はつしやる。
　　　ト誂らへの合ひ方になり
與五　いはゞ戀の遺恨ある、この八幡山を恨みもせず、惚れた吾妻を思ひ切り、金まで出して下されて難儀を救ひし心に惚れ、わしは吾妻を思ひ切り、こなたへ進上しますゆゑ、可愛がつてやつて下さりませ。
吾妻　エ、そんならわたしを、與兵衛さんへ。
きく　お禮にお讓りなさんすか。
與五　惚れた吾妻を讓らねば、男の義理が立たぬわい。
與兵　イヤ、その志しは忝いが、この吾妻は貰はれぬ。
與五　とは又、何ゆゑ。
與兵　深切ごかしに五十兩、金を貸したも有やうは、吾妻を讓つてもらはうゆゑと、云はれた日には折角の、わしが心も無になれば、吾妻どのは貰はれぬ。達てとあれば元々に、金もこなたに貸されぬ譯。
與五　それではどうも濟まぬ義理。

與兵　ハテ、濟むも濟まぬもいらぬのは、こなたに貸した五十兩、あれはわしの金ではない。
與五　して、その主は。
與兵　いづくの誰れか知らねども、洲崎よりの歸り道、往來稀れな川端で、空飛ぶ雁が落せし財布、取上げ見ればその中に、入れてあつたる五十兩。
吾妻　そんなら雁が
きく　落せし金を
與兵　サア、拾つたところから心變り、金さへ出せば吾妻どのも、買はれる事と知るべへ行き、羽織を借りて姿を變へ、怖々上がつたこの二階。一人マヂ〳〵床にゐて、八幡山どのが難儀を聞き、アア氣の毒だと思うたら、惚れた心もどこへやら、見兼ねて救ふも、なんぞの緣。かゝる譯ゆゑ、必らずその金、心に掛けさつしやるな。
與五　さういふ事なら詞に隨ひ、お借り申して置きませう。
與兵　それでわしも安堵しました〻、
きく　ほんに、これは、どうした御緣か。
吾妻　どうぞこれから同胞同樣。

與兵　わしが内へも尋ねて下され。
與五　して、こなた樣の内といふのは
與兵　品川の鮫洲にて、與兵衛といふ、わしは駕籠屋。して、八幡山どのは。
與五　藏前の八幡町で、山崎屋といふ、内は米屋。
吾妻　互ひに所が知れた上は
與兵　必らず尋ねて
兩人　參りませう。

ト時の鐘。

與兵　イヤ、戀ひ焦れたその念が、覺めては片時居られぬ所。お暇申して歸りませう。
與五　歸るというても遠い道。
吾妻　今宵は爰でゆつくりと
きく　夜通しお話しなさんせいな。
與兵　イヤ、獨り者ゆゑ、内が物騷。
與五　それだといつて、これから鮫洲へ

與兵　歩くは、わしが商賣サ。
吾妻　そんなら、どうでも
きく　これからお内へ
與兵　ドリヤ、三枚で急がうか。

ト唄になり、與兵衞先に、吾妻與五郎お菊附いて、障子の口へ入る。これにて道具廻る。

本舞臺、前の土藏の道具。壁、切り破りあり、時の鐘にて道具とまる。

ト時の鐘、合ひ方にて、向うより長五郎、頰かむり、尻端折り、羽織を疊んで肩へ掛け、出て來り、花道にて

長五　今の間に曇つて來たが、どうでも今夜は雨だわえ。その雨よりもお早に逢ひ、思ひがけなく濡れて來たが、……本降りにならねえうち、ドレ、急いで歸らうか。

ト右の鳴り物にて、舞臺へ來る。この時、壁の切り穴より、有右衞門、茶入れの箱を咬へ、鋸を持ち出て來る。長五郎、恟りして窺ふ。有右衞門は長吉と心得

有右　コレ、そこに居るのは、長吉か。

長五　エヽさう云ふ聲は

有右　倉岡有右衛門だ。

長五　エ。

ト惘りして、樣子を窺ふ。有右衛門、透かし見て

有右　まんまと首尾よく、千葉家の重寶、狂言袴の茶入れを盜んだ。

長五　エヽ。

ト驚ろく。有右衛門、向うへ思ひ入れあつて

有右　向うへ誰れやら來る樣子。おれが持つてゐるのも險吞。これはこなたへ渡して置かう。

ト茶入れを出す。長五郎、〆めたトいふ思ひ入れにて、懷へ入れる。この途端に向うより以前の與兵衛、出て來る。これにて有右衛門は上手へ、長五郎は下手へ小隱れする。與兵衛、舞臺へ來る。有右衛門出て、行きあたり、ちよつと立廻り。爰へ長五郎出る。與兵衛、有右衛門を突く。タヂ〳〵として長五郎へ行き當る。これにて有右衛門、鋸を落す。これを與兵衛、拾ふ。長五郎、ちよつと立廻つて有右衛門の懷より、手紙の裂れを引出す。よき程に上手より、お早、藤屋と書きし大きなぶら提灯を持ち、出て來り、何心なくこの中へ入る。有右衛門、提灯を打ち落す。時の鐘、忍び三重やうの鳴

り物にて、ちよつと立廻り。長五郎、摺りぬけて花道へ行く。

與兵　慥かに今のは

トこの聲に長五郎、ベツタリと下に居る。與兵衞は鋸を逆に持ち、有右衞門を捻ぢあげる。お早は落ち散りし手紙の裂れを取上げる。双方見合つて木の頭。長五郎は一散に向うへ入る。これにてキザミ佃にて、ひやうし

幕

二幕目

八幡町山崎屋の場

本所石原岩淵の場

役名――駕籠舁き、與兵衞。山崎屋與五郎。同妹、お關。南方娘、お照。與五郎母、妙貞尼。三原傳藏。同若黨、丹平。倉岡有右衞門。福田屋六兵衞。乳母、お勝。丁稚、長太。非人、野手の三。同、下駄の市。同、音。同、長。駕籠屋甚兵衞。若者、麥六。同、粟藏。髮結ひ、濡髮の長五郎。畫鳶、引窓小僧長吉。

本舞臺、三間の間、上寄りに常足の二重。上手、障子屋體。正面、暖簾口。上手、戸棚。下手、鼠壁。

帳面なぞの書割り。二重下手、落ち間。うしろ板羽目。この前、舂臼。いつもの所、門口。爰に八助、三助、唄を唄ひながら杵を踏んでゐる。この前に麥六、粟藏、俵を片附け、一人は叺へ米を量つてゐる。二重に妙貞、絹やつし、尼の形にて、綿入れ羽織を縫ひ直してゐる。この側に六兵衞、老けたる町人の形にて住ひ、門口に米買ひの町人、立ちかゝりゐる。すべて八幡町、舂米屋の見世先の體。てんつゝ、角兵衞獅子の鳴り物にて幕明く。

ト皆々よろしくあつて

町人　モシ／＼、米の代金一分二朱は、慥かにお前へ渡しましたよ。

麥六　アイ、慥かに受取りました。

粟藏　今直ぐに跡から、糠と一緒に、お宅へ持つて參ります。

町人　お氣の毒だが、どうぞ私しと一緒に、持つて來て下さいまし。

麥六　左樣なら、一緒に持たせてあげませう。

妙貞　あなた、毎度有り難うござります。

六兵　イヤモウ、こちのお内は、米の量りがよいといふ評判で、ようお商ひがござりますの。

妙貞　成るたけ骨を折るつもりでござりますが、あまり高うなりますので、お氣の毒のやうでござりま

する。

麥六　オイ〱、八助どん、この叺を、あなたと一緒に、持つて行つておくれ。

八助　アイ〱。合點でござります。

麥六　三公はこの米を、裏町の伊勢六さんへ、持ちこんでくんなせえ。

三助　アイ〱……そんなら八公、一緒に行かう。

麥六　ヘイ、あなた、お待ち遠でござりました。

町人　それでは一緒に賴みます。

妙貞　どうぞ旦那へも、よろしう仰しやつて下さりませ。

町人　ヘイ、おやかましうござりました。

ト矢張り右の鳴り物にて、町人と米搗き男の兩人は下手へ入る。

六兵　イヤモウ、商ひがあるので、近所のわしさへ喜びます……それはさうと、妙貞さま、今日は、よう娘御のお闘どのを、觀音樣へやらつしやりました。わしが娘も、お闘どのと連れ立つての物參り、天氣がようて、仕合せな事でござりまする。

妙貞　今日は又、よう誘うて下さりました。わしが連れて行きたうても、見世が忙がしいゆゑ、それな

りに致して置きましたに、お前さんのお内様が、お誘ひなされて、あの子も仕合せ。ほんに、お世話でござりませう。

六兵　なんの〱。併し、娘御のお關どの、病氣も本腹なされて、おめでたうござりまする。その上に この節は、兄御の與五郎どのも心が直つて、精を出されるので、お前も御安堵と申すものでござります。

妙貞　ハイ〱、兄が商賣に歸るやうになつたので、わしも落ちつきましてござりまする。

ト此うち麥六、粟藏は、俵を拵らへながら

麥六　モシ〱、阿母さま、與五郎さんは、精出して結構な事ぢやが、あのやうに始末をさしつては、見世の者が續きませぬ。

粟藏　さうとも〱、荒骨を折るわし等に、鰯一疋食はさぬゆゑ、これでは體が續きませぬ。

麥六　それに又、お關さんのブラ〱病ひ。ありや大方、男を思ふ、戀煩ひでござりませうぞえ。

粟藏　さうぢや〱。戀煩ひ〱、戀病みに相違ござりませぬ。

トわや〱云ふを、妙貞、押へて

妙貞　これはしたり、こなた衆は、どうしたものぢや。始末するのは商人の習ひぢや。そしてマア、益

體もない、娘が噂。そんな事云ふ手間で、踏みかけた米でも、早う片附けてしまやいの。

兩人　ハイ〳〵、腹ごなしに精を出しませう。

ト兩人捨ぜりふにて米を踏みにかゝる。矢張りてんつゝ、角兵衛獅子の鳴り物になり、向うより與五郎、木綿やつし、前垂れがけ、手拭をかむり、下駄がけにて、米五俵を連尺に附け、これを脊負ひ、有右衛門の手を押へて出て來り、花道にて

有右　これサ〳〵、與五郎、もそつと手をゆるめてくれ。身共、何も貴様に、惡口を申した譯ではないわえ。

與五　なにサ、お前は惡口ではあるまいが、この與五郎が耳に觸りました。マア〳〵、内までござらつしやいといふに。

ト右の鳴り物にて、本舞臺へ來て、門口にて

サ、有右衛門さん、マア、茶でもあがつてござりませ。

ト手先を捕へ、内へ投げこむ。

有右　アヽ、痛い〳〵。これは痛い御馳走ぢや。アヽ、これでは痛み入りますわえ。

妙貞　オヽ、與五郎、戻つてかいなう。

ト與五郎は件の米を、よき所へ下ろし

與五　阿母、いま戻りました……これは六兵衛さま、ようお出でなされました。

六兵　これは〳〵、與五郎さん、イヤハヤ、聞いたよりは、大さうな力ぢやわいなう。

與五　なんのお前、こればかりの物を、人手を借りるには及びませぬ。財産を持つ心では、牛馬の眞似もせねばなりませぬ。

六兵　さうしてマア、門口にある石を、こなた、持たつしやるのか。

與五　イヤモウ、なまじ力があるゆゑに、ヤレ角力の、力持ちのと、これまで身状を持ち崩しましたが今では稼ぎ三昧、家業より外、力業は致しませぬ。

麥六　あれ聞いたか。旦那が牛馬の眞似をすると云はれては

栗藏　どうして〳〵、こちとらは、與五郎さまの氣に入らぬ筈。

麥六　どうで近々お暇ぢや。さう思うて居やれよ。

與五　また愚圖々々吐かし居るか。役に立たずの穀潰し、勝手にどこへでも出て失せをれ。

妙貞　これはしたり、折角馴染んだ奉公人を

與五　ハテ、馴染んだというて、こんな奴等は、無駄でござりますわえ。

麥六　無駄な者なら、出て行きますわえ。

粟藏　穀潰しなら、外の内へ行きますわえ。

ト　せり合ふを六兵衛、留めて

六兵　これはしたり、どうしたものだ。なんと云はれうとも、主と病ぢや。マア／＼、何も云はつしやるな。

與五　ハテ、捨てゝ置かつしやりませ。

麥六　爰の内ばかり日は照らぬわえ。

粟藏　サア／＼、出て行きますぞ／＼。

ト　兩人、門口へ出かゝると、與五郎、立ちあがり

與五　まだ愚圖々々吐かしやアがるか。土性骨を叩き折るぞよ。

ト　煙管を持つて立ちかゝるを、妙貞六兵衛、これを留める。兩人は捨ぜりふにて下手へ入る。六兵衛、跡を見送つて

六兵　イヤモウ、若い者といふものは、さて／＼困つたものぢやわえ。

與五　なんのお前、彼奴等が去んだとて、三から位の臼は、わし一人で澤山でござります。

妙貞　これはしたり、短氣な事云やつても、見世の事は間にも合ふが、飯炊きまでの眞似がなるものかいなう。

トこれまで有右衞門、腰の痛む思ひ入れにて後に居て、この時、前へ出て

有右　コレ〳〵、阿母、イカサマ、與五郎が大力ぢやというて、飯炊きの眞似も出來まい。物は相談ぢやが、この有右衞門を、飯炊きの代りに使うてくりやれ、働らいて見るつもりぢやわえ。

妙貞　モシ〳〵、お前はお侍ひ様ぢやござりませぬか。それがどうして、下男のする事をば

與五　イヤ〳〵、阿母、その筈の事でござります。此お方は今では浪人、それぢやによつて、口稼ぎで奉公すると見えますわえ。

有右　これは見通し。身共、その所存ぢや。何分ともに、口稼ぎで使うてもらひたい。

與五　それぢやア、いよ〳〵、飯炊きをやるつもりかえ。

有右　ハテ、口を乾しては居られぬわえ。

與五　その心なら使つて見ませう。丁度幸ひ、時分時だ。臺所へ行つて、手見せに飯をば

有右　何分よろしく頼みます。

妙貞　ほんに、變つた奉公人ぢやわいなう。それはさうと、コレ、與五郎、其方が角力をしてゐやつた

時のこの羽織。こりや縫ひ直して置かうかいの。

ト件の羽織を見せる。

與五　ハテ、堅氣になれば不用な羽織、お前の胴着になりとさつしやりませ。

妙貞　そりや忝うござるわいの。

ト針箱と共に、よき所へ置き

それはさうと、申し出したお話しをば

六兵　ハイ、承つた上で、お暇と致しませう。

有右　然らば身共は飯炊き奉公。コリヤ、與五郎……ではない、旦那樣。

與五　勝手へござつて、飯の支度を

妙貞　六兵衞さまは中の間にて

有右　ドリヤ、飯に逢ひませうか。

ト唄になり、妙貞六兵衞は障子屋體へ、有右衞門はこなしあつて奥へ入る。與五郎は片手にて俵を片寄せる。この唄にて、向うより長五郎、町髪結ひ、好みの拵らへにて、鬢盥を提げ、足早に出て來り直ぐに舞臺へ來て門口を明け

長五　ヘイ、御免なさりませ。大きに遅くなりました。

ト内へ入る。

與五　オヽ、長五郎どのか。忙がしいに、御苦勞でござる。

長五　イヤモウ、直ぐに參らうと存じましたが、例の越後屋の番頭の、髭に摑まり、大きに遅くなりました。さうして、お月代でござりますか。

與五　イヤ、月代ではござりませぬ。お前を呼びにあげたのは、ちと折入つてお頼みが……幸ひ、あたりに人も無し、若旦那、先づ〳〵あれへ。

ト合ひ方。

長五　なんと仰しやります。

ト與五郎、門口を締め、あたりへ思ひ入れあつて、長五郎を上座へ直す。長五郎、合點のゆかぬ思ひ入れ。

アヽモシ、與五郎さま、何か仔細は存じませぬが、改まつて此やうに、私しを上座へお直しなされて、一體、なんのお頼みで

與五　サア、そのお頼みと申しますは

ト合ひ方になり

今さら云ふにも及びませぬが、お前様には誰れあらう、千葉さまの御重役たる、橋本次部右衛門さまの、その御二男の長五郎さま。お出入り致す縁により、親旦那様の御推擧にて、妹お關を千葉さまへ、お側勤めに差上げしが、奥様の御意に入り、身の面目にあなた様へ、末は縁附き遣はせとの仰せ。妹が喜び、親兄まで、冥加にあまりし縁談と、待ちに待つたる甲斐もなく、寶の紛失、それゆゑに、親旦那様には上よりお咎め。その御二男のあなた様も、詮議の爲の御浪人。それより妹も力無く、宿へ下がりてぶら／＼病ひ。それを癒すは信心や、名醫にかけても驗はない、只お前樣のお情にて、祝言なされて下されば、その杯が何より良藥。頼みといふは爰の事。たつた一人の妹を、助けると思し召して、お否であらうが長五郎さま、添うてやつて下さりませ。

長五 何の用かと思ひましたら、妹御の事でござりますか。そりやモウ、こなたが頼まずとも、この縁談はお上にまで、疾から知れし縁組みゆゑ、なんの否やがござりませう。以前の縁に浪々の、今のこの身を深切に、お世話下さる與五郎どの、その妹御の事なれば、直ぐにも添うてやりたいがこなたもかね／＼知つての通り、紛失なしたる寶をば、詮議仕出して父上の、お咎めゆれぬ其う

ちはと、思はぬ延引いたせしが……與五郎どの、喜んで下され、その茶入れは手に入りました。

與五　エ、なんと仰しやる。アノ茶入れが、お手に入りましたか。

長五　サ、これでござりまする。

ト鬢盥の抽出しより件の茶入れを出して見せる。

與五　アノ、この品が

ト見て

それは何よりおめでたうござります。それさへ殿へ差上げなば、少しも早く妹が縁談……さうして、それは、どこでお手に入りました。

長五　これには少し譯あつて、計らず我が手に入りし茶入れ。これと申すも信心の、神の利益でござらうわい。

與五　成る程、左樣でござりませう。……それさへお手に入るなれば、最早近々御歸參の

長五　今の姿に引替へて、以前の橋本長五郎。

與五　先づそれまでは町髪結ひ、矢張り濡髪長五郎どの。

長五　お得意先の與五郎さま。

與五　アヽ、これが浮世か、さま〴〵に
長五　移れば變る
兩人　世の中ぢやなア。
　ト矢張り合ひ方にて、向うより丹平、前幕の若黨の形にて出て來り、門口を明けて
丹平　このお內に、髮結ひの長五郞どのが
　ト長五郞を見て
ヤ、あなたは長五郞さまではござりませぬか。ヤレ〳〵嬉しや、あなたにお目にかゝらねばならぬ用事がござりまして、町內中を一遍とお尋ね申しました。
長五　オヽ、傳藏どのゝ若黨、丹平どの。丁度わしも、お目にかゝりたいところ。お上に於てお尋ねの彼の茶入れが
丹平　サ、あなたのお手に入りしとの、御家中の噂。それについて、若殿樣より、お前樣を俄のお尋ねそれゆゑわざ〳〵御住所を、尋ねましたのでござりまする。
長五　それは御苦勞でござりました。若殿のお召しとあれば、かね〴〵願ひ居りました、お目見得の事でござりませう。それなれば、早速これより、御同道を致しませう。

丹平　ヘイ〱、左様がよろしうござりませう。
　ト此うち與五郎、思ひ入れあつて
與五　左様なら、あなた様が、三原さまのお使ひでござりますか。それは御苦勞でござりまする……そんなら直ぐにも、お屋敷へ
長五　それゆゑ心も飛び立つばかり。サヽ、丹平どの、ちつとも早く。
丹平　お供いたすでござりませう。
　ト立ちあがり、門口へ出にかゝる。與五郎、長五郎を留めて
與五　長五郎どの、今の事を。
長五　そりや呑みこんで居りますわえ。
丹平　サ、ちつとも早く。
長五　與五郎さま……行つて參りまする。
　ト唄になり、長五郎、ちよつと侍ひの思ひ入れあつて、鬢盥は舞臺へ置き、丹平附き、花道へかゝる。この唄にて、向うよりお勝、日傘をさしかけ、お關、振り袖の世話娘、餘所行きの拵らへ。長太、丁稚にて、雷おこしの袋を下げ、供をして出てくる。花道よき所にて長五郎と行きあひ、思ひ入れあつ

て入れかはり

かつ　オヽ、髪結ひの長五郎さん、忙がしさうに、まだ仕事かえ。

長五　オヽ、福田屋のお乳母どのか……オヽ、お前はお關さま、どちらへお出でござりました。

ト お關、思ひ入れあつて

せき　ハイ、今日は福田屋のお福さんと、觀音樣へ參りましたわいなア。

長五　それはマア、よくお參りなされました。さぞマア、お草臥れでござりませう。

せき　ハイ、いかう草臥れましたわいなア。さうして、お前は、今から、どちらへお出でござんすえ。

長五　ヘイ、急な用事につきまして、お屋敷まで參りまする。

せき　モシ、長五郎さん、何もお案じ申す事ではござんせぬかいなア。

長五　イエ〳〵、極上々といふ、めでたい事でござりまする。

ト 此うち丹平、思ひ入れあつて

丹平　先づ、お話しは、後でゆつくり。

長五　左樣ならば、お關さま。

せき　長五郎さん

長五　ドリヤ、行て參りませうか。

ト矢張り右の唄にて、長五郎、思ひ入れあつて、丹平附き、向うへ入る。お關も長五郎に思ひ入れあつて、よろしく舞臺へ來り、門口へ來て

せき　母さん、いま戻りましたわいなァ。

與五　オヽ、妹、戻つてか。今日は好い氣晴らしをしやつたな。

かつ　ハイ、お關さんをお送り申しましたわいなァ。

與五　オヽ、これはお乳母どの、お世話でござりました……モシ、阿母、妹が歸りましたぞえ。

妙貞　オイ／＼。

ト合ひ方になり、奥より妙貞、出て來り

オヽ、お關、戻つてかいなう……これは、お乳母どのも、長太どのも、御苦勞でござりました。

かつ　モシ、阿母樣、私しどものおかみさんが申しまする、今日は、ようお關さんを遣はされました。私しもお送り申しまする所なれど、よんどころなき客來がござりまして、乳母に送らせてあげまする、さぞあのお子さんも、お草臥れでござりませう……これはお關さんのお頭巾、又この品はあまり少しばかりでござりまするが、阿母樣へお土産でござりますると、遣はしましたわいな

ア。

ト黒縮緬の頭巾と、雷おこしの袋を出して、妙貞へ渡す。

妙貞　これはマア、娘をお世話にかけました上、私しへまでお土産とは、有り難うございります。ようお禮云うて下さりませ。

かつ　ハイ〳〵、畏まりました。お關さまも、お湯へでもお入りなされましたら、お遊びにお出でなされませ。

妙貞　ハイ〳〵、有り難うござりまする。どうぞ、よろしく申して下さりませ。

せき　お福さんにも、よろしう云うて下さんせ。長太どの、草臥れたであらうなア。

長太　お關さん、今度は芝居へ行きますぞえ。

かつ　それ〳〵、木挽町が、大分面白いといふ事ゆゑ、こちのお福さんも、是非この頃に、見に行くと申す事でござりますわいなア。左樣なら、私しどもは、お暇申しませう。

妙貞　ようお出でなされました。

ト矢張り右の合ひ方にて、お勝長太は向うへ入る。

與五　ヤレ〳〵、今日は天氣もようて、其方も仕合せ。觀音樣も、さぞ人が出たであらうの。

有右　ハイ、お茶あがりませ。

ト此うち奥より有右衛門、今までの着附けの上へ前垂れを締め、茶を汲んで出て來り

ト　お關へ嫌らしく茶を出す。お關、悄りして

せき　エヽ、悄りしたわいなア……此お方は、どこからござんしたえ。

與五　イヤ〳〵、別に怖い人ではない。今日、よんどころなく、口稼ぎの權助どの、給金取らぬ恰好者それゆゑ抱へた飯炊きサ。

有右　ハイ〳〵、只今與五郎が申されまする通り、口の上の奉公人。即ちその名は飯炊き有右衛門。お妹御さま、以後お見知りなされ下さりませう。

せき　これはしたり、をかしいお方。有右衛門さまと仰しやるからは、あの長五郎さんとお相役の

有右　左やう〳〵。茶入れを失ひしその科で、某も長五郎めも同罪。それゆゑにこそかゝる浪人。併し、失せたるあの品は、長五郎なぞが働らきでは、なか〳〵以て、知れまい〳〵。

與五　アヽ、モシ〳〵、飯炊きの有右衛門どの、滅多にさうも云はれませぬ。長五郎さんの詞では、多分茶入れの手がゝりが

せき　エヽ、なんと云はしやんす。その手がゝりがござりまするかえ。道理こそ、長五郎さんの今の樣子

その品、あなたのお手に入れば、御歸參なさるは今のうち。母さん、兄さん、おめでたい事ぢやないかいなア。

ト頻りに喜ぶ。有右衞門、こなしあつて

有右　なんと云ふ。アノ紛失の、その茶入れが、長五郎の手へ入るとか。ハテ、面妖な。あれほどこの中、早野屋の、土藏の内から長吉へ、渡した品を長五郎が、どうしてあの時

與五　早野屋の土藏とは、家尻を切つたる盗人を

有右　ヤ。

ト悧り、心附いたる思ひ入れ。

與五　知つてござりますか。

有右　どうして〳〵、土藏の盗人、身共が知らう筈はないわえ。

與五　こりや、その筈の事ぢやての。

ト思ひ入れ。

妙貞　イヤモウ、長五郎さまの尋ねさつしやる、その品の在所が知るれば、直ぐに御歸參。さうなる時には娘の願ひも

せき　そんなら、その時、アノわたしを

妙貞　オヽヽ、わが身も願ひが叶ふわいなう。

せき　エヽ、嬉しうござんすわいなア。

妙貞　こりや、その筈の事ぢや。ホヽヽヽ……ほんに、それはさうと、わが身は、ちよつと着替へて來やいなう。

せき　アイ〳〵、そんなら平常に着替へてくるぞえ。

妙貞　ドリヤ、わしが疊んでやりませう。

ト唄になり、妙貞先にお關、イソ〳〵として奥へ入る。あと、兩人、思ひ入れ。

有右　ハテ、解らなくなつて來たわえ。あれ程この中、彼の奴に渡した品が、どうして同役長五郎めがこりや、どうも合點がゆかぬわえ。

ト腕を組み、頻りに思案してゐる。

與五　モシ〳〵、有右衛門さん、何を考へて居なさるのだ。米搗きになる氣なら、ちつと稽古をして見さんせぬか。

有右　ナニ、稽古とは、米を搗くのか。それはちつとむづかしい。

與五　出來ずば米屋の奉公はなりますまい。わしが教へて進ぜませう。

　ト踏み臼の上へ來て、長き閂を踏み臼の上へ置いて

　コレ、斯うやれば、わし一人で

　ト踏む。これにて三からの臼、一度に動く仕掛け。

有右　これは大力、眞似もならぬ。せめて米屋の働き男、俵や繩の取集め、此やうな事が我れらに相應

　マア、此やうなものぢやわいの。

與五　ハテ、役に立たずの穀潰しだなう。

　トあざ笑ふ。しつとりとしたる合ひ方になり、與五郎は三からの臼を踏んでゐる。有右衛門は俵の繩をほぐして繋ぎゐる。向うよりお照、藁たばねの島田、順禮の拵らへにて、懷に赤子を入れ、菅笠、杖を持ち、出て來る。花道にて赤子泣く。

てる　オヽ、おびえてかいの／＼。母さんが抱いてゐます。又、うま／＼をたんと飲ませます。其うちに又、わが身がほんの父さんにも逢はせまするぞや。

　トこなしあつて

その、わが身の父さんは、お名も所も知らばこそ。いつぞや王子の西ヶ原、あの大勢の惡者に捕

へられ、その時一人の若い男、思ひがけない一度の情、その時儲けたこの幼な子。女の念力、尋ね逢ひ、添ひたいものと思ふより、思ひついたる坂東順禮。子よりもわしがその人に、逢ひたう思うて艱難苦勞。

ト思ひ入れ、癪のさしこむこなし。

アイタヽヽヽヽ。この冷えるので持病の癪。この身の病は思はねど、恥を思うて駈落ちしたるお屋敷の父樣とても、持病のお癪。アヽ、お達者でおいでやら。家出なしたる此わしを、憎い奴不孝者とのお腹立ち、それが募つて、もしやは老の

ト愁ひのこなし。赤子泣くを、いぶりつけて

オヽ、泣かぬものぢや〳〵。母が、うま〳〵飲ませませう。オヽ、よい子ぢや〳〵。

トいぶりつけながら門口へ來り

ハイ〳〵、順禮に御報謝なされて下さりませ。

ト内にて有右衞門

有右　なんぢや、順禮ぢや。手がふさがつてゐる。通れ〳〵。

ト慳貪に云ふ。お照、こなしあつて

てる　ハイ〳〵、左様なら通りまするが、持病に悩む女子の順禮。少しの間、お見世の端へ
　　ト菅笠を敷き、腰をかけて、赤子をいぶりつける。
有右　なんぢや、見世の端を貸せ……蹴れ〳〵しい乞食めぢや。爰へ倒れては厄介だ。サア〳〵、外へ行け、外へ行け。
　　ト門口へ出て、お照を見て、悔りして
ヤ、われは南方十次兵衛が娘、お照ぢやな。
　　トこれにてお照、こなしあつて
てる　ヤヽ、さう仰しやるは有右衛門さま。エヽ、面目なうござりまする〳〵。
有右　ナニ面目ない。イヤ、面目ないは心がらぢや。口説いた身共が心に随はず、その罰が眼前に、王子歸りに西ヶ原の、森の木蔭で大勢に
てる　ヤヽモシ、それ云うて下さんすな。恥かしうて悲しいわいなア。
有右　ナニ、恥かしいか、悲しいか。そんなら云ふまい。その代り、爰でこそ身共が願ひを
　　トしなだれるを、振り拂つてキッとなり
てる　エヽ、穢らはしい、なんでお前に。わたしや男のある身ぢやぞえ。その證據はこの幼な子。主あ

る女子を捕へて、アタ不躾な。指でも附けて下さんすな。

有右　ナニ、男のある身ぢや、われがその男といふは、大方、西ヶ原の道端で、悪黨どもに取卷かれ、其うち一人の盗人の、胤を姙んだと人の噂。十次兵衛も云ひ譯なく、家出をして行くへ知れず。その泥坊が産ませた餓鬼か。コリヤ、ヤイ、われが家出は世間の評判。それを苦にして十次兵衛は、死んだ事、わりや知つてるか。

てる　エヽヽ。そんならアノ父さんは、わたしを氣病みに、お果てなされたかいなア。そりやマア、誠の事かいなア。

ト泣き伏す。

有右　オヽ、盗人夜盗と假枕。子を産んだ事を苦に病んで、死んだわやい。コレ、この上は、浪人しても有右衛門。おれが世話をしてやるワ。サア、どうぢや。返事をせぬかいやい。

てる　エヽ、否ぢやわいなう。

有右　ハテ、つれなくはせぬものぢや。

ト無體をする。與五郎、この前より窺ひ居て、有右衛門を内へ投げこみ、門口をピッシャリたてる

有右衛門、やうやう起きあがつて

コレ、與五郎、わりやアなんで、有右衛門を投げたのだ。

與五　オヽ、投げてもよい。叩いても大事ないわえ。

有右　なんでよいのだ。

與五　さればサ、貴様はわしが奉公人、飯炊き男に抱へたこなた。主人が投げたがなんとした。

有右　サア、それは。

與五　それはとは、詰まつたせりふ。もう夜食に間もあるまい。茶釜の下でも焚きつけさんせ。

有右　成る程、もうその時分か。併し、思へばこの頃まで、大小立派な有右衛門、浪人をしたばつかりに、飯炊きとは情ない。それ勤めねば鼻の下。それよりはマア、あのお照を

與五　まだ行かつしやらぬか。

有右　エヽ、いま行く所でござるわえ。

ト唄になり、門口に心を殘して奥へ入る。與五郎、門口を明け、思ひ入れあつて

與五　モシ、順禮どの、すりや、お前が、南方さまの、家出なされたお娘御

てる　ハイ、照と申すは、わたしが事。いま有右衛門どのゝ云はるゝ通り、武士の娘が恥かしい、身許の知れぬ盜人の、胤を身ごもり、産み落せしはこの幼な子。男の身許は知れねども、女は二人の

夫を持たずと、家出いたして此やうに、男の在所を尋ねる爲、順禮姿となつたれど、互ひに顔は知らぬ同士。證據といふは、この守。

ト懐中より守り袋を出して

その夜の男が落せし品。その中の書き物に、年月日時。添へてあるのは、水天宮の片しの木札。家名は無けれど、これが尋ねる男の證據。

ト見せる。與五郎、思ひ入れあつて

與五 成る程、女の心では、惡黨ながらも、一度添ひ寢の男は夫と、貞女を立てるも、武家に育ちしゆゑの事。親御は南方十次兵衛さまとあるからは

トちよつと考へる思ひ入れあつて

オヽ、それ〳〵、駕籠舁きのあの與兵衛、慥か矢ツ張り南方の……もしやお前に、同胞でも

てる ほんに、さう云はしやんすりや覺えがござんす。今のその名は知らねども、わたしが産れぬ前方に、召仕への女子の外聞、世間を思うてお暇遣はし、音信不通に親里にて、産み落せし男子ありいはゞわたしが現在兄さん、その與兵衛どのとやらいふお人が

與五 わしも大方、同胞とは、顔の似寄りでそれぞとも、同じ胤の爲目許口許、どこやらお前に

てる　その似たお方は、御近所でござりますかいなア。

與五　そりやアちつと遠方だが、それもどうやら、慥かにそれとは

ト思ひ入れあつて、掛け硯の抽出しより金を三兩出して紙に包みつゝ、

モシ〳〵、お照さまとやら、近頃不躾な事ながら、今のお前は女順禮、物貰ひの事なれば、この與五郎が志しの手の內、これ取つて下さりませ。

ト金をお照に渡す。お照、押戴き、思ひ入れあつて

てる　こりや大枚の此お金を

與五　あけるも此方に

てる　エヽ。

與五　どうぞ納めて置いて下され。

てる　何かは知らねどお志し、お貰ひ申すでござりませう。

與五　見れば見るほど氣の毒なこなた。この內へ置いてやりたいが、義理ある母や妹の手前……お前もその子を大事に育て、今云ふ尋ねる夫に逢ひ、身の落ちつきをしたがよい。

てる　ハイ、尋ね求めてこの子の行く末。現在實の父さんの、御病死ありしも知らぬ身の、不孝のわた

し。どうで末々親の罰、それがこの身に

ト與五郎と顏見合せ、思ひ入れあつて

左樣なら、もうお暇いたしまする。

與五 もうござりますか。また尋ねて來さつしやりませ。

てる ハイ、有り難うござりまする。

ト合ひ方になり、お照、こなしあつて赤子をいぶりつけながら、向うへ入る。與五郎、跡見送り、思ひ入れあつて

與五 そんなら今のが十次兵衞さまの、娘御のお照どの、惡い噂があの子の災難。ハテ、氣の毒なものぢやなア。

トよろしく思ひ入れ。稽古唄になり、向うより以前の丹平、長五郎の衣裳を風呂敷に包み、これを持つて、足早に出て來り、門口へ來て

丹平 與五郎どの〳〵。

ト與五郎、見て

與五 オヽ、これは丹平さまでござりまするか。

丹平　其許にもお喜びなされ。只今お屋敷に於て、長五郎さま、殊ない上首尾。件の茶入れを差上げられ、直ぐに御歸參。衣服大小下し置かれ、只今までの油じみたるこの衣類は、卽ち持參いたしました。これは貴殿へお渡し申す。

ト風呂敷包みを與五郎に渡す。

與五　すりや、なんと仰しやります。長五郎どの、茶入れを差上げ、歸參なされたとか。それはハヤ、めでたい事。あのお方が出世さつしやれば、大方妹が祝言も、こりや近々であらうわえ。

丹平　サア、その祝言の儀も、役人中より仰せ出され、主人三原傳藏承り、今日中に御沙汰ござらう。貴殿も長五郎さまのお迎ひがてら、道までござりませぬか。

トこの時、有右衞門出かゝり、聞いてゐる。

與五　參りますとも〳〵。さう聞いては、もう〳〵、此やうな髮結ひ道具はいらず、この油じみた身のまはりは、不用になつたといふものか。

ト長五郎の衣裳を抛り出す。

サヽ、丹平さま、御同道いたしませう。

丹平　サ、ござりませ。

ト矢張り右の合ひ方にて、兩人は花道へ行く。この時、向うバタ〳〵にて、頬かむり、菰をスッポリと冠りし非人、走り出て來り、花道中程にて、與五郎に行きあひ、あちこちと邪魔になる仕組み。

與五　エヽ、薄穢ねえ宿無しめ。退きやァがれ。

ト與五郎、非人の襟髪を取つて、舞臺へ突きやる。非人、ヨロ〳〵となつて、舞臺の門口へ來て其まま倒れる。與五郎、ニッタリして

どう乞食めが……サ、參りませう。

トこれにて合ひ方、時の鐘になり、丹平附いて向うへ入る。この時、有右衞門、出て來り、思ひ入れあつて

有右　サア〳〵、とんだ事が出來て來たわえ。どうしてマア、あの茶入れが、長五郎の手に入つたか。質屋の藏から盜み出し、渡してやつたは長吉め。今におれには渡しおらず。もしやあの品を長五郎へ、長吉が渡したか。そこは云はゞ兄弟ゆゑ、渡すまいものでもなし。さうなる時には有右衞門、虻も蜂も取らぬ道理。それにしても、あのお照、もう歸つたかしらん。

ト門口を見て

お照は居らいで菰かぶり。ヤイ、乞食め、起きて行け〳〵。サア、寢てゐると灸をすゑるぞ。サ

ア、立つて行け〳〵。

ト菰かぶりの側へ寄り、起さうとする。この時、非人、身慄ひをして顏を上げる。長吉にて、有右衞門を見て

長吉 有右衞門さん、この間は。

トかむりし手拭を取る。

有右 ヤ、わりやァ長吉

長吉 コレ、靜かにしな。

ト時の鐘、變つた合ひ方。有右衞門、こなしあつて

有右 コレ〳〵、長吉、逢ひたかつた〳〵。コレ、いつぞや早野屋の土藏の家尻を、切つて盜んだ寶の茶入れ、有右衞門が手より差上げ、浪人の身の出世してと、命を投げにしつけぬ盜人。その時、てまへに渡したを、よくマァ長五郎に渡したな。あの長五郎は、それで出世だ。なぜ長五郎めに渡したのだ。

長吉 オイ〳〵、そりやお前、何を云ふのだ。成る程、あの晩、家尻を切り、茶入れを盜む相談はしたが、ツイあの時は寢忘れて、南無三方と駈け出したが、もう遲蒔きで間に合はず、家尻が切つて

あつたので、首尾よく行つたと喜んで、その分け口を貰はうと、こなたの行くへを探して居たのだ。

有右　イヤ〳〵、さうは抜けさせぬ。現在あの晩、こなたに渡し、いづれ明日と別れたも、それなりけりに影を隠し、兄弟のよしみを思ひ、あの弟の長五郎へ、渡したに相違あるまい。

長吉　詰まらぬ事を云ひなせえ。溝の中へ打ッちやればとて、なんで弟にやるものか。よく物を積つて見な。この長吉は橋本の、家を見限り、おのれから、内を追ん出た浪人者。それといふのも大殿の、べら坊面の指圖にて、おれを差置き弟の、長五郎めに家督を繼がせ、お兄イ様は有るがなし。それが第一氣にくはず、折があらば腹癒せと、思ふ所へ主人の若殿、千太郎から頼まれて、親仁が預かる茶入れをば、盗んで屋敷を立退く時、おれと知らずに弟の、長五郎めが切りつけた、いまだに殘る額の疵。骨は折つても千太郎が、褒美の金をくれぬゆゑ、お前に質に入れさせた、その茶入れを又盗み、おれに分け口をくれぬとは、あんまり蟲がよすぎるぞよ。

有右　コレ〳〵。それはマア、何を云ふのだ。家尻を切つて忍び入り、茶入れは盗んで、あの晩渡した。

長吉　さうしてそりやア、誰れに渡した。

有右 貴様に渡した。

長吉 よく嘘を吐く男だ。併し、そんならあの晩に、暗いところを附けこんで、おれを騙つて、慥かに外の

有右 成る程、考へて見れば、もしやそれが貴様の弟。

長吉 長五郎めが失せをつて、濡れ手で粟の濡髪が、その身の出世にしをつたか。併し、取つたところで、ありやァ似せ物。

有右 ヤ。

長吉 イヤ、よく似てゐる兄弟だから、こなたが渡したも尤もな事よ。おらァ一番巻かれたと思つて、こなたの在所を兩方で、尋ねてゐたも、たはけた奴サ。

ト見世にありし長五郎の衣類の包みを取つて

いま來る道で見附けられ、爰まで逃げたこの姿、目じるし附いた上からは、この褞袍に着替へた上、髪月代は、幸ひ道具が

ト鬢盥を取つて

誠に天道、人を殺さずだ。

妙貞　これはしたり、新參の飯炊きどのは居やらぬかいなう。

トこの時、上の障子の内にて

有右　これは妙々。そんなら勝手へ。

トこの聲を聞き、長吉、有右衞門に囁く。有右衞門、こなしあつて

長吉　コレ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、長吉、鬢盥と風呂敷包みを持ち、有右衞門附いて奥へ入る。引違へて障子屋體より妙貞、六兵衞、出て來り

六兵　イヤモウ、大きに御馳走になりました。

妙貞　なんのマア、馳走と申して、お煮花のみ。其うちには又、只今のお話しが調ひますれば、そりやモウ、きつと御馳走いたしまする。

六兵　左やう〳〵、お關どのが段々とわしへの頼み。それにしても、あの髪結ひの長五郎どの、まだ廻つて居られませうな。

妙貞　左樣でござりまする。いつも今頃は、あの四ツ角の床へ行つてゐられまする。わしがちよつと見て參りませう。

六兵　アヽ、イヤ／＼、お年寄りのお出でには及びませぬ。長五郎どのには、わしが逢うて參りませう何を申すも緣談の事、この六兵衞は仲人同然。お關どのゝ方は元より承知ぢやが、長五郎どのに逢うて、今の樣子を話して行きませう。

妙貞　それはマア、何かとお世話樣でござります。左樣ならお前樣、ちよつと逢うて行て下さりませ。

六兵　承知しました。長五郎どのにも否やはござるまいが、そこが近しき中にも垣とやら。

妙貞　左樣なら六兵衞さま。

六兵　ドリヤ、逢うて參りませう。

ト入相の鐘、合ひ方になり、六兵衞は向うへ入る。妙貞殘り、あと見送り

妙貞　ほんにマア、御深切なお方ではあるぞ。どうぞ早うこの話しを、極めたいものぢやわいなう……ほんに、もう暮れるのに、與五郎はどこへ行きやつたか、燈の支度もせいで……ドリヤ、御燈をあげませう。

ト立ちあがる。これにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、平舞臺。上手、障子屋體。向う上手、三尺の佛壇、袋戸棚。これより下手障子二

枚たて、臺所へ行く隔ての心。下手、茶壁、これへ簞笥などの書割り。下手へ折り廻して襖をたてきり、すべて米屋、中の間の體。矢張り合ひ方にて道具とまる。

ト下手より以前の長吉、月代を剃つたる心にて、長五郎のやつしに着替へ、鬢盥を提げ、ソツと出る

この時、正面の障子の内にて

妙貞　お關や〳〵。

ト妙貞、雪洞を持つて出てくる。これにて長吉はソツとかゞむ。妙貞、これを知らず

また轉寢して、風邪でも引きやんなや。

ト障子屋體に向つて云ふ。長吉、ソロ〳〵と此方へ來るを、妙貞見て

ヤ、長五郎さまではござらぬか。

ト雪洞を下に置き

これはしたり、こちの內にござる事は知らず、あの床へござつたであらうと、六兵衞どのを賴んで、いま相談に行かれましたが、外の事でもござらぬ、あの娘のお關が事。申さば千葉の殿樣より、お指圖あつたお前の緣談。御歸參なされぬ前方に、せめては杯なりと、してやつて下さりませ。

ト妙貞、長五郎と心得、ソカ〳〵云ふを、長吉、思ひ入れあつて

長吉　アイ〳〵、畏まりました。

トうなづく。

妙貞　イヤモウ、其お心なら、ちよつと娘のお關に、逢うてやつて下さりませ。

ト云ふを、長吉うなづく。妙貞、思ひ入れあつて

コレ、お關や。ちよつと爰へ來てたもや。

せき　アイ〳〵。

ト合ひ方になり、上手の障子を明け、お關、平常着に着替へ、出て來り

母さん、なんぞ用かいなア。

妙貞　おいなう、外の事でもないがの、アレ、あそこにござる長五郎さまへ、わが身の事を、段々とお頼み申し、御承知の上からは、御歸參叶へば其まゝ祝言。なんと嬉しい事であらう。

せき　エヽ、そりやほんまでござんすか。お嬉しう存じまする。

妙貞　併し互ひに若い同士、燈があつては何かの遠慮。

ト雪洞を吹き消し

斯うしてしまへば眞の闇、誰れに遠慮も内祝言。杯ごとはまだせねど、與五郎が戻つた上、四人寄つての四海波。これは當座の床杯……ドリヤ、銚子の支度をしませうわいの。

ト唄になり、お關を長吉の側へ突きやり、こなしあつて奥へ入る。お關、恥かしき思ひ入れ。

せき 申し、母さん、わたしばかり爰へ置いて、なぜ奥へござんしたぞいなア。エヽモ辛氣な。母さんわたしも連れて行て下さんせいなア。

トこなしあつて、立つて行かうとするを、長吉、物も云はずお關の帶を捕へ、強く引くゆゑ、お關、長吉の側へ引寄せられ、顏へ袖を當てゝ思ひ入れ。このうち、よき時分より、有右衛門、出て來り

有右 イヨ〳〵、内のお娘と長五郎どのと、うまいな〳〵。内の阿母は氣のきいた通り者。跡は我れらが引受けた。サア〳〵、奥へ。

ト上の障子を明け、二人を突きやり、外より障子を閉める。合ひ方、時の鐘になり、有右衛門、内を窺ひ、いろ〳〵思ひ入れあつて

エヽ、畜生め。

ト大きく云つて心附き、口へ手を當て

シイ。

トこなし。この模様よろしく、合ひ方にて道具まはる。

本舞臺、元の見世先の道具に戻る。

ト唄、時の鐘になり、向うより長五郎、麻上下、大小、侍ひの拵らへ。この先へ中間、箱提灯をともし、後より以前の六兵衛、弓張りを持ち、袴羽織の形、若い者兩人、結納物を持ち、後より與五郎、イソ〳〵と附いて出て來り、直ぐに舞臺へ來り

六兵 サア〳〵、長五郎さんの御出世ぢや。仲人の六兵衛が、早速送つて參りました。めでたい、めでたい。

ト此せりふを云ひながら門口を明けて

與五 サア〳〵、内へ通つて下さりませ。

長五 然らば御免下されい。

トよろしく三人は内へ入る。若い者は結納物をよき所へ並べる。與五郎、よろしく思ひ入れあつて

與五 オイ〳〵、阿母、ちよつと來て下され〳〵。

妙貞 オヽ、與五郎、戻りやつたか。

ト妙貞、行燈を提げ、出て來り、長五郎を見て

ヤ、お前は、長五郎さまぢやござりませぬか。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

長五　左樣でござりまする。尋ぬる茶入れが手に入りしゆゑ、三原氏まで相渡し、お召しによつて參りしところ、直さま歸參仕り、衣服大小下し置かれ、この通りの立身出世。役人よりお指圖には親人のお咎めも御赦免なれば、今宵直さまお關どのと、祝言の學びなりとも仕れと、有り難き仰せござれば、只今こそは改めて、お娘御を申しうける。妙貞さま、この上ともに聟姑、何分よろしう、お目かけられて下さりませ。

與五　イヤモウ、その挨拶は此方から……モシ〳〵、阿母、長五郎さんは以前の通り、お侍ひになりました。今夜は直ぐに妹と、杯をさせまする。お前も、さぞお喜びでござりませう。

六兵　この六兵衞も仲人なれば、柳樽に勝男節、鯣祝うてわざ〳〵と、見送りながら參りました。イヤ誠におめでたうござりました。

ト結納の品々を、よき所へ並べる。妙貞、合點のゆかぬ思ひ入れ。

妙貞　マア〳〵、待つて下さいませ。どうも合點が參りませぬ。今の今まで髮結ひの長五郎どの、現在

のこの母が、取持ち顔で、あの座敷、娘もあそこへ行きやつた樣子。それに又ぞろ長五郎どの、いつの間にやら其お姿。どうも合點が參りませぬ。

ト思ひ入れ。

與五　これサ〳〵、阿母、お前、そりや何を云はつしやる。長五郎さまは傳藏さまより、迎ひのお使ひお出でなさると直ぐに御歸參。道までお迎ひに參りまして、お連れ申した與五郎。それをマア、何か解らぬお前の云ひやう。アヽ、年寄りといふものは、解らぬ事を跡や先……それはさうと、妹はどうしました。なぜにマア、爰へは出ませぬぞい。

妙貞　サア、あの子は、今

トもぢ〳〵してゐる。

與五　何をマアおど〳〵と。コレ、お關や、妹、ちよつと爰へ來てくりやれ。

ト呼ぶ。障子の内よりお關、しどけなき拵らへにて何心なく出て來る。附け屋體の屏風に、長五郎の帶、掛けてある。

せき　アイ〳〵、兄さん、何をマア其やうに、忙しう呼びなさんすぞいなア。

與五　コレ、妹、其方を呼んだは外でもない。今までも間髮結ひの長五郎どの、歸參なされてあのお姿

直ぐに今宵が内祝言。それを其方に云ひ聞かせ、まだその上に、長五郎どの、立派な姿を、其方に見せて喜ばさうと、それで俄に呼んだのぢや。

ト云はれてお關、長五郎の姿を見て

せき ヤ、ほんにあなたは長五郎さん、いつの間にやら其お姿。そんなら今まで暗がりながら、屏風の内の長五郎さんは

ト思ひ入れあつて、ソツと振り返り、屏風を見る。この時、屏風に掛けたる長五郎の帶、段々と内へ引込む。長五郎、これへキツと目を附け

長五 ナニ、屏風の内とは……ヤ、あれにかゝりし男帶は、慥かに覺えの……ハテナア。

ト思ひ入れ。お關、こなしあつて

せき すりや、今までの髪結ひの、長五郎さんが俄の御出世。

長五 本地へ歸參の上からは、勸めに任せてお關どの、今日改めて一世の固めを

せき そんならわたしは、今宵の祝言。

與五 これまで慕ひし長五郎どの、今宵の固めが、さぞやこなたは

せき アイ、嬉しうござんす……その喜びも、云ふに云はれぬ

長五　云はれぬ譯は、あれなる屏風の

ト長五郎、キッと目を附ける。お關、あわてゝ障子をシャンと閉めて

せき　今さらわたしや、どうやらそれが

妙貞　イヤサ、わが身が其やうに云やるのは、恥かしいのが一倍ゆゑ。

せき　男を持つ氣もどこへやら。

妙貞　ならう事なら、もそつと延して。

長五　延べてほしくばいつまでも……今宵の杯、暫らく延引。

與五　聟のお前がその氣なら……モシ、六兵衛さま、此方から知らせるまでは

六兵　御祝言が日延べとあれば、まづそれまでは仲人が預かり。

ト結納の品々を引寄せる。

妙貞　日がしつくりと極まり次第、お知らせ申すでござりませう。

六兵　然らばわしは、この品持つて、先づおめでたう

妙貞　お開きなされて下さりませ。

ト唄になり、妙貞はこなしあつて障子屋體へ入る。六兵衛は結納の品を若い者に持たせて向うへ入る。


富利狂言之内
國周筆

お關は俯向いてゐる。

長五 イヤナニ、與五郎どの、この長五郎も今までは、渡世も賤しい髮結ひなれど、帶刀なせば刀の手前、左やう心得、妹御をば。

與五 心得ました。私しもこの程までは、人中で男を賣つた八幡山、品によつては、命に掛けて……サまだそこまでは行きますまいが、力士のわしが妹ゆゑ、清く洗うてお前と祝言。

せき その祝言も今さらに、云ひ譯もなきこの間違ひ。それを明かして云はれぬは、あの母さんが勸めゆゑ、それぢやによつて

與五 ヤ。

ト兩人、顏見合せ

せき 恥かしいわいなア。

與五 一圓合點がゆかぬわえ。

ト思ひ入れ。唄になり、向うより中間、留守居提灯を持ち、後より傳藏、袴大小、以前の丹平附きこの後より挾み箱持ちの中間附き、出て來り、ズツと後より野手の三、下駄の市、音、長、いづれも非人にて、窺ひ／＼附いて出て來り、囁き合つて下手へ入る。傳藏は門口にて思ひ入れ。丹平、格子

を明けて

丹平　ハッ、長五郎さま、これにと存じ、主人傳藏、罷り越してござりまする。

長五　ナニ、傳藏どのゝお出でとな。

傳藏　長五郎どの、先刻はめでたう御歸參、それにつき、少々用事ござつて、わざ〳〵これまで。

長五　何は格別、まづ〳〵あれへ。

傳藏　然らば御免下され。

ト上へ通る。

與五　これは〳〵。三原さまには、ようお出でなされました。

ト茶を汲んで出す。

傳藏　其方は八幡山與五郎、何かと長五郎どのを世話いたすとの事。朋友の身共、過分に存ずる。

與五　イヤモウ、お詞では、痛み入りましてござりまする。

傳藏　さて申し入るゝは、長五郎どの、先程役所よりお下がりの跡にて、町人早野屋の彦助、訴へ出でしは、先達てお家の重寶とも存ぜず、狂言袴の茶入れ、質物に受取りし段、重ね〴〵不屆きの至り、この儀御容赦を相願ひ、お上のお慈悲を以て、御高免下されとの願ひ……それは格別、其許

の差上げられし茶入れは、早野屋方よりお受取りなされしか。その儀が承りたう存ずる。

ト これにて長五郎は當惑のこなし。與五郎お關は顔見合せ、心得ぬ思ひ入れ。

長五 その茶入れは計らずも、早野屋方にござる由、聞き及びしゆゑ請け戻し、差上げましてござりまする。

傳藏 それなれば、貴殿の差上げられし彼の茶入れは、眞赤な似せ物でござる……サ、これを、お見やれ。

ト 以前の茶入れを差出す。皆々、恟り思ひ入れ。

長五 すりや、先刻差上げし、寶の茶入れは似せ物とな。

ト 見て

仔細に見れば、誠に似せ物……そんならあの時、土藏より

ト 不思議の思ひ入れ。

傳藏 この品、僞りに相違なければ、貴殿の歸參は叶ひませぬぞ。

與五 歸參叶はぬその時は、元の浪人、さすれば妹の縁談も

せき わたしが願ひも叶ひませぬか。さすれば先刻の間違ひも、今さら思へば、この身にかゝる……

こりやどうしたらよからうぞいなア。

傳藏 まだその上に、右早野屋の訴へには、件の茶入れ、お屋敷へ持参いたさんと存ぜしところ、土藏の家尻を切り拔いて、茶入れは紛失。さすればその盗賊は、千葉の御家督叶はざる、御方の仕業ならんと、巷の取沙汰、さるによつて若殿には、御總領の千太郎さまが、お咎めあつて押籠めの御身の上。次部右衞門どのには、右の一件相濟まずば、御切腹との評議。請け戻さぬ茶入れ、盗賊の業とあれば、長五郎こそ、疑ひもなきその夜の盗賊。まだしも似せ物差上げられ、貴殿の身の上お叱りばかり。さるによつて質屋方へ、置き主吟味ありしところ、其許の兄、悪者と噂ある以前の御家來長吉が仕業。それによつて長吉は、嚴しき御詮議。長五郎どの、こりや、ちと其許の不念かと存じられるて。

長五 拙者の差上げしが、似せ物にて、質屋方へ夜盗こみ入り、その品紛失、置き主は、身共が兄の長吉とな。

傳藏 いかにも。さすれば縁者の悪者長吉、彼れが行くへを尋ね出し、日數五十日が其うちに、誠の茶入れ、其許の手より差上げねば、次部右衞門どのには是非とも切腹。先づそれまでは、只今下し置かれたる、衣服大小お取上げ。受取り歸るは拙者が役目。

丹平　お氣の毒には存ずれど、主人も役目の儀でござれば、イザ、長五郎さま、衣服大小を、この場に於て。

長五　御尤もの仰せ、逐一承知いたしてござる。この身に覺えはござらねど、質屋の盗賊、茶入れの置き主、申さば我れ〳〵兄弟に、お疑ひは御尤も。然らばこれにて、下し置かれし品々は、お渡し申すでござりませう。

ト合ひ方になり、長五郎、上下、上着、大小を取る。與五郎お關、これを見て、氣の毒なるこなし。長五郎、品々を傳藏の前へ差出し

イザ、お受取り下さりませう。

傳藏　アヽ、氣の毒千萬。その身に覺えはあるまいなれど、かゝる災難、近頃以て……丹平、その品々を。

丹平　ハツ。

ト右の品々を挾み箱へ入れる。

長五　かゝる災難受けまするも、面目もなきこの身の仕合せ。只この上は傳藏どの、日數五十日の日延べの儀を、何卒貴殿の御仁惠にて

傳藏　承知いたした。某、よしなに取計らふでござらう。役目でござれば其許の、衣服大小は取上げしが

ト思ひ入れあつて、手前の刀を長五郎の前に置き

浪人なしても寶の詮議、丸腰では心許ない。古びたれども拙者が魂ひ、重ねて歸參おしやるまでお役に立つなら、お貸し申さう。

ト長五郎、取つて押戴き

長五　流石は朋友傳藏どの、お志しのこの大小、暫らく拜借いたすでござらう。

傳藏　然らば身共は、役目も濟めば

丹平　下郎は直さまお供して

トよろしくあつて、兩人、門口へ出る。長五郎、送り出て

長五　申すまではござりませねど、親次部右衞門の身の上を

傳藏　氣遣ひあるな。それも再び茶入れをば、貴殿の手より差上げたら、御前表は、よしなに拙者が

長五　何分よろしく、傳藏さま。

傳藏　刀にかけて

トこなし。

長五　エヽ、忝い。

傳藏　丹平、供せい。

ト唄、時の鐘にて、提灯先に傳藏、丹平は挾み箱を抱へ、中間附いて向うへ入る。長五郎は俯向きゐる。與五郎、こなしあつて

與五　アヽ、思ひがけない、又の御難儀……まだ冷えるのに肌薄な。せめてこれなと

ト以前の羽織を取つて長五郎に着せ

それにしても爰にある、この襤褸は、どうも合點が

ト長吉が脱ぎ捨てし襤褸を取つて思ひ入れ。長五郎、目を附けて

長五　主のこなたが知らぬ襤褸、この見世先にあるのも不思議。

ト上手へ思ひ入れあつて

せき　そんならもしや

こりやマア、どうしたらよからうぞいなア。

ト泣き伏す。この前方より以前の非人四人、門口に窺ひゐて、この時、内へ入り

三　爰の娘のお關どの、おいらが方へ貰ひに來やした。
市　アイ、娘のあの子を
四人　下アりませう。
　　トどや〳〵と内へ入つて、よろしく住ふ。
與五　見れば賤しい非人ども。なんで妹を貰ふとは。
三　貰ひに來たは外でもねえ。おらが仲間の親方を、爰の内へ引込んで、現在母御が得心づく。
市　聟に取らうといふ相談。あの子も非人の女房に、ならねば死ぬといふ事ゆゑ
音　そこで否でもおいらが頭、先刻あの子と結ぶの緣。
長　物事きまつた夫婦仲、それゆゑ仲間が祝ひに來た。
三　おめでたう
四人　ござります。
　　トこれにて與五郎、思ひ入れあつて
與五　すりや妹を、わいらの仲間のその非人が
長五　聟に取らうと親御まで、承知の上とは、何とも以て。

三　ハテ、云はんすな。證據のねえ事云ふものか。
市　證據はコレ、爰にある、頭が着てるたこの縕袍。
音　脱いであるのが慥かな證據。
長　これでも此方が僞りか。
四人　なんと相違はあるまいが。
　　ト　お關、こなしあつて
せき　そんならこれなる襤褸をまとひ、爰へ來やつたその非人が、長五郎さんの姿に着替へ、あの小座敷の暗がりを、これ幸ひと
　　ト　襤褸を取つて、思ひ入れあつて
　エヽ、面目ない、面目ないわいなア。
　　ト　泣き伏す。この時、上手の障子屋體の内に物音して、障子へ血煙りかゝる。非人、これを見て
四人　アレ〳〵、障子へ生血の滴り。
　　ト　皆々見て、愕り思ひ入れ。
せき　もしやは、ひよつと。

與五　合點のゆかぬ。

ト　お關、駈けよつて障子を明ける。内に屏風を引返し、横手の壁、切り破つてある。妙貞、剃刀にて自害して、俯伏せになつてゐる。

せき　ヤ、こりや母さんが自害して、お手に殘るはこの書置。

與五　ナニ阿母が……譯は知らねど、何ゆゑ自害を

ト　此うちお關は、書置を見て

せき　こりや母さんが、長五郎さんへ云ひ譯に、命を捨てるこの書置。

與五　ドレ〳〵。

ト　書置を取り、開き見て

ナニ〳〵……似寄りも多き事ながら、見紛ふばかりの長五郎さま、餘人と知らず親の身にて、娘を取持つ恥知らず、後にて聞けば人違ひ、それゆゑにこそこの自殺、お免しなされ下さるべく候……長五郎さまへ、母妙貞……そんならあなたに、似寄りの者とな。ムウ。

ト　愁ひの思ひ入れ。長五郎、こなしあつて

長五　こなたが思はぬ仇枕、似寄りの者こそ、問ふに及ばぬ、現在兄の長吉ならん。

與五　殊に壁を切り拔いて、逃げうせたれば、後追ひかけて

ト立ちあがるを、非人四人、よろしくこなしあつて

三　逃げた非人を引ッ捕へ、詮議立てすりや恥の上塗り。

市　捕へて見れば長五郎さん、どうやらお前も、遁がれぬ仲だワ。

ト長五郎「ムウ」と思ひ入れ。

音　兄であらうが此方の仲間。

長　爰の聟なら祝儀を貰はう。

三　それもならずば祝儀の代り

市　その娘をば

四人　貰ひませうよ。

ト此うち與五郎、腕組みをなし、思案のこなし。

せき　非人の仲間に貰はうと、あの大勢が惡口も、みんなわたしが仕出す業。

與五　母の非業も彼奴等が業。併し、死骸は

ト障子を閉てる。此うち非人は、ワヤ〳〵と捨ぜりふあつて

三　サア、娘をくれるか、祝儀の方か。

市　その返答を

四人　聞かうかえ。

與五　その返答は、うづ蟲めら、なんでうぬらに妹を。

四人　それぢやアどうでも、くれねえのか。

與五　知れた事だ。この妹は、爰にゐる長五郎どの、主へ進ぜた此お關。

長五　イヽヤ滅多に、女房には。

せき　そんなら矢ツ張り疑ひが

長五　遁がれぬ譯は非人の噂。割符の合ひし着捨ての襤褸。浪人なしても長五郎、穢れた女は貰はぬわえ。

與五　その穢れたる妹ながら

せき　添はれぬと仰しやれば、わたしは死んで、穢れたお顔を清めまする。今よりこの身は淵川へ、沈めてなりと

ト門口へ行きにかゝるを、與五郎、お關を留めて、門口を閉め

與五　イヽヤ、妹は滅多に殺さぬ。長五郎どのへ、否でも進ぜる。

三　有無を云はずに長五郎さん、娘を貰つて、此方へくんねえ。

市　それが仲間に入つた手土産、乞食の小家へ一の富だ。

吾　それが手短か。その相談に

長　極めなせえな。

ト長五郎、こなしあつて

長五　いらざるうぬ等が、口出し致すな。

三　イヽヤ、云ひたい事がまだあるのだ。佐賀町河岸の質屋の家尻、切つて盗んだ茶入れとやら、それを側から横取りの、いはゞ盗人の上前取り。

市　それでも武士か、侍ひか。

長五　身に覚えなき云ひがゝり。重ねて吐かすと、免さぬぞ。

トきつと云ふ。

三　そんなら、おのれが手に入つた、似せ物ながらあの茶入れ、どこから持つてうせたのだ。

長五　サア、それは。

三　それを云つちやァ物がねえ。云はず語らず、あの娘、お前の首の代りと思ひ
市　兄貴に貰つて、おいら達に
四人　お關を下さえ、娘を下せえ。
與五　イヽヤ、娘は此方の代物。なんでうぬ等に遣るものか。
長五　遣らぬといつても此方にて、いはゞ夜盗と不義せしお關。わしも以前の侍ひなら、重ねて置いて眞二つ。今は町人、浪人なしたが女の仕合せ。
三　して、こなさんが武士ならば、相手の男も、女ぐるみに
長五　ナニ安穩に置くものか。譬へ今にも、目の前で
市　こなさん、相手が切りたくば、尋ねて切りやれ。こなたの兄の
四人　長吉だワ。
與五　イヤ、その長吉は、先刻に自害。

ト障子の内へ思ひ入れあつて

障子へかゝりし血煙りが、こなさん、目にやァかゝらぬか。
三　こりやァ面白い。男の相手が死んだなら、相手の女は、なんで、のめ〳〵

ト これにてお關、こなしあつて

せき　それぢやによつて、わたしやこの身を

ト立ちあがるを與五郎、キツと留めて

與五　拔差しならぬ其方が體。コリヤ、われも與五郎が妹だ。覺悟せねばならぬぞよ。

せき　アイ、殊にはかゝる間違ひに、母さんまでが非業の御最期。それと僞はり、あじやら事、女子を騙せしその人も、憎いといへど長五郎さんの、現在双子の

ト思ひ入れあつて

それぢやによつて、手出しのならぬ、この場の手詰め。

與五　出かした妹。われの性根が極まれば、穢れた兄が面も洗つて、顔さへ立てば、長五郎どのも

せき　添はるゝ願ひが叶ふなら、死ぬる命は惜しまねど、この末ともに不義者の、惡名取るがわしや悲しい。そればかりがこの世の迷ひ。お前によう似たお顔といひ、殊に黄昏、ほの暗く、若類の違はぬ事ゆゑに、思はず知らず大膽な、枕交せし身の誤まり。命は惜しまぬこの身の覺悟。

長五　穢れた顔を淸むれば、其方の望み、この場に於て。

與五　幸ひ爰に銚子、杯。どうぞ妹と祝言を。

長五 然らばお關と、二世の契約。
せき たとへ死んでもこの身の願ひ。エヽ、嬉しうござんす。
與五 そんなら酌は、この與五郎。妹、始めて。
せき アイ。
ト思ひ入れあつて杯を取る。與五郎、銚子を持つて
與五 千秋萬歳の、千箱の玉を奉る。
ト此うち、お關飲んで長五郎へ獻し、杯納まる。
長五 めでたい〳〵。これでお關も安堵であらう。
せき アイ、願ひが叶つて
長五 喜ばしいか。
せき 女夫になれば、この上ともに
長五 喜ぶ其方へ、夫がこの場で
せき エ。
長五 二人が仲の、血酒の結び。

ト一腰を抜き、思ひ入れ。

せき　お前の武士を

長五　立てさす女房。

せき　その一言が、何よりわたしや

長五　ヤ。

せき　嬉しうござんす。

ト長五郎の顔をヂツと見て、思ひ入れ。

長五　それ程までに

せき　サ、ちつとも早う。

長五　臨終稱念。

せき　南無阿彌陀佛。

ト兩人、顏見合せ、思ひ入れあつて、キツと氣を替へ、長五郎、お關の首を打ち落す。

四人　イヨウ。

ト非人皆々、飛びのいて慄へる。與五郎、お關の切り首を取上げ、思ひ入れあつて

與五 不便や、妹。

　　ト愁ひのこなしあつて、氣を替へ

　これでは武士が立ちまするか。

長五 貰ひ請くれば身共が女房、斯く成行くも女が災難。さはさりながら、非道をしながら附けこんでうぬらを爰へ寄越したも、云はずと知れた惡黨の、切るに切られぬ十本の、その指よりも不便なる、お闘が命捨てさせたれば、殘るはうづ蟲同然な。刀の穢れと思へども、眼前敵の宿無しめら。爰で死ぬのは自業自得、覺悟極めて、それへ直れ。

　　トきつと思ひ入れ。

三 吐かしたり、その頰桁。間男したは

四人 現在こなたの

與五 兄長吉はあの如く、壁をこぼつて逃げゆく程の人非人。母の自害も、妹が非業も、みな長吉の爲すところ。

長五 尤もなるその一言。これからは濡髮が、大事を抱へし身ながらも、打捨て置かれぬ非人めら。一人も殘らず撫切りだぞ。

三　小癪な事を。ソレ、息の根を

四人　畳んでしまへ。

長五　なにを。

ト四人は長五郎へ組みつくを、振り拂つて刀を振りあげる。これにて四人は逃げにかゝるを與五郎、門口に立ちはだかる。これより誂らへの鳴り物になり、長五郎、四人を切りまくる。四人は逃げようとして、臼へ飛びあがり、これを枷によろしく立廻りあつて、トヾ四人は糊紅になつて倒れる。長五郎、刀を提げて行きにかゝるを、與五郎、留めて思び入れ。

與五　コレ、待たつしやれ。長五郎どの。定めてこなたは人殺しと、我れと訴人にござるのであらう。

長五　蟲同然の奴等といへど、一人ばかりか大勢を、殊にこなたの見世先で、母御の最期、妹の横死、この身に引受け、名乘つて出るのサ。

與五　イヤ、その人殺しは與五郎と、身に引受けて、わしはこれから。

長五　イヽヤ、こなたの一言も、男を磨く力士の性根。この長五郎は尋ぬる茶入れ、まだ手に入らぬ上ながら

與五　遁がれるだけは遁がれるが、親御のお爲。人殺しはこの與五郎。母の自害もこの書置。この文言

では長吉どのゝ、いよ〳〵仕業に相違ない。

長五　その非道なる惡黨の、企みにかゝつて、不便やお關が

ト首を取上げ、こなしあつて

未來永々、變らぬ夫婦。

與五　その一言が、智識の引導。

トこの時、落ちてありしお關の頭巾を取上げ

爰に妹の袖頭巾、心ゆかせに、面を隱して

ト渡す。長五郎、頭巾を取つて

長五　然らば此まゝ。

ト立ちあがる。この時、三、息吹きかへし、よろぼひ寄つて

三　うぬ、人殺し。

ト組みつくを、立廻つて三を引附ける。與五郎は首を抱へ、兩人、こなしあつて

長五　毒喰はゞ皿。

ト三を貫く。

中 ま



く



與五　モシ。

ト首を長五郎に見せる。長五郎、見詰めて、こなし。また氣を替へて、顏を外けるを、木の頭。與五郎、首を抱きしめ、泣く。これをキザミ、よろしく、ひやうし

幕

引附けると、禪のツトメのツナギにて、直ぐに引返す。

本舞臺、正面黑幕、一面に搭婆を結ひこめし玉椿の垣根。下手寄りに出茶屋を片附けし道具を重れ、上手に榎の大樹、目覆より同じく吊り枝。すべて本所石原岩淵あたりの模樣。時の鐘・禪のツトメにて幕明く。

ト爰にお照、前幕の拵らへにて、幼な子を抱き、病氣の體にて惱みゐるを、仕出し、立ちかゝりゐる。

仕出　オヽ、袖乞ひの順禮どの、小さいのがあるのだの。

てる　ハイ、左樣でござりまする。その上に持病の惱み、難儀いたして居りまする。

仕出　それはマア、不便な事だ。手の內を進ぜませう。

ト錢をやつて

藥でも服まつしやれ。ヤレ、氣の毒な事ぢやなう。

トよろしくあつて下手へ入る。お照、こなしあつて

てる　エヽ、有り難うござりまする。斯ういふうちも、少しも早う、この子の親にめぐり逢ひ、互ひに逢うたら、この上もないわしが喜び。

トまた癪の起りし思ひ入れ。

アイタヽヽヽ。アヽ、折悪いこの持病。殊に藥は皆になる。アヽコレ、藥を求めに行きたいものぢやなア。

ト癪を押へる思ひ入れ。赤子泣くを、いぶりつけてゐる。掠めたる禪のツトメになり、向うより長吉、前幕の形にて、手拭をかむり、走り出て來り、思ひ入れあつて

長吉　ヤレ／＼、危ふい事であつた。併し、弟の長五郎めが、この褞袍を着てゐたので、米屋の娘のお關めを、ちよろまかして無言の濡れ事。その跡は仲間の奴等が大勢來て、仕事をしかける算段はして來たが

ト思ひ入れあつて

それにしても大切なは、この茶入れ。

ト懐より袱紗包みの茶入れを出して

屋敷で盗んだあの茶入れは、有右衛門を便つて質屋へくらはせ、金はみんな遣つたが、昨日計らず洲崎の茶屋で、質屋の間抜けが持つてうせた、茶入れを摺りかへ、似せ物を掴ませたのを、知らずに土藏へしまつたべら坊。それを又有右衛門が、家尻を切つて盗み出す、相談相手に頼まれて、その仕事で、しつかり金を……さうとは知らず長五郎めが、誠と思つて盗んだ樣子。彼奴に科を塗りつけて、持つてゐる誠の茶入れ。こいつを此まゝ、江戸を高飛びとやらかすべいか。

トよろしくあつて舞臺へ來り、暗き思ひ入れあつて、お照に爪づき、吻りして飛びのく。赤子泣く。

てる　これは御免なせえ。併し、とんだ所へ寢たものだ。

てる　イエ〳〵、私しは女子の順禮。幼な子を連れ、持病の癪。悪い所へ居りました。御免なされて下さりませ。

長吉　アヽ、順禮さんかえ。さうして、持病が起つたのかえ。

てる　左樣でござりまする。お通りのお方、お藥がござりますなら、少々ばかり、お貰ひ申したうござりまする。

長吉　なんだ、藥が欲しいえ。どうして〳〵、そんな物を持つてゐるやうな者ぢやァござりやせん……子が泣くやうだが、抱いてゐるのか。

てる　ハイ、左様でござりまする。持病の上に、この子の世話。どうぞ町へ行つて、薬が買つて参りたうござりまする。

長吉　癪なら、薬を服むにやァ及ぶめえ。押へさへすれば直ぐに納まる。何も後生だ。ドレ、押へてやらうか。

ト長吉、捨ぜりふにてお照の胸のあたりを押へて、思ひ入れ。

成る程、こりやァ餘ッほどの癪だわえ。

てる　ハイ〳〵、これはマア、有り難うござりまする。

ト長吉、押へるうち、件の守り袋に金のあるのを探り見て

長吉　この守の中は、金だね。

てる　ハイ、少々入つて居りますわいなァ。

長吉　丁度路銀に

ト悧りする。長吉、引ッたくつて行かうとする。お照、袖に縋つて

てる　エ。

アヽモシ、こりやどうなされまする。

長吉 どうするものか。この守に藥があらうと思つて、それで取つて見たものよ。

てる イエ〱、何も藥はござりませぬ。それに、もう癪も納まりましてござりまする。これはマア、有り難うござりまする。

ト守を取つて、慄へながら懷へ入れる。

長吉 なにサ、遠慮する事はねえ。おれも癪持ちだ。我が身抓つて人の痛さだ。もうちつと押へてやらう。

てる イエ〱、もう〱よろしうござりまする。サア〱、お出でなされて下さりませ。

長吉 そんなにいゝのかえ。併し、冷えると又發るよ。隨分と冷えねえやうにするがいゝ。ア、難儀な事だなう。

ト捨ぜりふを云ひながら、東の歩みまで行き、思ひ入れあつて跡へ戻り、窺ひゐる。お照、思ひ入れあつて

てる 何ぢややら、氣味の惡い今のお人。持合せの金は僅ながら、一つにあるのは、尋ねるお方の證據の臍の緒ゝいはゞこの子の親の守、こればつかりは大事の品、失うては名乘り合ふ時……ア、怖い事〱。

ト思ひ入れ。長吉、いろ〳〵こなしあつて、側の卒塔婆をソツと拔いて、物も云はずにお照を打ち据ゑる。お照「アツ」と苦しみ、この手に縋つて思ひ入れ。これより一ツ鉦、淒味の合ひ方になり

こりや何者ぢや〳〵。病の上にこの打擲。なんでわしをば此やうに

ト苦しきこなし。長吉、思ひ入れあつて

長吉　知れた事だワ。うぬが懐の守の中に、入つてゐるのは慥かに金。おれが路用の足しにするのだ。キリ〳〵此方へ渡してしまへ。否だと云やァぶち殺すぞ……サア、出せ。キリ〳〵と、出しやァがれ。

ト無性に打ち据ゑる。赤子泣く。お照、思ひ入れあつて

てる　エヽ、胴慾な。コレ、僅な金に目がくれて、持病に悩む女一人を、此やうに打ち擲き。所持なす金は取らるゝとも、大事の守、これればつかりは

長吉　エヽ、執念深い。くたばつてしまへ。

トまた酷く打ち据ゑる。赤子頻りに泣く。お照、縋りよつて

てる　マア〳〵、待つて下さりませ。死にともないといふ譯は、これ、爰に抱いてゐるのは、父親知らぬこの赤子。いつぞや王子の帰り道、西ケ原とやらいふ所で、大勢寄つてわしを捕へ、いはゞ女

子の恥かしい、手籠めに合うてこの身は懐妊、産み落したはこの幼な子。男の顔も名も知らず、憎いながらも女子の情、二人と持たぬは男へ心中。その時肌を觸れたる男、落して行きし年度の書き物、それ取られては手がゝり失ふ。これぱつかりは放しともない。エヽ、苦しい、死にともない、死にともない。

ト段々に苦しむこなし。長吉、これを聞き、思ひ入れあつて

長吉　エヽ、王子の道の西ヶ原で、大勢寄つて手籠めにあひ、その一人の胤を宿したとは、割符を合すは落した守。中に年月日時の書き物。仁安二年庚申九月十日の誕生、双子の男子といふ事が、もしや書いては無かつたか。

ト耳に口寄せて訊く。お照、愕りして

てる　ヤヽ、それ知つてゐるからは、わしが尋ぬる戀しいお人。この子の父親に疑ひない。コレ、顔が見たい／＼。わたしやお顔を見て死にたいわいなア。

トこなし。長吉も思ひ入れあつて

長吉　いたづらながら身ごもつたか。

てる　サヽ、お前の胤の、この男の子。

ト赤子を見せようとしても、暗きゆゑ、いろ〱とこなし。此うち段々と苦しみ、トヾ「ウン」と倒れる。長吉、いろ〱介抱して

長吉　そんなら爰で泣く餓鬼は、おれの現在の子か。思ひがけねえ。併し、女がこの素性、まんざら賤しい者でも……さうとは知らず、かよわい體を。コレ、ほんの間違ひだ。氣を慥かに持つてくれ。女やアい。

ト呼び生けても緈切れしこなし。赤子泣くな抱きあげ

たうとうごねたか。イヤ、とんだ事をした……いはゞ男のこの餓鬼は、世が世であれば武士の總領。併し、此まゝ連れて行つては足手まとひ。不便な事だが、捨てずばなるまい。

ト思ひ入れ。時の鐘、四ツの拍子木、犬の聲。長吉、件の守を赤子に添へ、よき所へ捨て

南無阿彌陀佛。

ト花道へ行かうとする。この時、向うを見て

南無三、灯が

トうろたへて、舞臺前の土間へ入り、隱れる。矢張り時の鐘にて、向うより提灯を下げし四つ手駕籠、先肩は與兵衞、好みの拵らへ、後肩は甚兵衞にて出て來り、花道にて

與兵　コレ、甚兵衞どの、雨あがりゆゑ、ぬかるぞよ。

甚兵　合點ぢや〳〵。

ト兩人よろしく舞臺へ來り、上の方へ行かうとする。この時、赤子泣く。

與兵　ハヽア、爰らに捨て子があるかの。

甚兵　イカサマ、赤子の聲ぢやが。

ト兩人、駕籠を下ろして、與兵衞はお照の死骸に爪づき、思ひ入れあつて

與兵　ヤヽ、こりやコレ爰に女の死骸。疵も無いのは、病死をしたのか。側にあるのは、この女の子か。

ト此うち甚兵衞、件の子を抱きあげ、思ひ入れあつて

甚兵　捨て子と聞くも恥かしき、二十七年あとの事。捨てた双子も今頃は

ト守り袋を取つて、件の書き物を、提灯の灯にかざし、見る事。與兵衞は、お照の死骸を、よく〳〵見て

與兵　こりやコレ、腹は變れども、胤は一つの南方氏、主人の娘はお照どの、いはゞ與兵衞が妹も同然。どうして爰に。

ト思ひ入れ。

甚兵　ヤヽ、守の中の書き物は、二十七年その昔、双子に添へて捨てたる臍の緒、水天宮のこの木札。殊に書いたは、わしが手跡。爰へ廻つて來るのも因縁。

ト思ひ入れ。この時、駕籠の垂れをあげる。長五郎、與五郎の羽織を着て、袖頭巾をかむり、乘つてゐて、この時

長五　ヤヽ、双子の守、臍の緒に、添へた木札の水天宮。

甚兵　親が手跡の年月日時。

長五　双子の親とは、もしや誠の

與甚　ヤ。

ト思ひ入れ。赤子泣く。三人、顔を見合せ、長五郎、垂れを下ろすを木の頭。赤子泣く。甚兵衛、いぶりつける。與兵衛、お照の耳へ口を寄せ

與兵　女中やアい。

ト呼びいける。三方、一度の仕組み。これをキザミにて、時の鐘の送り、よろしく、ひやうし

幕

幕引附けると、引附けより縫ひぐるみの犬三疋出て、花道にて吠える。この時土間に隠れし長吉、犬

ツと上がつて

長吉 エヽ、畜生め。シイ〳〵。

ト犬を追ひながら向うへ入る。知らせにつき、跡シヤギリ。

三幕目

鮫洲駕籠屋の場

役名――駕籠屋與兵衞。輕子、お早。藤屋吾妻。三原傳藏。山崎屋與五郎。鮫洲の仁三。指切りの權九郎。倉岡丈左衞門。馬士、傳次。橋本次部右衞門。髮結ひ、濡髮長五郎。書畫、引窓小僧長吉。

本舞臺、三間の間、平舞臺、二階家づくり。向う暖簾口。上手、押入れ。下手、干し海苔の壺を飾りし書割り。この脇に四つ手駕籠、上の方、一間の障子屋體。二階、一面に伊豫簾を下ろし、庇屋根に誂らへの引窓。いつもの所、門口。かごやといふ掛け行燈。柱に乾海苔の看板。下の方、葭簀張りの見世、ヽヽヽヽ、あなご酒肴といふ行燈をかけ、すべて鮫洲濱邊の體。爰に與兵衞、木綿やつしにて、海苔の座を剃刀にて取つてゐる。側に駕丁二人、德利筒茶碗で酒を飲みゐる。この見得、馬士唄、海苔砧の音

にて幕明く。

與兵　コレ、てまへ達は、いゝ加減に飲まねえか。仕事があつても擔げまいぞよ。

駕甲　もう五合もつがうと思ふが、お前がさう云ひなさるなら、よしにしませう。

與兵　オヽ、よすがいゝとも〳〵。只で飲める酒ではなし、程に飲んで置くがいゝ。

駕乙　ほんに、此方の親方のやうな、稼ぎ人の目から見たら、馬鹿々々しからう。

駕甲　二百あつても四百あつても、飲んでしまはにや氣が濟まぬ。

駕乙　併し、飲むより外に樂しみはない……親方、お前も一杯やんなさい。

與兵　どうして〳〵、酒どころではない。これを問屋へやらねばならぬ。

駕甲　そんなに稼いだら、金の置き所があるまいに。

與兵　今年は海苔が當つたから、ほまち仕事に始めたが、なんと云つても獨り者、大した事もないけれど、商賣が一つゆゑ、急がしいのが儲けだ。

駕乙　それだから、わしらが云ふ通り、かみさんを一人持ちなさりやアいゝに。

駕甲　ほんに、かみさんといへば、奉公人を頼みなすつたが、いゝ人があつたか。

與兵　その奉公人は、この隣の越後屋の内へ頼んで、人を一人置くつもりだ。

ト馬士唄になり、向うより問屋場の若い者、走り出て來り

若者　コレ〳〵、與兵衛どの〳〵、人足が二人足りないから、直ぐに寄越して下さい。

與兵　オイ〳〵、承知しました……なんでそんなに忙がしいな。

若者　イヤ、聞いて下され。この節は千葉の家中で、寶の紛失、その配符が廻つて、髮結ひの長五郎といふ者と、山崎屋の與五郎といふ米屋の主、これがお尋ね者ぢや。それに、茶入れとかを盜んだ引窓小僧長吉といふ奴も、嚴しい詮議。この通り、人相書まで廻つて來ました。お前の內も人出入りが多いゆゑ、一枚置いて行きますぞや。

トよき所へ人相書を置く。與兵衛、思ひ入れ。

與兵　そんなら、これが引窓小僧の

若者　よう氣を附けて下され。人足も賴みましたぞや。

與兵　承知しました……コレ、貴様達、二人とも大儀ながら、行つてくれぬか。

駕甲　問屋仕事は氣がねえが、これもお役だ、仕方がねえ。

駕乙　それぢやァ親方、行つて來ます。

若者　サア〳〵、早く來て下さい。

兩人　ハテ、忙しない人だ。

ト馬士唄にて、三人、向うへ入る。與兵衛、そこらを片附けてゐる。向うより仁三、木綿やつし、麻裏草履、尻端折り、傳次、馬士にて、畚へ半櫃、この上に夜具包み、手水盥、女下駄などを附け、下女の引ツ越しの體。お早、下女の餘所行きの形、好みの拵らへにて出て來り、花道にて

はや　コレ、仁三さん、引ツ越して行くお内は、もう僅かえ。

仁三　さうサ、あの海苔の看板の掛けてある駕籠屋サ。

傳次　アヽ、それぢやァ與兵衛どのゝ内だね……何にしろ、べら坊に重い荷だが、こなさんは、工面がいゝね。

はや　なんで好い事がござんせうぞいな。

仁三　サア、もう少しだ、やつて下さい。

傳次　合點だ。

ト舞臺へ來り、門口から

仁三　與兵衛さん、奉公人が來ましたよ。

ト此うち與兵衛は、鐵灸を火鉢へ差しこみ、小魚を焼いてゐたりしが

與兵　オヽ、仁三どのか。お世話でござりました。

ト　お早は件の盥を取つて、手桶の水を入れて足を洗ふ事。與兵衞は、門口へ來て

誠に有り難うござります。

仁三　なんの、禮に及ぶものかな。

傳次　この櫃は、內へ入れませうか。

仁三　さうして下さい。

傳次　イヤ、べら坊に重い櫃だ。

ト內へ持ちこむ。

仁三　サア〳〵、お前、爰へ來て、旦那へお目見得しなさるがいゝ。主が卽ち爰の御亭主。お前の爲には御主人樣だ。

與兵　イヤ、主人と云はれるのも面目ない。

ト　お早、前へ出て

はや　これはマア、旦那樣でござりますか。私しはこの間まで、深川に奉公して居りましたが、あの仁三さんのお世話で、內方へ御奉公にあがりました、不調法者でござりまする。その思し召しで、

ハイ〳〵、お使ひなされて下さりませ。

與兵　イヤモウ、わしぢやというて同じ事。高の知れた駕籠屋商賣、不調法には負けぬ方ぢやて。

ト云ひながら、兩人、顏見合せ

ヤ、奉公人というて來たのは

はや　ほんに、いつぞや深川で

與兵　フツと心の迷ひから

はや　吾妻さんに惚れなさんした

與兵　アヽ、コレ〳〵、あの時の事は、必らず云はずに。

はや　それぢやというて、男を立てる

與兵　サ、その男を立てそこなうて、面目ないが矢張り駕籠舁き。

ト仁三に向ひ

コレ、仁三さん、お前もマア滅相な。男ばかりのわしが內、飯炊き婆ァなら知らぬ事、若い女中を置かれませうか。

仁三　そりやァさうでもあらうけれど、しなびた婆ァを使ふより、若い方がよからうと、わしは機轉を

利かした氣だ。

傳次　成る程、婆アを使ふより、或る時は、駕籠も片棒擔がせたり

仁三　イヤ〳〵、女で駕籠は舁けまいが、日が暮れたら遠慮はない、馬の代りに乘るがよい。

與兵　また冗談を云はつしやる。

ト思ひ入れ。馬士唄になり、向うより權九郎、藁草履の鼻緒をすげながら出て來り

權九　あのマア吾妻は駈落ちをして、どこへ隱れてうせ居るか。大方それも與五郎が、連れ出したに違ひないが、請け判の權九郎に、とんだ苦厄介をかけ居つた……イヤ、そりやアさうと、見世で賣る干し海苔を、次手に買つて行かうか。

ト草履を履き、舞臺へ來り

アヽ、爰の内で聞いて見ようか……モシ、御免なされませ。

與兵　ハイ、なんでござります。

權九　モシ、わしは商賣物にするのだが、海苔を廉く卸してくんなさらぬか。

與兵　ハイ〳〵、廉くしてあげませう。マア〳〵、お入りなされませ。

權九　それぢやア御免なさりませ。

ト内へ入り

與兵　今年は海苔が當りましたの。

はや　左樣でござります。去年より當りでござります……コレ、お茶でもあげて下され。

ハイ〳〵。

トお早、盆の上へ茶碗を戴せ、持つて出て

權九　ハイ、お茶おあがりなされませ。

イヤ、構はつしやりますな。

ト思はずお早を見て

はや　ヤ、わりや娘のお早ぢやないか。

ヤ、父さんかいな。

ト逃げにかゝろを捕へ

權九　ドツコイ、逃がしてなるものか。うぬ、見附けたぞ〳〵。

トこれにてお早、氣の毒なる思ひ入れ。皆々、膽を潰し

仁三　こりやアマア、どうしたのだ。

權九　どうも斯うもいりませぬ。太い奴だ。

與兵　モシ〱、その女は、たつた今、引ッ越して來た奉公人。なんでマア其やうに

權九　コレ、お前は爰の御亭主か。こりやアわしが娘だが、誰れが請け人で、この女を、爰の内へ置きなさるのだ。

仁三　イヤア。

ト驚ろく。

はや　モシ、父さん、なんでマア此やうに、わたしが行く先々まで、尋ねなさんすのでござんすぞいな。

權九　尋ねずに居られるものか。知つての通り此おれは、もと倉岡さまの御家來で、これを產んだ女房は、橋本次部右衛門が内の下女、それをおれが姙ませて、產んだのがお早、てまへだ。その後、この權九郎は、山崎屋といふ米屋にて、與五郎といふ男の餓鬼のある所へ、てまへを連れて入夫に行つた、その前に出來たのが妹のお關、その娘を向うへ殘し、てまへを尋ねて離緣して、居所に困つて橋本どのへ、下女奉公にやつたれど、長五郎に惚れたといふ噂があるゆゑ、暇をもらつて吾妻が緣で、藤屋へ輕子にやつたところ、駈落ちしたゆゑ尋ねてゐたのだ。思ひがけなく見附

けたからは、爰の内が掛合ひだぞ。

與兵　イヤ、それは迷惑千萬な。コレ、仁三どの、お前もマア滅相な。こんな係り合ひのある女を、なんで世話をして下すつたのだ。

仁三　與兵衞さん、案じなさるな。わしがいゝやうに片附けます……コレ、親仁どの。爰の内で知つた事ではないっお早どのゝ世話をしたのは、この仁三がしましたから、云ひ分があるなら、わしに云ひなせえ。

權九　オヽ、云ひ分を云はにやァならね。なんでおれが娘をば、こなたが世話をさつしやるのだ。

仁三　世話をするのは外でもねえ。元はこなたの主人ださうだが、丈左衞門といふ人が、このお早どのに惚れこんで、貰ひたいといふ事を、聞いた所から一途に迫り、永代橋から身を投げて、すんでの事に死ぬところ、折よくわしが通りかゝり、命を助けて樣子を聞けば、斯う〳〵いふ譯だと云ふから、乘りかゝつた船で仕方なく、一緒に內へ連れて歸り、身の落ちつきを賴むから、爰の內へ世話をしたのだ。惡いなら、どこへでも持つて出なせえ。わしが相手になりませう。

權九　さう荒ッぽく云ひなさりやァ、此方も云はにやァならねえが、落ちる所は金づくだ。親一人子一人だから、親を過す人さへあるなら、それを云ひ分に丈左衞門さまへ、斷わりを云ひませう……

コレ、お早、その世話をする人があるか。

はや　なんのマア、わたしがやうな、不束者を誰れさんが

仁三　アヽ、コレ〳〵、そりやア何を云ふのだ。お前の事なら引請けて、世話をする男があるのに。

はや　そりやマア誰れが、わたしの世話を。

仁三　オヽ、その世話をする男といふのは

はや　男といふは

仁三　コレ、爰の内の與兵衞どのぢや。

はや　エ。

權九　そんなら、この家の御亭主が

與兵　アヽ、コレ、それは間違ひだ。いつマアわしが、其やうな事を

仁三　コレ〳〵、與兵衞どの、こなたがおれを頼んだらう。しかも色事、ナ、ソレ、此お早どのと色であらうが……それでなければ親仁の手前……サア、なんであらうと、こなさんが、世話をせずばなるまいが。

ト仁三、與兵衞に呑みこませる。お早、思ひ入れ。與兵衞、迷惑なこなしあつて

與兵　これは又迷惑な事だ。

はや　成る程、男氣な與兵衛さま、お前がさうでないとあれば、嫌ながらも丈左衛門さまへ、參りませねばなりませぬ。爰の道理を聞きわけて

ト思ひ入れ。

モシ、お願ひ申しますわいな。

ト與兵衛も思ひ入れ。

與兵　イカサマ、お早が親御の手前ゆゑ、世話する男が無いと云はゞ

權九　丈左衛門さまへ連れて行くか。但しは面が綺麗ゆゑ

仁三　それぢやァ賣つて金にする氣か。

權九　オヽ、おれが娘だ。勝手にするわえ。

與兵　ても慾張つた事だな。

はや　そんならどうでも、アノお前は

權九　オヽ、金にするから、一緒に來やれ。

トお早を引立てる。その手を振り切り、有りあふ火鉢の鐵灸を取り、お早、額へ當て、ウンと倒れる。

皆々、悄りして

仁三　ヤ、こりやお早には、なんで顔へ

傳次　コレ、氣を慥かに持たつしやい。

ト仁三と傳次、介抱する。權九郎、捨ぜりふにて抱き起す。この時、お早の顔へ燒鐵の痕つく。お早側にある盥の水へ、我が顔を寫し、キツと思ひ入れ。しんみりした合ひ方になり

はや　モシ、與兵衛さま、降つて湧いたこの場の手詰め、嫌な所へ行きともなく、それゆゑ附けた顔の疵、これでは連れて行かれますまい。今は縁なき與五郎どのも、一旦兄よ妹と、假にも云うた此お早、お前は構うて下さんせぬか。無理な事ぢやが與兵衛さま、どうぞ拾うてこの内へ、わたしを置いて下さんせいなア。

トきつと云ふ。與兵衛、思ひ入れあつて

與兵　縁は切れても與五郎の、流石は妹、見上げた性根。見る影もない與兵衛ながら、その心意氣を見るからは

權九　イヽヤ、娘は親が存分。

ト寄るを與兵衛、突き廻して

與兵　イヤ、貰ひました。
權九　ヤア。
はや　そんなら、疵の附いたわたしを
仁三　アノ、與兵衞どのには
與兵　サア、駈込み女房の据ゑ膳を、喰はぬはこれも男の疵もの。
仁三　さてはそれゆゑ
はや　わたしの世話を
與兵　いかにも、わしがしませうわいの。
はや　エヽ、嬉しうござんす。

ト手を合せる。

權九　娘お早が世話をすれば、云はずとおれは舅ぢやぞ。
與兵　そりや知れた事、こなたはわしが立て過し。
權九　過すとあれば面白い。酒は元より大飯喰ひ。湯水のやうに小遣ひを、パッ〳〵と遣ふが合點か。
與兵　親子となれば、それも承知。

權九　イヤ、一株にありついたわえ。
仁三　ヤレ〱嬉しや、これでわしも落ちつきました。
傳次　物事サラリと片附いた、祝ひに一杯やりたいものだ。
權九　その酒なれば、おれが奢らう。
仁三　イヤ、おれも仕掛けた仕事もあれば
はや　仁三さん、お前へ、お禮は後から
仁三　なんの禮に及ぶものかな。
與兵　そんなら舅御。
權九　お早はこなたに
與兵　しつかりと、預かりました。

ト唄になり、仁三は下の方へ、權九郎と傳次は穴子酒屋へ入る。與兵衛お早殘る。合ひ方。

はや　モシ、與兵衛さま、今のやうな無理頼み。定めてお前も厚皮な、女子ぢやと思ひなさんせうが、何を申すも心に染まぬ、倉岡さまの世話になるが嫌さ。その難儀を汲み分けて、わたしを救うて下さんしたは、有り難うござんすわいな。

與兵　なんの〳〵。どうで獨り身ゆゑ、雇ひを置かねばならぬ所。何も緣づく、氣を附けて働らいて下され……併し、顏の疵は、痛みはせぬか。

はや　もう痛みはしませぬわいな。

與兵　それは重疊……それにしても、こなたの荷物、見世先へも置かれまい。おれが手傳うてやらうから、あの二階へ上げたがよい。

ト櫃へ手をかけ、思ひ入れあつて

これは大層重い櫃だが、何があるか、中の品を、ちつと分けて置いたがよい。

ト蓋を明けようとする。お早、これに縋つて

はや　アヽモシ、この荷の中は大事の品、これなり置いて下さりませ。

與兵　それぢやァ蓋を明けては惡いか。惡くば此まゝ二階へやらう。其方も手を貸してくりやれ。

はや　アイ〳〵、この針箱は爰へ殘して。

ト反古貼りの針箱を取つて、あたりへ置き、兩人、捨ぜりふにて櫃を二階へ上げ、下へ下りて

與兵　ヤレ〳〵、重い荷物であつた……イヤ、さつぱりと忘れてゐたが、今日は二十三夜待、臺所にある神棚へ、こなたはお神酒を上げて下せえ。

はや　ハイ〳〵、畏まりました。

與兵　おれは其うち高輪へ、持たせてやる生海苔の、苞を一つ拵らへよう。

ト下手にある藁を出し、苞を拵らへにかゝる。

はや　左樣なれば旦那樣。

與兵　アヽコレ、旦那と云はれる株は無い。ハヽヽヽヽ。

はや　ドリヤ、お神酒を上げて參りませうか。

ト唄、時の鐘になり、お早、顏の疵を押へ、思ひ入れあつて、奧へ入る。與兵衞は藁をすぐつて、苞を拵らへ居る。この唄をかり、向うより與五郎、頰かむり、尻端折り、一本差し。吾妻、手拭をかむり、出て來る。花道にて、思ひ入れあつて

與五　母や妹の死んだのを、見捨てゝおれが家出したは、長五郎さまの在所を尋ね、五十日の間に誠の茶入れを、手に入れる料簡だが

吾妻　もしその品が出ぬ時は、命を捨てると云はしやんすゆゑ、わたしも內を斷落ちして、側を離れずどこまでも。

與五　女の小さい料簡では、さう思ふのも尤もだが、尋ね探す長五郎さまの、安否を聞かぬ其うちは、

滅多に死なれぬこの與五郎。

吾妻　さうして今宵は、これからどこへ。

與五　川崎へ泊る氣だが、おぬしが足では心元ない。

ト思ひ入れ。この時、下手の酒屋より、以前の傳次、出て來り。

傳次　ヤレ〳〵、いゝ心持ちだ。醉つた〳〵。醉つたは藥師の御縁日か。

ト云ひながら、醉つたる思ひ入れにて花道へ行き、摺れ違ふ。

與五　モシ〳〵、爰らに駕籠屋はござりませぬか。

傳次　あります〳〵。向うの海苔の看板の出た內サ。

與五　忝うござります。

傳次　駕籠より馬はどうだ。馬ならわしが乘せませう。

與五　イヤ、女だてら、馬はいらない。

傳次　女連れか。エヽ、畜生め。

ト云ひながら向うへ入る。兩人、門口へ來り

與五　モシ〳〵、川崎まで、駕籠を一挺やつて下さりませ。

與兵　ハイ〳〵、畏まりましたが、只今若い者が仕事に参りました。マア〳〵、此方へお入りなされませ。

與五　どうぞ早うお頼み申します。サア、おぬしも爰へ……御免なされませ。

ト兩人、内へ入る。與兵衛、見て

與兵　ヤ。思ひがけない與五郎どの。此方のは、ォヽ、吾妻どのか。

吾妻　さう云はしやんすは與兵衛さん。

與五　とんだ所で逢ふものだ。

與兵　マア〳〵、此方へござりませ。

ト兩人、思ひ入れあつて

與五　マア、何にしろ、こなさんも、變る事もなくて、めでたうござります。

與兵　イヤモウ、お前方も、達者でよい……見れば、吾妻どのと二人連れ。こりやァ、大師様へ參らつしやるのか。

吾妻　サア、遊山に行く程ならよいが

ト思ひ入れ。

與兵　して又、二人で此やうに

與五　さまよひ歩くは外でもない。わしがこの身に引受けて、お世話いたすは橋本の、若旦那の長五郎さま。兄御といふは長吉どの、持つて生れた惡心に、殿の寶の茶入れを奪ひ、親御樣には命の瀬戸。五十日のうち、その品を、尋ね出さんと思ふうち、思ひがけない内の騷動。一方ならぬ人殺しに、よんどころなく隱れるを、案じ過して吾妻が駈落ち。わしが側を離れぬゆゑ、二人連れの嫌味な道行。爰でこなたに逢うたが幸ひ。少しの間この吾妻を、預かつては下さるまいか。

トこれにて與兵衞、思ひ入れあつて

與兵　何がさて、兄弟分の因みを結んだ、こなたの頼み、早速應と云ひたいが、この間は合の宿で、人を泊めるはきつい法度。宿役人の見廻りも、夜は度々ござるゆゑ、氣の毒だが預かれぬ。

與五　そりやさうでもあらうけれど、親類内の客だといつて、どうか二三日のところをば

與兵　折角の頼みゆゑ、斷わり憎いがこの頃は、仕事といつてはさつぱり無し、米は元より薪まで高くこれ見なさい、やう〳〵と藁を焚いて暮らす身代。人増せば水増す道理。貧乏世帶の悲しさは、一人はおろか半分でも、餘計な人は置かれませぬ。こんな話しも懇ろだけ。せめての事に茶漬でも……イヤ〳〵、それも矢ッ張り大森の、駿河屋でやるがよからう。

ト逃げ口を云ふ。與五郎、ムッとしたる思ひ入れにて

與五　御深切は忝いが、その茶漬も食ひたくない。大森の駿河屋で、茶漬を食ふのは知つてゐる。ほんに世が世であるならば、こなた衆に駕籠を舁かせ、花野で歩く與五郎も、今は日蔭の身も同然。廣い道さへ抜き足して、物事下から頼むのも、兄弟分とか何とか云つて、詞を番うた事があるから、それでこなたに頼むのだ。なんの、しみつたれた、こんな内に、居ろと云つても居るものかえ。

トきつと云ふ。吾妻、これを留めて

吾妻　アヽモシ、與五郎さん、腹の立つのも尤もながら、云うても無駄な事なれば、もう好い加減に云はしやんせいな。

與五　ナニ云つても構ふものか。義理を知らぬ人だから、云つてやるのが向うの爲だ。

吾妻　そりやさうでもござんせうが、今も云ふ二人とも、世間を忍ぶ日蔭の身、物事内端にしなさんせいな。

與五　イヤ、内端にしては居られぬ。思つた事を云はにやア。腹の蟲が承知しないワ。口を出さずと黙つてゐろ。

トこれにて吾妻、是非なき思ひ入れ。與兵衛は莨をのみ、脇を向いてゐる。與五郎、有りあふ藥を取

つて
コレ、與兵衛どの、この藁を見さつしやい。

ト合ひ方變つて

元は一つに蒔いた種、生えるも一つの稻なれど、米は寶と世上で尊み、同じ生れのこの藁は、草履草鞋に作る時は、牛馬の足にかけられる。人に譬へて云はうなら、この與五郎は看板の、一粒選りの上白米、むさい穢ない性根のこなたは、土足にかけるこの藁だ。ナニ一口に云はれるものか。

ト惡口する。吾妻、與五郎の袖を曳き、氣の毒なる思ひ入れ。

吾妻　モシ、もう好い加減に云はしやんせいな。

與五　エヽ、打ツちやつて置け〳〵。違ひない事を云ふのだ。居ろと云つても、こんな内に誰れが居るものだ。サア、吾妻、來い。

ト吾妻を引立てる。

吾妻　それぢやというて。

與五　エヽ、來いと云ふに。

ト無理に手を取り、門口へ連れて出る。此うち與兵衛、莨のみながら、聞かぬ顔してゐて、氣を變へ、思ひ入れあつて

與兵　米どの、待つた。

與五　ヤ。

與兵　イヤサ、一粒選りの上白米どの、藁が留めた。マア〳〵、待つた。

ト合ひ方變つて

吾妻　アレ、留めてぢやわいな。

與五　この上白米を呼びとめたは

與兵　隱まひませう。

與五　なんと。

與兵　こなたが今の腹立ちは、無理とは思はぬ、尤もゆゑ、わしもとつくり思案して、吾妻どのは隱まひませう。

吾妻　そんなら、わたしを

與五　隱まうて下さるか。

與兵　いかにも、わしが隱まひませう。併し、そこで二人ながら、少しのうち待つて下され。

ト奥へ向ひ

コレ、お早〳〵、そこのお神酒に鰹を添へ、ちよつと爰へ持つて來やれ。

ト奥にて

はや　アイ〳〵。

ト合ひ方キツパリとなり、奥よりお早、お神酒徳利に、杯と鰹節を盆へ戴せ、持つて出て來り、與五郎を見て、恟りして

ヤ、お前は。

與五　こなたはお早。

はや　思ひがけない與五郎さん、吾妻さん。

吾妻　わたしよりもお前こそ、どうして爰に居さんした。

與五　殊には見馴れぬ顏の疵。

はや　これにはいろ〳〵樣子のある事。後でゆるりと話しませう。

與兵　何はさておき、コレ、お早、先刻こなたが手詰めの折、顏へ燒鐵を當てゝの頼み。その時、與兵

衛が呑みこんで、濟ました代り、いま其方に、頼みがあるが、聞いてくれるか。

はや　そりやわたしが頼みをば、聞いて下さんした與兵衛さん、その恩返しに何なりとも。

與兵　聞いてくれる心なら、爰で祝言してくりやれ。

はや　エ。

與兵　假にも色と云はれた與兵衛、こなたが飲んで、わしに獻しやれ。

　　トお早、思ひ入れあつて

はや　サア、先刻父さんへの云ひ譯に、無理にお前を男のやうに云うて、あの時は濟ましたれど、ちつとわたしが、大事のお方に。

與兵　それも合點。葛籠の中の。

はや　エ。

與兵　アコレ、それを云うては物が無い。たとへ枕は交さずとも、先刻に聞いたが與五郎どのゝ、一旦妹となつたこなた、是非とも祝言せにやならぬ、といふその譯は、これなる吾妻。知らぬ仲ならよけれども、惚れた女に獨り身では、世話のならぬが世間の口。與兵衛が惚れてるゆゑに、吾妻を引込み世話すると、よからぬ噂のある日には、頼みにござつた與五郎どのに、疵を附けるも

同じ事。斷わり云へば、さうとは知らず、人の落目を見捨てるかと、藁に准えし今の一言。それゆゑこなたと祝言すれば、今は緣無き與五郎でも、以前は義理ある兄なれば、一對揃ふ兄弟仲。緣者となつて世話をする氣だ。

ト思ひ入れ。お早、切なきこなし。この以前より下手へ仁三、出て來て、門口に聞いてゐる。

はや　事を分けたる其お賴み、否と云はれぬ所なれど

ト　お早、二階へ思ひ入れ。仁三、ズツと內へ入り

仁三　樣子は門で聞きましたが、先刻こなたの難儀をば、救つてくれた男氣の、與兵衞どのゝ今の詞、こりやこなた、祝言の杯せにやなるまい。

はや　それぢやというて、假にも夫婦に

仁三　サア、なつて濟まぬ所があるとも、こなたの請け人この仁三が、後の始末は受合ふから、與兵衞どのゝ賴みを聞き、爰で祝言したがよい。

ト　お早に呑みこませる。

はや　お世話をして下さんした、お前が證據にならしやんすなら、その杯をしませうわいな。

與兵　すりや、お早にも得心して、この與兵衞と杯するか。

はや　抜差しならぬこの祝言。神は見通し
ト二階へ思ひ入れあつて
成る程、爰で
仁三　幸ひ居合すお二人は、時に取つての待女郎。
與五　中を取持つ
吾妻　仲人は
仁三　この請け人の仁三郎。先づお定まり、嫁から先へ。
吾妻　ドレ、お酌しませうわいな。
ト合ひ方キッパリとなり、お早、杯を取上げる、吾妻、酌する。お早、飲んで與兵衛へ献す。杯ごと
よろしく
仁三　千秋萬歳の千箱の玉を奉る。
ト不器用に謠をうたひ
ハヽヽヽヽ、先づ仲人の役は濟んだ。
ト與兵衛、思ひ入れあつて

與兵　サア、斯う祝言をするからは、いはゞ緣者の二人の衆、この與兵衛が隱まふから、いつまでなりと逗留さつしやれ。

與五　その深切を知らぬゆゑ、おれが生れつきの癇癪に、惡口したのは、わしが誤まり。

吾妻　今となつては二人とも、與兵衛さんへ面伏せ。

與兵　腹の立つのは尤もだ。決して無理とは思はぬから、その云ひ譯には及ばぬわい。

與五　それぢやァ吾妻を、何分ともに。

與兵　しつかりと預かりました。

與五　これで安心、わしはこれから。

ト行きにかゝるを

與兵　アコレ、與五郎どの、お前はどこへござらつしやる。

與五　ちつと尋ねる人もあれば。

與兵　ハテ、そりや惡い料簡。お前も日蔭の身の上、外へ行くとは詰まらぬ義理立て。こなた衆二人を留めようばかり、無理に祝言した與兵衛。

仁三　その深切を無足にせず

はや　わたしと共にお二人も

與五　そんなら詞に從つて

吾妻　御厄介になりませうか。

與兵　緣者になりし上からは、心を置かず、ゆつくりと

はや　久し振りにて打寛ろぎ

與五　今宵は夜とともに

吾妻　つもる話しを。

與兵　何は兎もあれ、爰は見世。

仁三　めでたく奥へ

與五　開きませうか。

ト唄になり、與兵衛お早は奥へ、與五郎吾妻は上手へ、仁三は外へ出て下手へ入る。時の鐘、合ひ方になり、向うより長吉、少し伸びたる月代の鬘、好みの着附け、頰かむりにて出て來る。後より以前の傳次、附いて出て來り、花道にて

長吉　コレ、傳次、それぢやアてめえ、與五郎が、與兵衛の内へ入つたのを、しつかりと突きとめたか。

傳次　そりやァ間違ひがあるものか。内へ入るのを見届けたのだ。

長吉　よし〳〵。それさへ聞きやァ仕事になる。てめえは今の内で待つて居ろ。

傳次　合點だ。それぢやァきつと寄りねえよ。

長吉　いゝといふ事よ……又あんまり、ぐづになるなよ。

傳次　大丈夫だ。それぢやァ長吉。

長吉　早く行きやァな。

　　トこれにて傳次、引返して向うへ入る。長吉、思ひ入れあつて舞臺へ來り、門口にて

　ハイ、御免なせえ。ちよつとお頼み申します。

　　トこれにて奥より與兵衞、出て來り

與兵　ハイ〳〵、なんでござります。何かあげますかね。

長吉　へイ、買ひ物ぢやァござりませぬ、ちよつと物が尋ねたうござります。駕籠屋の與兵衞さんと仰しやるのは、此方でござりますかね。

與兵　ハイ、與兵衞はわしでござりますが、御用ならお入りなされませ。

長吉　へイ、眞平御免なされまし。

ト門口を明けて內へ入り、よろしく下手へ住つて、頰かむりを取り

與兵衞さん、お久しうござりやす。

トこれにて與兵衞、心得ぬ思ひ入れにて、長吉を見て

與兵　ヤ、お前は長吉どのか。

ト思ひ入れあつて、ツイと立つて行くを、長吉、こなしあつて

長吉　オイ〳〵、與兵衞、なんでこなたは立つて行くのだ。

與兵　ハテ、こなたのやうなお人には、用が無いゆゑ行きますのサ。

長吉　そりやァあんまり愛想がねえ。今ぢやァこんなごろつきだが、以前はこなたの主筋だ。さう安くはしねえものだ

與兵　その主筋ゆゑ猶以て、この與兵衞は用が無いわえ。

長吉　イヤ、お前は用はあるめえが、この長吉が用があるのだ。

與兵　不所存者のこなさんが、この與兵衞に用があるとは。

長吉　用といふのは外ぢやァねえ、爰の內に詮議がある。

與兵　ナニ、詮議とは。

長吉　とぼけなさるな、與兵衛どの、詮議といふは外ぢやァねえ。緣に繫がるこの家の內。あの人殺しの與五郎が、隱れてゐるを突きとめて、それでわざ〳〵出かけて來たのだ。

與兵　ハ、、、、。こりや面白い云ひがゝり。與五郎は人殺しと、知つてわしが隱まつたが、それを囮に云ひなされば、綾は拔けない、こなたも盜人、配符の廻つた引窓小僧。

長吉　ヤ。

與兵　サ、それだによつて角々しく、詮議と云はれた義理でもあるまい。

長吉　そりやァこんたが云はねえでも、無理合點で仕掛けた仕事。首の細つた盜人も、いはゞこの身のほく除けに、出したら首を繼げようと、曲つた心の長吉も、詰まるところは命が惜しさ。あの與五郎をしよびき出せば、繫がる緣で弟の、長五郎の在所も知れ、次手に此奴も訴人をする氣だ。

與兵　そんなら現在弟の、長五郎どのも見當つたら、その身のしがを隱さうと、飽くまで根强いこなたの性根。

長吉　そこが兄弟他人の始まり。彼奴は夜盜家尻切り。似せ物ながら早野屋で、盜んだ茶入れを屋敷へ持ち出し、自業自得で盜人の疑ひ。見當り次第に突き出す心サ。

與兵　そんならどうでも、人情を捨てゝ

長吉　その手がゝりはあの與五郎、家探ししても彼奴を捕へて

ト奥へ行きにかゝる。與兵衛、キッとなつて

與兵　長吉、捕つた。

ト大きく云ふ。長吉、愕り思ひ入れ。

長吉　なんと。

與兵　サ、捕つたといふのは、この繪姿。

ト以前の人相書を出して見せる。

長吉　それぢやァこれが

與兵　サ、それぢやによつて長吉どの、立ち騒がずと、下にござれ。

トこれにて長吉、思ひ入れあつて

長吉　成る程、これは一番出直しだ……それぢやァ與兵衛、これからは、野暮な詮議の舊惡のと、身の讒奏は取りおいて、溫なしづくの話しにすれば、貴様も丸く話しをする氣か。

與兵　そりや元々主筋なりや、何も事は好みませぬ。

長吉　それぢやァ見世を出しかへて、實はこんなにこぢつけたも、おれも段々喰ひ詰めて、この江戸に

も居られぬゆゑ、高ぶけりをするつもりだ。主家來のよしみを思つて、路銀の工面をして下さい。

與兵　それはお心安い事、貸してあげたいものなれど、高の知れた駕籠舁き商賣、今といつては持合せが

長吉　それぢやァ金が無いといふのか、出來ざァそれまで、仕方がねえが、うつかり外へは出られぬ體。お前の工面の出來るまで、當分おれは居候ふ。どうぞ爰へ置いて下さい。

トこれにて與兵衞、思ひ入れあつて

與兵　成る程、それは承知しました。貧乏暮らしが合點なら、足手伸ばしてゆつくりと

長吉　置いてくれるか。

與兵　幾日なりと

長吉　おぬしが内に。

與兵　それも此方に

長吉　ヤ。

與兵　イヤサ、心置きなく、奥でゆつくり

長吉　草臥れ休めに、寝込むとしようか。

與兵　そんなら、長吉どの。

長吉　時代なやうだが、後に逢はうよ。

與兵　サア、ござらつしやりませ。

ト合ひ方になり、兩人よろしく氣味合ひあつて、長吉は奥へ入る。直ぐに上手より與五郎、出て來り奥を見込んで、行きにかゝる。與兵衞、思ひ入れあつて

與五郎どん、血相變へて、こりやアどこへ。

與五　ハテ知れた事、今のは慥かに引窓長吉。

ト息込むを、與兵衞、留めて

與兵　サ、似た俤にこなさんが、見違へるのも尤もだが、ありやア双子の弟にて、その名も濡髪長五郎。もし又今のが長吉なら、こなたは何か云ひ分でも。

與五　長吉ならば茶入れの盗賊、又二つには妹に、恥を與へしそれゆゑに、母も妹も非業な最期。その上わしや長五郎どのに、人殺しの罪を負はせたるも、元はといへば長吉の仕業。その悪人を與兵衞どの、なんでこなたは庇はつしやるのだ。

與兵　サ、長吉なら庇はねど、その弟の長五郎どのゆゑ、こなたが事を荒立てては、折角茶入れの

與五　エ。
與兵　イヤサ、茶でも參つてゆつくりと、マア、落ちついてござらつせえ。
ト與兵衛、思ひ入れあつて與五郎を留める。與五郎、是非なく下にゐる。時の鐘、合ひ方になり、向うより傳藏、前幕の形。丈左衛門、袴羽織、大小にて、跡より中間、乘り物を擔ぎ、捕り手四人、黑四天にて附き、出て來り、門口へ來て
丈左　ソレ。
ト下知する。捕り手、バラ〳〵と內へ入り
捕手　動くな。
ト與五郎を取卷く。
與五　ヤ、こりや何科あつて。
傳藏　オヽ、その仔細、申し聞けん。
ト內へ入る。
與兵　ヤ、あなた樣は。
傳藏　若殿より承つた、南方氏の子息與兵衛どの。

與兵　只今にては駕籠屋の與兵衛。して、あれなる與五郎を、何ゆゑあつて。

丈左　仔細と申すは外でもない。いつぞや山崎屋に於て、多くの者を手に掛けしは、橋本の悴長五郎、それに荷擔の與五郎なれば、彼れに繩かけ引ッ立てゝ、その長五郎の詮議いたす。

與五　その人殺しは即ち私し、長五郎どのは存ぜぬ事。イザ、繩かけてお引き下され。

ト後へ手を廻す。この時、お早、窺ひゐて、前へ出て

はや　アヽモシ、それではお前に、長五郎さまが

ト云ふを與五郎、目まぜする。傳藏、聞き咎め

傳藏　ナニ、長五郎が如何いたした。

はや　イエ、アノ、長五郎さまと申しましたは、以前古主のお方ゆゑ、お案じ申して、うか／＼この場で

ト丈左衛門、お早を見て

丈左　ヤ、そちや輕子のお早……あれほど身共が附けつ廻しつ……イヤサ、其方は附合ひが無いと申すもの。影を隱した其方が、どうしてこの家に

ト丈左衛門、キッとなるを、與兵衛、隔てゝ

與兵　アヽイヤ、今は駕籠舁き與兵衛の女房。
丈左　アヽ、其方の
傳藏　ハテ、丈左衛門どの、いらざるお早が身の詮議、先づお扣へなされい。
丈左　然らば扣へませう。

トよろしく思ひ入れ。

傳藏　何は格別、改め申すに及ばねど、其方の親御は同家中にて、即ち南方十次兵衛どの、腹は變れど妹の、お照どのゝ横死ゆゑ、今より其許、屋敷へ歸り、親の家名を其まゝに、十次兵衛と改名せられい。こりや若殿の仰せでござる。
與兵　先達ても深川で、御深切なる殿樣のお詞、さりながら、生れ附いての侍ひ嫌ひ、町家で育つたこの與兵衛、これが勝手でござります。
はやそれはさうでもござんせうが、願うてもない身の出世、親御樣のお名を繼ぎ、帶刀なして、何かの御詮議。
丈左　イヤ〳〵、それは出來ない相談。駕籠舁き風情が、どうして〳〵。大小代りは息杖二本、差詰めそれが相應だ。

與兵 それゆゑ望まぬ、駕籠舁き與兵衞。
與五 して又、門のあの駕籠は。
傳藏 あの乘り物こそ、お家の寶、紛失なせし科により、四人と相成りし、双子が親の次部右衞門。
與五 ナニ、すりやアノ乘り物が
丈左 即ち日延べも今日限り。死罪と極まつて、鈴ケ森で
與五 ナニ、鈴ケ森で
皆々 死罪とな。
傳藏 サ、かゝる罪科を受くるのも、双子の兄長吉が惡逆、義理ある親の次部右衞門どのが、斯くまで心勞なしつるを、餘所目に見なす人非人。せめて弟長五郎が、親御の罪科を知るなれば、この成行は見まいもの。アヽ、最非もなき事ぢやなア。
ト愁ひの思ひ入れ。この時、二階にて物音する。
與兵 ヤ、あの二階の物音は
はや エ。
ト悔りする。傳藏、思ひ入れあつて

傳藏　コレ、お早とやら、何ゆゑ其方は驚ろくのぢや。

はや　アノ、これは

トうぢ〳〵する。

傳藏　ハテサテ、女と申すものは、些細な事に物驚ろき。

與五　サ、その驚ろきより旦那樣の、今日につゞまる御身の大難。

傳藏　この場に居合す血緣の者。橋本氏へ、名殘に一目。

與兵　久々拜さぬ旦那のお顏。

はや　私しとても御主人樣。

與五　この與五郞も繫がる御緣。

傳藏　ソレ、家來ども。囚人、これへ。

捕手　ハツ。

ト捕り手、駕籠の戶を明ける。中より次部右衞門、小手をゆるめし繩にかゝり、出る。お早、介抱して内へ入れる。與兵衞、見て

與兵　オヽ、橋本次部右衞門さま。

はや　旦那様、お久しうござりました。
次部　オヽ、左やう申すは、與兵衞であつたか。
與兵　御恩を受けし、與兵衞めでござりまする。
次部　今一人は、慥かに下女の
はや　ハイ、早でござりまする。
次部　定めて話しは聞いたであらう。お家の寶を失うて、武士たる者がかゝる縄目。云うて返らぬ繰り言ながら、あの兄めが不所存より、三方四方の艱難辛苦。せめて弟の長五郎めが居やつたなら、頼み置くべき筋もあれど、彼れも浮世を日蔭の身の上。
與五　サ、その弟御の御身をば、明るうさせたいばつかりに、この與五郎が人殺しも
次部　そんなら其方が、弟に代つて
與五　アイヤ、變つたお身は長吉どの、長五郎さまは茶入れの詮議。
丈左　二人の悴はありながら、兄長吉は茶入れを盗み、質入れして行くへ知れず。また弟の長五郎は罪科遁がれぬ人殺し。
與五　イヽヤ、非人を殺したは、この與五郎でござりまする。

丈左　ムウ、我れと我が手の白狀なら、イデ、繩打つて

ト立ちかゝるを

傳藏　イヤ、與五郎に科は無い。

丈左　なんと。

傳藏　多くの非人を害せしは、人殺しでない、敵討ち。

丈左　ナニ、敵討ちとは。

傳藏　サ、義理ある妹を非人どもが、手籠めになせしそれゆゑに、母の生害、妹の自殺、それゆゑ切つたは親の仇、又二つには云ひ號けの、長五郎への云ひ譯ならん。

與五　全くその儀は。

傳藏　アヽ、コレ〳〵、包み隠すに及ばぬぞ。たとへ人を害せしとて、逃げ隠れずともよい事を、暫らく内を立退きしは、流石は武士にあらざる證據。その町人でありながら、よくも母の敵をば、その座を去らず討つたるぞ……倉岡氏、見上げた事ではござらぬか。

丈左　ムウ。

ト詰まる。

傳藏　それを承知でこれまで參りしは、身共にも所存あつての事。何に致せ、與五郎は天晴れぢや。

ト扇にてあふぐ。次部右衞門、思ひ入れあつて

次部　アヽ、流石は三原傳藏どの、仁心厚きこの場のお裁き。

トよき時分より下手に、以前の權九郎、窺ひゐて

權九　その一件が濟んだなら、もう一口、與五郎に、掛合ひを附けにやァならぬ。

ト內へ入ろ。與五郎、見て

與五　ヤ、さう云ふは權九郎どの。

權九　おれが判でやつてある、藤屋の吾妻が駈落ちも、連れ出したのは慥かに與五郎。どこへ隱した、それ聞かう。

はや　アヽモシ、父さん、かゝる詮議のその中へ、又ぞろお前が

權九　思はずてめえに逢つたのも、吾妻を探しに來たからの事だ。與五郎めが居るからは、この家の內に

ト立ちかゝるを、お早、留めて

はや　そこをわたしが頼みぢやほどに。

権九　そんなら身の代、百兩出すか。
はや　サア、その金は。
與五　現在手詰めの吾妻が身の代。
権九　百兩出すか。
與五　サア、それは。
権九　家探しせうか。
はや　サア
権九　サア
三人　サア〳〵〳〵。
権九　エヽ、面倒な。家探しなして
　　ト奥へ踏みこまうとする。この時、次部右衛門、思ひ入れあつて
次部　アイヤ、町人待つた。
権九　アノ、わしに。
次部　いかにも。

權九　見れば繩目のお侍ひ……ハヽア、この一埒の扱ひかえ。
次部　いかにも、扱つて遣はすわえ……イヤナニ、三原氏、罪科受けたる某が、かゝる所へ口出し致すは、何とも以て恐れ入れど、この儀は何卒拙者めに。
傳藏　何がさて、御子息に緣ある與五郎、その者の切端の儀。こりや其許のお心任せ。
次部　お許し下さるとな。それにて身共も一つの安堵。

ト思ひ入れあつて、懷中より胴卷を出して

サ、これを取りやれ。

ト權九郎の前へ出す。權九郎、取つて

權九　ムウ、中の金は百兩あまり。そんならこれを
次部　吾妻とやらが身の代金。

ト云ふを與五郎、隔て、

與五　アヽモシ、旦那樣、それではどうも。
次部　ハテサテ、なんの遠慮があらう。かゝる身にて大金を、肌身離さず所持なせしは、寶の質請け、それも無駄事。いま其方が切端の手詰め。身が償なふも、忰が恩の……イヤサ、恩には着せぬ、

遣うておくりやれ。

與五　左樣なれば仰せに隨ひ、拜借を致しまする……サア、權九郎どの、旦那のお惠み、吾妻が身の代

キリ〳〵持つて歸らつせえ。

權九　歸らないでどうするものだ。これさへ取れば用は無い。

はや　用が無いなら、早う歸つて下さんせいなア。

權九　ドリヤ、親方へ渡して來ようか。

ト時の鐘、合ひ方にて、權九郎は下手へ入る。丈左衞門、こなしあつて立ちあがり

丈左　人殺しの一埓は、敵討ちだとごまかしても、この上詮議は長五郎、どうやらこの家が

ト二階へ思ひ入れ。

與兵　イヤ、家尻の盜賊長五郎と、思し召すのは目鏡の相違。

丈左　ナニ、目鏡が違ふとは。

與兵　この盜人は外にある。

丈左　して、その盜人は。

與兵　餘人ではない、丈左衞門どの、その盜人は、こなたであらう。

丈左　ナニ、この身を捕へて、盗人とは。

與兵　いつぞや金のお使ひに、參つた時は駕籠舁き與兵衛、こなたが渡した金の受取。

ト懐より序幕の受取を出して

駕籠屋與兵衛へ、倉岡丈左衛門。

丈左　いかにもその時渡したが、この受取がどうしたのだ。

與兵　いよ／＼覺えがござるなら、その盗人はお前の弟有右衛門、こなたと二人の仕業であらう。

丈左　ヤイ／＼／＼、なんで某兄弟が盗人ぢや。

與兵　その證據を見せませう。

ト立つて戸棚より序幕の鋸を持つて來り

この鋸に覺えがござるか。

丈左　なんで身共が知るものか。その鋸がどうしたのだ。

與兵　家尻を切つた土藏の側に、これが落ちて居りました。

丈左　それで身共を疑ふとは、なんぞ證據があつての事か。

與兵　その疑ひは鋸の、柄の抜けたのを留めんため、これに卷いたる手紙の反古。

ト柄の所より手紙を出して開き

ナニ〳〵……右の茶入れ、早々御遣はし下され度く、この者は慥かなる者ゆゑ、首尾よく手に入れ候ふて、御渡し下され度候ふ、即ち證據に印形手紙差遣はし候ふ、早々以上。倉岡有右衛門どのへ、同苗丈左衛門判……これが即ち慥かな證據。

ト丈左衛門、恟りする。

はや　それで解つた事がござんす。夷の宮から歸りがけ、佐賀町河岸を通りかゝり、早野屋の土藏の前で、手紙のちぎれを拾ひしが、どうやら怪しい文言ゆゑ、手拭きにもせず、この中に

ト針箱の中より反古を出す。

傳藏　ムウ。その品これへ。

はや　ハイ〳〵。

ト傳藏、取つて

傳藏　一筆啓上致し候ふ、先達て其方長吉兩人にて、盗み取り候ふ茶入れ、質入れ致し候ふ由、外々へ賣り拂はれ候ふては、若殿千太郎さまの手筈よろしからず候ふゆゑ、似せ物の茶入れ拵らへさせ候ふ間、この品に摺りかへ……とばかりにて、後はちぎれて文言解らず。

與兵　その後は鋸の、こみに挾みし手紙の反古、引合すれば文言ばかりか、寸分違はぬ手跡の同筆。
與五　紛ふ方なき盗人は、倉岡兄弟二人の衆。
次部　佞辯を以て人をなづけ、お家を覦ふ二人の者。企みに邪魔な某を、亡き者にせん計らひにて、
寶の茶入れを盗ませしも、かゝる證據の出たる上は、最早遁がれぬ丈左衛門。
はや　二人の仕業と知れたる上は、旦那様には御助命ならん。
與五　只この上は誠の茶入れを、草を分つて詮議なさば
丈左　なんで滅多にその茶入れが。
傳藏　何ゆゑ知れぬと存じて居るぞ。
丈左　ムウ。サ、それは
傳藏　貴殿が茶入れを奪はれしか。
丈左　サア、それは。
傳藏　栲問せうか。
丈左　サア、それは。
傳藏　サア

丈左　サア

兩人　サア〳〵

丈左　ちうこの上は

ト丈左衛門、拔かうとするを、與兵衛、鐺を捕へ、引戻して、大小をもぎ取り、見事に當てる。これにて丈左衛門、撻となる。

傳藏　天晴れ早速の南方氏、この場の捌きに茶入れの手がゝり。

次部　町人ながら與兵衛が働き、感心いたした。これより三原氏の、推擧を以てお屋敷へ。

與兵　イヤ、私しは武家よりも、矢張り仕馴れた駕籠屋が望み。

傳藏　それでは却つて殿への恐れ。

はや　只何事もあなたのお詞、お指圖次第に。

傳藏　大罪なれば、丈左衛門には繩打ち召されい。

與兵　心得ました。

ト丈左衛門に繩かける。これにて丈左衛門、心附き

丈左　ヤ、思はぬ氣絶に、この繩目。

傳藏　南方氏の家名を立てたく、與兵衛どのゝ手柄を見て、推擧なさんと某が、持參なしたる衣服大小。

次部　卽ち身共があの駕籠に。

傳藏　その品、これへ。

捕手　ハッ。

ト捕り手、駕籠の中より大小衣服を取出す。傳藏、取つて

傳藏　これぞ卽ち、この場の褒美。

與兵　頂戴いたすでござりませう。

トよろしく思ひ入れ。この時、以前の長吉、下家の屋根より傳はり、門の外へ飛び下りる。これを傳藏、見て

傳藏　怪しの曲者。ソレ、召捕れ。

捕手　ハッ。

ト長吉を押へる。これを振り拂つて一散に向うへ入る。捕り手は跡を追うて入る。與兵衛、思ひ入れあつて

與兵　今のはもしや
はや　あの二階の
與兵　これサ、二階の締りは慥かだが、油斷のならぬこの時節。
與五　その油斷のならぬのは、先刻それぞと目を附けた、ひよつと茶入れの
　　ト奧へ思ひ入れ。與兵衞、かぶせて
與兵　サア、その茶入れの、詮議の日延べは……アイヤ、傳藏さま、何卒あなたのお詞添へにて、御前よしなに、お執成しを。
傳藏　その儀は身共が刀にかけて、上への執成し、萬事は胸に。
はや　旦那樣のお咎めも、どうぞ御赦免なりますやう
與五　お願ひ申すは三原さま。
次部　傳藏どのゝ情にて、寶の日延べは叶ふとも、最早傾むく老の坂。たとへ助命の成るにもせよ、再び其方やお早にも、逢ふは知れざるこの身の上。
はや　お心弱い旦那樣。
次部　ア、、これが別れに

はや　エ。

傳藏　アコレ、益なき繰り言。サ、乘り物へ。

次郎　御苦勞にござりまする。

ト合ひ方になり、與五郎お早、次部右衛門を介抱して、乘り物へ入れて戶を閉める。この時、長五郎別れを惜しむ思ひ入れにて、二階より出て、引窓を覗く。この影、下の盥へうつるを、傳藏、キツと見て

傳藏　ヤ、盥にうつりし人影は、正しく尋ねる

ト上へ目を附けるを、お早は愕り、引窓を閉す。この以前より、窺ひゐたる吾妻、この時出て、盥を打返す。皆々よろしく思ひ入れ。

與兵　三原さまには血相變へて、なんで二階へ。

傳藏　なんでとは、コリヤ與兵衛、お尋ね者を詮議いたす。

與五　お早はなんで、引窓を。

はや　サア、窓を引いたは二階の詮議。上にはわたしの荷物の葛籠。

吾妻　立つたはずみに盥の水、覆水盆に返らぬ事が、もし出來てはと、思はず水を

傳藏　それゆゑ水を……ハテナア。
ト思ひ入れ。
與兵　アイヤ、三原さま、お目附けられし二階の詮議、今日よりは御推擧にて、大小差せば、武士たる與兵衞。
ト大小を差して
何卒、詮議の役目をば。
傳藏　ナニサマ、家名を起す南方氏、手柄始めに、詮議の役目。
與兵　きつと拙者が、命にかけても。
はや　そんならお前が、アノ詮議を。
與兵　武士の役目ぢや、致さにやならぬ。
はや　エヽヽ。
傳藏　然らば南方十次兵衞どの。
與兵　三原氏、重ねてお目にかゝりませう。
傳藏　囚人を、引立てい。

捕手　ハア、。

ト殘りの捕り手は丈左衞門の繩を引き、中間は乘り物を舁きあげる。三重、時の太鼓になり、傳藏、思ひ入れあつて、乘り物に附きそひ、向うへ入る。皆々、後を見送り、よろしく思ひ入れ。この時、二階より、長五郎、下りて來り、眞中へ出る。與五郎、見て、悧り思ひ入れ。

與五　ヤ、お前は濡髮長五郎どの。この場を早く

ト落ちてくれといふ思ひ入れ。

長五　その深切は忝いが、所詮武運に盡きたるこの身。イザ、繩打つて與兵衞どの、こなたの手柄にして下され。

ト思ひ入れあつて、後へ手を廻す。

與兵　イヤ、繩は掛けまいわい。

長五　エ。そりや又なんで。

與兵　サア、詮議は表、兩腰取れば、矢ツ張り駕籠屋のこの與兵衞、どうぞこの場を

長五　サヽ、情の詞は忝いが、もう遁がれざる天の網。最前爰を立退きし、惡黨なれども兄は兄、二道かけて長五郎が、惡事を引受け、名乘つて出る。只この上は親人の、命乞ひをば、二人の衆。

與五　それぢやァわしが深切を、水の泡にさつしやる心か。

長五　さうではなけれど、寶の茶入れ、尋ね出さんも煎り豆に、花も散りゆくこの身ゆゑ、死ぬる覺悟の長五郎。

與九　サヽ、あなたに詮議させんが爲、人殺しのその科を、身に引受けたこの與五郎、盗人の罪も晴れた上は、少しも早く誠の茶入れを。

與兵　最前逃げた長吉どの、慥かにそれとは見屆けねど、茶入れを所持なし居つた樣子。あなたはこれより、兄御の後を

長五　そんならこれより、あと追ひかけ

ト思ひ入れあつて

さはさりながら暫らくも、お早が情にこの家の內。

はや　お返し申すも以前のお主、十に一つの御恩報じ。

與兵　隱し男と疑ひの、かゝりや繫がる、假にも女房。

長五　今よりしては與兵衛どの、此お早は貴殿の內方。

はや　そんなら、わたしは

吾妻　わたしは變らぬ、與五郎さんと

與五　これで一對揃へども、揃はぬものは寶の茶入れ。

與兵　落ちゆく先は、濱邊を上手へ。

長五　そんなら、これより。

ト門口へツカ〳〵と出る。

與五　アヽコレ、本海道は人目もあれば

長五　これから直ぐに裏道傳ひ。

トこの時、以前の傳次、出て

傳次　うぬ、人殺しめ。

ト長五郎へかゝるを、與五郎、捻ぢあげる。

長五　そんなら、これより

ト花道へツカ〳〵と行くを、與兵衛、思ひ入れあつて

與兵　アヽコレ、面をあらはに。

長五　ムウ。

ト長五郎は手拭をさばく。與兵衞は門口を閉める。與五郎は傳次をかへす。お早吾妻は與兵衞與五郎へ縋る。双方見合つて木の頭、三重浪の音にて、よろしく、ひやうし

幕

大詰　鈴ヶ森の場

役名＝三原傳藏。駕籠屋與兵衞 後ニ 南方十次兵衞。山崎屋與五郎。駕籠屋甚兵衞。倉岡有右衞門。馬士、傳次。髮結ひ、濡髮長九郎。書薦、引窓小僧長吉。

本舞臺、常足の二重、蹴込み打寄せの砂地。後に黑幕、眞中に大石塔。上手に笠をかむせし石地藏。松の大樹、日覆より同じく吊り枝。下手、一面に藪疊。上の方、海邊。下の方、浪手摺り。すべて鈴ヶ森の體。爰に傳次、前幕の駕籠舁きの若い者二人と、松の枝へ德利を掛け、焚火をして酒を飮んでゐる。捨て鐘、浪の音にて幕明く。

傳次　コレ〳〵、てまへ達ばかり飮んで、なぜおれを他人にするのだ。

駕甲　そりやア云はずとも知れた事だ。てまへは馬方、此方は駕籠舁き。

駕乙　まだしも爰に船頭の、居ないのが仕合せだ。

傳次　仕合せといへば、先刻聞いたが、千葉の家中、橋本次部右衛門といふ人が、寳物を紛失させ、その科によつて、爰で仕置になるといふ事だが、不仕合せな事ではないか。

駕甲　それでは爰で切られるのか。

駕乙　氣味の悪い話しだ。

傳次　ナニ氣味の悪い事があるものだ。それよりは、この頃出る、狂犬が氣味が悪い。

駕甲　それは何より険呑だ。おれは犬が大嫌ひだ。

駕乙　噛みつかれねえうちに、行くとしよう。

傳次　これサ、まだあるから、もう一杯つきあはないか。

兩人　もう〱、御免だ〱。

傳次　エヽ、待てと云つたら待たねえか。

ト浪の音にて、傳次、醉つたる體にて、兩人を追ひかけ、下手へ入る。矢張り浪の音にて、向うより長吉、尻を端折り、頬かむりにて出て來る。後より捕り手二人、窺ひながら出て來り、よき所にて、『捕つた』とかゝるを、身をかはし、ちよつと立廻りあつて、捕り手は向うへ逃げて入る。長吉、ホツと思ひ入れ。本釣り鐘の頭を打込む。長吉、思ひ入れあつて

長吉　ヤレ〳〵、すんでの事に喰ひこむ所。おれが運も、まだ盡きねえな。先刻に與兵衛や與五郎が、義理張つたので身拔けをしたが、これから弟の長五郎、おッ片附けたその上で

ト懷より袱紗包みの茶入れを出し

この茶入れを差上げて、それを功に元の侍ひ。併し、弟まで……イヤ、誰れも聞き手が無いからいゝが、うつかりした事は云はれぬ。壁に耳、徳利に口だ。

トあたりを見て、徳利を見附け、取つて

往來端にあるからは、非人めらの飮み殘りか。少し氣味が惡いが、ひもじい時にまづい物なしだ一杯やつて行かうか。

ト茶碗で酒を飮む。向う人音するゆゑ、思ひ入れあつて

ヤ、向うから誰れか來るわえ。うつかりと爰にやア居られぬ。

ト矢張り本釣り鐘にて、長吉、藪の蔭へ入る。向うより甚兵衛、木綿やつしの上へ、富士行者の行衣を引ッ張り、懷へ前幕の赤子を入れ、雨傘をさし、片手に、さんだらぼしへ、達磨や木菟を戴せ、疱瘡の神送りの體にて出て來り

甚兵　いつの間にか雨もやみ、大分空は晴れて來たが、晴れぬ思ひにとつおひつ、急ぐ間もなく鈴ヶ森

仕置の場所を見るにつけ、あの悪黨の悴めも、果は捕はれ爰の土、淺ましい死やうをするであらう。どうぞ早う高飛びして、おれに姿を見せてくれるな……それにつけても、この捨て子の、守に附けた臍緒書で、疑ひもない我が孫と、知れて見ると不便でならぬ。いま捨てられるとも知らずして、スヤ〳〵とこの寐顏。

ト よろしく思ひ入れあつて

いつまで云うても詮ない事ぢや。往來の人の絶えたは幸ひ。若黨ながら侍ひの、家に仕へた身の終り、潔う腹切つて、死ぬる覺悟の白出立ち。枕念佛を唱へようと、持つて來たこの鉦鼓。

ト 袂より鉦と撞木を出し、石地藏へ向ひ

モシ、お地藏樣、お願ひ申すはこの孫め。一旦わしに拾はれて、又ぞろわしに捨てられる、果報拙ない生れゆゑ、どうぞお助け下さりませ……思へば二十七年あと、双子を捨てたその時と、同じ思ひでござるわい。

ト 思ひ入れあつて、赤子を地藏の前に寢かし、腰に差したる、手拭を卷きし出刃庖丁を出し

コレ、孫よ。其方も共々殺さうと、思うて爰へ連れて來たが、生先長い其方を殺すは、いかにも不便でならぬゆゑ、地藏樣へお願ひ申して、其方を爰へ捨てるほどに、情ある人に拾はれ、百萬

年も生きてくれよ……イヤ、いつまで云うても限りはない。思ひ切つて早う死なう……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト甚兵衞、よろしくあつて死なうとする。この時、藪の蔭より長吉、窺ひゐて、ツカ〳〵と出て、甚兵衞を抱きとめ

長吉　アヽコレ、父さん、待ちなせえ。

甚兵　イエ〳〵、死なねばならぬ譯ある者。必ず留めて下さりますな。

ト振り放さうとするを、長吉、留めて

長吉　見れば小さな子を捨てゝ、死なうといふのは、よく〳〵な、切ない事であらうけれど、目にかゝつたら留めにやアならぬ。

甚兵　御深切に、有り難うござりまするが、この坊主は、私しの孫でござりまする。子よりも可愛い孫を捨て、死ぬのは深い譯のある事。どうぞ見遁がして下さりませ。

長吉　結構な世を捨てゝ、死なうとは無分別。どういふ譯か知らないが、留めるからは力になる氣だ。譯を聞かしてくんなせえ。

甚兵　それぢやと申して。

長吉 ハテ、待てと云つたら、待ちなさいと云ふに。

ト甚兵衛、嬉しき思ひ入れにて

甚兵 重ね〴〵の情のお詞。死なねばならぬ入り譯を、お聞きなされて下さりませ。

ト誂らへの合ひ方になり

何をお隱し申しませう、もと私しは千葉の御家中、橋本次部右衛門さまに仕へた、若黨の甚兵衛と申す者。フトした誤まりから、御不興受けて浪々中、しかも二十七年あと、女房が双子を産みまして、それを氣病みに無常の煙り。水子二人を養育の、手當なきゆゑ詮方なく、千葉妙見の松原へ、捨ては捨てゝも恩愛の、心殘つてあたりに忍び、樣子を窺ふその所へ、古主の旦那がお通りなされ、それと御存じあつたやら、捨てた双子を二人とも、手づからお拾ひ下されて、兄を長吉、弟を長五郎と附けられ、勿體なくも旦那の御養子。その結構な身の上を、捨てゝ兄めは惡黨の仲間へ入つて夜働らき。噂に聞けど子供の顏、いまだに知らぬこの親仁。

ト甚兵衛、よろしく思ひ入れ。長吉、さては親かといふこなしあつて

長吉 そんなら橋本次部右衛門さまの、お前は若黨か。それぢやア今云ふ長吉が親。知らぬ事とてこの品まで。

ト懐より茶入れを出し、済まぬといふ思ひ入れ。

甚兵 ヤ……伜長吉と、お前様は御存じでござりますか。

長吉 ナニ、おらァ知りやァしねえが、噂に聞いた引窓長吉、親は武士だといふ事だが、いよ／＼お前は、實の親かえ。

甚兵 ハイ、實の親でござります。

長吉 その父親が、なんで死ぬのか。現在伜の長吉が……イヤサ、その長吉が聞いたなら、お前の命に代つても、此まゝ殺す事ぢやァねえ……縁もゆかりも無えおれでせえ、死ぬといつちやァ留めにやァならねえ。マア／＼、下にゐねえと云ふに。

ト甚兵衛をいたはる思ひ入れ。甚兵衛、こなしあつて

甚兵 若いに似合はぬ其やうに、優しう云うて下さるこなた。これにつけても憎いのは、双子の兄の長吉め。わしが死ぬのも彼奴ゆゑ。明日が日限りと極まりし、次部右衛門さまは古主といひ、殊には拾うて下されし、大恩のある旦那様が、お預かりの茶入れを盗み、二十七年のその間、御養育の事も打忘れ、御難儀かけし人非人。同じ生れの兄弟でも、長五郎は恩を忘れず、次部右衛門さまを助けんと、顔の似たのを幸ひに、兄長吉と名乗り出で、命を捨てる立派な性根……盗みをし

たも我が忰。その罪を身に引受け、替りになるも我が忰。

ト よろしく思ひ入れあつて

アヽ、天道様が無くば知らず、たとへ弟を替りに出しても、なに安穏で居られうぞ。潔く名乗つて出たら、まだしもと思へど、養父へ御難儀をかける程な、悪黨ゆゑその氣はあるまい。それゆゑ親が忰に替り、白髪頭で長吉と、名乘る證據は先達て、岩淵で拾うたこの子、肌に添へてあつたのは、二十七年前に、双子へ添へて捨てた守。

ト 甚兵衛、頭陀袋から守と書置を出し

コレ、この守へ長吉が、前非を悔いて死ぬといふ、書置を添へ置けば、年恰好は違ふとも、親が替るを御不便に、思し召さばお慈悲にて、次部右衛門さまや長五郎が、命助かる事もあらう。兎にも角にも命を捨てねば、旦那様へ云ひ譯がない。思へばお主やこの親に、命を捨てさす不孝者憎い奴とは思へども、譬へにも云ふ通り、不孝な子ほど親の身では、可愛うござります。

ト よろしく思ひ入れにて泣入る。これにて赤子泣く。長吉、苦しき思ひ入れにて、甚兵衛を介抱し、赤子をいぶりつけ、双方へこなしあつて

長吉 オヽ、尤もだ〳〵。父さん、お前の話しを、その長吉が聞いたなら、どんな鬼でも善心に、返ら

ずにやアゐられまい。これまで夢にも現にも、悲しい事は知らなんだが、子を持つて知る親の恩
……他人のおれでさへ、涙がこぼれるわえ。

ト思ひ入れ。甚兵衞、こなしあつて

甚兵　初めて逢うたこなさんに、面目ないこの話し。併し、これも何ぞの緣。非業な親仁が身の果てと思ひ出す日があつたら、念佛なと唱へて下さりませ。

ト甚兵衞、また死なうとするを、長吉、留めて

長吉　エヽ、又しても死急ぎ。いくらお前が死なうと云つても、おれが見ちやア殺されぬ……今の話しで、ふつ〳〵と、我が身で我が身に愛想が盡き、云ふめえとは思つたが、何を隱さう、その長吉は

ト云ひかけるを

甚兵　アヽ、コレ〳〵、その伜に逢うてはならぬ。元より顏も知らぬ伜。もしやお前が若い同士、その長吉を知つてなら、立派に死ねと親仁めが、傳言したと云うて下され。

長吉　そりやアお前が云はずとも、切ない話しを聞くからは……イヤサ、長吉が聞いたなら、あれも男、遲かれ早かれ切られる體。爰らが人の死所ゆゑ、立派に死ぬに違ひねえ。

甚兵　さういふ心になればよいが。

長吉　ならなくつて、どうするものだ。

ト思ひ入れあつて、甚兵衞の持つてゐる庖丁へ手をかけるを、甚兵衞、留めて

甚兵　アヽコレ、若いの、待たつしやれ。こなさんまでが同じやうに、刃物三昧、措かつしやれ。

長吉　イヽヤ、死なにやァならねえは、現在親を……親にしてもいゝやうな、お前を替りに殺しては

甚兵　ハテ、濟むも濟まぬも知らぬ同士、他人のこなたがいらぬ義理立て……わしもお前に止められ、死ぬにも死なれぬ拍子抜け。寒念佛の乘り遲れに、地藏樣へ御囘向申すうち、なんと、この坊主をお前、抱いては下さるまいか。

長吉　そんなら、おれに、その子をば

甚兵　抱いて居たなら夜明けまで

長吉　ヤ。

甚兵　サ、明けて云はれぬ胸のうち。

長吉　此方も云はず語らずに

甚兵　この子を暫し。

ト赤子を出す。

長吉　ドレ、抱いてやらうか。

　　ト赤子を抱きとろ。甚兵衛は鉦撞木を地藏の前へ直し、念佛を唱へ、回向の思ひ入れ。長吉、側にある蓆の上へ赤子を寢かし、いぶりつけながら、不便だといふ思ひ入れ。件の茶入れを赤子の側へ置き出刃庖丁を持ち、腹へ突ッこまうとする。この途端、赤子頻りに泣く。長吉、片手で赤子をいぶりつけながら

オヽ、泣くなく〳〵。……アヽ、何にも知らぬ子心にも、蟲が知らすか、この泣き聲……おとなしく、ねんねしろ。

　　ト叩きつけながら、茶入れを置き土産と思ふ思ひ入れあつて

これをば後の置き土産に。

甚兵　エ。

長吉　三途や死出の山越えて

　　トそつと赤子を寢かしつけ、思ひ入れあつて腹へ突き立て、糊紅になつて苦しむ。此うち甚兵衛、鉦を叩き、念佛を唱へゐて、この物音に

甚兵　ヤ、今の物音は。

長吉　イヽヤ、なんでもない。

甚兵　でも、只事では

長吉　ナニ、これは

ト　あたりにある徳利を取つて

コレ、この酒を飲んだので、思はず知らず今の物音……醉つて云ふのぢやねえけれど、捨てた双子の長吉が、爰へ來てノメ〳〵と、親子の名乘りがなるものか。

ト　甚兵衞、思ひ入れあつて

甚兵　酒に醉つたと云はつしやるが、こなたはどうか、泣いてゐる樣子。泣き上戸だと見えますの……わしが忰の惡黨も、臆病者だといふ噂。口では立派に云ふもののゝ、名乘つては出をるまい。

長吉　それはお前の思ひ違ひ。惡黨だけに長吉が、死ぬと覺悟を極めたなら、名乘つて出るのは、おろかな事だ。

ト　きつと云ふ。甚兵衞、思ひ入れあつて

甚兵　ハテサテ、こなたは長吉の、替りにきつう腹立つて、泣き上戸かと思うたら、腹立ち上戸と見えますの。

長吉　なに、腹立ち上戸ではねえ、おれは笑ひ上戸。

ト腹を押へ、苦しき思ひ入れあつて

ムヽ、ムヽ、ハヽヽヽ。

トよろしく笑つて

性根を亂す氣違ひ水……イヤサ、見ず知らずの親仁さん、お前は死ぬ氣を捨てゝ、隨分無事に

甚兵　そんなら、こなたは、もうござるか。

長吉　なんと。

甚兵　コレ、死ぬなら親に、たつた一言。

長吉　ヤ……そんならお前は、わしを我が子と

甚兵　オヽ、疾より推量してゐたわえ。

長吉　知つたとあつても今更に

甚兵　名乘り合ふのも

長吉　面目ない。

甚兵　コレ、ようう腹を切つてくれたなア。

ト駈けよつて介抱する。長吉、苦しき思ひ入れ。竹笛入りの合ひ方になり

長吉　モシ、親仁様、三方四方へ難儀をかけ、腹を切つても云ひ譯に、ならぬ科は大恩ある、養父が明口死罪になるも、大事の茶入れを盗んだゆゑ……實の親仁のお前を始め、長五郎や與五郎が、日蔭の體になつたのも、矢ッ張り元はおれが仕業。積る惡事の身の果ては、隙ゆく駒の鈴ケ森、浪の哀れや安房上總、三尺高く木の空で、親に先立つ逆さまな、逆磔刑になるとても、身から出た錆、切つても切れぬ、親の恩を知つたのも、この我が子ゆゑ。邪慳な氣にも可愛さに、心殘りはこの坊主。どうぞお前は生き長らへ、これを育てゝ下さりませ。

トよろしく思ひ入れ。甚兵衛、介抱して

甚兵　オヽ、出かしたく\。われが死ねばこの親が、御主人様へ義理も立つ。

長吉　二十年來御恩になつた、お主や親へ一つの云ひ譯。

甚兵　疾にもかゝる心になつたら

長吉　人に難儀もかけまいに

甚兵　これも定まる約束事。

長吉　親仁様。

甚兵　伜。

長吉　逢ふは別れの、初めだなア。

　ト兩人、手をかはし、よろしく思ひ入れ。

　コレ、親仁樣、お前の書いた書置が、長吉の名であるこそ幸ひ、これなる茶入れと諸共に、千葉のお家へ差上げて、義理ある親と弟の、難儀をどうぞ、救つて下せえ。

　ト茶入れを出す。甚兵衞、取つて

甚兵　そんならこれが、誠の茶入れ……とはいへ見捨てゝ

長吉　どうで野末へ晒す體、わしに構はず、お前は屋敷へ。

甚兵　イカサマ、お主の大事なれば、これより直ぐに

長吉　小僧を連れて、ちつとも早く。

甚兵　オヽ、合點だ。

　ト云へど立ちかねる思ひ入れ。この時、上手より、前幕の與兵衞、傳藏に中間附き、箱提灯を持つて出て來り

與兵　樣子は後で殘らず聞いた。紛失なせし狂言袴の茶入れ、我れ〳〵受取り、上へ差上げ、橋本氏

の助命を願はん。
傳藏 寶戻れば長五郎も、直ぐに本地へ歸參なし、御次男樣にてお家の繼ぎ目。

ト甚兵衛、茶入れと書置を出す。傳藏、受取る。

與兵 萬事事なく納まるも、惡に强きは善にもと
傳藏 其方が改心なせしゆゑ。

トこれにて長吉、嬉しき思ひ入れにて

長吉 イザ、この上は與兵衛さま、あなたの妹御お照どのを、殺害なしたこの長吉、存分にして下さりませ。
與兵 云ふにや及ぶ。妹の敵。
甚兵 そんなら、この場で
與兵 介錯なさん。
傳藏 檢視は卽ち三原傳藏。
長吉 エヽ、有り難うござりまする。

ト長吉、手を合さうとして、ガックリ思ひ入れ。この時、傳次に駕籠舁きの若い者二人、窺ひ出て

三人　長吉、覺悟。

ト かゝる。長吉、傳次の脇腹へ突ッ込む。二人は與兵衞と傳藏へかゝる。立廻つて引敷く。この時、本釣り鐘、明け六ッ。諸所にて鷄鳴く。

長吉　此奴も共に、冥土の道連れ。

ト 立廻つて與兵衞傳藏は、兩人を投げのける。長吉は傳次を切り倒し、止めを刺す。甚兵衞、赤子をいぶりつける。この時、向うへ綟張りの日の出を出す。これにて後の黑幕切つて落すと、海面の遠見かすめて驛鈴の音、題目太鼓、拍子木の音聞える。

與兵　かすかに聞える太鼓の音は

傳藏　ありや池上の朝勤め。

長吉　あの題目が、あの世へ土產。

甚兵　この引明けが、親子の別れ。

ト 甚兵衞、赤子を見る。長吉、愁ひの思ひ入れ。與兵衞傳藏も思ひ入れ。長吉は笛を搔く。甚兵衞は泣き落す。與兵衞傳藏は駕籠舁き兩人を投げる。皆々引張りの見得よろしく、一面に黑幕を振り落す直ぐに浪の音を打込み、バタ〳〵になり、向うより與五郞、大童にて、丈左衞門有右衞門は割り木を

持ち、立廻りながら出て來り、花道にてキッとなつて

丈左　うぬは山崎與五郎め。

有右　なんで道の

兩人　妨げするのだ。

與五　一旦縄目にあつたうぬ等、爰へ來たのは縄抜けか。我が目にかゝつた上からは、再びお上へ連れて行き、惡事の趣き訴へて、親御の命助けんと、兄に替つて名乘つて出たる、長五郎どのを助けにやならぬ。

丈左　次部右衞門めを片附けて、お家を横領なさんとせし、今ぞ企みの顯はれ時。

有右　縄抜けなして落ちゆく我れ〳〵。邪魔立てひろがず

兩人　通すめえか。

與五　イヽヤ、橋本さまが生死の境、助命を聞かぬ其うちは、見遁がす事はならわえワ。

丈左　さう吐かせば

有右　命はねえぞ。

與五　何を小癪な。

ト浪の音にて、與五郎、角力の手の立廻り。よき見得にて、黑幕を切つて落す。

本舞臺、正面、松の大樹、同じく吊り枝、上下藪疊。向う打拔き安房上總を遠見の海のもやう。よろしく道具納まる。

トこれにて三人、立廻り、舞臺へ來る。この時、上下より雲助大勢出て來り

雲助　ヤア、あなたは倉岡の

皆々　お二人樣。

丈左　よい所へ人足ども。

有右　骨は盜まぬ、加勢しろ。

皆々　合點だ。

トこれより浪の音、誂らへの鳴り物になり、よろしく縫ひぐるみにて打つてかゝる。與五郎、立廻りよろしくあつて、皆々敵はず逃げて入る。丈左衞門有右衞門、打つてかゝる。與五郎、一時に兩人を見事に當て、思ひ入れあつて

與五　この上は名乘つて出で、長五郎さまをお助け申さん。

トこの時、上手にて

長五　與五郎、暫らく。

ト浪の音、合ひ方にて、上手より以前の長五郎、袴羽織大小に改め、中間二人、月星の紋附きし箱提灯を持ち出てくる。

與五　ヤ、思ひがけない長五郎さま。

長五　最前名乘つて出でたるも、若殿樣のお情にて、寶詮議の日延べも叶ひ、御赦免あつて歸る途中、兄長吉は鈴ヶ森にて、前非を悔ひて自殺なし、誠の茶入れは南方三原、御兩所の手より差上げたれば、養父の命も御安泰。

與五　すりや、誠の茶入れが手に入りましたか。

長五　寶戻りし上からは、以前の橋本長五郎。

丈有　もうこの上は。

ト兩人切つてかゝるを、長五郎、立廻る。この時、捕り手四人、バラ〱と出て

捕手　人殺し、動くな。

與五　なにを。

トきつとなる。

長五 先づ今日はこれぎり。

めでたく打出し

昭和二年十一月二十五日印刷
昭和二年十一月二十八日發行

（大南北全集第二巻）
非賣品

校訂 坪内逍遙
編纂者 渥美清太郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所 春陽堂

